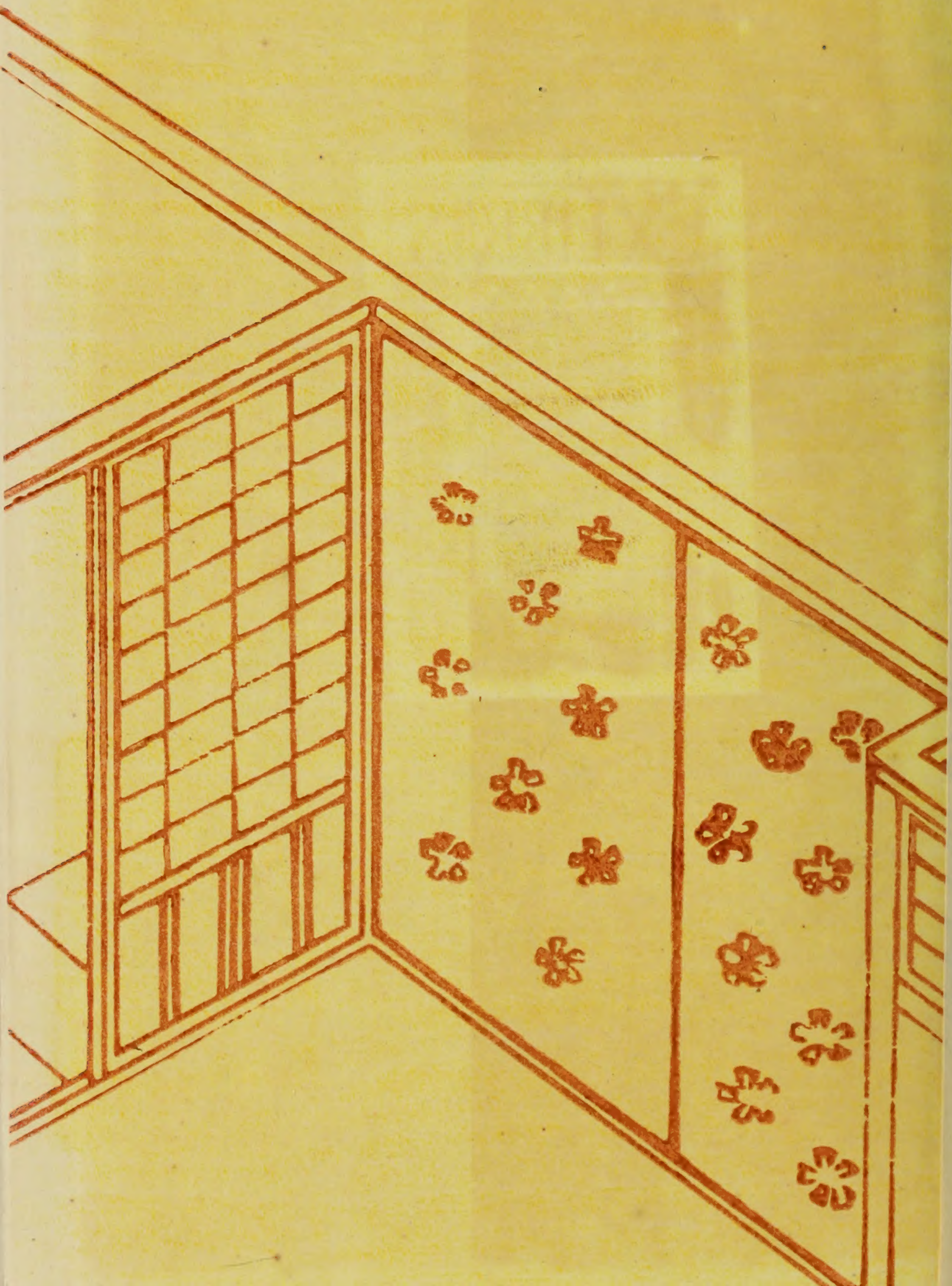




大南北全集

第十七巻

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

大南北全集 第十七卷

東京 春陽堂刊行

大南北全集 第十七巻 目次

挿繪目次

挿繪解説

■この巻は全く挿繪の缺乏に困じ果てた。そこで口繪へは、本集へ收める豫定で不能に終つた、南北の草双紙の口繪を三種コロタイプでお目にかける事にした。上部の見開きは文政十二年發行の「昔全今物語」、左右の對照は天保二年出版の「怪談鳴見絞」眞中は文政九年出版の「女扇忠臣要」である。この「女扇忠臣要」は卽ち女定九郎なのである。

■「梅柳若葉加賀染」は、求馬内の半四郎の淺尾の繪だけがあつた。國貞の筆である。

■「染繮竹春駒」は櫓下番附をコロタイプにして入れて置いた。

■その代り「裙模様沖津白浪」の挿繪を十二頁コロタイプで入れて置いた。この草双紙は普通のと違つて本文の個所が多く、畫が非常に少ない。爰へ挾んだものでその大部分は盡きてゐる。何れも國貞の筆である。



解說及年表

梅柳若葉加賀染（うめやなぎわかばのかがぞめ）

名題にも加賀とあるから、ちよつと見ると加賀騷動のやうであるが、實は柳澤騷動、護國女太平記を脚色したものである。その筋立てと、篇中の種々な暗示とに依つて明らかにそれと解る。卽ち、大領は綱吉、望月は柳澤、お柳はおさめの方、重左衞門は掃部頭、花房一洗は英一蝶、木屋辰五郎は淀屋辰五郎、淺妻は朝妻船の當込みである。默阿彌はこの序幕をソックリ使つて「加賀見山再岩藤」を書いてゐるが、默阿彌のは全然加賀騷動である。此うち、木屋辰五郎が實は盜賊だといふ筋だけは、何か當時の當込みらしい。文政二年五月、玉川座の初演で、評判は非常によかつたが、入りの少ない芝居であつた。

初演の役割は左の通り。

長玄寺の望月後ニ望月帶刀。若徒、鳥居又助（二ヤク五世松本幸四郎）松林比丘尼後ニお柳の方。紅屋娘、おかん。水仕女、おまつ實ハ道房娘濱町（三ヤク五世瀨川菊之丞）花房求馬後ニ花房一洗（坂東彥三郎）蜑江一學。手代、勘八（二ヤク市川宗三郎）多賀大淸（市川茂々太郎）紅屋後家、おくま。輕業口上、八八（二ヤク惣領甚六）花房主膳。谷澤賴母（二

ャク市川門三郎)車力、丑ノ五兵衞。福田屋金六(二ャク大谷馬十)姫川勇藏(市川小團次)香川權平。古鐵買ひ、權七(二ャク松本染五郎)柏木曾平太(澤村長太郎)梁川嘉藤次(坂東吉次郎)藤屋吾妻(瀨川路之助)小竹駒吉(市川高麗藏)茶道、町山(松本虎藏)奥女中、千早(瀨川富三郎)片瀨村彌五兵衞。輕業師、彌五平(二ャク坂東善次)安達昌(伯松本小次郎)下女、およし。奥女中、梅田(二ャク松本よね三)大江息女、紅梅姫。女曲持ち淺妻小俊實ハ鎌田又八娘淺尾(二ャク五世岩井半四郎)多賀の大領。湯島の三吉。長谷部重左衞門。木屋辰五郎實ハ合邦太郎本名冠者太郎經之(四ャク七世市川團十郎)

この一部は天保九年三月、市村座で再演された。名題は「柳櫻彩繪加賀染」であつた。

大領、又助、重左衞門(三ャク澤村訥升)吾妻、おかん(二ャク坂東玉三郎)一學、おくま(二ャク市川熊十郎)昌伯、勘八(二ャク中島勘八)千早(岩井辰之助)大清(坂東簑助)望月、三吉(二ャク市川九藏)紅梅姫(坂東橘之助)お柳・おまつ(二ャク岩井杜若)求馬、辰五郎(二ャク十二世市村羽左衞門)

弘化三年九月の河原崎座では「松竹梅彩加賀染」の名題で、八百屋お七と混じられて一部が上演された。

望月(坂東彥三郎)犬清(尾上松助)昌伯(坂東善次)三吉(坂東竹三郎)大領、又助(二ャク澤村宗十郎)梅田(市川團之助)紅梅姫(市川新車)一學(大谷友右衞門)お柳(尾上菊次郎)求馬、重左衞門(二ャク八世市川團十郎)

染纏竹春駒

文化十一年八月、市村座に上演したお家物。染分手綱の書替へになつてゐるが、何かお家騷動の當込みらしい。詳しい事は解らない。全體の筋立てが陰氣なので、評判は相當だが入りは無かつた。

役割は左の通りであつた。

腰元、藤浪(三世市川團之助)由留木息女、調姫。女小姓、小露(二ヤク松本よね三)鷲塚官太夫。干粿の八藏(二ヤク澤村四郎五郎)奴、團助(市川友藏)伊達與三兵衞。逸平母、おくら(二ヤク市川門三郎)腰元、いろは。女小姓、小よし(二ヤク岩井粂三郎)伊達新左衞門。三度飛脚、江戸兵衞(二ヤク關三十郎)鷺坂左内。按摩、慶政實ハ鷲塚八平次。丹波屋與作(三ヤク五世松本幸四郎)由留木左衞門。伊達與作。同奴、逸平。山形屋義兵衞(四ヤク七世市川團十郎)

この趣向の一部は、嘉永元年正月、河原崎座の「吉例曾我訥子玉」や、安政二年三月、中村座の「花舞臺團若曾我」や、元治元年八月、中村座の「百猫傳手綱染分」やらに、いづれも巧く流用されてゐるが、狂言そのまゝとしては、再演されなかつた。

褄模樣沖津白浪

南北作の草双紙は殆んど全部を集め得て、すつかり原稿も出來た。それは全部この卷へ入れる豫定であつたところが、どうして〳〵、草双紙だけでも全集の二冊位の量があるので、どうする事も出來ない。爰で今又追加をする譯にもゆかず、止なくその中から、最も南北の特色を發揮した、本編だけを收容して、あとは他日に讓る事としたのである。この草双紙は、脚本體になつてゐるので、南北の脚本も同じ事である。出版は文政十一年で、趣向の一部に、文政九年の秋中村座へ書き卸した、「曾我中村穐取込」を利用してゐる。三世櫻田治助の「新板越白浪」（鬼神のお松）は、殆んどこの草双紙の役名を替へただけのものである。挿繪に依ると、濱島幸兵衛を三世坂東三津五郎、奴の小萬を五世岩井半四郎、妹菊川を岩井粂三郎、中村左膳（挿繪には左內と出てゐるが、文章では左膳になつてゐる）を三世尾上菊五郎、篠原一學を七世市川團十郎の當込みで描いてゐる。畫工は歌川國貞である。

渥美清太郎識

梅柳若葉加賀染

うめやなぎわかばのかがぞめ

梅柳若葉加賀染

第一番目三建目　氷川明神の場
長玄寺の場

役名――長玄寺の望月。多賀犬淸。花房求馬。花房主膳。柏木曾平太。奥女中、千早。梁川嘉藤次。栗坂權藤次。長玄寺の松林比丘尼。多賀の大領。

本舞臺、三間の間、向う淺黄幕、眞中、石の大鳥居。上の方、向う梅の附いたる白き木綿の幕を張り廻し、後ろ口、黒幕、これに誂らへあり、この前に太々御神樂修行と、記したる高札。下の方よき所に武州一の宮と彫り付けし石碑。松の立ち樹、同じく吊り枝、すべて武州大宮驛、氷川明神鳥居先の體。爰に權藤次、摺りこみの裝束、刺貫、天狗の面、鉾を持ち、十二座の形にて酒に醉ひたる體。菖蒲革の侍ひ二人、六尺棒を持つて制して居る。上の方に曾平太、大小、小紋の股引、半纏、切り草鞋の形にて、立ちかゝつて居る。白張の仕丁三人詫び事して居る模樣よろしく、早神樂にて幕明く。

トかすめたろ大拍子、馬士唄の合ひ方。

權藤　おらア否だ〳〵。

侍二　ヤア、扣へぬか〳〵。

權藤　おらア扣へるも、おしつけるも嫌いだ。面白い。切るなら切られべい。サア、切れ〳〵。

曾平　ヤア、おのれ、狼藉者、憎くい奴の。

仕丁　ハテ、マア、御料簡なさりませ〳〵。

侍一　何を申すも此よい〳〵は、喰ひ醉つて居ります。

仕丁　マア〳〵、御料簡なされて下さりませ。

權藤　料簡も何も否だ。なぜ神事の役人に突き當つて、その上、狼藉者だと吐かした。うぬらより、此方が料簡しないぞ。

曾平　ヤア、不屆き千萬。我れ〳〵を何者と思ふ。多賀の家中に於て、柏木曾平太、殊さら今日、大殿大領公御出府の道筋、武士に向つて惡口雜言。この大小が目にかゝらぬか。

權藤　おきやアがれ。二本差しは怖くないぞ。

曾平　おのれ、その舌の根を。

ト立ちかゝる。皆々、マア〳〵御料簡なさりませ〳〵ト曾平太を留める。大拍子になり、向うより嘉藤次、股引、半纒、切り草鞋、大小の形にて、足早に出で來り、直ぐに舞臺へ來て

嘉藤　それにござるは、柏木氏ではござらぬか。

曾平　これは〳〵、梁川嘉藤次どの、拙者、御本陣へ參る道にて、身共に對してこの狼藉、それゆゑかかる仕合せでござる。

嘉藤　何か仔細は存じませねど、狼藉とござれば、聞捨てにもなりますまい。それは格別、此方にも大變な事がござる。鎭まれ〳〵。

侍ひ　ハッ。片寄れ〳〵。

ト權藤次を鎭める。

曾平　して、大變な儀とは、如何の儀でござる。

嘉藤　殿の御祕藏になさるゝ白斑の鷹、お拳を外れて、今以て戻りませぬゆゑ、殿には御機嫌さん〴〵。慥か、早蕨戸田の邊へ參つた樣子。我れ〳〵も殿のお供いたし、參らうと存ずるが、貴殿は如何めさるゝ。

曾平　それは等閑ならぬ儀。さりながら、打捨て置かれぬこの場の仕儀。

嘉藤　して、狼藉者と云ふは、神事の役人ではござらぬか。

曾平　左様にござります。扉はれ禰宜の分として、さま〴〵の惡口。おのれ、手は見せぬぞ。

嘉藤　尤もなる儀ではござれど、神事の庭と申し、罪科は追つて。この者は、神職方へ預けめされい。

曾平　イカサマ、貴殿のお詞と申し、然らばこの者を引立てい。

侍ひ　畏まつてござる。

嘉藤　然らば曾平太どの、片時も早く、大殿の御供仕り、お鷹の行くへを。

曾平　如何にも。ソレ、引立てい。

侍ひ　ハツ。立ちませい。

ト大拍子になり、皆々下座へ入る。右の鳴り物にて、向うより、犬淸、若殿の形。後より、千早、奥女中にて、刀を持ち、付添ひ出る。鳥居の内より、主膳、小紋の股引、半纏、ぶツ裂き羽織、大小の形にて出て來り、犬淸を見て

主膳　これは〳〵若殿樣には、うるはしき御尊顏を拜し、恐悅至極に存じ奉ります。

犬淸　花房主膳、遠路の交代、大儀であつたな。

千早　大殿樣にも御機嫌よう、御到着でござりまするか。

主膳　如何にも。見上げますれば、輕々しき御有樣。して、お供廻りは。
千早　あれなる惣門に、扣へさせ置きましてござります。
主膳　疾にもお出でと存じなば、設けの用意もあるべきに、思ひよらざるこの御入來。先づ〱これへ。
犬清　參れ。
千早　ハア。

ト兩人、舞臺へ來つて、よろしく住ふ。

主膳　若殿のこれまでの御出では、大殿樣の、お待受けでござりまするか。
千早　左樣にござりまする。若殿樣には、御道中御安全の爲、當家の氏神、これなる氷川の御社へ、御祈願を籠められし所に。
嘉藤　今日、御到着の筈なれど、この邊はお鷹の御場所ゆゑ、道々御遊興を遊ばされたる所、御祕藏のお鷹、お拳を放れ、今以て行くへ相知れざるゆゑ、御近習の面々も、心を痛め罷り居ります。

ト大拍子、馬士唄の合ひ方になり、向うより、一擧、小紋の股引、半纏、ぶッ裂き羽織、大小。後より、求馬、着流し、大小の形にて、しを〱として出て來るを、旅中間兩人、求馬を取卷き、この人數、直ぐに舞臺へ來る。各々思ひ入れあつて

一學　これは〳〵若殿様には、久々にて御目通り仕りまする。先づは美はしき御尊顔を拝し、恐悦に存じまする。

主膳　貴殿は蟹江一學どの。

千早　主膳どのゝ御子息、求馬さま、只今お着きになりましたか。

犬清　求馬、其方も、無事で到着いたしたか。近う〳〵。

求馬　ハッ、有り難う存じまする。

　　ト　うぢ〳〵として居る。

主膳　見れば、合點のゆかぬ悴が素振り。それは兎もあれ、一學どの、お鷹はお手に入りましたか。

一學　お鷹どころではござらぬ。一大事の儀が出來いたしてござる。

犬清　ナニ、一大事の儀とは。

主膳　心がゝりな。サヽ、様子は〳〵。

一學　その仔細と申すは外でもござらぬ、今朝、殿の御出立と申すに、これなる求馬どのには、衣服とても改めず、寝巻のまゝで居らるゝゆゑ、如何の仔細と咎めしに、お預かりの荷物の内、黄金の鶏の入りしを、夜分のお泊りに於て紛失との事。それゆゑ斯くの仕合せでござる。

主膳　すりや、お家の重寶黄金の鷄、紛失せしとや。して、盜賊の手がかりでもあるか。コリヤヤイ、申し譯の筋あらば、早く申せ。ドヾ、どうぢや。

求馬　イヤモウ、役目疏かには似たれども、この程よりの旅行の疲れ、思はずまどろむ其うちに、目覺めて見れば、お預かりの荷物、悉く取散らしござるゆゑ、改め見れば、大切なる黄金の鷄紛失。正しく盜賊の所爲と存じますばかり。これぞと申す手がゝりとてござりませぬ。

ト主膳、當惑の思ひ入れ。

一學　聞きめされたか、主膳どの。御道中大切なる、殿の御荷物を預かりながら、盜賊に奪はれしとは貴殿の御子息ではござるが、さて〳〵求馬どのには、お手柄な事でござるな。

ト主膳、ズッと寄つて、求馬が襟を取つて

主膳　おのれ、申さうやうもない、憎い奴。骨身に堪へるやうに、カウ〳〵。

ト刀を拔き、背打ちにする。

おのれはなア。何れもの手前、面目もなき仕合せ。年罷りよつて親にまで、武士道を捨てさせる不孝者。いつその事に、憎くい悴め、面を見るもむやくしい。

ト刀を取り直し、振り上げる。犬淸、こなし。

犬清　主膳、扣へい。
主膳　でも、不埒なる忰ゆゑ。
犬清　手討には罷り成らぬ。
主膳　とは又何ゆゑ。
犬清　たとへ其方が子息にもせよ、知行宛て行なへば、身が家來ぢやぞ。
主膳　ヤ。
犬清　それとも、若年の某と侮つて、違背いたすか。
主膳　全く以て。
犬清　いま手討に致せば、失せたる寶が手に入るか。
主膳　サア、それは。
犬清　殊さら不淨を清むる神の庭、血汐の穢れも恐れあれば、必らずともに早まるな。
主膳　憎くき忰ゆゑ、年寄りの一徹短慮、殿へ無禮と心付かざりしは、主膳が不調法、幾重にも御容赦下さりませ。
一學　併しながら、お家の重寶を失ひし上からは、疎かならざる大罪人、大殿へ言上なした上、罪科は

追つての沙汰。どなたが御最屓なされても、お家の重器失ひしからは、掟は破られぬ。その時こそは、吹く面かはくを、見るやうだワ。ハテ、氣の毒千萬な。

ト求馬、思ひ入れあつて

求馬　さうぢや。

犬清　ソレ、留めい。

ト一腰へ手をかける。犬清見て

千早　ハツ。御意でござりまする。お待ちなされませ。

ト留める。

求馬　イヤ／＼、お留めなさるな。生きて恥つら晒さうより、いつその事に、この場に於て。

犬清　そりや、罷り成らぬ。

求馬　そりや又、何ゆゑでござりまする。

犬清　生害とは、誠の武士の致す事。大切なる重器を奪はれ、その盗賊に薄手も負はせず、今さら生害を致せばとて、申し譯が立つべきや。以後の見せしめ、大小取上げ、この場より追放申し付くる。

求主　ヤ。

犬清　一學、彼れが兩腰、取上げい。

一學　心得てござる。

ト求馬の大小を取上げ、犬清の前へ置く。犬清、取上げ見て

犬清　この差添は、出立の砌り、其方へ遣はしたるこの品。鞘は向う梅の紋散らし。刀は格別、云はば穢れし科人の脇差、取上げには相成るまじ。直さまこれより、取捨て申し付くる。コリヤ、千早、其方、この品を取上げ、いづくの誰れに遣はすとも、其方よきに計らうてよからう。ナ、合點がいたか。

千早　ハツ、有り難き、君のお詞。然らば御取捨てのこの一腰。私しが申し受けるでござりませう。

ト一腰を持つて下の方へ扣へる。

一學　イヤハヤ、何の事やら、この一學なぞには、とんと解らぬ。さりながら、いかほど文句を付け、御最屓相成つても、あの求馬どのには、一體武士の道は似合ひ申さぬ。常平生から畫道にばかり心を寄せてござれば、繪描きでもなつて、猫の繪を描いて歩くがいゝ。又それが成らずば、四海波でも謳つて、袖乞ひがようござらう。思ひなしか、袖乞ひじみて來たやうだ。ハヽヽヽ。

犬清　寶の詮議の手段が肝要。首尾よく手にさへ入るならば、歸參の願ひは幾重にも。それまでは短慮

なきやう、心を付けて、その身も大切に。ナ、合點がいたか。花房主膳、なんとさうではないか。
　　ト求馬に向つて云ふ。
主膳　御意の通り、命長き龜は蓬萊の譬へ。隨分その身を全うして、歸參するまで無事で居てくりやれ。
　コレ悴。イヤサ、勘當すれば他人の科人、とつとゝ御前を立去り居らう。
求馬　天に風雨の愁ひあり、私しとてもこれまでに、犯せる罪はなけれども、この身に不時のかゝる災難。時節と存じますれば、なんの厭ひがござりませう。
一學　ヤア、今さら益なきその繰り事。この場に用なき浪人、勝手な方へ出てお行きやれ。若殿へ申し上げます。神職の方にて、何かの用意。
犬清　いかにも。やがてお着きに間もあるまい。
一學　委細は、大殿の御前にて。
主膳　然らば、我が君。
犬清　兩人、參れ。
皆々　先づ、入らせられませう。
　　ト唄になり、犬清先に、主膳、一學附いて鳥居の内へ入る。後、合ひ方になり、求馬、千早、殘り、

こなしあつて

千早　求馬さま、思ひよらざる御身の御難儀、さぞ御無念にござりませう。憚りながらお察し申し上げまする。それに付けても、お腰が明いて見苦しうござります。モシ、殿様の御心添へられしこの一腰、イザ〳〵。

求馬　有り難き御主人のこの賜物。辭退いたさば却つて不忠。然らば頂戴いたすでござらう。

ト差添取つて差す。この時、一學、鳥居の蔭より窺ひ見て、入る事。

千早　この上御身御大切になされ、寶詮議が肝要でござりまする。

求馬　そのお心添へは忝なう存じます。手がかりとても無ければ、何を以て寶の詮議を。

千早　さればでござりまする。金銀に目もかけず、お家の重寶に心をかけるは、この程世上に噂のある

求馬　合邦太郎と云ふ盗賊、徘徊いたす由、もしや彼れらが、仕業やも計り難し。

千早　それは格別、爰に長居は上への恐れ。さりながら、これよりいづくを便りにお越し遊ばす。

求馬　サア、それとても、誰れを便りにする者もなければ、親人に高恩を受けし、湯島の三吉と申す者、町人なれども、頼まん拙者が所存。

千早　左様なら、求馬さま、やがて、めでたう御歸參を。

求馬　とは云へ思へば。

　　ト思ひ入れ。

千早　アヽモシ、片時も早う。

　　ト思ひ入れ。權藤次、この時窺ひ寄つて

權藤　求馬、うぬを。

　　トかゝる。三人立廻りのうち、犬清出て、求馬を圍ひ、權藤次を支へる。求馬、見て

求馬　これは。

犬清　爰構はずと、早行け。

千早　又も人目にかゝらば如何。

求馬　とは云へ名殘りに。

犬清　未練な奴の。

求馬　ハツ。

　　ト思ひ入れ。三重になり、求馬、ツイと向うへ入る。

權藤　うぬをやつちやア

ト行きにかゝる。兩人、支へる立廻り。犬清、權藤次を見事に投げて切り倒す。千早、白刃を拭ふ。

兩人よろしく、好みの鳴り物にて、道具廻る。直ぐに上手の幕を切つて落す。

本舞臺、二間、常足の二重、寺の佛壇、經机その外佛具、よき所に誂らへの位牌を飾り付け、更紗の暖簾口、床の間、軒口に額を掛け、これに望月山としろし、上の方、榎の老木、注連を張り、この洞、二段にて、上の方より下の洞へ水湧き出で、前の流れに杜若、その外草花。下手に羽黑山大權現と書いたる立て石。同じく梵天、うしろ藪垣。いつもの所に枝折り戸。一體座敷の模樣は、羽黑水庵室の體。木魚の入つたる鳴り物にトヒヨ、風の音にて道具納まる。

ト揚げ幕の上より白斑の鷹來る。これと共に向うより松林尼、鼠の衣裳、そぎ尼の形にて、千ヶ寺の葛籠を負ひ、出で來る。舞臺葭の簾を卷き上げる。內に、望月、鼠衣、有髮、喝食の拵らへにて珠數を持ち、兩人ともにこの鷹に目を附け、キツと思ひ入れあつて、誂らへの合ひ方に變る。

望月　ハテしをらしき、野面の詠め、頃も皐月の雲晴れて、萬里も同じ靑空に、塵かあらぬか一つの翼。

松林　舞ひ行く方は我が庵。この程師の坊夜每の眼病、その一藥を取り得んと、身は雲水の宿の枕、夢路をたどり日數を經て、難なう手に入る一品は、深くも包む心のうち。

望月　外面に訪づる參詣の、その難病は助かれども、我れは夜毎に鳥眼の病ひ。この眼病を直さんには、江州鷹美山に棲む、八寸八分の青蜥蜴、一名これを同墓といふ。

松林　いま一品は白斑の鷹、その生血を混じ合せて、水に浸し服すれば、忽ち病ひ全快とは云へど

望月　鷹は貴人の拳に宿る。なか〳〵下賤の力に及ばず。さりながら、此まゝにて朽ち果てなば、我が心願も空しき折から、空飛ぶ鳥は、アレ〳〵〳〵

松林　正しく師の坊、好ませ給ふ白斑の鷹。

望月　この一藥さへ手に入れば、日頃の願ひは心の儘と

松林　思ふ折しもこの庵を

望月　目がけて舞ひくる白斑の一物。

松林　七尺去つて、影さへ踏まぬ

望月　師弟の孝を上覽あり

松林　天に感應せしものなるか。

望月　願ひ成就のしるしなるか。

松林　それにつけてもあの一藥。

望月　取り得て欲しき

兩人　ものぢやなア。

ト松林尼は、空を見て思ひ入れ。望月、手早く佛前の香入れを取つて、右の蓋にて器を叩く。鷹は餌箱と心得、一散に望月の手元へ來る。あたりへこなしあつて、鷹をしめ殺し、引裂かうとする。この間、松林尼、枝折の元へ來て

松林　ハイ、お師匠樣、只今歸りましてござります。

トこれにて望月、愕りこなしあつて、鷹を衣の袖へ隱し

望月　誰れかと思へば松林尼、無事で戻つて、めでたうござる。

松林　イヤモウ、私しよりあなた樣の、御無事な體を拜しまして、お嬉しう存じまする。さりながら、何やらお取込みの御樣子、お顏の色も常なりませぬが、御氣分でも惡うはござりませぬか。

望月　イヤ、こりや、たつた今、鷹を

松林　エヽ。

望月　サア、たかの知れたる鳥目の病ひ、さのみとも思はぬが、只明暮れ案じたは、其方の身の上。マア〳〵、無事で安堵しました。して、彼の一藥は手に入つたか。

松林　左様でござります。他國に稀れなる品なれど、あなたの御病氣ゆゑ、どうぞ致して取得たいと、わたしの念が屆いたやら、道すがらのお關所も、千ケ寺參つて易々と、持參いたしたこの一藥、お受取りなされて下さりませ。

ト合ひ方になり、小箱に入れたる、青蜥蜴を出す。望月、取上げ見て

望月　紛ふ方なき、八寸八方の青蜥蜴、首尾よく手に入つたれば

松林　いま一種は、白斑の鷹。

望月　その生血は。

松林　お手に入つたでござりませう。

望月　ヤ。

松林　お隱しなさるな。最前慥かに。

望月　コレ。

トあたりへ思ひ入れあつて

いま思はずも、空行く鳥、正しくそれと望みの一物、鷹は貴人の拳を外れて、爰に來るを幸ひと、聞き覺えたる事あつて、難なく手には入つたれど、鷹を殺さば領主の咎め、それを存じて斯くの

仕儀。

松林　サア、その案じも、無理ならねど、罪科は私しが引受けます。ちつともお氣遣ひなされまするな。

望月　頼もしい。その心底を見る上は、あたりへ心を。

ト合ひ方になり、兩人、思ひ入れ、望月は下の宮の内より一ツの器を出し

望月　其方に預けるこの一品。

林松　モシ、こりや何でござんすえ。

望月　これこそ閏月に出生なしたる、女犬の血汐。

松林　あの藥の外に、これもお役に立ちますかえ。

望月　あれなる妙藥にて屆かぬ時は、この一品にて、仕樣はさま〴〵。コレ

ト囁く。松林尼心得、器を取り

松林　心得ました。そんならお前は。

望月　いま一種の藥の調合。

ト望月、佛具の皿を取つて件の鷹の血汐を絞り、蜥蜴諸とも器へ入れて、鷹の死骸は床下へ打込む。

この時、上の榎へ雀大分むらがりゐる。松林尼、前の器を見て

松林　ヤ、、、、、、今まで乾物なりし彼の蜥蜴、俄に蠢く血汐の奇特。

望月　木火土金に返すが秘法。水氣に交へて五行を保つ。水に浸すが秘事口傳。

ト器のまゝ榎の下の洞の水中へ入れると、風の音烈しく、右の雀、羽搔を縮めて落ちろ。これと共に流れの菖蒲、その外の水草、殘らず枯れしぼむ。松林尼、見て

松林　ハテ、爭はれぬ藥の調合。器もろとも水に浸せば

望月　群がる雀、羽搔を縮め

松林　流れの花も、枯れしぼむは

望月　これぞ正しく

松林　南蠻秘法の

望月　コレ、サ、その一藥のしるしは後方、黃昏告ぐる入相に

松林　藥の利き目現はれて、暗き世帶の有明も

望月　俄長者の萬燈と、なつて暮らすか但し又、貧の一燈細くして

松林　身の成行きも、見え分かぬ

望月　暮れての跡は

松林　積る話しを、語り明かすも夏の短夜

望月　勞れは奥で。

松林　長い旅路の、そんなら、こちの人。

トちよつと思ひ入れ。

サア、こちの師の御坊。後ほど、お目にかゝりませう。

ト唄になり、松林、器を持ち、こなしあつて奥へ入る。望月殘る。直ぐにカケリになり、大領、鷹野の姿にて鞭を持ち、跡より、主膳、嘉藤次、曾平太、以前の形にて、附いて出て

大領　秘藏の逸物、正しく此あたりに。林の木々に心を付けい。

三人　ハヽア、畏まりました。

大領　續け。

ト云ひながら舞臺へ來る。主膳、摺りぬけ、庵の内へ入る。跡より大領、嘉藤次、曾平太も續いて入る。望月、それと見るより平伏する。

主膳　高位の御方の御入來、扣へませい、扣へませい。

望月　ハツ、思ひよらざる國主の御入來。恐れ入つてござります。

大領　其方は、當院主か。

望月　左様にござります。

ト思ひ入れ。大領、あたりを見廻し、軒の額を見て

大領　これは物好きな住居ぢやな。山號は望月山と申すか。

望月　御意の通り、望月山長玄寺と申しまする。卽ち拙僧は住職にござりまする。

大領　然らば羽黒水とやら申す、加持の水のある院内か。

望月　左様でござります、君には如何いたして、この所へ。

大領　不審な尤も。予が秘藏なす白斑の鷹、拳を外れて慥か此ほとりへ。

望月　すりやアノ、白斑の

大領　ヤ、其方、存じ居るか。

望月　イヤ、一向左やうな儀は存じませぬ。御覽の如く、高木とても稀れなる貧寺、この先には山續きにて、高木の茂りござれば、御秘藏の逸物、羽も休むる事もござあらんが、然らばその近邊をお尋ねあつて、然るべう存じます。

大領　アヽ、返す〴〵もあの逸物、惜しい事を致した。然らばその地へ。皆參れ。

主膳　ハツ。お立ちでござる〳〵。

大領　待て〳〵。

ト佛前の位牌に目を付け、ツカ〳〵と行き

大領　ハテ心得ぬ。この位牌、英雄院殿前廷尉義明大居士、文治四年四月廿九日、奥州高館に於て戰死、

ヲム、鄙には稀れなる法名ぢやが、これは何人の位牌なるや。

三人　御意ぢや。包まず申し上げい。

望月　世に憚かる御方にござりますれば、御姓名の儀は。

大領　申されぬか。

望月　左樣にござります。

大領　アノこれが。

ト望月を、ヂロリと見やる。

望月　ハツ。

大領　ハテ、奥ゆかしい。

望月　ヤ。

大領　院主、茶を一つ。

ト合ひ方になり、床几を直す。

望月　ハッ。御意ではござれども、天目とても、見苦しければ。

大領　苦しうない、許す。早う持て〳〵。

望月　ハッ。

ト手早く有り合ふ茶碗を清め、土瓶の茶を酌んで

望月　恐れながら。

ト差出す。大領見て

大領　天目の茶澁の樣子。これは當寺の靈寶か。いかさま風雅な。

ト飲まうとする。主膳、ツカ〳〵寄って

主膳　イヤ〳〵、我が君、そのお茶召上がる儀は、御無用に遊ばされませう。

大領　如何いたした。

主膳　見ますれば、合點參らぬお茶の泡立ち。

大領　なにサ〳〵、戰國の砌りには、林間の酒、落葉の煎じ茶、土で蒸したる飯をも食ひ、四季に烈風

を凌ぐは武門の習ひとあれば、苦しうない。これへ持て〳〵。

主膳　左様ではござりますれど、あまり見苦しき器と申し。

望月　出花も古き麁茶と申し、御遠慮いたし居りましたれど、たつての御所望ゆゑ、献じましてはござれど、然らば、この儀、お斷わり申す。

ト茶碗を取り、前に置く。

大領　然らば外の茶を、早う持て〳〵。

主膳　畏まりました。お茶瓶を持たつしやい。

侍ひ　ハア。

ト侍ひ、結構なる茶瓶を持ち出て來る。

主膳　お茶瓶、これへ。

ト茶を酌む。待ちかれし體にて

大領　早う持て〳〵。

主膳　ハツ〳〵。恐れながら

ト銀張りの茶碗にて差出す。大領、取つて

大領　たはけ者め。かゝる性急の折から、殊の外茶がたぎつて居る。當寺は名水と聞き及ぶ。あれなる水を、うめい〳〵。

主膳　畏まりましてござりまする。

　　ト榎の洞の下の水を、茶碗にさし、出す。大領、取つて飲まんとするを望月、寄つて

望月　イヤ〳〵、御前、そのお茶、召上がる事は、御無用に遊ばされませう。

大領　また飲まれぬか。其方どもは何ゆゑ左やう申すぞ。

望月　見ますれば、世の常ならぬ、茶の泡立ち。

主膳　何と申さるゝ。

望月　器の中より立のぼるは、正しく、紫霜斑猫の毒氣。凡眼の拙僧が、寸志の言上。君そのお茶をきこし召され、御尊體に過ちあらば、萬民の歎き、そこを存じてお止め申した。何卒そのお茶の儀は。

主膳　默り召されい。おてまへなぞが何を存じて。お鷹野の節には、いつにてもお用ひ遊ばさるゝ、このお茶瓶。殊に御譜代の某、麁忽の品を差上げんや。

望月　たとへ御譜代、外樣にもせよ、計り難きは人の心。木に棲む蟲は木より生じて、その木を枯らす

の道理。臣として君を弑する事まゝある習ひ。これが俗に申す、飼ひ置く犬に喰はるゝの道理。

主膳　ヤア、某を指して犬の譬へ。御前とて容赦は致さぬ。又その上に、合點ゆかぬ當寺の住職。其方が差上げんと致せしお茶にこそ、仔細あらん。

望月　口賢くも申したり。おてまへの差上げしお茶にこそ。仔細があらう。

主膳　イヤ、其方が。

望月　イヤ、おてまへが。

兩人　なにを。

ト思ひ入れ。

大領　アヽ、コリヤ／＼、兩人、爭ひは取措いて、早う茶をくれぬか。

主膳　ハツ、延引いたさば、却つて不忠。然らばお毒見いたせしその上にて。

望月　イカサマ、双方の疑念を晴らす爲、同木より湧き出でたる水をさして。

ト榎の下へ行き、上の洞の水をさして來り

望月　然らばお侍ひ。

主膳　貴僧も、一緒に。

望月　イザ、お毒見。

ト兩人、めい〳〵に前にある、右の茶をグツと飲み

主膳　お茶のお毒見・致してござる。

望月　これにて御疑念

兩人　お晴らし下さりませう。

大領　鬼殺相濟んだら、早う持て〳〵。

主膳　ハツ、器を淸めまして。

ト立つて茶瓶の方へ行かうとする。タヂ〳〵となり、「アツ」と云うて苦しき思ひ入れ。嘉藤次、曾平太、見て

嘉藤　ヤヽ、主膳どのゝこの體は。

大領　主膳々々〳〵。如何いたした。

主膳　只今お茶の毒見いたすと其まゝ、五體一度に惱亂なし、手足自由にならざるは。

大領　さてはその茶に、仔細ぞあらん。

望月　すりや、君を毒殺なし、お家を窺ふ……ハテ、恐ろしい。南無阿彌陀佛々々々々〳〵々。

ト思ひ入れ。

大領　心得ざる主膳が胸中。引ツ捕へて吟味いたせ。

嘉藤　畏まりました。

ト立ちかゝらうとする。

主膳　チエヽ、お情なき我が君さま、毒と知つて手盛りを喰はんや。察するところ、館の内に逆賊あり
と覺えたり。イデ、召捕つて一詮議。

ト立ちあがり、タヂ〳〵として、アツと云うて、落入る。

大領　兩人の者はこの旨、館へ注進なし、主膳が一家、殘らず閉門申しつけ、予が歸參を相待ち居れ。

嘉藤　でも、君御一人この所に。

大領　苦しうない。迎ひの同勢、目立たぬやうに致せ。

嘉藤　畏まりました。

大領　主膳一族の者ども、國法に依つて、召捕るとは云へど、手荒く致すな。いたはつて遣はせ。

嘉藤　畏まりました。

ト侍ひの茶瓶持ちも花道へかかる。

大領　待て〳〵。

ト呼びとめ、ちよつと思案して

よい。行け〳〵。

嘉藤　ハツ。

ト皆々向うへ入る。誂らへの合ひ方。

大領　最前より、さま〴〵なる事にて迷惑いたした。併しながら、其方この場になくば、予は落命いたす所であつた。アヽ、恐るべし〳〵。この上は、心置きなき其方が手前、一服所望いたしたい。

望月　ハツ、有り難きその御諚、青雲めでたき國の君、かゝる片ほとりの荒れ寺へ、お腰かけ下さるは、當寺の面目、この上やござりませう。不束なる手前なれども、さほど御懇望ござらば、粗茶一服奉らん。

ト奥の方へ向ひ

望月　ヤア〳〵松林尼、稀れ人の御入來。器を淸めお茶一つ。

松林　畏まりました。

ト合ひ方になり、松林尼、以前の形の上へ腰衣を附けて、茶を立て、持ち來り

松林　不束ながら、お茶一服。

ト差出す。大領、何心なく取つて

大領　やう〳〵の事で茶に有りついた。心置きなう所望いたすであらう。これは服加減な。

ト茶を飲み、ウツトリとなり、思ひ入れ。兩人顏見合せ

松林　モシ、如何遊ばされました。お心慥かに。

ト立寄つて介抱する。大領、ホツと心付き

大領　アヽ、ホツと逆上いたした。サヽ、歸館申し付けい。これより道を替へ、水練の荒奴諸とも、川へ打入れ。近侍の者、馬を引け〳〵。

松林　只今、御近侍の者は、何かの御用意。

ト大領、松林尼を見て

大領　ヤヽ、其方は。

松林　ハイ、お茶を給仕の者でござりまする。

大領　すりや、今の服加減は、其方か。

松林　左樣でござりまする。

大領　アノ、いよ〳〵其方が。
松林　ハイ。
大領　ハテ、風流な其方が手前。ムウ。
ト松林尼を見て、ヂツと思ひ入れ。誂らへの合ひ方。松林尼、望月、こなしあつて
望月　不束なる手前、御意に叶ひ、拙僧までが身の大慶。
松林　お恥かしう、存じまする。
大領　院主々々。こりや何者ぢや。
望月　この者は拙僧が、弟子でござりまする。
大領　ナニ、弟子ぢや。ムウ、さうであらう。其方が教訓よろしきと見えて、取りなりと申し、萬事に通達、悧潑才智の者と見えるが、コリヤ〳〵、近う參れ〳〵。
松林　有り難う存じますが、あまり恐れ多う存じます。
大領　苦しうない。近う寄れ〳〵。コリヤ〳〵、其方が形では隨分、歌の道なぞも、心得て居らうな。
松林　御意ではござりますが、師の坊の教へくれましたる經文の外、歌道なぞと申しましては。
大領　イヤ〳〵、さうであるまい。師の坊と申し、その傍らに立廻る其方、佛學の外に歌道の儀も、存

じて居らう。予は至つて執心ぢやが、サヽ、其方、何なりとも一首いたせ。

松林　これは又、御無體な事仰しやります。かゝる片ほとりの山路に居りまする不束者、御免なされて下さりませ。

大領　免せと申すか。然らば歸る。馬を引け〳〵。歸るぞ〳〵。

ト松林尼に心を殘し、立ちかゝるを

望月　御前、暫らくお待ち下さりませう。御意に叶ひまする儀を、何なりと申しつけるでござりませう。先づ〳〵……、日頃にも似合はぬ其方が心底。たかの知れたる雪月花、四季を結んで腰折れは、猶更一興。何なりと、早う〳〵。

松林　それぢやと云うて。

望月　ハテ、何事もこの場の一興。雪月花も、合點か。何卒彼れめに、お歌の題を下し置かれませう。

大領　それは一興。然らば、題を遣はさう。料紙持て〳〵。

望月　畏まりました。コレ、雪月花ぢやぞ。

ト云ひながら料紙を出す。

大領　ハテ、題は何に致さうな。

ト筆を取つて思ひ入れ。兩人顏見合せて、こなし。大領、何やら書いて

サア、この題にて一首いたせ。

ト題を差出す。

松林　すりや、どうござりましても私しに。お歌の題は、月雪花の内でござりませうな。アノ、この題は、山の上にて船を漕ぐ。これは怪しからぬ、お難題でござりまするな。

望月　イヤ、そんなら月雪花ではなうて、山の上にて船を漕ぐ。これは怪しからぬ御難題。なまじ異な事申して、御機嫌を損ねやうより、お斷わり申せ〳〵。

大領　なんと面白い難題でござらうがな。

望月　イヤモウ、この上もなき御難題、只管この儀は。

松林　お斷わり申しなば、却つて御不興。

望月　それでも、山の上にて船を漕ぐ。

松林　その御難題を其まゝに、腰折れながら

大領　なんと申すぞ。

ト思ひ入れ。松林尼、筆を取り、サラ〳〵と認め

松林　ハツ、お恥かしながら。

ト出す。大領取つて

大領　題は、山の上にて舟を漕ぐ。その歌は「富士映る田子の浦邊の夕凪に、船漕ぎ寄せん、山の上まで」。

望月　ヤ、その難題を、どうして其方が。「富士うつる、田子の浦邊の夕凪に。

ト大領へ思ひ入れ。

大領　船漕ぎ寄せん、山の上まで」、天晴れ秀逸。器量と云ひ、才智と云ひ、予も殆んど感心いたした。

松林　お恥かしう存じます。

大領　恥かしいか。サヽ、命を取れ〳〵。

ト引寄せる。望月これを見て

望月　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

ト思ひ入れ。大領こなしあつて

大領　かゝる邊鄙に斯樣なる者ありと、この年月存ぜざるこそ殘念。師弟ともに感心いたした。師の坊、なんなりと、願ひの筋あらば、叶へてくれるぞ。

望月　有り難きそのお詞。お願ひと申しましても、沙門の儀でござりますれば。
大領　山門伽藍の建立か。
望月　イヤ、拙僧がお願ひと申しまするは。
大領　其方が願ひは。
望月　ハテ、何をがな。
ト合ひ方になり、植込みの葉櫻の一枝を取って
恐れながら、拙僧の願ひ、斯くの通り。
大領　この葉櫻の一枝が、願ひとは。
望月　櫻は花の司にして、一旦美目を輝かすと雖も、時の嵐に吹き散らされ、葉櫻となつて世に捨てらるゝ。身も會稽の春を待ち、一度盛えん、愚僧が心願。花は櫻木、人は只、兩腰を横たへ
大領　ムウ。承知いたした。其方、武士になりたいか。
望月　御意の通りでござりまする」
大領　然らば其方を召抱へてくれやうが、仕官いたすか。
望月　アノ、私しを。

大領　して、祿の望みは。
望月　お取立ての私し、祿に望みはござりませぬ。勤功に依つては、御意次第。
大領　神妙なる返答。今日より近習にて召仕ふぞ。
望月　有り難う存じます。

ト大領、硯筥を引寄せ、サラ〳〵と認め

大領　知行をくれう。

ト差出す。望月、松松尼見て

松林　ヤヽ、こりやコレ御教書。
望月　諸侯に等しき、この高祿。
望松　エヽ、有り難う存じます。
大領　今日より、予が家來ぢやぞ。
松望　ハツ。
大領　然らば奉公初めの、忠義が見たい。
松林　武士の忠義と申しましては。

望月　命は君に奉る。
大領　奉公初めに、何ゆゑ。床をとれ。
望月　そりや、何ゆゑ。
大領　抱いて寝る。
望月　そりや、何者を。
大領　あの女を。
松林　エヽ、わたしや。
大領　不承知か。
松林　でも、釋尊の教へには。
望月　破戒墮落を一つの誡め。
大領　その釋尊も、元は斯うして。
ト松林尼を引寄せる。
松林　モシ、何をお隱し申しませう。
望月　彼れめは拙者が、愚妻でござる。

大領　それも承知。下世話の捌き、七兩二分。

ト袖判を投げて遣る。望月取つて

望月　こりやコレ、君の袖御判。

松林　嬉しうござんす。

ト大領に寄りそふ。

望月　まんまと首尾よく。

大領　ヤ。

松林　アモシ。

ト大領を抱き、顏見合はせて、持ちたる珠數を、舞臺へ打ちつける。チヨンと木の頭。

大領　見ぬ振り致せ。

ト望月、墨附にて顏を隱す。この仕組みよろしく、拍子

幕

淺草紅粉屋の場
花房隱れ家の場
隅田川船中の場

第一番目　四建目

役名――鎌田又八娘、お淺。紅粉屋娘、おかん。紅粉屋母、おくま。畫師、花房一洗（實ハ花房求女。車力、丑五兵衛。片瀬村の彌五兵衛。望月帶刀（實ハ長玄寺の望月。下女、およし。古鐵買ひ、權七。へち馬銅八。大江息女、紅梅姫。姫川勇造。谷澤賴母。柏木曾平太。柳川嘉藤次。金澤丹造。奥女中、梅田。同、皐月。同、千早。茶道、町山。湯島の三吉。鳥居又助。

本舞臺、三間の間、淺草諏訪町、紅屋の見世先。軒に暖簾、紅看板。正面紅簞笥。いつもの門口。勘八、色の黒き手代にて帳を附けて居る。若い衆二人、襦袢一つにて、莨のみ居る。中間一人腰を掛け居る。さんげ〳〵の合ひ方にて幕明く。

ト矢張り鳴り物彈きながら

勘八　コレ〳〵、手間の衆、今日は川口から注文の來た、板〆にかゝつてもらはずばなるまい。

若衆　アイ〳〵、その積りでござります。昨日の紅鹿子も、よく色が冴えやしたねえ。
勘八　イヤモウ、京染め同然サ。問屋方でも、上方へ上ぼせる者はないて。
若衆　左様でござります。

ト話しの内、暖簾口より、おくま、紅屋の婆にて出る。

くま　モシ〳〵、昌伯さまのお使ひのお方え。
中間　ハイ〳〵、私しでござります。
くま　お前、お歸りなすつたら、旦那へ左やう仰しやつて下さりませ。お手紙の通り承知いたしました。いづれ私しが一兩日中に上がりますと、よう申して下さんせ。
中間　ハイ〳〵、畏まりました。
くま　コレ〳〵、手間取り衆、いかに日が長いといつて、節句前でござんす。野良かはかずと、仕事にかゝつてもらひませう。
勘八　モシ〳〵、あの衆も、いま莨に致されました。
くま　莨は、仕舞うてのんでも、濟むわいの。
若衆　イエ〳〵、もう仕事にかゝります。

中間　ハイ、お暇いたしませう。

ト右の鳴り物にて向うへ入る。若い衆は下手へ入る。

勘八　モシ〳〵阿母さま、手間取り手合ひに、今のやうな事、仰しやらぬがようござります。

くま　云へば悪いかいなう。コレ、勘八、昨夜も今朝も、わしが知らぬ顔して見て居れば、繻子娘のあのおかんに、わが身は、嫌らしい眼使ひしやるが、まだ止まぬかいなう。マア、わしと譯のあつた身ではないかいの。

勘八　サ、御尤もではござりまするが、私しがこの眼附きは、性得生れつきでござります。

くま　默りや。其方はわしを阿房にしやるか。コレ、あの娘のおかんは、ありや、先妻の娘、連合ひも疾に病死、後家立てゝ居るわしが目を拔き、やゝともすればわが身は、附けつ廻しつしやるゆゑ懲らしめの爲、この家を追ひ出したりや、道中ばたで雲助して居やるが不便さゆゑ、料簡して、以前の通り番頭さすと、云はせて置いても有やうは、わしが妾と思ふから。コレ、ちつとは、わしが恩も思やいの。

勘八　左様でござります。お前の御恩は忘れは致しませぬが、又あの娘御にも、決して心は掛けませねど、あの方から折々は、およしを頼んで口説きのまゝ。ナニ私しがお前をのけて、仇な心は、こ

れ程も持ちませぬて。

くま　そりやその筈の事。此方の家を出ると其まゝ、雲助しやつた證據には、それ〳〵、洗ひ粉の看板を見るやうに、目ばかり光つて、色は眞ッ黒、その顔色の白くなるやうに、見世で辛抱しやいの

勘八　ハイ〳〵、あなたの御意見、きつと骨身にこたへましたが、阿母さま、あのおかんさまは、お奉公の口があるぢやござりませぬか。

くま　あるわいの。外でもない、多賀のお手醫者、昌伯さまへ、妾奉公。お支度金も、疾に受取り、もう極めて置いたわいの。娘を奉公に追ひ出せば、わが身と跡は差向ひ。

勘八　左樣ならば阿母さま、この上ともに、お變りなう。

くま　コレ、勘八、必らず其方も

勘八　ハイ。

くま　見捨てゝたもんなや。

ト思ひ入れ。聖天の鳴り物になり、向うより、三吉、派手なるやつし、團十郎縞の手拭を持ち、出て來り、門口へ來て

三吉　ハイ、御免なさりませ。三吉でござります。

勘八　これは親方、私しもお詫が叶つて、また歸りました。相變らず、お頼み申します。
三吉　番頭の勘八どのか。大分黑くなつたなう。
勘八　その筈でござります。この頃まで、道中で稼いで居りましたから、大きに日に焼けました。面の黑味の褪めるまで、お店守りを致さうと存じます。
三吉　吳服屋の前賣りは色が白いが、こなさんは黑んぼ島の手代と見える。コレ、珊瑚珠の出物があつたら知らせて下さい。
くま　ハテ、氣の悪いお方ぢや。ホヽヽ。コレ、お茶を上げぬか。よしは居やらぬか。娘も來て、この間のお禮を申しやいの。
ト合ひ方になり、おかん、三升縞の浴衣にて、莨盆を持ち、下女およし、茶を酌んで出て來る。
よし　モシ、三吉さま、この間は三軒家でおかんさまが、いかう御馳走さまにおなりなさんしたと、お噂でござりました。わたしどもを、ようおまきなされましたな。
三吉　こいつはおよし坊が、ばばアを云ふのか。コレ、何も御馳走は無かつたのサ。
かん　イエ〳〵、あの晩は、お前さまのきつい御馳走。わたしや、嬉しう思うて居りましたわいの。ナウ、母さん。

くま　イヤモウ、近年の馳走であつたわいの。イヤ、コレ、娘、わが身は、浴衣一つになつて居てもよいかや。暑いやうでも、どうやらジワ／＼します。コレ、風邪引くまいぞや。

かん　イエ／＼、わたしや浴衣で、丁度よい加減でござんす。モシ、三吉さんえ。思へば思ふ程、わたしやアノナア。

ト思ひ入れ。

三吉　ハイ、アノ、御馳走さまでござんしたわいな。

ナニお前、まだ御馳走の致し方もござりませうが、何を云つても、この婆アが……イエモウ、不漁だと云つて、魚は切れる、誠にお麁末な事サ。有やうは申し譯のお手紙でも上げるのだが、何を申しても、筆が廻らないから、そこらの所は料簡して、大目に見てくんなさいやし。イヤ、大目と云つちやア、番頭さんと差合ひだ。

ト懐より手拭を出して、おかんに渡さうとして心附き、思ひ入れよろしく、無性に汗を拭いて挨拶する。

かん　なんのまア、お手紙が參らいでも、わたしやお前さんの事を、麁末に思ふ心ぢやござんせぬ。ナウ、よし。さうぢやないかいの。

よし　ハイ〱、左様でございます。このお娘さんは、その晩の事、それは〱仰しやつてございます。

三吉　ナニサ、お前。

ト手拭を癖にして居る。

くま　オヤ、お前さんの手拭は、この子の浴衣と、同じやうな染だね。

勘八　成る程、同じ染の縞でございます。これは近年の流行り物、おかんさまのお拵らへなされた浴衣と、あなたの手拭の染と同じ縞サ。

三吉　左様かえ。この手拭の縞は、この頃流行りの團十郎縞と云ふがね、鎌輪奴が引込んだら、三升格子が出るやつサ。その縞を浴衣にするとは、此お子は成田屋が贔屓かえ。わつしは又、あの役者は嫌ひだね。

かん　わたしや又、この縞が、きつい贔屓でござんすえ。

トこなし。

くま　わたしも又、あの毎度流行つた桐縞も、今では甚六縞と云ふわいな。

三吉　無宿縞が聞いて呆れらア。

勘八　宗三縞はあつても、青梅縞であらう。
三吉　あつちやア、黒んぼ縞だ、ハヽヽヽ。
くま　ほんに、三吉さんにも、お話し申しませうが、この子も近々に、御奉公に上がりますわいな。
三吉　エ。

トおかん、その氣はないといふこなし。

して、どこへ行きなさるえ。
くま　ハイ、外でもござりませぬ。多賀のお手醫者、安達昌伯さまといふお方が、娘を欲しいと仰しやりまして、マア〳〵、最初は御奉公で、末々はお貰ひなさりたいと仰しやる、御相談でござりまする。お前さんも、お喜びなされて下さりましな。
三吉　ハイ、そりやおめでたい、お話しでござりやす。隨分とお喜び申しやせう。

トむつとするを、おかん、こなしあつて

かん　これはしたり、どうしてマア、わたしが屋敷へ
三吉　イエ〳〵、行くがいゝのサ。行くとお前、出世だわな。

ト思ひ入れ。

勘八　左やうサ、この子の仕合せでござりやす。娘を内へ置くと、得て蟲が附きたがるものでござりやす。ハヽヽヽ。

ト此うちおかん、氣の毒なる思ひ入れ。

三吉　さうでござりやす。蟲が附いちやア、成る程、値が下がりやせう。油斷をしなさらぬがよい。さう云つても又、此方も今時分の娘に、油斷はなりやせぬ。

トおかん、ムッとする思ひ入れ。

かん　エヽ、なんで娘に油斷のならぬ事がござんす。お前さんは、娘子供の事ばかり云ひなさんすが、おかみさんのある事は、隱しゞござんせうな。

三吉　ナニ、わつちらは、女房は無いのサ。併し、無いでもないと云ふのは、アノ多賀の御家中、花房主膳さまといふお方に、若黨奉公をしてゐた、鎌田又八と云ふ、片瀬生れの大力な親仁があつたが、お聞きなさりやし、その娘も同じやうに大力。或る時、その娘を、わしが女房に遣れと、主膳さまが仰しやつた。云ひ號けは致して置きましたが、その女の親も病死。主膳さまもお果てなされて、それきりになつて居ります。

かん　それ見なさんせ。矢ッ張りおかみさんがあるのぢやわいなア。

よし　左様でござります。ようお隠しなさんすわいなア。
三吉　ナニ隠すものだ。誠にこの通りサ。お前も母さんに氣を揉ませないやうに、お醫者様の御新造さまになるがいゝのサ。
かん　イヽエ、わたしやナ、外へ行く事は否でござんすわいなア。
くま　なんぢや、否ぢや。コレ、其やうに、其方に我まゝ、云はせて置くものか。行かぬと云やらば。
　　ト立寄るを、三吉、留めて
三吉　アモシ、母さん、云はば年端もゆかぬ娘子供の云ふ事を、取上げねえがようござりやす。
くま　それぢやと云うて、あまりツベコベ。
三吉　ハテ、ようござりますわな。
くま　モシ、三吉さん、お前、娘に、よう云ひ聞かして下さんせ。
三吉　ハイ、そりやモウ、わつち等が云つたといつて、得心もありやすまいが、そこが又話し合つて見やせうよ。併し、云ひ聞かしては見ませうが、不得心ならせう事がない。成たけ、わたしが勸めてこの子の
くま　得心するやう、三吉さん

三吉　お母さん
勘八　近頃いらぬ
三吉　エ。
勘八　お世話でござります。
ト合ひ方になり、おくま、勘八、およし、奥へ入る。おかん、思ひ入れあつて
かん　モシ、三吉さん、この間アノ江の島歸りに、よい所でお目にかゝり、その夜お前のお情が、ほんまになつて、モウ〳〵、外へといつては、母さんがどのやうに云はしやんしても、行く事ぢやござんせぬ。さう思うて下さんせ。
三吉　コレ〳〵、さうお前、云つてくれゝば有り難いが、いま云ふ通り、云ひ號けの女房はあつたが、それなりに、お世話なされた主膳さまは横死なさる。尤もわしがお屋敷へ、お出入りになつたもあなたのお庇、その御恩を思ふから、いま浪人の求馬さま、及ばずながら、お世話も申し、また求馬さまにも、わしを兄とも思ふと、忝ないお詞。それゆゑ、あなたの御難儀を、成たけこの身に引受けて。
かん　その男氣なお前ゆゑ、わたしも繼な母さんが、好かぬ所へ行けとある、その大難も、どうぞお前、

引受けて下さんせえ。又お前の身の上に、どんな難儀が出來ようとも、わたしや又その時は、勤め奉公してなりとも、それにいとひはござんせぬ。必らず見捨てゝ下さんすなえ。

三吉　そいつは有り難いの。お前がさう云ふ氣前なら、ナニ女房に持つよ。併し、お前に似合はぬ、たつた一つ、心意氣の惡い事があるの。

かん　そりや、なんでござんすえ。

三吉　外ぢやアねえが、この浴衣、團十郎縞は、恨みだの。

ト聖天になり、向うより、五兵衛、やつし車力の形、下駄にて、せんこりの御幣を大ぶん持つて捨ぜりふにて出て來り、門口へ來て、軒へ御幣を差し、何心なく内を見て居る。

かん　この浴衣を拵らへたも、平常お前が、その縞の、手拭ばかり持つて居なさんすと聞いたゆゑ、お前と一緒に暮らす心で、拵らへた浴衣ぢやわいなア。

三吉　さう聞いちやア、まんざらでもないが、ほんに小ツ恥かしい、生れて初めておらア、文といふものを書いて持つて來たゆゑ、これを見ると心意氣がすつぱり解るの。

ト文を出して渡す。五兵衛、外より覗きゐる。

かん　そんなら、この文に詳しう書いて。

三吉　コレ、外の者に見つかるまいよ。
かん　樂しんで、見ようわいなア。
　　ト袂へ入れる。
三吉　お前、こつそりと、出られるか。
かん　アイ、下女の、よしに賴んで置いたわいな。
三吉　そいつは奇妙、ちよつと寄りねえ。
　　ト引寄せる。門口の五兵衛、思ひ入れして居たりしが、堪えかねて
五兵　南無奇妙頂來、さんげ〳〵。
　　ト履いたる下駄にて門口を無性に叩く。二人は悔りする。奥より勘八、出て來り
勘八　なんだ〳〵。門口で、やかましい。モシ、何の音でござります。
三吉　何だか知らねえが、おいらはモウ、生膽を拔かれた。
勘八　とつけもねえ時分に、七草を始めたは誰れだ。
　　ト見て
ヤ、こなたは、丑坊ぢやねえか。

五兵　丑だ〳〵。丑五兵衞も、どうやら馬のやうになつた。祈禱垢離の御幣を門口へ差しに來て、とんだ事を見たから、立すくみになつた。こいつは惡い風にでもならねばよいが。

勘八　何をうは言を云ふのだ。どうでも貴様は風氣だわえ。

トさんげ〳〵になり、向うより若い衆壹人、使ひの者にて出て來る。

若衆　モシ〳〵、お前の内に、三吉さんは居られますかな。

三吉　アイ〳〵、わしだが、どこから來なすつた。

若者　イヤ、私しは、お前のお世話なさるる、繪描きの一洗どのゝ店請けの事で、家主から使ひに來ました。たつた今來て下さりませ。

三吉　エヽ、店請け人の事かえ。あれ程わしが、云つて置くに。晩ほどにでも參りませうと、さう云うて下さりませ。

若者　イエ〳〵、ちよつと今、來て下さりませ〳〵。

三吉　ハテ、わからねえ奴に會つちやァ叶はねえ。

かん　お前、お歸りなさんすのかえ。わたしやまだ、お前に云ひたい事が、たんと。

ト勘八を見て思ひ入れ。

三吉　アイ〳〵、直に來るのサ。フム、先刻の物は。
ト文の事を氣を附ける。おかん思ひ入れ。
かん　アイ、爰の袂に。
ト思ひ入れあつて、出しかけて見せる。
勘八　綻びでも切れましたか。
ト寄るを、振り切り
かん　エヽ、知らぬわいなア。
勘八　これは御挨拶。
若者　サア、來て下さりませ。
三吉　エヽ、うるさい男だ。
ト聖天になり、おかん、ツンとして奥へ入る。三吉、使ひを連れて向うへ入る。五兵衛、勘八殘り
五兵　コレ〳〵、番頭々々、もういゝ加減にさつしやい。おらアもう、出ると早々、氣の惡い目にあつて、なんだか、目が廻るワ。アヽ、こいつは、餘ツほど逆上せたと見える。貴樣も、あの娘に、どうやら當つて見る樣子だが、そりや惡いの。ハテ、芝居を見やれ。ツイに手代が娘に、いちや

ついて、勝利のあつたは、これまで覺えぬ。

勘八　イカサマ、そこもあるわえ。時に丑坊、さうは云ふものゝ、内の娘が、祝言の邪魔をして、此方へ引上げる相談はあるまいか。

五兵　そりやアモウ、惡智慧を振つたら、いゝ算談もあらうから、貴樣マアく、おれに任せて置くがいゝ。

勘八　何分貴樣を賴む。併し、コレ、アノ、内の後家には、沙汰無しだよ。

五兵　エヽ、勘八、婆アとまだ切れぬのか。好い加減に切れてしまはつしやい。

勘八　わしはさう思ふが、後家御が何分切れる心は。

五兵　エヽ、色男め。

トこの時、おくま、出で來り

くま　オヤ、五兵衞どん、お出でか。わしやアこなさんに賴みたい事があつたに、よう來て下さつたの。マア、荒ましはこの勘八に。コレ、其方、よいやうに、この人を賴んで置きやいな。

勘八　ハイく、そこに如才はござりませぬ。先刻からこの男を賴んで居りました。

くま　さうかいの。コレ、五兵衞どの、譯を聞いてであらば、後方こなたの所へ行かうも知れぬ程に、

必らずその時頼んだぞや。

五兵　そりや隨分、呑み込んで居りまするて。

くま　そんなら娘が、御奉公の事について、並木町まで行かねばならぬ。殊に依つたら、その時ちよつと寄りませう。

五兵　ハイ〳〵、左樣なさりませ。

くま　コレ〳〵、よしや〳〵、ちよつと來や〳〵。

ト奥より、およし、おかんの三升の浴衣を持ち出て來り

よし　ハイ〳〵、何の御用でござりまする。

くま　コレ、ちよつと娘が世話してくれる、肝煎りの所まで行つて來る程に、ちやつと浴衣を持つて來てたも。

よし　ハイ〳〵、畏まりました。ちよつとマア、此お衣桁へ掛けておきまして。

ト衣紋竹へ掛けて、欄間へ下げる。

くま　そりや娘が、浴衣ぢやないか。コレ、ちやつとわしが浴衣を取つて來やいなう。

よし　ハイ〳〵、畏まりました。

ト奥へ入る。この時、浴衣、風にて煽り、袂より件の文、巻きほどけ、段々と出る。おくま、思ひ入れあつて

くま　ほんにマア、この縞染めは、きつう流行るぢやないかや。

勘八　左様でござります。近年の流行り物でござります。

くま　なんと、わしもその流行り物を着てもよからうかいの。

五兵　よい段ではござりませぬ。今の若さに。イヤ、今の年、まだ流行り物を召さぬも御損。

くま　そんなら、着ても大事あるまいかい。併し、似合へばよいが。

勘八　請合つてお似合ひなされます。

くま　さう云やるなら、あの子の浴衣を、ちよつとわしが借り着して。

ト衣紋竹より取らうとする。この時、袂の文を見附ける。

五兵　紅さま参る、三より。

くま　ヤ、娘が浴衣の袂から

勘八　出たのは、附け文

五兵　書いたその手は、確かに湯島の

ト文を取る。

勘八　道理で三より。

くま　エヽ、憎い女郎め。

ト奥へ思ひ入れ。

五兵　アヽモシ。

ト囁く。三人、こなしあつて

く勘　そんなら、こなたに

五兵　お任せなさい。

く勘　貴様に頼む。

五兵　モシ、あの子が聞きやす。

ト三人、思ひ入れ。五兵衛、文を懐中する。四ツ竹の合ひ方にて道具廻ろ。

本舞臺、三間の間、鼠壁、紙幟の繪にて腰貼りしたる繪描きの内。棹には小幟の花笠を大分吊し、三間餘の大鯉を吊しあり、求馬、浪人の形にて、机の上にて小幟を書いて居る。側に銅八、勇みの拵

らへにて、繪の具を拵らへ居る。いつもの門口。下の方、車丑と、かご字にて書いたる腰障子。爰は五兵衞の內。障子に錠をおろしあり、隣同士の體。門口には權七、古手買ひの形にて、荷籠を下ろし莨をのんで居る。四ツ竹節にて道具とまる。

銅八　コレ〳〵、どうぞ早く描いて下さいな。おらア、性急者だから、出來ると早々、立てにやならぬ。早く描いて、くんねえ〳〵。

求馬　それぢやというて、まだ節句には餘程の

銅八　これサ〳〵、節句もへちまも構ふ事はない。わつち等は、正月から正月までも幟を立てるつもりサ。そして、あの大鯉は、もう出來たのかえ。

求馬　あの吹流しは、上がつて居ますが、あれはマア、狹い所へは立ちますまいが、どこへ立てさつしやるのぢや。

銅八　あの鯉は、本所の方へ遣りますから、隨分狹くはねえのサ。わし等は又、べら坊に大仰な事が好きだから、あんな鯉を拵らへて、遣ひ物にするのサ。

求馬　左やう見えまするが、その大仰では、お附合ひも定めし大分。

銅八　ある段ではござりやせぬ。この節句前も、柏餅の恐らく十四五俵も搗かずばなりやすめえ。

權七　モシ〳〵、旦那、お前、この間の布袋の掛け物、絹地へ描いた日の出に鶴、買はうと云ひなさるから、置いて行つたが、あの代物はどうさつしやる。此方もお前、商賣物だ。早く方を付けて下さりませ。

求馬　成る程、尤もでござる。いづれあの圖は、我れら手本に致すぢや程に、買つて置きまする。一兩日待つて下さりませ。

權七　サア、そこでござります。私しもお前、商賣づくの事、お前に間違ひもあるまいが、モシ、斯うなさりませ。なんぞ道具質でも有らば持つて參りませう。さうしてマア、僅かな事だから、方を附けておしまひなされませ。

求馬　イヤモウ、わしも貴様に氣の毒ぢやゆゑ、なんぞ代りに遣りたいが、見さつしやる通り、代りに遣る質物の品も

ト内を見廻す。權七もあたりを見て

權七　モシ〳〵、ござりまする。あの腰の物はどうでござります。

ト求馬の後にある、三建目より廻りし脇差を指さす。

求馬　イヤ〳〵、あの腰の物は、ちよつとした譯で、手放す事はならぬ品ぢやて。

權七　サア、そこでござりまする。手放されぬ程の代物でないと、人に借りた物は、ツイそれぎりになりやす。あの大小なりとも、當分お預けなさりませ。

求馬　サ、わしも差つまつた事が度々ござつたが、これまで放さずに置いたのぢや。

ト脇差を取つて來る。

權七　お前、惡い合點だ。賣りなさいとは云はねえわな。この間の代が濟むまで、お預けなさいと申しやすのだわなア。なんぼ籠ぼろ買ひだと云つて、さう無暗な事もしませぬわな。

求馬　でも、どうもこの代物ばかりは。

權七　そんなら、ようござりやす。道具質も取りやすまいが、その代り、ちよつとお前を、大家樣へ屆けて行きやす。モシ、家主樣はどこだえ。

求馬　なぜ屆けをさつしやるのぢや。

權七　それだといつて、商人の物を買つて、手本にすると云ふが、內に無いから、もし間違つた事があつちやア、賣つて遣らうと取つて來た、先の者へ濟みませぬから、ちよつとお家主樣へ。

求馬　アヽ、コレ〳〵、僅かな事に家主樣まで話されては、わしを世話をする三吉の手前、アヽ、どうも氣の毒。

銅八　コレ、お前、そりやアいくらの事だえ。

求馬　僅か貳朱ぐらゐの事ぢやて。

銅八　そんならお前、明日はわしが鯉の代を持つて來るから、それで濟ましてしまひなせえ。

權七　明日取りなさる當があらば、マア、その取れるまで、あの腰の物を寄越して置きなさいな。

求馬　そんなら、さうもしませうが、必らずそれまで、貴樣に賣つたのではないぞや。

權七　そりや承知サ。預かつて置くからは、賣る事ぢやござりやせぬ。わたしが内は阿部川町、道具屋の權七と申しやすぞや。

求馬　そんなら、預けて置いた。

ト權七、脇差を受取る。

權七　明日、お前、仕事の代を取りなさつたら、勘定して下さりませ。わしもその時は、直ぐにお返し申します。

求馬　必らず賣拂ひは。

權七　承知でござります。お前さん、お話しなされませ。古鐵買はう／＼。

トてんつゝになり、件の脇差を籠へ入れ、振返り、舌を出し、思ひ入れあつて向うへ入る。

銅八　イヤモウ、古鐵買ひといふ者は、何だか味に捻るものだね。お前また、あの手合ひの物を、うつかり買ふが惡いわな。

求馬　サ、わしもさう思うたが、無理やりに賣りつけて行きました。

銅八　エヽ、お前も人の善いものだ。

ト聖天の鳴り物になり、向うより、又助、黒絹の羽織、袴、股立ち、大小、雇ひ若黨の形にて、件の一腰を手に取り、拵らへを見ながら出る。後より權七、籠を擔いだまゝ附いて來り

權七　モシ、頭、思し召しがあらば、お買ひなされて下さりませぬか。

又助　買つて置いてもいゝが、貴樣の云ひ値ぢやァ高いぞえ。

權七　ナニ、お前、高い事はござりやせん。實は向うの、あの浪人の繪描きが所へ、五百ばかりの物を賣つたが、その殘りを今に拂はず、どうやら引賣りにした樣子だが、いろ／＼と騙して、その脇差を當分代りに取つて來たが、必らず賣つて下さるなとは賴んだが、古鐵買ひの手へ渡つて、ナニ賣らずに置くものか。親方、壹分ならお前、掘出し物だ。

又助　その位なら買つてもいゝが、金がさうあればいゝが。

ト叺莨入れより四文錢七百ばかりと、貳朱を一つ出し

又助　コレ、貳朱と錢がこれだ。
權七　ようござりやす。上げやせう。
　　ト錢を受取る。
又助　さうして、こりや向うの繪描きの内の代物か。
權七　左やうサ、口鉾に掛けて、たうとう錢にしたが、イヤ、人の惡い古鐵買ひだね。
又助　人の惡い商賣ぢやァねえ、おぬしばかり人が惡いのだ。
權七　こいつは當りだね。ハヽヽヽ。古鐵買はう〳〵。
　　ト聖天にて權七、引返して向うへ入る。又助、思ひ入れあつて
又助　そんならアノ求馬が、いつぞや屋敷をお暇の出た時、取上げられたこの脇差、若殿の手から貰つたと聞いたが、安金で又助が、買つて置いたら、なんぞの役に。
　　ト思ひ入れあり
あの求馬の口裏をむしつて見ようと、供先から廻つて來たが、道具質に遣つたと云ふを、あそこの内へ今直ぐに、持つても行かれず。
　　ト門口へ來り、思ひ入れあつて

アヽ、歸るまで、爰らへでも上げて置かうか。

ト門口の鴨居へ上げて

ハイ、御免なされませ。

ト入る。求馬見て

求馬　ヤ、其方は屋敷に居やつた

又助　ヘイ、鳥居又助めでござりまする。

求馬　ほんに、又助々々、よう尋ねて來てくりやつた。

又助　ヘイ〳〵、疾にお尋ね申します筈。今日まで上がりませぬは、イヤモウ、申し譯もない儀でござります。

銅八　コレ〳〵、繪描きさん〳〵、この幟はもう出來たのか。

求馬　出來た〳〵。大きにお待遠でござりました。この大鯉もお持ちなされまするか。

ト小幟は、枠へ掛けて渡す。

銅八　イエ〳〵、そりや明日に取りに來やせう。この代は濟んでゐやすよ。

求馬　慥かに受取りました。

銅八　鯉は明日取りに來やせう。お前、お話しなさりませ。サア、内へ行つて飾るぞ。

ト聖天になり、銅八、幟を持つて向うへ入る。あと合ひ方。又助、思ひ入れあつて

又助　見ますれば只今では、御浪人の御身分。渡世の爲に、あなたには。

求馬　見やる通りの微かな手業。お屋敷に勤めて居るうち、描き習うた浮世繪も、今は渡世の種となり僅かな筆の命毛に、助けられ居る花房求馬。繪描きの名乘りも其まゝに、同じく花房一洗と、描きならひの幟繪描き、賴もしうしてくれるは、屋敷へ出入りの湯島の三吉。あの者が世話になつて、今はわしを身に引受け、よう世話してくれるわいの。

又助　それは奇特な人でござります。モシ、慥かアノ前度、あなたのお内に勤めてゐられし、ア、何とか申しました。オヽ、それ／＼、鎌田又八といふ大力な親仁どのがござりましたが、まだ達者でゐられまするかな。

求馬　イヤ／＼、あの者は最早三年以前に病死せしとの事。生れは鎌倉片瀬村、至つて大力。その娘が一人あつて、幼少のうちに屋敷の御奉公が、見習はらせたう存じまするると、御家老石部氏へ少しの間、淺尾といふ腰元奉公。

又助　モシ／＼、旦那樣、お前樣、御存じかは存じませんが、アノ淺尾というて、御家老樣に勤めて居

た子は、ありやァお前様のお姉様だと申す噂がござりました。

求馬　其方は譯も無い事を申す。どうしてアノ淺尾が、身が姉であらう。コレ、あの淺尾はナ、親主膳どのが、至つて目をかけて遣はされ、末々はあの湯島の三吉へ、女房に遣はさうと、親又八もその心で、云ひ號けして居やつたが、その淺尾は、親に似たやら、女に稀れな力強。やう／＼屋敷に一兩年も居やつたとの事。病氣づいて片瀬へ歸り、それから江戸へ出やらいで、たうとう今では片瀬村の、海女も同然。それがマア、どうしてわしが姉と云ふには。

又助　モシ／＼、お前樣は御幼年の時分ゆゑ、御存じはござりますまいが、親旦那主膳さまが、お腰元にお手が掛り、懷妊して產み落したは娘のお子。その娘のお子を持參で、御家來の又八へ緣づけ、先の娘と思はせて、誠の所は主膳どのゝお胤。そんなら、あなたの姉様も、同然ではござりませぬか。

求馬　ハテマア、てまへは、よう詳しう存じて居やる。

又助　ハイ、御家中でのお噂を、聞き挾んで居りました。モシ、旦那のお噂と申せば、アヽ、お氣の毒なは、多賀のお屋敷、今參りの望月といふ成上がり、女の尼をお部屋にして、お柳の方と敬まはれ、廣元さまより入らしつた、お姫樣の御緣談、今日までも御沙汰なく、いとしぼなげに大振り袖、

打捨て置かれぬ所を、矢張り其まゝ。大江の家とお館は、誠に合戦が出來ぬばかり。忠臣の侍ひは、暇が出るやら、閉門やら、イヤモウ、聞いても腹が立ちまするて。

求馬　そんなら噂に違ひなう、お屋敷内は皆佞臣、親仁さまにも思はぬ横死。黄金の鶏失ひし、其お咎めでわしは勘當。

又助　して、その品は、今以て知れませぬかな。

求馬　それぞといへる手掛りも。

又助　ハテ、困つたものでござりまするな。

ト脇を向いて嘲笑つてゐる。てんつゝになり、向うより、おあさ、やつしの形、菅笠を持ち、跡より彌五兵衞、田舍者の拵らへ、脚絆、草鞋、風呂敷包みを擔ぎ、出て來り、花道にて

彌五　コレ〳〵、おあさどの、いま跡の酒屋で聞いて見たが、繪描きどのゝ内は、向うだと云ひまする。

あさ　わたしも子供の時分は、觀音樣へお供を致して參つたが、在所へ歸つて餘程の間、久し振りでお江戸へ參り、方角とてもうろ覺え。お前、よう聞合はせて見なさんせ。

彌五　イヤ〳〵、向うの内に違ひもあるまいて。

ト兩人、門口へ來て

彌五　ハイ、御免なされませ。わしどもは、鎌倉の片瀬から參りましたが、この間、アノ浪人して出てござる、花房求馬さまと申すは、御存じござりませぬか。

求馬　オヽ、その求馬は身が事ぢや。片瀬と聞いては、心當りがあるが。

ト外の方を見て

ヤ、其方は鎌田又八が娘の、淺尾ではないか。

あさ　ハイ、左樣でござりまする。若旦那樣、御息災で、ハイ、おめでたうござりまする。

求馬　ヤレ〳〵、久しや。マア〳〵、此方へ入りや〳〵。

あさ　左樣なら、御免なされて下さりませ。

ト彌五兵衞も附いて内へ入る。又助、さてはトおあさへ目を附ける。

あさ　モシ、旦那樣、親旦那は不慮に、お果てなされし御樣子。又お前樣のお浪人なされた事も、お手紙にて詳しう承りましたが、さぞマア、御殘念にござりませう。

求馬　推量してくれい。

ト兩人、泪ぐむ。又助、こなし。

又助　ハイ、旦那、左樣ならお暇仕りませう。

求馬　これはしたり、ゆるりと話してゆきやいなう。
又助　ハイ、お客様で、お取込みでござりませう。
あさ　イエ〳〵、御遠慮な者ぢやござりませぬ。私しは、あなたの御家來の娘、何にもお心遣ひな者ぢやござりませぬ。矢張りお話しなされませ。
又助　左樣ならば有やうは、今朝七ッのお供揃ひで、木母寺へお供、どうでお立ちは夜に入りませうと、その間にお立寄り申しました。モシ、旦那樣、近頃不躾ながら、お二階の隅で、トロ〳〵やつて參りたうござります。
求馬　アヽ、そりや心易い事ぢや。併し、二階は穢うて埃だらけぢや程に、その心で、一睡やつて行きなさい。
又助　それは有り難うござりまする。左樣ならば御遠慮無しに。モシ、お前、話してお出でなさりませ。

ト合ひ方になり、又助、奥へ入る。此うち、おあさ、風呂敷包みより目刺の鰯、鰹節を取出し

あさ　これはマア、麁末な品でござりまするが、手前の濱で引きました、目刺の田作り、在所で遣ひまする鰹節。心ばかりのお土産。
求馬　これは〳〵忝ない。

彌五　イヤ、モシ、旦那様、これは初めてお目にかゝりました。私しは片瀬村の彌五兵衞といふ者でござりますが、この子の親仁どのからして、懇ろに致しますが、イヤモウ、親仁どのは大力でござりました。その娘かして、この子にも小力がござります。その上、濱仕事に出ました時は、水の中は、誠に鵜のやうでござります。

あさ　これはしたり、お前とした事が、女子に其やうな藝があつたとて、それが云立てにならうかいなア。

彌五　ハテ、力があつて、水心があつちやア、おいらが濱方ぢやア、その位な云立ては無いて。ハハヽハヽ。コレ、どうで手間が取れやう。其うちわしや、觀音様へ參らうし、頼まれた買ひ物もして來ずばなるまい。

あさ　さうしなさんせ。用を足したら、また來て下さんせ。

彌五　ハテ、どうで今夜は約束して來た、馬喰町へ泊らねばならぬ。連れに來ます。モシ、旦那、爰らに古着屋がござりますかな。

求馬　オヽ、その古着屋は、田原町の後へござると、門並に古着屋でござる。

彌五　ハイ〳〵、左様なら、あの源水の裏通りでござりますか。

求馬　左やう〳〵。よう御存じぢや。
彌五　ハイ、私しも築地で生れまして、肴賣りを致したが、今ぢや片瀬へ引込みましたのサ。
あさ　彌五兵衞さん、お前、買ひ物は何ぢやえ。
彌五　おらが腰越の伯母御が、縮の帷子と、吊り頃な蚊帳を買つて來てくれろと賴まれたのサ。權兵衞の娘の姐えも、黑朱子の帶が欲しいと云つてたが、困つた買ひ物を賴まれた。そんならわしは、ちよつと行つて來ますぞや。
あさ　早う戻りなさんせ。また道に迷ふまいぞえ。
彌五　ナニ、淺草の道は、江戸者よりは詳しいて。ハヽヽヽ。ハイ、行つて參ります。
ト聖天になり、彌五兵衞、向うへ入る。おあさ、こなしあつて
あさ　先達て遣はされましたる、あのお手紙、親又八が存生で居りましたなら、早速に參りまして、お手助かりにもなりませうが、何を申すも兩親の無い私し、存じながら、御疎緣に致しまするも、誠に女の獨り身ゆゑ。ハイ、御免遊ばして下さりませ。さぞやあなたも、親旦那樣の御成行き、御殘念にござりませう。
求馬　イヤモウ、無念なとも殘念とも、この上も無いわしが心。その上、聞いたであらうが、お家の重

寶、黄金の鷄、身がお預かりの役目、何者とも知らで、盗賊の爲に奪ひ取られ、その越度によつて御勘當。それより間もなく父上には、毒氣に中つて果敢なく橫死。今では浪人の求馬。どうぞ黄金の鷄を尋ね出して、歸參の願ひと、此やうな賤しい身過ぎ。

あさ　それはマア、さぞ御艱難にござりませう。して、御浪人の只今の賄ひは、どれからマア、お貰ひなされて。

求馬　いや、其方も知つてゞあらう。親仁樣の御恩になつた町人、湯島の三吉といふが、それは〳〵深切に、わしを貢いで朝夕ともに。

あさ　そりやマア、お奇特なお方でござりまする。

求馬　イヤ、三吉と云へば、其方は、あの三吉を知つて居やらうの。

あさ　アイ。イエ〳〵、存じませぬわいなア。

求馬　その三吉と云ふは、親仁樣がアノ、其方が親又八とも御相談なされて、末々はあの三吉が女房に致しくれうと、御意なされたが、アノ、てまへは知らずか。

あさ　ハイ　一向存じませぬが、お前樣を其やうに、身に引受けてお世話なさんすとは、エヽ、頼もしいお方さんぢやわいなア。

求馬　頼もしいとも〳〵。誠に男一疋ぢやわいの。
　　ト思ひ入れ。唄になり、向うより、おかん、振り袖に着替へ、およし、青傘を相合ひにして、出て來り
よし　モシ、あの三吉さんは、大方繪描きさんのお内でござんせう。
かん　サア、わしもさう思ふから、先刻に云ひ殘した事を話さうと思うて、琴の浚ひに行て來ると、嘘を云うて、其方を連れて主に逢ひたさ。
よし　キツとあのお内にでござんせうわいな。
　　ト門口へ來り
　モシ、お前さんに、湯島の三吉さんがお出でなされますするかえ。
求馬　イエ〳〵、今は居ませぬが、もう見えませう。御用ならば、此方へ入らつしやりませ。お前方、どれからござりました。
　　トおあさ、これを聞き、思ひ入れ。
よし　ハイ、此お子は、紅屋の娘御でござりまするが、三吉さんが仰しやりまするには、あなたのお内まで參るやうにと。それゆゑお連れ申しました。今にお出でござりませう、お置き申して參じま

する。お頼み申しまするわいなア。

かん　アヽ、そんなら其方、先へ行きやるかや。

よし　ハイ、私しが長う居りまするとナ、モシ。

　ト囁き

又お迎ひに參ります。必らず琴のお浚ひに行たとナ。それをお忘れなさんすなえ。

かん　合點ぢやわいなア。

よし　お頼み申しまする。

　ト聖天になり、およし、向うへ入る。おかん殘り、恥かしき思ひ入れ。

かん　アヽコレ、まだ用があるわいな。コレ、よしや、コレ。エヽ、もう行きやつたか。わし一人お内へ殘して。

　トもぢ〳〵して居る。

あさ　お前さん、此方へお出でなさりませ。

かん　アイ〳〵。

あさ　サヽ、お茶一つあげませうかえ。

かん　アイ〳〵。

　　トおあさ、土瓶を取上げ、思ひ入れあつて

あさ　これはしたり、お茶は皆になつたさうな。

求馬　その通りぢや。誰れ一人、茶を拵らへてくれ手もなし。

あさ　左樣でござりませう。御勝手知らねど私しが、その位な御奉公は。

求馬　これはしたり、お客を使うてよいものか。

あさ　アノ、御遠慮はござりませぬ。して、お茶はどれもござります。

求馬　オイ、あの茶棚の抽斗に。

あさ　左樣なら私しが、お臺所も覺える爲。

　　ト土瓶を持ち、おかんへ思ひ入れ。

　　あなた、お話しなされませ。

かん　アイ。

あさ　ドリヤ、お茶拵らへて參りませうか。

　　ト唄になり、思ひ入れあつて、奥へ入る。この唄にて向うより三吉、スタ〳〵出て來り、門口より、

おかんを見て

三吉　おかんぼう、どうした。マア、爰の内へ……ハイ、旦那、御免なさりませ。

ト内へ入る。

かん　アイ、先刻にわたしが内へござんした時、アノお使ひが來たによつて、大方爰ぢやあらうと、琴のお浚ひに行くと云うて、アノよしを連れて來たのぢやわいなア。

求馬　何か譯は存ぜぬが、其方を尋ねて見えた女中。

三吉　ハイ、お話し申した、紅粉屋の娘御でござります。コレ、おかんさん、お前、何がマアそんなに、急に逢ひたいとは、何の話しだえ。

かん　アイ、そりやわたしが身の片附き、嫁入りの事が、苦勞になつたわいなア。

三吉　ハテ、氣の短かい。さう性急に。これが人に話しもなるまいわな。殊に繼母、慾張り婆ア、それには思案もあらうわな。

ト思ひ入れ。矢張り聖天になり、向うより、五兵衞、劍菱の印ある樽を轉がして出て來る。

五兵　エヽコレ、あの内の番頭は、一樽ばかりの酒を、届けてやつてもいゝ事を、坂本まで送らずばなるまい。イヤ、そりやいゝが、相談して來た三吉が附け所。こいつを一番、仕事にしにやアなら

ぬわえ。

ト樽を門口へ置き、内を窺ひ

モシ、先生、お内かえ〳〵。

トこれにて皆々、愕りする。三吉、求馬に囁いておかんは、衝立の蔭へ入る。

求馬　ハイ、宿に居ますが、なんぞ御用でござりまするかな。

ト門口へ來て挨拶する。

五兵　イエ〳〵、わたしぢやござりませぬが、會所で大家さんが、何かお前に用があるから、ちよつと寄越してくれろと云はれました。ちよつと行つて來なさい。

求馬　それはお世話でござりまする。只今參りませう。

五兵　直に來てくれろと云はれました。早く行きなさい〳〵。

ト鍵を出し、錠前を明けて内へ入る。

三吉　モシ、家主が何を云はうとて、私しに逢へと仰しやりませ。

ト内を見廻し

モシ、お前様、此ぢうの蚊帳は、どうなさりました。

求馬　サア、蚊帳はアノ隣の五兵衛どのに、貸して遣はした。
三吉　ナニ、貸したえ。お前もマア、餘ッほどめでた者だ。
求馬　でも、度々世話になるゆゑ、よん所なう。
三吉　して、何を吊つて御寢なりまする。
求馬　蚊帳の代りに、この鯉を吊つて臥せるぢや。
三吉　ナニ、鯉を吊るえ。
求馬　どうして、その吊り方は存じまい。コレ、このマア鯉の口から、這ひ込むのぢや。さうして、クルリと、もんどりを切ると、イヤ、蚊帳よりは至つて調法ぢや。
三吉　成る程、お前樣の分別は違つたものだ。
求馬　そんならお前、話してござりませ。ツイ行て來ませう。
　ト門口へ出る。三吉、見て
三吉　モシ〳〵、お前、お腰の物わえ。
求馬　サア、あの一腰は。
　ト面目なき思ひ入れ。

近所の衆へ、ツイ貸して置いた。

三吉　それも貸したのかえ。もし又、質入れではござりませぬか。

求馬　イヤ〳〵、どうして、なんの脇差を、決して賣る事ではないて。

三吉　ナニ又賣られませうぞ。早く行つてお出でなされませ。

求馬　オイ。

ト唄になり、求馬、向うへ入る。三吉、おかん、殘り

三吉　イヤ又、侍ひの子の人の善いのも、あんまり世話がやける。

トこの時、奥より、おあさ、土瓶、茶碗を持ち出て來り、あたりを見て

あさ　こりや旦那はどれに……ようお出でなされました。モシ、あなた、お茶を上げませう。

トおかんに茶を差出す。

かん　ハイ、お構ひなされまするな。

あさ　お前さん、お茶上がりませ。

ト三吉へ茶を差出す。顏を見て、さてはト思ひ入れ。三吉一向に心づかず

三吉　アイ、こりやア御馳走でござりやす。アヽ、見馴れない女中さん、お前、爰のお内の、何でござ

ります。

あさ　ハイ、私しは。

ト三吉を見て、俄にこなし。また恥かしき思ひ入れ。

かん　アノ、三吉さん、主はナ、阿母さんぢやといな。

三吉　エヽ、阿母かえ。これはしたり、其お客に、お茶を汲ませて。モシ、御免なさりませ。

あさ　ハイ〳〵。

トもぢ〳〵して居る。

かん　先刻にから見ました所が、どうやらお前さんは、在所からお出でなさんした様子。左様でござんすかえ。

あさ　ハイ、私しは、十二三里も在方の者でござりまする。

かん　何の御用でお出でなさんしたのぢや。

あさ　ハイ、久しう便りも致しませぬから、お尋ね申しに参じました者でござりまする。

三吉　して、お前、お國はどこだえ。

あさ　ハイ、相模でござりまする。

三吉　相模女に、播磨鍋、尻の早い親方だ。
かん　これはしたり、惡口を云はしやんすなえ。
三吉　モシ、お客さん、お前も在所のお方だが、どこの何國でも、サ、色事と云ふものは、さて氣の揉める者だねえ。
あさ　ハイ、どうでござりまするやら。その色戀と云ふもの、私し等は存じませぬが、浮氣な事では、ひよんな心の起るも色。斯う見た所がお前さんも。
かん　アヽ、コレ、お客さん、わたしや其やうな浮氣な者ぢやござんせぬわいな。
あさ　さう云ひなさんすりや、あのお方さんは、お前の御亭主さんかえ。
かん　イエ〳〵、アノ、主はナ、兄分とやら云ふやうなお方ぢやわいな。
あさ　エヽ、お前、在所の者ぢやと思うて、ようお騙しなされまする。なんぼう野暮な、わたしでも、ちよつと見ましても、ハイ、やる事ぢやござりませぬ。
三吉　イヤ、こいつはお客が當りを云ふわえ。何を隱さうこの子は、ちつと譯のある娘御サ。モシ、お前、斯う知つても、必らず爰の旦那には沙汰なしだよ。
あさ　ハイ〳〵、そりや私しも、在所者でも、そこは又、お互ひの事でござりまする。隨分お沙汰なし

に致しまするわいな。

三吉　ハテ、行き渡つたお詞だ。お前、亭主持ちか。

あさ　ハイ、キッと致した亭主が、私しには

ト思ひ入れあり

ござりませぬわいな。

三吉　エヽ、まだやもめでお暮らしかえ。

あさ　ハイ、左様でござりまする。

三吉　ナニ、今の若さに、いくらも亭主は持たれるわな。

あさ　イエ〳〵、惡い氣性で、一筋に思うたばかり。

かん　こりやお前も、男選みと見えるわいな。

ト思ひ入れ。聖天になり、向うより彌五兵衛、足早に出て來り

彌五　コレ〳〵、おあさどの、居さつしやるか〳〵。

あさ　彌五兵衛さん、買ひ物はどうぢやえ。

彌五　サ、そこぢやて。田原町の古着屋に、何もかも揃うてはあるが、男の眼からは、何がどうやら、

一向わからぬ。蚊帳も帯も帷子も、大儀ながら、ちよつと來て目利きして下され。わしにはどう
してわかる事ぢやござらぬ。

あさ　ハテ、お前も大概な所で、よいぢやござりませぬか。

彌五　イヤ〳〵、買ひかぶりでもして見さんせ、あの伯母御に、一生の云はれ草ぢや。ちよつと來て、
目利きして下され〳〵。

あさ　アイ〳〵、そんならちよつと行つて參りませう。モシ、あなた、御ゆるりとお話しなされませ。

かん　アヽ、もうお歸りなさんすのかえ。

あさ　イエ〳〵、ちよつと買ひ物して參りまする。旦那様がお歸りなされたら、左様仰しやつて下さり
ませ。

三吉　アイ、早く歸りなさい。

あさ　ツイ行て參じまする。

ト彌五兵衛に附いて花道まで行き、思ひ入れ。

年端もゆかぬ時分から、あのお方ぢやと思ふから、此方でばかり末々は。

彌五　コレサ、歩んで下され。

あさ　サ、參りませう。

ト唄になり、兩人、向うへ入る。

三吉　ハテ、あの客人は、なんだか心意氣のありさうな、意氣な女だわい。

かん　エヽ、それ見なさんせ。女中さへ見なんすと、其やうにマア、直に心變りなさんすゆゑ、滅多に油斷はならぬわいなア。

三吉　ならねえと云つて、どうするものだ。コレ、おらア、眞に主にのろくなつて居るよ。それを云ふこたアねえ。コレ、嘘でないといふ事は、實は大事の旦那の內だが、向後お主の罰があたつて、よい〳〵になる法もあれ、僞はりは云はねえよ。その證據には、コレ、ちよつと爰で。

ト おかんを捕へてこなし。

かん　アヽコレ、惡い事しなさんすな。

三吉　惡くても、善くつても、もう斷うなつちやア。

ト しなだれる。この時、奧にて、灰吹を毀す音する。三吉、悔り飛びのく。

かん　それ、見なさんせ。誰れやら奧に居るわいなア。

三吉　居ても大事ない。アヽコレ、どこぞに蔭があればいゝが。

ト大鯉を見附け

い〻物があるワ。いま旦那が敎へさしつた、コレ、この鯉の中がよい。入つて見よう。

ト鯉の口より入り、顏を出し

こいつは野郎の金魚だ。イヤ又、これは奇妙だ。コレ、爰へ來ねえ。

かん　滅相な。どうしてマア其やうな所へ。

三吉　これはしたり、鯉の腹の中へ入りやァ名聞だ。これサ、爰へ來なよ〳〵。

トおかんを捕へ、鯉の口より引込まうとする。

かん　アヽコレ、後生ぢや程に、堪忍して下さんせ。

三吉　ハテ、鯉に胡椒は差合ひだわな。

トロの方からおかんを捕へて引込む。唄になり、向うより、彌五兵衞、風呂敷に包み、中古の蚊帳を肩にかけ、跡より、おあさ、附き出て來る。兩人、門口へ來て

彌五　コレ〳〵、おあさどの、そんならわしは、この品を持つて、今夜は馬喰町へ行つて泊るが、こなたは爰の旦那の所に泊らつしやるか。

あさ　ハイ、わたしや外に用事もあれば、今夜は願うて一宿しやんせう。

彌五　さうさつしやい。コレ〳〵、この蚊帳は此方へ置いて行きます。明日取りに來ませう。

あさ　さうしなさんせ。それはさうと、マア、一服のんで行かしやんせ。

彌五　イカサマ、泊りは知れて居る。ドレ、一服して行きませうか。

ト兩人、何心なく内へ入る。右の鯉、轉げる。おあさ、恟りして

あさ　こりやマア、怪しからぬ、この鯉が

彌五　ヤア、途方もない、素敵な鯉だが、どうして爰へ刎ね込んだのだ。コレ〳〵、おあさどの、滅多に油斷は、しやるな〳〵。

ト此うち、おあさ、思ひ入れあり

あさ　ほんに、油斷も透もなる事ぢやないわいの。晝中と云ひ、いかに戀ぢやというて、鯉の腹とはエヽ、阿房らしい。慥かに先刻の二人のお方。

彌五　ナニ、二人だえ。

あさ　アヽモシ。

トちよつと囁く。

彌五　ハヽア、鯉は鯉だが、アヽ、忍ぶ戀だ。

あさ　サア、蚊帳の代りに、この鯉ぢやも知れぬ。幸ひ、この蚊帳、貸して上げようわいな。

彌五　さうサ／＼。ぶッ掛けてやるがいゝ／＼。

トちり／＼に念佛太鼓をかぶせ／＼、合ひ方になり、おあさ、蚊帳を網のやうに手繰りて、この鯉へぶッかける。彌五兵衞、有り合ふ棕梠箒を取りて、あたりを片附ける思ひ入れにて、船の艫を押すやうに箒を遣ふ。よき所にて鯉を二つに引ッ切り、おかんは鯉の口より頭を出し、三吉は鯉の腹のあたりより顔を出し、二人とも逆上せし體。

三吉　アヽ、暑い／＼。素敵に暑いぞ。一杯飲みたい。水は無いか／＼。

トこれにて、おあさ、手桶の水を茶碗に酌み、おかんに差出す。おかん何心なく茶碗を取つて水を飲む。此うち彌五兵衞、手桶の水を柄杓に酌み、三吉に飲ませる。三吉、これを飲んで

三吉　アヽ、いゝ心持ちだ。併し、のろまが鹽風呂へ入つたやうだ。

あさ　さぞマア、お暑うござりましたらうよ。

ト三吉見て

三吉　ヤ、こりや今のお客かえ。

あさ　左樣でござります。

彌五　イヤハヤ、いかい御精の出る事でござりまする。

かん　其やうに云うて下さんすと、わたしや面目なうて。

あさ　ハイ、御苦勞樣でござりまする。

三吉　モシ／＼、お客、有やうは爰へ蚊帳を吊つて、あの子に灸を据ゑてもらはうと思つたが、蚊帳が無いばかりに、この鯉の中で

あさ　やいとをお据ゑなさんしたかえ。

三吉　据ゑやした。夏のうち。お前、鯉の腹で灸を据ゑると、惡い風を引かぬね。イヤ、その代り、素敵に暑い。

彌五　さうでござりませうとも／＼。イヤ、ほんに、灸と云へば、宿へ着いて、三里を据ゑにやアならねえ。そんなら、おあさどの、明日來ませう。

あさ　ほんに、お草臥れでござんせう。ゆるりと休息しなさんせ。

彌五　アイ／＼。早く行つて、錢湯へでも入りませう。イヤ、どなたもこれにござりませ。

ト念佛太鼓になり、彌五兵衛、向うへ入る。

あさ　モシエ、幸ひとコレ、蚊帳を買うて參りました。爰へ吊つて上げませう。また跡をお据ゑなさん

せいなア。
かん　イエ〳〵、わたしやモウ、やいとは据ゑいでもようござんす。
あさ　ハテ、お前、土用前ぢやわいな。アヽコレ、釘打つてあるが、肝心の釣手が見えぬ。直ぐにこの釘へ。

ト蚊帳の鐶を掛けようとして届かぬゆゑ

アヽコレ、踏つぎを欲しいものぢやが。

トこなしあつて、門口の酒樽を見附け

アヽ、よい物があるわいな。

ト件の酒樽を輕々と提げて來り、上の方よき所へ置き、この上へ上がつて蚊帳の鐶を掛けるとて、手を伸ばす。この時、腕にある三吉女房といふ彫り物見える。おあさ、これに心附かず、三吉、思ひ入れあつて

三吉　あの四斗入りの酒樽を輕々と。
かん　どうやらあなたの、腕に彫つたは
三吉　三吉女房。

かん
あさ　エヽ。
　　ト兩方とも、途端に悄りする。

あさ　サア、入つて据ゑなさんせ。
　　ト樽より下りる。三吉、立寄り、酒樽を引立て見て

三吉　イヤ、素的な女だ。
　　ト思ひ入れ。四つ竹節になり、向うより、求馬、先に、およし、足早に出て來り

求馬　イヤモウ、別してもない事で呼びつけ居つた。

あさ　旦那樣、お歸りなさりましたかえ。

求馬　折角のお客を、留守居に置いて、惡い亭主振りぢや。

よし　モシ、おかんさま、お迎ひに參りました。

かん　よく來やつたが、母さんの機嫌はよいかや。

よし　隨分よろしうござりまする。また御機嫌の損ねぬうち、サア、お歸りなされませいなア。

かん　そんなら、三吉さん、わたしや行くぞえ。モシ、必らずアノ外へ行くのを。

三吉　ハテ、そりや承知だよ。コッソリと歸つて行きなよ。

かん　ハイ、おやかましうございました。モシ、お客様、ゆるりとお出でなさりませ。
あさ　ハイ、お歸りなされますか。又お遊びにお出でなさりませ。
かん　有り難うござりまする。モシ、三吉さん、必らずお前。
三吉　承知だよ。
よし　サア、お出でなさりませ。

ト唄になり、おかん、先に、およし附いて、向うへ入る。此うち始終、五兵衞、戸を明けて、窺ふ事あつて、おかんが歸りしを見定め、門の戸をさす。求馬、思ひ入れあつて

求馬　コレ、三吉、こなた、あの女中を知らずか。
三吉　ハイ、只今爰で逢ひましたが始めて。
求馬　オヽ、これまで逢うた事は。
三吉　ハイ、一向に覺えませぬて。
求馬　ハテ、逢ひさうなものぢやが。コレ、こなたも、あの男に逢うた事はないか。
あさ　ハイ、お屋敷に御奉公いたして居りますうち、主は格別、私しは、よう覺えて居りまする。
三吉　ア、そんならお前、お屋敷に勤めてござつたか。それぢやア見覺えがござりさうなものゝサ。

あさ　して、お前さん、私しが御奉公いたして居る時を、御存じないかえ。

三吉　小二才野郎の時分だから、何がどうやら。

あさ　わたしもやう／＼十二三、あづまへ知らぬ身ながらも、あのお方ぢやと思ふ程、どうしてお顔を見忘れませう。

三吉　アヽ、味な事を云ひなさるが、お前、どうしてわしを忘れませぬ。

あさ　サ、そりやアノ。

ト恥かしきこなし。

求馬　コレ／＼、三吉、あの女子は、親仁様が、其方の女房に致して遣はさうと、あの者の親どもへお話しなされし、若黨の又八が娘。幼少な時側仕へ、其方の爲には云ひ號けの、淺尾というたは、あれが事ぢやわいの。

三吉　エヽ。そのお話しのあつた、わしが云ひ號けの女房……ハテ、知らぬ事とて、氣の毒千萬。ハテどこにどうした近附きが、あらうやらも知れないものでござりまする。

あさ　ハイ、どこに女房があらうも知れぬが浮世。その心のないお方でも、云ひ號けを致したからは、もう／＼、外へは目も掛けず、一生男持つまいと。

三吉　アヽ、道理で腕に三吉女房。ハテ、似た名ぢやと思うたが、矢ツ張りわしで。

あさ　灰になるまで、離れぬ夫婦。此方ばかり眞實つくし、男の方では浮氣な戀に。それを眼前見て居る辛さ。顔には出さねど、胸の炎は

ト思ひ入れあつて

ホヽヽヽ。モシ、若旦那樣、ほんに思へば、果敢ない昔でござりまする。

ト思ひ入れ。三吉、氣の毒なるこなし。奥より、又助、寢起きの體にて出て來り

又助　アヽ、よい心持ちに臥りました。もう暮れに間もござりますまい。そろ〱と參りませう。

トおあさを見て

モシ、わたしはお前を存じて居りますが、定めしお忘れであらう。

あさ　アイ、わたしも參つた時、存じたやうなお方ぢやと。

又助　その筈サ。お前、お屋敷にお小姓奉公の時分から、存じて居りやす。若黨の、鳥居又助サ。

あさ　ほんに、さう云なさんすりや、思ひ出したわいなア。

三吉　お屋敷へ出入りの時分、知つた顔でも、これまでに、まだ知る人にならぬ三吉。又助さん、お心安うお頼み申します。若いお方の御浪人、お前さん、折々お頼み申しまする。

又助　イエモウ、お氣の毒だと存じたばかり、別してお役にも足りませぬて。
あさ　早う御歸參のあるやうに。
又助　わしも、共にさう思ひますが、當分旦那の御歸參はありますまいて。
三吉　エヽ、そりやなぜ、アノ御歸參は、叶ひませぬえ。
又助　聞きなさい。イヤ又、お前、女だが、あの成上がりのお柳といふ奴は、イヤハヤ、酢でも酒鹽でもゆく奴ぢやァねえ。この旦那のお噂も、度々奥向であるげなが、どうして〳〵、あの望月とお柳めが殿樣へ、さま〴〵な事を焚きつけて、旣にお前、この間も、この旦那を尋ね出して死罪にするがよいと、あの望月どのが云ひ出して、旣での事に侍ひ衆が、主樣を探しに歩いた程の事サ。
　　トこれにて皆々、思ひ入れ。
イエ〳〵、まだそんな事ぢやァござりませぬ。親御さまが毒に中つて死なしつたも、よく〳〵聞けば、お柳と、望月が。
あさ　親旦那の毒害も、求馬さまの流浪も。
又助　お柳が口先、まだ〳〵、嫁入りなすつてござる廣元さまのお姫樣、サア、あなたも又、邪魔にして、さま〴〵の事を申し上げて、おいとしやお姫樣も、成上がり者の邪魔にされて、とゞのつ

まりが、こりやァこれぎりだが、毒害にでも、おあひなさらねばよいが。

トいろ〳〵焚きつける。求馬、おあさ、無念の思ひ入れ。五兵衛、出かゝり居て

五兵　モシ〳〵三吉さん、此方にかえ。

三吉　アイ、來て居ますが誰れだえ。

五兵　アイ、わしでござりやす。

ト内へ入り

モシ、三吉さん、わしやァ、紅屋の後家御に頼まれて來やしたが、お前、あの娘の事は、思ひ切つて、身の有つきだから、屋敷の方へ遣つて下さりませ。

三吉　コレ、五兵衛どん、藪から棒のその頼み。紅屋の娘がどうしたえ。

五兵　モシ〳〵、白を切りなさんな。しつかりとした向うには、證據を取つて云はれまする。その證據と云ふは、モシ、この文でござりやす。

ト件の文を出す。おあさ、眼を附ける。三吉、おあさに氣の毒なる思ひ入れあつて

三吉　その文が、どうしたとえ。

五兵　こりやァ差詰めお前の手だ。向うに氣の無い生娘へ、斯ういふ付け文しなさるは、男らしくねえ

ね。向うの娘は怖さが半分、よん所なくウムと云つたね。さればこそこの文を、母親に見せて、どうぞ仕様はあるまいかと、內證での相談サ。三吉さん、男らしく、切れてやつてしまひなせえな。

ト三吉、思ひ入れあつて

三吉　ハテ、合點がゆかねえワ。今の今まであのおかん、奉公の先まで變替へてと、賴んだ者が、俄に文を母親へ。こいつは女の心意氣も。

ト思はず、おあさと見合せ、こなし。

五兵　ハテ、そこは娘子供だわな。ナニ實があるものか。女に油斷はなりやせぬ。モシ、お前さん、左樣ぢやアございませぬか。

又助　左やう〳〵。イヤ又、女に油斷はならぬ。何が遺恨か存ぜぬが、親仁樣をも毒害し、お前までをも死罪にと、思ふ程なるお柳どの、どうして歸參は心元ない。望月お柳、あの衆が屋敷にあつては、どうして〳〵、アヽ、おいとしいのはお姫樣。

求馬　すりや、成上がりのお柳とやら、身共が歸參の事までも、妨げ云うて殿の手前を。お云ひ號けの姫君も、あるがなしにと、聞いてはどうも。

ト思ひ入れ。

五兵　どこにも、そんな間違ひが、出來たがるも女の口先。

三吉　娘子供と思へども、男の面の立たねえ時は。

又助　いつそ、お柳をスッパリと、やらねえうちはお館の、納まり方がむづかしい。併し、命を的にかけ、乘り出す人も、無いものサ。

あさ　そんなら、いよ〳〵大旦那の、毒の横死も、あなたの流浪も、その成上がりのお柳とやらが。

ト腹の立つ思ひ入れ。

又助　當時の妲妃サ。

あさ　エヽ、憎くい女め。

求馬　逢うたら、斯うして。

三吉　女の心を、よもやと思へど。

あさ　殊によつては生死の、切り切らるゝも。

三求　切つて、見せうワ。

ト立ちあがる。

あさ　何を切る氣で、あなたも、お前も

ト兩方へ云ふ。

三吉　品に依つては、向うの相手を。

あさ　刃物があるかえ。

求馬　アヽ、折も折とて、先刻に一腰。

ト向うへ思ひ入れ。

あさ　刃物の無いのが、あなたのお身の。サ、お前も定まる女房の無い身、もしやの事がある時は、世間の口に。

三吉　世間の噂はいとはねど、知らぬながらも云ひ號け、その女房の聞く手前。

あさ　祝言せねば女房とも、云はれぬながらも、腕にキツと。

三吉　それだによつて、黒白を、分けて見せねば、こなたに。

あさ　エ。

三吉　證據の文がら、借りたによ。

ト文を引ツたくり、門口へ出る。五兵衛、それをトかゝるを振り切る。聖天になり、三吉、文を持つ

て向うへ入る。五兵衞、思ひ入れあつて

五兵　南無三、仕事が。無駄にはせぬぞ。

ト追ひ驅けて、向うへ入る。

又助　なんだか、ソワ〱と、女の噂で挨拶が。もうお暇に致しませう。

求馬　まだ、その外に屋敷の樣子。

又助　ハイ、お聞きとあらば、ござります。

ト居直る。向うより、伴介、中間の體にて走り出て來り

伴介　コレ〱、又助どの〱。

又助　誰れだ。オヽ、伴介か、なんだ。

伴介　なんだどころかお立ちだワ。サア、來さつしやい〱。

ト又助を引立て、外へ出る。

又助　エヽ、せわしない。煙管を忘れた。

伴介　煙管はいらない。お立ちだわな。

ト引ッ張つて、花道へ行く。

又助　これサ、跣足で居るワ。

伴介　跣足でもいゝ。お立ちだわな。

ト引ッ張つて揚げ幕まで行く。又助、思ひ入れあつて

又助　イヤ、肝心の物を忘れた。あの鴨居の上に。

伴助　ハテ、お立ちだと云ふに〱。

ト無理に引立てる。又助、振り返り〱、引ッ張られ、向うへ入る。求馬、急き込んで門口へ出ようとするを、おあさ、留める。

あさ　お前様、こりやどこへお出でなされます。

求馬　コレ、淺尾、いま聞きやる通りの屋敷の様子、今日木母寺へお柳が來て居るこそよき幸ひ、逢うてこの身の恨みの丈を。お家の爲なら、切つてなりとも。

ト急いで行くを、おあさ、留めて

あさ　これはしたり、その大勢のお供の中へ、お前がお一人お出でなされ、どうマアお部屋に會はれませう。殊に丸腰、狼藉者と打ち叩かれ。この上にどのやうな、恥をかゝうも知れませぬ。モシ、必らず滅多な事なされまするな。

　　　　トきつと云はれ、求馬思ひ入れあつて

求馬　それぢやといふて、口惜しいわい／＼、口惜しいわえ。

あさ　御尤もでござりまする。そのお前のお腹立ちは、私しが晴らして上げませう、と申したばかりで女の私し、誠か嘘か知らねども、今のやうなる噂では、親旦那の敵も同然。お家の爲にならぬお部屋のお柳どの。モシ、必らず短氣な心をお出しなされまするな。

求馬　さう云うてくりやれば、是非にとも云ふまいが、兼ねて噂に聞いて居るげな。其方の素性、親主膳さまの肉身分けたる血筋なりや、姉者人も同然。

あさ　アヽ、モシ、決して左樣な、身の上の者ぢやござりませぬ。

　　　　トこの時、入相の鐘、きびしく鳴る。おあさ、思ひ入れあつて

淺草寺の、ありやモウ入相。

求馬　隅田川原の、お立ちの刻限。

あさ　暮れぬその間に、ちよつと參つて。

求馬　コレ、必らず、樣子を。

あさ　ハイ、見屆けて參りませう。

ト矢張り時の鐘。おあさ、身繕ひする。向うバタ〳〵にて、三吉、走り出て來り、ツカ〳〵と入つて、おあさを見て

三吉　コレ、云ひ譯に來た、女房淺尾。

あさ　イエ〳〵、縁無きわたしは他人。

ト門口へ出ようとする。三吉、留めて

三吉　以前の様子を、あらましわしに。

あさ　詳しい事は、跡であなたに。

三吉　して、又どこへ。

あさ　サ、觀音様へ。

三吉　ヤ。

あさ　お主の代參。

ト門口へ出る。

三吉　どうやら様子の。

ト續いて出ようとする。おあさ、外よりシヤンと閉す。この途端に鴨居に上げし脇差、程よき所へ落ち

ろ。おあさ、手早く取上げ

あさ　天より、わたしへ。

三吉　どうしたと。

ト また出かゝるを、求馬とめる。おあさ、ツカ〳〵と花道へ行き、鯉口抜きかけ、キッとなつて

あさ　もし捕はれて、心掛りは。

ト 腕の彫り物へ思ひ入れある。

三吉　ヤ。

ト 木の頭。おあさ、一腰をシヤンと納める。これをキザミにて、拍子　幕

おあさ、花道に殘り、向うを見てキッと思ひ入れ。双盤になり、氣を替へ、向うへ走り入る。この鳴り物にてツナギ。引返し。

本舞臺、淺黄幕。正面に橋場の渡しと書いたる傍示杙。稻叢、蘆の茂りし土手。鳴り物、禪のツトメにて引返して、幕明く。

ト 向うより、賴母、上下、つまみ股立ち。下座より、勇造、同じく股立ちにて出て來り、兩方行き合

頼母　勇造どの、お船の用意、手番ひ萬端よろしくござるかな。

勇造　谷澤どのゝお指圖の通り、先達てより船は殘らず、この河岸に用意いたさせてござる。最早姫君には、お立ちでござるかな。

頼母　知らるる通り今日は、この木母寺に於て、御連歌のお催ふし、殊更、當時、殿のお心に叶ひしお柳の方、これとてもお相手にと、上よりのお指圖、勇造どの、なんと、心憎き事どもではござらぬか。

勇造　お云やる通り、廣元公より大殿へ、御縁談の姫君、今以て御祝言なきは、お柳の方と望月、上たる姫君さまと御同席の儀も、我れ〳〵どもは心外に存ずるて。して、御歸殿の砌り、淺茅ヶ原へお立寄りの儀は、御延引になりましたかな。

頼母　木母寺にて餘程の手間どり、殊さら雨空と申し、夜に入りましては如何と存じ、拙者たつてお止め申し、これより直さま、急ぎ御歸館、最早姫君お立ちでござれば、先觸れの爲、參つてござる。
どうやら降り出しましてござる。

勇造　左樣でござる。夜に入りましては、大雨と見えまする。


お浅
豊国画

ト向うを見て兩人、思ひ入れ。三味線入り、禪のツトメになり、向うより丹造、上下大小にて、お先を拂ひ、紅梅姫、姫の拵らへ。麻上下の侍ひ、長柄をさしかけ、吾妻、千早、皐月、常夏、練りの帽子奥女中の拵らへ。嘉藤次、曾平太。町山、十德の茶道。その外供廻り大勢、附き出て來り、舞臺へ來る。賴母、こなしあつて

賴母　姫君樣には、最早御歸館遊ばされまするか。

勇造　拙者儀は、先刻よりお船の拵らへ、用意いたしてござりまする。

丹造　勇造どのには、御苦勞千萬。夜に入つては隅田の流れも一しほなれど、今宵の大雨計り難く、姫君樣へ、お立ちの儀は、お急ぎあるやう、お願ひ申してござりまする。

賴母　イザ、御出行

三人　あられませう。

ト紅梅姫、思ひ入れあつて

紅梅　聞きしにまさる隅田の風景、殊にこの程、殿樣へお願ひ申して、自らは、尼になりたきこの身の願ひ。申さば東の名殘りと存じ、思ひ付いたる今日の催ふし、この身にかゝる村雨も、思うて見れば、雨に柳の揉まるゝ道理、お柳の方の

ト思ひ入れ。

其方達もさぞかし、心遣ひであらうの。

吾妻　有り難い姫君様の御意。さりながら、世を味氣なう思し召し、御剃髪の儀も、仰せ出されてはござりませうが、マア／＼何事も、いま暫らくの御辛抱。

千早　其うちには又、殿様のお心もお直りなされ、御祝言のお取急ぎもござりませう。何を申すも只今では、御前さまには、申して見ませうならば、打續きたる春雨に、あうた櫻は、お姫様と同じ事、花の盛りを御覽もなう。

皐月　その、お心のつれない殿様、それを嫉みのお心もなう、お部屋様との御同席、わたしらとても、心の安堵。

丹造　これはしたり、女中方、左樣な噂は、申さぬ儀でござる。イヤ又、今日は一しほのお眺めでござりました。

皐月　左樣でござります。花は散りても葉櫻や、澤邊に咲いた杜若、花壇の牡丹、夏菊も

千早　今を盛りのその中へ、狂ふ胡蝶の又一しほ、空は五月の時鳥、水鷄の聲も珍らしう。

常夏　田植女の一節も、在所めかしてこれも一興、ナウ、皆さん。

吾妻　さうぢやわいなア。わたしらまでも、今日のお供を樂しみに。

町山　お茶道仲間の町山も、誠に今日は、命の洗濯仕つた。

常夏　お立ちの、お觸れと承り、本意なう存じ、お附きの我れ〳〵。

千早　踏みも習はぬ、徒歩路の御歩行、姫君樣には、さぞやしんどう。

皆々　思し召しませう。

紅梅　イヤナウ、館の内は庭前を、歩行するより外もなう、それに引かへ今日の遊行、自らは心に叶うて、この上もなきよい慰み。して、お柳の方には、まだお寺に殘つてかいなう。

丹造　御意でござります。お部屋樣には、御連歌の品々を、御持參あつてお後より。

勇造　殊に、お二方にては、船中も如何と存じ、姫君樣のお船より、先へ渡しまするやう、申しつけ置きましたでござります。

賴母　兎やかう申す其うちに、大雨にならば路次の程も如何。少しも早う。

紅梅　皆の者、早う供しや。

一同　ハア〳〵。

丹造　お立ち〳〵。船中、心附けませうぞ。

ト暮れ六ツの鐘。禪のツトメにて、俄雨の思ひ入れ。皆々下座へ入る。丹造、殘り

丹造　コリヤ／＼、お提灯を附けぬか／＼。お提灯／＼。

ト呼びゐる。向うより、釣り臺を擔ぎ、此うちに、赤合羽、菅笠、箱提灯入れてあり、傳助、權藤次、中間にて、これを擔ぎ、一人の中間、醉ひたる體にて、菊蝶の紋附きの提灯をともし、よろしく出て來り

權藤　ハイ／＼、お提灯／＼。

丹藏　灯をつけい／＼。

權藤　畏まりました。

ト提灯を開く。殘らず菊蝶の紋附きなり。

丹造　これはしたり、こりやコレ皆、お柳の方の御紋ぢやの。

權藤　左樣でござります。皆お部屋樣のお提灯でござります。

丹造　姫君樣のお提灯は、なぜ持ち參らぬ。

傳助　イエ／＼、私し共は、お部屋樣のお道具へ廻りました。

丹造　たわけ面め、姫君のお道具は如何いたした。

傳助　只今、後から參りまする。

丹造　後からでは濟まぬ。

　　ト叱りつける。町山、駈け出で

町山　サア〳〵、お提灯〳〵。

丹造　これはしたり、殘らずお部屋のお紋附きぢや。マア〳〵、是非がない。マア、何なりと、灯をつけい〳〵。

町山　マア〳〵、なんでも、早くさつしやい〳〵。エヽ、小者どもと申す者は。

ト皆々手傳ひ、菊蝶の紋附きの提灯へ灯をつける。此うち始終禪のツトメ、雨車の音。向うよりおあさ、件の一腰を差して、身輕に拵らへ、糸立てをかむり、出て來り、花道にて窺ひ居る。三人の中間、提灯の灯をつける。

丹造　サア〳〵、灯がついたら、早くお船へ、參らぬか〳〵。

權藤　ハイ〳〵。ソレ、やらかせ〳〵。

町山　サア〳〵、急げ〳〵。

ト皆々うろたへ、釣り臺を捨てて、町山、丹造も急いで下座へ入る。中間一人、紋付きの提灯を持ち、

ト醉うたる體にて、合羽を着て居る。此うち、捨ぜりふにておあさ、舞臺へ窺ひ寄つて

あさ　すりや、あの船がお家を亂す、兼ねて聞いたるお御とやら。俄の雨を幸ひに

ト中間が持つたる提灯へ手をかける。

中間　アヽコレ、何をする。

ト立ちかゝるを、おあさ、立廻り、中間が赤合羽を着て、笠をかむる。此うち始終立廻りの仕組みよろしく、中間またかゝるを、提灯を奪ひ取り、一つ當てる。中間、見事に水へ落ちる。おあさ、思ひ入れあつて走り入る。向うより赤合羽の供二人、丁子車の紋付きの提灯を二張ともし、赤合羽の陸尺、女乘り物を擔ぎ、出て來り、下座より、丹造、傘下駄にて、出迎へる。

丹造　お駕籠の內は、お部屋樣か。

侍ひ　左樣でござります。

ト丹造、駕籠へ差寄り

丹造　これは〳〵、俄の雨ゆゑ、不調法千萬。姬君のお提灯が遲なはりしゆゑ、あなたのお提灯にて、只今お供仕つて居りまする。誠に不調法千萬、幾重にも御容赦を願ひまする。折惡う俄の大雨、申し譯もない儀でござりまする。サア〳〵、急ぎませうぞ〳〵。

ト禪のツトメに雨車にて、この人數、下座へ入る。これにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う打抜き、隅田川の景色。正面、高土手、蘆間堤の體。下の方、茂りし蘆間、誂らへの道具。禪のツトメにて、道具、納まる。

ト波手摺りの上へ誂らへの渡し船、これに紅梅姫、立ち身、後より、丹造、件の長柄を差しかけ居る曾平太、嘉藤次、蛇の目の傘をさし扣へ、赤合羽、丸傘の中間、二人、菊蝶の紋付いたる箱提灯を差出し、簑笠の船頭、棹をさして、船を引出す。此うち、風の音、時の鐘、雨車。空には時鳥の聲。船はよき所まで押出す。紅梅姫、思ひ入れあつて空を眺め、

紅梅　五月闇、覺束なきを時鳥、啼くなる聲のいとど物憂き。

ト思ひ入れ。合ひ方變る。紅梅姫、こなしあつて

隅田川原の大空に、聲かしましく聞ゆるは、冥土の鳥と聞くからに、ハテ、何とやら。

ト此の時、また水中より鷗、大分立つて、虚空へ上がる。紅梅姫、これに目をつけ

又も流れに羽音して、一度に立ちし都鳥、歸雁列を亂すの時、正しく野邊に伏勢ありと、譬へもあれば。

ト思ひ入れ。この時、提灯を持ちし赤合羽の中間、窺ひ寄つて、拔くと其まゝ紅梅姫を刺し通す。皆皆立ちかゝるを突きのけ、紅梅姫を小脇に抱へし體にて、水中へ飛び込む。二人の腰元、丹造もかゝると、立廻りあつて、川へ打込む。矢張り、禪のツトメ。これより、バタ／＼の人音。赤合羽の中間大勢、菊蝶の紋付いたる提灯を持つて

大勢　狼藉もの／＼。

ト舞臺を立ち騷ぐ。向う打拔き、橋場の方にも子役大勢、簑赤合羽にて、丁子車の箱提灯、小さく仕立てたるを持ち、狼藉もの／＼と立騷いで通る。よきキツカケにて、知らせにつき、本雨サツと降り來る。下の方に物音して、蘆間を掻き分け、おあさ、繩襷、身輕に出立ちたる體。姫の切り首を抱へ、拔き身を持つて、窺ひ出る。上の方より、簑笠の船頭、件の渡し船に棹して乘りつける。おあさ、首を抱へ、向うへ行かうとする。揚げ幕にて、アリヤ／＼の聲。これにて立歸り、上の方へ來る。此うち、くらがりの仕組み。船頭、棹にて、おあさを引寄せんとする。おあさ、切りつける。よき立廻りの後、簑笠ぬけて、帶刀、鉢かつら、上下、高股立ちの體。首は立廻りのうち帶刀の手へ渡り、よき時分に空へ月を引出す。このあかりにて帶刀、首をかざして、ニッコリ思ひ入れ。これを木の頭、おあさ、捨てある簑をかむり、顏を隱す。これをキザミにて拍子

幕

第一番目五建目　　谷中螢澤の場

役名‖‖傾城、藤屋吾妻。口入れ、雀屋お百。道具屋、元八。同、專平。同、藤七。下女、お松實ハ道房娘濱町。鳥居又助。木屋辰五郎實ハ合邦太郎。

本舞臺、三間の間、谷中螢澤の借り寮。左右、建仁寺垣。上の方に四つ目垣、下草、見越しの松の樹手水鉢、誂らへの枝折り門。門柱に大坂木屋辰五郎と云ふ表札を打ち、正面は障子屋體。爰に吾妻、大阪おやまの髪つき、扱帶の形の上へ前垂れ。お百、桂庵の女房にて、俎の上へ糊つけ物を置き、二人とも槌を持ち、砧を打つて居る。元八、專平、藤七、道具屋の拵らへにて、詰めかけて居る。流行り唄、砧の音にて幕明く。

元八　モシ〳〵、旦那にお目にかゝりたうござりまする。

專平　お留守でござりますか〳〵。

お百　イエ〳〵、お內にお出でなされまする。あなたはこの間御眼病ゆゑ、お逢ひなさんす事ではござりますまいぞえ。

三人　エヽ、左様なら御新造樣に、お目にかゝりませう。
吾妻　サア、わたしや大阪の新町から、辰五郎さんと連れ立つて參つたゆゑ、なんの譯も知らぬわいなア。
三人　番頭は、御他行かな。
お百　イエ〳〵、まだ番頭さまも手代衆も、お下りでござんせぬゆゑ、お內は御不自由なと、わたしがお話し申し、王子の在から、水仕の奉公人をナ。
吾妻　このお方が、よい女子を世話して下さんしたゆゑ、それは〳〵わたしらが氣休め。在所者に似合はぬ、よう働らいてぢやわいな。
元八　エヽ、あの女中は王子の生れかえ。それにしては、機轉が利いて、よく働らきます。わしらが參つたも、外の事でもござりませぬ。大阪で評判の木屋の辰五郎さま、江戸見物にお出でなされて、この螢澤の寮をお借りなされてお出でと承り
藤七　道具屋どもが申し合せ、持ち傳へましたる代物、木屋の旦那にお目にかけ、鑑定を付けてもらひませうと、持つて參つた吳道子の雲龍。
專平　漢の武帝の、鯉魚の一軸、達磨大師の如意ぢやと申しますゐが、旦那のお目利を願ひませうと、この間持つて參つて、あの女中衆に賴みましたが、今もつて埒が明き申しませぬ。どうぞ今日は

持つて歸りたうございます。

藤七　旦那へ、この由

三人　お取次をお頼み申します。

吾妻　そんなら、アノまつが存じてゐやらう程に、歸りを待つて、問うて行かんせいなア。

お百　買ひ物に參つたとの事。私しもお内へ肝煎りして、どうぞ早う請け狀をしてやりたいと、宿書も
持つて參りました。モシ、御新造さま、よろしうお願ひ申しまする。

元八　左樣なら、女中衆の歸りを待ちませうか。

藤七　さうしませう／＼。

トてんつゝになり、砧の音にて、向うより芋賣り、盤臺の荷を擔ぎ、呼びかけて來る。跡よりおまつ田舎者下女の拵らへ、前垂れがけにて、安下駄を履き、岡持ちの豆腐を下げ、襟へ見世開きの團扇を差し、百茶の袋と大根を割掛けにして肩へ掛け、火口殼を帶へ差し、鬢つけ油と楊枝齒磨、附木を袂へ入れ、醬油徳利を提げ出て來る。

芋賣　芋々。

まつ　芋屋さん／＼。

芋賣　アイ、呼びなさつたか。
まつ　壹升、なんぼぢやえ。
芋賣　三十六文、一升量りやせうか。
まつ　もそつと引けぬかえ。
芋賣　ナニ、掛け値は云ひやせぬ。
まつ　そんなら、半分量つておくれ。
芋賣　おいらは、量りがいゝね。
　　　ト桝にて半分量る。おまつ、前垂れを擴げ、これを受けて
まつ　芋屋さん、袂にお錢がある。取つておくれ。
芋賣　アイ〳〵。
　　　トおまつの袂より、はした錢を出して、思ひ入れあり
　　モシ、十八文取りやした。
　　　トまた錢を袂へ入れる。
まつ　アイ、お世話ぢやの。

芋賣　また明日來やせう。芋々々。

　トてんつゝにて、芋屋、揚げ幕へ入る。おまつ、門口へ來て

まつ　ハイ、只今戻りました。

吾妻　まつ、歸りやつたか。

まつ　ハイ〳〵、皆買うて參りました。

お百　何やら大分、買うてござんしたの。

まつ　オヤ、雀屋のおかみさん、お出でか。

お百　お前の宿書を、持つて來たよ。

まつ　アイ、それはお忝なうござります。モシ〳〵、御新造樣え、何もかも買うて參りました。先づ旦那さんのお好きなお豆腐、醤油も隨分よい所を。火口殼がこれで八文。明日のお菜は練馬の大根。お茶が一斤、附木が一把に、御新造樣の洗ひ粉、鬢つけ、旦那のお誂らへの楊枝齒磨。先づあらましはこの通り。爰に一つ私しが、よい働らきを致しましたわいなア。

吾妻　そりやマア、こなさん、どういふ働らきぢやえ。

まつ　聞いておくれ。買ひ物かひに參つたところ、谷中町に幸ひ、店開きがござんすゆゑ、御覽じませ、

團扇の景物二本まで、取つて參りました。御新造樣へ私しがお土產、こればかりが、今日の儲けでござります。

ト品々を出す。

お百　そりや、よう心が附いたわいの。

吾妻　して、お藥は、取つて來やつたか。

まつ　ハイ、それが肝心でござりまする。お藥は卽ち爰に。

ト袱紗に包みし疊紙を二つ出し

これは、旦那樣、此方はお前樣。兩方とも、生姜は一へぎ。サア／＼、仕掛けませう。

ト七輪に鍋、火鉢へ土瓶、兩方の藥を仕掛ける思ひ入れ

元八　コレ／＼、この間旦那へ願うた、お目利の儀は、どうでござりまする。御覽じて下さりましたか。

まつ　サア、その事でござんす。お聞きであらうが、旦那樣は眼病。シタガ、この間は餘程、お心よいと仰しやつて、あの御道具も御覽じた樣子。お道具好きなあなたゆゑ、殘らず買うて置かうと仰しやりました。さう心得てお出でなさりませ。

元八　エヽ、皆買はうと仰しやりまするか。それは有り難い。
專平　イヤ又、どうでも木屋の辰五郎さま程はあつて、大氣な旦那様ぢやわいの。
藤七　イヤ、待たつしやれ〳〵。わしが持つて來たのは、お目利をお頼み申しに來ましたを、皆買うて置かうとは、こりやどうも、合點がゆきませぬわいの。
元八　成る程、さう云はつしやれば、そんなものぢや。大分限でも、旅掛けの旦那の事。左様なら斯うじませう。代金の拂ひを願ひませう。
專平　それがようござる。モシ〳〵、女中衆々々、左様なら斯う申して下され。殘らずお召しなされまするなら、代金をお貰ひ申したうござりますると、旦那へこの段を。
まつ　これはしたり、モシ、其やうな事が、此方の旦那様に申されませうかいの。大阪のお宅は大分限、榮耀に榮耀をなされ盡きて、あの吾妻さまをお連れなされて、お下りなされた、東下りの旦那様、其やうな事申しますると、私しが叱られまするわいな。
專平　目利を頼みに持つて來て、今では餅に搗きまするワ。
まつ　モシ〳〵、なんにもお前様方、お案じなさる事はござりませぬ。旦那様が仰しやるには、珍らしい道具ぢやによつて、殘らずわしが求める、必らず留めて置いてくれ、金はなんぼうでも大事な

い、決して戻すな、戻すとその衆が、外へ賣らうも知れぬ、取りに見えても渡す事はならぬ。もし渡して遣ると、われを又その分にはして置かぬと、嚴しく仰しやりましたゆゑ、どうあつても私しが、お返し申す事はなりませぬ。それとも持つて行かうと仰しやりますならば

ト下の方より古葛籠、鏡櫛道具を重たさうに持ち出し

こりや、私しが着替へでござります。これなりとお持ちなされまして、どうぞあの品を、置いて下さりませ。ハイ、どうぞお願ひ申しまするわいな。

トいろ／＼頼む。三人、思ひ入れあつて

元八　イヤ、これは迷惑な事ぢや。古物の道具の目利を頼む内の、おさんどのから、着替への葛籠を持つて行けまい。ナウ、お二人。

藤七　左やうサ、どうやらそれでは、借錢乞ひにでも來たやうでござる。全く掛取ではござらぬ。

專平　もう一兩日置いて行けと云はるゝなら、置いて行つてもよいではござらぬか。

元八　サア、わしもさう思ひますが、コレ、女中、疑ふではござらぬが、その道具は、お内にござるかな。

まつ　隨分私しが、大事に仕舞うて置きまする。モン、御覽じませ。

ト白木の掛け物箱三つ取出し、蓋を開けて

これが慥かに雲に龍、此方は鯉の附いた掛け物。これはアノ、禪坊さんの持ちなさんす物でござりました。

トいろ〳〵袱紗のまゝ見せる。

元八　左樣。その三品でござる。皆お内にあるからは、ナウ、お二人。

兩人　別條もござりますまい。置いて行きませう。

元八　コレ〳〵、女中、こなたが今のやうに云つては、旦那に叱られると云ふから、マア〳〵置いて行きます。必らず其方の着類を代りに持つて行かうなぞと、そんな事を云ひには來ませぬ。ハテ、借錢乞ひではござらぬわいの。

まつ　ハイ〳〵、それは有り難うござります。一兩日うちにお出でなされませ。

三人　さうしませう〳〵。

まつ　又、よいお道具がござりましたなら、何なりと持つてお出でなさりませ。

元八　珍らしい物が出ましたなら、お目利願ひに持つて參りますて。イヤ、珍らしい物と云へば、コレ聞かしやつたか。此やうな珍らしい物が出ましたの。

ト木綿風呂敷より、古掛け物に描きし姫の繪姿を出し

モシ、お慰みに、御覽じませ。

ト吾妻へ渡す。

吾妻　こりや何ぢやえ。娘の繪ぢやござんせぬかえ。

元八　左樣でござりまする。何か公卿の娘の、お尋ね者ぢやと、觸れが廻りました。

お百　公卿衆の娘のお尋ね者とは、こりや珍らしい者でござりまする。

まつ　珍らしい物ならば、旦那にお話し申しまする。モシ、お前さん、今度お出でなされるまで、私しにお貸しなさりませぬか。

元八　ハテ、怪しからぬ物を借りたがる女中ぢや。ようござる、置いてゆきませう。

まつ　ハイ、キツとお借り申しました。

專平　モシ、まだ珍らしい物がござります。

ト白木の筥より結構なる兩天の簪を出し

これは、お屋敷方からお拂ひに出ましたが、御新造樣、お求めなさりませぬか。

吾妻　わたしらには、似合はぬ代物。コレ、まつや、わが身買やらんか。

お百　こりや、おまつどのには打ちつけぢやわいの。ホヽヽヽ。
まつ　又、嬲らしやんすかいの。
藤七　コレ、女中、重ねて參りますまで、お邪魔ながらこれも、一緒に置いて下され。
まつ　アイ〳〵、一つに致して置きまするぞえ。
專平　サア〳〵、暮れぬうち歸りませう。
元八　コレ、女中、一兩日のうちに來ますぞや。
まつ　左樣なさりませ。
三人　御新造樣、おやかましうございました。
　　トてんつゝになり、三人とも向うへ入る。
吾妻　コレ、まつや、そりやアノこの間、噂のあつた、多賀のお屋敷のお姬樣とやらの、繪姿ぢやないかや。
お百　イエ〳〵、ありや、隅田川で騷動のあつたと云ふ話し。それとは違うて居りませう。それでおまつどの、こなさん、あのマア金高なお道具を預かつて置いて、麁末にしなさんすなえ。
まつ　アイ〳〵、隨分大事に仕舞うて置きまするわいな。

　　　　トこの時、藥鍋、煮えこぼれ、七輪の灰、パッと立つ。おまつうろたへ

これはしたり、お藥が煮えこぼれまする。併し、藥のこぼるゝとは、御病人には、善い方ぢやけな。

南無三、　　ト門口へ手桶を持つて出て、干し物を見つけ

折角乾かした洗濯物、濕りが來たであらう。お芋の皮も剝かずばなるまい。さて〱マア、日が長いかして、一倍忙がしう思はるわいの。ホヽヽヽ。

　　　　トあちこち片附ける。此うち障子の內にて、辰五郎、手を打つ。

お百　アレ、旦那がお呼びなさんすぞえ。

まつ　ハイ〱。畏まりました。

　　　　ト合ひ方になり、障子を明ける。內に辰五郎、中月代眼病の體にて、木地の脇息に凭れ居る。吾妻、差寄り

吾妻　モシ、辰五郎さん、お前のお眼の痛みは、今日はどうでござんすえ。

辰五　サア、藥の加減か、今日は痛みも、大きによいぢや。してマア、風氣ぢやと云やつたが、其方も藥を立てつけて、服むがよいぞや。

吾妻　アイ、下女のまつに云ひつけて、お薬も煎じて居りまする。

まつ　ハイ〳〵、只今、上げませう。

お百　モシ、旦那様、お續きなされまして、お眼はよろしごうざりまするか。私しは今日、日柄もようござりまするから、下女のおまつどのゝ宿書を持つてあがりました。どうぞお取極めの儀を、お願ひ申しまする。

辰五　オヽ、こりやこの間、あの下女を世話して下された內儀か。よい女子を寄越して下され、それはそれは、よう働らきまするわいの。

お百　それは〳〵、マア、嬉しう存じまする。おまつどの、氣を付けて勤めなさんせ。なんぞ用はないかや。

まつ　アイ、今度來なさんす時に、木綿糸、四五本買うて下さんせ。

お百　アイ〳〵、晩に來る時、買うて來やんせう。ハイ、旦那様、御新造様、お暇申しませう。

吾妻　マア、よいわいな。話して行きなんせ。

お百　ハイ〳〵、晩には直に參じまする。

ト出ようとする。

まつ　アヽモシ、待ちなさんせ。灯をつけてから、歸つて下さんせ。

ト灯をともし、行燈を出し

サア、もうようござんす。

お百　ハテ、奇特な子ではあるぞ。

ト唄、暮れ六ツの鐘。お百、足早に向うへ入る。

辰五　コリヤ、まつよ、そちや道具屋どもの手前から聞けば、道具を預かつて、わしが買はうと申したと、今も云うたが、いつわしが其やうな事申した。

まつ　ハイ、お難かしからうと存じまして。

トもぢ〳〵する。

辰五　そのマア預かつた物は、どこにあるのぢや。

吾妻　アイ、そりや爰に箱入りの儘。

ト件の箱三ツを、辰五郎の側へ持つて行く。おまつ、驚ろき

まつ　アヽモシ、それは。

辰五　ハテ、道具屋どもが、大事な品と聞いて居つたが、武帝の一軸、吳道子の雲龍、達磨大師の如意

なぞと申しては、珍らしい道具ぢやが、それをマア、わしにも云はいで、留めて置くとは。

ト云ひながら、袱紗を取る。一軸は、擂粉木を包んであり、辰五郎探り見て

コレ、吾妻、こりや一軸ではないと見えるぞや。

吾妻　アイ、そりや、お廻しぢやわいな。

辰五　成る程、擂粉木ぢや。此方の軸物は。

ト袱紗を取る。

吾妻　それも火吹竹でござりまする。

辰五　ヤヽヽヽ。この如意はどうぞや。

吾妻　ホヽヽヽ。そりや飯杓子ぢやわいな。

ト此うち、おまつ、術なき思ひ入れ。

辰五　コリヤ、まつよ、爰へ來い〳〵。

まつ　ハイ〳〵。

ト怖々行く。

辰五　來いと云ふに。コリヤ〳〵、マア、われは此やうな物を、なぜ受取つて置き居つた。たはけ面め

が。おれが眼病幸ひに、なぜ断りを云うて返してはしまひ居らぬ。こりや、騙りに會うたのぢや〳〵。

吾妻　こりや、云ひなさんすが尤も。なぜマア此やうな物を、ウカ〳〵と受取つて置きやつた。ほんに賢こう見えても、流石在所の生れぢやわいな。

辰五　サア〳〵、早う先刻の道具屋を呼んで來て、返してしまへ〳〵。イヤ、たはけもたはけ、あんまりな奴ぢや。

まつ　ハイ〳〵、そのマア品々、道具屋へ遣はしたとて、どうして受取つて參りませう。

辰五　そりや、なぜ〳〵。

まつ　申し譯ではござりませぬが、ようお聞きなされて下さりませ。私しが此お内へ、お目見得に上がりましたその日から、お前樣方へお氣の毒ゆゑ、道具屋衆が持つて見え、目利を賴むと申した品、ボツ〳〵出して預け物。それから。毎日、御覽じたならお返しなされと云ふを、やう〳〵只今まで延して置きましたは、私しが惡智惠ゆゑ。モシ、お堪忍なされて下さりませ。

辰五　ヤ、なんと云ふ。道具屋どもが目利を賴むと、持つて來た品は、そんなら預け物にして、その金で。

まつ　ハイ、お内を賄うて居りました。どうぞ御免なされて下さりませ。

辰五　さう聞いては、あの者どもは、騙りではない。此方が騙りぢや。コレ、吾妻、あの下女に、日々賄ひを遣つたか。

吾妻　イエ〳〵、お前が遣らしやんしたであらうと思うて、わたしや一向存じませぬわいな。

辰五　アヽ、知らぬとは、如何に女郎の上がりぢやとて、あまり物事に……イヤ、さう聞いては、まつめが尤も。わしは眼病、家内の事も見え分かず、殊には假宅、何ともなう不案内。その上ソレ、醫者どのに按摩取り、肴屋が參りました、買うて置け、酒も銘酒を取りにやれ、はんぞう薪、近所の附合ひ、それも渡さず身上がりして主人を過し、奉公するとは、成る程こりや、徳用な奉公人ぢや。イカサマ、爰等はお江戸の有り難さぢや。

吾妻　あれが云やるを聞いて、わたしや云ひ譯もござんせぬわいなア。

辰五　如何に女郎ぢやというて、あまり意氣地がなうて……コレ、まつよ、わしらが悪かつた。氣にさへまいぞ。ハテマア、機轉の利いた、女子ぢやな。

まつ　ハイ〳〵。御免遊ばされて下さりませ〳〵。

トうぢ〳〵する。

辰五　これはしたり、てまへが悪いのではない。此方から詫びねばならぬわい。コレ、どこに居る〱。

ト探り〱出て、おまつを探す。

吾妻　まつは、爰に居りまするわいなア。

ト手を取つて連れて來る。

辰五　ゴリヤ〱、まつよ、モウ〱、われが悪いと云はぬ。みな此方が悪かつたわいの。コレ、吾妻、して、まつに給金でも貸しやつたか。

吾妻　イエ〱、給金は要りませぬと、斷わりばつかり申しまするわいなア。

辰五　イヤ、猶々安い奉公人ぢや。

ト奥にて九ツの時計鳴る。

辰五　アヽ、もう五つぢやな。夜は短かし、コリヤ、まつよ。わが身もモウ、寐ぬか〱。

まつ　ハイ、夜なべ仕事に、あなたのお寐間着を、拵らへて置きませう。

吾妻　なんのマア、草臥れたであらう。サア、早う寐やいなう。

まつ　ハイ〱、お先へ臥りましても、ようござりませうか。

吾妻　大事ない、寐たがよいわいなう。

まつ　左様なら、御免なされて下さりませ。旦那様、お先へ臥るでござります。

ト下の方の古葛籠の上より、寝間着、茣蓙と布團、木枕を取出し、誂らへの二枚折りの屏風を立て、寝支度する。

吾妻　コレ、わが身は、蚊帳は吊らずかや。

まつ　イエ〳〵、蚊は居りませぬわいなア。

吾妻　でも、きつい蚊ぢや。

まつ　なんのマア、ありや皆、螢でござりまするわいなア。お先へ臥りまする。

ト思ひ入れ。

イヤ〳〵、肝心の物を忘れた。

トよき所より割り木を一把持ち來る。

吾妻　わが身、そりや割り木ぢやないか。

まつ　左様でござります。何を申しても、用心が惡うござりまするから、枕元へ割り木を置きまして、もし泥坊が入りまするど、この木で、したたか喰はしてやりまする。

吾妻　それならば、一本あればよいぢやないか。

まつ　サア、そこでござりまする。もし向うの奴が、この木を引ツたくりまするど、また後から出しまする。それを取り居ると、また出しまする。今度も取り居ると、また出しまする。

ト仕方して見せる

辰五　ハテ、用心深い下女めだわやい。

その用心に、貯へ置きまする。

ト唄、時の鐘にて、蒲團をかむり、屛風を引廻す。

辰五　もう、わしも寐所へ行かうか。

吾妻　サア、此方ぢやぞえ。

ト手を引いて二重へ上がり

モシ、お前、お藥わえ。

辰五　服んで、寐ようか。

吾妻　待ちなさんせ。

ト下りて來り、藥茶碗を持つて來り

ハイ、お藥。

ト渡す。

辰五　アヽコレ、悪い時、わしが眼病。知りやる通り、大阪の住居もならぬ辰五郎、其方を連れて、この東へ、便つて來る事は來たけれど、何を云うても不自由な住居。今日らあたりは大阪の、手代どもの所から、何か便りがある筈ぢや。

吾妻　さうでござんす。思うて見れば海山越えて、同じその名の東路へ、お前と一緒に旅の空。いつぞやもお話し申したわたしが身の上、幼ない時に人手に渡り、兄ぢやといへど心得ぬ、又助といふ人が、連れてわたしを大阪へ、勤め奉公にやつたわいな。

辰五　大方そりや、兄といへど、誘拐かした奴ぢや知れぬ。

吾妻　モシ、辰五郎さん、お前、アノ、大阪にござんす時、關白様とやらいふ、公卿様のお姫様と、云ひ號けなさんして、それがお家の亂れとなつて。

辰五　木屋の辰五郎は、家財を沒收、諸道具も封印つけられ、大阪の住居もならず、町人なれども大家ゆゑ、關白道房さまが娘をやらうと、わしへの約束、云ひ號けした、姫のその名も濱町どの。その女子の顏も知らず、公卿と町家の縁組みを、お咎めあつて、道房さまは流罪。氣の毒な事ぢやわいの。

ト この時、おまつ、寢相の惡きこなし。

吾妻 サ、そのお姫様と云ひ號けのお前ゆゑ、斯う睦まじう人目に見えても、それからフッツリ、一所寐なさんせぬのは、大方云ひ號けのお方へ立つる

辰五 これはしたり、知りやる通りの眼病ゆゑ、殊に家も立つやうに、この頃女子は斷ち物にしたわいの。

ト この時

まつ ソレ、鼠が肴を咬へて。

ト 寢言を云ふ。兩人、恟りして

辰五 ヤ、どこへ鼠めが。

ト あたりへ思ひ入れあり

なんの事ぢや、下女めが寐言か。ハテ、寐相の惡い。

ト 唄、時の鐘、蛙の聲、簾下りる。この唄にて、向うより又助、頬冠り、一本差しにて、足早に出て來る。花道にて

又助 あの浪人の求馬を煽てて、一番屋敷の騷動を、ぶツくりかけたその晩に、橋場の渡しで何者か、

船へ切り込み、その時に、祝言のない大江の姫を、まだ實否はわからぬが、お大切だとその日から、姫は御不例。どうでもこいつは、やらかされたと見えるわえ。

ト思ひ入れ。

いつがいつまで、あの屋敷に奉公したとて、高が若黨。一足飛びに音締めをきめ、これからソロソロ夜稼ぎと、最初の手見せが大阪から、旅宿と聞いたこの寮は、辰五郎といふ大分限。先づ爰らを當つて見よう。

ト窺ひ〳〵、門口へ來り、門の脇の生垣を、白刃にてこぢる。この時、おまつ、何やら寐言を云ふゆゑ、又助、外より窺ふ事。よろしくあつて、垣を破り内へ入り、コソ〳〵と見廻して歩き、おまつの古葛籠を見附け、よき所へ持ち出す。この時、おまつ、足を踏まれ、目の覺めたる思ひ入れ。又助奥の方へ行かうとする。おまつ、これを見つけ、ソツと起きて、割り木を抱へ、一本持つて、趾けて歩く。又助、古葛籠を擔がうとするゆゑ

まつ　泥坊々々。

ト聲を立てる。又助、恟りして、窺ひ見て

又助　こいつ、女だな。聲を立てると、ぶツた切るぞ。

まつ　それでも、こなた、そりやわしが葛籠ぢやぞえ。
又助　それをおれが知るものか。入つたからにやァ持つてゆくワ。
まつ　太い事を云ふ人ぢや。旦那の物は格別、奉公人の物を取るとは、あんまり太い人ぢや。
又助　べら坊め、太くない泥坊があるものか。コレ、こりやァわれが葛籠か。飯炊きの雜物なら、高の知れた垢付き木綿、太織の帶が當り前だ。そんな物は要らねえ。コレ、內の奴等が雜物は、どこにある。それを云へ。
まつ　雜物とは、なんの事だ。
又助　貴樣の事だ。殊に爰の內にやァ、好い道具があるさうだ。その在所を云へ。
まつ　わしや、知らぬものを。
又助　知らぬと吐かし居ると、ぶッた切るぞ。
　ト振り廻す。
まつ　アヽ、敎へます〳〵。コレ、そこの箱に。
　ト道具の箱へ指さす。又助、行燈を提げ、箱の蓋の書附けを見て
又助　なんだ、呉道子の雲龍、漢の武帝の鯉魚。イヤ、斯うあらうと思つた。

まつ　サア〳〵、早う持つて行きなさんせ。

ト掛け物の箱を突きつける。

又助　エヽ、待ちやアがれ。聲を立てるな。

ト蓋を明けて、袱紗を取つて

ヤア、こりやなんだ。呉道子の雲龍も、漢の武帝のも、みんな世帯道具だ。エヽ、飯炊きの女、よくも騙したな。サア、着類があらう。それを云へ。

まつ　イエ〳〵、此方の内は、何にもござんせぬ。

又助　着類も金も、無いと吐かすか。

まつ　アイ。

トこのあたりより、簾を巻き上げ、辰五郎、吾妻を押へ、窺うて居る。

又助　金も着類も、無いならば、吾妻といふ女郎が居やう。それを盗ませろ。

まつ　アイ、そのお方は、爰の内の。

辰五　そりや辰五郎の女房ぢやが、なんで又、盗人どのには、吾妻を盗みに入らしやつた。

又助　アヽ、こなさんが辰五郎どのか。そんならわしは、貴様の爲には小姑だ。こなたは盗人の小姑を

持つたよ。

辰五　ヤア、そんなら、かね〴〵吾妻の話しの

ト吾妻、思ひ入れあつて

吾妻　ヤア、お前はわたしの

又助　オヽ、兄だ〴〵。妹の吾妻、久し振りだな。われがこの頃辰五郎どのと、大阪から下つて居ると聞いたゆゑ、妹のおぬしを盗みに來た。有やうは盗人ぢやねえぞ。兄様が妹を引上げに來たのだ。

吾妻　そんならお前、兄ぢやと云うて、わたしを連れに來なんしたのかえ。

又助　さうサ。大分限でも、木屋の辰五郎、今ぢやア家も絶えたげな。いらざる公卿へ縁組み、關白どのもこなさんも、家の破滅と聞いたゆゑ、そんな天竺浪人に、妹を遣つちやア置かれぬから、連れに來た、渡してくりやれ。

辰五　イヤ、わしも大阪で、大金出して身請けした吾妻、こなたが兄でも身寄りでも、金で買うたる吾妻は滅多に。

又助　それだによつて盗むのだワ。サア、妹、兄様に盗まれろ。

ト吾妻を引立てる。吾妻、思ひ入れ。

吾妻　モシ、兄さんといへば、お前の妹のやうに聞ゆれど、よく〳〵聞けば、五つの時、お前わたしを、
誘拐かして

叉助　無駄を吐かすな。覺えは無いワ。辰五郎どの、たつて妹を渡さねば、貴樣から。

ト云ひながら

持つて行く物がある。

辰五　そりや、何を貴樣は持つて行くのぢや。

叉助　黄金の鷄。

辰五　ヤ。

叉助　唐土の玄宗皇帝の時より、日本に渡つて多賀の大領、家の重器を秘藏する、その鷄が慥かに、こなたの手にある筈だ。辰五郎さん、わしに下さい。それがならずば、吾妻を下さい。

まつ　モシ〳〵、旦那樣、鷄とやらがあるならば、早う遣つてしまひ、吾妻さんは御無用になさりませ。お藥煎じる手助けがござりませぬ。

叉助　べら坊め、うぬが自由にさせるものか。斯う見た所が、こなたはどうやら。

辰五　わしは眼病。知る人になりたいが、何を云うても皆目に

又助　見えませぬか。そいつは難儀だ。併し、わざ〳〵妹を、盜みに入つたこの兄が、素手ぢや歸らぬ。是非ともどちらか二つのうち

辰五　二つのうちとは、この吾妻、外の一つは覺えなき

吾妻　黃金とやらの鷄を。

又助　貰つて行かにや歸らねえ。是非とも返事を聞かして下さい。

辰五　折角こなたも盜人に、入つてまでの、わしへの賴み。いづれ返事を。

又助　それまで妹は。

ト引立てる。

吾妻　アヽモシ、

又助　いゝから來いと云ふに。

ト唄、時の鐘になり、又助、吾妻を引立て、辰五郎、探り〳〵入る。簾下りる。おまつ、跡を見送り

まつ　なんぢや、ハア、爰の內は、裏から泥坊が入つたと思へば、イヤ、妹をくれい、それが否なら、鷄を貰はうのと、爰の旦那は、盜人に近付があるさうな。ハテナア。

ト思ひ入れあつて

これはしたり、蒲團をかぶつて寐た所爲かして、髮も損ねて此やうに。と云うても忙しない。夜なべになりと、撫でつけて置かうか。

ト合ひ方、おまつ、下の方より櫛疊と麁末なる鏡立を出し、行燈を引寄せ、髮を撫でつけにかゝる。向うよりお百、四十八文のぶら提灯を提げ、出て來り、門明けて

お百　エヽ、まだ寐ずにかいの。

ト恂りする。

何をマアうろたへた。これまで寐なさらぬか。

まつ　アイ、わたしや今、髮を撫でつけて置かうと思つて。

お百　夜なべにかいな。蚊が居ませうに、よう精を出さんす。わたしや木綿糸を買うて來たぞえ。次手にわしが、撫でつけませう。

まつ　御慮外でござんす。

お百　大事ないわいな。

まつ　そんなら、わたしや顏を直して。

お百　オヤ〳〵、夕化粧ぢやの。

まつ　ほんに、せまじきものは、飯炊きぢやわいな。

ト獨吟になり、おまつ、鏡に向ふ。お百、立ちかゝり、髪を直す事よろしくあつて、そろ〳〵と見廻し、最前道具屋が置いて行きし花簪を取つて頭へ差す。おまつ、向ひし鏡へ映るを見つける。唄切れる。

お百　イヨ〳〵、よう似合うたわいの〳〵。どうやら色狂人のやうぢやわいの。

これはしたり、お前、悪い悪戯をしなさんすな。

まつ　また嬲らしやんすわいなう。

お百　ハイ、もう歸ります〳〵。

まつ　泊つてお出でな。

お百　亭主が待つて居ますわいな。

ト合ひ方、時の鐘になり、お百、向うへ入る。おまつ、跡を見送り

まつ　エヽ、なんぞといふと、田舍者ぢやと思うて阿房にさんす。ドレ、着る物着替へて、臥りませうか。

ト誂らへの二枚折りを引廻す。また獨吟になり、おまつ、屏風より立ち身にて半身に立ち居る事。此

うち唄。おまつ、廣振り袖、姫の形に着替へし姿、檜扇を持つて、屏風より出づる。爰にて唄一ぱいに切れる。おまつ、鏡立の側へゆき、行燈を提げて來り、我が姿を見て、思ひ入れあつて檜扇にて灯りを消す。これより誂らへの唄。おまつ、奥へ入る。知らせにつき道具廻る。

本舞臺、正面の屋體に屏風立て廻し、誂らへの枝折り戸、よき所に石燈籠、萩垣、植込み、流れに杜若、屋體の軒に、好みの螢籠を吊し、上の方に風呂釜、茶の湯道具一式飾り、丸棚の上に白木の箱載せてあり、この見得にて道具とまる。

ト矢張り唄、彈き流し、時の鐘、時鳥、蛙の聲。奥よりおまつ、出て來り、あたりを見て、丸棚の上に掛けある淺黄の大袱紗を取つて短檠へ掛け、思ひ入れにて、屏風を開く。内に辰五郎、絹の夜具蚊帳吊りかけてあり、寐入つたる體。枕元に差寄り

まつ　ハイ、御免遊ばされませ。旦那さま／＼、お起きになつて下さりませ。

ト　そろ／＼起す。辰五郎、枕を揚げ

辰五　誰れぢや／＼。吾妻か／＼。

まつ　イエ、私しでござります。

辰五　さう云ふは、下女のまつか。

まつ　左様でございます。

辰五　何しに來やつた。

まつ　ハイ、私しは今晩、日柄もようございますゆゑ、御奉公の取極め、それをお願ひ申しませうと、宿書を持つて參じました。旦那様、卽ちこれが私しの、宿書でござりまする。

ト姫の繪姿を差出す。辰五郎、探り取つて

辰五　ア丶、これが宿書か。併し、知る通り、この程の眼病、皆目に見えぬによつて、マア〳〵、わしが眼の病ひが癒つた上で

まつ　御尤もでござりまするが、お手形を致しますれば、私しは水仕の女子、お主様と家來の分ち、その前方に、一度枕を。

辰五　ヤ。

まつ　それが下女めが、兼ねての願ひ。お情受けに、これまで忍んで參りましたわいな。

辰五　すりや、なんと云やる。水仕の其方が主人のわしへ、枕を交せと申すのか。

ト此あたりより吾妻、探り〳〵窺ひ出る。

まつ　ハイ、憚りながら、どうぞ願ひを、旦那樣、お叶へなされて下さりませ。

辰五　これはしたり、ハテサテ、珍らしい事を聞くものぢや。主人の寐間へ水仕の女子が、夜這ひに來るとは新らしい趣向ぢや。わしも分限と浪花にて、呼ばれし木屋の辰五郎、今のこの身は落ちぶれて、東の空の假住居、殊に眼病、下女のおまつが姿もそれと。

まつ　御覽あつては、なんのマア、不束な水仕の私し、お肌を穢すお願ひは、厚皮面な女めぢやと、お下げすみもござりませうが、そこを私しが、旦那へお願ひ。

辰五　それ程までに云やる其方、恥をかゝすも本意でない。必らず、吾妻へ沙汰なしに。

ト探り寄つて、おまつが手を取る。おまつ、會釋の思ひ入れ。

ハテ、其方は忝ない。ようマアわしに心を通じて。

ト引寄せるとて、着物の手觸りに、思ひ入れあつて

辰五　水仕の其方が衣服の手觸り。

ト心得ぬ思ひ入れ。おまつ、その手を拂ふ。辰五郎、また寄らうとするを、吾妻、ツカツカと寄つて、辰五郎を捕へ

吾妻　コレ、辰五郎さん。

辰五　ヤ、吾妻か。そんなら様子を。

吾妻　ハイ、聞いたわいなァ。お前もマァ惡性な。水仕のまつを閨へ引込み、わたしに沙汰なしとは、よう云ひなさんしたの。あのマァ下女めも大膽な。主のある男を寐取らうとは、呆れて物が云はれぬわいなァ。道理こそ常から、心に掛けての奉公が、今といふ今解つたわいの。エヽ、茲な大膽女子め。

まつ　イエ〳〵、私しばかりぢやござりませぬ。お前様も新町の、旦那を騙した太夫職、云はば浮かれ女、遊女のあなた。

吾妻　エヽ、なめ過ぎた。水仕の身を以て、主人へ不義を云ひかける、大膽女子の惡性者、例へわたしがおやまの身であらうが、辰五郎さんの女房ぢやわいの。

まつ　左様でござりませう。女郎と下女の高下はあれど、落つれば同じ谷川の、水仕のわたしが添ひ遂けまする。それとも願ひが叶はぬ時はと、用意いたして參りました。旦那様、ハイ、あなたへ心中、お目に掛けませう。

吾妻　其方が心中見せうと云へば、わしも女子ぢや、心中見せませう。

辰五　そんなら、吾妻と水仕の下女も、心中見せうと云やつても、この眼の病ひで見られぬわし。成る

程、二人が云やる通りに、見えぬながらも心中見よう。吾妻はわしが、この腰で。

ト、探りながら一腰を吾妻に差附ける。吾妻、探り取つて

吾妻　すりや、この刃物で、わたしは心中。

まつ　アノ、わたしは用意の刃物が。

ト懐劍を出す。

辰五　して、心中は起請か、指か。

吾妻　アイ、指を切るのが

まつ　あなたへ心中。

吾妻　わたし等とても、かゝる闇夜を

まつ　照らす螢光。

辰五　ヤ。

トおまつは、軒に吊せし螢籠を、手早く取る。吾妻は丸棚の上の白木の箱を探り取つて、よき所へ置き、兩人一度に箱と螢籠の上にて、指を切る。これにて籠は切り割る。螢パッと飛びめぐる。この途端、短檠の大袱紗落ちて、明るくなる。吾妻は白木の箱を切り割る。薄ドロ〳〵にて、鷄聲を發し、

黄金の鷄、血の穢れにて、丸棚の上へ飛び去り、時を告ぐる。辰五郎、これにて目の見える體。キツとなる。草笛入りの合ひ方。

辰五　今、鷄の一聲と、共に開きし兩眼は、吾妻が心中、血汐の穢れに寶の威德。

まつ　ヤ、あなたは、お目が

吾妻　見えますか。

ト辰五郎、おまつに目を付ける。

辰五　さてこそ、おまつが、高位の姿。

まつ　今こそ明かす自らは、云ひ號けせし

吾妻　すりや、濱町さんか。

ト、驚ろく。辰五郎、吾妻が指を切りたる白刃を取つて、吾妻が首を打ち落す。おまつ、行燈に掛けたる前垂れを持つて血刀を拭ふ。合ひ方變る。

辰五　尋ね嚴しき冠者經基、それに緣組む濱町どのゝ

まつ　すりや、その首級を、自らが

辰五　似寄りの女と思ふゆゑ、連れて立退くこの吾妻、もしや其方に巡り合ひ、こなたの大事と聞く時

は、即ち吾妻は身替りと、心積りの心中。これといふのも道房卿へ、恩を謝さんず爲ばかり。さるにても貞女の其方、水仕となつて我が家へ入込み、朝夕附添ふ志し、今日の今まで、露ほども、知らで月日を徒らに、心なき身も陸奥に、生ひ立つ武骨のこの身の誤まり。

まつ　正しく、連れ添ふ御方は、御所持の黄金の鷄が、八聲を告げて鷄が啼く、東の空と思ふゆゑ、都を出でゝ遙々と、お行くへを慕ひ、在所を求め、爰ぞ正しく我が夫と、便つて附添ふ水仕の奉公。父上所持の品々まで、密かにこの地へ都より、用意いたさせ置きたりし、呉服商人肝煎りの、女子も殘らず手廻りの、腰元雜掌、譜代の侍ひ。

辰五　驚ろき入つたる其方の計らひ。女に劣りし某は、それとも知らぬこの身の眼病、浪花に住ふその砌り、町人ならぬをお察しあつて、姫を送らん道房の、深き所存も情なや、科に伏す身の痛はしく、遠流ありしも我が家の、鹿の臥床となつたるも、鎌倉武士のなせる業。その無念さやむ事なく、大義を思ふ某は、分限の暮らしと見すれども、世上の財寶我が物と、軍用集むる、當世の強盜、合邦太郎と變名して、その名を包むも一つの計略。泉の小次郎親衡も、疾より當地に入込んで、仕官を望むも、兼ねての大望。

まつ　あなたに、巡り逢ふからは、今よりしては變らぬ女夫。いづくの山林波濤なりとも、離れぬわた

しが心中に、切つた小指が、心の潔白。

辰五　夫婦は二世と云ふものゝ、今にも露顯なす時は、召捕らるゝは兼ねての覺悟。その時必らず潔よく

まつ　たとへ木の空、梟木に、かゝりや繋がる、わたしも共に。

辰五　その一言に我れも滿足、必らず共に、秘すべし〳〵。

ト兩人、思ひ入れ。奧より又助、窺ひ出で、眞中へ入り

又助　妹が敵、これから貴樣を訴人するワ。

辰五　最前見えた吾妻が兄の

又助　又助でござりますが、見りやアあなたの兩眼も、俄に癒つた樣子と云ひ、殊更聞けば、噂のある合邦太郎といふ大盜人のこの寮へ、知らず盜みに來た又助、妹を一人棒に振り、素手の孫三で歸られねえ。吾妻が代りを、見附けておれへ。

辰五　我が身の上を知つたる其方、命助けて置くからは、それが卽ち、吾妻が代り。

又助　イヤ、それぢやア不得心。吾妻が代りはこの女。

トおまつ、思ひ入れ。

まつ　すりや、濱町を吾妻どのゝ
又助　替りに貰はう。
辰五　イヤ、そりやならぬ。
又助　くれずば此まゝ二人が訴人を
　　ト行かうとする。辰五郎、留めて
辰五　吾妻が代りに、暫らくこれを。
　　ト黄金の鶏を差出す。又助、取つて
又助　この一品は。
辰五　多賀の重寶、黄金の鶏。
又助　アノ、これが。
まつ　マア、モシ、その品、彼れにお渡しあつては。
辰五　ハテ、大事ない。二人が身の上、訴人と聞いては、わしら二人が命の代り、あの一品を
まつ　お渡しなされて、この場を遁がるゝ
辰五　命が物種、又助とやら、この身の願ひ叶ふまで、われに預けた。

又助　預かりました。二つともなき寶ぞと、草を分つて尋ねる品を、手輕く渡すも器量あり、流石聞え
し合邦太郎。わしも今からこなたの手下。頭、用があるなら使ひを下さい。

辰五　見所のある又助。今からおれが手下に付くか。

又助　付きます〳〵。この上は、こなさんの願ひも叶ひ、住家知れざるその時は、持つて參つて、その
時互ひに。

辰五　大祿取りとならうも知れぬ。手放し難き品なれど、それまで預ける。

又助　預かりました。して、この後、こなたの隱れ家は。

辰五　所定めぬ今の身の上。秘文の合ひ紋、目印しに。

又助　呑み込みました。必らず首尾よく。

辰五　めでたう爰を。

又助　頭。

辰五　早く行け。

又助　合點だ。

ト時の鐘の合ひ方。又助、鷄を持ち、上の方、手水鉢の上へ上がり、竹垣を越して下座の方へ入る。

矢張り時の鐘。辰五郎、鐘を數へろ思ひ入れあつて

辰五　最早この地の住居も怪ふし。暫らく爰を、こなたも支度。

まつ　アイ。

ト立ち上がり、帶を引揚げ、身拵らへする。

辰五　アノ、コレ、支度といふわナ。

ト飯を食ふ思ひ入れをして見せろ。

まつ　飯あがるのかえ。

辰五　程が知れない。

トおまつ、膳拵らへして、辰五郎の側へ持ち行き、据ゑろ。

まつ　サア、お早うあがつて

ト辰五郎、箸を取つて飯を喰ひかゝろ。此うち向うより元八、專平、藤七、その外、捕り手の形にて窺ひ出て來り、門口へ來て窺ふ。

辰五　天氣はどうだ。

まつ　ようござんせう。

ト何心なく門の戸を明ける。捕り手、一度に十手を振り上げる。これにておまつ、門口をシヤンと締めてキツと押へ

まつ　モシ〳〵、來たぞえ。

辰五　どうするものだ。來るのは合點。

ト云ひながら茶碗を差出す。おまつ、片手にて土瓶を取上げる。此うち專平、裏口より廻り入りし樣子にて、窺ひ寄り

專平　捕つた。

トかゝる。辰五郎、茶碗を下に置き、專平を上へ投げのけ、また茶碗を取つて差出す。おまつ、土瓶の湯をつがうとする。これにて藤七、門口をサツと開ける。おまつ、驚ろき、門の戸を閉す。これより捕り手二人、裏口より忍び込む。辰五郎へかゝる。よろしく捻ぢあげる。

辰五　茶をくれろ。

トおまつ、茶碗へ土瓶の茶をつぎ、差出す。辰五郎取つて、飲む事あつて元八を投げつけ、又かゝるを、一腰抜いて、元八を切り倒す。この間に捕り手、忍び込んで立廻り。

まつ　モシ、危ないぞえ。

ト土瓶を持つて懐へ居る。辰五郎、捕り手を切り倒す。おまつ、土瓶の茶を捕り手にぶツかける事。また外の捕り手かゝるを、同じく見事に切り下げる。この時、元八、起上がつてかゝる立廻り。辰五郎おまつ、思ひ入れ。これにて門口をソツと明ける。表に窺ふ藤七、十手を振り上げる。おまつ、直ぐに戸口をピツシヤリ締め、懐剣を持つて、内よりグツサリと藤七が胴腹へ刺し通す。

辰五　ハテ、見かけによらぬ。

まつ　鬼の女房に。

ト懐剣を引抜く。

辰五　ヤ。

トおまつ、門口を明ける。藤七、立ち身にて苦しむ。これにて直ぐに引戸をピツシヤリと締める。辰五郎、元八を見事に切り倒す。元八、ポンとかへる。この途端、一度に木の頭。

まつ　鬼神でござんす。

トこれにてキザミ、拍子

幕

第一番目大詰　多賀館の場

役名──多賀の大領。愛妾、お柳の方。多賀大淸。花房求馬。蟹江一學。香川權平。姫川勇造。柳川嘉藤次。村井正助。谷澤穎母。柏木曾平太。望月帶刀。腰元、梅田。同、皐月。同、千早。同、菖蒲。同、常夏。安達昌伯。茶道、町山。長谷部重左衞門。

本舞臺、三間の間、向う一面の金襖、欄間附き、結構なる御殿のかゝり、尤も平舞臺にて、上の方九尺程、筋かひに下座の方へかけ、半分は御簾、半分は茶屋の暖簾を掛け、下の方は塗り骨の障子貳枚眞中に大衝立。これも誂らへの葭戸を入れ、よき所に梅園と書いたる掛け行燈。すべて多賀の館、奥御殿を仲町粂本の大座敷に仕立てたる模樣。よろしく、幕の內より銚子杯、硯蓋、鉢肴三つ物なぞ取散らし、舞臺先に、大領、羽織衣裳、着流しの形、頭へ加賀染めの手拭を卷き、刀を提げて立ちかかり、この側に帶刀、廣棧とめの御本手縞、年配なる店者の形を、上下衣裳に仕立てたる拵らへにて、穎母、勇造、正助、いづれも上下衣裳、大小の形にて、諫言して居る。上の方に昌伯、坊主醫者。町山、茶道の形の上へ兩人とも鬘かけたる太鼓持ちの思ひ入れ。曾平太、嘉藤次、袴着流しの形に腰へ手拭を挾みたる廻し男、船頭の思ひ入れにて立ちかかり、千早、皐月、菖蒲、いづれも、椎茸髱、奥女中の形に前垂れ〆め、手拭を肩にかけ、二階廻し、娘分、仲居の思ひ入れにて、上の方に立ちかゝる賑やかなる騒ぎ唄、時の太鼓にて幕明く。

大領　ヤア、無禮なる諫言立て。重ねて申さば、手は見せぬぞ。

帶刀　ハツ、御尤もなる御怒り。御遊興の妨げ、折惡しくたつてのお諫め。却つて不忠。

賴母　イヤ、おてまへは新參、我れらは譜代恩顧の身を以て、お諫め申すはお家の爲。

勇造　紅梅姫さま、この間、隅田堤より御不例にて、他聞を憚かる密かの御病氣。

正助　それになんぞや、晝夜を分かぬ、酒食に耽る御身持ち。

賴母　もと姫君は鎌倉の大老、大江の廣元公の御息女にて、お輿入れはありながら

正助　未だ御婚禮の御沙汰もなき

勇造　紅梅姫のお身の上。

三人　鎌倉の聞え、廣元公への申し譯。

帶刀　イヤ、御不例は世上の疑ひ。一つには、殿の御氣鬱晴らさん爲、御酒宴の御催ふし。ナウ、何れも。

昌伯　左やう／＼。望月どのゝ仰せの通り、紅梅姫さまの病氣も、愚老はつく／″＼内案いたすに、勝たれないのはお主と病。なんでも旦那の御意に入つて、一品づゝも拜領の、お太鼓醫者とひねつたが、先づ當世でござるてな。

町山　憚りながら私しも、昌伯老とお對〳〵。不洒落も對でござりまする。

嘉藤　洒落と聞いては飯より好き、扶持方棒では、巾の利かぬ。摩利支天河岸へ乘りこんだ、西河岸の兄ィといふ氣取り。

曾平　柏木曾平太は乙女橋、早歸りの一座を乘せて來た、梅園の姐さん、お客だよ。

嘉藤　ソレ、お女中方、氣の利かない。河岸を呼ぶのだ。どうなりと二階への氣取りでおやりなさい。

三人　ハイ〳〵、お客樣方は、お早うお出で遊ばされました。

ト不器用に辭儀をする。

町山　オヤ〳〵、ねつから野暮でない。

三人　ほんに、お前方も、いけどうな。

ト口々に笑ふ。

賴母　ヤア、尾籠なる里言葉、聞くもなか〳〵穢らはしき

正助　いづれもの振舞ひ。

勇造　殿の御所存。

千早　私しどもは恐れながら

三人　御免を願ひ上げまする。

大領　主命に背く不屆きな奴。男女に限らず、予が手討ち。

ト立ちかゝる。

帶刀　御怒りは理り、先づ暫らく。

ト手に縋つて

御機嫌の恐れ、お目通りの方々、御前を下がり召されい。

賴母　すりや、我れ／＼が御諫言。

勇造　イヤ、命は塵芥。

正助　諫めを入れるは、臣下の常。

千早　姫君樣への申し譯。

皆々　我れ／＼とても冥土のお供。

大領　小賢しき過言。望みの命。

トまた立ちかゝる。

帶刀　君に逆らふ不忠の奴輩。引立て召されい。

皆々　心得ました。下がり召されい

ト嘉藤次・曾平太。勇造、正助を引立て、昌伯、町山、女形を引立て、花道へかゝる。大領、これを見て

大領　不忠の成敗。帶刀、放せ。

ト帶刀を退け、拔刀にて大領、花道へ追ひかける。帶刀、思ひ入れ。また騷ぎになる。管絃を打込みたる鳴り物にて、花道より、梅田、椎茸たぼの奧女中の形に、前垂れ掛け、梅そのと書いたる、ぶら提灯を提げ、お柳、藝者の形。奧女中一人、同じく前垂れ掛け、三味線箱を抱へ、出て來る。この跡より一擧、上下大小の形にて、手拭を頭へ卷き、權平、同じく上下大小の形にて、火繩箱を提げて、客と船頭の形にて出て來る。お柳、平舞臺の體を見て、皆々を搔きのけ、大領の側へツカ〳〵と來て

りう　殿さん、何を腹立て。お前でもない遊びぢやなア。

ト生醉ひ心にて云ふ。

大領　イヤサ、一座の興を覺ます彼れらが振舞ひ。只一討ち。

奧女　モシ、宵泊りから、朝直し。明日も板頭のお柳さん、やう〳〵と貰つて參じました。

梅田　サア、此やうに申しますが、今宵の御趣向、深川遊び。

りう　酒にする氣は無いかいなア。

ト寄り添ふ。

大領　ムウ。

ト思ひ入れあつて、刀を納め、矢張り騒ぎになる。この人数皆々、平舞臺へ來て、並よく居並び、權平、下の方に扣へる。帶刀、前へ出て

帶刀　盛んなる火に水を注げば、却つて燃え立つ殿の御氣色。谷澤、姫川、村井氏、おてまへ方も一趣向、御機嫌直しの御相手。

頼母　イヤ、武骨なる我れ〳〵。斯樣なる席へ。

勇造　立連らなるも心外。御意に任せ

正助　暫らく退散仕らう。

帶刀　それも尤も。然らばイザ。

勇造　良薬、口に苦きの譬へ。

頼母　ハテ、善惡は後して。先づお來やれ。

ト管絃になり、頼母先に正助、勇造、思ひ入れあつて奥へ入る。一學權平前へ出て

一學　イヤ、きついものだ。癇癪で突ッぱり返つた大殿を、たつた一言でお柳の方、流石當時の手取り

者。殿には定めて御滿足に、思し召すでござりませう。

權平　これはどうだ、一學どの。申すまでには及ばねども、御所望ゆゑに現在の、望月どのゝお內方、お部屋に差上げ遊ばされ、田なら畦なら御前の首尾、帶刀どのゝお勤め方、感心いたした儀でござる。

帶刀　お取立ての御恩、何をがな、お馬先の討死より、大殿の夜の御奉公、忠義と申すも烏滸がましき、拙者が曇らぬ心の忠義。それは格別、今日の御催ふしは、蟹江一學、おてまへの御趣向。これからは、御機嫌直しの御酒になされい。

一學　御酒とも〳〵。お女中方。椎茸たぼの二階廻し。これも一興。サア〳〵酒々。

大領　イヤ〳〵、一學、其方を始め、昌伯などが進めゆゑ、心得たとは申したなれど、樣子を存ぜぬ遊所の趣き。とくと合點のゆくやうに、指南いたしてくれまいか。

帶刀　ナニサマ、この儀、拙者も店者とやらになれとある事ゆゑ、先づ出立ちは斯くの通り、白衣羽織も御殿へは、如何かと存じて上下衣服、その店者の遊びやう、とくと御指南受けませねば。

昌伯　オツとそれにも、ぬからぬお柳の方さま、お指圖ゆゑに用意いたしました、今宵の御趣向。オヽ、さうぢや、洒落れとやら申しまして、詳しい書き物がござりまする。

大領　ムウ。すりや、遊びの書き物があるか。

昌伯　ハイ〳〵。御覽遊ばしませ。

ト懷中より、誂らへの洒落本二三册取出し

大領　ドレ〳〵。

衣裳附けやう、詞の樣子、詳しう書きました物でござりまする。

ト取つて

ムウ、仕掛け文庫辰巳の園。

トあれこれ外題を讀み、二三枚繰返し見て

イヤ、これなれば出來さうな事ぢや。サア〳〵、急いで始めい。

昌伯　こいつは智慧だ。とても事に、書拔きを配ればよかつた。

女皆　昌伯さんの芝居といふのは、あやまるの。

町山　イヤ、お女中方、天晴れだ。それで捌ける座敷の模樣。

昌伯　帶刀さまは大座敷、さて殿樣は裏座敷。

町山　先づお床から廻したり。

ト浮いた騷ぎの合ひ方になり、女形皆々、大衝立にて眞中を仕切り、嘉藤次、風呂敷に包みたる夜具包みを明けて、二つ持つて來る。上の方は二つ蒲團、緞子の夜着の綺麗なるを敷き、下の方は郡內縞の薄蒲團、尤も敷紙附き、古びたる夜着廻し、枕を並べ女形、皆々、これを手傳ひ、帶刀は上の方、大領は下の方の床の上に來つて、双方納まる。お柳、ツト立つて暖簾の內へ入る。菖蒲、皐月、これに附いて入る。嘉藤次、行燈を二つ持つて來て、よき所へ直し、油を注ぎながら

嘉藤　西河岸の二人、どうするのだ。汐時は惡し、お泊りか。

曾平　されば、どうせう。

町山　でもあるまい。船頭も女郎衆の蒲團で寐た夜かな。

千早　措いてもおくれ。不洒落だなう。

ト帶刀が脫いだる上下を疊んで居る。

曾平　モシ、旦那、明けてからお起し申しやせう。

帶刀　オヽ。御苦勞だ。休まつし。

大領　あの通り云ふのか。休めく〳〵。

嘉藤　御ゆるりとおしげりなさりやし。

トこなしよろしく、嘉藤次、曾平太、奥へ入ろ。

大領　なんと昌伯。これは待ち久しい事ではないか。

昌伯　イエ〳〵、これが遊びの命。待たせるも手事でござりまする。

大領　手事とあれば、大事ないが、イヤ、この間一學が夜詰めの話し、兎角、遊女の女子なぞは、彼の金野郎とやらをどうやら致す、福有の者は大嫌ひ。何か物事不洒落に、身貧な者に思ひ附くとは申したが、成る程、コレ、この書き物にも、左様な様子が相見える。

昌伯　左様でござりまする。また私しが芝居通と、叱られるかは存じませぬが、丁度申さば春狂言の、髯の意久は慥か大盡、金を蒔いても突き出され、見る影もない助六に、心中立てる揚卷は、即ち今晩、御趣向の、お柳さまでござりまする。

大領　イカサマ、左様なものであらう。一學、どうぢや。

一學　左様の段ではござりませぬ。併し、今晩の存じ付きは、あまり日頃があなた様と、お柳の方のお仲がよすぎまするゆゑ、望月氏を店者に仕立てゝ、お柳の方を揚げ詰めに致させ、あなた様を、迫かせるのでござります。

大領　それは迷惑。その節には其方とては、内々予が荷擔人を致してくれ。

嘉藤　イエ〱、それはなりませぬ。私し共はお店方。主の座敷を勤めるが、今宵の御趣向。千早さん、お前もさうであらうなア。

千早　そうぢやわいな。これからは御殿の格は取措いて、梅田どの、お前も初心らしい、いけどうな所を、お習ひな。

梅田　イエモウ、最初から見まするに、何やら覺え憎い事。御指南なされて下さりませ。

嘉藤　これサ、それぢや矢ツ張り地金。先刻の御意に困りもせず、娘分氣取りでやりなさい。

梅田　それぢやと云うて、私しは、御免なされて下さりませ。

ト迷惑さうに云ふ。

大領　ハテサテ、彼奴は兎や角と申し、予が氣に背く困つた奴。コリヤ〱、一學、斯様いたせ。香川權平、兩人とも、あの者を連れて奥へ参り、左様然らばの堅苦しき者ども、出仕いたさぬやうにキツと申せ〱。

一學　成る程。これは御尤も。然らば權平、一刻も早く梅田どの、お次へ。

梅田　お貳人さま、どうやら矢ツ張り堅いぞえ。

ト浮きたる合ひ方になり、一學、權平。梅田を連れ、町山もこれに附いて奥へ入る、直ぐに暖簾内よ

りお柳の方、寢間着の形に着替へ、最前の酒落本を鼻紙に持ち添へ、しどけなく出て來て、大領の方へ行かんとする。

嘉藤　モシ、お柳さん、此方でござります。

　　ト　これにてお柳、立戻り、帶刀が枕元へつくばひ

りう　ほんに、折が惡いなう。なにサ、わたいが客衆ぢやないが、言傳があると云ふから、ちよつと逢つて來たいわいな。

　　ト　云ひ〱莨を吸ひ付けて帶刀へ出す。大領、合點のゆかぬこなし。

昌伯　これが遊びサ。今に來るから、氣を揉むなといふ事サ。

嘉藤　困つた者ぢや。帶さんだと、いつも〱こんなぢやァ惡いが、モシ、お前さんは宵泊り、あつちやァ今に歸るのでござります。

帶刀　店の衆か、お屋敷ぢやァないか

りう　アイ、お屋敷では、御門が難かしいによつて、どうで長くは居ないわな。なんにしろ、ちよつとお前、帶さんを頼んだによ。

帶刀　どうとも勝手にしやァがれ。

ト夜着を着てコロリと寐る。お柳、ツイと立ち、大領の方へ來て、床の上へベツタリ坐り

りう　昌伯さん、よく居ておくれだの。モシ、淋しかつたかえ。

ト大領が方へ摺り寄る。

昌伯　そりやこそ、もう〆めた。

ト顔で教へる。大領、モヂ〱、勝手の知れぬこなしあつて

大領　昌伯々々、さて斯う改たまつて見れば、なんと挨拶してよいかなう〱。

昌伯　これはしたり、そこで彼の書抜きではない、洒落本の秘書を御覽じますがよい。

大領　オヽ、それ〱、大事の事を失念した。

ト以前の洒落本を取つて讀む。此うち千早も鼻紙へ書きつけた覺え書を出し、眞面目に讀んで居る。お柳も鼻紙へ添へた洒落本を出し

りう　コレ、御覽。丁度この本の女郎衆と、わたいが心が同じ事。苦勞でもあらうし、ほんにやつれもしやうわいなア。

大領　サア、それは又どうした事で。

りう　どうしたと云つて、この頃ぢやお前で、客衆はみんな離れる。あの大座敷の店者の、帶さんから

してお前を退けと云ふけれど、それする位なら、これまでに、何しに身の皮を剝いで、お前を呼ぶものか。死んでも退く氣は無いけれど、面工は惡し、しみ〴〵と、ほんにわたいが胸の內、推量してくれたがよいわいなア。

大領　オヽ、成る程、さうであらうが、先づ第一、その面工とは、なんの事ぢや。この書に見えぬが、コリヤ、昌伯、面工とは、どうした譯であらう。

昌伯　これは御尤も。面工とは、御存じない筈だ。これは斯うでござりまする。

大領　どういふ譯ぢや〳〵。

昌伯　イヤ、先づ下々で金銀に、手支へまして、取遣りの一向出來ませぬを、工面が惡いと申しまする。それを引ツくり返して、面工でござりまする。

大領　アヽ、さうか。金銀融通の成りかねるを、工面が惡いと申すので、それを返して、面工とは、金銀自由になるであらう。

りう　アレ、又あんな、不洒落ばつかり。わたいがこんなに痩せる程、苦勞になるは、この節句の、仕舞ひ札もまだ掛けず、首の廻らぬ借錢は、反物の拂ひと小間物屋、船宿衆へも祝儀の附け金、これほど無ければ、しみ〴〵苦勞になるよ。

大領　サア、また知れぬワ。借用の金子、方々にあるも聞えたが、その又、節句の仕舞ひ札とは、何の事ぢや。

昌伯　へイ、またか。只今、此お子の申されました仕舞ひと申すは。

大領　エヽ、聞えた。大方これは、内通せし男、間夫狂ひの合ひ詞であらう。さうか〱。どういふ譯ぢや。どう云ふ譯ぢや。

ト煙管にて灰吹を叩き、急いで云ふ。これにて、帶刀起き上がり

帶刀　なんだ、隣は騷々しい。彼のお屋敷は、まだ歸らねえのか。

千早　ハイ、殿樣には、まだお夜詰め前でござりまする。

嘉藤　エヽ、コレ、さうぢやないわな。

千早　ほんに忘れて、帶刀さま。

嘉藤　ではない、帶さん、酒でも上がれいなア。

帶刀　ナニ、酒は飲みたくもない。いま〱しい。宵泊りで今夜來てくれろ、話しがあると吐かしやアがつて、野郎の緒〆のやうに、蒲團の番をさしやアがる。茶碗で飲んで、献しな。

嘉藤　サア〱、お一ツ。

ト銚子を取る。

オヽ、ぬるいさうな。お燗を直して参じませう。

千早　わたしも、なんぞお肴を。

帶刀　ホイ、みんな行くのか。

ト嘉藤次、銚子を持ち、千早附いて奥へ入る。矢張り合ひ方、昌伯、扇をひねくりながら

昌伯　モシ〳〵、悪い癇癪だ。モシ、旦那、あのお子の仰しやる、仕舞ひ札と云ふのは、菖蒲の節句はどこでも、色客と一緒に寐たいのが、此お子たちの身の樂しみ。その上に、下々の節句の前日は諸拂ひ方、祝儀の付け届け、彼れこれに余ッほど物のいる儀でござります。

大領　ムウ。して、それは又、何萬石の出費であらう。

昌伯　エヽナニ、滅相な。石高には及びませぬ。大方、三百金もござりますれば、相濟む儀でござります。

大領　それなれば、いと易い事ぢや。納戸方へ申し付けう。イヤ、併し、兎角女郎といふ者は、身貧な者を大切に致すではないか。

昌伯　エヽ、成る程。

ト困つたる思ひ入れ。

りう　イヤ、モシ、併し、お柳さん、旦那の心意氣はあの通り。これからお前の心中わえ。

エヽ、鈍な事云ひなんす。初手から知れたわたしが胸。主に苦勞を掛けまして、なんのわたしが嬉しからう。成らぬ所は、どうなりと、大座敷の客を勸めても、首尾の札は殿さんの名前、わたしが胸で兎も角も、菖蒲の節句は、ナア、申し。

大領　フウ。すりや、金子は余人に出させ、その折は予を客にして

りう　二日も三日も居續けの、眞な話しがあるわいなア。

大領　昌伯、なんと、これ程な、予の樂しみはあるまいな。

昌伯　御意でござりまする。

ト眞面目になる。

りう　それから、跡は寐ての事。エヽ、また其方を向くのかいなア。

ト引寄せる。

大領　どうしてよいやら、勝手の知れぬ。夜詰めとは、きつい違うたものぢや。

りう　昌伯さんは大事ない。寐ようわいなア。

ト大領へ寄り添ふ。騒ぎになり、昌伯、仰天して

昌伯　ハア、萬歳樂々々々。

ト耳を塞ぎ

色事師には何がなる。これぢやァお座に溜られない。

ト上の方へ逃げようとしてうろたへ、帶刀に行き當る。

帶刀　うろたへ坊主め、何を吐かす。

ト突き轉かす。昌伯、悔りして

昌伯　帶刀さま、まだお寢らぬか。

帶刀　寢られるものか、馬鹿々々しい。得心づくで去り狀渡し、御前へ預けた女郎でも、まさか今のを聞いて居て、腹は立たぬが、否だ〱。お店のお客はお歸りなさるかな。頭は居ねェか。上下を寄越せ〱。

ト無性に手を叩く。これにて奥より、一學、權平、嘉藤次出て

權平　これはしたり、帶刀どの。イヤ、お店の旦那、おとなしくもない、なんの事でござりまする。

帶刀　なんの事とは歸るのだ。

權平　それだとて、今時分。鷄が啼いてから、お起し申します。

帶刀　否だわエヽ。隣の態を見ろ。

嘉藤　モシ、お隣のお座敷が、どういふ事でござりまする。

帶刀　どういふ事とは、乙女橋の兄ィ、お柳は今夜宵泊りで、おれが仕舞つて置いたのぢやないか。

權平　左やうサ、指でも附け手はござりませぬ。

　　ト手拭を癖に船頭のやうに云ふ。

帶刀　イヤ、あるの。

　　ト下の屛風の方を顏にて敎へる。

權平　ヘイ左やうかえ。あつちやアとんだ事だ。コレ、若い衆、爰の內ぢやア、二重賣りをするか。どのどなたか知らないが、橫盤を切られちやア、先づ旦那より、おれが否だ。濟まないぞ〳〵。

　　トぶッ坐る。これにて、梅田、曾平太、出て來て

曾平　お客の邪魔をする奴は、どいつだ〳〵。

一學　隣座敷だ。引摺り出せ〳〵。

曾平　オヽ、合點だ。

ト下の屏風へ立ちかゝる。町山、昌伯、悩りして

コレ、滅法界な。御前だぞ。大殿様だ。静かにしやれ〳〵。

ト留める

一學　大殿様でも御前でも、今夜の趣向、大事ない。

權平　引摺り出して、論判しろ〳〵。

ト下の屏風を引退け、大領を、無理に帯刀の所へ連れて來る。お柳、附いて來つて思ひ入れ。皆々立ちかゝるを、昌伯、町山、よろしく留め

昌伯　扣へさつしやい。恐れ多い、御遊興とはいひながら

町山　御家來の身として何事ぢや。

大領　イヤ、大事ない〳〵。斯様いたさねば、興にならぬ。心遣ひ致すな。扣へて居れ〳〵。

兩人　それぢやと申して勿體ない。

大領　ハテサテ、主でも家來でも、色戀の道に隔ては無い。帯刀が立腹、至極々々。存分に致せ〳〵。

帯刀　イカサマ、左様に御意なされば、今更なんとも御不足の、申し上げやうも無き仕合せ。

大領　イヤサ、さうではない〳〵。予が身の上は、どうであらうと、可哀さうにお柳の心底、帯刀、其

方が得心のなるやう、思案を致せ〱。

帶刀　へイ、成る程、寛仁大度の思し召し。二世と交した……イヤサ、今晩揚げ詰めに致したお柳を、差上げますから、先づは詫び代、手切れ心。

一學　ナニサマ、これはさうでござらう。取扱ひは兎角金子。

權平　斯様な事は先づ早速、金で濟まさねば、いづ方のお店も立たぬでござりまする。

大領　して、帶刀が望みは、いか程。

帶刀　イヤ、別して、大さうな儀でもござりませぬ。百萬町のお墨付。

大領　エヽ、なんと。

ト思ひ入れ。

イヤ、苦しうない〱。成る程、左やう有りさうな事。隨分書いて遣はさう。

皆々　アノ、お手づからお墨付を。

大領　善は急げぢや。料紙持て〱。

町山　ハイ〱、畏まりました。

ト高蒔繪の硯箱、料紙を載せ、持つて來る。大領取つて、サラ〱と書き認め

大領　ソリヤ、お望みの百萬町。

ト投げ遣る。皆々思ひ入れ。帶刀取つて、改め

帶刀　存じがけなき御墨附。とてもの事に、お袖判。

ト懐より、三建目に預かりし袖印を出して捺す。大領、ヂロリと見て

大領　それでは行く末、家國にも

りう　エヽ、御前様、何を御意遊ばす。

大領　イヤサ、其方ゆゑなら惜しうないて。

ト手を取つて引寄せる。帶刀、墨附を納め

帶刀　さて、この上は、お寐間の邪魔、拙者を始め、いづれも方、お次へ退散仕らう。

大領　さうしてくりやれ。イヤ、時に只今の寐間はむさくるしい。

りう　サア、それもわたしが、手づから直しまするわいな。

梅田　ハイ、左様なら、御前様。

皆々　御機嫌よう、おしげりなされませう。

ト唄になり、帶刀先に、一學、權平、思ひ入れあつて、梅田、昌伯、町山、嘉藤次、曾平太、皆々奥へ、

へ入る。あと合ひ方。お柳、よき所へ以前の結構なる蒲團を敷き直し、屛風立てよせる。大領、莨盆を提げ、蒲團の上へ來て

大領　思ふ事、叶はねばさて浮世とは、よう云うたものぢや。さりながら、先づ〳〵これで一安堵。お柳、其方もさぞ嬉しう思ふであらうなう。

りう　サア、嬉しいやら、悲しいやら。どうもせう事はござりませぬ。

ト蒲團の上へ來て坐る。

大領　ハヽ、氣味の惡い。この上に又、悲しいと、そりや又なぜ。

ト不思議さうに、お柳が顔を見る。お柳、涙ぐんで

りう　モシ、殿さん、これ見て下さりませ。

ト大領が手を取つて、懐へ入れる。大領、探り見て

大領　ヤ、こりやコレ、慥かに岩田帶。

りう　サア、お情うけて此やうに、あなたのお胤を宿せし身の上。

大領　フム、それが又、なんで其やうに、悲しいのぢや。

りう　ハテ、生きる瀬、死ぬる瀬と、産は女子の命の瀬戸、それが慣ひではなけれども、あなたに名殘

の惜しまれて。

大領　ハテ、心細い事を云やる。其やうな折の爲にこそ、典藥數多召し使ひ、まだその上に、予が家内に天滿宮の守もあれば、必らず安産いたさす程に、案じやるな〳〵。

りう　イエ〳〵、さうぢやござりませぬ。たとへ又、産み落したと云うてから、わたしや卑しいお側仕へ。生れたお子も、その通り、卑しいわたしがお腹の嬰兒。

大領　これはしたり。其やうに又、先潛り云はぬものぢや。

ト手を取つて引寄せる。餘念なき思ひ入れ。此うち帶刀、マチ〳〵奥より出て、屏風の外に窺ひ居る。

りう　それなればマア、神や佛のお惠みで、安産いたしましたなら

大領　ハテ、その時は御臺所、直ぐに奥樣ぢや。なんと、どうぢや。

りう　エヽ、嘘々。お云ひ號けの紅梅さま、歴とした、あなたもある上に。

大領　サア、その紅梅姫はの。

りう　尤もこの程、御不例とはいふものゝ、御本腹なされば御祝言。

大領　イヤサ、戒名と杯は致されまい。

りう　エヽ、なんと御意遊ばす。

大領　必らず共に、他言は無用。紅梅姫はこの間、隅田川にて不慮の横死。
りう　そんなら、紅梅姫さまは。
大領　ぢやによつて、其方を直ぐに御臺。
りう　そりや、あんまりな、冥加もない。
大領　奥になるのが、其方は否か。
りう　さうではなけれど。
大領　そんならなんで。

トお柳、差俯向き、默つて居る。此うち帶刀、以前の硯を引寄せ、大領の詞を一々に書きとめる。大領、無理にお柳を引起し

大領　紅梅の身の上まで、其方に明かす予が心底。
りう　それぢやによつて、わたしが事も又、人さんに打明けて
大領　なんの云はうぞ。サヽ、この上其方の望みは、どうぢや〳〵。
りう　お腹の嬰兒をお家の跡目、お世繼になされて下さりませ。
大領　ハテ知れた事、男子なれば、一言となしに家の世繼。

ト帯刀、これを書きつける。お柳、ニツコリ思ひ入れあつて

りう　すりや、誓言でお家の跡目。

ト云はうとして

イエ〳〵、まだあなたには弟御の、犬清さまもあるなれば。

大領　イヤ、犬清は一生部屋住み。

りう　それも心の濟まぬもの。

大領　然らば流罪、切腹に、申し附けたら、其方の心。

帯刀　切腹とは面白い。

ト威儀を正して高く云ふ。

大領　南無三、それを聞れたか。

トぎよつと思ひ入れ。お柳、直ぐに大領へ寄り添ふ。唄になり、屏風引廻す。帯刀、思ひ入れ。チヨン〳〵にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、高足の二重。矢張り御殿のかゝりにて、正面の見附け、向う梅の金襖、軒に同

じ紋所の紫幕を張り、雪洞付きの燭臺先に、臺提灯二張り飾り付け、よろしく、二重舞臺の眞中に、犬清、上下衣裳、大小、若殿の形にて、褥に座し、上の方に、權平、賴母、下に正助、勇造、いづれも最前の上下衣裳にて扣へ、時の太鼓、琴唄にて道具とまる。

ト直ぐに下座より、求馬、前幕の拵らへの形にて繩にかゝり、菖蒲革の侍ひ二人、この繩を扣へ、跡より一學、以前の形、上下衣裳にて誂らへの白木の箱を携へ、これに附いて出て來て、求馬を舞臺先へ据ゑ

一學　仰せにまかせ花房求馬、召捕りましてござりまする。

權平　夜陰の御評議、御苦勞ながら、捨て置き難き大切の御詮議、とくと御賢慮めぐらされ、御尤もに存じ奉りまする。

犬清　云ふにや及ぶ。兄大領の仰せを受け、名代勤める犬清が目通り、花房求馬、覺えあらば、包まず隱さず白狀いたせ。

求馬　存じよらざる身の災難、罪の覺えはなけれど、有無を云はせずこの繩目、無體の御詮議、引出され、古朋輩の手前、面目もなき。して、御不審の仔細はな。

權平　イカサマ、少しは恥かしからう。以前はお家の譜代にて、花房主膳の御子息どの、ハテ、いゝざ

まなお目見得ぢやなア。

正助　イヤ、權平どの、扣へ召されい。御名代とは申せども

賴母　大切の御評議、御前でござる。

犬清　蟹江一學、仔細をとくと申し聞け、なごやかに詮議いたせ。

一學　畏まつてござりまする。以前は以前、只今では素浪人の求馬、貧苦に迫り、慾から起つて、何者に賴まれ、隅田川にて殺害なした。

求馬　こは口惜しきお疑ひ、如何に身貧に暮らせばとて、人を害して寶を貪る、無道の不所存持つべきや。何を證據に人殺しの。覺えは曾てござりませぬ。

犬清　イヤ、コリヤ求馬、一應の云ひ譯はさもあらんが、當家に於ての一大事、許し置かれぬ仔細といふは、隅田川にて紅梅姬。

ト云はうとする。

賴母　アイヤ、その儀は今暫らく、申さば今は他門の求馬、しかと所存を試した上。

犬清　如何にも。明けては申さねども、紅梅姬にはこの程より、御不例なるが、世上の噂とり沙汰、定めて聞いたであらう。心に覺えがあるならば、古主の爲に白狀いたせ。

求馬　すりや、拙者めがお家へ不忠。

一學　問ふに落ちいで語るにと、お家へ不忠と口走れば、紅梅姫を害したに、求馬、相違はあるまいがな。

求馬　ヤヽ、なんと。

一學　ナニ騒々しい驚ろき顔、遁がれぬ證據は、この一品。

ト白木の箱より四立目の鞘を出し、求馬が目先へ突き付ける。求馬、ヂツと見て

求馬　ムウ、すりやこれが。

一學　覺えがあるか。

求馬　正しくそれは紛ひなき、鞘に散らしの向う梅。

權平　お家の定紋。

正助　大殿より

一學　拜領なした一腰。

求馬　如何にも、こりやコレ親人に、御勘氣受けしその砌り、大宮氷川の境内にて、召上けられしその一腰。

一學　科極まらば逆磔刑。求馬が成敗、獄屋へ引け。
賴母　イヤ、待たれよ、詮議が暗い。
一學　へゝゝ。小癪なる谷澤賴母、證據慥かな科人を、なんで詮議が暗いのだ。
賴母　たとへ證據はあるとても、自身に白狀なさゞるうち、科の輕重は、どうして知れた。
一學　イヤサ、そりやア。
賴母　その上、未だ若殿に、お指圖なきうち、粗忽の下知。
正助　御名代たる犬清さま。
勇造　お主に隔て召さるゝか。
一學　サア、そりやア。
三人　サア〳〵〳〵
賴母　なんと詮議は殘らうがや。

トきつと云ふ。

一學　ムウ。

トこの時、奥より

帶刀　大殿の御上意、扣へ召されい。

ト管絃になり、正面の襖を開き、帶刀、キッとしたる上下衣裳に改め、三方に以前の墨付と、九寸五分を載せたる三方を持ち出て

賴母　恩を戴いて恩を忘るゝ野の鹿の、野草を損ねる如きの不忠の奴ばら、今日只今、國家の政務を預かつたる望月帶刀、詮議せよとのお袖判賜はり、上意でござる。

賴母　合點參らぬ望月どの、隅田川の一埒、弟君犬淸どのへ、大殿より竊かに詮議せよとの、かねての御諚。それに又、いま改めて其許へ。

犬淸　國家の政務を預かりしと、人も無げなる無禮の過言。

帶刀　如何にも人は多けれど、お家へ對して御奉公、役に立つ武士一人もない。殿のお目鏡蒙むつて、執權職たる望月帶刀。お家の政務は今日より、心の儘に計らひ申す。

賴母　ムウ。すりや、當家の執權職。

正助　帶刀どのへ大殿より

勇藏　改めて上意ありしとな。

帶刀　疑はしくば、これをお見やれ。

ト三方の上なる以前の墨付を見せる。恟り思ひ入れあつて

一學　誠に、疑ふ方もなき

帶刀　殿の嚴命お袖判、執權職たる帶刀が、なんと詞は背かれまい。

一學　天晴れ出來た。出頭の忠心第一、望月氏。

權平　執權職とは、この上なき、立身御世も、御器量ゆゑ。

一學　大慶至極の儀でござる。

ト輕薄する。求馬、思ひ入れあつて

求馬　こは珍らしきお家の政務、如何に時代なればとて、古參の武士は見る影もなく、昨日今日まで新參の、名も無き侍ひ、執權とは。

一學　ヤア、囚人の身を以て、望月どのへその雜言。

求馬　イヤ、求馬はお家の譜代、黄金の鷄紛失の、身の越度より浪人なし、又その上に覺えなき、疑ひ受けて、この繩目。よくも武運に盡き果てしか、佞人讒者のこの手籠め。思へば／＼口惜しい。

ト ぢつとなる。

帶刀　フム、讒者とは事をかしや。明白なるはおのれが罪、事顯はれしと知らざるか。既に汝が父たる

者、花房主膳といふ老ぼれ、殿へ毒害いたしたる、逆罰當つて、卽座の最期、その忰たるおのれが科、お家の重器、黃金の鷄、紛失させしばかりでも、縛り首には極まる罪、隅田川にて紅梅姬、何者に賴まれ、殺害いたした。

求馬　イヤ、存ぜぬ、且以て。

帶刀　蟹江一學、證據を以て、慥かに糺命遂げたでないか。

賴母　イヤサ、その證據分明ならぬ、互ひの爭ひ、後しての詮議。

犬淸　帶刀とくと、思案の致せ。

帶刀　お指圖御無用、若殿にも科は遁がれぬ、お覺悟あれ。

犬淸　ナニ、某に覺悟とは。

帶刀　大殿の嚴命、痛はしながら。

ト九寸五分を載せたる三方を取つて、犬淸の前へ直す。

皆々　これは。

ト管絃になり、帶刀、また懷より以前の書き物を出し

帶刀　弟犬淸、お柳の方へ艷書を送りし科に依つて、切腹申し付くるものなり。お袖判慥かに、斯く

の通り。

犬淸　ヤヽ、覺えなき艶書の沙汰。これも讒者の業なるよな。

トぢつとなる。

賴母　ハテ心得ぬ、殿の御所存。たとへ疑ひありとても、詮議も遂げぬ成敗。

帶刀　權平、賴母を引出し召され。

權平　心得てござる。イザ、お立ちあれ。

ト賴母へ立ちかゝる。立廻りあつて

賴母　尾籠なり方々、某には何科あつてのこの手籠め。

帶刀　云ふな、越度は第一に犬淸どのゝお守り役、放蕩惰弱にそゝつたゆゑ、大小取上げ御追放。

犬淸　ハテ、是非もなや。我れのみか、無實の科に賴母まで。

賴母　よくも讒者の巧みしよな。

トぢつとなる。

一學　科極まつた上からは、どうで遁がれぬ、罪人達。

勇造　すりや、若殿には御切腹。

正助　谷澤頼母は御追放。
一學　花房求馬は縛り首。
求馬　聞けば聞く程身の不運、お家にはびこる佞人ばら、生け置く殘念、口惜しい。
帶刀　引かれ者の小唄、ナニ小癪な。若殿、急いで切腹あれ。但し、この期に御未練か。
犬淸　とはいへ、無念な、やみ〳〵と。
帶刀　大殿の下知狀、御違背か。
犬淸　イヤサ、全く。
帶刀　谷澤頼母、大小渡せ。
頼母　サ、それは。
帶刀　嚴命背くか。
頼母　サ、それは。
皆々　サア〳〵〳〵。
帶刀　遁がれぬ重罪。未練な事を。

トきつとなる。向う揚げ幕にて「長谷部信元出仕」と呼び、三味線入り、鼓の合ひ方、雨車になり。

花道より重左衛門、黒木綿、紋付き、麻上下大小、高股立ち、足駄がけ、傘をさし、銅燈籠を提げたる蟻通しの見得にて出て來り、花道の中にて

重左　見渡せば、ゑのこ柳にぶちまぜて、都ぞ春の二疋なりけり。錦にあらぬ黒どてら、麻上下の角とれぬ、長谷部重左衛門といふ武骨者、久し振りにて館の出仕。罷り通る、許さつしやい。

ト矢張り鳴り物にて、ツカ〳〵と本舞臺へ來る。下座より嘉藤次、曾平太、野袴、大小の形にてツカツカと出て、立ち塞がり

嘉藤　ヤヽ、大膽なる出仕呼はり。

曾平　殊に御殿へ高足駄。

嘉藤　夜陰の出仕。

三人　扣へ召されい。

ト立ちかゝるを、重左衛門、構はず左右へ投げ

重左　小癪な餓鬼めら。長谷部が出仕、用があれば夜中でも、奥御殿まで罷り通る。雨が降るから高足駄、無禮の咎めはなんのたは言。いづれも、左様ぢやないか。

ト舞臺の眞中へ來て、あたりを見廻し、ドッカと座す。帯刀思ひ入れ。

帶刀　多賀のお家に名も高き、音に聞えし長谷部氏、さてはおてまへ、重左衞門信元どのでござるよな。
重左　おてまへは何人、ついぞこれまで。
帶刀　イヤ、拙者儀は先達て、召出されし望月帶刀。
重左　アノ、おてまへが兼ねて聞く
帶刀　一徹無敵の長谷部どの。
重左　出頭一の望月どの。
帶刀　始めて知る人。
重左　以後別懇に
帶刀　ハテ、信元どの。
重左　帶刀どので
兩人　ござつたよな。
ト兩人、思ひ入れよろしくあつて
重左　見受けますれば、お白洲に、引据ゑられしは花房求馬、犬淸さまにも何とやら、お氣むづかしき御顏色。何事が起つて、よる夜中、武士の評議でござります。

一學　イヤ、長谷部どの、求馬は、黄金の鶏紛失の越度。

重左　ハテ、その事なら疾に濟んで、親主膳には勘當受け、お家は追放、今更に、又も繩目は可哀さうに、窮屈らしい。赦してやりやれ。

ト求馬が繩目を解く。一學、權平顏見合せ

權平　ア丶コレ、我まゝ千萬な。

三人　花房求馬は大事の囚人。

重左　四の五と云ふな。いつでも用があるなら、身が預かり、粗忽はせぬ。ナア、求馬。

求馬　如何にも、貴殿のお志し、拙者ばかりか犬淸さま、御切腹との非道の上意。

重左　ナニ、若殿に御生害。そりや、何奴が裁き立て。

帶刀　イヤ、外でもない、拙者言上。

犬淸　無實の科も兄の、嚴命下れば是非なき仕儀。

賴母　お侍きたる拙者めも、身の越度にて御追放。

正助　執權職たる望月どの。

勇造　有無を云はせぬお計らひ。

重左　ムウ、執權の望月とは。
帶刀　餘人ではござらぬ、矢張り拙者。
重左　ハテ、いつの間に、うまく～と、桂馬の高上がり。面白い手も出るものぢやなア。
一學　イヤ、長谷部どの、求馬は詮議重なる大罪人。この一品を御覽なされい。
ト以前の鞘を重左衞門へ見せる。重左衞門、取つて
重左　ムウ、こりや先年大殿より、これなる求馬が拜領せし、向う梅の紋散らし。この鞘が求馬にかゝる詮議とは。
一學　隅田川にて、この間、紅梅姫の横死ある、水中より出でたその一品。
重左　それなら猶更、この詮議、他門へ對して罷り成らぬ。
皆々　そりや又なぜに。
重左　ハテサテ、世上の噂にも、紅梅姫は御不例と、横死の沙汰もなきうちに、よしなき詮議は毛を吹いて、疵を求むる諺にて、お家の爲になるまいがや。
一學　イヤサ、その儀は。
重左　御家老どの、イヤサ、執權の望月どの、それでも詮議おしやるか。

ト笑つて云ふ。帯刀、思ひ入れあつて

帯刀　疑ひ深きは隔ての元。お家に久しき長谷部どの、拙者が役儀を何とやら、御疑念ござらば、斯くの通り、お袖判の墨付、拜見あれ。

ト以前の書き物を出す。重左衞門、取つて

重左　夜陰でござれば、墨色とくとお袖判の證跡。失禮ながら求馬、その燈、これへ持ちやれ。

求馬　心得てござります。

ト重左衞門が持つて來たる銅燈籠を出す。扉を開き、書き物をつく〴〵見て

重左　成る程なア、仔細なき殿のお袖判、しかも弟御犬淸さま、御切腹との御下知。いま一札は望月帯刀、國家の政務執權職、申しつくるものなり。

權平　なんと、それでも、長谷部どの。

一學　支へこさへをお云やるのか。

重左　なか〳〵以て恐れ多い。ハテ、結構なるお袖判。

ト云ひ〳〵、燈籠の火にて二枚とも燒き捨てる。

皆々　ヤア、大切なるお袖判。ホヽホイ。

ト恟りする。重左衞門ニツコリこなしあつて

重左　殿の神判燒き捨てたる、罪科は重類絶すは掟。

帶刀　如何にも國法、遁がれはない。

一學　長谷部信元。

敵皆　繩かゝれ。

ト立ちかゝる。

重左　ハヽヽヽ。長谷部長兵衞信連が妻、斯く云ふ重左衞門信元が母はナ、大殿多賀の大領へ、お乳の人に召出され、この信元が乳兄弟、重類絶やして見やれ。

皆々　サア、そりやア。

トもぢ／＼、ヂツと扣へる。

重左　お神判なければ、犬清君御切腹はさて措き、谷澤賴母追放の沙汰にも及ぶまい。

犬清　ヤヽ、すりや、この上大領へ、某が身の申し譯。

重左　信元が胸にござりまする。

賴母　チエヽ、忝なき御計らひ。

重左　花房求馬は證據のこの鞘、預け遣はす。何卒して鯉口合はす中心を尋ね、身の科の云ひ譯、一つには、紛失なしたる黄金の鷄、求め出さば、その時こそ、再び當家へ歸參あれ。

求馬　拙者めに、すりやこの一品。

ト鞘を取り、押戴く。

重左　長居は恐れ、早お行きやれ。

求馬　然らば此まゝ。

ト立ちかゝる。

曾平　われをやつちやア。

トかゝるを求馬、立廻りにて、見事に取つて投げる。

重左　出來た。堅固で歸參。

求馬　ハツ。

ト思ひ入れよろしく、早三重にて、右の鞘を持ちながら求馬、一散に花道へ入る。

重左　許し召され、望月どの、おてまへの役儀は拒まねども、何かと申すはお家の爲。

帶刀　何がさて、數代忠臣の長谷部どのに習ひ、某も大殿の御前、弟君犬淸さまのお命も、申しなだ

めて又ゆるりと。

重左　重ねて面談仕らう。

皆々　先づそれまでは若殿様。

犬清　信元、過分。

重左　帯刀どの。

帯刀　過分の返禮。

ト小柄を手裏劍に打ちかける。重左衛門、手ばしこく宙にて握る。

重左　ハテ、叮嚀な御挨拶。此まゝ長谷部が貰ひまする。

ト取り納める。

帯刀　ムウ。

トまた寄るを、一學、よろしく留める。管絃になり、犬清先に頼母、權平、正助、勇造、これに付き、帯刀思ひ入れあつて、二重舞臺の奥へ入る。嘉藤次、曾平太、下座へ入る。重左衛門殘りて、これを見送り、今の小柄をヂツと見て

重左　ハテ、この小柄は覺えある、漢の武帝の出世鯉。ムウ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、下座よりお柳の方、裲襠衣裳に改め、手燭を持ち出て來て、空を眺める。
時鳥の聲。

りう　ても、今鳴いたは時鳥、只有明の月ならで、あやめも分かぬ五月闇、殘り多い事であつたなア。

トあたりを見廻し、行かうとする。

重左　イヤ、コレ女中、その燈、ちよつとお貸しなされ。

トお柳、立ちどまる。重左衞門、つくづく見て

ハヽア、讀めた。音に聞えしお柳の方、花の顔、柳の眉、實に嬋娟たる楊家の娘、玄宗現を拔かしたも道理。ハテ、あてやかなものだなア。

ト騙し寄つて切らうとする。お柳、手ばしこく身をかはす。立廻りに重左衞門が落したる今の小柄を見付け

りう　ヤヽ、この小柄は。

ト取上げる。重左衞門思ひ入れ。

模様も慥かに。オヽ、さうぢや。

ト重左衞門を見て

これを所持なす、其許は。

重左　長谷部長兵衛信連が悴、重左衛門信元。その小柄は、最前貰ひました。

りう　そりや何人に。

重左　以前は、こなたの夫とやら、望月帯刀に申し受けた。

りう　そんなら、いよ〳〵、こりやわたしが。

重左　なんと。

りう　サア、故あつて大事の品、望月どのへ讓りしを。

重左　所持する長谷部が不思議より、合點のゆかぬこなたの身元。もしや以前は捨て子にて、幼なき時の物語り、心覺えはあらざるや。

りう　エヽ。どうして又、わたしを捨て子と云ふ事を。

重左　さてこそ、疑ふ所もなき、常々父の物語り、未生の以前のあらましを、語り聞かさん、よつく聞け。

ト合ひ方になり、お柳を此方へ引廻し

未だ平治のその昔、高倉の宮の令旨を受け、父信連は吾妻路へ、旅の寢覺めの物憂さに、とある

女と語らひしが、計らずも懐胎。月日を經て產み落したは女の子、國は陸奧その時は、諸國全く穩やかならず、戰場へ赴むく足手纏ひ、勇士に娘は益なしと、下野の國蘆野の里、遊行柳の澤のほとり、流石は恩愛、行く末を、壽ぐ色繪の出世鯉、小柄を添へて捨て置きしと、はるか後の物語り。

りう　ヤ、そんならわたしが、父さんは

重左　長谷部長兵衛信連どの。

りう　拾ひ取りしは、陸奧にて、樋爪の兵衛何某とて、佐藤一家の名だたる勇士。

重左　遊行柳の緣に依り、その名もお柳と名乘らせしか。

りう　お前は現在

重左　血筋の兄。

りう　エヽ、懐かしい。

ト寄らうとする。重左衞門、其まゝむごく突き退け

重左　同胞持たぬ。穢らはしい。

りう　ぢやと云うて、今さら名乘り合ひ、實の妹のわたしぢやもの。

重左　吐かすな。茲な不所存者。現在夫のある身にて、不義間男も同然の、今の身の上、氣に喰はない犬畜生め。四つ足の妹持つた覺えはない。

トきつと云ふ、お柳ハッと思ひ入れあつて

りう　道理ぢや、兄さん、憎からう。善惡ともに夫に連るゝの習ひ、世に淺ましい女子ほど、義理あるものはないわいなア。

トわつと泣く。重左衞門もホロリとして

重左　とは云ふものゝ不便やなア。たまく廻り逢ひながら、犬よ猫よと切諫も、無道の夫に添うたる其方。

りう　イヽヤ、心に曇りはない。

重左　なんと。

りう　わたしも長谷部の娘と聞く。忠孝二つ立つならば

重左　その時こそは、誠の妹。

りう　もしも願ひの叶はねば

重左　お家の爲には替へられぬ、國家を亂す望月帯刀、品に依つたらこの兄が。

りう　モシ。

ト寄らうとする。重左衛門突き廻し、ツカ〱と花道へかゝり

重左　太平の代に。

りう　エ。

ト思ひ入れ。

重左　兜着ずばなるまいか。

ト唄、雨車になり、重左衛門よろしく傘足駄にて、心を残し花道へ入る。お柳残つて、ヂッと思案の思ひ入れ。合ひ方、時の鐘になり、二重舞臺より帯刀、刀を提げ、あたり見廻し、窺ひながら出て來て、キッと思案し、目釘を濕めし、股立ち取つて、ツカ〱と下座の方へ行かうとする。お柳向うへ廻り、ヂッと留める。帯刀、構はず突き退けて行かうとするを、お柳其まゝ裾を捕へ、キッとなつて

りう　物をも云はず、血相替へて奥を目がけ、只ならぬ思案の色目。早まつては、事の破れになりますがや。

帯刀　毒喰はゞ皿、まだ〱と、時を逃がすも人心、變ぜぬうちの一思案、手短かに踏ん込み、大領どの、殺らして直ぐに鎌倉へ。邪魔せずと退け。そこ放せ。

りう　イヤ、大事は時を得て、不意を討たすが味方の勝利。十の梯子も九つまで、登りおふせし今宵の手筈。

帯刀　支へるおぬしも物蔭にて、様子を聞けば長谷部が妹。

りう　エヽ。

帯刀　それだに依つて、今となつて心變りか。油斷はならぬ。

りう　イエ〳〵、なんで夫に替へ、我が子に替へて未練な心。

帯刀　留めるが曲事。そこ放せ。

ト突き放して行くを、お柳いろ〳〵して留める。

りう　お腹に宿すお前の胤。

ト立廻つて

帯刀　事顯はれたら逆礫刑。

りう　それぢやによつて。

ト縋つて留め

我が子は可愛うないかいなア。

ト ぢつと抱き付く、帯刀キツとお柳が顔を見る。この仕組みよろしく、管絃にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、引拔きの障子屋體。中足にて好みあり、左右に柴垣庭先の模樣よろしく、矢張り管絃にて道具とまる。

ト 時の鐘になり、上の柴垣の蔭より昌伯、最前の形、頬冠りして、合ひ口を差し、尻からげにて、ソロ〳〵と出て來り。あたり見廻し

昌伯 まんまと首尾よく念願成就。ナニ、半田稻荷ぢやアあるまいし、當時芝居でするやうだ。

ト 云ひ〳〵懷より袱紗包みの金出し

ヤレ〳〵怖い思ひをした。お枕金を手當り次第、エヽコレ、思ふ程、丁度あつてくれゝばいゝ。

ト 懷へ納め、探りながら數へる思ひ入れ。この時、後へ町山、以前の形にて出て

町山 盜人、捕つた。

ト 大きく云ふ。昌伯、愕りして逃げるを、町山、後より引き戻す。昌伯、立廻りにて、町山を當て、花道の角へ來て

昌伯 エヽ、斯うと。お熊に渡した金、こいつを遣り繰つて、斯うすりやア紅屋のおかんを手も濡らさ

ず……うまいワ。〆めた。

ト町山、起き上がつてかゝるを、昌伯、振り返つて突き廻し、町山が帯を捕へ、大道めぐりを四五遍させ花道へ突き放す。町山、うろたへ、ヒヨロ〱して、昌伯は向うへ逃げしと心得

町山　道は一筋。オヽ、それよ。

ト捨て鐘の音、尻からげして、一散に花道へ入る。昌伯、跡より懐を抱へ

昌伯　泥坊々々、泥坊やアい。

ト煽てながら向うへ入る。直ぐに琴唄になり、正面の障子一面に開く。眞中に大領、褥に座し、結構なる莨盆、銚子杯取散らし、この左右に梅田は琴、菖蒲は三味線、皐月、千早、常夏、以前の前垂れを取りたる形にて扣へる。舞臺先に螢大ぶん群がり、何にても唄一くさりあつて

大領　草の葉を落つるより飛ぶ螢かな。果敢なき事の譬へには、電光石火と申せども、春秋知らぬ夏の蟲。人の上にも今日あつて、明日を知らぬは世の習ひ。一寸先は闇の螢、死なうとまゝ、サア、つけ〱。

ト杯を取上げる。

千草　ハイ、また御酒でござりまするか。申し上げるは憚りながら、餘り深うは、ナア、皆さん。

梅田　なんぼ愁ひの玉箒、百薬の長とは申しながら
皐月　お過しなさるは御身のお爲に。
菖蒲　典薬方も朝夕に、御酒の駈引き、それに又
常夏　只今のやうな氣にかゝる、無常な事を御意遊ばし
大領　ハテサテ、この世へ生れては、どうで一度は死なねばならぬ。目を瞑つたら飲まれぬ酒、息のあるうち、サア、つげ／＼。
五人　アレ、また左様ないまはしい。
大領　どうぢや。つがぬか。
五人　ハイ。
大領　イヤサ、つげ。
五人　ハイ。

ト　うぢ／＼する。

大領　ヤア、くど／＼と、身が詞を。

ト一腰取つて立ちかゝる。この時、奥よりお柳、以前のまゝ螢籠に銀團扇を持ち添へ、ツカ／＼と出

て、皆々引き退け、大領が前へヅッと坐る。

五人　お柳の方さま、好い所へ。

りう　お氣に背かぬ酒のお相手、御意見は必らず無用でござる。

五人　ハイ。

ト思ひ入れ。

りう　お次へござれ。

五人　ハイ。

りう　ござれと云ふに、さりとては。

トむつとして云ふ。

大領　不粋な者ども。皆、行け〳〵。

梅田　左樣なら、皆さん。

りう　早うござれ。

五人　御機嫌よう居らせられませう。

トもぢ〳〵辭儀する。これより、しつぽりとした合ひ方になり、女形皆々奥へ入る。お柳側なる銚子

を取上げ

りう　サア、これからは、わたしがお酌。

大領　それで一しほ……杯も浮かみ出て、友に逢ふぞめでたき。

ト謡ひながら酒を飲み

どうでも祕藏の手活けの花、柳の枝に梅が香を、とめて咲かせし櫻の風情、命は其方が物ぢやわい。

ト手を取つて引寄せ、懐へ手を入れる。

りう　オヽ、こそば……寐ようかえ。

トぢつと寄り添ふ。大領、矢張り謡にて

大領　渡りに船が……御意はよし、殺す心か。大膽者め。

ト脊中を叩く。

りう　エヽ。

ト惘りして氣を替へ

ても又、邪魔な燈の影。

ト團扇にて燈臺をあふぎ消す。

大領　これは暗いワ。

りう　ハテ、好いわいなア。燈はこれ。

ト籠の戸を開く。螢パッと一面に群がる。

大領　これも一興。

りう　オヽ、涼し。

ト唄になり、障子一面に閉ぢる。本釣り鐘。蟲の聲、しんとした合ひ方になり、下の柴垣より帶刀、以前の形、高股立ち、龕燈を提げて窺ひ出て來て、あたりを見廻し

帶刀　最早丑滿、合ひ圖の時刻、女の手業の……アヽ、心許ない。

ト思案して龕燈を捨て、刀拔き持ち、拔き足して、障子屋體の元へ立ちかゝる。障子の內、物音して血煙パッと障子へかゝる。帶刀、ギヨッとして立戻り

さては女房、仕負ふせしか。

ト思ひ入れにて、刀を納める。障子の內にて

りう　いづれも、殿の御大事・急いで出仕いたされよ。

ト高らかに呼ぶ。これにて下座より犬清先に、賴母、權平、勇造、正助、嘉藤次、曾平太、押取り刀にて、バラ〳〵と出る。帶刀、眞中へ來て

皆々　夜陰の騷動、何事やらん。

帶刀　殿の御身の大事とは。

りう　それへ參つて委細の御諚、申し聞かさん、扣へ召されい。

ト鼓入りたる合ひ方になり、正面の障子、中一枚開き、お柳、裲襠の凜々しき肌脱ぎにて、長刀携へ、靜々と出て、床几にかゝる。皆々キツと思ひ入れ。

犬清　お柳の方の出立ちは。

皆々　さては正しく大殿には。

トまた立ちかゝる。

りう　ヤレ、騷がれな。お家の大事。急く所でない。鎭まり召されい。

皆々　ウムッ

ト左右へ扣へる。お柳、思ひ入れあつて泪を紛らし

りう　飛花落葉の理りも、常とは知れど、情なや、殿には俄の御大事、末々の事思し召し、自らを召さ

れて密かの御諚。

皆々　ヤヽ、すりや、殿には御不例にて。

りう　如何にも、御様子御大切。されども勇氣の我が君様、大切なるはお袖判、鎌倉武将へ跡目の願ひ、紛失なさば何を以て、多賀の本領安堵せん。執權望月帯刀へ、この事申し聞かせよと、世に頼りなき御有様。

ト帯刀、ニツコリ笑ひを隱し

帯刀　ハテ、情なき俄の珍事。如何にも殿のお袖判、拙者疾より

イヤ、迂濶には人手にも、手渡しならぬ大事の場所。

ト云はうとして

りう　サヽ、それゆゑに自らへ……ナ、殿の御先途、何事も御諚に任せて……サア、跡目は誰れであらうとも、自らが心に……イヤ、殿様の御指圖……ぢやに依つて、マア兎も角も、大切なるはお袖判、帯刀どの、イザ、お渡しあれ。

ト帯刀へ額にて呑み込ませる。敵役皆々、締めたト思ひ入れ。實事師各自心遣ひの思ひ入れ。帯刀、つくづく思案して

帯刀　ナニサマ・殿の御諚なりとも、お袖判なければ跡目の願ひ。帯刀が胃の腑にとつくりと落ちさへ
致しますならば。

りう　ハテ、自らを何者ぢやと思ふ。疑ひ深きは、大望の……イヤ、大切な今日の仕儀、お袖判なければ、いつまでも、多賀の跡目は、自らが口外ならぬが、合點の惡い。

ト帯刀が額を見る。敵役さてはト喜ぶこなし。立役、無念の思ひ入れ。帯刀、ニツコリ思ひ入れあつて

帯刀　それも尤も。當家の執權、身不肖ながら、帯刀扣へあるからは、跡目は必らず。

りう　云ふにや及ぶ。

帯刀　然らば慥かに、お袖判。

ト懐中より出してお柳へ渡す。お柳、改め、思ひ入れあつて

りう　嬉しや、紛ふ方もなきお袖判、守護なす上からは、今こそ殿の御指圖。

皆々　して、我が君の御諚はな。

ト詰め寄る。

りう　跡目は卽ち弟犬淸。

敵役　ヤア。

ト呆れる。

りう　お袖判慥かに、跡目のお願ひ。イザ〳〵、お渡し申しまする。

ト床几を下がり、犬清が手を取り、右の床几へ上座に直し、袖判を渡す。一學、これを見て

一學　ハテ、どぎまぎと合點のゆかぬ。これではどうやら帶刀どの。

りう　イヤ、大殿の御指圖。蟹江一學、其方こと酒宴を勸め、家を亂す越度に依つて、香川權平兩人とも、知行召上げ御追放。

兩人　ヤヽ、そりやア。

ト悔り思ひ入れ。

りう　さて忠臣は谷澤賴母、いよ〳〵犬清守り立て、跡目相續なす上は、村井正助、姫川勇造、諫言を加へ、家を思ふ御褒美の加増、各々十石。

三人　すりや、我れ〳〵への御惠み。

りう　有り難く頂戴いたされよ。

ト帶刀に向ひ

望月帶刀、切腹いたせ。

　ト きつと云ふ。帶刀、ギヨツと思ひ入れあつて、せゝら笑ひ

帶刀　ハテ、珍らしい事を聞く。弓術馬術は云ふに及ばず、筆道算勘何一つ、拔け目がなさにお取立て、望月山の和尙から、多賀のお家の執權職、忠臣無二の帶刀だワ。身共に向つてナニたは言。

りう　イヽヤ、自殺はお慈悲の遺言。

帶刀　なんと。

　ト 立ちかゝる。お柳、懷より三立目の位牌を出し

りう　覺えがあらう。

　ト 帶刀の目先へ突きつける。

寬仁大度の君に仕へ、我が身の罪も、夫の惡も、明かさにやならぬ今この仕儀。

　ト ちつと泣く。

憎い女子と自らを、恨むも尤も、さりながら、最早遁がれぬお前の俗性、もと高館の一族にて、義理の仇を報はんため、身を粉に碎き遍歷して、當家へ入込み、殿を害し、家國横領なすならば、鎌倉へ弓引く足立てと、かねての企みも、古主を思ふ、忠義の根ざしとお察しあつて、竹

鋸の淺ましい、刑罰にもあふべき惡人を、武門の道ゆゑ切腹せよと、仰せは殿の御情。

帶刀　ムウ。すりや、汝が口走り、我が本名を明かせしよな。

りう　イエ〳〵、なんのさうではない。武に猛くまします名君、鷹野に事寄せ、我れ〳〵を誘き寄せられ、鎌倉へ洩れ聞えたるお前の惡事。

帶刀　ヤヽ。すりや、これまで參りしも、天のなさゞる運拙く、智仁の眼に是非なくも、見顯されて、籠中の鳥、網裡の魚となつたかやい。

トぢり〳〵と口惜しき思ひ入れ。

犬淸　誠や豫讓が詞にも、女はおのれと喜ぶ者の爲に形づくり、士はおのれを知る者の爲に命を捨つると、天晴れ惜しき望月帶刀。

賴母　本名明かして切腹あれ。

トきつと詰め寄る。

帶刀　イヤ、小ざかしき多賀の大領、無量の手段に望月が、忠義も破れ、やみ〳〵と。斯くなる上は、今更に、何を包まん、某こそ、先年奥州高館にて、無念の最期遂げられたる、義經公の御公達、冠者太郎を守り立つて、旗上げなさんと計りたる、泉の小次郎親平とは、おれが事だ。さる

にても、無念や口惜しや、妹が腹に懐姙なす、冠者太郎の御胤こそ、義經公の嫡孫にて、この君守り立て高館の、鬱憤晴らさんものと思ひしも、千日の茅、運盡きて、いま親平が覺悟の生害、見物いたせ。

りう 傾むく運とは云ひながら、思へばいとしや。

ト寄らうとして

イヤ〳〵、我れ〳〵こそは、拙なき運命、お家は末代萬代も、御家督定めの御壽き。

ト扇を開き、ヨロ〳〵と立ち上がる。この時、下座にて、めでたき小舞を謡ひかける。正面の障子一面に開き、眞中に大領、床几にかゝり、小鼓を打つて居る。この後に梅田、菖蒲、皐月、常夏、千早居並び、お柳よろしく小舞一くさり舞ふ間に、着付けの白無垢へ血汐にじんで滴り、タヂ〳〵と苦しむ。皆々、これを見て

女皆 お柳の方さま、この體は。

大領 不便や生害いたせしか。天下の爲に天晴れ貞女。

りう チエヽ、有り難い其お詞。さはさりながら我が夫の

ト帯刀の方へ摺り寄る。帯刀、ザツと見る。

帶刀　悔いて歸らぬ惡念發起。

　　ト刀を腹へ突き立てる。大領、ツカ〳〵と前へ出て、以前の位牌を取上げ

大領　出かした。流石は泉の親平……英雄君前の生害、義經の前にて切腹は、戰場にて討死同然。それを本意に成佛いたせ。

帶刀　イヤ、佛果は願はしからず、同じ淸和の御流れ、冠者太郎の御身の上。

大領　我が眼力に違はずして、鎌倉どのへ怨敵たる、泉の親平、討取つたる功に免じて、冠者太郎の助命は計らひ得させん。紛失なしたる黃金の鷄、これも冠者が爲す業ならん。

賴母　イヤ、それとても瞬くうち。

犬淸　やがて怨敵退散の

一學 權平　その血祭りは。

　　ト犬淸へ切つてかゝる。正助、勇造、立廻りあつて、手早く兩人を下げ緒にて括し上げる。

大領　一張の弓の勢ひたり、東南西北の

帶刀　敵もやす〳〵西方淨土。

　　トお柳と顏見合せ

帶刀　フヽヽ。

トにつこり、木の頭。

大領　ハヽヽ。

ト思ひ入れにて笑ふ。キザミよろしく、帶刀、引廻す。お柳、落入る。拍子、シヤギリ。

幕

第二番目序幕

兩國橋詰の場
榛の木馬場の場

役名――花房求馬。見世物師、銅八。蛇使ひ、おたか。判人、福川屋金六。紅屋婆、おくま。番頭、勘八。紅屋娘、おかん。安達昌伯。姫川勇造。辻番人、元八。湯島の三吉。鳥居又助。

本舞臺、上の方、吹拔きの講釋場、葭簀の圍ひ、日除けの半障子、閉ぢてあり、張り物の立て看板、これに和漢書軍談と記し、内には講座、机の上に湯呑み、拍子木、張り扇、入り口に鹽を盛りたる錢箱。下の方、掛け茶屋、軒に繪を書いたる横行燈、水茶屋道具一式。後へ淺黃幕。よき所に床几を直

し、爰に求馬、假按摩の形にて、前幕の鞘先を袱紗にて包み、腰に差し、金六、判人の形、この兩人立ちかゝつて居るを、銅八、引張りの見世物師。蛇使ひのおたか交つて、これを支へて居る。すべて兩國橋詰めの體。輕業の鳴り物にて幕明く。

銅八　マア〳〵、料簡さつしやりませ〳〵。
求金　料簡ならない〳〵。
銅八　爰でごたつかれては、商賣の邪魔だ。
たか　靜かにさつしやい〳〵。
金六　この泥坊野郎め、どうするか見やァがれ。
求馬　泥坊と云はれる覺えはない。いま一度吐かすと料簡ならぬぞ。
金六　こいつは、耳くぢりを差して居るな。それでうぬ、どうする氣だ。
たか　ハテ、料簡さつしやりませ。
銅八　一體、この喧嘩は、どういふ譯でござりまする。
金六　聞いて下さい。わしは爰に待ち合す人があるゆゑ、講釋を聽きながら揉んで居たら、この按摩めが、おれの懐を探すゆゑ、それで泥坊と云つたのサ。

求馬　イエ〱、私しは泥坊ではござりませぬ。按摩の事ゆゑ、方々揉みましたを、あのやうな事を云ひます。お前方、よろしくお頼み申します。

たか　オヽ、お前は淺草に居なさる、花房何とやらいふ繪描きさんではござりませぬかえ。

求馬　五月前までは幟を描いて居りましたが、そればかりでは過されませぬゆゑ、お恥かしながら按摩足力、上下揉んで人並より、安いわたしと思し召し、御料簡なされて下さりませ。

銅八　あのやうに云はつしやる事だ。お前も料簡なさりませ。

金六　貴樣達が其やうに云ふ事なら、よんどころない、不請しませう。

銅八　それは有り難うござります。

金六　エヽ、これから氣を附けろ。

ト輕業の鳴り物になり、金六入る。銅八、おたかも下座へ入る。求馬殘り、こなし。右の鳴り物にて向うより勇造、羽織袴、大小の形、若黨一人、草履取り一人。後より三吉出て來り

三吉　モシ〱、それへお出でなさるは、多賀の御家中、姫川勇造さまではござりませぬか。

勇造　如何にも。其方は湯島の三吉。拙者はこの邊へ用事あつて罷り越した。

三吉　左樣なれば、それまでお供いたしませう。

ト本舞臺へ來り、三吉こなし。

これで一服おあがりなさりませ。ヲイ〳〵、茶屋の姐え、お茶を上げて下さい。

求馬　ハイ〳〵、畏まりました。

勇造　三吉、見やれ。繁華な事ではないか。

三吉　左樣でござります。爰に來月から嵯峨の釋迦の開帳がござりますて。

ト此うち求馬、茶を汲んで來り

求馬　へイ、お茶お上がりなされませ。

ト勇藏、求馬を見て

勇造　ヤ、おてまへは花房求馬どのではござらぬか。

求馬　これは姫川氏、三吉も一緒にか。

三吉　若旦那、どうして爰に。ヤレ〳〵、好い所でお目にかゝつた。

ト楊弓の合ひ方。

求馬　これは〳〵、勇造どの、見苦しいこの形、お目にかゝるも面目次第もござりませぬ。三吉を御同道。其許には御存じでござるか。

勇造　隨分存じて居るて。コリヤ〳〵、其方どもは、先刻申し付けた通り、合點か。

若黨　畏まりました。

ト兩人は下座へ入る。

求馬　して、其許には、今日これへお出でなされしは。

勇造　別儀でもござらぬ。先達て御用金紛失、右金子には、一兩々々向う梅の極印。それは格別、黄金の鷄、それを所持なす者は同類なりと、卽ち拙者、彼の詮議を蒙るとはいへど、黄金の鷄は、其許キツと詮議し出して、お上へ差上げずば、その身は一生埋れ木と存じ、貴殿を尋ね、わざわざこれまで參つてござる。

ト此うち後へ金六、出かゝり、窺ひ居て、入る。

求馬　忝ないその御心體。某とても、いろ〳〵に詮議いたしますれど、今に手がゝりとてもござりませぬ。

三吉　御恩になつた、旦那の方はこの通り。ア、コレ、力づくで行く事なら、鬼でも蛇でも撲り倒して、取つて來ませうが、在所が知れにやアなりませぬ。

求馬　まだその上に、某にお疑ひかゝり、既に命に及びしを、重左衛門どのゝ情によつて、命助か

り、詮議の種の手蔓にと、下されしはこの鞘に、しつくり合ふ白刃を所持する者こそ、姫君を失ひし科人ゆゑ、片時も放さず所持いたし、種々に心を砕くといへども、これとても今に手がゝりござりませぬ。よくも武運に盡き果てしか。思へば思ひ廻す程、因果な拙者が身の成行き、御推量下されい。

三吉　モシ、その二種の詮議の仕様がござりまする。

求馬　何ぞ手がゝりでもあると申すか。

三吉　何も手がゝりはござりませぬが、無性に尋ねて見ませう。

求馬　何と申す。

三吉　なんぼ廣い世界だと云つて、知れない事はござりますまい。シタガ、若旦那は御浪人の身の上と云ひ、私しどものやうに飛び歩かれもしますまい。そこへ云つちやア輕い身分の私しが、命限りに尋ねて見ませうが、なんと、その鞘をお貸しなされては下さりますまいか。

求馬　成る程、その志しは忝なけれど、大切なるこの鞘、預け遣はす事は。

三吉　成りませぬか。

求馬　如何にも、こればつかりは。

勇造　イヤ、ナニ、求馬どの、さほどの心體、よも粗忽はござるまい。大切なる鞘なれど、三吉にお預けあつても苦しうござるまい。

求馬　何がさて、貴殿のお詞と申し、彼れが心底、如何にも鞘は預けてくれう。

三吉　そんなら、お預け下さりますか。エヽ、有り難うござります。

ト鞘を受取る。

求馬　二品の行くへ、必らず共に。

三吉　お氣遣ひなされまするな。キツと詮議いたして差上げませう。

勇造　まだ申し談ずる仔細もござるが

求馬　爰は往來、人目もあれば。

三吉　青柳へでも、お連れ申しませうか。

勇造　イカサマ、それも一興。

求馬　左樣なら、勇造どの。

三吉　ドリヤ、御案内いたしませう。

ト鳴り物になり、三人、下座へ入る。向うより勘八、前幕の手代にて出て來り、下座より後家おくま、

日傘を持ち、出て來り、兩人、舞臺にて行きあひ

くま　其方は勘八ぢやないかや。

勘八　おかみさまでござりますか。お草臥れでござりませう。これへお掛けなさりませ。

くま　ヤレ〳〵、好い所で逢ひましたなう。

ト兩人、床几へかける。

勘八　時に、お娘御の行くへ、手がゝりでも知れましたか。

くま　サイナウ、其方も知つての通り、娘おかんは、昌伯さまへ、百五十兩の支度金で遣る筈ゆゑ、手付けの金を受取つて、間もなく娘は、あの三吉と馳落ち。手付けの金は遣ひ込み、おかんが行くへは知れず、昌伯さまへ云ひ譯なさに、娘の在所を尋ねんと、今日も一日あくせくと、本所邊を心ざし、番場の町を後になし、小梅、原庭、業平橋、石原道を足曳の、山の宿から今戸邊、眞崎稲荷大明神、娘を尋ねに王子の稲荷、元の起りは、元稲荷に、のぼせて敦盛、熊谷稲荷の大明神、利益はあれど、どういふもんだ廣德寺の稲荷大明神。

ト思はず、有り合ふ茶碗を、狐のやうに並べながら云ふ。

オヽ、辛度やなう。

勘八　それでは、お疲れでござりませう。
くま　して、其方は、どこへ行た戻りぢや。
勘八　私しもその通り、お娘御のお行くへを尋ねに出ましたが、モシ、有やうは、斯う云ふ時が、呑氣ゆゑ、先づ一ツ目の橋越えて、ズッと辨天松井町、それから愛宕で二ツ玉、ボンと云はせた常磐町、これから緣の綱打場と、尻をからげて裾つゝき、表櫓や空櫓、腹の時計も日の仲町、もしや爰らに居やうかと、見て行く裏や三間堂、通し矢數は當る筈、さしづめ一の富が岡、クルリと廻つて中木場へ、出ると向うの川岸に、紫匂ふ藤の茶屋、爰で一杯引ッかけて、暮れてとつかわ歸り道、もしお娘御に逢ふならば、この厄拂ひが引ッ掴み、西の海とは思へども、紅屋の内へサラリ／＼。サア、此やうに致しますも、私しが不所存にて、お暇下されたゆゑ、是非なく旅稼ぎして居たを、お取上げ下されました御恩送り。その上、お前様が毎晩々々、可愛がつて下さりますれば、此やうな有り難い事はござりませぬ。
くま　其やうに云やれば、猶いとしさが增るわいなア。

ト寄り添うて思ひ入れ。この時、講釋場の日除け障子を内より取る。高座の上に昌伯、机を叩きて、修羅を云つて居る。兩人、これに心付かず

くま　コレ、勘八、願うてもない、丁度好い首尾。ちつと此方へ寄りやいなう。

ト勘八を引寄せる。昌伯、高座の上から見付け、猶々机を叩き、腹の立つ思ひ入れ。

勘八　でも、爰は往來、人が見たら水を掛けませう。

くま　ナニ、犬ではあるまいし。

勘八　そんなら、おくまさま。

くま　勘八。オヽ嬉し。

ト抱き付く。昌伯、これを見て、高座より轉げ落ちる。仕出し皆々立寄つて

仕出　講釋師が目を廻したく

ト昌伯を連れて出て來る。これにておくま勘八、別れて思ひ入れ。下座より銅八、蛇使ひの女、出て來り

銅八　どうしたのだく。

仕出　講釋師が目を廻しました。

銅八　そりや大事だ。水を吹かけるがいゝ。

仕出　合點だく。

ト水を持って來て吹きかけろ。銅八、下男、介抱する。昌伯、心付き、銅八、蛇使ひの女、皆々、捨ぜりふにて向うへ入ろ。おくま、勘八、昌伯殘り

勘八 ヤ、、こりや此方の聟どの。

くま 昌伯さま、モシ、どうなされました。

昌伯 オ、、痛い〳〵。

ト脇腹を抱へて思ひ入れ。

くま 勘八、御介抱々々々。

勘八 畏まりました。

ト兩人介抱する。

昌伯 どうしたも凄まじい。うぬ等に逢ひたくつてならぬ所へ、うしやアがつて、飛んだ所で始めたゆゑ、おらアひどい目にあつた。サア、婆ア、番頭も動きやアがるな。

勘八 御尤もでござります。さりながら、合點が參りませぬ。あなたは御大家のお醫者様、それに又、この形は。

昌伯 おかんにかゝつて、たうとうおらア講釋師。もう斯うなつたら、いよ〳〵おかんを女房に持たに

やアならぬ。サア、手付けの帶代金、後金の百兩も爰に持つて居る。サア、これを受取つて、おかんをおれにくれろ。

ト財布の金を見せる。

くま　サア、その金は欲しうございますが、おかんは駈落ち致しました。

昌伯　ヤア、それは一人か。但しは相手があるか。

勘八　サア、その相手は、お前さんも御存じの湯島の三吉。

昌伯　ヤア、腹が立つ〳〵。それより太いはこの婆ア、手付け金を取つて置きながら、駈落ちしたで濟まうと思ふか。大騙りめ。この趣きを、代官所へ。

くま　サア、御尤もでござります。それゆゑ娘の行くへを尋ねて居りますわいなア。

勘八　今晩中にも見付け出し、お前さんの所へ連れて參つたら、好いぢやござりませぬか。

昌伯　おかんさへ受取れば云ひ分はない。その時には、この金と引替へ。シタガ、心當りが

くま　ござります〳〵。高飛びは致しますまい。この近所が怪しい。モシ、その埋め所は。

ト昌伯に囁やく。

昌伯　イカサマ、そこらであらう。それに付けても、憎いはあの三吉め。

勘八　モシ、お腹の立つは御尤もだが、何事も騙すにしくはござりませぬ。
くま　暮れるを待つて、何かの手番ひを致しませう。
昌伯　なんとそれまで、講釋でも聞いて待つて居ぬか。
勘八　モシ、講釋は何でござりまする。
昌伯　弓削の道鏡お伽の物語り。
くま　ヤア、それを聞いたら、また氣が味に。ナア、勘八。

ト思ひ入れ。

昌伯　オツト、先刻の事は、もうならぬぞ。
勘八　お前も轉りはなりませぬ。
くま　左樣なら昌伯さま。
昌伯　二人も一緒に。
勘八　サア、參りませう。

ト輕業の鳴り物にて、三人、講釋場の內へ入る。下座より三吉、窺ひ出て

三吉　いま聞けば、帯代の手付けを寄越したと云ふは、あの男か。おかんを釣出し、埋めては置いたが、

どうか彼奴らに、氣取られた樣子。こいつは滅多な所へは置かれぬわえ。ア丶コレ、氣の付かぬ所へ。ハテナ。オ丶、〆めた。あるぞ〳〵。ちつとも早く。

ト輕業の鳴り物になり、足早に花道へかゝる。向うより又助、誂らへの形、藤倉の草履にて出て來る。兩人行きあひ

又助　三吉か。貴樣にやア、ちつと話しが。

三吉　おらア、急の用だ。話しならむらくが所へ行かッし。

ト云ひながら、ツイと向うへ入る。又助、悧りして

又助　あの野郎め。氣が狂つたさうだ。

ト舞臺へ來る。下座より金六出て來り

金六　又公、いゝ所で逢つた。

又助　金六、何ぞ用か。

金六　大變な話しだ。

又助　大變な話しとは。

金六　サア、別の事でもないが、先刻聞いて居れば、慥か彼奴は多賀の家中、黄金の鷄を持つて居る者

は、合邦太郎が同類と、爰らあたりへヅキが廻つたが、貴様はそこに、彼の為て吉を持つて居るか。

又助　そんなら、もう此あたりでその噂か。それぢやアこの鷄も。

ト出して見せる。

金六　コレ〳〵、此やうな結構な物を、いつの間に。

又助　いつぞや、螢澤の庵に居る、木屋の辰五郎が所から、捲上げて來たのよ。

金六　さう云ふ事なら猶の事、早くこかしてしまふがいゝぜ。

又助　それも承知だが、大枚の代物、滅多に人手には渡されず、ハテ、困つたものだ。なんと、てまへが、預かつてはくれまいか。

金六　飛んだ事も云つたものだ。ヅキの廻つたその鷄。おれも命が惜しい。預かる事は、御免だ〳〵。

又助　ハテ、おぬしに預けて後の手段は、斯うするワ。

ト囁やく。金六呑み込み

金六　さう云ふ事なら、おれが預からう。

又助　そんなら必らず。

ト黄金の鷄を金六に渡す。

金六　この代物を預かつて、おらアこの場を。

又助　ちつとも早く。

金六　合點だ。

ト輕業の鳴り物になり、金六、向うへ入る。又助、こなしあつて

又助　あの野郎に、鷄を渡して置けば、跡はカウ〳〵。よし〳〵。

ト頷づき、講釋場の内を覗き

オイ〳〵、先生々々。

昌伯　オイ〳〵、おれか〳〵。

ト合ひ方、楊弓の音にて、昌伯出て來り

おぬしは又助ではないか。何の用だ。

又助　ちよつと、あそこまで來さツし。

ト袖から手を入れ、グツと締め上げる。昌伯、惘りして

昌伯　エヽ、そりやどこへ。

又助　知れた事だ。姫川勇造さまが。
昌伯　ナニ姫川勇造。其奴は大變々々。コレ〱、又助、おらア何も覺えはない。頼む〱。
又助　云ひ譯があるなら、彼方へ行つてするがいゝ。おらア勇造さまに頼まれて來たのだ。
昌伯　ヤア、てまへは屋敷を逐電した惡黨であつたが、そんなら善心に立返つたか。
又助　左やうサ、今までの惡事を後悔して、善心に立返り、勇造さまと心を合せ、お家の寶は元より、兼ねては盜人の詮議もするのだ。
昌伯　それは、おぬしは見上げた事だ。勇造さまが用といふは、定めておれが盜んだ金の事であらう。その金を差上げて、おれも善心に立返る。どうぞてまへ、云ひ說いてくれまいか。
又助　どうして〱。一旦盜んだ金を返して、ナニ御勘辨があるものか。
昌伯　サ、そこがおぬしも馴染み甲斐の所だ。どうぞ頼む〱。
又助　それ程に云ふ事なら、マア上げて見よう、して、その金は。
昌伯　爰に持つて居る、又衆、偏へに頼む〱。
ト財布のまゝ金を渡す。又助取つて
又助　耳を揃へて百兩あるかね。

昌伯　そつくり其まゝ。どうぞ頼む〳〵。
又助　どうぞ御勘辨あればいゝが。
昌伯　ハテ、おぬしと云ふ手本があるから、御得心さつしやるであらう。
又助　イカサマ、そこもある。マア〳〵、案じなさる事はない。あの講釋場で待つて居なさい。いづれ吉左右知らせませう。
昌伯　偏へに頼む。
又助　モシ〳〵、これから逃げては、お前の爲にならねえよ。
昌伯　ナニ逃げるものか。頼む〳〵。
ト講釋場へ入る。又助、跡見送り
又助　まんまと首尾よく、耳を揃へて小判で百兩。
トこの時、後へ勇造、家來を連れて、窺ひ居て
勇造　怪しい曲者。ソレ召捕れ。
家來　やらぬワ。
ト組み付くを、又助、立廻り、勇造もかゝるを振り解いて、ちよつと當て、この間に又助、件の財布

を首に掛けながら、一散に向うへ逃げて行くを、勇造家來、起き上がつて、跡追ひ駈けて走り入る。

この時、昌伯、出かゝり見て

昌伯　なんだか、表が騷々しい。案じられるはおれが身の上。又助めが、うまく云ひ說いてくれゝばいいが、心がゝりはおかんが事。それに付けても、あの三吉、人知れずぶッ放せば、戀の恨みを晴らす道理。それ〳〵。

ト下座より求馬、出かゝり居て

求馬　イヤ、さうはならぬワ。

昌伯　ヤア、わりやア求馬だな。邪魔せずと、そこ退け。

求馬　イヤならぬ。

昌伯　なにを。

ト輕業の鳴り物になり、兩人、立廻りあつて、よき見得になり、この道具廻る。

本舞臺、眞中、辻の番家、辻行燈、六尺棒、左右玉椿の生垣、榎の吊り枝。うしろ黑幕。爰に元八、老けたる拵らへにて、板の間に衝立を前に置き、土火鉢にて、蚊をいぶして居る。すべて榛の木馬場、

夜の景色、かすめたる雷鳴、雨車の音、時の鐘にて道具とまる。

ト向うより三吉、以前の形、おかん兩人、下駄がけ、合ひ傘にて出て來り

かん モシ、こりやマア、どこまで行くのでござんすえ。

三吉 どこと云つても知れた事、おぬしも知つての通り、友達の所に世話になつて居たが、おくま婆ァや勘八が、おいら二人の居所を嗅ぎつけた樣子。

かん それゆゑ今宵のうち、脇へ行くのかえ。アレ、また光るわいなア。

三吉 ソリヤ、又すべるな〳〵。

ト兩人舞臺へ來る。

オイ〳〵。隱居は內か〳〵。親方々々。

元八 何者だ、通れ。

トおかん悄りする。

三吉 なにサ、ありやァ叱つたのぢやァねえ。オイ〳〵、雨が降つて素敵に濡れた。早く明けて下さい

元八 雨が降るのに、捨て子がある。そいつは大變々々。

ト一本差して、棒を持ち、出る。

三吉　捨て子ぢやァない、おれだよ。

ト元八、よく〳〵見て

元吉　オヽ、三吉どのか。いま時分どこへ行くのだ。鐘の下へでも行つたのか。

三吉　其やうな事ぢやねえ。ちつと頼む事があつて來たのよ。

元八　なんだ、頼む事とは。

三吉　外でもねえ、斯う云ふ譯よ。

ト囁く。元八、呑み込み、おかんを見て

元八　オヽ、女か。いゝたぼだ。その頼みを聞いてやりたいが、爰は大切な役所だ。ならぬ〳〵。通れ。

三吉　ハテ、ねんごろにも似合はねえ。よし〳〵。そんなら借りますめえ。時に親方、久し振りだ。角の酒屋で一杯遣りなせえ。

ト懐より錢を一本出して遣る。元八、見て

元八　ナニ、よさつしやればいゝ。氣の毒な。志しなら貰つて、廻りながら一杯やつて來ませう。

三吉　それがいゝ。跡はおれが呑み込んだ。

元八　そんなら跡を頼みます。火の用心〳〵。

ト時の鐘、合ひ方になり、元八、ばつてう笠、下駄にて、棒を突き、下座へ入る。

三吉　サア、邪魔は拂つた。今までは心安い友達の内でも、二階に居れば根太がギチ〳〵鳴つて、心遣ひであつたが、今夜はその心遣ひがなくなつて、心ゆつくり。

かん　サア、お前とわたしと早う世帯して、こちの人、女房と云はれて見たうござんす。

三吉　それも何かのごたつきが濟んでの事。それまでは、當分居候ふ。今夜は爰に引越し女房、もつと此方へ、よりの舟宿、西海屋。

かん　それぢやと云うて恥かしい。どうして爰へ。

三吉　ナニ遠慮があるものか。

かん　アレ、忙しない。待ちなさんせ。

ト兩人、思ひ入れ。よき時分より元八、ツヽと出て見て居る。三吉、思はず人影を見て

三吉　通りませう。

ト大きな聲で云ふ。元八悔りする。

元八　ハイ〳〵

ト思ひ入れ。三吉見て

三吉　ヤ、親方ぢやァねえか。
元八　廻つて來ました。
三吉　早い廻りやうだ。
元八　三公、見たぞ〱。これぢやァおれも吉岡町へ行つて、大づゝをぶッ放さにやァならぬわえ。
三吉　そんなら、路次の締まらぬうち、早く行きなさい。留守は承知だ〱。
元八　有り難い。ドリヤ、長屋と出かけようか。
ト花道へ行きかける。向うにて
勇造　泥坊々々〱。
ト元八、取つて返す。兩人うろたへ、囁き合ひ、奥へ入る。向うより又助、以前のまゝ逃げて出る。跡より勇造、家來、追ひ駈けて來る。組み付くと又助、左右へ蹴散らし
御番の衆、御加勢々々々々〱。
元八　心得ました。
ト雨車、雷鳴の音になり、元八勇造かゝる。立廻り。トゞ兩人危ふい所へ、奥より三吉おかん出て
三吉　今のお聲は勇造さま。

ト六尺棒を取つて又助に打つてかゝる。暗き立廻り。トヾ三吉、又助を捕つて投げてやる。これにて縛り上げる。此うち元八、弓張り提灯を出し

元八　ヤレ〳〵、お手柄〳〵。

三吉　どんな盗人だ。面を見てやるべい。

ト又助と顔見合せ

又助　ヤ、おぬしは三吉。

三吉　思ひがけない又助どんか。

又助　おきやアがれ、大きにお世話。とんだ目に遭はしやアがつた。

三吉　さうとは知らず、ハテ、氣の毒な。

勇造　町人ながら、流石名うての湯島の三吉、天晴れ〳〵。お上へ對して大忠節。この又助ことは屋敷を逐電の砌り、舊惡顯はれ、大切なる囚人。

三吉　左樣なら、あなた樣には。

勇造　この旨お上へ言上まで。

元八　すりや、科人の儀は。

勇造　御苦勞ながら、懸り合ひでござれば、しかと當所へ預け申した。

元八　ハア。

ト時の鐘になり、勇造家來向うへ入る。

ヤレ〳〵、三吉どの、御苦勞でござつた。時に、今の女中は。

三吉　アヽコレ、大事の囚人、逃がさぬやうに。

元八　合點だ〳〵。

ト時の鐘にて、向うより中間一人、赤合羽を着て、醉つたる體にて出て來り

中間　番屋の親方は居るか。角の酒屋で友達が喧嘩をして居る。ちよつと來て下さい〳〵。

元八　行つてやりたいが、大切な科人を預かつて居るから、今は行かれぬ。

中間　科人は構ふ事はない。ちよつと來て下さい〳〵。

元八　エヽ、しつこい。行かれぬと云ふに。

ト兩人、爭ふはずみに、合羽スッポリ取れる。これを知らず無理に引ッ張り

中間　早くござれ〳〵。

三吉　モシ〳〵、用があるなら行きなさい。科人の番は、おれがして居ます。

元八　そんなら、取逃がさぬやう頼み申した。

中間　早く〳〵、ござれ〳〵。

ト無理に引ッ張り、元八中間、向うへ入る。跡、合ひ方になり、三吉、又助を見て

三吉　又助どん、貴樣と知つたら、こんな事はしまいものを、今ぢやァとんだ氣の毒。

又助　なにサ、おれが斯うなるのは當り前よ。おらァ疾に納める所であつたが、今日まで娑婆に居たが儲けサ。

三吉　時に、なんぞ喰はねえか。

又助　蕎麥でも、さう云つてやつてくれ。

三吉　さう云つてやりたいにも、留守居がねえ。

トこの時、勝手にて何か音する。

又助　勝手に誰れか居るぢやァねえか。

三吉　イヽヤ、なにサ、ありやァ鼠よ。

又助　鼠にしちやァ、大きな音だ。

ト兩人こなし。雨車、時の鐘。向うより金六、以前の形にて、安下駄、傘をさし出て來り、舞臺へ來

て

金六　御免なさりませ。私しは通りの者でござりますが、下駄の鼻緒が切れました。どうぞ爰をお貸しなされて下さりませ。

三吉　アヽ、おかけなさりやし。

金六　それは有り難うござります。

ト人の縛られて居る姿を見て

モシ、何か預け物がござりますね。何でござります。

三吉　イエ、なにサ、ちよつとした泥サ。

ト又助へ氣の毒さうに云ふ。

金六　ナニ、泥坊だえ。そいつはいゝ氣味をした。この頃は大分物騒だから、その筈サ。モシ、その泥坊で話しがござります。私しは梅堀の者でござりますが、去る所へ掛けを取りに行きましたが、いま手元に金が無いと云つて、抵當に寄越した、代物がござりますが、これはお上でお尋ねなさる品ゆゑ、お詮議にあはぬうち、此方からお訴へ申して出れば、私しに祟りはござりませぬが、盗まれた人は、家も斷絕して、一生埋れ木になりませう。氣の毒な事サ。それもその筈、これを御

覽じませ。此やうな結構な代物でござります。

ト鷄を出して見せ

詳しい事は知りませぬが、黄金の鷄と云つて、御大家の寶ださうな。

三吉 ムウ、そんなら黄金の鷄と云ふは、この事か。アノ、いよ〳〵これが。

金六 なんと結構な物ではござりませぬか。望み手があれば、大枚の金になりさうな物。

三吉 成る程。イヤ、なんと物は相談だが、この鷄とやらを、わしに賣つちやア下さるまいか。

金六 アノ、貴樣がこの品を。

三吉 外よりお上へ差上げる時は、お家の大事。

金六 エ。

三吉 サア、大事ねえ事なら、その鷄、わしに賣つて下さい。

金六 どうして〳〵、お訴へ申さねばならぬ代物。さりながら、いま話した通り、わしが貸した百兩の金が埋る事なら、內證で賣つてもやらうが、さもなくば、明日は早々訴へて出ます。幸ひ雨も上がつたさうだ。これは有り難うございます。

ト行きにかゝるを三吉留めて

三吉　サア、さうではあらうが、その品ばかりは、是非ともおれが。
金六　イエ〳〵、訴へて出にやアなりませぬ。
ト此うち又助、繩付きのまゝ逃げようとする。三吉うろたへ、又助を留めて
三吉　オツト、大事の囚人、逃がしちやアならねえ〳〵。
金六　ドレ、急ぎませう。
ト行くを又、此方へ來て
三吉　サア、今の話しの通り、百兩で買ひませう。
金六　百兩の金にさへなる事なら、賣つて進ぜう。
三吉　賣つて下さるか。エヽ、忝ない。
金六　代物と引換へに、サア、金受取りませう。
三吉　サア、その金は、今爰には。
金六　金が無ければ、お斷わり。この雨止みに、ちつとも早く。
ト振り切つて向うへ入る。三吉、跡見送り
三吉　オイ〳〵、待つて下さい〳〵。エヽコレ、それと知つたるお家の寶、見す〳〵見遁がすこの場の

仕儀。いつその事に跡追ひ駈けて。イヤ〳〵、それにしても、百兩といふ金は無し。

ト思ひ入れ。この時又助、一散に駈け出さうとする。三吉留める立廻り。又助の懐より金財布出かゝりある。

三吉　この囚人は、諦めの悪い。もう斯うなつたら天の網、預かつたはこの三吉、知つての通りこの場の手詰め。それに度々逃げようとするが、それぢやァあんまり達引がねえ。

トこの時フト又助の財布を見て

又助さん、貴様の首に掛けて居るのは、そりやァなんだ。

又助　これか、こりやァ金よ。

三吉　エ。

又助　しかも、耳を揃へて小判で百兩……兼ねて手管で。

ト鼻唄を唄ふ。

三吉　ナニ〳〵、小判で百兩。

又助　うむよ。

三吉　エヽ、有る所には、たんとあるなァ。

又助　金がいるなら、遣はねえか。

三吉　サア、知つての通りの譯ゆゑ、借りたいは山々だが

又助　同類になるのを案じるのか。おれも又助だ。そんな甘口な事をして、てめえを抱き込むものかえ。

三吉　成る程、貴樣の氣性も知つて居る。そんなら金を借りるよ。

又助　心置きなく遣ふがいゝ。

三吉　忝ない。その代り、貴樣の評定の極まつた時には、跡のとひ弔らひは案じやるな。おれが先祖と同樣にして置く。それとも云ひ拔けて出た時にやア、元金は云ふに及ばず、利息も禮金もしつかりだ。

卜首の財布を取らうとする。

又助　オット待つたり。その前に、繩を解いてくれ。

三吉　エ。

又助　金を貸す代り、おれを逃がしてくれ。

三吉　それぢやアどうも。

又助　ならねえか。そんなら此方もお断わり。

三吉　待つてくれ〳〵。切端詰まつた今夜の仕儀。逃がした科は、おれが引受け。

ト繩を解いて

約束通り、サア金を。

又助　ソレ、金よ。

三吉　忝ない。

又助　とんだ目に遭つた。ドレ、ブラ〳〵行かうか。

三吉　ブラ〳〵ぢやねえ。早く逃げろ。

又助　エヽ、小腹がへつた所爲か、寒くなつた。

ト云ひながら行かうとする。

三吉　コレ〳〵、その形で行つたら、また今のやうに……これでも着て行きやれ。

ト以前の合羽を出す。

又助　成る程、こいつはいゝわえ。

ト合羽を引ッかけ、落ちてある鞘を何心なく差して

そんなら三吉。

三吉 氣を付けて、行かつし。

又助 合點だ。

ト時の鐘になり、又助行かうとする。向うより金六出て來り、兩人行きあひ、顏見合せ、ちよつと思ひ入れあつて、又助、行く振りして、小隱れする。金六は舞臺へ來て、何か尋ねながら

金六 モシ〳〵、爰らに鼻紙袋はございませなんだか。

トこの聲を聞いて

三吉 ヤ、お前は先刻のお人。今お前の跡を、追ひ駈けて行く所でございました。

金六 何ぞ用かね。

三吉 用どころか、先刻の代物を買ひませう。

金六 金が出來ましたか。

三吉 しかも、小判で、ソレ、百兩。

金六 それはめでたい。ソレ、鷄。

ト兩人、受取り渡しをして

三吉　モシ、お互ひに話しはこれぎり。

金六　それサ、此方も身分に係はる事……イヤ、急ぎませう。

ト足早に向うへ入る。

三吉　先づこれで、一種は手に入つたが、あの鞘は大事の物だが、どうしたか知らん。もしや今のどさくさ、そこらに落ちてはないか。それは跡での尋ね物。何は兎もあれ、この一品を求馬さまへ……おかんや〳〵。

かん　アイ〳〵、もう出てもようござんすかえ。

ト合ひ方になり、奥より出て來る。

三吉　いゝどころか、喜んでくれ。てまへも知つての通り、おれが尋ねる寶が手に入つた。

かん　そりやマア、嬉しうござんすな。お前の御主人様も、さぞお喜びでござんせう。

三吉　お喜びの段か。これさへ手に入れば、お屋敷へ御歸參なさるワ。

ト思ひ入れの時分より又助、花道へ行き、窺ひ居て

又助　まんまと首尾よく。

三吉　ヤ。

ト花道を窺ひ見る。又助は合羽をスッポりかぶる。木の頭。後にて「火の廻り」と用心棒、石打ちの音聞える。

三吉　ハヽア、夜廻りださうだ。

ト兩人思ひ入れ。又助、向うへ入る。よろしく拍子　幕

大切

本所横網小俊内の場
淺草富士祭の場

役名――女力持ち、淺妻小俊實ハ三吉云ひ號け、淺尾。紅屋の娘、おかん。口上云ひ、八八。木戸番、藤兵衞。輕業師、彌五平。同、權七。判人、福田屋金六。蛇使ひ、おたか。小奴、駒吉。鳥居又助。湯島の三吉。盗賊、合邦太郎實ハ冠者太郎經之。

本舞臺、三間の間、赤壁、納戸、暖簾、戸棚。よき所に神棚、臺所道具飾り、上の方、障子屋體。門口据ゑ物、路地の入り口、横網町女曲持ち、淺妻小俊が借家の門口。軒下に金六、前幕の形にて、夕立にあひたる體にて、雨宿りして居る。内には輕業師の彌五平、權七、丸裸にて、高麗屋縞の浴衣を脱ぎかけ、棹へ掛けて居る。木戸番藤兵衞、鰹を刺身に拵らへて居る。彌五平、一升德利を持ち酒を

飲んで居る、てんつゝ、雷鳴の音にて幕明く。
ト金六、耳を押へ

三人　ソリヤ、光つたぞ。

金六　うんらいぐうせいでん、桑原々々。
ト屈み居る。

彌五　コレ〳〵、藤兵衞、刺身は出來たか〳〵。

藤兵　いま出來るわな。ハテサテ、忙しない手合ひだ。

權七　斯うまた、天界が荒れちやア、おいらが商賣には、雷鳴は親の敵も同然だ。今の夕立にズツプリ濡れた。

彌五　裸では、小倅さんが歸つた時に、恰好が悪い。なんぞ着て居さつしやいな。

權七　そこは又、おれだワ。浴衣はいくつも有るの。
ト外の浴衣を出し、着る事。

藤兵　このマア降るのに、おいらが太夫の小倅さんは、あの芝居に降り込められてござるかの。

彌五　どうして〳〵、見せ物小屋は漏つて堪るまい。イヤ又、人の氣も知らねえ、間抜けな雷鳴だ。

金六　モシ〳〵、先刻から雨止みをして居やすが、お前方は雷鳴樣を、素敵に惡く云ひなさるが、お下がりなさると惡いから、もう好い加減にするがいゝ。

彌五　ナニ、お前、雷鳴が落ちると、ひッ捕まへて、引ッ張り物に出すわな。成らうなら爰の内へ落ちればいゝ。

金六　イヤ、とつけもない衆だ。

彌五　お前、雨をやめて居なさるなら、此方へ入りなさい。

金六　イヤ〳〵、そんな内で雨をやめて、雷鳴に落ちられてはならねえ。イヤ又、この頃は出ると降られる。

彌五　エヽ、臆病な人だ。そんなら斯うしなさい。この路次を入ると、稻荷樣の宮があるから、あそこへ入つて居なさい。

金六　そりや、有り難い。

權七　それとも、爰に居ても氣遣ひは無い。今に蛇女が歸ると、蛇を素敵に持つて來るから、それぢやア雷鳴の落ちる話しもねえのサ。

金六　エヽ、とんだ事を云ふ衆だ。雷鳴樣より蛇は嫌ひだ。して、爰の内は何商賣をしなさる。

藤兵　淺妻小傻と云ふ女の力持ちサ。

金六　ア丶、小傻さんの內か。道理で、いろ〳〵な衆が居ると思つた。

皆々　向うの突き當りだ。

金六　そのお宮へ入りませう。

彌五　さうしなさい。これからは又、おいらは踊りだ。

權七　それがい丶〳〵。根太が拔けても大家の物だ。頓着はねえ。踊らう〳〵。

彌五　コレ〳〵。

ト空を見て

雷鳴雲から飛んだけな。

權藤　撥も太皷も飛んだけな。

ト踊る。

金六　エ丶、不氣味な手合ひだ。爰には居られぬ。

三人　臍を摑もと、飛んだけな。

ト地踊り、三人醉うて踊る。金六はこれに恐れ、捨ぜりふにて路地へ入る。この踊りの鳴り物へ雷鳴

たかぶせ、雨車の音、向うよりおたか、蛇使ひの娘の拵らへにて、惣模様の裲襠をかむり、八八、輕業の口上にて、輕業形の駒吉を負ひ、桃色の肩衣をかぶり、跡より小俊、紅縮緬板締めの襦袢、手拭の鉢巻、力持ち女の形にて、青傘をさして、兩國の芝居より夕立にあうたる歸り、裾をからげて出て來り、直ぐに内へ駈け込む。踊つて居たる三人、膽を潰し

三人　ソリヤ、雷鳴が駈け込んだワ。

八八　エヽ、雷鳴ぢやァない、夫太のお歸りだワ。

三人　アヽ、小俊さんか。降るのによく歸りなさつた。

小俊　降ると云つても、また素敵になつたの。なんでも今の一つは、一ッ目あたりへ落ちた音だよ。

たか　左樣サ、大方大橋のあたりへ、お下がりなさつたかも知れない。

八八　大概な事なら、輕業小屋に居るけれど、この駒吉が怖からうと思つて、一目散に駈け込んだ。てまへ、怖かつたであらうの。

駒吉　ナニ、雷鳴が怖いものか。今度鳴ると睨み落すワ。そこは又、江戸ッ子だ。誰れだと思ふ、アヽつがもねえ。

彌五　成る程、栴檀は二葉。

皆々　江戸ッ子様は違つたものだ。
權七　小俊さん、お前、濡れなさつたらう。
小俊　ナニ、駈け通しに駈けたから、濡れねえよ。
藤兵　コレ〳〵、おたかや、てめえ、蛇を逃がしやァしねえか。
たか　商賣物だ。この春に入れて、引ッ抱へて來たね。
小俊　時に、明日から駒吉が、新物の稽古は片付いて居るか。
彌五　大概は覺えやしたが、一番浚つて見ませうか。
小俊　子供の事だ。さうしてやんねえ。
八八　先づは幼なき者、支度にかゝらせまする。

ト鳴り物。おたか、三味線。權七、太鼓。藤兵衞、ちやろめらを吹く。駒吉、彌五平、身拵らへする。

八八、肩衣を懸け、よろしくあつて、東西ト鳴り物打ち上げる。

高うはござりますれども、これより口上を以て申し上げ奉りまする。これに扣へましたるが、築島合羽、小竹駒吉兩人の者ども、前藝と仕りまして、輕業の一面、香爐獅子が最初でござい。

ト鳴り物になる。彌五平、駒吉を相手に輕業の思ひ入れよろしくあつて納まる。

八八　大概、そんなものよ。時に、今日の帳面を見せな。

藤兵　合點だ〳〵。

ト大福帳を持つて來る。

八八　モシ〳〵、小俊さん、今日の面割りを一つに締めて、コレ〳〵、十兩二分二朱ござりやすによ。

その積りでござりやせうね。

小俊　さうサ、お前方の立前が、その位は溜つて居るよ。今にも入用なら、割つてやらうか。

ト小簞笥より包み金十兩を出して見せる。

彌五　そんなら、斯うしやせう、その内をマア、わしが分を割つてくんなさい。

權七　貴樣が割るなら、おれが分も勘定してもらひやせう。

八八　これサ〳〵、どうしたものだ。小俊さんに預けて置いちやア、大丈夫だわな。ナニ間違ひがあるものか。預けて置きねえ。もし間違ひがあれば、憚りながら、わしが勘定するわな。お前方はよう割りたがるワ。とんだお半長右衞門だ。

彌五　ナニ、あの子を疑ぐるものかな。その上に貴樣の請合ひ、間違つたなら、こなたが勘定しようと云ふ位な慥かな事だ。ナウ、さうぢやアないか。

權藤 さうサ、丈夫な方へ預けるがいゝわな。

小俊 丈夫でもあるまいが、預ける氣なら、預かつて置かうよ。

八八 それが好いのサ……雨は止んだが、天氣にしたいの。

たか 雨が止んだら、この子を連れて、洗湯へ入つて來よう。

駒吉 おらアおぶさつて行かう。

たか よく我まゝを云ふぞ。

藤兵 コレ、今の酒を始めようか。

彌五 今日はてまへ、太鼓を張つたの。

權七 鰻でも買やれ。

藤兵 エヽ、人ぢらしな。

小俊 コレ、口上さん、蚊いぶしを仕掛けてくんな。

八八 オツト、合點だ。

たか ドリヤ、洗湯へ行かう。

皆々 サア、酒にせう。

ト流行り唄になり、彌五平、權七、藤兵衛、奥へ入る。おたか、駒吉を脊負ひ、向うへ入る。八八、行燈を灯し、火鉢へ蚊いぶしを仕掛ける事。

八八　モシ、小俊さん、お前、今日の噂を聞きなさつたか。

小俊　イエ、何にも聞かねえの。

八八　サ、とんだ噂があるね。あの湯島の三吉といふ人が、譯は詳しく聞かねえが、盗人の同類だとやら、怪しからぬ事を云ひやすが、あの三吉といふ男は、お前、何か譯があるぢやァござりやせぬか。

ト小俊、思ひ入れあつて

小俊　イエ〳〵、決してわたしやァ、そんな覺えはないの。

八八　エヽ、よう嘘をつきなさる。わたしやァこの間。洗湯で見たよ。お前の手には、三吉女房と彫つてあるよ。

小俊　エヽ、あの彫り物は、心安くした時分の、誠の浮氣が今ぢやァ後悔。

八八　それぢやァ、氣遣ひはないが、わしが案じられるからよ。

ト思ひ入れ。時の鐘、バタ〳〵になり、向う揚げ幕にて

大勢　泥坊々々。

ト人音する。又助、前幕の形にて、一散に駈けて出て來り、門口を入つて、シヤンと戸を締め、ホツと思ひ入れ。小俊、八八、悔りして

八八　エヽ、誰れだ。悔りさせた。どこの人だ。

小俊　何の用だか、よく訊きねえな。

八八　あつたら膽を潰させたよ。お前、どこから何の御用で來なすつたえ。

又助　ハイ、御免なさりませ。今あの東小路に、病犬がうしやァがつて、すんでの事に喰ひ付かうとしやしたから、どこがどう、お前さんの所へ

小俊　駈け込みなすつたか。

又助　ハイ、大きにお騷がせ申しやした。

小俊　日暮れぢやァあり、わつちやァ又、何か入つたかと

ト云ひさま、兩人、顏見合せ、思ひ入れあつて

オヤ、お前は、どうやら見た顏だの。

又助　さう云ひなされば、お前も……オヽ、知つた顏だ。アヽ、それ〳〵、いつぞや淺草馬道の、戸澤

小俊　長屋の獨り住み、繪描きの内へござつたる、以前は多賀の召仕ひ。淺尾も今は世に落ちて、片瀨の在で濱仕事、力あるのを幸ひに、女のあるまい曲持ちの、お江戸で生れた甲斐もない、大阪下りも氣が利かないね。

又助　表の門へ墨黑に、太夫淺妻小俊とは、アノお前の事か。

小俊　お里が知れやす。

又助　どこにどういふ

小俊　馴染みがあらうか。

又助　知らねえ事とて

小俊　又助さん。

又助　イヤ、おつりきなものに、ならしやつたの。

八八　アヽ、お前方は、近附きか。そいつは話せるの。

小俊　して、お前は矢ッ張りお屋敷にかえ。

又助　イエ、お聞きなさい。ちよつとした間違ひから、屋敷を下がつて天竺浪人、あそこに三日、爰に半日、ごろつき仲間へ附きあつて、當時の所は居候ふサ。

小俊　そんなら、お前、まだ身分の極りは附かないのか。

又助　左やうサ。この間も兩國を通りやしたが、女曲持ち小俊といふ、幟の立つたも見やしたが、よもやお前方とは思はなんだ。イヤ又、人の成行き、水の流れだ。

ト莨入れを出し、思ひ入れあつて

モシ、一服お振舞ひなさい。

八八　わしのをのみなさい……火付きが惡いよ。

又助　アイ、こりやア御馳走。

ト煙草を吸ひ付ける。

小俊　云ひなさる通り、わたしも、よもやこんな身分にやア、ならうとは思はなんだが、女の獨り身、覺えた業もないからは、譬への通り藝は身を、助ける爲めの不仕合せ、小力自慢を幸ひに、勸め込まれて女の曲持ち。又助さん、ツイこんな商賣になりやした。

又助　して、お前、三吉どのといふ、亭主があつたではないか。

小俊　イエ〱、死なれた父さんが、云ひ號けだと聞きは聞いたが、ついぞこれまで

又助　わしは、求馬さまの所で逢つた時、夫婦者だと思つて居たが、そんなら見かけだ。

小傻　逢ひなさつたか。
又助　アイ、慥か主だと思つたが、もしも似た者が
　　ト思ひ入れあり
　　モシ、小傻さん、有やうは、わしやァお前の所へ、申し憎いが御無心に來やした。どうも來憎いから、今駈け込んだのは、ありやァ狂言サ。モシ、何藝でも致したうござりやすから、近頃申し兼ねたが、元手を少し貸してくんなさいやし。
小傻　アイ、折角の御無心だが、この頃内は兎角、天界がばれるに依つて、大きに難澁サ。餘計な事も出來やすまいが、又助さん、これでお前、酒でも飲んで行つておくれ。
　　ト莨盆の抽出しより、二朱を一ッ出して渡す。又助、取つて
又助　こりやァ、有り難うござりやす。とんだ事を申して。
小傻　なにサ、仕樣もあらうが、見なさる通りだ。小遣ひにでもしなさい。
又助　イエモウ、大きにお造作サ。
　　ト右の二朱を莨入れへ仕舞はうとして、奥の方へ、落したる思ひ入れあつて
　　南無三、お志しの貳朱を奥の間へ落した。

八八　そいつはとんだ事だ。根太が悪いから、直に縁の下。待ちなさい、手傳つて疊を上げよう。

又助　お頼み申しやす。

ト捨ぜりふにて、兩人、疊を上げ、捜す事あつて

八八　待ちなせえ。見えねえの。板をめくらう。

ト手を掛ける。小俊、驚ろき

小俊　アヽコレ、そこを明けては。

八八　それでも、爰には見えねえの。

又助　そのマア、板をめくりねえ。

小俊　アヽコレ、それぢやア蚊が出るわな。

又助　跡でぶツつけて置きやすはな。

八八　それで好いのサ。

ト又助、板をめくる。小俊心遣ひ。八八、何心なくそこらを尋ねる。此うち又助は繩からげにしたる白刃を見付け、引出す。八八は貳朱を見付けて

八八　コレ〳〵、爰にあつた〳〵。お前、二朱助かつた。

又助　左やうサ。貮朱も出たが、おつりきな物も出たの。

トよく／＼見て

小俊さん、こりやァお前のしまつて置いたのかえ。

ト小俊、こなしあつて

小俊　イエ、わたしやァ知らない。大方そりやァ、先に居た人がしまつて置いたのでござんせう。何だか怖らしい物だの。

八八　さうして、お前、そりやァ鞘がねえの。そこらにあらうよ。

小俊　エヽ、お前、構ひなさんすな、いらざるお世話サ。

八八　それでも鞘が無くちやァ。

小俊　アヽコレ、茶を一ッくんな。

八八　待ちねえ。煮花をして來よう。

ト合ひ方になり、八八、奥へ入る。又助、脇差を、よく／＼見て

又助　小俊さん、見なさい。おつりきな脇差だ。サ、其方へおしまひ。

ト差出す。小俊取つて

小俊　櫛笄なら、欲しくもあらうが、男の道具は、あんまり氣がござんせぬ。引ッ越して行つた人も立たれて行つた跡で、尋ねるであらうよ。

又助　左やうサ。向うから取りに來ようも知れやせぬ。しまつて置いてやるがいゝ。

小俊　併し、出刃や鉈と違つて、此まゝ拔き身でも置かれやすまい。

又助　さうサ、まんざら拔き身の儘でも、見ともない。イヤ、幸ひだ。わしが爰に鞘がありやす。

小俊　エヽ、お前、鞘を持つて居なさるかえ。

又助　合ふか合はぬか知らねえが、爰に一本、後家鞘が。

小俊　ドレお見せ。

又助　お間に合はうか。

ト腰に差したる、右の鞘を出す。小俊、白刃を出し、兩方より思ひ入れあつて、シヤンと納める。誂らへの合ひ方。

小俊　床の下から出た白刃、又助さんの腰にある、この後家鞘の拵らへも、それと覺えの

ト思ひ入れあつて

又助　エ。

合せて見ればしつくりと

小俊　合うたは丁度誂らへ同然。

又助　一本差しの腰ふさぎ。

小俊　どこから、お前はこの鞘を

又助　柳原なら、がらくた見世、そこらにあれば當り前、とんだ所にあつたゆゑ。

小俊　して、その鞘が、どうしてお前の

又助　身狀の知れない、湯島の三吉、あの男の前からわしは

小俊　エ。

又助　巡り巡つて取つて來た。元を訊せば隅田川。

小俊　すりや、あの時の渡し船。

又助　今ぢやア、鞘が詮議の手がゝり。

小俊　もしや、古主の求馬さま。

又助　疑ひかゝつた、重なる難儀サ。

小俊　エ。

ト思ひ入れ。

又助　その後家鞘へ、こなさんの、床の下から出た白刃。

小俊　しつくり合うたは

又助　此方の仕合せ。

小俊　わたしが爲には

又助　鬼門の宿替へ。

小俊　その間違ひが大それた、科なきお方の

又助　磔刑道具サ。二朱や三朱の出入りでない、品に依つては大仕事。誠に人は正直の、頭に宿る神々の、拔差しならぬ二柱。誰れだと思ふ鳥居又助、こいつは壹番、目と出たわえ。

ト思ひ入れ。小俊、思ひ入れあつて、小簞笥を明け、内より寄り金の十兩持つて來り、又助が前に置き

小俊　又助さん、わしが内から出た白刃、云はゞわたしが代物同然。鞘はお前の品ゆゑに、合せて見ればお互ひに、揃ふ一腰、わたしが方へ買ひやす程に、この十兩で賣つておくれ。

又助　そんならお前、物云はず、わしの方から出した鞘、買ふ氣で十兩

ト金を取つて、よく／＼見て

ようござりやす。安い物だが賣りやせう。
小俊　勘定濟めば、出入りはないよ。
又助　貸し借りねえのサ。
ト小俊、こなし。
小俊　サ、降らうも知れねえ。もうお歸り。
又助　イヤ、まだ歸られやせぬ。泊つて行きやせう。
小俊　泊められないの。
又助　なぜえ。
小俊　女主だ。遠慮しておくれ。
又助　遠慮はいらねえ。後家鞘の、その賣り主に、やもめのお前。
小俊　エ。
又助　こんたに惚れたよ。色になりねえ。
小俊　色事嫌ひサ。
又助　ヤ。

小俊　女に似合はぬ力持ち、色氣と云つちやァこれ程も、無いのがわたしが生れつき。惚れてもらつて嬉しいが、男はどうもお斷わりサ。

又助　さう云はれちやァ、是非がない。そんならこれからお歸りだ。併し、歸り仕事にもう一遍、あの鞘の出所を尋ねて見れば、湯島の三吉、こなたに緣が無いならば、遠慮はない。これからそろそろ尋ねて見ようか。

ト外へ行かうとする。小俊、ヅツと寄つて門の戸シヤンと締めて

小俊　泊つて行きな。

又助　お前俄に。

小俊　日和になつた又助さん、蚊は多いが

又助　泊めておくれか。

小俊　夜具も無いによ。

又助　浴衣をかぶつて

小俊　ごろ寐としなさい。

又助　ドリヤ、寐るべいか。

ト唄になり、又助、十兩の金を持ち、奥へ入る。小俊、殘つて

小俊　思ひがけなう床下の、しかも隱したあの白刃、惡い所へ今の口ふさぎ、仲間の衆から預かりの、あの十兩で

ト奥を見て、こなしあつて

思うて見れば求馬さま、この間違ひでさぞや御難儀。名乘つて出るにもう一度、三吉どのに逢うた上……合點のゆかぬは鞘の出所。

ト思案の思ひ入れ。奥より八八出て來り

八八　モシ〳〵、小俊さん〳〵、あのマア先刻の男が泊ると云ふが、お前、よいかえ。

小俊　あんまり泊める氣もないが、賴むに是非なく……ほんに、先刻歸つたまゝ、場所着の形で、ドレ、着替へて來よう。

ト唄になり、小俊、奥へ入る。

八八　なんだか、先刻に來た奴は、イケずるい面な奴だが、アヽコレ、又居候ふとこぢつけるであらう。

ト雨車に時の鐘、吹き降りになり、向うバタ〳〵にて、三吉、裾をからげ、おかんを引ツ張つて走り出て來り

かん　モシ、三吉さん、今夜も又、辻番とやらへ行て寐るのかえ。

三吉　馬鹿を云へ。騙りぢやァあるまいし。コレ、あの曲持ちの小俊と云ふはナ、てまへもこの中淺草で逢つた、云ひ號けのあの淺尾。この所にと聞いたゆゑ、切ない時の神頼み。面押拭うて頼みに來たのよ。

かん　その云ひ號けの女中さんは、いつぞやちよつと逢うたれど、それから互ひに別れ〳〵。それも誰が業、わたしが科。先度と違うて、今日はどうやら主に逢ふのは。

三吉　ハテ、大事ないワ。又うろたへて居ると、紅粉屋の婆ァや手代の勘八、あい等に逢つてはむづかしい。マア〳〵、小俊が内へ。

かん　ぢやと云うて、わたしや叱られはしまいかいなう。

三吉　エヽ、誰れが叱るものか。

ト兩人、門口へ來り、内を窺ひ

御免な。小俊さんは、お内かえ〳〵。

八八　アイ〳〵、誰れだ〳〵。また居候ふが來たさうな。

ト門口へ來て

アヽ、今度は若いお人に、其方に居るのは、ヤア、とんだ綺麗な姐さんだが、小俊さんに用でもあつて來なすつたか。
三吉　逢はにやアならない事があつて來やした。もし内になら、ちよつと呼んでくんなさい。
八八　アヽ、お前、爰の內へ用で來なさつたは、外の事ぢやァあるまい、その姐さんを輕業に仕込む氣だね。そいつは當りだ。キツといゝね。
三吉　マアく、呼んでくんなさいよ。
八八　オツト合點。小俊さんく、ちよつとお出でく。
ト八八、奥へ入る。
小俊　アイく、どなたでござんす。此方へお入りなさりませ。
ト暖簾口より小俊、着替へて出て來る。
三吉　どなたでもない、三吉サ。
小俊　オヤ、三吉さんか。今も今とて、お前の噂を……、求馬さまのお内から、別れた儘に今日が日まで、便り音づれとてもなう、その水臭い
ト思はずおかんと顏見合せ

オヤ、紅屋の娘御さんぢやァないかえ。

かん 淺尾さん、面目なうござんす。さぞかし憎う思し召しませう。

三吉 アヽコレ、口數をきくにやァ及ばぬ。女は一生に、どんな目に遭はうも知れぬ。コレ、早速云はうは、この子もどうで內へは歸らぬ料簡だ。譯の分るまで、居候ふに置いてもらはずばなるまい。

かん 云はゞわたしが、內を出て、主を賴みに思ふゆゑ、連れられて來たお前のお內、かゝりに來るとは、厚皮な女子ぢやと、思ひなさんすも耻かしけれど。

小俊 イエ／＼、そりや誰れしもある事。それに氣遣ひはござんせぬが、三吉どの、どうもお前方は、此方の內へは

三吉 泊め憎いと云ふ事か。

小俊 そんなものぢやわいなァ。

三吉 尤もな事だ。其方は心に思へばこそ、國を隔り居ながらも、よく／＼わしを思ふゆゑ、云ひ號けといつたばかり、この頃中まで、顏さへ知らぬ情なし男。求馬さまの事に付き、外へは行かれぬこの三吉、殊には紅屋の內を出て、歸るなら死なうとまでも娘氣の、一途に思ふを今更に、捨てては面が立たねえ。それだに依つて、爰の所を聞き分けて

かん　モシ、三吉さん、わたしがあつて、お前のその身の、振り憎い事があるなら、無理にとも云はぬ程に、どうぞお前のお世話で、アノわたしを勤め奉公させてなりと、もう〳〵紅屋の內へ歸る事は、わたしや否でござんすぞえ。

三吉　サア、歸るが否なら歸しもしまいが、コレ、てまへ、この譯を聞いてくりや。知つての通り、求馬さまの御難儀の、元はと云へば、黃金の鷄、それもやう〳〵手に入つたが、その代りには又外に、降つて湧いたるあなたの一腰、惡い所にその鞘の、あつたが御難儀。

ト云はうとする。小俊、思ひ入れ。

小俊　この末にどのやうな、難儀が出來てはわたしまで、懸りや繫がる……殊に今は大勢に、顏を晒して世を渡る今の身分、必らず惡う聞かしやんすな。三吉どの、どうぞ外を賴んで下さんせ。

三吉　サ、さうでもあらうが、てまへも女の獨り身で、派手な商賣する身分。もしやは人の、サ、何もかも合點だ。こりやァ折入つておれが賴みだ。

小俊　サ、その賴みが、どうも聞き憎いゆゑ。

三吉　そんなら、どうでも。

トむつとする。

かん　アレ、あのやうに云うてぢや程に、わたしを勤め奉公に遣つてなりとも、お前方お二人さんながら、お身分の立つのが肝心。モシ、わたしや爰から直ぐに。

ト行かうとするを捕へ

三吉　コレサ、どこへも行く事はねえ。五分でも外へはおれがやらねえ。コレ、淺尾、アイヤ、今ぢやア力持ちの小俊。てまへ、今の渡世だから、この俵持ちもするであらうが。

ト片脇にある俵を掴み藁を拔く。内より米はバラ〱落ちる。米を掴んで

コレ、古風な事だが、てめえに捻くつた譬へがある。コレ、この米だ。女子供に至るまで、押戴いて喰ふ飯は、菩薩と云へど、性はめん〱、命が惜しいで頂くのだ。なぜ又藁は戴かねえ。米をならせる稻も、藁となつちやア、誠に十把一からげ、草鞋草履に作られて、世界の人の足にかゝるは、女男も爰で分る。なんぼう力があつて男勝りと思つても、そこが小さい女の根性。譬へて見れば女は藁、野郎はけちでも男は米、御恩になつたお方をば、身に引受けて籾糠まで、搗き拔いた上白の、水道の水の洗ひ米、三升桝の江戸ッ子が、今まで女房に騙されたと、思つて見れば損德なし。世話にやアならねえ。誰れだと思ふ、アヽ、そこ所ぢやアねえ。サア、來や。

トおかんを引立て、行かうとする。

小俊 三吉さん、待ちなさんせ。
三吉 用はねえわえ。
小俊 此方にあるよ。
三吉 重ねて聞くべい。サア、來ねえ。
　　　トまた行かうとする。
小俊 白米さん、お待ち。
　　　ト三吉、行かうとする
ア、モシ、ちつとお待ち。上白の一粒選りの御洗米、女のわたしが留めやんした。ちつとお待ち。
三吉 どうしたと。
小俊 泊めは泊めても泊めるのは、女子同志のおかんさん、三吉さんは泊められぬ。元の起りは、これぢやに依つて。
　　　ト腕を捲り、彫り物を見せる。兩人、思ひ入れ。
三吉 いつぞや、ちよつと見囓つた、腕に彫つた彫り物。
かん 三吉女房と彫つた入れ墨。

小俊　イエ、これまで露ほども、色氣噂の事もなう、主人と親のお指圖に、夫を守つて此方では、いづくに別れ住むとても、云ひ號けせしお前ゆゑ、側に居る氣でこの彫り物。一生男は持つまいと、思はぬ人を此方ばかり、女房の文字を朝夕の、その添ひ臥しと思ふゆゑ、外の男を持たぬが樂しみ。もう斯うなつては此方から、三吉どのと云ひ號けの、縁は切る、その證據は。

　トあたり見廻し、蚊いぶし火鉢の火箸を取つて、彫り物へしつかと押す。合ひ方替り、小俊、苦痛の思ひ入れ。おかん、駈け寄り介抱して

かん　アヽ、モシ、なんでお前はその彫り物。

小俊　消してしまふが、お前へ心中。女房でなけりや三吉どの、隱まひ置いても世間の手前。お前の心も濟む道理。もうこの上は、二人とも、外へと云うても、これ程もやらぬ。わたしも女の意地、心置きなう泊つてお出でなさんせえ。

三吉　三吉女房の文字を消し、おいら二人を

かん　エヽ、嬉しうござんす。

　トこの時、奥より又助出て來る。小俊、見て

小俊　ヤ、又助さんか。

ト三吉、惘りして

三吉 ヤ、こなたは、爰にか。コレ、あの時鞘を持つては行かぬか。

トこれを聞いて小俊、思ひ入れ。

又助 アヽ、あの鞘は貴様の物か。

三吉 サ、求馬さまから預かつた。

小俊 すりや、あの鞘は求馬さまから

ト驚ろく。

三吉 巡り〳〵て、アノ昨夜。

小俊 その鞘ゆゑに

又助 まぐれ込んだこの又助、仲人役が不足と聞き、おれが方から押賣り仲人。

三吉 わしが祝言濟んだなら、又こなさんとこの小俊、思へば昨夜のあの金が

又助 コレ、恩にかけぬよ。

小俊 アヽ、思うて見れば祝言に、あつて不吉な、あの後家鞘。

かん 祝言一對揃うた上で

又助　仲人になつたり、なられたり。
かん　世話を頼むは、お二人さん。
三吉　地獄で佛の仲人二組み。
小傻　花聟さんは、差詰め思うた
かん　男を寢取つた、わたしが花嫁。
又助　誠にこれが水入らず。
三吉　三國一と
又三　謠ひませうか。
又助　聟なり、仲人なり、此やうなしみつたれでも居られまい。幸ひ掛けたこの浴衣、こいつを借りて
ト權七が掛けて置いたる浴衣に着替へる。
小傻　急拵らへの御亭主へ、女の方から献した杯。
ト德利を取つて茶碗に引受け、グツと呑んで「お前へ献すよ」ト又助へ献す。
又助　これが固めの夫婦の杯。
ト取上げる。

三吉　てまへも改め、飲んで此方へ。

かん　あなたの前で無遠慮ながら。

ト外の茶碗を取上げる。

三吉　酌も亭主が。

ト徳利を取つてつぐ。おかん、飲んで

かん　この杯は

三吉　おれへ献すのだ。

かん　そんなら憚り。

ト三吉へさす。三吉、手酌に注ぐ。

祝言ぢややら仲直り、二つ分つた杯は。

三吉　めでたく乾して。

ト両方一度にグッと飲んで

又助　これから、おれが女房の小倅。

ト小倅へ寄り添ふ。

小傻　アレ、三吉さんが見て居るわな。
三吉　此方も負けずに、仕立ての女房。
　　ト　おかんを引寄せる。
かん　アヽコレ、どうやら、わたしや。
　　ト　恥かしきこなし。
又助　祝言濟めば、この家の主はおれだよ。
小傻　マア〳〵、お前サ。
又助　それを聞いちやア、亭主の勝手に……コレ、小傻、あの二人を叩き出せ。
小傻　そりや又、なんで。
又助　上前取りだ。
三吉　なんと。
又助　首を元手の盜人の、上前取りのこなたゆゑ、おれが内には置き憎い。
三吉　そんなら、昨夜の始末ゆゑ。
かん　主に越度が

又助　あるから置かねえ。云ふに云はれぬ金ながら、出所悪いを合點で、借りて歩くは、盗人の、上前取りだ。それで置かれぬ。出て行きやれ。

小俊　主を上前取りとやら、その悪名を付けさんすりや、上前取らるゝお前が元締め。わたしも亭主に持ち憎い。主より先へ、こなさん出なんせ。

又助　出ろと云つたら合せ物、離れ〴〵、中の品を、見込んだばつかり捻ぢこんで、たうとう爰の花聟に、なり濟ましても入り聟の、引出の一腰、でんどへ出して、

トすつと立つて件の一腰を取上げる。小俊、留めて

小俊　アヽコレ、それでは滅多にこなさんと

又助　縁を切らぬか。

小俊　切るまい程に。

ト一腰を引ッたくる。三吉見て

三吉　鞘は昨夜の

小俊　そんなら、いよ〳〵。

又助　持參の品だ。

三吉 中心の揃ふは、ハテナア。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。合ひ方になり、路地口より金六出て來り

金六 アヽ、雨も止んだが、腰に挾んだ雪駄の片足が見えぬは、大方爰の內か。

ト門口を明け

ハイ、御免なさりませ。先程の軒下をお借り申して、雨止みを致した者でござります。大方お前の入口に、わたしが雪駄の片しを落したと存じます。尋ねて參りました。ハイ〳〵、御免なされませ。慥かに爰らに……ヤ、お前は昨夜お目にかゝつた、若い者だの。

三吉 さう云はつしやるは、アノ鷄を百兩に。

ト云はうとして思ひ入れ。

金六 サア〳〵、その事。サ、わしやアお前を一日尋ねて步きやした。ハテ、好い所に居なすつた。モシ〳〵、遣へないの〳〵。

ト懷より前幕の百兩を出して三吉へ見せろ。

三吉 コレ〳〵、遣はれないとは、そりや何がえ。

金六 ハテ、昨夜お前が暗がりで渡した百兩、誠に夢に駒と云はうか。むづかしいあの品を、只取られ

るより有やうは、天の與へと受取つた、金は殘らず向う梅、その極印は盜み物。多賀の屋敷の御用金、お觸れの廻つた極印の詮議。サヽ、お前に返す。どうで通用出來ねえ百兩、そんなら返して彼の品を、淸くお上へ差上げるが、わしも身晴れだ。サ、返します。昨夜の品を返して下さい。

三吉　コレ〳〵、何と云はつしやる。貴樣に渡した昨夜の金は、多賀の屋敷の御用金、極印のある前觸れの金とな。

金六　それだに依つて、金は返す。わたしも淺草の梅堀で、女郎子供の賣買ひする福田屋金六。お觸れの廻つた極印の金、そればつかりは遣ひやせぬ。サア、昨夜の品を返して下さい。

三吉　ドレ、見せさツし。

ト受取り見て

成る程、こりやァ金は殘らず向う梅。この金の出所は、コレ、又助どん、昨夜こなたが、ナ、ソレ。

ト思ひ入れあつて

折角借りたこの金だが、いま聞く通りだ。これを借りてはおれが難儀だ。外にあるなら借りもせうが、こなさんにさうもあるまい。無いならこの金、貴樣に返すよ。

又助　イヤヽわしが方からこなたに貸した、金は正眞正銘だ。怪しい極印の金ぢやアない。返すなら受取らうが、マア聞きな。極印金はおらア否だ。こなたの方で引替へて、極印の金をあの人に、渡して遣つたと思はるゝ。おれが金には其やうな、極印と云つちやア決して無い。返す氣ならば又助が、貸した誠の金を返しやれ。極印の金は受取らねえ。

三吉　イヽや、その手は喰ふまいか。暗がり紛れ、心の急くまゝ、云ひはめて借りた金、こなたもそこを付け込んで、通用ならぬお觸れの金を。

又助　なぜその極印のあつたのを借りた。

三吉　どうしたと。

又助　イヤサ、その時なぜ又改めぬ。

三吉　サア、改め見りやア、斯うした間違ひ、なんで出來やう。

金六　改めないは其方の不念。そのこみやりは、此方は知らねえ。わしが方から渡した黃金の鷄、キリキリと返してもらはう。

ト　この時、奧より八八、彌五平、權七出て來り

八八　モシ〳〵、小俊さん、仲間の手合の預かり金、勘定して行かうと云ひやす。あの拾兩を割つてや

つて下さりませ。
小俊　アヽ、そんなら先刻に預かつた
權七　金は僅かな拾兩でも、急にわしらは入用サ。
藤兵　丈夫なお前に預けりやァ、氣遣ひはなけれども
彌五　俄にちと入用があるから、小俊さん、あの金を
皆々　渡してくんなさい〳〵。
小俊　どうで主達の、油を絞つて貯めた金、勘定しようが、明日まで待ちな。
彌五　モシ〳〵、常ならどうでもよけれども、極印の金でごたつきの出來たこの內、もし間違ひがあつちやァ惡い。モシ、どうぞ小俊さん。
權藤　勘定してくんなさい〳〵。
小俊　でも、今夜というては、どうも割る事は。
彌五　そんなら、どうでも勘定は出來ねえか。ようござりやす……コレ、口上、こなたの請合ひだ。サア、貰つてくりやれ。
權七　さうだ〳〵。請合ひはこなただ。立替へてなりと勘定してくれ。

三人　勘定しやれ。

ト八八をせがむ。

八八　いゝワく、勘定すりやア、いゝぢやアねえか。默つて居ろく……モシく、小傻さん、云はば僅かな十兩だ。サア、遣つてしまひねえく。小うるさいわな。早く遣りなさいく。

小傻　エヽ、お前までが、同じやうに。遣つてよければ、今でも遣るが、譯があるから、明日の朝まで待つてもらつてくんな。

八八　モシく、それだといつて、聞分けの惡い手合ひだ。遣つてしまひなさいく。

金六　コレく、若いの、現在借りた人が居る樣子だ。サ、その金を返して、わしが代物も返して下さい……これサ、どうでも金は返されぬか、アヽ、そんなら、こりやアどうでも、こなさん、極印の金を摺り替へて寄越したのだな。いゝワ、金は貴樣の物、代物はおれがのだ。爰にあるなら返しやれな。

ト三吉が懷へ手を差込み、件の鷄を引出し、持つて行かうとする。

三吉　エヽ、何をするのだ。

ト振り切る。

三人　サ、小俊さんは、金は無いかえ。
小俊　ナニ十兩ばかり。
三人　そんなら下さい。
小俊　サ、それでも爰には。
三人　無くては、濟まない〳〵。
又助　昨夜貸したる正銘の、金を返しやれ。
三吉　これより外に金と云つちやア。
又助　無いとは云はせぬ、エヽ、野郎め、なぜ摺り替へた。
三吉　どうしたと。
又助　ものした物を摺り替へて、うぬが細つた首を繼がうと思ふのか。エヽ、上前取りめ、誠の金を出しやァがれ。
ト三吉を踏みにじる。おかん慌てゝ
かん　エヽ、コレ、三吉さん、なぜマアお前は其やうに、打擲にあはしやんす。手出しのならぬは、よく〳〵な。

三吉　身の横しまと思へども、これが欲しさに借りた金、それが却つて。

ト件の鶏を出す。金六、見付けて

金六　おれが代物。

ト鶏を引ツたくる。三吉、引付ける。

三人　金を横取り。女の騙りだ。

小傻　エヽ、云はせて置けば。

彌五　慥かに簞笥に。

トかゝるを小傻、彌五平を捻ぢ上げる。

又助　上前取りめ。

ト三吉を喰はす。ちよつと立廻つて、三吉、件の一腰を取り、思ひ入れ。

小傻　コレ、その一腰がナ、モシ、この身の誤まり、主人を思うて御主人へ、思ひがけなう大それた

三吉　ヤ。

小傻　サ、抜差しならぬ、揃うた一腰、それぢやによつて。

ト思ひ入れ。

又助　動きは取れまい。
金六　極印無しの百兩を。
三人　わしらが仕打ちは。
小三　サ、それは。
金六　埒は明くまい。代物持つて。

ト行かうとする。おかん、縋つて

かん　その代物の價の百兩、極印の無い、その金を、わたしがお前へ
金六　濟ましてはおくれか。
かん　元の起りは、黄金の鶏、その黄金には似もやらず、砂のわたしが、この身をお前へ。
金六　わしが商賣、聞いたゆゑ、泥水呑む氣か。
かん　お世話なされて、金の代りに、
三吉　そんなら、手詰めの樣子を見兼ねて
かん　御恩をお受けなさんした、求馬さまの歸參の品、首尾ようお前が取戻し、男の意氣地を立てたいばつかり、モシ、どうぞわたしを。

三吉　それぢやァ却つて娘の引賣り。

小俊　お前が立つまい。お前の代り、わたしで濟まば。

かん　イヽエお前は極印の、金とも同じ腕の極印。無疵のわたしは正銘の、金の代りに、この身を沈めて。

小俊　それぢやと云うて、わたしが内から、お前はどうも渡されぬ。

かん　その義理合ひも御尤も。お内を離れて主と一緒に。

金六　相談極めるは梅堀の、わしらが内で。

小俊　そんなら、どうでも手詰めを見兼ねて。

かん　その身の代も。

ト鷄の包みを三吉へ渡す。

小俊　娘心に。

かん　お連れなされて下さりませ。

トつか〳〵と出る。三吉留めるを、金六支へて

金六　この子は金だよ。鷄代りだ。

三吉　人の寶の入れ替へを、そんなこなたに。

かん　モシ。

ト思ひ入れ。

金六　預かりました。

ト思ひ入れ。時の鐘にて、おかん、思ひ入れあつて、ツカ〱と行き、金六附いて向うへ入る。

又助　どうやら、一方は片づいた。

八八　今の娘の心意氣、あれぢやァおれも請合ひの、その十兩は立替へてやる。コレ、おれが内へ來やれ。

彌五　イヤ、主から受取らうワ。

八八　渡して遣るよ。

三人　アノ、金を。

小俊　コレ、又助さん、先刻の十兩、ちよつとお貸し。

又助　あの金か。どうしておらァ遣られない。

小俊　モシ、そりやァ先刻は他人向き、今ではお前の女房でござんす。夫婦の仲での分け隔て。

又助　イカサマ、さう云はれて見れば、そんなものだ。根が其方から出た十兩。女房の難儀を見ても居られぬ。ソレ、十兩貸すよ。

ト件の包み金を渡す。

小俊　サ、お前方、これを持つてお歸り。

彌五　そんなら、これを。

ト取上げる。

小俊　持つて歸るか。

彌五　こいつは浮んだ。

藤彌　早く割らッし。

八八　十兩取つたら云ひ分あるまい。

三人　云ひ分ないのサ。それがどうした。

八八　金の請合ひ、おれが割らうワ。

彌五　こいつは理詰めだ。ソレ、十兩。

八八　四五日借りた。

ト向うへ駈け出す。

三人　ソレ逃がすな。捕まへろ〳〵。

ト三人、追ひ駈けて入る。

又助　おきやァがれ。十兩種なしになつた。コレ、三吉、極印の金は返す程に、その代りに黄金の鷄、百兩代りに。

ト鷄を引ツたくる。三吉、その手を捕へ

三吉　そんなら、どうでも、金の代りに。

又助　この鷄は、おれが預かる。不通用なる極印の、百兩は、おぬしに返す。

ト打ち付け、行かうとするを兩人留めて

小俊　祝言すんだ聟さん、床入り前にお前はどこへ。

三吉　その品持つて歸るのか。

又助　歸るといふは禁句だが、ちつとの間開かにやならぬ。それでこの場を。

小俊　開く心と見たゆゑに、是非に今宵は泊めねばならぬ。又助さん、して又、急に何の用。

三吉　どこを當途に開くのだ。

又助　どこと云つたら梅堀の、あの金六が連れて行つた、おかんが身賣りの歩一を取らうと、それで今から。

ト行きかけるを立廻つて

小俊　行きなさるなら、その品を、わたしに預けて、

三吉　おぬしは行くとも、黄金の鷄。

又助　イヤ、置いては氣がゝりだ。手離されぬワ、爰放せ。

小俊　滅多にお前は。

ト引留める。立廻り、三人よろしく

又助　エヽ、面倒な。

トあたりの畚を取つて三吉へ打ち付ける。この時、畚の中より蛇、大分出て、這ひ纏ふ。小俊、これを見て、思はず恐るゝ體。又助キッとなつて

力はあつても、流石は女、畚の内なる長蟲に、恐るゝ様子は、噂に違はず。

三吉　浮世の人の口繩に、かゝりや繋がる身の罪科。

小俊　天命遁がれず眼前に、身は蛇責めの業苦はやがて。

又助　覺えがあるか。

小俊　エ。

ト氣を替へ、這ひかゝる蛇を捕へて、左右へ投げ捨て、ツカ〳〵と行き、神棚の宮の内なる書き物を取出し、件の一腰を取つて

お主の難儀、黄金の鷄。

三吉　渡して爰を。

ト詰め寄る。

又助　エヽ、面倒な。

ト立廻つて又助、門口へ出て、ゴン〳〵になり、向うへ入る。小俊、一腰下げて行かうとする。三吉、この一腰に手を掛け

三吉　主人に難儀のかゝつたこの鞘、詳しく様子を聞かねば滅多に。

小俊　科の次第は、詳しくこれに、

ト書き物を打ち付ける。三吉、立廻つて、この書き物、バラ〳〵とほぐれる。三吉、小俊を留めながら、キッと目を付け

三吉　主人の仇を恨まん爲、船中にて殺害せしは、大江の姫君、刃物は即ち求馬の差し料……ヤ、、すりや違ひなう。

小俊　思はぬ越度に、この身の覺悟。モシ、お前の縁は。

三吉　ヤ。

ト小俊、消したる彫り物を見せて

小俊　消したぞえ。

トづか〳〵と門口へ出る。權七、藤兵衛、窺ひ居て

兩人　主殺し。

トかゝる。小俊、立廻つて二人を内へ打込む。二人は三吉へかゝる。その暇に小俊、花道の方へ行き、思ひ入れあつて

小俊　おのれ又助。

トごん〳〵にて向うへ走り入る。三吉、書き物を持ち、跡を追うて行かうとする。兩人、支へるゆゑこれを踏まへて、書き物の末を見て

三吉　黄金の鷄尋ね出し、歸參を見屆け、その後私し科人と名乘つて出で、お仕置に相成り申したく、

惜しからぬ命を延はり居り候ふ、お役人中さまへ、求馬召仕ひ淺尾。すりや、我が身の訴人を。

權藤　三吉、うぬを

　　トかゝるを見事に投げ付け

三吉　女に稀れな

　　ト書き物を見て思ひ入れ。兩人、又かゝるを足下に踏みつけ、藤兵衞かゝるを俵を取つて頭をぶち込むことあつて、キツと見得。屋體囃子にて直ぐに聖天、それより屋體囃子にてツナギ、引返し。

幕

　　本舞臺、正面、誂らへの石段。左右、棕櫚葺きの堤。上の方に石の鳥居、祭り提灯。下手に丸井戸、すべて淺草富士淺間祭禮の模樣。爰に四ツ手駕籠を擔がせ、又助、金六、駕籠舁き、引添つて居るを、小僕、駕籠に縋つて居る。屋體囃子にて幕明く。

金六　こりや、曲持ちの小僕だな。おかんを乘せたこの駕籠を、なんでこなたは遣らぬと云ふのだ。

駕舁　駕籠は、おいらが預かつた。退かつしやい〳〵。

又助　合點づくで、持つて來た黄金の鷄、返せと云ふのか。

小俊　イヽヤ、そればかりぢやァない。紅屋の娘御諸ともに、わたしに返して下さんせ。

又助　いらざる女の差出口。仕事にかけた、あのおかん、われに渡していゝものか。ちつとも早く、合點か。

金六　キリ〳〵、駕籠やれ。

駕舁　呑み込みました。

小俊　イヽヤ、遣られぬ。

ト立廻りのうち、駕籠は下座へ急ぎ入る。跡に三人、小俊を引付け

又助　邪魔をひろげば、隅田川で、姫を殺した主殺し、爰から直ぐに小塚ッ原、それを云はぬがまだしもお慈悲だ。爰をキリ〳〵歸りやァがれ。

ト踏みとばす。小俊、足に縋つて

小俊　どうで、この身はお仕置合點、命は惜しまぬ、さりながら、その一品は。

ト立ちかゝつて、又助が懐より、件の鶏を引出し

これが欲しさに。

ト思ひ入れ。又助、手早く取つて

又助　うるさく吐かせば、落ちつくやうに。

ト上の方、井戸の内へ鶏を打込む。

これでふツつり諦めろ。

ト小俊、又助をキツと捕へて

小俊　ヤヽヽ、今日の今まで道ならぬ、卑怯に命延はりしも、あの一品を取り得んため。それを失なうては、もうこれまで。

ト突き放し、ちよつと立廻り。件の一腰を抜き

身に科受けしこの刃物、是非に及ばぬ、冥土の道連れ、覺悟しや。

ト切り付けるを、三人、立廻つて

又助　ふん縛れ。

金六　合點だ。

ト立廻りよろしく、キツとなり、これより花やかなる鳴り物をかかり、石段へ上がり、大タテあつて、金六、手を負うて倒るゝ。小俊、又助、立廻りして、又助が肩先を切る。この血、井戸の中へ入ると等しく、ドロ／＼になり、吹き水盛んに、時を發して、黄金の鶏を吹き上げる。吉例の早めになり、小俊、思ひ入れ。正面、石段の上へ、合邦太郎、深編笠、大小の形にて、ツカ／＼と出て、この體を

見て、キッとなる。鷄は石燈籠の上へ飛び行く。

合邦　常に聞く、鷄に事かはり、奇異なる八聲の東天紅、合點ゆかずと、思ふに違はず、我が所持なして又助が、持ち歸つたる黃金の鷄。

又助　さう云ふこなたは、合邦太郎。

小俊　ヤヽ、すりやお尋ねの間者經之。

合邦　女が忠義の心に免じ、その品持つて、少しも早う。

ト鷄を取つて投げてやる。

小俊　嬉しや、主人の難儀を助くる。

ト鷄を取上げる。

又助　イヽヤ、われこは。

ト立ちかゝるを、合邦太郎支へる。この時、捕り手大勢、弓張り、十手にて、バタ〳〵と取卷き

大勢　經之、動くな。

合邦　先づ今日はこれぎり。

めでたく　打出し

染繮竹春駒

そめたづなたけのはるこま


八幕續
役人替名

染繮竹春駒

序幕

由留木館の場
四條河原の場

役名――家老、鷺坂左內。同、鷲塚官太夫。三度飛脚、江戸兵衞。腰元、いろは。お端下、藤浪。奴、團助。足輕、横田彥兵衞。木田彌惣左衞門。刎川右馬之助。茶店亭主、與茂四郎。鰻屋、お作。伊達與三兵衞。奴、駒平。扇九の仲居、奴の小萬。奴、逸平。伊達與作。

本舞臺、三間の間、常足の屋體。向う、金襖。緣先、塗り骨障子。左右に萩垣、秋草の盛り。上の方、萩垣の間より筧、水こぼれ落ちる事。前に誂らへの手水鉢。栗丸太の井筒。よき所に据ゑ物の松。この枝、本吊り。燈籠かけあり、下に二枚開きの枝折り門。すべて、都東山、由留木家、下館の體。爰に、逸平、團助、同じ奴にて、水打ちの見得。白囃子にて幕明く。

兩人　よいやサ。

團助　サア、逸平、煙草にせうか。
逸平　團助、おぬしも骨折り。サア、ゆつくりとやらかせ。

ト庭先に、大胡坐かき、兩人莨のみ付ける。唄になり、向うより彌惣左衞門、白髮鬘、野袴、羽織。いろは、振り袖の腰元にて竹花活けに薄の活けたるを持つて、腰元二人、何れも練り帽子にて出て來る。彥兵衞、後より、絹看板、羽織袴、足輕の拵らへ、藁苞を提げ出て來る。遙か下がつて藤浪、練りの帽子高からげ、お末の拵らへ。江戸兵衞、木綿やつし、ぼつとせ、百姓の拵らへにて、風呂敷包みを脊負ひ來る。皆々、本舞臺へ來り、よき事に坐る。

彌惣　これは〳〵、中間衆、お庭掃除か。大儀々々。
藤浪　あなたは、お客人彌惣左衞門さま、只今お歸りでござりまするか。
彌惣　左やう〳〵、腰元衆の御案内にて、京の名所古蹟を、逐一拜見致し申したて。
團助　それはよい慰みでござりました。いろはさま、お草臥れでござりませうね。
いろ　イヤモウ、彌惣左衞門さまのお供をして、いつにない、よい慰みをしましたわいの。
腰一　殊に天氣は好し、西山を茸狩いたし、面白い事でござりましたわいな。
腰二　お姬樣へ、何がなお土産と、アレ、あのやうに美しい尾花を、いろはどのの手折つてぢやわい

の。

彦兵　イヤモウ、西山の柴ッ原に、松茸が、あそこにもニヨツキリ、爰にもニツコリと、コレ、御覽じろ、これ程拔いて來ました。

江戸　左樣ならあなた方も、今日は茸狩でござりましたか。それはよいお氣晴らしでござりませう。

ト いろは、藤浪を見て

いろ　ヤ、其方は藤浪ぢやないか。宿下がりと聞いたが、いま御殿へ上がりやるかや。

藤浪　左樣でござりまする。わたしもこの間。宿下がりのお暇を戴きまして、今日やう〳〵、お屋敷へ上がりましてござりまする。見ますれば、あなた方も、茸狩のお歸りと存じられますわいな。

逸平　オヽ、藤浪さん、今日お歸りかえ。お宿下がりは大方、芝居であらう。定めし大浮きに浮いた、面白い事があつたであらうね。エヽ、羨ましい事だぞ。

ト 思ひ入れ。

團助　コレ〳〵、逸平、大分てまへ、藤浪さんの事を、味にせりふを廻しかけるな〳〵。

逸平　エヽ、てまへが知つた事ぢやァねえ。打ッちやつて置きやく〳〵。

江戸　ヤ、團助どのか。わたしも今日は、この藤浪どのがお屋敷へ上がるから、送つてくれとの事。そ

こで、お屋敷へ來ましたが、コレ、貴樣がこの中、賴ましやつたアノ

團助　アヽ、コレ〳〵、その話しなら、マア〳〵後で、ゆつくりと聞かう。さう思つて居やれよ。

江戶　そんなら、後でゆつくりと話しませう。がコレ、賴みの品も、今日爰へ持つて來たほどに。

團助　ハテマア、その話しはコレ、後の事にしやれと云ふに。

ト思ひ入れ。

江戶　オツト、合點だ。

彥兵　コレ〳〵、團助々々、何かあの、若い人が、持つて來たと云ふが、この橫田彥兵衞も、拔いて來たこの木の子。モシ〳〵、あなた方も、御覽じませ。

ト苞の內より、いろ〳〵の木の子を出し

コレ、この木の子は、蛇の晝寢をした跡に出來る蛇茸サ。こいつが天狗茸と云ひます。どれもどれも旨い木の子サ。

彌惣　これはしたり、其やうな物を取つて、われは又、食傷をするぞや。コレ〳〵、其方には、ちと賴みたい事が出來たわえ。

彥兵　モシ〳〵、私しへ、何の御用でござりますえ。

彌惣　イヤ、別儀でもおりないが、丹州のお屋敷へ、身共、大切な眼鏡を、お客の間の袋戸棚へ忘れて參つた。一走り行て、取つて來ておくりやれ。

彦兵　これは迷惑でござりまする。私しばかり、お屋敷の、御家來でもござりませぬ。ちと外の中間どもへお頼みなさるるが、よろしうござりませう。

逸平　コレサ〳〵、彦兵衛どの、おいらは御家中の二合半、貴殿は殿樣のお人ではないか。

彦兵　サア、それわな。

團助　骨惜しみをせずと、お使ひに行つて來やれ〳〵。

彌惣　コレサ、手を突いて頼み申すワ。おてまへ、早う身が眼鏡を、取つて來てくりやれサ。

彦兵　ようござります。折角のお頼み。左樣ならば、私しが取つて來てあげませう。

彌惣　それは千萬、忝なう存ずる。

いろ　ほんに、お國屋敷へ行きやると聞いて、思ひ出したわいな。逸平どの、こなさん、この狀を屆けて下さんせ。

ト懷より、文を出し、逸平に渡す。逸平、見て、思ひ入れ。

逸平　モシ〳〵、いろはさま、また私しへ、屆けてくれろかえ。大方かのお人へで、ござりませうが、

其お使ひは奴めは、御免なされませ〳〵。

いろ　イヽヤイノ、氣遣ひな所ぢやござんせぬ。こりやアノ、重の井さまが、其方に渡して、その宛名の主へ届けてもらふのぢやわいの。

逸平　エヽ、なんと、仰しやります。この宛名の所とは

ト見て

こりや、わしが在所の母御へ。

いろ　サ、それ届けるも、あの子の便りをナ。ソレ、せめて返事を、其方の働らき。

ト目顔にて思ひ入れ。此うち、藤浪、心得ぬこなし。逸平、思ひ入れあつて

逸平　委細は奴め、承知仕りました。

藤浪　コレ、逸平どの、その文を、ちよつとわたしに見せなさんせ。

逸平　エヽ、滅相な。どうしてこれを。

ト懐へ入れる。

藤浪　それぢやというて、現在、わたしが見る前で。

江戸　エヘン〳〵。

ト咳にて紛らす。

藤浪　エヽ、アタ阿房らしい。

ト つんとする。

彌惣　サア、其方は、今の使ひを、早う頼む〱。

彦兵　ネイ〱、畏りました。

いろ　コレ、逸平どの、必らずともに、今のをキツと。

逸平　ハテ、奴が、キツと。

藤浪　エヽ、なんぢややら、

ト寄るを

逸平　ハテ、なんであらうと、爰でどうして。

彌惣　サ、女中方、案内頼む。

腰元　畏りました。

いろ　サア、藤浪も、皆さんと一緒に。

藤浪　ハイ〱、參りまするわいな。

トつんとする。

逸平　ハテ、何も知らねえやつサ。

藤浪　エヽ、また其やうな。

ト思ひ入れ。

彦兵　ドリヤ、急ぎませうか。

ト唄になり、彌惣左衞門、いろは、奥へ入る。藤浪、ピンシヤンするを、逸平、思ひ入れあつて入る。彦兵衞、向うへ入る。團助、江戸兵衞、殘る。合ひ方。

團助　コレ、こなたは、話しのあつた、その石を持つて來たのか。

江戸　持つて來ました。コレ〳〵

ト風呂敷の内より、袱紗包みの誂らへの石を出し

これが彼の、礜石と云ふ名石サ。

團助　アノ、これが。成る程、珍らしい石だが、どうして貴樣は持つて居るのだ。

江戸　さればサ、元わしが親仁は岡崎村で、杉山吟哲といふ醫者でござつたが、先祖から持ち傳へたこの名石。無いものさうにござるが、百姓のわしらが持つて居たとて、役に立たぬ代物。して、官太

夫さまには、マア、なんの薬になされるのだな。

團助　さればサ。あゝ見えてもお旦那は、殊の外の御多病。醫者の云ふには、用ゆる薬に入れねばならぬこの礜石。そこで薬種屋を尋ねても、サテ無い品。貴様の持つてござると聞き、そこで無心を云つたのサ。

江戸　イヤモウ、わしらが身分で、嗜なんでから無駄な一薬。人様の病の癒る事ならば、随分とあげまするて。

團助　そりや、忝なうござる。して、こりや値段は、どの位な物だの。

江戸　ハテ、商賣にする品ではなし、貴様、番頭して、よい程に下さりませ。

團助　それだと云つて、どの位の代物やら、値段の所は。

ト思ひ入れ。向うにて

呼び　官太夫、出仕。

ト呼ぶ。

團助　アヽ、お旦那のお出で。こりやァ幸ひだ。あなたにお目に掛けた上、値段の相談。

江戸　ハテ、どうでもようござるわな。

團助　そんなら、お次で待たつしやりませ。
江戸　團助どの。
團助　サア、ござりませ。
　ト唄になり、團助、石を懷中して、江戸兵衛附いて奥へ入る。
呼び　左内出仕。
　ト序の舞になり、向うより、左内、上下、大小にて出て來る。後より、官太夫、同じ上下大小にて、出て來り、花道にて
官太　それへお出でなさるゝは、左内どのではござらぬか。
左内　これは〳〵鷲塚氏。お早い御出仕。先づはお先へ。
官太　イヤ〳〵、其許より。
左内　これはしたり、サヽ、貴殿より。
官太　然らば御免下されい。
　ト入れ替つて兩人、本舞臺へ來る。この時、二重舞臺はよき所まで押し出す。奥より彌惣左衛門、疏上下に着替へ、出て來り

彌惣　これは〳〵御兩所とも、御出仕を相待ち居つたて。

官太　其許は本田氏。永々の御逗留、さぞ御退屈でござらう。

左內　併しながら、おッつけ色紙は伊達の與作、持參いたすでござらう。さすれば京都の御逗留も、今少し。さて〳〵、お名殘惜しう存じまするて。

彌惣　これは、左內どのゝ御挨拶、忝なう存ずる。拙者も年寄りの上方三界、罷り上りましたも、其許の御主人、由留木の御息女、調の姫さま事、手前主人入間家へ御緣談、めでたう調ひ、お輿入れの前方、御契約の通り、手前屋敷の重器、驛路の鈴をお渡し申し、引替へと致し、手綱の色紙を、受取り歸るは身共が役目。その儀相濟みますれば、明朝早速、關東へ發足。又ぞろや引返し、姬君のお迎ひ。して、色紙は、事無う只今、お渡しでござるかな。

左內　如何にも、その儀は丹州上屋敷にて、貴公樣御來着の趣き申し傳へ、國詰めの武士、伊達新左衛門弟與作、右の色紙を持參いたし、昨夕、京着いたしたなれど、舊例に任せ、氏神加茂の明神の神前へ捧げ、當家武運長久の祈り、その夜與作も通夜いたし罷り上れば、おッつけ持參仕るでござらう。

官太　萬事拔け目なき與作、神事の舊例取急ぎ、最早參上いたすでござらう。殊更この程、管領職よ

り仰せ下さりしは、入間家の系圖の一巻、御改めの儀につき、お國屋敷へ申し越したるところ、與作の親父、伊達の與三兵衛、日ならず持參いたすとの事。さるに依つて、お屋敷内はお取込み。それゆゑ、何かと不馳走の段、申し譯旁々、今宵は夜と共に、官太夫めも、其許をお慰めの爲、麁酒一獻、お進め申さう。本田氏にも、ゆるりとお寛ぎなされいサ。

彌惣　それは何かとお心遣ひ、御無用になされい。年寄りの長の道中、近頃は追ひ〳〵、マヽ苦勞に罷りなり申した。ハヽヽヽヽ。……アヽイヤ、鷲塚氏、この間、お上屋敷にて、新左衛門どのゝ、お噂で承つたが、貴公には、御前の御意に叶ひ召され、御褒美拜領なされたと承はつたが、何かその品は殿樣の御秘藏。アヽ、結構なお道具と申す事、官太夫どの、左樣かな〳〵。

官太　如何にも左樣でござる。いつぞや、掛け的御上覽の砌り、拜領いたせし割り笄、即ちこれでござるて。

ト刀より拔き取り、見せる。彌惣左衛門、取つて

彌惣　イカサマ、これは結構なお道具。模樣は、アヽ、何でござるな。

官太　彫りは即ち、後藤祐乘が千疋獅子。イヤモウ、拙者が身にも命にも替え難き割り笄。誠に大殿の御恩を存ずれば、アヽ、疎かには思ひませぬて。

左内 成る程、官太夫どのゝお詞。こりや左樣思し召すも御尤も。その掛け的・御上覽の節は、いつ頃でござりましたな。

官太 如何にも、喜びの儀は忘れぬとやら。去年三月二十七日の儀でござつた。

左内 イカサマ、左内めも、その節居合せましたが、その時分と存じられまする。アヽ、その節は身共なども、お羨ましう存じたて。

官太 これは〳〵、御挨拶でござる。

彌惣 サヽ、お小柄はお返し申しまする。

ト官太夫へ渡す。この時向うバタ〳〵にて、近習二人、一散に出て來り

近習 兩御家老、これにでござりまするか。一大事が出來仕つてござる。

官太 一大事とは氣遣はしい。左内どのにも幸ひこれに。サヽ、逐一を云やれ。仔細はどうぢや。

近習 如何にも、その儀のお訴へ。夜前與作が、お國元より、加茂の社へ持參のお寶、お家に傳はる手綱の色紙、神前に捧げしところ、神職釆女を切り殺し、色紙は紛失いたしてござる。

トこれにて、三人驚ろく。

彌惣 色紙が紛失仕れば、身共も關東へ。ヤヽヽヽ。こりや大變でござるぞ。

官太　して、お寶を奪ひ取りしは、他より忍びし曲者か。又は與作が仕業にてか。

近習　サ、その儀は分明ならざれども、役目の與作も行くへ知れず。社内の騷動、大方ならず。

同　折からその場へ刎川氏、駈けつけ參つて立合ひの上、我れ〳〵はお知らせに、只今これへ。

官太　聞捨て致されぬ一大事。左内どの、貴殿の御賢慮、承はりたい。

左内　仰せでござれども、拙者とても差當つたるお家の難儀。ハテ、なんと致した

ト思ひ入れ。又ぞろ向うバタ〳〵にて、與作、上下股立ちにて、右馬之助と立廻りながら出て來り、本舞臺よき所へ來て

右馬　疑ひかゝつた伊達の與作。身が繩かけて。

與作　ヤア、繩かゝれとは推參至極。

右馬　でも、預かりの色紙の紛失。

與作　サ、それは。

右馬　それゆゑ身共が。

ト立廻つてキッとなる。

左内　ヤレ待たれよ右馬之助、官太夫どの始め、左内これに罷り在り。貴殿一人の料簡にて、殿より御

知行頂戴いたす、與作へ繩掛け召されんとは、却つて事を荒立つ道理。他聞へ知らさぬ一大事。密かに様子を糺し召されい。

右馬　御尤もにはござれども、寳を失ひたるその場にも、居合せませぬは慥かに逐電。それゆゑ捕へて糺明を。

左内　これは尤も、夜前の體裁、色紙の紛失。云ひ譯あらば、與作、様子を物語られよ。

彌惣　手前屋敷の御寳は、當家へ身共がお渡し申し、此方へ受取り申す、色紙紛失いたしては、彌惣左衛門、關東へ手振りですごくと、どの面下げて。サヽ、御兩所、たつた今、お渡しなされい。さなくば此方の寳、お返しなさるか。彌惣左衛門、武士が立ちませぬ。イヤサ、侍ひが立ち申さぬぞ。

官太　こりや、其許のお云やるも御尤も。左内どの、寳の失せしは詮方なけれど、關東のお使者へ、此まゝにては相濟みますまい。サ、與作、して又外に、手掛りあつてか。サヽ、どうぢや。

與作　申し譯はござりまする。キツと致した申し譯が……とは申せども、お使者へ送る手綱の色紙、持參なせしはこの與作、夜前京地へ到着せしが……舊例とござつて、加茂の社へ持參なし、武運長久の御祈禱賜はりしは、丑滿過と思ひし刻限。面を包みし忍びの曲者、正しく大勢、窺ひ寄つて

色紙を奪ひ、逃げ行く所を支へる神職、只一刀に討ち捨て、右往左往に散亂なす。通夜せし與作が耳に入り、逃がさじものと追ひかけしに、打つたる手裏劍。もし手掛りにと存ずるうち、件の曲者取逃がし、申し譯無き身の誤まり。奪ひ返さぬ其うちは、何れも方に面談も、どの面下げてと存ぜしかど、證據の小柄手に入る上は、これを詮議の綱にもと、スゴ〳〵參りし此お館。いづれも方、御推量下されい。

左内　すりや、なんとお云やる。色紙を奪ひ失せたる曲者、打ちかけし手裏劍、其方の手に入りしとな。

與作　如何にも、詮議のよき手掛り、割り笄のこの片々。

ト出す。官太夫、ギヨツとして右馬之助と顏見合はせ、思ひ入れ。

左内　ドレ、その笄を。

右馬　身共へ渡しやれ。

トかゝる。與作、立廻りあつて

與作　イヽヤこの品、ナニ其許へ。お渡し申すは鷺坂氏へ。

右馬　でもその品を。

トかゝるを突き退け、小柄を左内が前に持つて行き

與作 證據の笄。

宮太 それを。

ト寄るを、立廻つて

與作 こりや、宮太夫どの、なんと召さるゝ。

宮太 アイヤ、曲者の打ちかけし小柄、宮太夫めも、詮議の手がゝり、見ようと存じて。

與作 こりや御尤も。お役柄と申し、其許樣にも、お目にかけいでなんと致さう。宮太夫どの、御覽なされい。

ト小柄を出す。左內見て

左內 小柄は卽ち、割り笄、後藤祐乘が千疋獅子。こりやコレ、只今鷲塚氏、殿より拜領おしやつた、その笄。形に似寄りのこの品。宮太夫どの、ハテ、世の中には似寄りの道具も、あればあるものでござるの。

ト宮太夫へ目を附ける。宮太夫、思ひ入れあつて

宮太 成る程、似寄つた割り笄、廣い浮世に、澤山無うてなんと致さう。

與作 して、其許の割り笄の片々は、それに御所持でござるかな。

宮太　アイヤ、その片しの笄は。

ト思ひ入れ。

與作　これでござるか。

ト件の笄を見せる。

宮太　エヽ、滅相な。どうして、それが。

與作　然らば、いづれへ遣はされた。

宮太　サ、その儀は。

與作　如何召された。

宮太　サ、その片々の笄は。

ト右馬之助と顔見合はせ、いろ〳〵あつて

盗まれました。

與作　ヤ。

宮太　アイヤ、くれました。

與作　そりや、何者に。

宮太　弟、八平次に。

與作　いつ遣はされた。

宮太　去年遣はした。ハテ、不屆き者の八平次、殿の金子をこもうの上、目に剩つたる致し方、殿へ願うて勘當いたしたその砌り、八平次めが、小柄を所持して家出いたした。

與作　そりや、いつ頃の儀でござるな。

宮太　ハテ、八平次は……一昨年勘當。すりや、遣はしたは一昨年の儀でござらう。

與作　すりや、笄は、八平次どのへ、一昨年遣はされたな。それに又、大殿より御拜領は、去年三月。ハテ、なんと跡や先の儀でござるな。

宮太　ヤ。

與作　夜前の體裁、小柄の出所。殊に、弟八平次どの、勘當の身の行くへ知れず。それを幸ひ、何かの科を彼れに冠せても、鷲塚氏、跡先揃はぬ詞の顚倒。さはさりながら、血を分けし實の弟を、盜人に。これが誠に兄弟、他人の

ト思ひ入れあり

八平次には只今より、お上の疑ひかゝりますぞよ。

トきつと云ふ。

宮太　そりや申さずとも、知れた事。かゝる大事を仕出す弟め、お家の寶を奪ひし上は、捕へ次第に縛り首。その災難が嫌さゆゑ、疾に勘當仕り、他人の身共へ、よもや貴公の疑ひはざれば、氣の毒ながら、お家に仇する八平次、よもや此まゝ差措かれますまい。

與作　何しに貴殿へかゝりませう。當家へ忠義の鷲塚氏。されども、これなる笄は、八平次の所持とご

宮太　そりや何れとも御勝手次第。

彌惣　して、身共への御返答は。

與作　そりや、與作めが御使者を願ひ。

彌惣　アノ、身共へか。

與作　只今お聞きの通りの樣子。色紙の盗人は、八平次と極まる上は、彼れが在所を詮議いたし、めでたう色紙を取返し、後より入間のお館へ、拙者が持參いたすでござらう。

彌惣　然らば身共は立歸り、この旨上へも披露いたさんが、もしその色紙出ぬ時は、姫の縁談、何かの妨げ。もしや兩家の確執とも。

與作　サ、そりやお氣遣ひなさるゝな。與作が身を粉に碎くとも、色紙は詮議仕出して、差上げます

る。日延べの日數も六拾日、この願ひは左内さま、御前よしなに賴み存ずる。

左内　すりや、與作は日延べを願ひ、其うち色紙の行くへの詮議。先づ手掛りは八平次、彼れを捕へて糺明いたさば。

ト宮太夫へ目を付ける。

宮太　弟であらうが勘當の、他人となつたる八平次。身共も面晴れ、彼奴を召捕り、拙者が明りを立てねばならぬ。

與作　そりや御尤も。申さば、貴殿の御所持の笄、その片々ゆゑ、宮太夫どのにも御心配の程、尤も至極。東のお使者もお聞きの通り、家にもかゝる今日の仕儀。いづれ寶は、お後より、與作が持參仕らん。右の日延べを、貴殿よしなに。

彈惣　承知いたした。成たけ急いで色紙の詮議。

與作　お氣遣ひなさるゝな。これと申すも姫君の緣邊變替へ、お家の確執願ふ輩が、舘の内に。

トあたりへ思ひ入れ。右馬之助はじめ敵役皆こなし。

彈惣　拙者は、いよ〳〵明朝出立。

宮太　當家の送りは、土山鄕助、大津邊まで、お見送り役目。

近習　心得ました。粟田口にて人馬の待受け。
同　長の道中、御心付けられ。
右馬　お氣の毒には手綱の色紙、取り召されぬ本田氏、寳の在所も、よもや早速。
彌惣　ヤ。
右馬　近頃笑止千萬に存ずる。
左内　色紙の盗人、八平次に極まる上は、與作は急ぎ、彼れが詮議を。さはさりながら鷺坂が、また面談の旨あれば、役所に於いて物語らん。
與作　拙者も、貴公へ、申したき一儀ござれば、左内どの。
左内　萬事は、役所で
官太　鷺坂氏。
左内　官太夫どの。
彌惣　同道いたさう。
左内　與作、お來やれ。
與作　先づ、ござりませう。

ト唄になり、左内、與作、官太夫へ目を附ける。彌惣左衞門に近習兩人、附いて奥へ入る。官太夫右馬之助、殘る。

右馬 官太夫どの、貴殿の所持の割り笄、與作めが手へ渡り、色紙詮議の手がゝりとなりましたが、色紙はアノ貴殿が

官太 コレ。

ト思ひ入れ。管絃になる。

右馬之助どの、御推量の通り、加茂の社へ忍び行き、奪ひし色紙は、コレ爰に。

ト懐より袱紗包みの色紙を出す。

右馬 さてこそ、夜前神職を殺害なし、與作へ笄打ちかけしは。

官太 即ち身共。火急の場所ゆゑ、心遣ひ、與作を目當に打つたる笄。それが證據とこの身の詰まり。幸ひ弟、八平次、勘當の身の縁なきゆゑ、可哀や彼奴に塗りつけて、一寸遁がれは致したなれど、左内が計らひ、與作めが、弟が在所詮議と申せど、よもウロ〳〵と此あたりに、あの八平次が。

右馬 サア、それが氣遣ひ。貴殿は御存じござらぬが、八平次は、都の内、四條河原の蒲鉾小屋、非人

となつて、慥かにこの地に。

官太　それはこれまで存じませぬ事。もしや與作が、只今にも、八平次に巡り合ひ、召捕られて來る時は、小柄の事は存ぜぬ弟。さすればこの身の大事とならん。こりや此まゝには捨て置かれぬ。

右馬　拙者も左やう存ずるゆゑ、八平次どのへ知らせ遣はす、手段をなされい。

官太　ナニサマ尤も。料紙をこれへ。

右馬　心得ました。

ト管絃にて、料紙を取出し、官太夫へ渡す。

官太　あたりへ心を。

右馬　氣遣ひ召さるな。

ト官太夫、手紙を認める。奥より、團助、よき時分より出かゝりゐて、官太夫、密書を書きしまふを見て

團助　お旦那、これにお出でなされましたか。

右馬　其方は下部團助。

官太　申しつけんと思ふ最中。よくも參つた。過分々々。

右馬　して、宮太夫どのには八平次どのへ、遣はさるゝ密書の文言、なんとでござる。

宮太　密書の文言、斯くの通り。

ト渡す。右馬之助、開き見て

右馬　「飛札を以て申し遣はし候ふ、然れば由留木の重器、手綱の色紙、我れら手に入れ候ふ砌り、與作見咎め候ふ間、小柄を打ちかけその場を遁がれ候ふ所、右の小柄、盗賊の證據と相成り候ふゆゑ、其方他國いたし居り候ふを幸ひ、小柄の儀は、八平次へ遣はし候ふよし、申しくるめ候へば、定めて其方が在所を詮議いたすべくと存じ候ふまゝ、即ち一腰を送り進ぜ申し候ふ、もし左様の節は、よろしく御計らひ然るべく候ふ、右につき、與作儀は、人知れず毒殺いたす手段に相極め候ふ、おしつけ申し入るべく候ふ。以上、月日、鷲塚八平次へ、宮太夫」……………すりや、一腰を早速送り、彼の與作めは毒殺いたし

宮太　それも調合いたしてあれど、いま一藥の揃はぬ上は。

團助　お氣遣ひなされまするな。かね〲あなたがお尋ねの、譽石といへる彼の名石。藤浪の兄、三度飛脚の江戸兵衞め、以前は醫道の忰ゆゑ、持ち傳へしと承り、彼奴を騙して、やう〲と、今日、奴が手に入りました。即ち、これが、

ト渡す。官太夫、よく〳〵見て

官太　團助、出かした。疑ひも無き、尋ぬる名石。兼ねて毒藥調合いたせど、一藥足りぬに、これまで猶豫。この品手に入る上からは、丹州の大殿初め、奥方までも、殘らず毒でおッ殺し。

右馬　由留木の家國横領せば、官太夫どのゝ奥方は、惚れてござるあの重の井。身共は卽ち、腰元いろは、女房に致す手段。

官太　さるにても、姬の緣談、取交しの寶を失ひ、兩家は確執。その虛に乘つて兼ねての大望。色紙は奪ひ取つたれど、正しく似せ物。これも大方、あの與作め

ト懷より色紙を出して、思ひ入れあり

團助、近う。

團助　ネイ〳〵。

ト近寄る。

官太　コリヤ、其方は、去年より新參者、身が弟の八平次が、面はよもや知らぬ筈。さりながら、見所のある下部。コリヤ、この一腰を四條河原へ持參なし、この密書を相添へ、身が弟の八平次に、渡して參れ。

ト差添を渡す。

園助　すりや、この一腰、この書状、御舎弟八平次さまに、お手渡し申せとの御用向き。畏まつてはござれども、お面を存ぜぬこの園助。

宮太　尤も至極。彼れが面體、コレ。

ト園助に囁く。

園助　心得ました。キツとお渡し申すでござらう。

右馬　合點ゆかぬは、密書の文言。白鳥氏と書かれしは。

宮太　その白鳥とは、コレ。

トさゝやく。

右馬　すりや、彼の仁も、貴殿へ一味の

宮太　コレ。祕すべし〳〵。貴殿は丹州上屋敷へ、入間の使者が持參せし、驛路の鈴も、人知れず

右馬　ひん盜んで、お渡し申さう。

園助　下郎は急ぎ河原へ參り、八平次さまにお目にかゝり、一腰渡して、あなたの荷擔人。もし與作めがうせ居らば、人知れずおツ殺し、めでたく吉左右お知らせ申さん。併し、あなたのお腰が明い

て……下部が鈍き一腰なりと。

ト拔き取つて、官太夫へ渡す。よき時分より逸平、出て來り、下の方、萩垣の後に窺ふ。

官太　機轉きいたる下郎が頓智。其方が渡せし名石を、彼の毒藥に調合なし、事成就なすからは、身が取立て、其方も侍ひ。

右馬　又も奧にて、何かの密談。

團助　お旦那。

官太　團助、來い。

ト管絃になり、二人、思ひ入れあつて奧へ入る。逸平、後を窺ふ。奧より、藤浪、出て來てためらひ居る。

逸平　いま物陰で窺へば、佞人めらが悪い相談。殊に名石手に入るからは、毒藥調合と吐かしたが、お旦那與作さまの夜前の仕儀。こりや、滅多に油斷はならぬわえ。

藤浪　アイ、滅多に油斷はならぬわいな。

逸平　ヤ、わりや……お末女中の藤浪、滅多に油斷がならぬとは、何を口眞似するのだえ。

藤浪　アイ、口眞似をセいでわいな。逸平どの、お前に油斷がならぬわいな。

逸平　コレ〳〵、藤浪さん、そりやアお前、何を云ひなさる。わしも以前は沓掛村で、馬追ひの八藏。その時はてまへも…………アイヤ、お前も三度飛脚の江戶兵衞が、妹のお浪とて、大佛前で茶屋女、上り下りに緣でかな、どれ合うて、おれは與作さまへ御奉公。おぬしは、わしが後追うて、この屋敷へお末の奉公。時節が來たらば、夫婦と思つて居る逸平。なんでおれに油斷がならねえ。

藤浪　ハテ、そりや、お前の心に問はしやんせ。最前も見て居れど、あの腰元のいろはさまが、お前に附け文。あのやうな事をマア、わたしが見る前で、エヽ、腹が立つわいな。

逸平　エヽ、あの文を。大笑ひだ。コレ、てまへこそ、この屋敷をだりむくつた、惡者の八平次が、附けつ廻しつ。アヽ、大方あの八平次は家老の弟、まんざらでもあるまいよ。

トぴんとする。この時彌惣左衞門、袴羽織に着替へ出て來り、窺ふ。

藤浪　エヽ、なんのわたしが、あの八平次に。お前こそ、惡性さんして。

ト花活けの薄を取つて、逸平を打つ。

逸平　イヤ、此奴が〳〵。男をぶつたな。われがぶてば、おれも又。

ト同じく薄を取つて、藤浪をぶつ。この時、彌惣左衞門この中へ入り

彌惣　これはしたり／＼、何か樣子は存ぜぬが、藤浪と逸平、薄を取つて叩き合ひ。コレ／＼／＼、薄の穗が耳へ入ると、聾になると申す。マア／＼、鎭まるがよい／＼。

逸平　イエ／＼、お構ひなさるな。聾になつても大事ない。女にぶたれては一分が立ちませぬ。物事の聞えぬやうに、聾にしてやらう。

藤浪　わたしも腹が立つわいな。エヽ、こなさん、聾にならしやんせ。

彌惣　コレサ、そこを貰うた／＼。

逸平　イエ／＼／＼、合點しませぬ。おれが斯うして聾にして。

藤浪　わたしも斯うして。

ト兩人、薄を持つてぶち合ふ。彌惣左衛門、中へ入り、捨ぜりふにて留める。薄の穗は一面に散る仕掛け。彌惣左衛門の耳へ入る思ひ入れ。

彌惣　これサ、どちらが聾になつても惡い。身共が貰つた。預かつた／＼。

ト聾の聲に變つて、留める。兩人、捨ぜりふ。時の太鼓になり、向うより近習二人、半纏、股引、菅笠を持ち旅出立ちの侍ひ二人連れ、スタ／＼と出て來る。

近習　彌惣左衛門どの／＼………これサ、本田氏、何をお騷ぎなさる。

ト彌惣左衛門を引ッ張る。彌惣左衛門、合點のゆかぬ思ひ入れにて

彌惣　ナニ、本田瓜に、氣がないか。此お人は、時分柄もあるに、九月になつて本田瓜が食へませうか。イヤ、怪しからぬ事をお云やる。

近習　これはしたり、何を云やる。貴公は御出立との儀、身共お見送りに參るのでござる。

彌惣　ナニ、濃血を出させても。この人は、穢ない事を云ふ侍ひぢや。

近習　コレサ〳〵、貴公を送りの役でござるよ。

彌惣　ナニ、風の神を送る、こいつは面白い、送りませう。

近習　これは狂人の沙汰でござる。

彌惣　サア〳〵、貴樣達も、送れ〳〵。アヽ、お送れ〳〵。

侍ひ　風の神を、送れ。

近習　たはけ面め。見送りの役だワ。

彌惣　さつさと送れ。

侍ひ　風の神を送れ。

彌惣　お送れ〳〵〳〵。

侍ひ　風の神を送れ。
近習　痴言を云ふな。
彌惣　送れや〳〵、風の神を送れ。
侍ひ　さつさと送れ。
彌惣　風の神を送れ。

ト狐釣りのやうな鳴り物になり、近習浮かれて、先に立ち、侍ひ、菅笠を叩き立て、彌惣左衞門附いて向うへ入る。兩人殘つて

逸平　大べら坊め、彼奴、聾になつたと見えるワ。
藤浪　コレ、逸平どの、お前、先刻の文を見せなさんせ〳〵。
逸平　エヽ、てまへも悋氣深い者ぢやァねえか。他人の目にかゝつては、一大事のお文ゆゑ、それで見せずに置いたのだ。疑つてなら、ソレ、上書を見やれ。

ト狀を見せる。藤浪取つて

藤浪　「お倉どのへ、重の井より」アヽ、こりやお前の母さん、沓掛村の
逸平　阿母の所へ重の井さまから、彼の娘御を賴みの狀サ。

藤浪　アヽ、さうとは知らず、思はぬ悋氣。お前も又、さういふ狀なら最初から、斯う〳〵ぢやと云うたがよいわいな。

逸平　サア、そこが名代の皮肉な所だ。ちつとのうち、ぢらして見たのだ。

藤浪　それはさうと、逸平どの、あの妹御の小まんさんは、いんまに關の宿屋に勤めてかいな。

逸平　イヤ〳〵、妹の小萬めは、知つての通りの男まさり、女に稀れな劍術、柔術、今では都の祇園町で仲居の奉公、異名には兄のおれに習つて、奴の小萬と綽名されし、又は關の小萬とも、男にも無いあの氣性。殊にこの頃は阿母の煩らひと聞いたが、年端もゆかぬおさんさまのお手一つで、母の看病なさるであらうと、それが苦勞になるのよ。

藤浪　して、おさんさまを產ましやんした、あの母御さまと、新左衞門さまとは、いんまに女夫に。

ト此あたり、江戶兵衞、出かゝり居る。

逸平　これはしたり、そんな事が、お上へ知れてはお互ひに身の大事。殊に色惡のあの官太夫、先刻にちよつと吐かしたは、名石手に入る上からは、毒の調合揃ひしと口走つたが、ちつと氣がゝり。

トこの時後にて、江戶兵衞、これを聞き、ハツと思ひ入れあつて

江戶　エヽ、ナニ、あの名石を、毒の調合に用ふるとかえ。サア〳〵、そりやとんだ事でござりま

す。わしは又、官太夫さまが、藥に使ふといふ事で、團助どのが進めるゆゑ、ツイうか〳〵と渡しましたに、それで、ひよつと人でも殺して御覽じませ。オヽ、わしや、どうしませう〳〵。サア〳〵、そりや、とんだ事になりました〳〵。

藤浪　そんなら、こなさんが持ち傳へて居なさんす、その名石を、あの團助に進められ、ウカ〳〵と鷲塚さまの手に入つて、人を害する毒藥と

逸平　祕法の一藥幸ひと、團助めが計らひで、あの佞人の鷲塚へ。

江戸　サア〳〵、あの名石が、毒の藥にならうとは、わしやア決して、知りませぬ〳〵。モシ、こりやどうしたら、ようござりませう〳〵。

トうろ〳〵する。

逸平　これサ、其やうにうろたへて、家中の者に聞かれては、却つて大事だ。いま聞けば團助が、四條河原と吐かしたからは、使ひにうせたに相違ない。おぬしは早く御門外に待ち受けて、コレ。

ト囁やく。

江戸　エ、そんなら、お屋敷近所を離れた時分。

逸平　油斷はするな。

江戸　呑み込みました。
藤浪　併し、大事を頼みし團助、もしや忍んでお舘を
逸平　密かに失せないものでもない。藤浪、おぬしは氣をつけて、逃がさぬやうに、合點か。
藤浪　心得ました。逸平どの。
逸平　行きやれ。
江戸　ドリヤ、御門を離れて。
　　ト時の鐘、管絃になり、藤浪、奥へ、江戸兵衛、向うへ走り入る。此うち下の藪垣押し分け、團助、
　　旅狀箱を首へ掛け、以前の刀へ柄袋を掛け、ソロ〳〵窺ひ出る。
逸平　併し、土ほぜりの、機轉では、どうも合點が。
　　トふつと團助を見付け
　　ヤ、團助か。
團助　われは逸平。
逸平　われには奴が用があるぞ。
團助　おれも、旦那の急用。歸つた上で、用があるなら。

ト行かうとする。逸平、立廻つて

逸平　イヽや、不肖ながら遣られない。わりやァ百姓の江戸兵衛から、名石を受取つたであらう。サァその名石の譯を云へ……と云つた所で、滅多にわれも吐かすまい。差當つたは、われが首に掛けてけつかるその狀を、奴に見せろサ。

ト手を掛けるを、立廻つて

團助　旦那の御手跡、大事の御狀を、うぬらに見せていゝものか。達てと吐かせば首と胴、この世からなる生別れだ。

ト拔かうとする。逸平その手をキッと捕へ、一腰の拵らへを見て

逸平　ハテ、心得ぬその一腰。今の今まで差して居た、柳原やら日蔭町、ぐわた〳〵丸に引替へて、鍔は慥かに南蠻鐵、高彫りしたる身拵らへ。慥かに御家老鷲塚さま、差してござつたその刀。この逸平にちよつと見せやれ。

團助　イヽヤ、われには見せられぬ。急ぎの御用だ。マァ愛を。

逸平　イヽヤ、遣られぬ。われには詮議が。

ト立廻りよろしく、よきキッカケにて兩人立廻り、狀箱を奪ひ合ひ、トヾ團助、狀箱を持ち、逸平を

團助　うぬ、團助め、引ッ捕まへて。

當てゝ、一散に向うへ入る。逸平心附き

ト鳴り物の切れにて後を追ひかけて、向うへ走り入る。直ぐに管絃になり、いろは、守入れの起證を持ち、腰元二人、誂らへの振り袖衣裳を持ち、付いて、めい〳〵手燭を持ち、いろはを押へて、障子の内より追ひ駈けて出て來る。兩人、いろはを捕へて

腰元　アヽ、いろはさん、その書き物を、見せなさんせ〳〵。

いろ　アヽ、こりや、どうも見せ悄いわいな。

腰元　さう云うて見せさんせぬと、わたしが擽つてなりと、見にやならぬわいな。

同　ちよつと書き物を見せさんせいな。

いろ　サア、あやまつた程に、放して下さんせ。何を隱さう、こりや與作さまへあげる起證ぢやわいなア。

腰元　大方さうであらうと思うたわいな。

いろ　サ、お前方、頼みと云ふは、爰でござんす。常から物堅い與作さま、わたしが逢うて願うても、所詮叶へて下さんせぬ。どうぞお前方、與作さんに逢うて、この起證を渡して下さんせいな。

腰元　成る程、わたしが願うては見ようが、いろはさん、お前にも頼みがあるぞえ。

いろ　お前の頼みと云はしやんすのは、アノ御家中の羽根川右馬之助さまの事かえ。

腰元　さうぢやわいな。

　　トこの時分より右馬之助、出かゝり窺ふ。

いろ　イエ〳〵、あの右馬之助さんの事は、必らず構うて下さんすなえ。

腰元　サ、わたしもさうは思へど、度々頼まんすによつて、是非なうお前に云うて見るのぢやわいな。

いろ　なんの、捨てゝ置きなさんせ……それはさうと、お前の持つて居さんす、その振り袖は、なんでござんすえ。

腰元　サア、この小袖の事はナ。

同　アイヤ、お前に惚れて居さんす右馬之助さまが、拵らへたあの小袖。お前にソツと渡してくれいと、わたし等を頼んでぢやわいな。

いろ　エヽ、その小袖を右馬之助さんが、アノわたしに。

腰元　主が心を盡した小袖、お前、嬉しうござんせうがな。

いろ　エヽ、措きなさんせ。わたしや、其やうな小袖、いらぬわいな。頼みといふはこの起證。どうぞ

アノ與作さんへ。

ト この時、松が枝の燈籠へ、手燭の灯りを移す。

腰元　その代りこの小袖、お前、受取つて下さんせ。

いろ　なんでマア、あの右馬づらが拵らへた小袖。捨てゝしまはんせ。此やうな物が、寝間着にもならうかいの。

腰元　ほんに、こりや捨てるがようござんせう。

同　そんなら、斷う捨てゝ行かうわいな。

ト上の方へ小袖を捨てる。後にて右馬之助、腹立てる思ひ入れ。

腰元　あの右馬づらが小袖は捨てゝ

いろ　與作さんの、この起證は

右馬　この右馬づらが、取次いでやらうワ。

ト出る。皆々惘りして

三人　ヤア、お前は。

右馬　オヽ、馬づらな右馬之助ぢやぞや。いろはめ、おのれマア、身共が聞いて居る前で、右馬づらが

寄越した小袖を、捨ててしまはうと吐かしたな。身共も戀が叶へたさ、ひどい工面で、拵らへた小袖を、よう、うぬらは捨てうと吐かしたな。ヤイ、いろはめ、おのれ、その代り、與作めに渡すその起證、身が受取つてあの與作、縛り首にして見せうワ。

いろ　アヽ、コレ、滅多な事を仰しやりまするな。

右馬　そんなら、起證を身共に渡すか。

いろ　サ、それはナ。

右馬　いつそ爰へおツ轉ばして。

ト いろはへかゝる。腰元支へる。右馬之助、捨ぜりふにて、三人を相手に立騷ぎ

エヽ、邪魔な。うぬらも爰で念佛講を。

ト追ひ廻す。腰元二人、逃げて入る。兩人殘り、これより、なかしみの合ひ方になり、兩人、起證を枷に立廻りよろしくあつて、トヾ、いろは、起證を持つて、向うへかゝる。右馬之助、やるまいとする。藤浪、何心なく出かゝり

藤浪　ヤ、いろはさんかえ。

いろ　藤浪どの、爰を放して。

藤浪　畏まりました。

ト右馬之助を引退けんとして、有り合ふ小袖を冠せ、突き轉かし

この間に早う。

いろ　藤浪どの。

藤浪　アモシ、お出でなさんせ。

ト三重になり、いろは、向うへ起證を持ち、一散に入る。右馬之助、小袖を取つて

右馬　エヽ、いろはめ、うぬ、その起證を渡しやアがれ。

ト小袖を、藤浪にぶッつけ、時の鐘にて向うへ入る。藤浪、殘つて

藤浪　アノマア右馬之助づらも、同じやうに、よい男のつもりかして、いろはさんを見る度々に無理口說き。丁度、わたしをアノ八平次づらが、やゝともすると……ほんに、八平次どのと云へば、先刻に逸平どのが賴まんした、團助がお屋敷内に見えぬのは、毒に用ゆる名石を、所持して館を

ト振返る。權平、折よく出かゝり、これを聞く。

權平　ヤ、藤浪どの、そちや官太夫どのゝ毒のあらまし、聞いたと見える。大事を知つたる上からは、女ながらも助けては置かれぬわえ。

藤浪　アヽモシ、滅相な。どうしてわたしは、左樣な事を。一向に存じませぬわいな。

權平　默れ、女め。存ぜぬ者がたつた今、口走つたは、ありやなんだ。

藤浪　サ、あれはなんでがなござりましたわいな。

權平　とぼけた女め。毒の企みを氣取つた上は、不便ながらも。

ト拔いて、切りつける。藤浪、ワツと云うて、小袖を打ちつける。白刃に搦んで纏ひつく。藤浪、この手を捉へて

藤浪　モシ、危なうござります。お納めなされませ〳〵。

權平　イヤ、此奴、機轉のきいた女だわい。

トあちこちするうち、藤浪、小袖に卷いた、白刃を捥ぎとる。

うぬ、なか〳〵味を

ト立ちかゝるを、火入れを打ちつける。權平が眼へ灰の入りし思ひ入れ。

うぬ、女め、逃がしはせぬぞ。

ト武者ぶりつく。はずみに藤浪が持つたる白刃にて、したゝかに切られ

アヽ、切つたな〳〵。人殺しだ。

藤浪　ア、、滅相な。どうしてマア。怪我でござりますわいな。

權平　イヤ〱切つた。藤浪が切つたワ。

藤浪　モシ〱、ななたのお怪我でござりまする。

權平　イヽヤ、藤浪がアノ身共を。

トよろぼひ寄る。この時。與作、ツカ〱と出て、藤浪の持つたる刀を取り、權平を切り倒す。

藤浪　ヤ、與作さま。

與作　鷲塚一味のこの權平、相手は身共ぢや。うろたへまいぞ。

ト止めを刺す。時の鐘、合ひ方。この時、障子を明けて、左内、手燭を袖に隱し、窺ひ出で、投げ捨てある振り袖の小袖に、ちよつと目をつけ、ソロ〱と下りて來り、庭下駄を履き、後に窺ふ。藤浪思ひ入れあつて

藤浪　お家のお家來權平どのを、あなたのお手に。

與作　助け置いては、其方が仕業なりしと口外せば、後の難儀と思ふがゆゑ、佞人ばらが目隈にかゝらぬ其うちに、死骸は、あれなる

ト上の井筒の中へ入れる。

幸ひ、藤浪は、身が召仕ひの逸平と、末の約束なせしと聞く。これなる書面を逸平に、窃かに手渡し致してくりやれ。

ト懐中より立て文を出して渡す。

藤浪　すりや、この品を逸平どのへ。

與作　與作が願ひのその書翰、彼れに持參し、關東の

藤浪　入間の館へ

與作　忍びの使ひ。

藤浪　如何にもキツと。

與作　他言いたすな。

左内　不義者、動くな。

ト兩人が中へ灯を出す。

藤浪　ヤ、あなたは、御家老。

與作　左內どの。

左內　お庭先にて女を捕へ、闇夜を幸ひ、不義いたづらを働らく與作、こりやお屋敷には叶ふまい。

藤浪　アイヤ、全く左樣な事は。
左內　イヽヤ、隱すな。與作は不義者。さすれば二人はお館の、掟を背くその科にて、兩人共にお暇出でん。女は格別、與作が身の上。左樣なうては當家に於て、諸士を預かる役目が立たぬ。
與作　すりや、不義者と左內どの、身共にお暇賜はるとな。
左內　其お暇も、日限りがござる。
與作　ヤ、すりや、お暇を賜はるとも
左內　詮議の日數も廿日を限り、色紙の盜賊八平次、彼れが行くへを尋ね出して、佞人たる官太夫が、惡事の一々詮議し拔いて、お家の納まり。
與作　拙者も左樣存ずるゆゑ、いま藤浪へ相渡し、入間の屋敷へ急ぎの早打ち。家老中まで與作がお願ひ。
藤浪　其お使ひは逸平どの。さはさりながら最前の、在所の者を僞つて、毒に加ゆる名石を、鷲塚どのの計らひにや、下部の團助取得し上は、御油斷あつてはお上の大事。
左內　氣遣ひ致すな。たとへ鷲塚お上へ對し、毒の企てあるとも、お國屋敷は貴殿の御親父、與三兵衞どの、殊に忠義の新左衞門、京都の屋敷は斯くいふ左內、勤番いたせば氣遣ひない。さはさりな

がら管領より、仰せ下りし當家の系圖。

與作　それも密かに親與三兵衛、明々日は慥かに京着。

左内　すりや、與三兵衛は系圖を持參し、到着も明々日に極まるとや。

與作　如何にも。只氣遣ひは御寶を、東の使者に渡さずして、もしも御兩家確執の、憂ひもあらんと存ずるゆゑ、認め置いたる彼の願書。藤浪、其方は他聞の憚り、逸平に相渡せ。合點がいたか。

藤浪　お家のお爲のこの御書面。キッと御家來逸平どのへ。

左内　事によつては其方が、女ながらも東へ使ひ。それ幸ひのこの場の不義者。科を負はせて暫しのお暇。心得たるか。

藤浪　大事のお使ひ、女ながらも

左内　天晴れ愛い奴。旅の調度は

　　ト袱紗包みの金を投げ遣る。藤浪、取つて

藤浪　こりや、コレお金を

左内　些少の贐け。

藤浪　エヽ、お心附かれし

與作　然らば藤浪。
藤浪　お二人樣。
左內　行け。
藤浪　おさらば。
　ト三重になり、書き物を懷中して、藤浪、一散に向うへ入る。兩人、後を見送り
與作　只この上は日延べのうち、在所知れざる八平次、尋ね出して色紙の詮議。
左內　すりや、その色紙は、いよ〳〵紛失。
與作　サア、紛失いたせしお家の重寶
左內　手綱の色紙は其方が、密かに所持しおいやるか。
與作　ヤ、なんと。
左內　天晴れ忠義の與作が働らき。失ひたるは似せ物にて、誠の色紙は肌身離さず、其方守護して居るであらう。
與作　すりや、某が胸中を
左內　疾より察せしこの左內。天晴れ働らき、出かし召された。

與作　お祭しの上は、何をか包まん。誠の色紙は、密かに隠し、加茂の社に捧げ置き、奪はれたるは眞赤な似せ物、最前東のお使ひの手前、鷲塚その座に同席いたせば、迂濶に口外いたされず、これまで包みし粗忽の段々、必らずお身を某が、僞り隠すにあらねども、他聞を憚かり只今まで、それを明かさぬ色紙の行くへ。失せしは似せ物、誠の色紙は、即ちこれに。

ト懐中より、袱紗包みの色紙を出す。

左内　ドレ。

ト手燭を取り、よき所に差置き、色紙を受取り、よく〳〵見て

左内　誠にこりやコレ手綱の色紙、事なく貴殿の計らひにて、失せしは似せ物。エヽ、忝ない。

與作　最前、侫人官太夫、小柄の事より詞の顚倒、正しく彼れが仕業と存じ、東の使者へも失せしと云ひ立て、暫らく色紙を隠し置き、八平次が在所を求め、召捕つて拷問せば、家中の内にて鷲塚へ、心を運ぶ侫人ばら、自然と知るゝ道理と存じ、さてこそ失せしその科を、身に引請けし與作が胸中、必らずともに其許にも。

左内　エヽ、流石はお家の忠臣たる、伊達新左衛門の弟與作。事荒立てぬ讒者の詮議。然らば貴殿はこれより直ぐに、行くへ知れざる八平次。

與作　矢張り當所にさまよふ取沙汰、色紙は卽ち其許より、人間のお家へ密かに送り、御安堵あるやう貴殿の計らひ。
左内　して、與作には、これより直ぐに。
與作　八平次が、在所を尋ね。
ト行かうとする。
左内　アイヤ與作、暫らくお待ちやれ。
與作　拙者を止め召されしは。
左内　彼奴も不敵のあぶれ者。殊に與作は、それと云はねど。
與作　ヤヽ。
ト思ひ入れ。この時、庭の筧より本水、手水鉢へ落ちてくるを見付け、左內、持つたる手燭を吹き消し、小石を取つて燈籠へ打ちつける。灯消える。
與作　こりや左內どの、何ゆゑ灯を。
左内　闇夜となせしは左內が寸志。せめてこの場で蔭ながら。
與作　ヤヽ、なんと。

ト誂らへの草笛入りの合ひ方になり、左内、庭下駄を履き、探りよつて障子屋體を明け、件の振り袖を肩に掛け、トン〳〵と足音させて、障子を締める音を聞かせ、手水鉢の水を汲み上げ、柄杓を持つて、思ひ入れあり

左内　與作どの〳〵。

與作　左内どの、呼び止められしは。

左内　逢うてお行きやれ。

與作　ヤ、そりや何者に。

左内　この者に。

ト袖先を與作に捉へさせる。

與作　この袖は、慥かに女の。

左内　云ひ交したる、腰元いろは。

與作　ヤ。

左内　サ、包むも道理、道を立て抜く與作が心中、常々迷ふこの袖の、せめては安堵いたす爲、それと云はずに、固めの杯、即ち、左内は仲人役。

與作　でも、御法度は、どうも拙者は。

左内　サ、その物堅き其許ゆゑ、灯を消してこの場の結び。左内が願ひ、酒にはあらぬ一滴の、水杯を、得心あつて。

ト差しつけろ。

與作　然らば折角其許の、お心ざしのお杯。縁を結ぶの酒ならぬ、互ひに顔も水杯、勧めに任せて。

ト柄杓の水をグツと飲み干し

必らずともに御他言は。

左内　そりや申さずとも、身共も承知。いよ〳〵柄杓のこの水を

與作　勧めに任せて斯くの通り。

ト柄杓を渡す。

左内　誠に與作はこの水を。ハテ、よう飲んでつ

トにつこりと思ひ入れ。合ひ方變つて時の鐘。正面の障子を明け、官太夫、手燭を袖に隱し、立ち身にて窺ふ。與作、毒の廻りし思ひ入れにて

與作　ハテ心得ぬ。柄杓の水、與作が、咽喉を通るや、否や。

ト苦しむ思ひ入れ。

左内　ヤヽ、なんと。

ト立寄つて、與作を介抱の體にて、惣身を探り見て

惣身斯程に熱氣して

與作　五體も痺れて俄の惱亂。

官太　明々後日は到着の、親與三兵衛が持參の系圖、道に待ち受け、老ぼれ壹人。

トきつと向うへ思ひ入れ。

與作　ヤヽヽヽ。鷲塚どのゝ詞の樣子。

左内　誠の色紙は

官太　貴殿の御手に。

與作　ヤ。

左内　ソレ。

官太　これぞ誠の

ト後へ色紙を出す。鷲塚取つて

ト手燭にて見る。

左内　氣を附けさつしやい。麁忽千萬。

官太　閉口いたした。

左内　されども毒は

官太　利いたでござらう。

與作　さては、左内も

ト立ちかゝらうとする。左内、立ち蹴に蹴飛ばす。與作、思ひ入れあつて

騙かられたか。

トきつとなる。

官太　與作は寂滅。

ト手燭を差出す。

左内　コレ。

ト思ひ入れ。官太夫、灯火を吹き消す。木の頭。

與作　エヽ、口惜しい。

トきざみにて、與作、無念の思ひ入れ。左内、嘲笑ふ。この仕組み、よろしく、拍子

幕

本舞臺、一面の淺黄幕、葭簀張りの珍物茶屋、軒口に天幕、團子釣り提灯を掛け、獏の看板。床几の上に錢箱を直し、入り口の體。よき所に、大蒲燒と記したる行燈を据ゑ、莚を敷き、燒火鉢、鰻船、大道具の鰻を見せ、幕の内より與茂四郎、木綿やつし着流しにて錢箱の前に後向きになり、竹のぜんまいを鳴らしながら、云ひ立てして居る。お作、やつし前垂、掛けにて、蒲燒を燒いて居る。彦兵衛は前幕の足輕にて、床几に腰掛けながら喰つて居る。すべて、京都四條河原の體。幕の内より仕出し大勢、行き違ふ。この見得、辻打ちにて幕明く。

ト表、樂屋、思ひ〳〵の仕出し大勢、捨ぜりふにて出て來る。與茂四郎、表向きに竹を鳴らしながら

與茂　ソイツタ國と申すより渡りまする、獸物に似て獸にあらず、また魚に似て、魚にあらず、古今珍らしき河童と申すもの。細工物や機關とは違ひまする。御覽じなされまして、後々のお話しの御都合にも相成りまする。お茶を上がりましてお茶代僅か十二文、御覽じてあつたらよからう。

ト云ひ〳〵取つて喰ふ。

仕出　コレ、猫に喰はせる頭があらば下さい。

同　膽があるなら、眼藥に買つて行きませう。

ト錢を遣り、買つて入る。彦兵衞、喰ひながら、皿に付けし附木の書附けを見て

彦兵　前通りは大串か。コレ、かみさん、なぜ書附けを、逆さまにして置くのだ。

ト お作、燒きながら

さく　これはしたり、ほんに麁相な。

彦兵　コレサ、それを引くり返へすと、また逆さまだわな。かみさん、貴樣は無筆だの。

ト お作、耻かしさうに

さく　イエモウ、忙がしうござりますゆゑ、ツイ此やうに。

ト附木を直す。彦兵衞、鰻を喰ひしまひ

彦兵　斯うして喰ふと、いくらも喰へる。時に。大串が拾貳本、小串が拾四本、みんなでいくらだな。

さく　ハイ、都合で三百でござります。

彦兵　三百か。ハテ、廉いものだ。大金か、深川屋だと、貳朱は取るのに。ヤ、こりやア、錢があると思つたら、南無三、人混みへ落したか。

さく　左樣なら、どうぞ、後にお賴み申します。

彦兵　いま直ぐにあそこへ行つて借りて來て遣る。併し、三百借りるも四百借りるも、同じ道理だ。もう百ばかり喰つて、四百の都合にして行かう。どうぞ今度は、もつと辛く醬油を餘計付けて、燒いて下さい。

ト此うち、與茂四郎聞いて居て、この時、彦兵衞が側へ來て

與茂　モシ〳〵、旦那、お持ち合せが無くば、もうよしになされませ。さうして、どこの人か知りもせぬ人に、只喰はれて、勘定に合ふものぢやござりませぬ。

彦兵　イヤ、只は喰はぬ。借りて喰ふのぢや。して、おぬしは、鰻屋の亭主か。

與茂　イヤ、私しは、あの茶店の亭主でござりまするが、大道商ひは相互ひ、殊に女の事、お武家樣にも似合ひませぬ事。そりや喰ひ逃げなさるゝやうなものでござります。

彦兵　ヤイ〳〵、喰ひ逃げとはなんの事ぢや。持ち合せが無いゆゑ、借用するのぢや。身共、爰もとばかりでない。日本橋の天麩羅でも、立喰ひ致して、鳥目が無けりや、借りて歸つた事もある。よいワ。左樣に申す事なら、おぬし、四條の兩替屋まで參れ。小判をキッと算用いたしくれるワ。

與茂　四條の辻までなら一緒に行きます。お作どの、錢はわしが持つて來て進ぜませう。

さく　與茂四郎さま、大事ござりませぬわいな。

彦兵　イヤ〳〵、喰ひ逃げと云はれては、侍ひが立たぬ。與茂四郎とやら、身と一緒に來やれ。
與茂　お作さん、見世を氣を附けて下さりませ。
彦兵　サヽ、同道いたさう。
與茂　鰻を喰つた附き馬は珍らしいわえ。
ト辻打ちになり、彦兵衞、與茂四郎、連れ立つて下座へ入る。お作、行燈に灯をともす。矢張り辻打ちにて、向うより與三兵衞、野袴ぶッ裂き羽織、大小にて、中間壹人、旅の雨掛けをかたげ、駒平、奴にて、菅笠を持ち、供をして出る。
與三　駒平、大分遲うなつたやうぢや。
駒平　左樣でござります。今朝のお立に、お手間がいりましたゆゑ、日が暮れました。
與三　あれにて提灯をつけて參るがよい。
ト矢張り辻打ちにて本舞臺へ來て
無心ながら、灯を一つ借さつしやい。
ト雨掛けに附けし飛脚提灯を出し、灯を借りる。
さく　此方へ遣はされませ。付けてあげませう。

ト提灯をひろげ、紋所を見て、ツイと與三兵衛が顏を見て

あなたは伊達の與三兵衛さまぢやござりませぬか。

駒平　オヽ、こなたは、お端下の若菜どの

與三　オヽ、ほんに若菜か。變つた所で逢ひ申した。

ト床几に腰をかける。揚弓の合ひ方。

さく　與三兵衛さま、お久し振りにて、お目にかゝりました。お屋敷に勤めました私しなれど、御存じの通り、お恥かしい無筆ゆゑ、お館をお暇。母にも程なう果てまして、今では河原町で、やもめ暮らしのこの世渡り。何は兎もあれ、マア〳〵、御機嫌ようて、おめでたう存じまする。

駒平　お屋敷にござつた時は、この駒平も心安う致したが、お國は京都と隔たれば、音信も致さなんだが、御無事で、先づは重疊々々。

與三　この與三兵衛も、久々にての京上り。前方、其方が勤めて居やつた時分を思へば、四五年も以前であらう。幸ひの所、この床几で、暫らく疲れを晴らして參らう。コリヤ、角內、其方は、荷物を持つて、柳ケ辻のお屋敷へ、先觸れ致し、屆け參れ。

駒平　旦那は、この駒平がお供する。貴樣は先へ行くがよからう。

角內　左樣ならお先へ參り、左やう申すでござりませう。

ト辻打ちになり、中間は兩掛けをかたげて下座へ入る。お作、莨盆、茶を汲んで出す。東の花道より、逸平、前幕の形にて息せき出て

逸平　あの團助めにからかつて、今日もたうとう日を暮らした。併し、河原のうちに、うろついて居やうも知れぬ。もう一遍探して見ようか。

ト矢張り辻打ちにて、本舞臺へ來て與三兵衞を見て

逸平　あなたは、與三兵衞さまではござりませぬか。

與三　オヽ、逸平、先づ〳〵無事で重疊々々。

逸平　只今お着き遊ばしましたか。御機嫌ようて、おめでたう存じまする。駒平、お供か。御苦勞でござつた。

駒平　御主人樣のこの度の御用向き、奴めも今年初めて東山お下屋敷、拜見がてらお供いたして參つたのでござりまする。

與三　この度、足利家より丹波の由留木の系圖、お改めとあつて、その樣子を承はり、卽ち寶藏に納まりしお家の系圖。

ト懷より袱紗に包みし系圖を出し、逸平に見せ

大切に持參なし、昨日丹波よりの發足、秋の日の短い上、何かと隙取り、やう〳〵爰まで參つたが、して、倅與作はじめ、その他にも、皆堅固で別條ないか。

ト云ひ〳〵、また系圖を懷へ入れる。

逸平　與作さまにも御機嫌よう、あなた樣のお着を、お待ちでござります。何か又お屋敷にも、御混雜のやうにも承り及びましたが、それとても與三兵衞さまのお着きの上は、事の明白と、憚りながら存じられます。

與三　イヤモウ、それゆゑ、一入心急き。して又其方、いづ方へ參るのぢや。

逸平　イヤ、私しめは、奧女中重の井さまのお使ひにて、急ぎの用事。ちと外に尋ぬる者がござりまして、爰もとで日を暮らしましてござります。

さく　お前が、奴の逸平さまかいな。わたしはお國屋敷のお端下を勤めました、若菜と申しまする者。只今では京都の暮らし。お前の妹御小萬さまとは、常々から、お心安う致しまするわいな。

逸平　オヽ、そんなら妹が話しに聞いた、若菜どの。變つた所で、お目にかゝりました。あの妹の小萬も今では、祇園町の仲居奉公。折々訪ひ音信の時、その噂は聞いたれど

さく　イヤモ、小萬さんは鬪とやらにござんしたうち、女に似合はぬ劍術が好きで、今では人さんが、ひよつとした冗談に云うて、みだらな事でもしてぢやと思へど、それは〳〵男勝り。仲居衆のうちでも名に立つた小萬さんゆゑ、ありやどうでもお屋敷方の御奉公が、望みであらう云ひまするわいな。

逸平　サア、それでわしもわざと、物柔らかな茶屋町の仲居奉公。あゝ云ふ氣質で、武家方の勤めをさしては、却つて災ひの種だと、マア、仲居にして置きますのサ。

與三　女ながら、そりや逸平が大きな片腕…………時に、彼れこれ隙取つたれば、身共は急いで參るであらう。

駒平　柳ケ辻のお屋敷へは、まだ餘程ござりませうか。

さく　そりや、三條のズツと上河原。東は人群集にもあれば、鞍馬道から河原傳ひを三條まで、わたしがお連れ立ち申しませう。

逸平　この逸平も祇園町の、妹が所へ立寄つても行きたし…………なんでも彼奴に、出ツくわさねばなりませぬ。

與三　然らば、假橋まで同道いたして。

逸平　與三兵衛さま。

與三　駒平、來やれ。

さく　サア、お出でなされませ。

ト辻打ちになり、與三兵衛、お作を先に駒平付き添ひ、逸平も下座へ入る。始終辻打ちにて、向うより團助、前幕の脇差を差し、息せき出て來て

團助　ヤレ〳〵、あの逸平めが追ひかけるであらうと、急いでは來たが、官太夫さまのこの狀、屆けやうにも河原とばかり聞いて來たゆゑ、さつぱりと知れない。所詮日が暮れての尋ね物だから、マア、あそこで聞いて見よう。

ト木舞臺へ來る。始終、辻打ちにて下座より、彥兵衛逃げて出るを、與茂四郎、鉢巻締め、追ひ出る。後より仕出し大勢、ワヤ〳〵捨ぜりふにて付き出る。

皆々　食ひ逃げださうな〳〵。

ト與茂四郎、彥兵衛を捕へ

與茂　ヤイ、この二本棒め。うぬ、商人の物を只食つて、その上、おれまでよる夜中、河原を引摺り步いて。サア、錢を拂はにやどうするか。

皆々　ワアイ〳〵。
　　　ト笑ふ。
彦兵　なんだ、食ひ逃げだ。コレ、只食ひはせぬ。借りたのだ。それも、われに借りたのではないわい。
與茂　太い奴でござるわい。うぬらに鰻を只喰はれて見ろ、龍宮に伯母さまがあつても、堪るものか。
　錢が無くば、會所まで引摺つて、屋敷を聞いて仕樣があるわい。
　　　トやかましう云ふ。仕出し皆々笑ふ。團助、後にこの體を見て、彦兵衞を見附け
團助　コレ、貴樣は、お足輕の彦兵衞どのぢやアないか。
彦兵　ムウ、中間の團助か。よい所で逢つた。聞いてくれ。身共が最前、爰で鰻を少し食べたところ、折ふし持ち合せがないゆゑ、屋敷へ歸つて持つて來ようと云へば、この男がやかましく、喰ひ逃げだのなんのと吐かすわい。
團助　さうして、そりやアいくらが食つたのだ。
彦兵　なにサ、僅かの鳥目、三百文の出入りだ。コレ、團助、なんとも云ひ兼ねたが、貴樣、持ち合せがあるなら、身共に貸してくれぬか。
團助　成る程、貸しても進ぜたいが、わしも事によると、飛脚同然、旅せにやならぬ。お易い御用だが

どうも用立て憎い。

彦兵　コレサ、團助、おぬしは中間一本差し、おれは假りにも足輕で貳本差し、殊に同じ屋敷内ではないか。差かゝつて要る事ぢや。懷にある三百を貸してくりやれ。

團助　イヤ、わしもこれからは、不自出してはならぬゆゑ、どうにも貸し憎い。全體また初めから、錢が無くつて食つたが惡い。

彦兵　それだによつて、無心を云ふのだ。

團助　ハテ、わしが食つた錢なら、三百が壹貫でも出しもせうが、匂ひも嗅がない鰻の錢を、どうして貸されるものか。

彦兵　そんなら、おれが食つたものゝ錢を、われに出せといふのに、われは貸してくれぬか。

團助　イヤ、貸されぬ。おらア、こんな手にかゝつては居られぬ。

ト行かうとする。引ッ捉へて

彦兵　此奴、侍ひの達引といふ事を知らぬ。手籠めにしても借りるわい。

團助　とつけもない事を云ふわえ。爰を放さぬか。

ト搖ぎ放す。仕出し皆々、ワアイ〳〵と笑ふ。

與茂　食ひ逃げなら、會所へ連れて、行くがよい。

彦兵　その首に掛けた物、おれが借りたワ。

ト團助が懐中より、叺の莨入れを引出す。

團助　何をするのだ。そりやア大事の狀だわえ。

ト引ッたくるを、彦兵衞、無理に取らうとして後の鰻桶へ打込む。

仕出　太い奴だ。引摺つて行け〳〵。

ト辻打ちになり、仕出し皆々ゴッチヤになり、彦兵衞を引立てる。彦兵衞、振り切つて下座へ逃げて、入るを、與茂四郎仕出し、皆々食ひ逃げ〳〵と追ひかけ入る。團助、跡に殘り

團助　ヤレ〳〵、とんだ奴もあればあるものだ。

ト懐を探し

ヤア〳〵、大切な狀を、どこへか。

ト方々、探して廻り、鰻桶の中より莨入れを出し

團助　こいつは、おへない事をやらかした。大事の御狀を、ビッショリに濡らした。こりやアどうしたものであらう。

ト いろ〳〵考へるこなしあつて、後の燒火鉢を見付け

オヽ、幸ひ〳〵、この鐵灸の上で灸つて行かう。

ト 火鉢の火を掻き探し、狀を取つて封を開け、そろ〳〵ひろげ、鐵灸に載せ

そつくり斯うして乾かすがよい。これがほんの、手紙の蒲燒といふのであらう。

ト 揚弓の音になり、團扇を持つて蒲燒の樣子して、煽いで居る。この時、後へ與茂四郎、戾つて來て
錢箱などを片づけながら、フツと團助が狀を覗いて、とつくりと讀む。團助はこれを知らずに、狀を
そつくりと元のやうに封じ、紙に包み

よし〳〵、元のやうになつた。併し、どうぞちつとも早く、この狀を屆けたいものだ。

ト 振り向き、與茂四郎を見て悔り。

ヤア、そこに居たのは誰れだ。

與茂 イヤ、わしは珍物茶屋の亭主でござります。

團助 アノ、そんなら、先刻にから。

與茂 なんだか知らぬが、旨さうな手紙の蒲燒。

團助 殘らず讀んだか。

與茂 アイ。

團助 南無三、身の上。

與茂 イヤ、大事ござりませぬ。その手紙の宛名、八平次さまとは、内證は一つの與茂四郎と云ふ者。祇園町で前からの近付き。この三條河原に身を忍んでござる八平次さま。昔の淵は瀬に變る、鴨川の非人小屋、この與茂四郎が呑み込んで、忍ばせて置くのでござります。

團助 成る程、兼ねて噂に聞いた。そんなら八平次さまの、忍んでござる所を、貴樣は。

與茂 滅多に人には知らさぬゆゑ、ツイごんしても、迂濶には知れ憎い。

團助 成る程、おれも八平次さまには、ついぞお目にかゝつた事はない。お旦那の弟なれば、祇園町の遣ひ込み。それゆゑ、表向き屋敷は勘當。お國から來たこの團助、お名は聞いても、顏は知らぬて。

與茂 それなれば、猶の事。

ト錢箱より、木札を出し

コレ、この木札に、八と云ふ字の燒印。その狀を遣る時に、出しさへすれば、向うからの受け答へ。ツイ一通りでは知れ憎い。爰を片づけて、わしも後から。この河原を三條まで、川に付いて

三本木の蒲鉾小屋。

ト木札を渡す。この前よき程に、お作戻り、倚りかゝり、この樣子をとつくり聞いて、小隱れして入る。

團助　忝ない。これがあれば大丈夫。

ト懷へ入れ

時に、そんなら別に頼みたい事がある。この團助が跡を同じやうな、逸平といふ奴めが、この狀を詮議に追ひかけて來る。彼奴に逢つては一大事。この狀を、八平次さまへ渡すまでは、何かの邪魔ゆゑ

與茂　やらかしてくれかえ。

團助　オヽサ、是非とも河原へかゝるは治定。

與茂　呑み込みました。其奴が面構へ、形恰好は。

團助　成る程、なんでも眼玉の大きな、立派な面つき。丁度着物は

ト逸平の衣裳の通り云ふ。

與茂　どの道、爰へうせるなら、寄つてたかつて鴨川へドンブリ。

團助　何分よろしくお頼み申す。然らば身共は、三本木へ。
與茂　夜の更けぬうち、ござりませ。
團助　ドリヤ、一遍尋ねて來ようか。

ト辻打ちになり、團助、下座へ入る。與茂四郎、殘り

與茂　ムウ、そんなら、これからその逸平めを、見附け次第ぶち殺す目算。こいつはちつと、むづかしいわい。

ト思案すると、下座より權、音、鐵、長、菰かぶりにて出て

四人　與茂四郎、まだござりましたか。
與茂　オヽ、權に音、長も、鐵も、夜が長いので精を出すな。
音　イヤ、わしは、こなさんを尋ねましたが、宵の口は遠慮して、それでわざ〳〵。
權　別の事でもごんせぬが、最前先斗町の脇で、深編笠を着て、立派な侍ひが、まぶな仕事を頼みました。
與茂　まぶな仕事とは。
鐵　丹波の由留木家から、與三兵衛といふ侍ひが、今夜京へ來るによつて、喧嘩仕掛けで、やつてく

れろとの事。

長　なにか意趣遺恨の出入りして、其お侍ひが待伏せする樣子。一人前に、コレこの通り。

四人　舌一枚といふ働らき代サ。

與茂　そりやアえらい事を請合つたな。して、その頼んだ侍ひの人體は。

音　人柄のよい、苦味ばしつた、松本幸四郎といふやうなお侍ひ。

權　そこで、わしが云ふには、仲間の寄り親だによつて、こなさんにも知らせて、その侍ひに引合はせ、又その與三兵衞といふ奴も侍ひなら、迂濶に油斷はなりませぬから、こなたも仲間に入れる氣で、知らせに來ました。

與茂　よし〳〵。そりやむづかしい頼まれもの。おれも半口乘らにやアならぬ。それについてわい等にも、ちよつくりと、小皿で掬はせる事がある。この河原へ東の方から、逸平といふ奴めが來る。其奴を締めたら、また金ぢや。

權　そんなら、その逸平とやらいふ奴が。

與茂　オヽサ、見附け次第に、ぶち殺しても大事ない。

音　さうして、その奴が、形恰好は。

與茂　そりやア、おれが、道々云つて聞かさう。
四人　そんなら、與茂四郎どの。
與茂　コレ。

ト押へる。時の鐘になり、皆々思ひ入れ。

與茂　エヽ、うるさい、付くなと云ふに。
四人　下アりませ〳〵。

ト時の鐘、與茂四郎、懐手にて花道へかゝる。四人、物貰ひのやうにして、附いて入る。後より、お作、出て來て、あたりを見廻し

さく　最前ちやつと、聞いた二人が話し。あの奴が見て居た狀は、お家を奪ふ惡人どもの慥かに密書。それとは知れても一字一點、讀む事ならぬ無筆の口惜しさ。何は兎もあれあの狀を、後から追ひ附き取つた上、與三兵衛さまへ。三本木とあるからは、この道筋を先斗町から。さうぢや。

ト思ひ入れあつてキッとなり、帯を抱へて思ひ入れ。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、一面の小高き石垣。建仁寺垣。この下通り、河原の流れ。よき所に蒲鉾の非人小屋。時の鐘

蛙の聲にて道具とまる。

ト向うより團助、ウソ〳〵出て來て

團助　四條を越えたら眞暗闇になつた。幽かに見える二つの灯が三本木、大方あの四條の先と聞いた、間を離れた小屋が、慥かにそれだ。

ト本舞臺の蒲鉾小屋へ來て

ちつと物が尋ねたい。

慶政　誰れだ〳〵。もう寢ました。

團助　イヤモシ、爰に新米の八といふ、お菰かぶり樣がござるか。

ト忍び三重になり、菰垂れを揚げる。内に慶政、百日、非人のなり、寢はら這ひ、莨をのんで居て

慶政　アイ、八といふのもござりませう。こなさんは、どこからでござりました。

團助　イヤ、おてまへが八ならば、身が名も申すが、余の人なら、迂濶に此方の名前は云はぬ。

慶政　なんぞ持つてござりましたかえ。

團助　オヽ、成る程、丸に八といふ燒印の木札、覺えあるかな。

ト出す。慶政、探り見て

慶政　そんならわしが、八でございます。

團助　アノ、そんならその木札で。

慶政　黒白は知れぬが、うろ覺え。成る程わしが八でございます。

團助　すりや、あなたが鷲塚八平次さま。

慶政　コレ。

ト押へる。忍び三重、時の鐘にて、あたりを窺ひながら。小屋の中を窺ひ出る。始終くらがりの模樣。

して、こなたは。

團助　御家來の團助めでございます。兄御樣より火急の御狀。

慶政　兄宮太夫方より火急の狀、持參なしたる其方が、面體未だ見知らねど、聞き及びし奴團助、夜陰に爰へ參りし樣子。

團助　兄御さまより、密々お渡し申す品がございまして、河原傳ひに、行きつ戻りつ百遍ばかり、やうやう知れたで下郎が安堵。委細は持參のこの狀にござれど、別に添へたる脇差一腰、即ち下郎が帶し居れば、狀に相添へお手渡し。何は格別、あなた様には、この所をお立退きあれとの儀でござります。

慶政　ナニ、この所を立退けとは。

團助　その仔細は官太夫さまが、手綱の色紙、お手に入つたるその砌り、與作めに見咎められ、打ちかけし小柄の詮議。持ち主は八平次と云ひくろめ置いたれば、こなた樣の詮議は必定。それゆゑ國遠あるやうにと、團助めをお使ひでござります。

慶政　ムウ、すりや兄官太夫より、一腰を持參なしたか。

團助　腰に帶して居ります。

慶政　ドレ、その狀…………エヽ、折の悪い。月も山の端に。

團助　何は兎もあれ、先づお手渡し。

ト手探りに狀を渡さうとする。この時、後へお作、窺ひ出て居て

さく　その狀、此方に。

ト引ツたくりにかゝる。

團助　ヤア、何者か、慥かに今のは、女の聲。

慶政　團助、しかと持つて居れ。

團助　御油斷なされまするな。

トこれより始終暗がりの模様にて、慶政、お作、團助、探り合ひの立廻り。慶政、團助を、お作と心得、ちやつと捉へる。團助、恟りして振り切つて下座へ入る。此うち逸平、息せき切つて出て、直ぐに本舞臺へかゝる。お作に行き當る。お作、逸平を團助と思ひ、首に掛けし狀箱を引ツたくる。逸平、やるまいとするを、眞中へ慶政、思はず割つて入る。これにて狀はお作の手に入る。ツカ〳〵と花道へ行き

さく　忝ない。

トこれにて慶政、逸平、恟りして、慶政行くを、逸平、引止める。此うちお作、狀を持つて向うへ逃げ入る。兩人、立廻つて

慶逸　今の女め。

ト兩人、一時に駈け出す。互ひに引戾し、立廻り、よろしく、キツとなつて窺ふ。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、一面の黑幕、所々に茅原繁り、鴨川といふ石の傍示杭。すべて、二條の川上、禪のツトメにて道具とまる。

ト ばた〳〵にて下座より團助、狀箱を持つて走り出て

團助　ヤレ〳〵、すんでの事に、何奴にか、大事な狀を取られやうとした。なんでもこの狀をお渡し申して、又お屋敷から、しつかりと御褒美のお金…………エヽコレ、暗いので何も知れず、滅多に名も呼ばれぬか。

ト 思ひ入れ。この時彦兵衞、小提灯を提げ出て來て、後に聞いて居て、團助を見て

彦兵　ヤア、わりや團助めだな。

團助　オヽ、彦兵衞どのか。

彦兵　うぬ、よく先刻は達引をしないで、おれに恥を搔かせた。その代りに、うぬが持つて居るその手紙、いま褒美になると吐かしたから、おれが引ッたくつて金にするわい。

ト 無理に狀を引ッたくり、駈け出す。團助、恟りして

團助　コレ、そりやア大事の狀だわえ。

ト 爭ふ。彦兵衞、團助を突き倒し、一散に走り入る。團助驚ろき、追ひかけようとする。この時、下座より以前の非人四人と與茂四郎、縫ひぐるみを持つて窺ひ出て

四人　ソレ、逸平だ。ぶちのめせ。

ト團助に打つてかゝる。此うち後へ、與茂四郎、出て窺ふ。

團助　此奴等は何をするのだ。

四人　その奴めを、ぶんのめせ。

ト團助に打つてかゝる。この時チョンと月出る。與茂四郎、團助を見て

與茂　ヤア、こなさんは團助どの。

團助　貴樣は與茂四郎か。

四人　そんなら人違ひ。

團助　ヤレ〳〵、とんだ目に合はうとした。

與茂　危ない事でござりまする。して、彼の人に逢はしやつたか。

團助　オヽサ、暗がりながらやう〳〵と、尋ね當つて、大切な狀を手渡しするところ、立聞きなしたる女の聲。大事の狀は其まゝに、爰まで持つて來たところ、今また思はず足輕の彦兵衛といふ奴が持つて行つた。

與茂　ヤア、そんならその狀を。

團助　なんでも、この道、この通りを、八平次さまなら、此方から。

與茂　呑み込んだ。こなたは、早う〳〵。

團助　さうだ。

　　トごん〳〵になり、思ひ入れあつて、東の花道へ入る。與茂四郎、向うを見て

與茂　ヤア、あそこに來る提灯は、慥かに先刻の注文通り。

四人　おいらが仕事。

　　ト大きな聲する。

與茂　コリヤ、また取違へぬやう…………コリヤ。

　　トだん〳〵に囁く。

四人　合點だ。

與茂　來い。

　　ト時の鐘になり、與茂四郎、思ひ入れあつて、皆々を連れ、下座へ入る。向うより與三兵衛、駒平、
　　飛脚提灯をともし、出て來て

與三　駒平、大分深更に及んだ。何時であらう。

駒平　あの鐘は、夜半でござりませう。お急ぎあられませう。

與三 今朝隙取つた所爲か、老足の草臥れし、殊の外心急きにある。急いであらう。

ト始終、禪のツトメにて、本舞臺へかゝる。茅原より與茂四郎、頰かぶりにて、菰をかぶり、ソロソロ出て

與茂 下アりませう〳〵。

駒平 ヤイ、急ぐ道ぢや。邪魔になる。退かぬか。

與茂 下アりませ〳〵。

與三 駒平、非人さうな。取らせて遣はせ。

ト駒平、錢を遣る。與茂四郎構はず、與三兵衞が側へ來て

與茂 ハイ、お旦那樣の懷にある物が、欲しうござります。

駒平 なんと申す。

ト時の鐘、忍び三重になり、與三兵衞、キッとなつて

與三 ムウ、聞えた。夜道を急ぐ旅人と見て、さては物取りぢやな。

ト與茂四郎、菰を脫いで

與茂 知れた事、巢を張つて居たのだわい。

與三　ハヽヽヽ。町人百姓とは違ふ。うぬ、武士に向つて憎くい奴。ぶち放してくれうか。

與茂　オヽ、どうでさう吐かすであらうと思うた。さう吐かしや斯うだ。

ト石を拾ひて礫に打つと、下座より以前の四人、縫ひぐるみを持ち、バラ〳〵と出て取卷く。

與三　憎くい非人めら。駒平、討つて捨てい。

與茂　ソレ、合點か。

四人　疊んでしまへ。

ト一時にかゝる。與三兵衛、一腰を拔き、四人を下座へ追ひ込め入る。與茂四郎、縫ひぐるみにて駒平にかゝる。立廻りにて駒平、一腰を拔いて、與茂四郎を一刀切る。與茂四郎「アツ」と云うて逃げて入る。

駒平　お旦那の身の上、心元ない。

ト行かうとする。下座より四人の非人出て、バラ〳〵と取卷く。

うぬ等、一々、切つて捨てるぞ。

トこれより四人相手に立廻り、一々に切り倒し、下座へ入る。禪のツトメ、バタ〳〵にて、下座より與三兵衛、數ヶ所手を負ひ、血刀を提げ、與茂四郎と立廻りながら、出て來る。與茂四郎を一太刀切

つて、タヂ〳〵となり、茅原の側へ寄る。この中より白刃を突き出し、與三兵衛を一刀切る。「アッ」と苦しみ倒れる。時の鐘、忍び三重、蛙の聲にて、茅原の中より、左内、深編笠、着流し、大小にて血刀を提げ、ズッと出て、直ぐに與三兵衛が懐の一巻を引ッたくる。與三兵衛、キッとなり

與三　大切なるこの一巻、心を掛けるは、正しく曲者

ト立ち上がるを、左内、一巻を引ッたくり、蹴倒す。與三兵衛、直ぐに左内が、左の肩先へ一太刀切りつける。左内、あしらいながら、與三兵衛を切り倒し、刀を拭ひ納め、肩先の疵を押へ、花道へかかると向うより逸平、バタ〳〵にて走り出て、花道にて擂れ違ひ、左内は向うへ入る。逸平は本舞臺へ來て、與三兵衛に躓き、悄りして、透かし見て

逸平　ヤア、こりやお旦那與三兵衛さま、何者が

與三　逸平か。遲かつたわやい。大切なる系圖の一巻、持參なす某を、待ち伏せなした曲者あつて、多勢に云ひ付け、この如く。

逸平　して、その系圖の一巻は。

與三　面を隱せし曲者が、斯く某を手にかけ、奪ひ取つて逃げのびたわやい。

逸平　ヤヽ、すりや、その曲者が。して曲者の面體は。

與三　面を包みその上に、何を云ふにも暗紛れ、深手は負ひても、彼奴が肩先、打込んだる覺えの手應へ。

逸平　すりや、肩先をかすり疵。

與三　一心凝つたる我が手の内。系圖はやみ〳〵、取らるゝとも、切り付けたるが後日の詮議。肩先の證據。思へば〳〵。

ト立ちあがらうとして、苦しみ、いろ〳〵あつて落入る。逸平、驚ろき

逸平　申し〳〵、お旦那、與三兵衞さま〳〵、お心慥かに……はや綷はきれたか。ホイ。

ト思ひ入れ。この時、與茂四郎、窺ひ寄つて、與三兵衞の刀を探り取つて物云はずに切りつけるたさてはおのれも敵の荷擔人。詮議の手筋。

與茂　なにを。

トまた打つて行く。三味線入りの双盤になり、向うより四ツ手駕籠一挺、扇九と記したる提灯つけ、出て來て、この時、本舞臺へ來る。

駕屋　ヤア、人殺し〳〵。

ト駕籠を置いて下座へ入る。逸平、與茂四郎、立廻りに、四ツ手駕籠の中より、小萬、やつしの好み

の形にてズッと出るを、與茂四郎、暗がりにて打つて行く。その利腕を捕へ、引くり返す。逸平、小
萬を見て

逸平 ヤア、妹か。

ト與茂四郎、切り込むを、ポンと切る。木の頭。

小萬 ほんにお前は。

ト與茂四郎、中返りする。兩人、思ひ入れ、よろしく、拍子　幕

二幕目

由留木本國の場

役名――由留木左衞門。鷲塚官太夫。刎川右馬之助。侍ひ、文吾。同、源五左。足輕、横田彦兵衞。奴、駒平。腰元、いろは。息女、調姫。若菜實ハ鰻屋お作。乳人、重の井。伊達新左衞門。

本舞臺、三間の間、一面の金襖。上の方に柴垣、この内より柳の立ち木。すべて由留木家丹州屋敷の體。爰に調姫、姫の形にて、三方に錫の瓶子、腰元二人、同じく三方に供へと高盛を乘せ、めい〳〵これを持つて、二重舞臺に立ち身。いろは、振り袖の上へ素袍の上に小結ひ烏帽子の形にて、舞臺に

鼓の調べを結へ居る見得。花の外には松ばかりト大小の入りし謠にて幕明く。
ト直ぐに合ひ方になり、三人、供へ物を上の方へ並べ、兩人、舞臺へ下りて來る。姫は二重舞臺、この時いろは、會釋して

いろ　今日は御誕生日の御祝儀ゆゑ、殿樣にはお能の催ふし。姫君樣にはあられもない、お手づからの供へ物、産神樣にも、さぞかしお喜びでござりませう。

調姫　サア、此やうに息災なも、みな氏神大井明神樣の御加護ぢやと思ふゆゑ、せめては手づから捧げ物。

腰元　イエモウ、産神樣にも、そのお心を御納受あつて、猶この上に。

同　ソレイナウ、聟君樣と、お睦ましう、幾千代かけて、お守りなされますわいな。

調姫　コレ、そんな恥かしい事。
ト思ひ入れ。

いろ　ほんに、この程お館の吉例とて、京都のお屋敷にて御結納をして、めでたう關東へのお輿入れ。私し共もお供いたして、東へ參ると存じますれば、さぞ面白からうと只今から。

調姫　イヤ〳〵、いろはがなんの東が面白からう。さう云やるはみんな嘘ぢや。コレ、この頃祇園で藝

者が唄うた、あの唄を、ちやつと、いろはに、拍子に合せて、謳うて聞かしや。

兩人　ハイ〳〵。いろはどの、知らずかえ。

ト互ひに扇を持ち

ヨイ〳〵〳〵。

ト是より

〽與作思へば照る日もくもる、戀のいろはが涙の種の。

ト兩人扇拍子。此うち、いろは、思ひ入れあつて

いろ　アヽ、コレ〳〵、お前方、あじやらにも、そんな事云うて下さんすな。申し〳〵、お姫樣、其やうな事。あの堅い重の井さまに聞えますると。

兩人　それでも唄ぢや。

ト此うち「すは〳〵動くぞ」と謠になる。いろは、思ひ入れ。

アレ、あのお能も、もう追ッ付け。

調姫　次は樒か龍田とやらで、兄上樣の仰せにて、其方が皷の役とある事。

腰元　併し、いろはどのゝ優しい音色、折角打つても、聽かすお方が

同　それ〳〵、京に殘つてござんして、さぞ本意なうござんせうな。

いろ　エヽモ、お前方まで。

ト思ひ入れ。

兩人　サア、姫君樣、お棧敷へ。

調姫　いろは、後に。

ト唄になり、調姫先に兩人付いて奧へ入る。いろは、殘つて

いろ　マア、あんな事、姫君樣に誰れやらちやんと申し上げて……さうして、この與作さまは、御用が濟んだら、ツイお戻りでありさうなもの。京都で上げようと思うた起證も。

ト懷より前幕の起證を出し

ほんに又こんなもの、あの衆に……ドレ、お樂屋へ參りませうか。

ト皷を持ち、下座へ行きかゝると、バツタリと音する。いろは、これにて思ひ入れ。また謠「あれ見よ蛇體は顯はれたり」と、上の柳の木へ、右馬之助、麻上下、股立ちにて般若の面を冠り、鐵杖を持ち、薄衣をかつぎ出ろ。これより本行の鳴り物になり、右馬之助、下へ降り立ち、思ひ入れあり、其まゝ行かうとするを、いろは、窺ひ寄つて引き戻し、向うを支へて

待ちや。おめでた祝ふ奥のお能、その道成寺の折も折、鬼女の面に顔隱し、人目を窺ふ、怪しの者。

ト冠りし面へ手をかける。右馬之助、拂ふ立廻りに面を落す。これにていろは、思ひ入れあつて

ヤ、お前は刎川

右馬 右馬之助だ。殿、由留木の左衞門さま、お好みの能を我れ等へ幸ひ、奥の道成寺。あの鳴り物をかり、刎川一人藝子の影の舞ひ。身共より腰元のいろは、マア、その形は、なんのざまだ。

いろ サア、わたしは次の皷の役、刎川さまには影の舞ひ、人目を窺ふ御樣子は、何か仔細が。

右馬 どうしたと。

いろ マア、あなたの懷中。

トかゝろを突きのけ

右馬 某よりはわれが方から、與作へ送ると書いたる起請、そこに所持してうせるであらう。戀の叶はぬ意趣晴らし、此方へ捲き上げ、憂き目にあはす。サア、その起請を。

いろ なんの、それより。

ト振り切つてかゝる。これまで本行の鳴り物。この時、「いづくに大蛇のあるべきぞと」と謠になり、

立廻りに、いろはの起證を引き出す。兩人よろしく、此うち向うより官太夫、上下の形にて出て來り、この體を見て、ツカ〱と舞臺へ來り、右馬之助は二品を持つて行かうとするまでに、「日高の川浪深淵に飛んでぞ入りにける」と、官太夫、右馬之助をポンと當てる。右馬之助、悶絶する。いろは、官太夫を見て

いろ　オヽ、官太夫さま。

ト思ひ入れ。

官太　腰元いろは。何かは知らず、女を相手に右馬之助、見るに忍びずこの通り。して、こりや何ゆゑ。

いろ　サア、怪しい品を刎川さまが。それで只今

官太　すりや、右馬之助が、怪しい品を……よい〱、見りや其方は皷の役目。爰は身共に打任せ、構はず奥へ。

いろ　ハイ、參じまするが、まだ外に。

官太　まだ外にとは。

いろ　サア、アノ、そりや。

ト起證ゆゑ、云はれぬ思ひ入れ。

官太　ハテ、何をウヂ〳〵。行きやれと申すに。

いろ　左樣ならば官太夫さま、これにお出で遊ばしませい。

ト合ひ方になり、いろは、是非なく起證へ心を殘し、下座へ入る。官太夫、思ひ入れ。右馬之助、其まゝ起き上がり

右馬　官太夫どの。

官太　コレ。

ト思ひ入れ。

右馬　京地で申し合せし通り、今日のお能のドサクサ紛れ、首尾よう姫の結納に、入間家より送つたる驛路の鈴を、ひん盜み出す合ひ圖を、いろはめに。

官太　すりや、驛路の鈴を。

右馬　如何にも……コレ。

ト懷より錦の包みを出し、官太夫へ渡す。

官太　出かし召された。身共も一旦似せ物を、くつた顏にて奪へばこそ、再び誠の手綱の色紙は

ト序幕に左内より受取りし色紙を出して見せ

鷺坂氏の忠臣顏で、與作めを毒害なし、この正眞をまんまと取り得、猶與三兵衞が管領へ、由留木の系圖持參の道、仕留めて左內が手に入りし、吉左右次第、また毒にて殿をも、コロリいはせれば、日頃心をかけし、あの堅造の重の井め、否でも應でも身共が奧樣。又この驛路が疎意なき印に、京地に殘る鷺坂へ、送り遣はす、暫しのうち、貴殿の方へしつかりと。

ト驛路を出す。

右馬　イヤ〳〵、あのいろはめが見かぢつたれば、拙者が持てば

官太　イカサマ。

ト驛路を取らずに、右馬之助、あたりにある鼓を見付け

右馬　幸ひの、彼の小鼓。……コレ、この地袋へ隱し置いたら。

官太　成る程、屈竟。然らばそれへ。

ト右馬之助へ渡す。

官太　身共は御前へ。

右馬　鷲塚どの。

官太　必らずぬかり召さるな。

ト中の舞になり、官太夫、奥へ入る。右馬之助、後先窺ひながら

右馬　ドレ、マア、この間に。

ト鼓の調べを解いて、驛路を隱さうとして居る。此うち矢張り中の舞にて、下座より、バタ〳〵にて文吾、源吾左、走り出て來る。右馬之助、驚ろき、鼓をちやつと袴の下へ押し隱す。

兩人　右馬之助どの、これにござるか。

右馬　文吾、源吾左。慌しい、こりや何事。

源吾　何事どころか、この度關東入間家より、姫君樣の結納を送り越されし、大切なる

文吾　驛路の鈴が紛失いたした。殿は御能御遊覽、お耳に入らば一大事。

源吾　手延びにならぬ其うちに、盜賊の詮議が肝要。

文吾　我れ〳〵は門戶を打つて、閉まり〳〵を吟味いたさん。

兩人　刎川さまにも、サヽ、御一緒に。

トけわしく云ふ。

右馬　ナニ、そりや驛路が。

兩人　如何にも左樣。

右馬　コレ、その驛路は。

ト兩人へ囁く。

兩人　すりや、アノ貴殿が。

右馬　ヤレ、聲が高い。あたりへ心を。

兩人　心得てござる。

ト兩人あたりを窺ふ、右馬之助、此うち皷の胴へ驛路を隱し、調べを結んで

右馬　誰れもこれには。

兩人　なんと致して。

右馬　併し、矢ツ張りこの皷、手離しては置かれぬ代物。源吾左、暫らくこの皷を。

源吾　どう致して身共がそれを。

右馬　そんなら文吾、ちつとのうち。

文吾　イヤ〳〵、その儀は。

右馬　と云つて、身共が持つても。

ト懐または股倉へ、いろ〳〵入れて見て

こりや厄介な物になつた。

ト小太鼓の樂になり、向うより新左衞門、中年の拵らへ、麻上下、大小にて出て來る。此うち、右馬之助、捨ぜりふにて兩人へ皷を預かつてくれろと、あちこちして居る。新左衞門、直ぐに舞臺へ來る。

三人これを見て

三人　ヤア、貴殿は伊達氏。

トうろたへる。

新左　これは〳〵、刎川氏を始め、見ますれば皷一挺を、各々方は、アヽ、こりやお能のお役を我れ先と、前後を爭ひ召さるゝのかな。

右馬　アヽイヤ、全く。

新左　して、また何ゆゑ其やうに。

ト右馬之助、行き詰つて

右馬　イヤ、なんでござるて。この皷が、これに捨てござつたゆゑ、この主は誰れであらうと、三人いたしてその事を。

ト新左衞門、これにて右馬之助が持ちし皷を、見る事あつて

新左　ドレ、ちよつと拙者に。

　　ト手をかける。右馬之助、せう事なしに手を放す。新左衞門、よく〳〵見て

　ハテ、女と云ふものは、しどもないものでござるてな。

　　ト云ひながら鼓を持つて此方へ來る。三人、アブ〳〵して、右馬之助、鼓に付いて廻り

右馬　ア、、コレ〳〵、新左衞門どの。その鼓をどうなさる。

新左　イヤ、こりや拙者が所持の品でござる。

右馬　ヤア。

　　トぎよつとする。新左衞門、座に付き

新左　今日お能の鼓の役、腰元いろは勤めるに付き、拙者が鼓を餘儀なき無心、それゆゑ彼れに貸し遣はした。こりや身共が秘藏の鼓でござるて。

右馬　ナニ、アノそれが。

新左　サア、各々方なればこそ。下郎なぞが目にもかゝれば、鼓一挺棒とやら、さて〳〵仕合せな儀でござつた。

　　ト右馬之助、兩人と顏見合せ、思ひ入れあつて

右馬　イヤ、又、これは怪しからぬ目に。
兩人　左樣でござるな。
右馬　イヤナニ、新左衞門どの。成る程、貴殿の鼓でござらうが、まづその鼓は。
新左　如何いたした。
右馬　サア、拙者が改め、借用いたしたい。
新左　そりやモウ、お易い事ながら、其許樣の御妙手には。
右馬　イヤ、そこが能書、筆を選ばずとやら申せば。
源吾　それ〳〵、狸も裸足の右馬之助。
文吾　平常太鼓をお打ちなされば、鼓もさぞと思はれまする。
右馬　サア、そこで身共がお借り申して。
新左　イヽヤ、お恥かしき道具でござれば、どう致して其許へ。
右馬　卑下なさるゝ程猶借りたい。
新左　どうござつても、この儀は御容赦。
右馬　サヽ、そこを是非とも。

新左　これは迷惑。
　　　　トこの時、奥にて
侍ひ　右馬之助どの〳〵。殿樣のお召しでござる。
右馬　ナニ、殿のお召しだ。サヽ、新左衞門どの、その皷を。
新左　これはしたり、召すとあらば、聲に應じて、御前へはござらいで、何ゆゑ左程この皷を。
右馬　サ、そりやア。
源吾　却つてそれでは刎川どの。
文吾　先づ〳〵御前へ、
右馬　ぢやと云つて。
兩人　マア、ござりませい。
右馬　エヽ、ひよんな所を召す事だぞ。
　　　　ト呟きながら、皷へ心を殘し、兩人に急りたてられ、これにて右馬之助、下座へ入る。此うち、調べの鳴り物。新左衞門、思ひ入れあつて
新左　何かソワ〳〵と、今に始めぬ右馬之助。ても輕卒な仁ではあるぞ。それはさうと、弟與作上

京の後、諸家の系圖お改めに付き、親人にも當家の系圖、御所持あつて、發足ありし砌より、今に續いて胸の動搖。もし御老人の身の上か、又は與作が身の上に、ハテ、何にせい心懸りな。マヽ、何は兎もあれ、今日の御祝儀、御前へ早う申し上げん。

ト立ち上がる。この時、奥にて

官太　イヤ、伊達氏。暫らく〳〵、官太夫、御意得申さう。

ト舞のかゝりになり、奥より官太夫出て來る。

新左　ホウ、これは〳〵鷲塚どの。昨夕姫君の御供にて、京都よりお着きとは承はれど、まだお尋ねも申し上げぬ。先づは相變らず御健勝にて、重疊に存じまする。

官太　イヤ、其許にも御勇健で。

新左　時に早速承りたいは、この度の結納、入間家より驛路の鈴送り來されしより、此方よりも由留木の御先祖、卽ち筆を染められし、意馬心猿の色紙。日暮れなば惡しき道にも入りぬべし心の駒に手綱ゆるすな、と今は世俗も存ぜし詠歌、子々孫々の誡めとし名づけ、當家にては一入重寶。入間家の懇望ゆゑ、弟與作に仰せ付けられて、あの通り結納として、京都加茂の社内にて、木田彌惣左衞門どのへ、相渡すべき旨承り、出國以來今以て、何の沙汰にも及ばざるゆゑ、心痛

いたし罷りあるが、貴殿は定めし弟與作に。

ト官太夫、思ひ入れあつて

官太　成る程〳〵、與作どの京着の砌り、お目にかゝつてはござれど、右の始末は如何やら、拙者も多用に取紛れて

新左　アノ、御存じはござらぬか。

官太　左樣でござる。

新左　ハテナア、一つ京地にござつて、そのあらましも、御存じないとは。併し、繁多の貴殿ゆゑ。して、親共には歸國の路次にて。

官太　如何にも、後原峠の此方にて。

新左　何も變りし樣子にも。

官太　イヤ、隨分とお健かで。

新左　先づそれ承つて安堵いたした。拙者は未だ御祝儀も申し上げねば、失禮ながら官太夫どの、御免下され。

ト皷を持ち、立ちあがる。

宮太　待たつしやい、新左衛門。御前へござるに、その鼓は。アヽ、聞えた、こりや何かな。舞ひ好きの殿ゆゑに、貴殿自慢の鼓の一手で、殿のお腰を打ち抜かつしやるのか。

新左　これは又鷲塚どのゝ、異な事を仰せらるゝ。それではどうやら某を、猿樂同樣のそのお詞。伊達新左衛門武士でござる。鼓で知行は、エヽ、受けませぬぞ。

宮太　イカサマ、そりや、さうありさうなもの。然らば武士は武藝が肝要、鼓で人は打たれますまい。

新左　ハテ、一興な鷲塚どの。樂器は元より泰平の業。昔が今に至るまで、鼓で人を打つ例しは。

宮太　そんなら、なんの要らざる遊藝、不用な品は、身が取捨て。

ト新左衛門が持つたる鼓へ手をかける。新左衛門、思ひ入れあつて

新左　イヤ、鼓で人は打たれねども、彼の三國の戰ひに、諸葛孔明大軍を引受け、櫓に登つて琴を彈じ、敵を計りし事もござれば、この心を以て致さば、鼓で人が切れまいと、強ちにも申されまいが。

宮太　ムウ、面白い。然らばこの場で、貴殿の鼓と、身共が刀と立合うて、

新左　これは如何な。何とてそれが。

宮太　イヤ、さうは云はせぬ、今の一言。

新左　すりや、是非とも。

宮太　斯う打ちかゝれば。

ト抜きかけるを、新左衛門、鼓にてその手を、しやんと止め

新左　イヤ、左様には。

ト突きのける。これより舞働らきになり。兩人よろしく立廻りありて、宮太夫が打ちかけし白刃を、新左衛門、鼓にてシヤンと留る。この鼓の調べ切れて、鼓の中より以前の驛路落ちる。新左衛門、手早く取上げて

こりやコレ、驛路が。

ト思ひ入れ。宮太夫、また打つてかゝるを、新左衛門、胴にて見得よく受けとめ

宮太夫どの、味な所から。

宮太　ヤ。

ト思ひ入れ。

新左　この盗賊は。

ト刎ね上げ、手早く立廻りに、新左衛門、宮太夫が拳を打つ。宮太夫これにて白刃をカラリと落す。

新左衛門、シヤンと座に付き

何者でござらう。

ト思ひ入れ。この時下座にて

右馬　その盗賊は腰元いろは。

トバタ／＼になり、右馬之助、いろはを引立て出て來る。後より源吾左、文吾出て來る。

源吾　動きやアがるな。

ト引据ゑる。此うち官太夫、刀を納め思ひ入れ。

官太　ナニ、このいろはが。

いろ　イエ／＼、その盗賊は。

右馬　吐かしやアがるな。あの伊達氏からわれが借りた、鼓の中から出た驛路。すりや、われが盗んで隱し置いたに。

いろ　なんのわたしが、ありや最前鷲塚さまにも。

官太　コリヤ／＼、いろは、身共が最前、そりや何を。その身の科を遁がれん爲、某が名まで、不屆きな奴、刎川、いろはを。

右馬　心得ました。

ト いろはに立ちかゝる。

新左 ヤレ、劍川どの、扣へ召され。拙者つく〴〵按ずるに、全くこの盜賊は、いろはでござらぬ。

右馬 でも、貴殿から

兩人 いろはが借りた

新左 サア、皷の內よりこの驛路、女が盜みて何に致さう。察するに盜人は、こりや、外にあつて隱し置いたに。

ト 右馬之助、思ひ入れ。

罪疑はしきは輕うとござれば、驛路の鈴に別條なければ、こりや鷲塚どの、此まゝに。

官太 アノ、捨てゝ置けと云はつしやるか。

新左 いろはを御詮議ござらうなら、新左衞門も目を附けた、その盜賊めを引ッ括つて

ト 膝を立て直す。

官太 ヤレ、お云やればそんなもの、驛路の鈴に事なくば、手廣う致して益ない詮議。

新左 然らばいろはは、疾く〳〵奥へ。

ト これにていろは、立ち上がる。

右馬　イヤ、待ていろは。御兩所、驛路の事はこれなりでも、まだいろはには大それた。

官太　ナニ、まだ外に

新左　いろはが科とは。

右馬　これでござる。

ト懷より以前の起證を出す。

いろ　アヽ、モシ、それは。

ト寄るを突きのけ

右馬　いろはは不義者、與作へ送るこの起證。

ト新左衞門へ突き付ける。

新左　ナニ、弟與作と、アノいろはが。

ト起證を見て思ひ入れ。いろは、差俯向く。

右馬　所持して居たのが、何より證據。こりや此まゝには

文吾　置かれますまい。

ト新左衞門、思ひ入れ。

宮太　事明白な不義の科人。ソレ、いろはめを引ッ立てさつしやい。

右馬　サア、キリ〳〵とうせ居らう。

ト三味線入りの亂れになり、右馬之助、いろはを引立て、花道へかゝると、向うより重の井、襠裲衣裳にて、目錄臺に包み札を載せ、持つて出て來り、これを見てツカ〳〵と來り、いろはを引きのけ、後に圍ひ、右馬之助を押して舞臺へ來り、右馬之助、ちよつと來るを突きのけ、舞臺へ住ふ。此うち奧より姬、始め腰元出て來り二重舞臺に住ふ。

重の　こりや、姬君樣。

調姬　重の井。いま下向しやつたかいなう。

重の　ハツ。

ト目錄臺を姬が前へ持つて行き、また座に付いて

卽ち姬君樣、御誕生日ゆゑ、氏神樣への御代參、首尾よう勤め、只今下向、折も折とていろはを捕へ、刎川さま、不束ながら女中を預かりまする、この重の井へ、一言のお應へなう、どうした事にて。

宮太　譯は與作とこのいろは、家の掟を背いた證據。

ト起證を重の井へ見せる。重の井、思ひ入れ。

右馬 不義の科ゆゑ、縄かけるワ。

腰元 すりや、いろはどのが。

ト思ひ入れ。

重の コレ、不義と仰じやる、この起證、こりや證據とは申されますまい。

敵皆 なんと。

右馬 コレサ〱、重の井どの。二世も三世も變るまいと、ベツタリ書いたこの起證を、現在いろはが持つて居たのに。

重の サア、それゆゑ證據になりますまい。

宮太 とは又

敵皆 どうして。

重の サア、お守り役の私しが、姫君様の御前にて、斯様な事を申し上げるも如何ながら、非番の折やお夜勤め、引けての後は女中同士、浮世話しや殿達の、噂の上のわざくれ書き、尾緒を付けたこの起證、不義の證據になんのマア、ホヽヽ、ちときやうこつなと存じられます。

官太　イヤ、さうは云はせない。てんがう書を、起證と間違へる、官太夫だと思はつしやるか。

重の　成る程、左やう仰しやれば、誠の起證に致してから、强ちに、あのいろはを不義者とは。

右馬　そりや又、何ゆゑに

敵皆　云はれませぬな。

重の　サア、その譯はこの起證、與作さまよりいろはが方へ、參つた品なら、そりや慥かな不義の起證。いろはが起請をいろはが持つて、なんの證據になりませうぞ。

官太　ヤ。

重の　但しは相手の與作さま、いろはと不義した、云ひ交したと、この座にあつて仰しやりましたか。

敵皆　サ、そりやア。

重の　サア。

重敵　サア／＼。

重の　いろはに不義はござりませぬぞ。

　　トきつと云ふ。官太夫、右馬之助、顏見合せ

兩人　ムウ、そんならさうかえ。

ト納まる。

調姫　流石は重の井。事を分けたる今の計らひ。いろは、重の井に、よう禮云やいなう。

ト いろは、思ひ入れ。

新左　某とても弟が事ゆゑ、口出しならず扣へしに、よう云いくろめて……イヤ、云ひ譯立つて、拙者も祝着。

いろ　重の井さま。エヽ、有り難う存じまする。

ト 新左衞門も重の井へ思ひ入れ。

官太　イヤ、どうでも執權勤められし、竹村定之進の娘ほどあつて、身共が鼻をもピツシヤリ云はせた今の裁き。悧發と云ひ、器量と云ひ、外に一人内證で、いろ〳〵日頃口說いても。

ト 官太夫、我れを忘れ、段々云ふうち、重の井、氣の毒なる思ひ入れあつて

重の　アヽ、モシ、鷲塚さま。マア、じやら〳〵と其やうに。マヽ、姫君も卽ちこれに。

ト 官太夫、心付き

官太　ほんに譽めるに實が入つて、姫君の前も恐れず。ハヽヽヽ。

重の　ちと、お嗜なみなされませい。

ト思ひ入れ。この時、向うより菖蒲革の侍ひ、走り出て來り

侍ひ　申し上げます。只今御門へ女一人、先年お館に相勤めし、若菜と申す者、お役人方へ、直々に申しあげたいと、あれに扣へ居りまするが、如何計らひませうな。

宮太　ナニ、先年勤めし若菜と云ふ者、役人中へ直々とは、大方願ひの筋であらう。公事訴訟日に參れと申せ。

新左　アヽイヤ〳〵、何かは知らず女の身にて、役人へ直々と申すは、何か仔細のあるべき事。鷲塚どの、先づ聞いて遣はされい。コリヤ、その女、これへと申せ。

侍ひ　ハツ、それに扣へし若菜どの、急いでこれへ。

ト向うにて

若菜　畏まりました。

ト時の鐘になり、向うよりお作の若菜、前幕の形にて抱へを締め、凛々しき形にて、急ぎ出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

源吾　ヤイ〳〵、姫君の御前だぞ。

文吾　ツカ〳〵と。扣へぬか。

若菜　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。

　ト下の方へ扣へる。

重の　ほんにそもじは、お端下の

若菜　ハイ、若菜でござります。重の井さま。久々にて、マア御機嫌ようお勤め遊ばし

重の　そもじにも、變る事なう。

若菜　有り難う存じまする。

新左　して、我れ〳〵へ直々とは、如何なる仔細で。

若菜　ハイ〳〵、その直々とは、なんでござりまする。私し事も只今は、京都の河原町にすぎわひ致して居りますところ、一昨夜でござりました。四條河原で下部衆に、思ひがけなう行きかゝり、承れば何とやら、お家の大事を認めし、手紙を持參の使ひ先、御恩のお館、聞捨てならずと、心を付けてやう〳〵と、その手紙をば取りおふせ、見てもこの身は御存じの、無筆の事なりやそれなりに、何でも早うあなた方にと、急ぎの道も女子の足、マア、これ御覧なされませい。

　ト内懷より、前幕に取りし手紙を出す。宮太夫、右馬之助、此うち南無三ト思ひ入れ。

右馬　ヤア、役にも立たない手紙であらう。持つて下がれ〳〵。

ト若菜を引立てる。新左衛門、その手を扇子にて拂ひ

新左　ナニ、兎もあれお家の大事とある密書。サヽ、これへ。

　ト これにて若菜、新左衛門へ渡す。官太夫、立ちかゝるを

アイヤ、鷲塚どのにも、それにて御披見。

　ト 官太夫、思ひ入れ。新左衛門、官太夫を留めて居て、上包みを見て

おくらどのへ、重の井より。

　ト 重の井、思ひ入れ。

重の　エ。

　ト ぎよつとする。新左衛門、合點のゆかぬこなし、官太夫、右馬之助、思ひ入れ。若菜も不思議のこなし。いろは、女形心遣ひ。

宮太　伊達氏、密書が承りたい。

　ト しつかりと下に居る。

新左　サ、これは。

　ト 讀み兼れる。

宮太　ドレ、貴殿が讀まずば某が。

重の　アモシ。

ト思ひ入れ

宮太　如何いたした。

右馬　但し讀んでは、何ぞその身に。

重の　どう致して。

右馬　そんなら身共が、ドレ、讀んで。

ト新左衛門が持つてる手紙を引ッたくる。重の井、ハツと思ひ入れ。

若菜　どうもあれが重の井さまの。モシ、マア、そのお手紙を。

ト立ちかゝる。

源文　何を女め。

ト引据ゑる。右馬之助、手紙をサッと披き

右馬　「文して申しまゐらせ候、さては娘おさん事」ヤア。

ト重の井を見て思ひ入れ。重の井、ヂッとなる。

娘おさん事、だん〳〵と成人いたし、最早女子の數にも入り申すべくと存じ〳〵。それに付き、我が身事、御奉公の身の上、猶また父御は御家中にて、伊達何某と申す方にて」ヤア〳〵〳〵

トこれにて新左衞門、ギックリとなる。官太夫、腹の立つ思ひ入れ。

伊達何某と申す方に候へば、この事外々へ洩れては、お家の法度を背きし事ゆゑ、互ひの爲にも相成り申さず候ふまゝ、とても親子一緒に居候ふ事相成り申さず、お世話の次手、娘おさん事、當分その方にて、相應の緣にも、お片づけ給はるべく候ふ、尤もその節、入用の品々、密かに御申し越し給はるべく候ふ、めでたくかしく。おくらどの、重の井より。」

ト此うち重の井、差俯向き、新左衞門、思ひ入れ。右馬之助、膽を潰す。

マア、ほてくるしい。いつの間に。

ト重の井へ思ひ入れしして

官太　新左衞門どの、家中に於て伊達何某とは、マア、誰れでござらうな。

トわざと文を差付ける。新左衞門、面目なきこなし。

右馬　伊達と申すは、與三兵衞どのゝ親子の外、娘も最早女の數にとあるからは、大方これも十三四。

ト思ひ入れ。

官太　サア、上は越すとも成人の、娘の親なら與作でも、新左衞門どの、ありや、差當つておてまへが。

ト新左衞門、差俯向く。

若菜　ほんに一圖にお家の大事と、ひよんな手紙を遙々と、持つて來たゆゑ重の井さまの……。これと云ふも物讀めぬこの身の悲しさ。こりや、どうしたものであらうやら。

ト氣の毒なるこなし。此うち調姫も思ひ入れあつて

調姫　これまで露ほど二人が仲、夢にも知らぬまさな事。

腰元　私しどもこれはばかりは

同　存じがけないお身の誤まり。

いろ　もしやお文も、どう斯うと、お書き違ひか間違ひと、仰しやる事はござりませぬかいな。

官太　エヽ、何を側から……コレ、重の井、立つた。今までヌツペリと堅い顏して、いろはが不義裁いたゝ、その身に不義いたづら。道理で身共が、アノこれまで……イヤ、これまでお上の目を拔いた、四角四面はその顏で、よく娘まで産ませたな。

ト新左衞門へ思ひ入れ。

右馬　して、官太夫、兩人は。

官太　ハテ、知れた事、縛り首。ソレ文吾、源吾左、新左衛門を引立て召され。
文源　ハツ。
官太　重の井、立ちやれ。
ト重の井が手を取つて引立てる。
源文　新左衛門どの、立つしやい。
ト兩方より新左衛門へかゝる。新左衛門、兩人を見事に投げのける。重の井、ちやつと官太夫と立廻り。右馬之助、見兼ね、新左衛門へかゝるを、突き廻してもんどりを打たす。この立廻りに重の井が懐より守り袋を落す。
官太　こりや、兩人とも
敵皆　手向ひか。
新左　イヤ、手向ひとては仕らぬ。
重の　我れと御裁許願はん心。
新左　立騒がずと、マヽ、お下に。
ト兩人よろしく納まる。この時、官太夫、守り袋を取り上げ、中より印籠の片割れを出し

宮太　ヤヽ、雪折れ竹の蒔繪の印籠。こりや新左衞門より。
新左　如何にも先年拜領の、その印籠の片割れは。
重の　もう斯うなるからは隱しはせぬ。末の印と重の非が。
トこれを取つて懷中する。
宮太　イヤ、さりとは、嫌な奴等だわえ。
ト合ひ方。猶々腹の立つ思ひ入れ。兩人構はず、姫が前へ手を仕へ
新左　ハツ、斯くなりまする今更に、申し上げるも面目なき、新左衞門めが不義の大罪。
重の　申せば十年以上の事、たつた一度も今とては……サア、御法度背きし私しども。
新左　今の文にて女子の事、承るさへ始めてながら、ほど經し罪でも露顯の上は
重の　如何なるお家の刑罰も、更々いとひは致しませねど
新左　これまでいろ〳〵お身近う
重の　お仕へ申せし申し譯。
新左　姫君樣、お執成し
重の　これのみ願ひ。

兩人　上げまする。

官太　ヤア、今となつてのその繰り言、諸士への見せしめ官太夫が、この頃求めた新身の試み。兩人ともに、覺悟をしやれ。

ト刀を抜きかけ、立ち上がる。

調姬　イヤ、官太夫待ちや。今日はめでたい自らが誕生。壽祝ふ折柄に、二人が命は。

敵役　でも、お家の掟は。

調姬　サア、それゆゑに誕生の、未の刻も過ぎた後。

官太　イヤ、斯樣な事に姬君の

調姬　すりや、兄上ばかりお主にて、アノ自らは。

官太　サ、それは。

いろ　姬君の御意、鷲塚さま。

腰元　マアく、お扣へなされませい。

ト官太夫、不請々々に扣へる。

若菜　流石はお大名の姬君樣、事に寄せたるおめでたの

官太 時刻過ぎれば寂滅爲樂。先づこの文は鷲塚が。

調姫 兄上樣へはこの由を、自らより申し上げん。マア、それまでは二人とも。

重の エヽ、有り難う存じまする。

ト思ひ入れ。この時、八ツの時計鳴る。

いろ ヤア、あのお時計は

右馬 未の上刻。

官太 今暫らくが御誕生。

新左 僅かの間も

重の 千年の御祝儀。

調姫 皆も一緒に。

皆々 先づお入り、遊ばしませい。

ト唄になり、調姫先に女形いろは、一緒に奥、右馬之助先に立役、若菜は下座へ入る。官太夫も續いて行きかゝる。此うち重の井、新左衞門、平伏して居て、この時額を上げ、互ひに顏見合せて思ひ入れ。官太夫、行きにかゝり、思ひ入れあつて振り返り、兩人を見て、ツカ〳〵と立戻り、刀へ手をか

け、重の井へ、ムウ、と思ひ入れ。新左衛門、袴をちやつと捕へて

新左 鷲塚どの。まだ時刻には。

ト云ひながら、此方へ引き廻す。この時官太夫が懐より色紙の包みを落す。重の井、見付け、手早く取上げ

重の この品は。

ト思ひ入れ。官太夫、心付き、新左衛門を振り切り、色紙を取つてちやつと懐中する。

兩人 今のは慥か。

ト寄るを

官太 愼しみある身で、慮外であらう。

トきつと思ひ入れ。兩人、これにてひるむ。

兩人 ハテナア。

ト思ひ入れ。また唄になり、此まゝ道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、菊の花壇、いつもの所へ枝折り戸、この道具に納まる。

ト矢張り唄にて、下座よりいろは、出て來り

いろ　ほんにマア、思ひも寄らぬ今日の仕儀。この身の罪は、重の井さまのお詞一つで遁がれしに、打つて代つて、あなたのお身に、かゝる難儀の不義のお咎め。お笑止なとも氣の毒とも、側で見る目のお痛はしさ。アコレ、どうぞ仕樣はない事か知らん。

ト思案の思ひ入れ。てんつゝになり、花道より彦兵衞、前幕の形にて、スタ〳〵出て來り

彦兵　何でもこれを屆ければ、一廉褒美と團助めが、吐かしやアがつたが、どうぞ早くお屆け申して、御褒美にしたいものだが。

ト云ひながら舞臺へ來り、いろはを見付け

モシ〳〵、それにお出でなさるゝは、いろはさまぢやアござりませぬか。

トこれにていろは、彦兵衞を見て

いろ　オヽ、さう云ふこなたは、京屋敷のお足輕

彦兵　ヘイ、横田彦兵衞でござります。モシ、あなた、奥へお出でなされまするならば、官太夫さまへ、お手紙を屆けに參りましたと、憚りながら仰しやつて下さりませ。

いろ　そりやモウ、易い事ぢやわいの。さうしてそりや、どこから官太夫さまへ。

ト彦兵衛、思ひ入れあつて

彦兵　イエサア、私しは、アノ、團助に頼まれて參つたゆゑ、どこからやら存じませぬて。

いろ　この人とした事わいの。それでもそのお手紙に、誰れよりと云ふ事が

彦兵　サア、そこへ來ては明盲目、手紙を見てもそのお名が……あなたには知れませうか。

ト前幕の手紙を出す。いろは、取つて見て

いろ　「鷲塚八平次どのへ密用」……こりや官太夫さまから、アノ八平次どのへ。

ト思ひ入れ。

彦兵　あなたには讀めましたか。ハテ、御器用な事だ。

ト感心する。

いろ　コレ、こりや、アノわしが官太夫さまへ、お屆け申してやらうわいの。

ト其まゝ持つて行かうとする。

彦兵　アヽ、モシ〳〵、そりや私しが手からお屆け申して、右から左へ一廉に致さにやァなりませぬワ。それは此方へ下さりませ。

いろ　イヤ〳〵、こりやわしが屆けるわいの。

彦兵 ハテ、サ、それぢやァ一廉の。

いろ イヤ、是非ともわしが。

彦兵 イエ、此方へ。

ト互ひに手紙を引ッ張り合ひ、あつちこつちあつて、いろは、手紙を引取る。彦兵衞、ホイと手紙を取られしはずみに、我れと我が手にて前を打ち、飛び上がつて切なきこなし。いろは、此うち二重舞臺へ駈け上がり、手紙を見て

いろ こりや、何か樣子の。

ト思ひ入れ。この時彦兵衞、舞臺へ坐つて、ホツと溜め息。いろは、これを見て笑はうとして口へ袖を當て、ツイと下座へ入る。彦兵衞、見て驚ろき

彦兵 アヽこれサ、その狀

ト立ち上がり

アイタ〳〵。

ト思ひ入れあつて入ると障子の內にて

若菜 左樣ならば重の井さま、そのお文をば沓掛の

重の　サア、おくらと尋ねて、しつかりと

若菜　畏まりましてござりまする。

ト合ひ方になり、障子を開くと、内に重の井、文の上書をして、若菜へこれを渡し、懐より出し

重の　詳しい事は文の中。この片割れの印籠が、形見と云うて。

ト守の中より印籠の片割れを出し、見物へ見せて若菜へ渡す。若菜、取つて

若菜　雪折れ竹の蒔繪の印籠、この片割れを。そんなら、アノおさんさまへ、お形見に。

ト此うち下座より新左衞門、出て來り、これを聞き、垣に身を寄せて窺ひ居る。

重の　折々は灸も据ゑ、毒の物食べやんなと、よう云うて下されい。

ト愁ひのこなし。若菜、思ひ入れ。

若菜　ても、お痛はしい。これと云ふのも。

ト氣の毒なるこなし。

重の　アヽコレ、……サヽ、人の見ぬ間に、ちつとも早う。

若菜　左樣なら、重の井さま。

ト文と守を懐中する。

重の　必らずともに、頼みましたぞ。

若菜　ハイ……、おさらばでござりまする。

　　ト時の鐘になり、若菜、しな〳〵と花道へ來り、ホロリとして涙を拂ひ、ツイと向うへ走り入る。新左衞門も思ひ入れ。重の井、後見送り居て、ホッと吐息をつき、此方を振り返る。この時、新左衞門と顏見合せ

重の　ヤア、新左衞門どの。

新左　重の井。

　　ト思ひ入れ。此うち重の井、バタ〳〵と降りて來る。

　ア、コリヤ、李下に冠の戒めあれば、花壇は卽ち關同然。滅多に側へ寄るまいぞ。

重の　ぢやと云うて。

　　トまた側へ來ようとする。

新左　ハテ、側へ寄つたら、未來の緣も。

重の　ムウ。

　　トこれにて寄られぬ思ひ入れ。本調子竹笛入りの合ひ方になると、差金付きの蝶二羽、花壇へ來て戯

むれろ。兩人、花壇を隔て、これを見て思ひ入れ。

新左　アレ、蟲でさへ妹脊の道、情の道を辨まへて、花に塒の蝶二つ。

新左　それに引替へ武士の、家に仕へる身の上は、男女も同じ事。

重の　思へば奥樣、有馬の湯治、お入りの日數もお立ちの前夜、湯女を集めてこなたの座敷。

新左　酒が云はするわざくれに、しかも兵衛のさよとか云ふ、女子に今宵待つぞとの

重の　約束聞いて嬉しさに、嚴しき掟もどこへやら、湯女に代つて寢間の内、しつぽりと…….逢ふ瀬の

その後で。

新左　顏見てハツと思ひしが、契りし後の詮方なく、人の知らぬを幸ひと、緣の誠あるならば、末は夫婦とその折柄。

重の　いま形見ぞと送りたる、雪折れ竹の蒔繪の印籠。二つに分けてのお詞に。

新左　この末屋敷で逢はうとても、他人向きぞと引別れ。

重の　それよりそれと印籠を、大事にかけて御奉公。勤めるうちに一夜さの、情の胤を宿せし子、おさんと名付け沓掛にて、密かに育つるその月日も、今年で丁度十六年。

新左　サ、それさへ今まで知らぬ身の、はや成人の娘とは、今日聞き始めの聞き納め。顏も合はさで死

ぬる親。

重の　片時も添はぬ女夫仲、こんな契りの悪縁が、又と世界に。

　ト新左衛門の側へ寄らうとする。

新左　コリヤ。

重の　あらうかいなア。

　トこの時、時計の半を打つ。

新左　ヤ、最早時刻も未の下がり。

　ト下座にて

官太　下部ども、キリ〳〵土壇。

中間　ハア。

　ト合ひ方になる。兩人これにて思ひ入れあつて、上下へ立別れて、蹲まると、下座より中間二人、土壇を持つて來り、よき所へつく。此うち後より官太夫、摑み股立ちにて出て來り

官太　サア、二人とも最前から、姫が詞に暫時の宥免。その刻限も過ぎたりやア、この頃求めた新身の試み。並べて置いて身共が成敗。題目なりと念佛なりと、キリ〳〵唱へて土壇へ直れ。

新左　こりや、鷲塚どの、日頃のよしみ。
重の　日頃の戀の意趣晴らし。
兩人　サア、さつぱりと手にかけて。
ト押並んで、シヤンと思ひ入れ。
官太　まだしもの事、よい覺悟だ。ドレ、いけ素ッ首を、さらばい落して。
ト刀へ手を掛け、立ちかゝる。この時、奥にて
左衞　鷲塚扣へい。その兩人に先達て、成敗遂げる者があるわえ。
官太　ヤ、なんと。
ト小鼓の合ひ方になり、由留木左衞門、殿の拵らへにて出る。後よりいろは、左衞門の刀を持つて付添ひ出る。
こりや、御前。して、彼れ等に先達て、御成敗の者とはな。
左衞　その科人は、即ちこれぢや。
ト以前いろはが手に入りし、一通を投げやる。官太夫、取上げ
官太　ナニ、鷲塚八平次へ密用」……ヤヽ。

ト思ひ入れ。

左衛　密書の文言、覺えがあらう。色紙の事より小柄の證據。八平次へ負はせし始末、與作を毒殺、手段の一々。

新左　エ……すりや、弟與作を

ト驚ろく思ひ入れ。重の井も思ひ入れ。

いろ　それゆゑ今にお歸りの。

ト思ひ入れ。

左衛　コレ……まだその外に白鳥氏にも、同意と書きしその一通、覺えがあらう。ドヽどうぢや。

ト此うち官太夫、思ひ入れあつて

官太　イヤ、存じませぬ。毛頭覺えは。

左衛　なんと申すぞ。

官太　こりや、眞赤な僞はり書。

新左　ムウ、僞はり書とあるなら、この所で、サア、貴殿一筆認められ、その書面と引合さば、似せ誠は忽ち明白。

官太　イヤ、書くには及ばぬ。この官太夫が身にとつて、
左衞　覺えがなくば猶の事、何ゆゑ速かに眞僞は分けぬぞ。
官太　サ、そりやア。
新左　書かぬは實正、密書の科人。
官太　サ、そりやア。
左衞　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
左衞　せめては武士の名を惜しみ、今この所で切腹せい。
　ト官太夫詰められ、思ひ入れあつて
官太　ムウ……それ知られたら是非がない。マア、新左衞門と重の井が、首ぶち落して潔よく。
　ト刀を引抜き、直ぐに左衞門を目がけ切つて行く。新左衞門、驚ろき支へる立廻りに、白刃をもぎ取り、下へ投げる。官太夫、南無三と差添に手をかけるを、新左衞門、立廻りに、官太夫が懷中より、色紙を取出す。これと一緒に以前の文落ちる。重の井、此うち思ひ入れあつて、落ちたる白刃を、手早く取上げ、官太夫が脇腹へ突き立てる。

新左　ヤヽ、これぞ正しく手綱の色紙。
重の　悪人ながら鷲塚どの、流石武士とて潔よう、生害あつて御神妙。
　　ト抉る。これにて苦しむ。新左衛門、色紙を左衛門へ渡す。
左衛　誠にこれぞ大切なる。當家の重寶、手綱の色紙。故なう戻つて、オヽ、重疊々々。
官太　殿を殺して家國を、只一吞みと思ひの外、重の井めが手に口惜しい。
　　ト思ひ入れ。この時、下座より右馬之助、源吾左、文吾、ツカ〳〵と出て來り、この體を見て
右馬　ヤア、こりやア重の井。
三人　鷲塚どのを。
左衛　オヽ、官太夫めは色紙の盜賊。身が云ひ付けて斯くの通り。
右馬　して、不義者の新左衛門や、アノ重の井が
三人　御成敗は。
重の　その不義者はお家の掟、先ツ此やうに。
　　ト官太夫が白刃を拔きとり、咽喉へ突ツ込む。官太夫は倒れる。いろは、驚ろき
いろ　オヽ、こりや重の井さま。

ト駈け寄つて介抱する。新左衞門思ひ入れ。

新左　不義は同罪、切腹御免。

ト腹を切らうとする。

左衞　イヤ、新左衞門。切腹叶はぬ。身が直々に成敗する。

新左　ナニ、御前がお手を。

ト左衞門、刀を拔いて

左衞　伊達新左衞門。覺悟いたせ。

ト宮太夫が懷より出たる、以前の文を取上げ、キツと切り裂く。

皆々　これは。

左衞　罪の疑はしきは輕う行ふ身が成敗。不義の相手はこの文に、伊達何某とばかりの證據。たとへ誠の不義たりとも、程輕き罪には刑法の差別あるべき家の掟。それゆゑ伊達の何某は、身にかけてこの通り。これにて仕置は相濟んだ。

新左　すりや、アノ拙者は。

左衞　重の井事も急所にあらずば、取計らふべきやうもあらんに、ハテ、殘念な事いたしたわい。

右馬　イヤ〳〵、殿のお裁きでも、こりや又餘りな片贔屓。ドレ、新左衞門は右馬之助が。

ト新左衞門へ立ちかゝる。新左衞門、ちやつと支へ居り

左衞　慮外な刎川。ソレ、繩かけい。

新左　ハツ。

ト手早く取つて引敷き、下げ緒にて繩かける。

右馬　こりや、身共をば。

左衞　吐かすまい。其方も鷲塚同意のゐせ者。糺明いたし問ふ事あり。兩人引立て、番頭いたせ。取逃がしなばわれ達も、同罪ぢやぞ。

源文　エヽ、……畏まつてござりまする。

左衞　キリ〳〵引け。

右馬　どうやら、斯うやら、おれが身の上……エヽ、いま〳〵しい。

ト合ひ方になり、右馬之助、思ひ入れあつて、源吾左、文吾、引立て下座へ入る。

重の　科を犯せし不屆きを、お怒りもなう殿樣の、有り難い今の御意、御恩の程をくれ〴〵も、後に殘つてようお禮……と云ふに云はれぬ御成敗、矢ッ張り他人の新左衞門さま、よろしうお賴み申し

まする。

ト新左衛門、思ひ入れ。

左衛　重の井死して歎かはしきは、調姫が輿入れの砌り、彼れに替ゆべき故實の守り役、これには殆んど……オヽ、幸ひ新左衛門、一旦伊達の何某と、疑ひ受けし不義の其方、我が成敗にて惡名は消えても殘る新左衛門、伊達と家名は名乘れまい。即ち重の井が父、竹村定之進事は舊切の者ゆゑ、折あらば名跡を、立て遣はさんと思ひしところ、其方も苗字が無うてはなるまい。今よりこれを受け繼いで、竹村新左衛門とも又は……重の井新左衛門とも。

新左　拙者の苗字を。

左衛　承知したか。

ト新左衛門、思ひ入れあつて

新左　思し召しある殿の計らひ。委細畏まり奉つてござります。

いろ　そんなら今日より、あなたのお名を、竹村さま重の井さまとも。

ト此うち重の井、思ひ入れ。

重の　親子の名をばお館に、お立て下さる御恩の程、あの世へそれぞよい土産……エヽ、有り難う存じ

まする。

ト思ひ入れ。この時、向うバタ／＼にて、駒平、前幕の形にて、一散に走り出て來り

駒平　お旦那これに。

新左　下部駒平。殿にもこれに。

駒平　ハツ。

ト思ひ入れあつて、下へ退る。

新左　して、氣遣はしい其方は、アノ親人の御供して。

駒平　サア、その儀に付いて一散走り。委細はこれに逸平が。

ト云ひながら内懐より、淺黄絹の襦袢の片袖に、血汐にて文言を認めあるを差出す。新左衞門、氣遣はしく手早く取つて見る。

左衞　如何の事ぢや。新左衞門。

新左　ハツ……「急ぎ申し上げ候ふ、私し儀、四條河原へ參りかゝり候ふ折から、存じがけなく親旦那、數ケ所の深手に危ふき有樣、委細承り候ふところ、何者とも相知れず、多勢を語らひ狼藉に及び、お家の系圖奪ひ逃げ去り候ふ節、彼の者へ左の肩先を切り付け置かれ候ふ由、下拙めに仰せ

聞かされ、御最期に御座候ふ、せめてお形見と存じ、御肌着へ即ち旦那の血汐にて、右のあらまし相記し申し候ふ」……ヤヽヽヽ。

ト驚ろく。重の井、聞いて

重の　すりや、與三兵衛さまには。

左衛　何者にか……ホイ。

ト思ひ入れ。

駒平　下郎は多勢を追ひ散らし、取つて返せば親旦那、はや御最期ゆゑ詮方なく、この事お知らせ申さん爲。

新左　ムウ。すりや肩先に疵ある者こそ……して、逸平めは。

駒平　逸平ことは與作さまの、お行くへ知れずと、それよりして。

新左　行くへ知れぬは鷲塚が、密書の通り、アノ毒にて。

いろ　與作さまにも、そんなら、アノ。

ト氣遣ふ思ひ入れ。

新左　さすれば親人與三兵衛どの。

左衛　仇を報はん者なければ、新左衛門には敵討、發足願ふ心であらうな。

新左　アイヤ、殿の仰せで竹村の、家名を繼ぎし新左衛門。實父の敵に養父の家、捨てゝは武士の儀が立ちませぬ。

重の　そんなら敵をお前には。

新左　尋ね探すに及ばぬ曲者、お家の系圖に心をかくるは、全く余の者ではあるまい。家中の内を密かに詮議、系圖所持せしその者こそ、即ち實父の仇敵。

左衛　これも尤も。して、其方は。

新左　サア、心憎きは鷲塚が、コレ……この密書の白鳥氏。

ト密書を出す。

左衛　白鳥氏とは。

新左　もしや、アノ。

左衛　心を付けて系圖の詮議。

重の　首尾よう御本意。

ト此うち右馬之助、繩を引切り、出て來り、左衛門に窺ひ寄り

右馬　観念さつしやい。

ト切つてかゝる。左衛門、其まゝ取つて投げのけるを、新左衛門、取つて押へる。この時重の井、苦しき思ひ入れ。

いろ　アヽ申し。

ト思ひ入れ。新左衛門これにて腕ゆるむ。右馬之助、刎ね返す。新左衛門、心付きてソレと投げてやる。重の井、ガックリ落入る。チョンと木の頭。

左衛　死骸はよきに。

新左　ハツ。

ト平伏。左衛門、顔を外ける。駒平、起上がる右馬之助を、膝に引敷く。いろは「ハア」と泣き落す。この途端一時に双方よろしく、拍子

幕

三幕目

關宿棒端の場

沓掛村の場

坂の下の場

役名——山形屋義兵衛。奴、逸平。同母、おくら。肝煎り、左次兵衛。醫者、寒竹。下人、捨六。奴、團助。按摩、當宅。同、子藏。古手屋十兵衛。米屋ひね右衛門。坂の下の次郎作。腰元藤浪。同兄、江戸兵衛。千贓の八藏。女馬士、自然生のおさん。丹波屋與作。按摩、慶政實ハ鷲塚八平次。鷺坂左内。

本舞臺、三間の間、正面、葭簀張りの煮賣り屋。榎の大樹茂りし吊り枝。開帳千部の札など建て並べ、うしろ淺黄幕。すべて東海道、關の棒鼻、念佛太鼓、馬士唄にて幕明く。

ト爰に所化、麻衣の拵らへ、關の地藏堂建立と染めたる幟を持ち、在郷嬶ア、念佛踊りの體。宿役人、ひさくを振つて居る。酒屋の亭主、呼びかけて居る。馬士、煙草をのみ居る。旅人三人、菅笠を持ち立ちかゝり居る。よき所に手駕籠を置き、駕籠舁き、呼びかけ居る。

所化　關の地藏堂敷石建立。

宿役　お志しをお頼み申します。

駕舁　旦那方、歸りがあるが、乘つてござらぬか。

旅人　どうだ。駕籠はいるまいかね。

同　アヽ、爰が關の地藏踊りか。賽錢あげて一服のんで行きませう。
同　さうしませう〳〵。コレ〳〵、茶を下さい。
亭主　アイ〳〵、掛けなされませ。お酒をあげませうか。
ト長床几を出す。
旅人　イヤ〳〵、先を急ぎまするて。
馬士　お急ぎなら、馬をかりてござりませな。
所化　モシ〳〵、お前方、十二銅をあげさつしやると、あの年増も娘も面白い振りで踊りまするぞえ。
旅人　そんなら、十二銅をあげませう。しつかりと賴みます。
トめい〳〵お捻りをあげる。
所化　これは、どなたもお志し、南無阿彌陀佛々々々々々……サア〳〵、いろ達、じよなめけ〳〵
ト地へ取り、奇妙長兵衞のお方どのゝ文句になり、太鼓入りにて踊る。これに浮かれて、踊り出す。仕出し駕籠舁きも踊る。この鳴り物にて向うより左次兵衞、やつし羽織にて出る。後より醫者、供男は藥箱を持ち、日傘をさし、出て來り、花道にて踊りに見惚れ踊り出し、本舞臺へ來て、總踊りになり、旅人、駕籠舁きは踊り〳〵下座へ入る。左次兵衞ばかり眞面目になつて

左次　エヽ、邪魔な踊りだ。通さねえか〱。

ト捨ぜりふにて、小言云ふを構はず、突きのけ〱踊る。矢張り鳴り物生け殺しにて、東の口より與作、三度笠、半合羽、脚絆、一本差し、旅人の拵らへ。後より丸裸、古手拭を鉢巻にして、古褌を締めた雲助の小僧、割がけの荷を擔ぎ出る。揚げ幕より義兵衛、三度笠、半合羽、脚絆、一本差し、道中師の形。後より藤六、半纏、脚絆、三尺手拭、三度笠、一本差し、供の男にて、柳行李、風呂敷包みを天秤にして擔ぎ出て來り、同じく踊を見て、藤六、雲助、浮かれて踊り出す。

義兵　コレサ、藤六。狐にでも化かされたか。

與作　この野郎は氣が違つたか。

ト云うても構はず、先へ立つて踊りながら舞臺へ行く。大勢に交り踊る。與作も舞臺へ行き、膽を潰して捨ぜりふ。殘りの人數踊りながら下座へ入る。與作、義兵衛、殘る。左次兵衛床几にかけ、茶屋の亭主、茶を出す。踊の鳴り物打ちあげても、藤六、雲助、踊つて居る。

義兵　エヽ、この男はまだ踊りかえ。

與作　いゝ加減に性をつけろえ。

雲助　何だかわつちは、素敵に踊つたね。

藤六　此奴は明日から道中を、踊りながら歩かうわえ。
雲助　左やうサ。道中を夢中でするから、草臥れねえな。
義兵　大べら坊め。道中が夢中でなるものか。
雲助　それでも、わつちは裸で道中を稼ぎやす。
與作　われは寒くもねえか。
雲助　アイ、寒くもねえサ。
ト義兵衞、與作、床几に腰かけ、笠を振るとて、フツと顏を見て
義兵　アヽ、お前は京都の刀屋、丹波屋の與作さんぢやアござりませぬか。
與作　ヤ、さう云はつしやるは、山形屋の義兵衞さんかえ。アヽ、こりやア、商賣用でお上りかえ。
義兵　左やうサ。お前、こりやア、どこへござりますのだえ。
與作　ハイ、わしも有松邊まで、商賣向きの用で下りまするが、お前方の商賣といふものは、五十三驛を股にかけて、成る程、氣散じな御商賣だてな。
義兵　イエモウ、そりやア元日から大晦日まで、誠に上つたり下つたり、白痴が屋根の洩りをとめはしまいし。併し、氣の腐れのねえ、おつりきな世渡りサ。

ト話しのうち、左次兵衛、マヂ〳〵聞いて居て

左次　アヽ、こなさん。又よい仕事で上らんすか。わしも若い時は、道中仕事もしたものぢやが、年寄つては、アヽ、大儀でごんす。モシ、こなさん、忘れなさんしたであらうが、わしやよう知つて居る顔ぢや。ソレ、前方、こなさんと連立つて、下つた左次兵衛ぢやわいの。ハテ、好い若い人にならんした。久し振りぢや、酒振舞はんせ。ハテ、好い仕事で上らんせう。祝ひに買はんせ。

義兵　コレ〳〵、親仁どん。こなさん何だか、百年も馴染んだちんころを見るやうに、無性に知つた顔だ顔だと云はしやるが、わしやァこなさんを、どこの人か知りませぬ。そりやァ大方間違ひであらうよ。

左次　これはしたり、なんの間違ひであらうぞいの。わしや年寄つても、よう覺えて居るわいの。コレ白子屋の左次兵衛でごんすわいの。左次ぢやわいの〳〵。

義兵　ハテ、お前は知つてござらうが、わしやァ、左次兵衛さんとやらに、近附きは持ちませぬよ。ナウ、藤六。

藤六　左やうサ。併し、古い事なら、ずツと前方、一つ長屋の左次兵衛が、四國を廻つて猿となると、

情のない人だんなうと、いふ唄が流行つたがね。大方その猿になつた、左次兵衞どんぢやァねえかな。

義兵　そんなものであらうよ。道理で見忘れた。人間が猿になつちやァ知れまいよ。こいつは大笑ひだ。

兩人　ハヽヽヽヽ。

　　トこれにて左次兵衞、腹を立て

左次　コレ〱、若い人〳〵。近附きでないなら、ないでよいわいの。左次兵衞が猿になつたとは、何ぢやいやいの。わしやこの年になるが、猿になつた事は覺えぬワ。酒振舞ふが否なら、なんの無理に飲まうぞいの、そんな卑しい左次兵衞ぢやない。

　　ト義兵衞が側へ行き、腰掛けて摺り寄り

コレ、こなさん、人見違ひさんしたか。この左次兵衞、猿と云はれちやァ、濟まんぞえ〱。アイ、キツと濟まんぢや。もうこれからは、酒買はいでも買はす。買つても買はす。ずんと買はすぢや。

　　ト味に持ちかける。義兵衞、こなしあつて

義兵　なんだ、この人は。年寄りだから除けて居れば、朝鮮矢來にとッ付いた絲瓜を見るやうに、味に

搦むな。コレ、おれも年中道中が商賣。ほんの事だが、コレ
　ト懐の金財布を見せて
二百や三百の金は、下り上りに首にブラ付いてある。ハア、こりやア何だな。この親仁は、護摩の灰の薹の立つたのであらう。コレ〳〵、人を見損なつたか、とんだよい〳〵だワ。

左次　よい〳〵とは、誰れが事ぢや。

義兵　こなさんの事だよ、

左次　なぜ、よい〳〵と云ふぞい。

義兵　云つたがどうしたえ。

　ト立ちかゝる。

與作　ハテ、ようござるわい。乘り廻しやりますな〳〵。

藤六　親方、まだ日も高うござりやす。一杯きめて行きやせうわな。

亭主　モシ〳〵、よい酒がござりますぞ。

藤六　肴は何だ。

亭主　ハイ、取り立ての松茸を、お吸ひ物に致しませう。

藤六　そいつは奇妙だね。
雲助　モシ、親方、駄賃を下さりませ。
與作　オイ、極めは八十のところ、百だワ。
　　ト錢百文渡す。
雲助　有り難うござります。
　　ト荷を與作へ渡す。
義兵　與作さんも久し振りだ。ちやつと付合うてござりませな。
與作　さうもしませうか。
義兵　サ、錢はいくらでもいゝ。素敵にいゝ酒を出しねえ。
亭主　ハイ〳〵。
　　ト店へ入る。左次兵衞、こなしあつて
左次　コレ〳〵、こなさん、人間を猿と云うて濟みますか。こりや、濟まんぞえ〳〵。せりふ付けて行かんせ〳〵。
義兵　ナニ、せりふを付けろ。鸚鵡石でも買つて讀みねえ。

左次　なんぢや、鸚鵡ぢや、誰れが鸚鵡ぢや。
ト義兵衛が胸づくしを取る。

義兵　エヽ、何をしやァがる。
トもぎ放す。

左次　イヽャ、濟まんぞ。
ト摺り寄る。

義兵　勝手にさつし。
ト床几を立つ。これにて床几かへり、左次兵衛、俯向けにこけて鼻をぶちしが、バタ〳〵してうめく。
皆々一度に笑ひ

與作　サア、酒にしやせう。
ト馬士唄になり。義兵衛、與作、藤六、荷を持つて酒屋へ入る。雲助、下座へ入る。左次兵衛、俯向けになり、唸つて居る。この唄終り、向うより、おさん、娘の馬士にて、駄賃馬を引き、旅人二人捨ぜりふにて、先へ立ち、出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

さん　モシ、旦那樣。お極めの所まで一里もござりませう。召してお出でなされませいなア。

旅人　イヤ〳〵、もう乘るには及ばぬ。道々もてまへの身の上話しを聞いて、淚が溢れて、馬から落ちさうにござる。

同　さうでござる。年もゆかぬ小娘に、痛々しくて、馬の口が取らせられるものかいの。下荷を附けた駄賃をやりませう。

旅人　サア〳〵、わしも駄賃をやるぞや。

ト兩人、つなぎ錢をやる。

さん　これはしたり、此やうに下さりましては、餘計でござります。矢張り極めの場所までお召しなされませい。

旅人　イヤ〳〵、それには及びませぬ。駄賃の外に酒手もあるが、馬士の小娘、酒手でもあるまい。白粉でも買ふがよいぞや。

旅人　早う內へ去んで、阿母の介抱さつしやれ。荷物は受取つたぞや〳〵。

さん　ハイ〳〵、左樣ならお靜かにお出でなされませ。これはマア、有り難うござりまする。

兩人　サア〳〵、早う歸るがよい。さて〳〵、孝行な娘でござる。

ト馬士唄になり、ワヤ〳〵云うて下座へ入る。おさん、後を見送り、錢を戴き

さん　有り難うござりまする。極めの場所までお連れもなされず、餘計なお錢を此やうに、下さりまするお志し、ハイ、有り難うござりまする。こりやモウ、あなた方の仰しやる通り、馬を馬借りへ引いて行て、そろ／＼内へ戻りませうか。

ト念佛太鼓になり、馬を下の方酒屋の蔭へ入れる。この時、伏したる左次兵衛、鼻より血を出して起き上がり

左次　アイタヽヽ。あのマア男めは、年寄つた者を、むごい目に合はせ居つた。そこら中が鼻血だらけぢや。コレ／＼、そこにゐる人、ぼんのくぼの毛を四五本、抜いて下され／＼。

さん　アイ／＼、お轉びなさんしたのかえ。

ト捨ぜりふにて、毛を抜いてやる。

モシ、爰らでようござりまするかえ。

左次　オツト、そこぢや／＼。こりや世話になりました……ヤ、てまへは沓掛のおさんぢやないか。

さん　アイ。お前の痛みはとまつてかえ。

左次　てまへが今、毛を拔いてくれだ所爲か、直にとまつたわいの。……コレ、おさんや、この間中わしが云うて聞かして置いた、其方の出世の蔓といふは、あの安福寺の和尚樣が、其方のやうな手入

らずな、十三四な小娘を、小姓の様に拵らへて、手元で使ひたいと云はるゝから、餘所ながらちよつと、わが身を見せたところ、飛び付く程に欲しがつてぢや。行きやるが最後、其方の仕合せ。コレ、あのお寺へ奉公に、行く氣になりや〳〵。

さん　アイ〳〵、奉公に行きませうが、アノ女中さんも居やんせぬお寺へ、女子のわたしが、どうしてマア。そして母さんが病氣、藥の世話する者がなうては、さぞ不自由と思ふから。

左次　サヽ、その不自由はさせぬわいの。其方を奉公にやるとて、只はやらぬワ。コレ、金を取つて阿母にやるワ。ハテ、わが身は若衆髷に髪結うて、弟子のやうにして置けば、壇方めらも氣が附かぬわいの。

さん　エヽ、そんなら女子のわたしを、若衆のやうに髪結うて、それがお寺の、なんの奉公ぢやえ。

左次　ハテ、和尚の妾にして、水揚げをするのぢやワ。

さん　水揚げとは、何の事でござりますえ。

左次　これはしたり、毎晩抱いて寢るのぢやわいの。

さん　エヽ、滅相な。そんな怖い事は、否でござります〳〵。

左次　ハテ、どうで一度は水揚げにあうて、寢にやならぬワ。コレ、肝煎りが惡い事を勸めはせぬわい

やい。

トおさんが手を取つて、寺へ歩べ〳〵とせちがい居る。念佛太鼓になり、馬士先に、所化、在所嚊ア、雲助、宿役人出て來り

馬士　コレ〳〵、左次兵衛さん〳〵。その娘を、どうさつしやる〳〵。

左次　ハテ、この娘は、お寺へ連れて行くのよ。

所化　イヤ〳〵、寺へ連れて行くには及ばぬ。勸化踊りなら、爰で始めるがようござる。

嚊　さうぢやわいな、コレ、姐えや、踊りなら、わしが振りを見習つてやらんせ。

同　ほんに、藤間も裸足で逃げる程な踊り手ぢや。一流ぢやわいな。

宿役　サア〳〵、爰で始めるがよい〳〵。

馬士　皆の衆、踊らつしやい〳〵。

雲助　おいらも踊らう〳〵。

皆々　サツサ、その氣で〳〵。

ト無性に踊る。

左次　エヽ、やかましいわえ。この親仁は佛いぢりの念佛踊り、地藏の建立にかゝつて居る暇がないワ、

馬士　それでもたつた今、おさんを寺へ連れて行つて、踊らせると云つたぢやァござらぬか。

左次　エヽ、何を極道な事を。寺は寺でも安福寺へ、このお娘を連れて行つて、大黒にするのぢやわい
やい。

皆々　ナニ、娘を大黒にするのぢや。

馬士　こいつは大笑ひだね。小娘蛇娘は聞いたが、大黒娘と云ふがあるものか。とんだよい〳〵だ。

左次　ナニ、よい〳〵とは、おれが事か。

馬士　よい〳〵だから、よい〳〵と云つたのサ。

左次　イヤ、この野郎めが。

ト落ちてある割り木を持つて、ぶつてかゝる。

皆々　そりや、親仁が怒つたワ。

ト立騒ぐ。左次兵衛、追ひ駈けて歩く。此うち始終念佛太鼓、下座より寒竹、供に薬箱を持たせ、何心なく出て來る。おさん、逃げて醫者の後へ隠れる。醫者、惘りして

寒竹　これはしたり〳〵。どうしたのぢや〳〵。

左次　コレ〳〵、醫者どの、その娘を、此方へ出さつしやい〳〵。

寒竹　イヤ〳〵、滅多に出されぬわいの。ハテ、おてまへも知つて居られうがナ、窮鳥懐に入る時は
獵師もこれを取らず、と申す譬へがござるから、滅多にこの娘は

ト見て

ヤ、てまへは沓掛のおさんではないか。

さん　アイ、只今お前様の所へ

寒竹　オヽ、藥取りに行く所か。それは幸ひ、コリヤ〳〵、持つて來たその藥は、この娘に遣はせ〳〵。

供男　ハイ〳〵。

ト藥をおさんに渡す。

寒竹　コレ〳〵、明日あたり見廻りせうが、藥も加減いたしたと云うて下され。

さん　ハイ〳〵、有り難うござりまする。

ト懐中する。

左次　コレ〳〵、醫者どの〳〵。今その娘を此方へ渡さんせと云へば、何かむづかしい事云はんすが、
なぜその娘渡されんのぢや。

寒竹　ハテ、このお人は、譯もろく〳〵存ぜぬ愚老に、何をお云やるのぢや。併し、女も病家の娘でご

されば、聞捨てにもなりませぬ。サヽ、その趣意を、仰せられい〳〵。

さん アヽモシ、その譯と申しまするは、あのお方がわたしを、お寺の妾とやらに、連れて行くと仰しやるゆゑ、わたしや怖うて〳〵、斷わり云うて居りましたわいな。

寒竹 エヽ、この仁が、てまへを妾にか。其やうな事であらうと存じた。コレ〳〵、親仁どの、只今お聞きの通りでござる、なんぼおてまへが遣らうと仰しやつても、肝心の當人の娘が、福の神は嫌ひぢやと申す。……アイヤ、大黑を否ぢやと申す。然らばこりや、大黑は破談でござらう。大黑の相談は、こりや餘人へお見せなさるゝがよい。

左次 コレサ、醫者どの、こなたが其やうに云はしつても、向うの寺の和尙と對談いたして、事濟んで居ますするぞ。

さん ア、そりや嘘でござります〳〵。

左次 ハテ、濟んで居る〳〵

ト思ひ入れあり。

今さら破談にあうては、肝煎り商賣する白子屋左次兵衞・寺へ立ちませぬ。ようござる。醫者どのが、その娘の腰押しさつしやるは、ハテ、長袖の事なり仕樣もないが、と云うてよい年からげ

て、小娘に嘘つかれたと云うては、住持へ立たぬから、爰で左次兵衛が腹切つて死にまする。

寒竹　これはしたり〳〵。奉公人の相談が間違うて、肝煎りが腹を切つては、お江戸なぞでは、三月出がはり時分には、あそこでも爰でも、桂庵の腹を切つた干物が出來ませう。ハヽヽヽ、さうお云やらずとも、濟みさうな儀でござるぞや。

左次　イヤ、濟まぬ〳〵。こなさんまでに其やうに、嘲けられては、いよ〳〵立たぬ〳〵。モウ〳〵モウ、腹を切る〳〵。いつそ面當にこれで切るワ。

ト出しぬけに寒竹が合ひ口を引拔く。おさん、驚ろく。寒竹、留める。供の男「ワツ」と云うて藥箱を忘れ、駈けて入る。

寒竹　これはしたり、危ない〳〵。何をするのぢや〳〵。

左次　イヤ〳〵〳〵、こなさんの脇差で、左次兵衛は腹を切る。留めるな〳〵〳〵。

さん　アヽ、滅相な。危なうござります。

左次　危ないと思はゞ、寺へ妾に行くか。

さん　アヽ、どうしてマア。

左次　そんなら腹を切る。留めるな〳〵。

ト振り廻す。

寒竹　アヽ、コレ／＼、おさん。その刃物を、取つて捨てやれ／＼。

左次　イヽヤ、腹を切る／＼／＼。

ト刃物を振り廻す。おさん、留める。寒竹、捨ぜりふにて、この刃物を取らうとする。左次兵衛、振り廻す。おさん、やう／＼に左次兵衛が手を捕へ、留めて居る。

寒竹　おさん／＼、マア／＼、刃物を取るがよい／＼。

さん　アイ／＼。

左次　イヽヤ、腹を切る／＼。

ト三人あちこちして、おさん、かよわきまゝに、やう／＼刃物を取つて、思はず後へ投げるはずみに、葭簀茶屋の窓の障子の紙、サツと破れ、内へ刃物を投げ込みし思ひ入れ。酒屋の内、バタ／＼する。

寒竹　刃物を取つたか／＼。

さん　アイ／＼、あちらへ投げたわいな。

ト酒屋の内にて

義兵　サア／＼、疵が付いたぞ。相手は外に居やう。捕まへろ／＼。

藤六　マア〳〵、藥はないか〳〵。しつかりと疵を結えるがようござります〳〵。

ト聲する。

寒竹　ヤア〳〵〳〵、酒屋の内で、怪我をしたさうな〳〵。

さん　モシ、今の刃物ぢやあるまいかえ。

左次　イヤア、、そりや大變ぢや〳〵〳〵。

ト一目散に下座へ逃げて入る。寒竹、おさん、ウロ〳〵して入る。酒屋の内より與作、刃物を持ち、左の二の腕へ疵を受けし體。義兵衞、介抱して、藤六、荷を擔ぎ出て來り

與作　なんでも、この刃物の主が、相手だ〳〵。

義兵　表から投げ込んだに違ひござりません。

藤六　わしが爰らを尋ねませうよ。

與作　わしが紙入れに、血どめがござりました。出して下さりませ。

義兵　合點でござります〳〵。

ト與作が紙入れを出し、内を尋ね、血どめを出す。この時、紙入れの内より、丹波屋與作どのへ、鷺坂左内と宛名ある狀落ちる。皆々これを知らず

サア〳〵、血どめがあつた〳〵。こりやア餘ッほどな疵だ。

ト介抱して付ける。寒竹、おさん、刃物を尋ねる思ひ入れ。

與作　コレ、若い人。そこらを尋ねて下さい。相手はこの刃物の、持ち主だ〳〵。

藤六　左樣でござります。なんでも爰らに居ませうて。

トあちこち尋ねる。寒竹、刃物を見付けて

寒竹　アヽモシ〳〵、その刃物は愚老の合ひ口でござる。これへ下さりませ。どこへ飛んだと存じたら、不調法な。これは〳〵、お世話でござつた。

ト取らうとする。

與作　アヽモシ、お醫者樣。左樣ならこの刃物は、あなたのでござりますか。

寒竹　左樣でござりまする。

與作　左樣と仰しやれば、モシ、相手はお前でござりまするぞ。コレ、此やうに腕へ疵を付けても濟みますか〳〵。

寒竹　イヤア。

ト恟りする。おさん、驚ろく。

義兵　マア〳〵、相手方が知れて、物が早く分ります。モシ、お醫者樣、大方怪我でもござりませうが、あの障子をぶち拔いて、投げ込ましつたこの刃物で、此お人はあの通り、疵を受けましたぞえ。どう濟まさつしやります〳〵。

ト聲高になる。

寒竹　御尤もでござります〳〵。成る程、その刃物は愚老が所持ではござれども、段々譯のある事でござりまする。搔摘んで申さうが、この邊に慾張つた肝煎りがござる。その親仁が、コレ〳〵この娘を、寺へ大黑にやらうと勸めまする。この子は否ぢやと申す。そこへ愚老が參りかゝりまして、いろ〳〵挨拶に及びましたを、無法な肝煎り、愚老が合ひ口を拔いて、腹を切ると申す。それをこの娘と二人して留めまして、その時、やう〳〵捥ぎ取りましたは、その娘でござつたが、女の小腕のかよわい所爲か、思はず怪我で、あの內へ投げ込み、其許に疵を付けまするとは、誠に珍事ちうよう、惡事災難と申すもの。全く愚老が仕つた事ではござらぬ。左樣に思うて下されいサ。

トこの云ひ譯に兩人、思ひ入れあつて

義兵　成る程、さう仰しやれば、道行は分つて居りまするが、ナウ、與作どの。

與作　左やうサ。コレ、姐え。あのお醫者樣が仰しやる通り、そこに相違はござらぬか。

さん　アイ、人様に疵付けまいと、力一杯取つた拍子に、あの窓から内へ打込みましたは、わたしでござりまする。人様に疵付けた事が、所へ知れましては、病人の母さんに叱られませう。どうぞ堪忍して下さりませ。アイ、御免なされて下さりませ〳〵。

ト手を合せ、涙をこぼして頼む。これにて兩人、思ひ入れあつて

與作　成る程、さう聞いては、疵を受けた丹波屋も、その小娘を捕へて、相手取る事もならず、誠に今ぢやア、此方が氣の毒に思ひます。

義兵　左やうサ、鬼のやうな奴ならば、相手にも取らうが、何を云つても、十四や十五のあの娘。

藤六　殊にあの娘は、女の馬方でござりまする。

與義　エヽマア、娘が

寒竹　左様でござる。この先の沓掛村で、病人の母親を娘の身で、育くみまするわいの。誠に孝行娘と申すは、この娘でござる。コレ〳〵、此やうに愚老が療治して、藥も只今遣はしまするやうな仕儀でござるて。

ト　おさんが懐の藥疊紙を出して見せる。

與作　イカサマ、さう聞いては、どうも仕様もござりませぬ。

義兵　後生ながら、お前、料簡してやりなさるか。
與作　どうするものだ。不承してやりませうよ。
義兵　サア、それで埓が明いた。コレ、姐え、あの旦那に禮を云ふがよいぞよ。
さん　アイ〱、よう堪忍なされて下さりました。エヽ、有り難うござりまする。
　　　ト手を合せて思ひ入れ。
與作　事濟みますればお醫者樣。お腰の物をあげませう。
　　　ト刃物を出す。醫者、取つて拭うて納め
寒竹　これは御不肖にござりました。その代りには愚老がこの疵の療治、致して進ぜませうて。
義兵　成る程、お醫者樣でござりましたね。
寒竹　愚老も石藥師に居りまして、生藥師とも噂いたされまする、生垣寒竹と申す藪醫でござるが、誠に藪でも功の者とやら、療治いたして進ぜませう。
與作　これはハヤ、不思議な御緣でお世話に相成りまする。左樣なら御療治下さりませ。
義兵　これは御苦勞でござりまする。
寒竹　ドレ〱、先づ疵口を見ませうて。

ト よく見て

これは餘程深う入りましたわえ。

與作　どうぞ早う癒ればようござりまする。

寒竹　イエ〳〵、さのみ隙取りも致すまい。骨を除けましたが、貴公のお仕合せでござる。こりや縫ふにも及びませぬ。藥を進上いたさう。ドレ〳〵。

ト藥箱より粉藥を出し、疵口へ入れ、その上へ膏藥を貼つて、有り合せたる手拭にて、しつかりと卷いて

斯樣に致して一兩日は、陸を歩かぬやうにさしつたら、忽ち御全快でござらう。

與作　これは有り難うござります。時に、痛みは致しますまいかな。

寒竹　イヤ〳〵、さのみ痛みも仕りますまいが、一兩日は大儀でも、駕籠に乘らしやるがよい。どうか血の下らぬやうに、致したいものぢやて。腫れが參ると膿を持ちまするて。

義兵　イエモウ、旅先では難儀な儀でござりまするて。

寒竹　ドレ〳〵、內藥を二三貼進上いたさう。

ト調合にかゝり

して、其許は、御生國は何れでござるな。

與作　ヘイ、私しは京都でござります。

寒竹　アヽ、京都のお方かな。アヽ、都でござるゆゑ、名醫は多くござるが、さて、外療は京にも、これはと申すがござらぬて。

與作　エヽ、あなた、京都にお出でなされましたか。

寒竹　イヤモウ、この間まで、木屋町邊に旅宿いたして罷り居つたて。お聞きなされ。世の中は樣々のものでござる。愚老がこの間まで療治いたしたも、丁度其許と同じ所でござるが、これは餘程の刀疵と見えまするて。御他言は御無用ぢやが、その疵人どのは、大家の御家老とも思しきお人ぢやて。

　　トこれにて與作、主人左内と心付きて、思ひ入れにて

與作　すりや、旦那から先達て、來りし手紙の文言に、割符の合うたその話し。

義兵　エ。

　　ト思ひ入れあり。

與作　アイヤ、して、その疵人の家名は、何と申しました。

寒竹　サ、愚老もいろ〳〵に尋ねましたが、とんと名は申されませぬて。

ト これにて與作、安堵の思ひ入れ。

併し、お國は丹州とやら、云はれましたが、御家中内にもお抱へ醫者がござらうに、愚老をわざわざに招かしつて、木屋町にての出養生。さすれば御家中にも、京都にも、餘り名醫もないさうにござるて。

與作　して、其お方は、疵は癒りましたかな。

寒竹　イヤ〳〵、貴公の疵と違ひ、餘程の深疵と申し、殊に療治いたすも、今一藥なうてはならぬ品がござるが、何を申すもその品は、酉の年の女の

ト 思ひ入れあり

イヤ〳〵、これは人の命に拘りまする事ゆゑ、愚老斷わりを申して歸りましたが、只今頃は全快いたされたやら。大方は愚老が一療治いたしかけたれば、アヽモウ、癒らしやつたでござらうて

ト 大概な事を云うて紛らし、調合終つて

サア〳〵、內藥を用意さつしやるがよい。

ト 煎藥を合せ渡す。

與作　これは有り難うござります。

義兵　時に與作どのえ。お前、先を急がぬ道中なら、なんと、この宿へ逗留して、疵を少々も療治してから、立たつしやりませぬか。

與作　サ、わしもさう思ひまするが、一人旅と申し、この疵人、宿を致してくれる旅籠屋がありますまいて。

藤六　成る程、これは左様でござりませうわえ。

寒竹　アイヤ、お詞の中ぢやが、近頃手狹で御不自由ではござらうが、愚老が石藥師の宅へ、四五日逗留なされて、療治いたされてはどうぢやな。

與作　それは有り難うござります。左様ならどうぞ、その積りにお願ひ申します。

寒竹　ハテ、人を助けまするは、醫者の役でござるわいの。

義兵　イヤモウ、さうさつしやるが、ようござります。わしもとんだ所へ來合せて、大きに隙取りました。

・

さん　何かとあなた方に、大きな御苦勞かけました。其お禮は寒竹さまのお宅まで、わたしが馬で、お送り申しませうわいな。

與作　イヤ〳〵、痛み所があつては、馬は乘れまいよ。

寒竹　左やう〳〵、矢張り駕籠にさつしやるがよい……あそこに駕籠がござるぞや。

藤六　駕籠の者らも爰らに居りませう……コレ、駕籠の衆や〳〵。

駕籠　アイ〳〵、仕事かな〳〵。

ト駕籠舁き二人出て來り

どこまで乘りまする。

寒竹　イヤ〳〵、この人を、愚老が宅へ同道いたすのぢや。

駕籠　エ、石藥師の寒竹さまだね。

藤六　サア〳〵、あなた、お召しなされませ。

與作　左樣なら、許さつしやりませ。

ト駕籠に乘る。駕籠舁き、荷を付ける。藥箱を入れて舁き上げる。

藤六　モシ、隨分と大切にさつしやりませよ。

與作　アイ、京へござらば、必らず寄らつしやりませ。

さん　モシ、旦那樣、忘れは置きませぬ。有り難うござりまする。

ト駕籠に取りつき思ひ入れ。

與作　オヽ、姐え、達者で稼がつしやいよ。

さん　アイ。

ト思ひ入れ。

寒竹　サア、やらつしやい。

ト念佛太鼓につき、下座へ入る。この時、左次兵衞、ソロ〳〵と出かゝり窺ふ。

義兵　イカサマ、馬はわしが借りよう。引いて來さッし。

さん　アイ〳〵。

ト下の方より馬を引出す。義兵衞、足元にある與作が紙入れより落ちたる手紙を、拾ひ上げ、上書を見て

義兵「丹波屋與作どのへ、鷺坂左内し……ア、こりやア今、血どめを探した紙入れから、落ちた手紙か。

アノ丹波屋の

ト思ひ入れあり

逢つた時に屆けてやらう。

ト腰に提げたる駄賃帳の綴目へ挾む。

藤六　サア〳〵、下荷はこれだ。付けてもらはう。

さん　サア、お召しなされませ。

義兵　早く頼むよ。

さん　アイ。

ト引きつける。

左次　イヽヤ、この娘はやられぬぞ。

ト立ちかゝる。

さん　ヤ、お前はお寺へやらうと云はんす

義兵　アヽ、噂のあつたは、この親仁か。

左次　わりやァ先刻の旅人だな。

義兵　エヽ、うぬなら道理だ。

左次　おさんはわしが。

ト寄るを藤六、おさんを圍ふ。義兵衛、馬を振り向ける。左次兵衛、駈け寄るを、馬は後足にてした

たか蹴ろ。左次兵衛、ウンと氣を失ふ。

義兵　コレ、この間に早く。

さん　アイ。

藤六　エヽ、畜生め。

トおさんが腰を叩く。

義兵　コレサ。

ト思ひ入れ。左次兵衛、返るを、木の頭。

さん　サア、お召しなされませ。

ト途端よろしく、拍子

幕

幕の内、念佛太皷にてツナギ、引返し

本舞臺、三間の間、上の方、反古貼りの障子屋體。前通り四ツ目垣、紫苑、葉雞頭の植込み。正面佛檀、暖簾口。鼠壁の平舞臺、門口。すべて馬子八藏の隱れ家の體。下の方藁葺きの小屋へ誂らへの窓。

軒に按摩療治、慶政と云ふ掛け板、沓掛村、隣り同士の世話場、在郷唄にて幕明く。

トおくら、やつし婆の拵らへ。子藏、座頭、おくらの上を揉み居る。門口の外に慶政、座頭の拵らへにて蓆の上に、藁を集め、探り〳〵草鞋を作り居る。當宅、座頭、門口にて牛蒡を拵らへゐる見得、よろしくあつて

子藏　モシ〳〵、大分、お前の肩は、張つてゐますよ。

くら　そりや、その筈の事。わたしや、久しい病氣、この間は又、肩がつかへて、……アイタ。

子藏　成る程、その所爲かして、剛氣に張つてゐます。

當宅　時に御亭主、牛蒡は洗つたが、これは笹掻き牛蒡にするかなア。

慶政　オイ〳〵、牛蒡汁にするから、笹掻きがよからう。

當宅　庖丁は内にござるか。

慶政　爰に草鞋の毛を切るのがある。

ト渡す。當宅取つて

當宅　ア、こりやア切れる。

ト探り見て

こいつは錆びたな。砥石は無いかな。

慶政　お隣で借りさつしやい。

當宅　さうしませう〳〵。

ト牛蒡と庖丁を持ち、探り寄つて

　モシ〳〵、御無心がござりまする。

くら　アイ、なんでござります。

當宅　近頃申し兼ねましたが、砥石をお貸しなされませ。

くら　あの庭の隅にござんせう。ドレ、尋ねて上げませうか。

當宅　イエ〳〵、お構ひなされますな。盲目探しに尋ねませう。

ト砥石を尋ねて取出し、捨ぜりふにて、庖丁を研ぐ。

慶政　コレ〳〵、當宅、砥石の角を缺くなよ。

當宅　なにサ、目は見えないでも、そんな機轉は働らかぬて。

くら　オヽ、こりやお隣の、慶政さんかえ。

慶政　アイ、今日は好い天氣でござりやしたね。モシ、まだお前の、息子どのは、歸らずかえ。

くら　ハイ、悴めは用事に付いて、遠い旅いたし、留守の内は娘とわたしばかり。さぞおやかましうござりませう。

慶政　ナニお前、わたしこそ、昨日今日、お隣へ引越しまして、宿六が盲目に、座頭が二三人、おやかましうござりやせう。

くら　なんのいなう、お賑やかで、ようござります。取分け子藏どのは、遊びに來ても、此やうに、揉んでくれまするで。

慶政　なにサ、どうでも見習ひだから、何遍でも呼んで、揉ませなさるがよい。お隣に盲目宿があつては、御近所の大きな厄介サ。

子藏　こいつは好いわえ。子藏の盲目。

くら　隣も盲目、御近所さまの

慶政　厄介物だ。慮外を云ふな。ハヽヽヽヽ。

くら　ハテ、氣の輕い、座頭さんぢやわいなア。

慶政　イヤモウ、氣も輕いが、身代も輕いのサ。夜は宿内に療治もあるが、どうでも晝のうちは夏とは違ひやすて。お前、盲目探りに晝のうちは、細工をするによ。併し、目明きと違つて、見なさい

ませ。今朝からたつた草鞋を五足。これぢや水も呑めやせぬ。

ト作りし草鞋を五足見せる。てんつゝにて向うより、宿役人、先に立ち、團助、旅奴の拵らへ。脚絆、草鞋、三尺手拭、丸笠をかぶり、柄袋、引はだかけたる一腰を差し、草臥れたる思ひ入れにて、出て來る。

團助　コレ、宿役人どの、泊る內は、もう爰らかえ。

宿役　ハイ。直ぐに向うの內でござりまする。

團助　イヤモウ、大きに草臥れました。

宿役　サア〳〵、お出でなされませ。

ト門口へ來て

コレ〳〵、姐御、お泊りがあるぞえ〳〵。

くら　オヽ、宿役人さまか。お泊りがあると云はんするが、知りなさんす通り、關と坂の下の爰は間宿。お泊りのあらう筈がござらぬわいの。

宿役　ハテ、そこぢやわいの。宿內はお大名がお三方。その上に泊りが多くて、隅々までも、素人宿まで割付けましたが、まだ剩る事ぢや。そこで間宿の、この沓掛村まで、割り付けますのは、一人

ぢや。どうぞそこらへ寝かして下さりませ。

團助　コレ〳〵、たつた一人で面倒でござらうが、是非泊めてもらはねばなりませぬよ。

くら　これは又、迷惑でござりまする。忰は留守なり、わたしや病人。こりやお隣の按摩宿へ、お泊りなされませ。

團助　ナニ按摩宿へ泊れ。

慶政　ほんに、旅籠がよくば、泊めて進ぜませう。御馳走には、内中が盲目だ。夜でも晝でも、揉んであげるワ。

當宅　それ〳〵、按摩の中年增でも、盲目の新造でも、望み次第でござります。

子藏　モシ、按摩上下十六文だが、氣はねえかえ。

ト兩方より團助に取付く。

團助　ア丶、コレ〳〵、なんぼ宿に餓ゑても、盲目會所へ、どう泊れるものだ。

宿役　コレ〳〵、阿母、嫌でも應でも、泊めてもらひます。サア〳〵、これが宿割りの書付け。氣遣ひはないが、一人旅ゆゑ貼つて置かつしやりませ。

ト宿割りの札を渡す。

くら　ハテ。わたしや、病氣ぢやと云ふに、迷惑な。
團助　是非とも泊めてもらひまするよ。……モシ、問屋場の若い衆。世話でござりました。
宿役　ゆるりとお泊まりなされませ。
　　　トてんつゝになり、スタ〳〵向うへ入る。團助、内へ入り、草鞋を脱ぐ。
團助　これは存じよらず、大きなお世話になりまする。
くら　イエモウ、病氣ゆゑ、とてもお世話は出來ますまい。そこな大鍋に、煮返しが仕掛けてござんす。それでもよくば、おあがりなさんせ。
團助　イヤモウ、煮返しでも、重湯でも、大事ござらぬ。御馳走になりませう。
くら　左樣なら、御免なされませ。
　　　ト横になる、團助、足を揉み居る。
慶政　モシ〳〵、お旅人え、その女中は痛の病、藥も服ましやりまする。氣を付けて煎じて進ぜさつしやりませ。
團助　アヽ、藥を煎じるのかえ。イヤ、とんだ内に泊るものだ。
當宅　時に、もう七ツ下がりだ。飯拵らへにかゝらうかな。

慶政　いつそ夜食は、間引雜炊にしようか。
當宅　そんな事がよからうかえ。
ト この時、七輪の土鍋にパッと灰が立つ。
くら　アレ〳〵、煮返しが溢れまするゆゑ、早う見て下さりませ。
團助　オツト、合點だ。
くら　申し〳〵、その火の無駄にならぬやうに、その藥を掛けて下さりませ。
團助　オツト、合點だ。
ト 土瓶を七輪に掛けて置く。
慶政　コレ、今日は鳥羽の祭だから、酒を五合買つて置いたが、飲む氣はないか。
當宅　そいつはよからうわえ……ドレ、取つて來よう。
ト 門へ出て隣の裏へ入る。
慶政　コレ、子藏や、われも來て飲め。ドリヤ、門口の蓆の上で、酒盛りを押ッ始めようか。
ト 探り〳〵出て、門の蓆の上へ上がる。當宅、五合德利と丼に肴の入りたるを持つて來り
當宅　コレ、宿六、酒はあるが、肴はコレ、芋の煮ころばしだが、これでもよいか。

慶政　ハテ、酒さへありや、いゝぢやァねえか。サア、始めさつしやい。

當宅　マア、御亭主から飲まつしやい。

慶政　始めてやらうか。

ト探り／＼、茶碗を取つて、當宅、酌をして、捨ぜりふにて飲む。内より團助、酒の匂ひを嗅いで、鼻をヒヨコ／＼して、そろ／＼門口へ出る。外には慶政、捨ぜりふにて、飲み合ひゐる。慶政が飲みかけ置いた、茶碗の酒を取つて、グッと飲む。藥、煮え返る仕掛け。

くら　アヽ、コレ／＼、藥が溢れまする。お客様、ちやつと見て下さりませ。

團助　オツト、合點だ／＼。

ト駈けて行き、七輪に掛けし、土瓶の蓋を取る。慶政、茶碗を取つて、飲まうとして

慶政　ヤア、この酒は誰れが飲んだ。

當宅　誰れが飲むものか。こなたが飲んだ。

慶政　ハテ、飲みかけて置いた筈だが。

當宅　早くさつしやいな。

慶政　サア、飲まつしやい。酌をしてやらう。

當宅　これは忝ない。

ト慶政、徳利を取つて、酌をする。當宅、茶碗を出す。團助、これを見て茶碗を取つて、ソツと側へ寄り、慶政がつぐ徳利の下へ茶碗を出し、酒をつがせてこれを飲む。當宅、いつまで茶碗を出しゐて

當宅　コレ〳〵、宿六、どうぞついで下さらぬか。

慶政　いま注いでやつたに、飲まねえか。

當宅　イヤ、飲みませぬ。

慶政　よう飲み隱しをする坊主だ。サア、茶碗を寄越せ。

當宅　それでも、飲みもせぬもの。

ト茶碗を渡す。慶政、取つて

慶政　サア、注いで下さい。

當宅　なんの事だ。酌ばかりする。

ト酒を注ぐ。團助、ソツと寄つて、茶碗を出し、側より注がせて飲む。慶政、思ひ入れあつて

慶政　これサ、どうだ。注がねえか〳〵。

當宅　ハテ、いま注ぎました。

慶政　よく嘘をつく坊主だ。サア、早く注がねえか。

當宅　ハテ、面妖な事だ。

　　ト酌をする。團助、また側より茶碗を出し、酒を受ける。慶政、茶碗を探つて

慶政　おのれ、まだ注がねえな。この坊主は、なぜ酒を惜しむ。飲ませるが否か。

當宅　ナニ惜しむものか。大方茶碗が漏るのであらう。

　　ト茶碗を出す。

慶政　サア、注いで下さいな。

　　ト團助、今度は藥土瓶を持ち行き、眞中へ入り、慶政が茶碗へ藥を注ぎ、當宅が注いだ酒を飲む。

當宅　どうだ。今度は、漏らぬかな〳〵。

慶政　來た〳〵。あるぞ〳〵。時に、大分沸え燗にしたな。今までは冷酒を、强氣に沸え燗にしたな。

當宅　ナニ、燗はしもしないものを。

慶政　それでも、强氣な燗だ。

　　トぐつと飲んで、膽を潰す

アヽ、コレ〳〵、こりやア、藥ぢやアないか。

當宅　なにサ、酒だよ。

慶政　それでも、うぬはおれに藥を飲ました。なんの意趣があるのだ。どう盲目め。

ト　くらはす。當宅、面を抱へて

當宅　アイタヽヽ。宿六、なぜ打つたく。

慶政　なぜ藥を飲ましやアがつた。

當宅　いつ飲ました。

慶政　この坊主めが。

ト　くらはす。この音に團助、駈けて行く。

團助　これサ、どうしましたく。

ト　留めるを、突きのけ、叩き合ひになり、三人捨ぜりふにて打ち合ひながら、下の家へ入る。團助、後を見て

お庇で御馳走になつたわえ。

くら　申しく、お客様え、おひもじうござりませぬか。

團助　イエく、只今、錢の出ぬ酒をたべて、まだ欲しうござらぬが、新酒の所爲かして、剛氣に廻つ

て來た。そこらへ寢かして下さりまし。

くら　左樣なら、あの納戸へござつて、横におなりなされませ……申し、また暴れ蚊が居りますぞえ。

團助　心得ました。蚊が居をつても、手拭を顏へ掛ければ、隨分ようござる。

ト手拭を出して、思ひ入れして

イヤ、剛氣に醉が出た。ドリヤ、納戸へ入つて寢そべるべいか。

ト入相の鐘、唄になり、一腰を提げ、醉うたる體にて、障子屋體へ入る。おくら、殘つて

くら　ほんにマア、迷惑な泊り客。夜食拵らへもせずばなるまい、それにつけてもこの病。マア、いつ心ようなる事やら。

ト表を見やり

アノマア、おさんさまは、わしの病の願掛けにと、關の地藏樣へ日參。もう入相が鳴るのに、早う歸りはなされいで、案じられる事ぢやわいの。

ト思ひ入れあつて、唄になり、向うより藤六、啣へ煙管にて馬の手綱を引いて出て來る。前簾の馬におさん、横乘り。後より義兵衞、兩掛けを擔ぎ、スタ〳〵と出て來り、花道にて

義兵　コレ、姐え、爰が沓掛村か。

さん　アイ、左様でござりまする。
義兵　して、てまへの内はどこだ。
さん　あの、向ひの藁葺きの小家でござりまする。
藤六　そんなら旦那、もう直だ。早くお出でなされませ。
義兵　合點ぢや／＼。
藤六　この畜生めは、歩かぬかい。ドウ／＼。

　　ト馬士唄になり、皆々本舞臺へ來り

さん　ハイ、爰でござります。
義兵　ソリヤ、泊りへ着いたワ。
さん　母さん、いま戻りましたぞえ。

　　ト馬より下りる。

くら　オヽ、おさんさま、今も噂を、……出やしやつて、大分になるゆゑ。心配をしてゐましたわいの。
　　オヽ、娘、見ればマア馬に乗つて、こりやア、どう云ふ事ぢやぞいの。
さん　サア、わたしや今日は、あなた方の、大きにお世話になつてな。

くら　そりや、なんで。

義兵　アヽ、お前はこの娘御の母さんかえ。モシ、聞きなさい、年頃な娘を、一人出すとは、どうした内だな。

藤六　それ〳〵、母さん、今日、關の棒端で、あの肝煎りの親仁めが、この子を捕へて惡智慧を搔いたと思はつしやい。その間違ひから、とんだ事が出來たが、そりやアマア、わしが濟まして來たが、どうで歸り馬、どうしても乘りはしないと云ふを、無理に乘せて來たのよ。

くら　それはまア、有り難うござります。マア〳〵、お茶一つあがつてお出でなされませ。

藤六　ナニ、構はつしやるな。

さん　母さん、お莨の火を入れてあげなさんせ。

義兵　一服のんで行きませうか。

ト内へ入り、腰をかけて、思ひ入れ。おくら、莨盆を、おさん、茶を汲んで來る。

藤六　モシ〳〵旦那、まだ坂の下へはゆつくり一里あります。七ツ過ぎでござります。稼ぎませうぞえ稼ぎませうぞえ。

義兵　成る程、暮れねえうちに、ドリヤ、お暇仕らうか。

ト煙管をしまひ、立たうとする。

さん　アヽモシ、まだ日は高うござりますわいな。

ト思ひ入れ。

藤六　飛んだ事を云ふ。もう入相だわな。

さん　お茶あげませうかえ。

義兵　イエ〳〵、飲みたうもござらぬが、コレ、藤六、もう入相かの。

藤六　アイ、釣瓶落し、直ぐに暮れますよ。

義兵　そんなら、そろ〳〵くらはすべいか。

さん　ハイ、お茶あげませう。

ト出す。

義兵　ナニ、もう飲みますまいよ。

さん　左様なら、もう一服あがつてお出でなされませ。

ト莨盆を出す。

義兵　オイ〳〵、ハテ、娘は愛くるしい生れだの。

ト目を付ける。

くら　ほんに、お禮になんぞ御馳走が致したいなれど、先を急ぐと仰しやれば、折惡しう、有り合せた物もなし。

義兵　成る程、宿屋なら、爰へ泊ると云ふ筋もあるが、何を云つても爰は間の宿。

くら　イエ、モウ、間宿でも、旅人が多けりや、お泊め申しまするわいな。

さん　ハテ、折角お泊め申したとて、不自由な在所、御馳走の仕様もやうも。

トもぢ／＼する。

義兵　なにサ、わし等は年中旅をするから、不自由な宿にも承知で泊るのサ。

藤六　申し／＼、旦那、入相を打ちましたよ。

義兵　もう遲からうかの。

藤六　ハテ、暮れちやア誤まるの。どうでも秋の末は道端へ、穴まどひの蛇が出やアがつて、夜道はモウ／＼、嫌やの／＼。

くら　イエ、まだこの先のあの藪は、蝮の巣でござりまする。

義兵　ヤア、そいつは大變だわえ。

藤六　蛇が出たとて、歩かずには居られませぬ。サア、暮れねえうちに、参りませう〳〵。

　　ト引ッ張る。

義兵　これサ〳〵、どうして、そんな蛇の出る道へ行かれるものか。アヽ、それを聞いて、爰らへ泊りたくなつた。

くら　申し旦那、内でもよいと仰しやれば、こちの内へなりと、お泊め申すまいものでもないが、ナウおさん。

さん　それぢやと云うて、此やうな、不自由な暮らしを、旦那方に。

義兵　これサ〳〵、どんな不自由な目にあつても、蛇に咬まれるよりは、ましであらう。モシ、母さん、どうぞ泊めて下さりませ。

くら　そりやモウ、お泊め申しませうが、モシ、さぞ御不自由でござりませうぞえ。

義兵　ハテ、そりやァ承知でござりまする。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵、それで落ちついたわえ。

くら　サア〳〵、左様ならお御足を、お清ましなされませ。おさん、折悪う湯がないわい。ちやつと、沸かしてあげませう。

義兵　なにサ〳〵、水でもようござります。

ト草鞋を取る。

さん　ハイ、お御足を洗うて上げませう。

ト盥へ水を入れ持つて來る。

義兵　ナニ、構はつしやるな〳〵。

藤六　申し〳〵、旦那、どうでもあなた、こんな蛇の居る内にお泊りなさるのかえ。

義兵　ハテ、蛇が居やうが、蝮の居るにはましだわえ。

藤六　こいつは誤まるぞ。なんでも今夜は坂の下で、貳百出して、寢所を替へようと思つたに、飛んだ雲助宿へ

ト思ひ入れあり

アヽ、旅人の宵寢も當がなうては。

トおさんへ目を附ける。

義兵　どうした。

藤六　サア、蓼喰ふ虫も好き〳〵とやら。今年や南瓜の當り年。

ト淨瑠璃を語る。てんつゝになり、向うより、次郎作、鼻唄を唄ひながら出て來り

次郎　コレ〳〵、おさんぼうや〳〵、馬は爰にゐるか。直ぐにおれが引いて行くぞえ。阿母、まだ八藏は歸りませぬか。何の用で、どこへ行つたのだ。

ト獨り勝手な事を云うて、馬を引いて行かうとする。

義兵　申し〳〵、あの馬は、どこの馬でござります。

くら　ありや坂の下へ、歸る馬士どのでござりまする。

義兵　そんなら、呼び戻してくれ〳〵。

くら　アイ〳〵。コレ〳〵次郎作さんや、ちつと待ちなさんせ〳〵。

次郎　なんだ、用かえ。

義兵　コレ〳〵、藤六、あの馬は坂の下へ、歸り馬だと云ふから、おぬしはあの馬を借りて、今夜は坂の下の藤屋に泊り、明日の朝正八ツ立ちにする程に、駕籠を拵らへて、爰まで迎ひを寄越しやれ。サア、さうしやれ〳〵。

藤六　アヽ、そんならわしは、先へ參つて、藤屋へ一人泊りますかえ。そいつは有り難い。そんなら馬士どの、坂の下まで頼みます〳〵。

次郎　アイ〳〵、酒手で參りませう。荷を出しなさい。

藤六　オイ〳〵、この兩掛けだ。

次郎　こればかりかえ。付けるのも面倒、擔いで追ふべい。

藤六　モシ、旦那え、この駄賃帳は、お前に渡して參りやせう。

ト腰に差したる半紙綴の帳面を渡す

義兵　オイ〳〵、必らず八ツ立ちぢや。駕籠を忘れまいぞ。

藤六　畏まりました。大きにお世話になりました。旦那をお頼み申します。

くら　アイ、お案じなされますな。氣を付けてござりませ。次郎さん、頼みますよ。

次郎　オイ〳〵、休まつしやりませよ。おさんぼう、明日逢はうよ。

藤六　サア、追つて下さい。

ト馬士唄になり、屋體囃子聞える。

藤六　馬士どの、ありやどこのお祭りの太皷だ。

次郎　鳥羽の祭りサ。村方ぢやア、餅を搗いて祝ふのサ。

トこの筋を云うて、手綱を引き、兩掛けを擔ぎ、唄を唄ひながら藤六、乘つて、向うへ入る。義兵衛見送り

義兵　さて〳〵、今日は草臥れた。申し、母さん、さうしてお前、心遣ひさつしやりまするなえ。

くら　イエモウ、何を御馳走申したうても、この子と二人。その上、わたしは癇の病。どうでこの子の世話になり通しでござりまする。

義兵　ア丶、癇の病を煩らつてか。そりや難儀な事でござるなう。

さん　ほんに母さん。わたしや忘れて居りました。先刻關の問屋場で、石薬師のお醫者様にお目にかゝり、その節あなたが、こりや加減しての藥ぢや、お前に届けてくれいと遣はされましたわいな。

ト藥を出して

ほんにその時、わたしや怖い目にあうたわいな。

くら　ヤ、そりやマア、どのやうな目にあうたのぢや。

さん　サア、それはナ。

義兵　ア丶コレ、阿母、ナニ別でもない。事と云へば云ふこのゝ、根を糺せば大きな間違ひ。この子を愚圖る肝煎りが、こなさんの掛つて居る、醫者どのゝ合ひ口を引拔いたを、この子が留めようとするはずみに、拔いた刀を立場の茶屋へ、投げ込んだと思ひなされ。それが、わしが懇ろな男の腕へ當つて、餘程の疵よ。併し、向うも通り者、どうするものぞ、娘子供のした怪我と諦めて、わ

しらが挨拶して済ましました。必らず案じさつしやらぬがよいよ。
さん　大きにお世話に、なりましたわいな。
くら　それはマア承つて、驚ろき入りましたわいな。ようマア、お前様、お世話なされて下さりました。有り難うござりまする。
義兵　なにサ、必らず苦労にしなさるな。すつぱりと済ましましたよ。
くら　マア〳〵、存じませいで、お禮も申しませぬ。申し、此方へお出でなされませいな。
トそこらを片付け、脱いである中間笠を取上げるを
義兵　申し〳〵、お構ひなされまするな。
さん　モシ、母さん、その笠は、誰れさんのぢやえ。
くら　オヽ、この笠の主はの、先刻に關の宿役人どのが、奴さんを一人連れて見えてナ、宿内が混むゆゑ、どうぞ一人泊めてくれいと頼みゆゑ、納戸の内に寢てゐさんすわいな。
さん　ほんに、そりや心遣ひな事でござんす。何は無くとも、あなたも御時分でござんせう。そのお客さんと一緒に、お夜食の支度せずばなるまいぞえ。
義兵　アヽ、コレ〳〵、決して構つて下さるな。わしはまだ腹はようござりまする。その代り、コレ、

姐え、枕を貸して下さい。ちと横になりませう。

ト寢ころぶ。

くら　左やうなされませ。コレ、おさん、寒うとも蒲團を出してあげやいの。

さん　アイ〳〵。お枕も上げませう。サア、お横におなりなされませ。

ト木綿の五布蒲團と、木枕を持ち出で渡す。

義兵　アイ〳〵、大きにお世話になります。お邪魔にならぬ所へ、ちつと横になりませう。

くら　左樣なら、爰らがようござりませう。

ト上の方、後へ下がつて、蒲團を敷き、枕を置いて

さん　サア〳〵、お休みなされませいな。

ト莨盆を出す。

義兵　アイ〳〵、これは氣の付いた。

トおさんと顏見合せ、互ひに思ひ入れあつて

ドリヤ、そろ〳〵と休みませう。

ト柏餅になつて、莨を吸ひ付け、横になる。おさん、おくら、七輪の下、或ひは俎板に大根など持ち

し、刻みにかゝつてんつゝ、屋體囃子になり、向うより、ひね右衛門、襦袢、前垂れ、搗米屋にて、叺を持ち、十郎兵衛、ばツち、古手屋の拵らへ、大風呂敷な肩に掛け、捨ぜりふにて、出て來り、花道にて

十郎　サア、ござりませ。

ひね　オゝ、古手屋の十郎兵衛さんかえ。わしはアノ八藏が姐えの内へ、米代を取りに行きます。

十郎　申し〳〵、米屋のひね右衛門どの、どこへござります。

ト矢張り、てんつゝ屋體囃子にて、兩人、門口へ來り

ひね　オイ、賴まう〳〵。來ましたぞや。

十郎　ハイ、御免なされませ。

くら　ヤ、お前は坂の下の米屋樣。

さん　古手屋さんも御一緒に、ようお出でなされました。

十郎　イヤモウ、あまりようも來ますまい。コレ、おくらどの、勘定はどうして下さるぞいの。

ひね　コレ〳〵、わしは米屋のひね右衛門、息子が歸りまでと、送つてやつた米代が三分一朱。掛けも濟まず、八藏も歸らず、いつまで貸して置かれるものか。なんぼ世の中豐年で、穗に穗が咲くやら、

十分に、世界の米が出來たとて、只は米屋も仕込まれぬワ。三分二朱をたつた今、勘定さつしやいさつしやい。

十郎　サ、お前の云ふも尤もだ。モシ、わしも又、春中からこの内方へ、こなた衆二人の身の廻り、夜の物、よい綿厚な蒲團一つが玉の床。思ひ近江の高宮島、これはこの子の盆帷子、繼はあれど五七の蚊帳、あれこれ〆めて金高が、二兩一分と八百六十、二朱寄越しやれば四文の釣り、モウモウ待たれぬ。いま古着代、寄越して下さい。

兩人　勘定さつしやい〳〵。

ト せりかゝる。兩人、氣の毒なる思ひ入れ。

くら　サヽ、御尤もではござりまするが、今夜は泊りのお客もあり、いづれ明日まで、お待ちなされて下さりませ。

十郎　イヤ〳〵、待たれませぬ〳〵、百貫の抵當に蒲團でも、持つて行かねば氣が濟まぬ。いつそ、この蒲團でも。

ト 捨ぜりふにて、支へる二人を突き退け〳〵、義兵衛の着てゐる蒲團を、矢庭に引きめくる。義兵衛轉げ出で、呆れてゐる。

ひね　コレ〱、古手屋どの〱、貴樣ばかり、其やうに手當り次第にさつしやるが、わしも米代、命の親、鍋釜なぞは當り前。古疊でも引取つて、半雜作もせねばならぬ。いつそ疊を。

ト義兵衞が乘つて居る疊を引きめくる。義兵衞、横に轉げて、膽を潰し、ウロ〱して居る。

十郎　貴樣は勝手のがらくたで、一兩も取れやうが、むづかしいは、この古手屋、いつそこりやア鬼になつて、この阿母の身ぐるみを。

トおくらが、帶へ手をかける。

十郎　サア、不肖ながら、脫いで下さい〱。

トせちがるを、おさん、縋つて

さん　アヽモシ、母さんの着る物は、どうぞ堪えて下さりませ。この間は癇の病。その病人の着て居さんす、着物をわしが見る前で、どうマアそれが。

くら　ハテ、其方の構ふ事はない。サア、古手屋樣、これで濟みます事ならば、小袖を渡して。

ト脫がうとする。

さん　イエ〱、そりやお前、病氣の上に、ひよつと又、お風を召しては、わたしが悲しうございまする。申し〱。

ト手前の着物を脱ぎ

この着物を、お返し申しまする。申し〱、これ受取つて、どうぞ少しの所を。

ト着物、帯とも、十郎兵衞の前へ出して、思ひ入れ。

くら　アヽ、コレ〱、滅相もない。其方を、薄着にさせましては、どうマアわたしが見て居られませう。矢ツ張りわたしが脱いで、あの二人へ。

ト脱いで、おさんおくらも襦袢と湯もじばかりになる。

さん　イヤ〱、そりや惡い。其方は病氣、薄着になつては。

くら　イエ〱、お前に、苦勞かけては。

さん　イヽヤ、わが身に。

くら　イヤ〱、お前に。

兩人　ちやつと着て下さりませ。

ト互ひにせり合つて、思ひ入れ。最前より兩人、思ひ入れして居たりしが、ワツと泣き出し

ひね　アヽ、コレ〱、もうようござる〱。親子寄つての、その義理立て。あれを見ては、ナウ、古手屋どの。

十郎　イカサマ、こなさんがその心になれば、わしぢやといつて、鬼神でもござらぬ。勘定合ひは息子の、歸らるゝまで待ちませう。マア〳〵、この着る物は、着さつしやい〳〵。

ひね　こなたも病氣とあれば、冷えては惡い。サア〳〵、ちやつと着さつしやりませ〳〵。

ト捨ぜりふにて、兩人へ着物を着せる。義兵衛、思ひ入れあつて

義兵　何か樣子は知りませぬが、親子と云へ、今の挨拶。子を思ふ親、親を思ふ孝行な娘の子。聞けば二人の勘定も、兩方〆めて三兩一步。コレ

ト絹財布より、小粒を出し、紙に捻つて

幸ひ爰に小粒十三、これで二人が勘定も、モシ、濟みさうなものぢやぞえ。

ト兩人が前へ置く。

くら　こりや、お泊りのお客樣へ、お聞かせ申すも

さん　恥かしい此しだら、面目なうござりまする。

義兵　イヤモウ、貸借りは有る習ひ。何も恥かしい事はござらぬ。わしも思はずこの内に、今夜泊るも孝行な娘の難儀、母御の氣休め、一夜の宿り他生の緣、心置きなうこの金を。

くら　そりや有り難いお志し、仇には存じませねども、初めて逢うたお前樣に、その金を貰ひまして

は。

十郎　さうでござる〳〵。例へ貸すとも、借りるとも、其方は相對。わしらが方への勘定は、そりやモウ決して取りませぬ。二人の女の眞實を

ひね　見兼ねて泊りの客人が、遣へと出した三兩一分、誠にお前は男一疋。

兩人　ハテ、男氣もあるものだ。

義兵　そんなら、親子二人とも、借りるを斷わり、掛取り衆、これも取らずと、ゆるがせに。

兩人　もう〳〵、わしらは取つたも同然。

義兵　そんなら、わしは長旅の、金が力の三兩一分、お斷わりなら、たつてとも。

ト金財布へ入れ、懷へ入れる。

ひね　さて秋の日の釣瓶落し。

十郎　暮れぬうちに歸りませう。

ト門口へ出る。

かく　これはマア、お二人ともに、大きに御不肖にござりまする。何事も忰が内へ戻るまで

十郎　ハテ、わしも古手屋十郎兵衛、八郎兵衛には二人の兄貴、鰻谷ならぬ、蛇にも逃げ出す臆病者。

都合がよくば返すがよい。コレ、阿母、世帯にばかりかまけずと、あの子を連れて德本さまへ參るがよい。あれが誠の生佛、御十念でもかけさつしやい。

ト内より紙に包みし、切り餅を、十ばかり出し

これは昨夜鳥羽の祭りで、搗いた餅、隣の子藏に遣らうと思うたが、こなたに遣りませう。雜煮でもして咽喉へ詰まらぬように。

ト おくらに渡す。

くら　有り難うござりまする。

ひね　アヽ、餅は咽喉へは詰まるとも

十郎　詰まらぬものは

ひね　掛乞ひ二人。

十郎　豆板ほどの淚こぼして。

ト淨瑠璃を一口語る。

ひね　ハテ、いゝ氣の人だ。

くら　左樣なれば、古手の代も

十郎　あのお人の氣性に免じて、古手の代はこの通り。

ト袂の手拭を投げてやる。おくら、廣げて見て

くら　この手拭が、古手の勘定。

十郎　かまわぬ。

ひね　それでは米屋は

十郎　どうしました。

ひね　かなわぬ。

十郎　何を云はつしやる。

ト唄になり、兩人、向うへ入る。

くら　アヽ、ほんに世間に人鬼は、ござりませぬわいな。

義兵　イヤモウ、氣の措けぬ、好い氣な手合ひでござるわいなう。イヤ、それはさうと、先刻に關の棒端で、肝煎り親仁に苛められ、この子が云うたに違ひなう、今の親子の挨拶から、こりや、お前方は、眞實誠の

くら　ハイ、親子ではござりませぬ。わたしはあの子の、乳母でござりまする。

義兵　エヽ、そんなら、この子は外に親御が。

さん　アイ、云ふに云はれぬ、わたしが兩親。なんぼう乳母ぢやと云はんしても、藁の上から育てられ
誠の父樣母樣は、有りとは云へどこの年月。

義兵　アヽ、未だ逢はぬのか。

さん　アイ、お顔も知らず、掛けて居りまする。守の中、わたしが生れた、年月日時。

ト掛けてゐる、守を見せる。

くら　日時の揃うたこの身の生れ。守の中には、親御の形見。

さん　アイ、母さんには、逢はでこの世を。

義兵　アヽ、死なれたか。

ト泪ぐむ。

義兵　して、父樣には、達者なか。

さん　アイ、御無事なとばかり、ツイお顔も。

ト思ひ入れ。

義兵　ハテ、心細い話しだの。

くら　殊にわたしは、二人の子供、妹は氣性が男まさり、武家方の奉公を望めど、縁の無しか、今は京都で茶屋町に、兄は屋敷へ中間奉公。痛の病を苦に病んで、關のお寺へこの子が日參、すると云うて内を出て、聞けば馬借りて、道中筋を娘の馬飼ひ。

トおさんと顔を見合せ、ホロりとする。おさん、恥かしき思ひ入れ。

義兵　成る程、先刻その噂。阿母とも思ふ乳母どの、それを貢ぎと馬士の營ひ。

くら　わたしを實の母様と、思うて孝行盡さつしやる、その心根が猶更に。

さん　アヽ、もうどうやら、悲しう

ト思ひ入れあつて、義兵衞と顔見合せる。

義兵　アヽ、剛氣な蚊だわえ。

ト暮れ六ツの鐘になり、隣の内より、慶政、當宅、子藏、安下駄を穿き、杖を突き、ワヤ／＼と出て

慶政　サア／＼、暮れ六ツを打つぞよ。療治に行かうぞえ／＼。

當宅　わしらは、關の宿へ行かうか。

子藏　今夜は泊りが多いげな。

義兵　アヽ、ありやア按摩ぢやないか。

くら　左様でござりまする。

義兵　一人呼んで下さりませ。

くら　アイ〳〵。慶政さん、お泊りのお客が、療治がなされたいと仰しやつてぢや。サア、入りなさんせ。

慶政　アイ〳〵、こいつは口明けだわえ。御免なされやせ。

ト探り〳〵入る。

さん　ほんに、もう暗うなつたわいな。

くら　灯をともして上げませう。夕飯の支度もしたし、手傳つて下さんせ。

さん　アイ〳〵。

義兵　ハテ、構はしやるなよ。

兩人　宿六、行つて來ますよ。

慶政　早く歸らつし。

くら　ドリヤ、行燈を灯しませうか。

ト唄になり、おさん、義兵衞へ心を殘し、おくら付いて暖簾口へ入る。當宅、子藏、笛を吹きながら、

按摩を呼んで向うへ入る。あと合ひ方。慶政、義兵衛が肩を揉み出す。

慶政　アヽ、旦那の肩は、剛氣に張つたな。

義兵　さうであらう。よく揉んで下さい。コレ、わしは、五十療治だよ。

慶政　アイ〳〵、心得ました。よく揉んで上げやせう……モシ、利きやせうな。

義兵　アヽ、いゝ氣味だ。お坊は餘ッほど上手だワ。こなさんは、この在所の生れか。どうか見たやうだが、江戸にも居たか。

慶政　アイ、居りやした。江戸は本所の吉田町に居りやした。その時分まだお前、目が見えたが、たうとう目が潰れやした。

義兵　アヽ、道理で見たやうだ。

慶政　目の見える時分には、兩國近所は得意場でござりやした。その時分はお前、長庵と申しやした。

義兵　江戸の生れか。

慶政　イエ〳〵、丹波でござります。

義兵　アヽ、丹波か。丹波は篠山の城下か。

慶政　イヽエ、龜山でござりやす。

義兵　アヽ、丹波の龜山か。由留木さまの城下だの。

慶政　左樣でござりやす。旦那はお下りかえ。

義兵　イヽヤ、上りサ。

慶政　どつちでござりやす。

義兵　おらア伊勢よ。

慶政　さう見えやすよ。

義兵　エヽ、目も無くつて。

慶政　なにサ、旦那のお國は伊勢とかき。當てやした。ハヽヽヽヽ。

義兵　イヤ、氣の輕いお坊だわえ。

慶政　アヽ、きつい蚊だ〳〵。こりやアどうだ〳〵。暴れ蚊が。こいつはきつい蚊だ〳〵。

ト額へたかる蚊を拂ひ、思ひ入れ。

義兵　その筈よ。まだ行燈は灯さねえ。

慶政　道理だ。まだ暗闇かえ。イヤ、とんだ内だ。モシ、旦那え、お前さん又、宿に定宿があらうに、なぜこんな乞食宿に泊りなさつた。爰はお前、巡禮や道者ばかり、泊る内でござりやす。

義兵　ハテ、さうかの。怪しからぬ内に泊つたわえ。

　　トこの時、暖簾口よりおさん、行燈を提げて出て來り

さん　アイ、お客様、行燈を爰へ置きますぞえ。

義兵　オイ〳〵。姐えや、必らず何も拵らへまいぞよ。まだ食ひたくねえよ。

さん　何も上げます物もござりませぬが、せめて岡部のお汁など。

義兵　なにサ、構はしやるなよ。コレ、蒲團を貸して下さいよ。

　　ト舞臺の上の方へ蒲團を敷き

さん　アイ、爰へお床を取りますぞえ。

　　ト破れたる六枚屛風を立てる。

　　ハイ、只今御膳を上げまする。ちつとお待ちなされませえ。

義兵　なにサ、おらア、御膳も灰汁拔きもいらねえ。姐さん、お前の側が好いのだ。新蕎麥の交りなし初心の生蕎麥だ。コレ、嫌味辛味のない所は、釜揚げよりは水揚げの、コレ、蒲團をちよつと、ぶッかけはどうだ。

　　トおさんが手を取る。

さん　およしなされませ〳〵。

　トいろ〳〵の思ひ入れ。

義兵　これサ、蒲團をちよつと、ぶッかけはどうだ。

慶政　そいつは、よからうね。

　トこの聲に悑りする。おさん、恥かしげに暖簾口へ入る。

義兵　ほんに、お坊、嫌味な奴サ。

慶政　旦那は蕎麥が、お好きだね。

義兵　こなたも好きか。

慶政　わつちも好きだね。申し、旦那、お前も油斷のならねえ。あの手打を一膳喰ふ氣だね。道理でこんな内に泊る筈だ。

義兵　ありやァ爰の娘だな。こなさん、知らねえか。

慶政　アイ、二三日後に越しやしたが、道中で評判の娘サ。モシ、江戸の半四郎とか云ふ、女形に似てゐるげな。

義兵　さうであらう……コレ、胸先が痞へた。ウンと賴みます。

慶政　心得やした。

ト探り見て

　アヽ、胸先が、剛氣に痞へてゐやす。

義兵　さうであらうよ。

慶政　お待ちなされませ。

ト捨ぜりふにて、胸先や腹の廻りを撫で下ろし、襟に掛けたる財布を探り當て、そろ〳〵引出す。振り返り、義兵衞、慶政が顏を見る。慶政、これを知らず、捨ぜりふ云ひながら、財布を引出す。義兵衞、その手を捕へ

義兵　お坊、貴樣は、どこを揉むのだ。

慶政　アイ、胸先が、剛氣に痞へて居りますから。

義兵　それを揉むとて、アノこれをか。

慶政　エ。

ト側の莨盆を脇へ寄せる。

義兵　お坊は、ちつと見えるの。

慶政　なにサ、皆目サ。
義兵　ハテ、見える様子だが。
　　　ト立ち上がる。
慶政　サ、お下を致しやせう。
義兵　イヤ、もうよしませう。
慶政　ハイ、どうなりとなされませ。
義兵　ソレ、療治代。
　　　ト錢百を投げやる。慶政取つて
慶政　これぢやァ多うござりまする。
義兵　取つて置かつし。
慶政　有り難うござりまする。
　　　ト懐へ入れる。
義兵　お坊、御苦勞。
慶政　旦那様。

義兵　大儀でごんした。

ト唄になり、義兵衞、月を付けて、屛風を開け、蒲團の上へ上がり、また屛風を引廻す。合ひ方、捨ぜりふ。慶政、殘つて

慶政　アヽ、氣の短かい旦那だ。ドレ、そろ〳〵外を稼ぎませうか。

ト杖を探り、出ようとする。障子の内より、團助、一腰を提げ、醉うたる體にて、出て來り

團助　ハテ、強い蚊のゐる内だ。聞けば按摩どのが來て居るさうだの。

慶政　アイ、按摩は一人來て居りやす。

團助　コレ〳〵、按摩々々。なんと、相談ものだが、おれを下ばかり揉んでくれまいか。

慶政　隨分揉んであげやすね。

團助　そいつは有り難い。ドレ、横にならうか。

ト寢轉ぶ。慶政、捨ぜりふにて、團助が腰を撫る。團助、一腰をよき所に置く。

慶政　モシ、いま揉んだ旦那はね、上ばかりで、下はお嫌ひだとサ。お前さんは下ばかり。兩方搗き交ぜれば、いゝ人間が一疋出來やすね。ハヽヽヽ。こりや　お慮外を申しやした。

團助　なんだか、おらァ剛氣に草臥れた。足が棒の樣だ……アヽ、こいつは、強い蚊だ〳〵。

ト木綿大叺の錢入れを出し、これをスッポリ冠つて

こいつはいゝ／＼。これでは一向蚊がたからぬ。

慶政　旦那、餘ッほどあがつたね。

團助　なにサ、少々たべ申した。

慶政　さて、よい匂ひだワ。旦那、大きに御酒機嫌だ。

ト足を揉みながら、そこらを探り廻し、幕開きの牛蒡を一本探り付け

アヽ、こりやア牛蒡だな。エヽ、先刻當宅めが、洗ひにうせて、一本忘れてうせたな。これだから、盲目に用は頼まれねえ。

ト此うち團助、鼾をかき出す。慶政、いろ／＼捨ぜりふあつて

申し旦那、御寝なるね。風を引きなされまするな。モシ、旦那々々。

ト探り廻し、一腰を探り當て、ソツと取つて、柄袋の引はだを取り、手早く有りあふ牛蒡へかけて、ソツと團助が側へ差置く。此うち捨ぜりふよろしく、團助、鼾をかく。

慶政　ハテ、旦那はよく御寝なさつたなア。

ト一腰を、股倉より引摺り込む。奥よりおくら、出て來り

くら　慶政さん、お客さんは、そこにかえ。

慶政　アイ、あの通り大鼾だ。揉んでしまひやした。蒲團でも掛けて上げなさい。風を引かつしやるによ。

ト　そろ〳〵探り出て、下駄を尋ねるとて、砥石を探り當て、杖を取つて、そろ〳〵足にて砥石を門の外へ蹴出し、外へ出る。

くら　ほんに、マア、こりや強い鼾ぢや。モシ、奴さん、サア、あの座敷へ行て、寢さつしやりませ〳〵。

ト　搖り起す。

團助　オイ〳〵。アヽ、もう夜が明けたわえ。さて短かい事だ。いま寢たと思つたに。

くら　イヽエイナ、まだ夜中ぢやわいな。サア、小座敷へ行て寢さつしやりませ。

團助　そんなら、先刻の酒に、まだ廻されてゐるさうだ……ほんに、按摩は歸つたか。

くら　去なれましたわいな。

團助　腰の物は、これか〳〵。

ト　牛蒡を取り

アヽ、まだ醉が醒めねえ。

くら　サヽ、御寢なされませいな。

ト合ひ方になり、醉うたる團助を介抱して、上の障子屋體へ寢させ、天徳寺を取つて

サ、これなと冠つて、寢さんせいな。

ト團助に打着せる。矢張り合ひ方。おくら、障子を閉て暖簾口へ入る。慶政、門口に窺ひ居て、ソツと一腰を出し、あたりを尋ね廻り、門口の手桶と柄杓を取り、以前の砥石をよき所へ置いて、思ひ入れあり、白刃を拔いて砥石に當てると、この途端、諸所に蟲の音。獨吟になる。慶政、盲目にて寢刃を合す。暖簾口よりおさん、備前徳利の油注ぎを持つて出て來り、行燈を搔き立て、油をつぎ、屏風をソツと明ける。內に義兵衛、柏餅になつて居る。おさん、枕元の莨盆を取つて、火を入れかへる。この時、唄一くさり切れる。義兵衛、目を覺まし

義兵　誰れだ〳〵。枕元へ來たは、誰れだ。

トこの聲、外の慶政が耳に入り、內を窺ふ。おさん、恥かしさうに

さん　アイ、わたしでござりまする。

義兵　アヽ、內のお娘か。

さん　アイ。

義兵　何しに來たのだ。

さん　油をついであげませうと存じて。

義兵　油をつぐに、屛風を取つてか。

さん　イエ〳〵、こりやお莨の火を入れて上げませうと。

義兵　アヽ、そこで屛風を、……コレ、ちやつと莨を吸ひつけて下され。

ト莨盆にある煙管へ莨を注ぎ、吸ひつけて出す。義兵衞、手を伸し、おさんが手を捕へ

ちつと、入りねえな〳〵。

さん　およしなされませ〳〵。

ト恥かしき思ひ入れ。

義兵　恥かしくねえわな。ちと入りねえな。

さん　なんぞ御用でござりまするかえ。

義兵　用があるよ。その用は。

ト古屛風に貼つてある、半四郎と團十郎、清玄松若の錦繪を見附け

コレ〳〵、爰にある役者繪の半四郎に、お前、よく似てゐるよ。

さん　何を譯もない事を云ひなさんす。

義兵　ナニ譯のある事よ。この繪は半四郎と團十郎が、清玄と松若の所だ。この狂言の話しをして聞かさうか。

さん　そりや面白うござりませう。

義兵　サア、面白いから、爰へ入りなよ〳〵。

さん　およしなされませ〳〵。

義兵　入りねえな。お前、爰へ來ないと、アレ、あの役者繪の團十郎が、大きな目で睨むよ。

さん　オヽ怖。

義兵　〆めた。

ト行燈を吹き消し、屏風を引き廻す。また獨吟になり、九ツの鐘。慶政、矢張り寢刃を合せゐる。九ツの鐘と一杯に唄きれる、空へは夜中の月出る。最前より慶政、指折り鐘を數へゐて、九ツの時ゆゑ、空を見上げ、月魄上がりしを見付け、爰にて初めて目を開き、白刃をキツと見て

慶政　鍔は南蠻鐵にして、象眼入りたる岩間の波。目貫は金の貝づくし。こりやコレ、兄の宮太夫、秘藏いたせし關の孫六。これを所持せしあの下部は、さては四條の河原にて、密書を持參の團助か。

ア、、知らぬ事とて。

ト鞘へ納め

面を知らねば尤も至極。されども兄貴が送りし一腰、巡り〳〵て八平次が、手に渡つたは天の與へ、忝ない、……世を忍ぶ身も、先立つ路用の、金子を所持のこの家の旅人、窺ひ寄つて

ト門口を窺ひ、白刃を拔いて、戸の間へ突ッ込む。バッタリ音する。この時、向う揚げ幕にて、長持唄聞える。慶政、向うをキッと見て

近づく明りは、

ト鞘に納める。捨て鐘、合ひ方にて、我が家の戸を開け、內へ入り、戸を閉す。向うより、駕籠舁き二人、、、、坂の下問屋と書きし小田原提灯を灯し、一人は四つ手駕籠に息杖を結びつけ舁ぎ

駕一 〆めて鳴るのはナアエ太皷や皷。

ト唄ひながら、出て來り

どうだ。向うの內か。

駕二 あれだ〳〵。

ト兩人、門口へ來り

駕一　アイ、賴みませう。お上りのお客人は、まだ寢てかえ。坂の下から迎ひの駕籠が來ましたよ。

ト義兵衞、聞き付け

義兵　オイ〳〵、もう八ツを打つたか。大分早いの。

トおさんと共に屛風を明けて出る。行燈消えて暗きゆゑ

ア丶、灯が消えてあるの。

ト二人、そろ〳〵帶をしめる。

駕一　モシエ、八ツが立ちなら、もうようござりやすよ。早く支度をなされやせ。エ丶、剛氣な蚊だぞえ。

ト始終蟲の音。おさん、悑りする。

義兵　ハテ、野暮に大きな聲だ。悑りさせた。

ト立ち支度する。おさん、別れ惜しき思ひ入れ。義兵衞、耳へ口寄せ何やら囁く。奥よりおくら、火打石を持ち、出で來り

くら　これは暗い事ぢやなう。あれ程油を注いで置いたに、また鼠がかゝつたのかいな。

ト火を打つ。

義兵　イヤモウ、強い鼠だね。夜ッぴて行燈へかゝりましたよ。

ト支度しながら、おさんに奥へ行けと云ふ。

くら　イエモウ、鼠には困りまするて、……コレ、娘、おさんは起きやらぬか。お客様がお立ちなさるわいの。

トこれにて、おさん、ソロ〳〵奥へ行き、いま來たる顔にて、足音して出て來り、其うちおくら、灯をつける。

さん　母さん、もうお立ちなさんすかえ。

義兵　これは娘御、昨夜から、大きに世話になりました。また下りに寄りますぞえ。

くら　左やう遊ばされませ。ほんに折角お泊め申して、御馳走も致しませいで。

義兵　イエモウ、これに上越す御馳走はござりませぬ。

トおさんと顔見合せ、思ひ入れあって、おくら、門の戸を明けて

くら　こりや、御苦勞でござりまする。

駕一　ハイ、眠うござりやせう。

義兵　ハイ、左樣ならお暇申しませう。大きに世話になりました。

くら　御機嫌よう、お立ちなされませ。

義兵　駕籠の衆、御苦勞。

兩人　サア、お召しなされませ。

ト義兵衛、駕籠に乘る。おさん、別れ兼れる思ひ入れ。

義兵　アヽ、何か忘れたやうぢやが。

兩人　サア、やらうぜ。

ト舁き上げる。

義兵　オット待つた。忘れた物がある。

兩人　まだござりまするか。

義兵　矢立を忘れた。

トまた駕籠より出て、内へ入る。

さん　ハイ、これでござりまするか。

ト出す。

義兵　オヽ、これでござる。

ト取らうとする。おさん、ヂツと捕へて、放さずに居て

さん　お歸りに、必らずお寄りなされませえ。

義兵　オイ、また歸りに寄つて、なんぞ忘れませう。

くら　申し、もうお忘れなされた物はござりませぬかえ。

義兵　イヤモウ、忘れた物はないが、それとも思ひ出して見ませう。

兩人　旦那、まだでござりますかえ。

義兵　まだある〳〵。思ひ出した。イヤ、とんだ物を忘れた。

兩人　なんでござります。

義兵　今夜の宿賃を忘れた。

兩人　そりやアとんだ事だ。

義兵　こんな事であらうと思つた。

くら　なんの宿賃に及びませうぞいの。

ト此うち義兵衞、錢貳百出し

義兵　南無三、紙入れは駕籠の內へ置いて來た。よし〳〵、この紙なりと。

ト腰に下げたる半紙綴の帳の裏、白紙の所を一枚破り、右の紙へ錢をクル〱と巻く。此はずみに、帳面を取落し置く。この綴目に、前幕の左内の狀挾みある。

モシ、これはあまり麁末ではござりますが、あの子に油でも、買つてやつて下さりませ。

くら これはマア、云はれませぬ事をなされまして、およしなされませいで。

義兵 ハイ、仕樣もあらうが、旅がけの事、志しでござります。取つて置かつしやりませ。

くら 左樣なら、お志しの程、お貰ひ申して置きませう。コレ、娘、あなたへお禮を。

さん ハイ、有り難うござりまする。

義兵 なんの禮に及びませう。さう云はれては痛み入ります。

くら 隨分道中御機嫌よう。

ト義兵衛、駕籠に乘る。

兩人 旦那、もう忘れた物はござりませぬかえ。

義兵 イヤモウ、これぎりだ、……時にまだ八ツ前だの。

兩人 イヽエ、いま打ちました。

義兵 そいつは、九ツであらう。一番鷄も鳴かねえぞ。

駕一　ナニ、とつくに鳴きやした。

駕二　ソレ、やらうぜ。

ト捨て鐘になり、駕籠を舁き上げ、向うへ入る。慶政、戸を開けかけ、窺ひ居る。おさんは門口より、駕籠の後を見惚れてゐる。慶政、一腰を古傘の中へ隠し、これを抱へ、杖を突き、花道まで行き

慶政　駕籠に附けたる提灯に、坂の下問屋と書いた、あいつが目じるし。

さん　エ。

くら　コレ、門を閉てなさんせよ。

ト戸を閉す。これにて時の鐘。慶政、ツカ／＼と、足早に行きかける。向うより逸平、木綿やつし、脚絆草鞋、一本差し、頬冠り、スタ／＼と出て來り、慶政と行き違ひ、思ひ入れにて、摺れ違ふ。逸平、目を附ける。慶政、一文笛を吹き、按摩と見せて、向うへ入る。逸平、振り返り／＼、門口へ來て

逸平　阿母、戻りましたが、變る事もござらぬか。

ト戸を開け、内へ入る。門の戸開けてあり。おさん、ツカ／＼と行つて、向うの方へ、駕籠の提灯の行くを、本意なげに見惚れる思ひ入れ。

くら　ヤ、逸平か。夜に入つて、戻りやつたかいな〳〵。コレ〳〵、おさんさま、逸平が戻りましたわいの〳〵、……これはしたり、何をマア見てござりまする。

ト連れ來る。

逸平　これは、おさんさま、御健勝で、先づはおめでたう存じまする。

さん　アイ。

ト矢張り向うの方へ心遣ひの思ひ入れ。

くら　コレ〳〵、逸平。して、八平次とやらが在所も知れ、與作さまにもお屋敷へ、お戻りなされたかいなう。

逸平　サア〳〵、そこ所ではござりませぬ。親旦那與三兵衞さま、丹州より京都へお出での道にて、何者か旦那を手にかけ、お家の系圖を

くら　ヤヽヽヽ。すりや、親旦那にも。

逸平　その場で御最期、その上に、與作さまにも加茂川の、早瀨の流れに浮き死骸。

くら　エヽ。

ト悧りする。おさん、心遣ひ、物思ひの體。この時、上の障子をソツと開け、團助、聞き耳立てゐる。

逸平　お家の悪人官太夫、怪しき書面を認めて、團助と云ふ奴めに、渡した事を見たゆゑに、追ひかけ追ひ詰め四條の河原、非人となつたる八平次、團助めも見失ひ、今に行くへの知れぬ兩人。せめて團助引ッ捕へ、ひどい目見せて八平次が、うせる所をほざかさねばなりませぬ。

ト此うち團助これを聞き、うろたへて、帶を〆め、牛蒡を持つて逃げ支度する。

くら　サ、まだ悲しいは重の井さま、あなたも自害を、なされたといなう。

逸平　その儀もこの程京都にて、妹小萬が話しに聞く。殊更、親旦那を討つたる曲者、その砌り、與三兵衞さまが、肩先を切り込む刀疵、受けたる奴が敵の證據。コレ

ト胴卷より廿兩と、證文を出し

どうぞ御用に立つならばと、おれに渡した廿兩、妹が年季のこの證文。敵討に妹も、出立いたした同然。肌身離さず、持つて居ます。

ト又しつかりと腰に付け

尋ねる奴の團助め、慥かに爰らへうせた樣子。雲助宿を詮議して。

くら　まだその外に奴どの、問屋どのから、賴むと云うて。

逸平　ナニ、奴が一人泊つて居りますか。

くら　オイナウ。

トこのあたり、團助、屋體を拔け出で、四ツ目垣を破り、吹替への一腰を持つて、東の歩みより、向うを通つて、揚げ幕へ入る。この途端に、當宅、笛を吹き〱戻り來り、隣の内の戸を探り入る。

逸平　して、奴めが面體は。

くら　わしもしかとは覺えねど、コレ〱、爰に問屋の宿割り。

ト針箱より出し、割出し札を見せる。逸平、取つて

逸平　丹州由留木の家中、鷲塚内、小者一人、……さてこそ團助。

ト駈け行くを

くら　アコレ

ト留めるはずみに、おくら、帶に挾みし、二百の錢を落す。包み紙解けて、内より小粒バラ〱と落つる。

ア丶コレ、お錢を包んだ紙の中、小粒の數も……こりやコレ十三、そんなら小粒十三を、今宵の宿賃。

ト此うちおさん、落ちてある手帳を取上げ

さん　勢州桑名の城下、山形屋義兵衛、……そんならこれは、今のお方の。

　　　トきつと抱へる。はずみに、狀落ちる。

逸平　この宿割りでは、確かに團助め。

　　　ト障子屋體へ馳け行き見て

　　ヤヽヽヽ、風をくらつて逃げ居つた。して、宿割りでは、下りか但し

くら　關の宿から、送つた旅人。

逸平　そんなら上りの團助め。一走り行て

　　　トつかくと行きかゝる。おさん、手帖に挾みし、手紙の上書を見て

さん　丹波屋與作と。宛名の手紙。

くら　今のお方の、落した狀か。コレ。

　　　ト逸平へ見せようとする。

逸平　エヽ、役にも立たぬ。

　　　ト證據と心附かず、門口へ出る。

當宅　まだおよらずか。

逸平　エヽ、退きやアがれ。

ト毆り倒し

阿母、よう留守。

くら　ヤ。

ト逸平、尻をからげる。おくら、戸を閉す。おさん、手帖と狀を抱きしめる。當宅、頭を抱へ見事に返る。これを木の頭、仕組みよろしく、拍子幕

捨て鐘になり、逸平、一散に向うへ入る。時の鐘、ツナギにて引返し。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕。大木の松並木、茂りし吊り枝。所々に稻叢、東海道坂の下宿と書いたる誂らへの傍示。下に誂らへの草井戸。時の鐘、蟲の音にて幕明く。

ト東の口より駕籠舁き二人、垂れを下ろせし四つ手駕籠へ子持筋の小田原を吊し、藤浪、乘りたる體にて舁いて出る。後より江戸兵衞、一本差し、菅笠を持ち出て來る。揚げ幕より義兵衞の駕籠、坂の下宿問屋と云ふ、提灯を吊し、舁いて出て來り、本舞臺にて行きあひ

藤駕　オイ、誰れだ。簑八か。早く出掛けたな。

義駕　さう云ふは、どぶ六か。後は誰れだ。

藤駕　おれだワ。いしごきの三さんだワ。

義駕　アヽ、うんてい小僧か。精が出るな。

藤駕　どうだ。朝仕事だが、替つてやらねえか。

江戸　コレ〳〵、替つて居ては、暇が取れる。早くやつてもらはう。アヽコレ、どうか降りさうでもあり。

藤駕　なにサ、降りも致しやすまい、……替るなら、五十打つべい。

義駕　坂の下から、いくらで來た。

藤駕　關へ、じばりんよ。

同　てまへ達は、駄賃か。

義駕　沓掛から、やみで來たワ。

二人　土山までか。いゝ駄賃だな。

義駕　そりや人足が違ふわえ。

藤駕　サア、五十打つワ。替つてやれ〳〵。

義駕　替つてやるべい。棒組み、立てろ。
二人　合點だ〳〵。
江戸　こりやア、どうでも替るのか。サヽ、早く〳〵、頼むよ〳〵。
二人　ハイ〳〵、直でござりやす。
藤駕　モシ、お女中さま、お乘換へなされませ。
　　ト垂れをあげる。
藤浪　兄さん、替るのかえ。
江戸　もう替るのだとよ。取落さぬやうに、乘換へや〳〵。
義駕　モシ、旦那、どうぞお乘替へなされて下さりませ。
義兵　もう替るのか。エヽ、面倒な事ぢや。
　　ト駕籠より出る。
義駕　モシ、旦那、お取落しの無いやうになされませ。
義兵　サ、おれもさう思ふから。
　　ト駕籠より出て、思ひ入れあつて

義駕 コレ〱、駕籠の中に、小さい帳は無いか。見て下さい。

義兵 ハイ〱。

ト尋ね

義駕 モシ旦那、何もござりませぬわい。

義兵 アヽ、そんなら道へ落したか。昨夜の泊りへ忘れたか。エヽ、困つたものぢや。丹波屋の與作が落した手紙もあつたが、屆けてやらうと思うたに、また落したか。アヽ、儘よ。捨てゝ置け〱。

ト駕籠へ乘ろ事。藤浪も乘り替へろ。

義駕 旦那、ゆるりとお召しなされませ。

義兵 アヽコレ、藤六が待つて居るであらう、イヤコレ、駕籠の衆、坂の下へ行つたら、藤屋へも寄るから忘れまいぞ。

藤駕 畏まりました。

二人 早く、行つて來さつし。

藤駕 晩には摑まうぞ。

義駕 源が所へ來いよ。

ト捨ぜりふにて時の鐘にて、駕籠舁き二人、義兵衛を駕籠に乘せ、垂れを下ろし、東の口へ入る。この時揚げ幕より慶政、提灯をしるべに出て來り、花道にて、舞臺を窺ふ。

二人　サア、お女中様、參りませう。

藤浪　兄さん、何も取落しはないかえ。

江戸　イヤ〱、何も取落しはない。コレ、駕籠の衆、酒手は遣る程に、急いでもらはう。

ト垂れを下ろし、舁き上げんとする。慶政、窺ひ寄つて、白刃を駕籠へ突ッ込む。内にて藤浪、ワッと聲立てる。駕籠の兩人、驚ろき

二人　切つた〱〱。

ト下座へ逃げて入る。江戸兵衞、駈け寄り

江戸　うぬ、盜人か。

ト寄るを慶政、返す刀に切りつける。江戸兵衞、手を負ふ事。慶政、駕籠の垂れを上げ、藤浪を引出し、思ひ入れあつて

慶政　ヤ、、、、昨夜の旅人と思ひの外、駕籠の内なは女の旅人。すりや間違ひで。

藤浪　ヤ、さう云ふ聲は、八平次どの。

慶政 さう、吐かすのは、藤浪だな。

藤浪 こりや、こなさんは、わたしが返事せぬのを根に持つて、かゝる狼藉。エヽ、こなたはなう。

江戸 すりや、待伏せしは八平次。色紙の詮議と、與作どの、只今在所を尋ぬる最中。

藤浪 捕へて置いて逸平どのへ。兄さん、必らず逃がさぬやうに。

江戸 手は負うたれど八平次、取逃がさうか。

ト縋るを、蹴飛ばし、藤浪寄るを、手荒く切り下げ、キツとなつて

慶政 何をいらざるほざてんがう。藤浪、うぬも出留木家に、奉公したる端下女。部屋住みながら弟八平次さまが御執心、口説けど聞入れないこそ道理。與作の下部逸平め、彼奴に腐り合ひ、高祿取りの某に、よくも恥辱を與へたな。それで出張つて見くびつた、旅を稼ぎの山形屋、路銀を目當に附けて來て、殺す氣もなく、間違つて、つれなきわれを、おれが手で、殺すといふも約束事。その道連れは兄江戸兵衞、同胞二人が坂の下、土になるとは、ハテサテ不便な死ざまだワ。

江戸 エヽ、惡人の官太夫さへ、見限る程な八平次。盗人ひろぐ、おのれらが、穢れた刀でナニ死なう。爰で逢つたが好き幸ひ。うぬ、引立てゝお屋敷へ。

ト立ちあがらうとして、ヨロ〳〵と思ひ入れあつて
急所の痛手か。口惜しい。
トきつとなる。
藤浪　エヽマア、玆な悪人め。コレ、兄さん、例へわたしは死ぬるとも、お前は爰を立退いて、コレ。
ト序幕に、與作より受取りし書き物を出し
この書き物を逸平どのへ手渡して、關東入間のお屋敷へ、上げさへすれば、與作さまの越度もなう、お家の佞人鷲塚が、悪事のしるし、書き物の文言。ちつとも早う
ト渡さうとするを、蹴倒し、引ツたくる。
江戸　ドレ、その書面。
ト寄るを切り下げる。江戸兵衞、苦しみ倒るゝ。藤浪、思ひ入れあつて
藤浪　エヽ、兄さんを。
トかゝるを切り下げ
慶政　この書面を出されては、心一致のその人の、爲にならぬ文言ゆゑ、八平次が貰ふのだ。うぬらはキリ〳〵くたばつてしまへ。

江戸　例へ死ぬともその書き物、うぬには渡さぬ。八平次。

トよろぼひ寄る江戸兵衛を、慶政切りつける。これより本雨降つて、凄き合ひ方。三人タテあつて、トヾ慶政、兩人を、切り殺す。この時禪のツトメになり、向うより團助、一散に出て來り、この體を見て

團助　ヤ、盜人か、追剝ぎか。一人旅でも手利きの奴。おれに構ふな。わいらが爲にならぬぞ。

ト慄へて反りを打つ。慶政、思ひ入れあり

慶政　さういふ聲は、慥かに昨夜沓掛で、おれが療治の團助か。

團助　ヤ、その名を知つた、こなたは慥か。

ト近附き見て

オヽ、宵に出逢うた按摩の慶政、奴がその名を

慶政　昨夜の泊りで手に入つた、われが差したるこの一腰。覺えの拵らへ、こりやコレ兄の官太夫。

團助　ヤ、そんならいつぞや四條河原の暗まぎれ、お顏もそれと解らざる、八平次どのでござりまするか。して一腰とは、そんなら、とつくに。

慶政　兄より使ひのわれとも知らず、醉つて居たのを幸ひに、奪ひし一腰。コレ、この所に。

團助　して又、わしが差して來たのは。

ト柄を取り見て

ヤ、引はだかけた、こいつは牛房だ。

江戸　われは使ひの團助だな。いつぞや、うぬに騙されて、取られた名石。色紙の在所も八平次。

ト立ちかゝるを、慶政引付ける。

團助　申し、逃げて來たのも沓掛村から、わしを追つて逸平めが、おツつけ爰へ。

慶政　泊つた内は、逸平が。

藤浪　ナニ、逸平どのが。

ト立ち上がるを切り倒し、江戸兵衞、よろぼひ寄るを、慶政、二人を滅多切りにして、止めを刺す。この時、向うバタ／＼になる。慶政、團助、あちこちして居るうち、捨て鐘にて、向うより逸平、一散に出て來り、團助と顔見合せ、團助、逃げるを引附ける。慶政、後より切りつける。その刀を留めて

逸平　團助めか。

團助　南無三、爰を。

ト逃げるを引とめる。慶政、切りつける。この手をキツと留め

慶政　うぬは逸平。

逸平　八平次か……ハテ、よい所で

ト立廻り

兩人　逢つたなア

逸平　いつぞや四條の河原にて、見失うたる八平次。團助諸とも今この所で、巡り逢つたが百年目。奪ひし色紙を、キリ〱渡せ。

慶政　何を慮外な二合半。色紙の在所は知らねえワ。よし又存じて居ればとて、うぬに易々渡さうか。今も今とて與作から、うぬに渡せとこの書き物。藤浪はじめ江戸兵衞まで、爰でバツサリ殺してしまつた。

ト書き物を見せる。

逸平　ヤ、、、、。すりや、兄弟二人も

ト死骸を見て

可哀や二人がこの最期。敵は眼前、八平次、書き物渡して覺悟しろ。

慶政　小癪な二才め。團助、野郎を殺らしてしまへ。

團助　心得ました、と云ふものゝ、差して來たのはこの牛蒡。幸ひ落ちたこの白刃、これで奴が引導だ。
　逸平、覺悟。

　　ト江戸兵衞が使ひし白刃を構へる。

逸平　二人が敵、八平次。

慶政　逸平、うぬを。

　　ト切りつける立廻り。逸平、最前の金と、證文の入りし胴巻を落す。慶政取つて

　正しく、こりや金。

逸平　妹が渡せし廿兩、添へたる一札。

慶政　くたばつてしまへ。

　　ト切りつける。立廻り、よき所にて誂らへの合ひ方。三人タテあつて、三人とも手を負ふ。團助、倒れ居る。逸平、慶政と立廻りながら、ト、逸平、書き物を奪ひ取り、慶政を抉り、稻叢の影へ切り倒す。書き物を開き、月影に透かし見て

逸平　こりやコレ御主人、與作さまの御手跡。入間の館へ願ひの文言。さては色紙は恙なく。

團助　逸平、うぬを。

ト切りつける。立廻り、向う揚げ幕にて

大勢　ハイホウ。

ト供廻りの聲する、兩人向うを見て

逸平　あの人聲は。

團助　觀念、ひろげ。

ト行列三重になり、兩人立廻り。向うより、箱提灯二張、劍花菱の紋付き、丸笠、脚絆、旅奴大勢、提灯を持ち出て來る。後より旅乘り物、旅陸尺二人、股引羽織の侍ひ二人、槍持ち。後より蓑笠の人足一人、誂らへの繪符を差したる油檀掛けの兩掛けを舁き出る。後より、合羽籠。いづれも丸笠、脚絆、足袋、奴の供廻り附いて本舞臺へ來る。兩人この中へ切り込む。

皆々　狼藉者々々々。

ト立騷ぐ。駕籠は、舞臺眞中へ、シヤンと立て、兩掛けを擔ぎし人足、うろたへ、この中へ交る。逸平切りつける。團助、兩掛けに差したる繪符を取つて打つてかゝる。立廻りよろしく團助、繪符を、あたりへ落す。逃げんとする。逸平、團助を引きつけ、側へヨロ／＼寄つて書き物を啣へ、團助を殺す。

皆々　ヤヽ、人殺し。

　　トきつと云ふ。この時、筒音して、煙硝火立つ。逸平に中り、苦しみ、倒れる。

皆々　これは。

　　ト時の鐘の頭。駕籠の戸を明け、左内、羽織、野袴にて、種ケ島の小筒を持ち、顔を出し、あたりを見て

左内　これで伊達家の、胤も絶やした……書き物、これへ。

家來　ハッ。

　　ト書き物を取つて、差出す。左内、開き見る。家來、兩人、提灯を差出す。左内、とつくりと、讀みしまひ

左内　灯を持て。

家來　ハッ。

　　ト提灯を疊み、差出す。左内、書き物を蠟燭の火にて、燒き捨てる。この前より、簑笠の人足探り廻り、慶政が使ひし關の孫六の刀と、逸平が落せし胴卷を拾ひ、ソロ〳〵逃げる。

左内　怪しき人足、動かすな。

家來　ハツ。

ト捕へにかゝろ立廻り。簑笠落ちて、人足の八藏と顏見合せ

左內　ヤヽ、われは。

ト八藏、下の草井戸へ飛び込む。

家來　ヤ、あの草井戸へ。

左內　コリヤ……乘り物、やれ。

皆々　ハツ。

ト夜明けの鐘、鷄の聲。驛鈴の音にて、拍子

幕

大詰

祇園町扇屋の場
栗田口仇討の場

役名　鷺坂左內。丹波屋與作。干糠の八藏。口入れ、井筒屋宗七。目見得の娘、小よし。同小露。同、喜代治。同、小雪。中間、六藏。伊達新左衞門。刎川右馬之助。藝者、花野。女馬士、自然生のおさん。扇九の仲居、奴の小萬。山形屋義兵衞。由留木左衞門。

本舞臺、三間の間、一面の二重舞臺。軒に、菊にて屋根を葺き、紅摺りの團子提灯、東西、菊の柴垣見付け長暖簾、いつもの所に門口。扇九と云ふ掛け行燈。すべて祇園町の體。幕の内より拳角力の土俵、この東西に藝子花野、太鼓持ち若吉、拳を打つて居る。上の方に源五左、文五、着付け袴の侍ひ。藝者、仲居、太鼓持ち、拳角力の見得。門口の外に右馬之助、鼠木綿の形、虚無僧の旅形、天蓋、尺八を持ち、立つて居る、櫓太鼓にて、幕明く。

若吉　サンハマ、アノナエサイ。

花野　リヤン〳〵〳〵。

　　ト小吉、負ける

女皆　サア〳〵、花野さんが勝ち〳〵。

皆々　若吉が負け、酒ぢや〳〵。

　　ト酒を飲ませろ。

源吾　申すまでもなけれども、丹波由留木どのゝ家來たる我れ〳〵。この度。姫君には、當霜月、東の入間家へ御婚禮。お守り役は重の井新左衛門どの。

文吾　國元より近き京都にて、萬端御婚禮のお支度。家老鷺坂左内どのには、病氣ながら出京あつて

の役目。

花野 爰に京の名醫の御療治うけ、この扇九に御逗留。

仲居 お山さんや藝子さん方、お揚げなされてこの御保養。

若吉 これからは、おりんぼうを捕へて、一番文彌を語らせねばならぬ。

仲居 そんなら、おさきはえ。

若者 エヽ、いやいなア。

源吾 鐵さんは、誰れにも痴話したがるゆゑ。

皆々 痴話鐵さんと云ふぞえ。

ト右馬之助、尺八を吹く。

花野 表にお客がお出でと思うたら

仲居 旅の虚無僧さん。

太鼓 通らつしやいく。

右馬 通れとあれば、罷り通る。

ト天蓋取つて内へ入る。

皆々 オヽ、怖らしい。

ト悚りする。

源文 ヤア、刎川右馬之助どの。

仲居 そんならお近付きかえ。

右馬 文吾、源吾左どの、一別以來逢ひ申さぬ。身共、これへ參つたは、丹波の城主の家老職。

ト奥より

左内 鷺坂左内、病中ながら、面談いたすでござらう。

ト太鼓入り、待宵の唄になり、左内、長髪、病ひの鉢卷、着流し前帶、大小にて出る。女形皆々曲碌を直し、褥を敷き、この上へ左内住ふ。

右馬 左内どの。身共、只今では浪々の身分。貴殿には御病氣保養と承はつたが、全快でござるかな。

左内 これは深切、忝なうござる。併し、身共を尋ねてござつたは、定めて久々御浪々の

右馬 身の成行きを致してもらひたい。

左内 そりや以前のよしみ、如何やうとも申したいが、罷りならぬ。

右馬 そりや又なぜに。

左内　お上よりお咎めあつて、御改易のこなた、それゆゑ身共が貢ぎ致しては、相濟み申さぬ。ぢやに依つて罷りならぬ。
右馬　然らば、容れないな。せう事がない。さうだ。
ト思ひ入れあつて、花道へ駈け出す。この時、左内刀を力にして
左内　エイ。
ト聲かけろ。右馬之介立廻り。拳を出し
右馬　ドッコイ、小柄の手裏劍、油斷は致さぬ。
ト手の内を開き見て
こりやどうだ。大事を知つた身共ゆゑ、駈け出す所を一打ちと、エイと一聲手裏劍を、摑んだ小柄はどこへやら、こいつは無手の握り拳。
花野　オヽ、をかし。鷺坂さまの御病氣で、胸の痛みに思はずも
太鼓　しやく〳〵げて、エイと一聲云はしやんしたを。
右馬　なんでも手裏劍、ござんなれ、日頃の手練心掛け、摑んだ小柄はほんの夢中、そんなら今の掛け聲は。

太鼓　左内さまの、癪のげつぷ。
右馬　エヽ、いま〳〵しい。
皆々　ハヽヽヽヽ。
左内　それしきに、なんの手裏劍。併しながら、右馬之助どのにも
右馬　身の成行きを得心あつて
左内　それは格別、先づ〳〵、暫時爰へ來られて、その浪々の憂さを晴らした、その上にも。
右馬　身共は上客。
ト左内の側へ行き、大胡座かく。
女形　サア〳〵、一つあがりませいなア。
ト花野、酒を注ぐ。右馬之助飲んで、舌打ちして
右馬　久し振りで、ごんな旨い酒を飲んだ。甘露々々。とても事に思ひ指し。
ト花野へさす。
皆々　ヨウ〳〵、花野さんの思ひざし樣々。
左內　右馬之助どのには、早くも相手を見立てられ、病氣ゆゑとは云ひながら、身共なぞは、誰れを斯

うとの相手もござらぬ。

花野　鷺坂さんの嘘ばつかり。此方の内へお出でなされて、お目に付いたは、あの小萬どの。

藝者　よう知つて居るわいなア。

左内　ハテ、面目次第もござらぬ。ハヽヽヽ。

右馬　なんであらうと、身が目に付いた藝者の其方。その酒飲んで、返事をしやれ。

花野　何をいなア。

太鼓　オツト、その杯捌くが拳角力。お二人ともに、あの土俵で。

皆々　拳で勝負の菊角力かいなア。

ト向う揚げ幕にて

六藏　嫌らしい。小萬どの、放さつしやいな。

小萬　イエ〳〵、滅多に放さぬ。放しやせぬぞえ。

ト摺り鉦入りの鮮やかなる唄になり、向うより六藏、紺看板にて柿を噛りながら出る。小萬、仲居、着流し、赤前垂れ、駒下駄を穿き、豆腐を入れた岡持ちを提げ、六藏を捕まへ、生酔ひのこなしにて出て、花道にとまる。

文吾　これは仲居の小萬どの、いま戻つたか。
女皆　きつう醉うてぢや。危ないぞえ。
小萬　これは〳〵、打揃うての御挨拶、嬉しいぞえ。そこでわたしも和らかに、折助さんの供廻り。行列揃へて豆腐貰ひ。
六藏　奴は旦那のお迎ひに、粹な仲居の小萬どのに、捕まつて、お迎ひ先。これぢやァ築地へ行かれない。
小萬　わたしも遠目に主さんの、色の達引悶着を、見兼ねて來る道すがら、豆腐に緣の奴さん。
六藏　切られる思ひだ。放して下され。
ト振り切る。小萬、ヨロ〳〵して
小萬　ハテ、豆腐が崩れるわいの。
六藏　そりやァ、おれが所爲ぢやァない、酒の科。
小萬　こりや面白い。酒のとがの尾、惟茂の、鬼を退治の拳角力。
六藏　わしは矢ツ張り樽拔きの底拔け。
小萬　のみじ狩りとしやんせうわいな。
ト唄の切れにて本舞臺へ來る。六藏、下の方に扣へる。

皆々　小萬どの、どこで其やうに醉はんしたえ。

小萬　どこで飲んで醉うたぞと、問はれて莫連なわたしでも、そこは女子ぢや、恥かしい。あんまり勝手が忙がしさに、豆腐を買ひに色氣なう、内では待乳の時雨どき、バラ〱雨の雨舍り、それから出ると祇園町、あそこからも爰からも、向うで招けば川しげで、この頃は逢はぬぞえ、一口飲んで行かんせと、話しも例の後上戸、一言二言云ふうちに、池田の問屋の衆が來て、いま持ち合せて口を付けた、一つ上げうと献された杯、お志しは山々と、辭儀して見ても返さばこそ。まだ一向に素山と見えると、引留めらるゝ其うちに、長い羽織の男山、ちよつと見るからピンとした、細身の太刀に劍菱の、江戸風さんが、聞き及んだ、一つあげん隅田川などと洒落つけられ、イヤモウ伊丹諸白と、紙屋の菊の甘口な詞。云うても歸さばこそ、まだ七つ梅にはならぬと云うて、無理にお内へ引上げられた口惜しさに、一つ漬けてグッと乾したら、あんまり見事ぢや、お手元と、その捻ぢやうを思はんせ。それからわしもグッとして、爰で分けを取つてはならぬと、飲んだ程に〱、たうとうそこも捻ぢたと思はんせ。どこへ出しても酒にかけては、引けを取つては戻らぬ關の小萬、皆さん、アイ、褒めてやつておくれいな。

ト右馬之助、思ひ入れあつて

右馬　關の小萬と名乘りかけ、この杯の行司とは、捌きが早く見たいわえ。
小萬　どなたさんか、お近付きではないけれど、至らぬぞえ。
右馬　何が至らぬ。
小萬　ソレ、其やうに旅虛無僧の、穢ない形して、怖い顏しなんすと
女皆　誰れしも相手にならぬぞえ。
小萬　そこが譬へに云ふ通り、木折りでゆかぬが色事の習ひ。惡うは捌かぬ、小萬が醉の醒めるうち預けなさんせ。
右馬　べら坊め、小萬が醉の醒めるのは、十日が二十日かゝらうも知れねえ。好い加減に馬鹿にしろえ。
左内　コレ、小萬、その杯は預かつても延ばされうが、この鷺坂へ日頃の返事、今夜は是非々々抱いて寐る。
小萬　ホヽ、こりやをかしいわいなァ。なんの爲に抱かれて寐るもので。
左内　なんの爲とは、この證文で。
ト懷より請け狀を出す。
小萬　そりや、わたしが内證に、金の要ることがあつて、斯う〳〵ぢやと、冗談のやうにお話し申した

に、御深切に貸して下さんした、その後で、金證文の代りに、奉公請け狀を是非と云はしやんしたゆゑ、おかみさんを頼んで、上げ申したその請け狀。

左内　これがあれば、おれが爲には、われは家來。家來の身として主の詞を

小萬　背かれまいと云はしやんすかえ。

左内　知れた事。抱かれて寢ろ。

小萬　サア、それは。

左内　小萬、返事は、ドヽどうだ。

右馬　どうやら、それで醉が醒めたか、仲居の小萬、此方の色よい返事は定めて

小萬　どうして出來やう。この通りぢやわいなア。

　ト手酌にて酒を飮む。

右馬　それでは、つかねえ返事。

小萬　そんなら、お前、不承知かえ。

右馬　大の不承知。

小萬　さう云ふ事なら、勝手にさんせ。

ト右の岡持ちの豆腐を、右馬之助の頭に浴せる。

右馬　ヤア、切つた〱。

ト惘りして立ち騒ぐ。

小萬　ホヽヽヽ。

ト笑ふをキツカケに、踊り地になり、小萬、思ひ入れあつて奥へ入る。後より女形皆々續いて入る。

右馬之助、やかましう云ふゆゑ、源五左、文五介抱して

源吾　コレ〱、右馬之助どの、切つた〱とお云やるが、どこにも疵はござらぬ。

文吾　頭は豆腐だらけでござる。

ト頭の豆腐を右馬之助取つて見て

右馬　成る程、こりや豆腐でござる。イヤ、豆腐で頭が冷やりと致した。これにつけても伊達の奴ばら、兼ねての系圖は。

兩人　コリヤ、靜かに申されい。

ト合ひ方になる。此うち左內、硯箱引寄せ、密書を認め居て

左內　見さつしやる通り、最前より身共が認め居るは、鎌倉の管領、上杉の執權たる、宇佐美權の正

への大事の密書。
右馬　然らば、先達てより大望の企て。由留木家を横領の儀。
左内　如何にも。文言は斯くの通り……飛札を以て啓上仕り候ふ、兼ねて相願ひ置き候ふ由留木左衛門儀、多病に依つて、執權相勤め罷り在り候ふ某、暫らく家督相續相願ひ候ふ、即ち由留木の系圖所持仕り候ふ、御改めの上、相違なく家督仰せ付けられ下さるべく候、早々、宇佐美權の正どのへ、鷺坂左内。
皆々　すりや、いよ〳〵御大望の通り
左内　鎌倉表への諸家方へは、賄賂を以て相拵らへたれば、何かの成就。
右馬　その時こそは
左内　いづれも立身。
文源　忝なうござる。
左内　これにつけても、あれなる下郎六藏は身が腹心。
文源　イヤ〳〵、彼れは新左衛門どのゝ中間。
六藏　イヤ、お氣遣ひなされますな。重の井新左衛門が家來ではござりますれど、見所ある私しと、左

内さまがお見出し下されまして、何かを打明かしての御用。また初めからの事を知つて居ります私しでござりますれば、手馴づけて置かつしやりますが、お爲でござりまする。

右馬　これに付けても、何かの邪魔は。

源文　重の井新左衛門。

右馬　見付けられては、事面倒。

源文　然らば奥にて。

右馬　好きな酒と致さうかい。

トまた太鼓入り山姥の唄になり、右馬之助、源五左、文吾、奥へ入る。この唄をかりて向うより、新左衛門、野袴ぶッ裂き羽織、大小にて出て來る。

六藏　そこまでお迎へに參りませうと存じましたが、お早うござりまする。

新左　今日はお側奉公の下見ゆゑ、甚だ心急きであつた。

ト本舞臺へ來て

これは左内どのには、お心よいかして、端近にござらつしやりますな。

左内　ちと氣晴らしに、祇園町の往來を眺め居つたが、新左衛門どのには、お國の御用をしまひ、出京

召されたか。

新左　左様でござる。先達てお抱へなされたは、勢州石藥師の名醫と承はつたが、それでも御全快はござらぬかな。

左内　久しく木屋町の貸座敷へ呼んで、療治いたしたれど、思はしうもござらぬ。一體に病症が、神經病と申して、兎角兩腕兩足の筋骨を痛めまするで。

新左　然らば、腫物類でも疵もなく。

左内　たゞ筋骨を痛めての難儀。さるに依つて、御所方の名醫の申さるゝには、酉の年月日時の女の生血と、配劑の一藥を服すれば、忽ち平癒と承はれど、取り得難きこの名藥。

新左　ハテ、むづかしい藥も、あるものでござるな。

左内　どうで命は投げ出しもの。病死は武士の本意でござらぬ。

六藏　その御本意を。

ト新左衛門へ拔きかけようとする。

左内　コリヤ。

ト額で押へる。新左衛門、思ひ入れあつて

新左　六藏、何を騒ぐのぢや。

六藏　イヤサ、これは、鼠が爰へ……イヤ、爰へ、アレ〳〵

ト向うを見て

慥かにあれへ、宮川町の口入れが參ります。

新左　ナニ、井筒屋宗七が參るとな。

左內　然らば、身共は奥へ參つて、病家の內にて暫らくまどろみ。

新左　左內どの。

左內　また後刻。

ト思ひ入れあつて奥へ入る。向うより宗七、袴羽織に出て來り

宗七　新左衞門さま、さぞお待兼ねでござりませう。やう〳〵とお目見得の奉公人を、連れて參じました。

六藏　お旦那には、お待兼ね。ちつとも早く。

宗七　左樣ござりませうと存じました。

ト揚げ幕へ向ひ

サア〳〵、子供衆、行儀にして、お目見得をさつしやりませ。

ト宗七、本舞臺へ來る。誂らへの鳴り物入りの唄になり、向うより小よし、小露、喜代治、小雪、いづれも誂らへの鬘。振り袖、着流し、やの字結びの形、扇持ち出て來て、四人とも花道に坐る。

新左　苦しうない、目見得の者ども。これへ〳〵。

ト唄の切れにて、皆々本舞臺へ行く。

宮川町井筒屋宗七、口入れの御奉公人、當霜月は姫君關東への御婚禮の御供なれば、隨分大切に致したがよい。めい〳〵申し立ての諸藝と名の事は、書付けにて引合せ、先づ近付きの爲め、猶申したがよい……ハテ、美しい好い奉公人ぢやなア。

ト皆々恥かしきこなし。これより誂らへの鳴り物入りの合ひ方になつて、小よし、思ひ入れあつて

小よ　誠にわたしは不調法者。親は伏見の呉竹に、夜船の世話の船問屋、桂、木津川加茂川の、流れの三筋、三味線を、曳船綱にバラ〳〵と、宵に生ひ立つ小よしと申しまする。

小露　琴の稽古を申し立て、十三筋の糸の數、七條通りと六條の、合の町にて玉屋とて、珊瑚珠、瑪瑙を商ふ父さん、小露と申して不調法者。

喜代　お目見得せりふもだん〳〵と、順の舞子の私しは、皆人さんが美しい、月の藤間と褒められて、御

小雪　奉公も長き代の、喜代治と申す踊り子でござりまする。

四人　皷太皷を申し立て、拍子もしつたん丹波口、西の京のせかね川、鳴るは瀧の尾、銘酒屋の娘で、小雪と申しまして、それは〱粗相者。

宗七　お恥かしいお目見得を、致しまするでござりまする。

ト宗七、思ひ入れあつて

新左　さて、新左衛門さまへ、お願ひがござりまする。

宗七　そりや何事ぢや。

新左　京都は元より近在でも、姿のよい子供を、目見得させよとの仰せ付けられ、やう〱四人連れましてござりまするが、只今これへ参る道にて、在所者で美しい子供を見付けまして、様子を承はりましたが、隨分御奉公に出しまするると申しますゆゑ、これへ参るやう掛合ひましたが、この儀は如何でござりませう。

宗七　それは何より。生國さへ相糺し、其方が請け判の事なれば、在所者でも苦しうない。

それは、有り難うござります。

ト向うを見て

エヽコレ、早く連れて來ればよいが。

ト向う揚げ幕にて

八藏　オヽイ〳〵。

宗七　オヽイ〳〵。爰だ〳〵。

ト小手招きする。誂らへの馬士唄になり、おさん、好みの形、振り袖、裾をからげ、脚絆草鞋にて、馬の沓を腰へ付け、竹の鞭を持ち、後より八藏、雲助の形にて、割れた鞘の一腰に油紙包みの狀を付けて、これを持ち、おさんを連れ立ち、出て來て花道にて

八藏　なんぼ在所に育つても、女の足といふものは、埒の明かないものだ。

さん　ヤレ〳〵、こなさんはあつたら事もない。折角道中双六賣つて、沓の錢の賭け事せうと思うたに、人を呼び廻つて、連れて來さつしやれたが、どこへ行くのぢやえ。

八藏　沓掛の村で孤兒になつたおぬし、近在近鄕の世話になつて、海道の馬を追つて居ながら、尋ぬる人があると云ふゆゑ、この通り問屋の飛脚に來るから、その人に逢はしてやらうと思つて。

さん　その尋ぬる人は、桑名といふ事、近在より遠くへ行た事はないが、尋ぬる人に逢はしてやると云はしやれたから來たが、爰は禁裏樣の居さつしやる所でないかえ。

八藏　ハテ、道中双六をしても、上がる所は禁裏樣、爰へさへ來れば、尋ねる人にでも何にでも逢はれるよ。

宗七　これサ、先刻にから大抵のお待兼ね。早く連れて來さつしやれ。

八藏　ハイ〳〵〳〵。

ト唄の切れにて八藏、おさん、本舞臺へ來て立ちはだかり、そこらを見廻す。

宗七　これはしたり、立ちはだかつて、下に居ぬか。

八藏　それ〳〵、行儀に手を突いて、お辭儀をするのだ。

ト大きな聲で云ふ。おさん、悧りして

さん　アイ〳〵。

ト下に居て、不調法に辭儀をする。

四人　そんなら、あの子が御奉公人かえ。

新左　イカサマ、生地の儘にても美しい生れ。

宗七　これは井筒屋宗七が、自慢で約束いたしました。

新左　假親を致し、御所の方へ奉公まゝある事。聞けば伊勢道中にて、女の身で馬追うて居たと申すの

か。

八藏　左様でございまする。どうぞお屋敷方へ御奉公に上がれば、此奴が仕合せでございまする。

さん　アノ、わしやお屋敷とやらへ、奉公をしまするのかえ。

新左　奉公も奉公、お大名のお姫様、花の江戸への御婚禮、そのお供にて行くのぢやわやい。

さん　それでは尋ねる

八藏　ハテ、その御奉公に上がれば、尋ねる人にも逢はれる。

　　トおさん、嬉しきこなし。

さん　さういふ事なら、御奉公が、したいな〳〵。

八藏　どれも〳〵、綺麗なお目見得の御奉公人。美しいのは在郷の馬士。ソレ、お旦那へお願ひ。

さん　わしは伊勢の道中筋、育てゝくれた乳母は、久しう痰の煩らひで、鳥羽の祭りの餅が咽喉へ詰まつて死なれて、悲しやわし一人。それから近所近在の衆の世話になつて、宿々での馬追ひ。尋ねる人があつたゆゑ、桑名の方へ

　　ト云はうとする。

八藏　アヽ、コレ〳〵、そんな事を云はずに、有り難いお姫様へ、御奉公いたしませうと、申し上げる

のサ。

さん　それぢやというて、嘘ぢやなし。

新左　さうして、どうぢや。

さん　それから、八藏どのがわしを連れて、京都とやらへ來ました。尋ねる人に逢はれる事なら、早う御奉公がしたうござります。

　　トそこらを見廻し

在所と違うて、蓆でなうてこの疊、辷つて歩き憎いやうで、どうして見ても、わしは在所へ戻りとうござる。

宗七　コレ、滅相な。この目見得に歸つてなるものか。

　　ト行かうとする。

八藏　アレ、御家老さまがお叱りなさるぞ。

　　トおさん、思ひ入れ。

新左　ハテ、左樣に申さぬがよい。して、名は何と云ふぞ。

さん　自然生のおさんと云ひます。

新左　ハテ、變つた名ぢやな。
六藏　自然生にしては美しいもの。どうやら鰻になり變つて居さうだ。
さん　さうして、お屋敷の御奉公といふは、どんな事をするのぢやえ。
新左　先づ姫君樣の御前勤めは、隨分大事な行儀作法。
小よ　わたしどもの、親達の云ひ付けには、御祝儀式日は猶の事、兎角平常も小笠原。
さん　小笠原とわえ。
喜代　諸禮も知らいで、奉公とは厚かましい。
さん　知れたわえ。蓬の見える京の事かえ。
六藏　ハテ、怪しからぬ。そりやァ蓬の生える蓬原。
八藏　困つたものだ。お里を現はすわえ。
新左　ハテ、お夜詰めのお伽が肝心。
さん　そりや、夜なべの事かえ。
新左　先づ、下々では左樣なもの。
さん　夜なべなら、在所で得手物、糸を取つたり藁打つて

ト腰の沓を出して

沓や草鞋を作る仕事。

ト足を投げ出し、仕方して

マア、莨のみな。斯うやりませう。

ト頭に挿して居る煙管を出し、摺火打ちにて莨をのむ。八藏、氣の毒がり

八藏　これはどうしたものだ。

喜代　皆さん、アレ御覧じ。

ト笑ふ。皆々思ひ入れ。

新左　イヤ〳〵、姫君様のお伽には

小雪　琴、三味線に小鼓太鼓。

喜代　踊りにかけてはお好み次第。

さん　踊りは在所の伊勢音頭、さうして琴や三味線を

小よ　彈くが銘々御奉公。

さん　彈くと云うては、麥秋時から、臼ひくより余の事は

六藏　知らぬと云つては御奉公が。
新左　イヽヤ、大事ない。そこがお上は寛仁大度。在所育ちも御一興。
六藏　ハテ、旦那には、在鄕ッ子の御贔屓だな。
小よ　時に依つては皆打寄り、お姬樣もお交り遊ばして
新左　いつも萬松歌がるた。
さん　歌がるたとわえ。
小露　ハテ、百人首の上の句と、下の句の歌を合はすのぢやわえ。
喜代　知らしやんせぬかえ。
さん　歌と云うては、道中の長持唄か、馬士唄か、それより外に知らぬ在所の里育ち。
六藏　おれでも知つて居る。秋の田の苅穗の庵で育つては、こんな所であたまかく山。
喜代　イエ〳〵、さうでもござんせぬ。その馬士唄がお姬樣には、お慰み。ナア、申し。
新左　イカサマ、喜代治が申す事尤も。
喜代　サア、おさんさん、お唄ひなさんせ。
さん　アノ、馬士唄をかいな。

ト恥かしきこなし。

喜代　恥かしがらずと、お唄ひな。

六藏　何も御奉公、お姫様のお慰みとあれば、この手拭を貸してやるから、斯う鉢卷をして。

トおさんを前へ連れて行き、鉢卷をして

サア、唄はつしやいな〳〵。

さん　アイ。

八藏　いつものやうに、やるがいゝ。

喜代　早うお唄ひ。

さん　アイ。

六藏　サア〳〵、やらんせ〳〵。

ト思ひ入れあつて、振り袖を手綱のやうに振り、下座にて

〽坂は照る〳〵ナ、サア鈴鹿は曇るナアエ、相の土山雨が降るナアエ。

トおさん、これにて馬士のこなしあり

丁度折よく、座敷で馬士唄。

兩人　こりやア、面白かつた。聞き事でござりました。ハヽヽヽ。

ト笑ふ。おさん、ハツと俯向き、ヂツとなる。新左衛門思ひ入れ。

〽花も雪も拂へば清き袂かな。

トこの上方唄の「雪」にて、向うより義兵衛、付け合羽、手甲、股引、一本差しにて、三度笠を持ち出て來て

義兵　丹波の御家中、重の井新左衛門さまには、祇園町の扇九に御滯留と承りましたれば、宿へも到着仕りませず、直さまこれへ參りましてござります。

新左　オヽ、其方は、桑名の請負ひ、山形屋義兵衛、御婚禮の御用、道中一式の儀につき、上京いたしたか。大儀々々。

トおさんこれを聞いて

さん　ナニ、山形屋の義兵衛さんとや……ヤアヽ。

ト恟りして義兵衛と顏見合せる。

義兵　イヤ、わしは存じませぬぞ。

さん　でも、尋ねて居た

〽我が待つ人も我れを待ちけん、鴛鴦の衾に物思ひ羽の。

ト此の唄にておさん、義兵衛の側へ行かうとして、合點のゆかぬこなし。義兵衛、云うては惡いと云ふこなしにて、本舞臺へ來る。

四人 餘所の座敷で、唄はしやんすは、ありや「雪」といふ端唄。

六藏 山形屋には、いま來たこの在所のおさんと。

八藏 山形屋といふは、顏は知らねど、アノ桑名の

義兵 義兵衛でござりまする。

ト莨のんで居る。おさん、思ひ入れあつて

さん 知らぬとは、あんまりな。コレイナア。

ト氣を揉む。八藏、これを覺り

八藏 ハテ、桑名といふからは……そんなら、おぬしが尋ねる人は

さん 慥かにあのお人。

義兵 なんぼ慥かでも、此方にとんと覺えはないぞ。

六藏 エヽ、聞えた。例へ義兵衛どのが覺えあつても、お出入りのお屋敷の、御家老さまの前で、あの

子が
さん　いつぞや、沓掛の此方の内へ。
八藏　そんなら、その時。こいつは巧いわえ。
新左　イヤ、奉公人のおさんは、山形屋の義兵衛と、知る人でないとも申されまい。おさんは伊勢海道にて育つと申し、山形屋は道中の下り上り、中食又は小休みの、疲れを晴らす莨の床几、見知り越しにも。
義兵　そんなら、あの子を。
ト云はうとして、新左衛門へ思ひ入れ。
成る程、さう仰しやれば
さん　知つてとも〳〵。大抵のお近付きで
義兵　アヽコレ、ほんの通りすがりの近付きなれど、心にかゝればおれも忘れぬから、この上りにも沓掛へ寄つて見ると、聞けば鳥羽の祭りのその日に、久しく煩らうて居た阿母は死なれ、息子は無く、貰ひ娘は一人で、是非なくも近所近在の者の世話になつて、あそこの宿屋、爰の馬繋ぎに居られませうと、所の衆の話しにて、聞いたばかりに、いま思はず

トおさん思ひ入れ、

ア、、思ひ出せば

さん　いつぞやの

義兵　その夜の事を

さん　それに、置いて行かしやれた道中付けを

義兵　サア、道中はわしが商賣、商賣往來なら碌に習ひませぬが、往來商賣なら習はうより馴れて、やつたやうぢやァござりませぬ。

小よ　首尾ようお目見得も濟みまして、お姫様のお供にて、江戸へ行くわたし等なれば

四人　東海道の事を、聞かうと思うて。

新左　こりや好い心懸け。尤もな事ぢや。

義兵　それはハヤ、道中五十三驛の名所舊跡、或ひは名物、落ち付く所は名にしおふ、花のお江戸は京優り、淺草上野の花盛り、葺屋町の芝居の思ひ入れ、それまでの道中の面白い事。富士の山は天まで届くと、子供も知つた名山。それから箱根小田原、外郎賣りの功能を、云つてお聞かせ申したいものだな。

四人　さう聞いては、早う江戸へ行きたいやうで、待兼ねまするわいなア。

トおさん思ひ入れあつて

さん　お前方は、其やうに云うてゞも、わしや江戸も吾妻へも否ぢやわえ。

四人　そりや、なぜにいな。

八藏　これはしたり、御奉公をお約束申して、今更否だと云つて通るものだ。それぢやァ肝心の

ト金にならぬと云ふこなしにて慌てる。

新左　奉公と云へば、苦勞にも思はうなれど、其方とは變らぬ年恰好のお姫樣、そのお相手を致し、内も金襖の結構な所に居て、物事自由に遊び事。御奉公といふは、ほんの名ばかり。

さん　わしや、御奉公も構やせぬ。尋ねる人に逢うて、こんな嬉しい事があらうか。江戸へは否ぢや、義兵衞さん。

義兵　エヽ、聞えた。この子が江戸へ否と云つたは、道中筋で、なんとやらいふ唄。

ト行かうとする。義兵衞、思ひ入れあつて

八藏　山も見えざる假初めに、江戸三界へ行かんして、いつ戻らんす事ぢややら。

義兵　その唄〳〵。それでは否がるのも尤も。こなさん御奉公には勝手にさつしやるがいゝが、この山

形屋義兵衛は、お姫様のお供で、御奉公人衆も、みんな一緒に江戸へ行くのサ。
ト義兵衛、おさんに呑み込ませろ、おさん、思ひ入れあつて
さん　そんなら、アノ。
ト嬉しきこなし。
八藏　江戸ほど面白い所が、どこにあるものか。
さん　その面白い吾妻とは知らなんだ。
四人　そんなら、江戸へ行かしやんすかえ。
さん　行かいでわいな。
新左　すりや、得心いたして、江戸表へ参るか。それで身共も、安堵いたした。
四人　義兵衛さん、道中の話しを聞かせなさんせ。
義兵　おれが道中の話しせうより
八藏　幸ひ〳〵、おさんが打つて居たこの道中双六。
ト懐より出す。
四人　ドレ〳〵、爰へお見せなされ。

トおさん、双六を廣げる。皆々これを見て

小雪　こりや、江戸から上りの双六。

義兵　京の方から逆さまに、見て行くと同じ事。

喜代　幸ひ中に、この賽の目、これを振りながら、詳しう敎へてもらはうかえ。

小露　賽は櫻木、花の都を眞中に、思ひ〳〵の印を置いて。

小よ　わたしは短いこの簪。

ト印に置く。

小雪　楊枝差しでもようござんせうな。

ト懐より出す。

小露　琴爪を印にせうかえ。

ト懐より箱入りの琴爪を出す。

喜代　わたしには、その箱を貸して下されまし。これを印に。

ト双六へ載せて

おさんさん、お前も何ぞ印をお出し。

ト おさん思ひ入れあつて

さん　わしは、印に置く物がないもせぬものを。

四人　それでも、賽を振らぬと、江戸へ行かれぬぞえ。何ぞ印を。

さん　よい物があるわえ。コレ〳〵、爰に。

ト首に掛けたる守り袋より、以前の印籠の片しを出し、双六に置く。

小露　おさんさんは、その印籠を

さん　印に置いて、早う江戸へ。

ト義兵衞、思ひ入れ。

義兵　アヽ、コレ〳〵。

八藏　それこそ、五十三驛を、居ながら歩む膝栗毛。

トこれより誂らへの合ひ方になり、女形五人、双六を打つ思ひ入れあつて、小露、賽を取つて

小露　南無諸佛佛身。

ト拜むこなしあつて、賽を投げ、印を數へる。

小雪　わしは此方から打出の濱。

ト賽を投げ

オヤ〳〵、一つを振りました。これでは大津へ三里。

ト印を數へる。

八藏　誰れも道中する身で、例へ關の清水も走り井でも、心に任せぬ賽の目次第。

新左　イカサマ、加茂川の水、賽の目と、譬へ言あつたも御尤も。

喜代　そこで、矢走の船賃が

八藏　サア、石場まで乘らつしやい。

喜代　お錢を出すのかえ。

ト小よし、賽を取つて

小よ　出船召せ〳〵、旅人の乘り遲れじと

八藏　とつさ草津へ。

ト賽を投げ

小よ　わたしは二つで。

ト印を數へる。

喜代　お姫様より先づ姥ケ餅、一口二口水口、鰌踊りかえ。

ト賽を投げる。

小露　喜代治さんの、さもしい事を。

喜代　六つを振つて、坂へ越すにも賽次第。

八藏　爰等が、おさんが馬を追つた宿だ。

トおさん、義兵衞に見惚れ

さん　坂の下からソレ、沓掛に泊らしやんした、嬉しい夜さに、それから後は。

ト顏見合せ

喜代　コレサ、おさんさん、何をウカ〳〵と。早う振りなさんせ。

トおさん賽を取つて

さん　振るや鈴鹿を跡へ下れば、負けまいと、關に關より龜山に。

ト賽を抛る。

喜代　其やうに一時には行かれぬわいな。

義兵　莨の火打ち、石藥師、ドリヤ一服たべませうか。

ト莨のんで居る。此うち新左衛門、双六の側へ來て、これを見て

新左　その面白い五十三驛を、お姫様のお供とはいひながら

四人　樂しみにして居りますわいな。

ト新左衛門、思ひ入れあつて

新左　見れば双六の印に、印籠のやうな物がある。

さん　アイ、こりやわしがのでござります。

ト取つて見せる。新左衛門、恟りして

新左　こりや、覺えある、雪折れ笹の蒔繪の印籠。その片割れか。そんなら

トおさんを見て、キツと思ひ入れ。おさんも驚ろき

さん　印籠がどうしましたえ。

新左　して、其方は、年は幾つだ。

さん　十六でござりまする。

新左　アノ十六。

ト指にて繰つて見て、思ひ入れある。

さん　疑はつしやりますなら、守り袋に臍の緒の書付けがあります。

新左　ドレ。

　　　トおさん、懐より守り袋を出す。新左衛門、取つて開き見て

丹波の家中、伊達新左衛門娘さん、酉の年の年月日時の誕生。そんなら我が子の

　　　ト云はうとして

ヤヽ。

　　　ト大きに恟りする。ト義兵衛キツと思ひ入れ。

さん　嘘ではありますまいがな。

　　　ト新左衛門、また思ひ入れあつて

新左　酉の年、年月日時の女の生血は。ヤア

　　　ト奥の方へ思ひ入れあつて

それでは娘の

　　　トおさんを引廻し、ヂツと顔を見て

成る程十六、よう成人したなア。

ト新左衛門、ホロリとする。

喜代　十六振るには、六つを二度と、四つを振らねば。

〽落つる泪の氷柱より

新左　思へば我が子の……これが浮世か。

〽つらき命の惜しからねども。

ト新左衛門、思ひ入れ。

喜代　双六をお振りなさんせ。

さん　八蔵さんのお庇で、尋ねる

八蔵　ヤ。

ト思ひ入れ。

〽戀しき人は罪深く、思はぬ事の悲しさに。

ト唄にて、おさん、ツカツカと義兵衛の方へ行かうとして、以前の状を挾んだ駄賃帳と金を落す。八藏、取つて

こりや、駄賃帳と金。

義兵　ヤ。

ト思ひ入れ。

さん　アイ、それは。

ト金と帳を引ッたくろ。

八藏　そんなら、どうでも。

新左　戀の重荷の。

さん　アイ、駄賃帳。

ト金と帳を出しながら、義兵衞に抱き付く。

義兵　ほんに忘れた。

ト思ひ入れ。新左衞門、扇子にて顔を隱す。八藏「ハヽア」とこなし。この途端、よろしく拍子引返し。踊り地のツナギ。

幕

本舞臺、三間の間、高足二重舞臺の本縁側付き。見附け霞襖、上の方小高き中二階。一面に大和葺き、塗り骨障子立てあり、この屋體に白洲梯子掛けてあり、縁側の際に振りよき松の木、釣り燈籠に

火灯し、手水鉢、下の方に南天の木。いつもの所に枝折り戸、平舞臺眞中に八藏、銚子杯、鉢へ蛸の足を入れたるを直し、側に以前の割り鞘の一腰を置き、酒を飲んで居る。踊り地にて幕明く。

八藏 手を出して足を戴く蛸肴、忠臣藏時分には、祇園町の硯蓋が蛸肴、今はおいらがやうなお供客へ蛸の櫻煮。錢出さずに酒を戴く蛸肴。ハヽヽヽ。

ト酒を飲みながら

いつぞや、坂の下で見受けたは、慥か古主鷺坂さまの御同勢。その時拾つた一腰、これを賣付けて、坂の下の人殺しは、刀の主と訴人して、褒美の金と思ひの外、どいつもこいつも買はないが、どこぞへ押し付け、金にしてえものだが、金と云へば、あのおさん、此奴も屋敷へ奉公人。どうで金になる仕事。それにつき、問屋場へ來たこの手紙、左内さまにお目にかゝつて、お渡し申したいものだが。

トまた酒を飲んで居る。大小入り、上方の毬唄になつて、向うより與作、着付け羽織にて更紗の風呂敷を持ち、出て來て

與作 鷺坂左内さまの乳母は、この與作の爲には母親。さすれば乳兄弟の遁がれぬ古主。江戸發足のお役目なれど、御病氣にて御用を足しながら出養生。江戸のお下り、晴れの大小をお好みあるが、

拵らへが揃はいで、中立賣まで行てくるうち、もう日が暮れた。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。其うち八藏、酒を飲んで居眠る。

どうぞお屋敷の衆に、お目にかゝりたいものだが。

ト枝折り門より内を覗く。誂らへの合ひ方。鵯二羽、下の方の南天へ來て舞うて枝にとまる。實を喰ひこぼす。南天の實は、パラ〳〵と落ちて八藏の置いたる割り鞘より刃金出て居る、一腰へ當つて切れる。これを見て與作、恟りして

ハテ、合點のゆかぬ。いま庭先へ囀づる鵯、啄ばむ餌に南天の實を、パラ〳〵落して、あの割り鞘の刀に當れば、自然と切れる南天の實。ムウ。

ト思ひ入れ。八藏ソツと目を明き窺ふ。與作、八藏に心を附ける。八藏また眠る。

小豆長光の名作もこの通り。それにも優る南天の實の切れたは不思議。

ト見詰めて居る。八藏、わざとウンと鼾をかき寝返り

八藏　なんだ〳〵。おれを呼ぶのはどいつだ、用がある。

ト起き上がり

轉寢で居るものを、なんの用だ、なんだ〳〵。

ト一腰へ思ひ入れして下座へ入る。與作、内へ入り

與作 アヽ、コレ〳〵、この一腰は、こなさんのぢやアねえか。コレサ、持つて行かねえか。

ト呼び廻つて

ありやア、慥か、左内さまに奉公して居た八藏。彼奴がのでもないさうだ。誰れが置いて行つたか。なんでも名作。

ト釣り燈籠の際へ行き、一腰を拔いて刃金を見て

誠に燒刃といひ、鍛へといひ、この金色、中心の名は。

ト煙管にて目釘を拔き、銘を見て

關の孫六入道備中守。

ト一腰を見て

成る程、關の孫六は上手だな。

トこの時、障子屋體の内にて

小萬 もう飲めぬ〳〵。堪忍しておくれ。

トこれにて與作、一腰を持ち、ヅイと奥へ入る。小萬、障子を明け

ひどう醉うたぞ〳〵。

ト云ひ〳〵、中二階の梯子より下りて庭下駄を穿き、手水鉢にて手水を使ひ、水を飲み、あたりを窺ひ

丁度今日が御命日。

ト上の方の四つ目垣の秋草を取つて、懐より戒名を出し

冷秋院劍譽榮昌居士、また俗名逸平さま、藤浪さま、さぞ御無念でござりませう。やがて敵を討ちおほせ、お手向け申すでござります。南無阿彌陀佛々々々々々々。ほんに浮世にこの身ほど、便りない身があらうか。兩親にお別れ申し、御主人與三兵衞さまも劍難にての御最期。また兄さんは坂の下にて、お討たれなされたと樣子を聞いて、その悲しさ辛さ。切ない苦界も可愛い男に逢ひたいと、そればつかりを勤めの樂しみ。それに引替へこの身には、逢ひたい見たい敵の顏。アヽ、どうぞ好い手懸りが、ありさうなものぢやがなア。

ト小萬、思ひ入れ。この時、奧にて人音する。これに悧りして、わざと醉ひたるこなしにて、莨盆を枕にして寢轉ぶ。大小入り見立ての合ひ方になり

大勢　遲いと酒を飲ますぞえ。下へ下りたか下へか。

ト これにて奥より與作、出て來て

與作 源吾さまにお目にかゝらうと思つたが、なんだが酒で大騷ぎだ。

ト小萬を見て

オヽ、流石酒で大關の名を取つた關の小萬も、餘ツぽど利いたと見えるわえ。コレ、轉寢をして風でも引かうぞえ。さうして、莨盆を枕にして、頭痛がせうぞえ。

ト搖り起す。小萬、寢た振りをして居る。

ドレ〳〵、肝心の商賣を忘れて居た。

ト風呂敷包みより、鞘の箱、目貫、縁頭、箱入りの小道具を出して

あのお好みでは、目貫の獅子に黒糸柄、鍔は赤銅、牡丹の毛彫り、獅子に牡丹は。

ト奥にて

○ どでごんす。

大勢 こりや、又、えらいえらい趣向ぢやゝ

與作 おきやァがれ。奥座敷の三味線に乘つて、獅子に牡丹はどでごんすと、心を浮かす三味線だ。

トこの時、小萬、寢返りする。裾まくれて、しだらなき模樣。與作、フツと見て

人を浮かすと云へば、どうやらおれも浮かれさうだ。

ト矢張り見立の合ひ方にて、與作、ソツと小萬に思ひ入れ。この時、また奥にて

○ ちよつくらちよつと、これを斯うやつて忠臣藏の七段目。

與作 アレ、舟玉さまが

ト小萬思ひ入れ、夢中にて裾を押へる。また奥にて

○ ア、どでごんす。

ト大きな聲にて云ふ。與作、悑りする。

大勢 こりや又、えらいえら趣向ぢや。

與作 エヽ、悑りさせるわい。

ト思ひ入れあつて、小萬に抱きつかうとする。小萬、目を覺まし

小萬 誰れぢやと思うたら、丹波屋の與作さん。人がよう寢て居るものを、惡い事ばつかりして。

與作 サア、こりやア何よ。おぬしが他愛なくそこに寢て居るから

小萬 それで抱き付いたのかえ。

ト與作思ひ入れありて、また見立の合ひ方になり

與作　色事なんぞはどでごんす。

ト寄らうとする。

小萬　エヽ、何事ぢやぞいなア。お前も早く歸らしやんせ。

與作　おれも早く歸りてえが、此方にござる丹波の家中衆、その拵らへの用で此やうに、小道具を持つて來て居る。

ト箱入りの小道具を見せる。常の合ひ方。

小萬　丹波の家中衆と云へば、あの鷺坂さまには、お前、きつう御懇ろになさんすなア。

與作　知れた事、あの鷺坂さまはおれが古主。それで大事のお人だ。

小萬　怖らしい顏で、人でも殺し、敵持ちと云ふやうなお方ぢやぞえ。

與作　左內さまは、高麗屋のやうな顏でも、ありやア持前サ。

小萬　さうして、あの御病氣わえ。

與作　兎角、筋骨を痛める病ださうだが、病氣の名は知らねえ。

小萬　イエ〳〵、さうではござんすまい。

ト思ひ入れ。

どこぞに疵でもあつて、痛むといふやうな事が。
與作　そんな事は知らねえと云ふのに。
小萬　イエ〳〵。聞かして下さんせ〳〵。
ト與作を撲ぐる。
與作　何を馬鹿々々しい。そんな事を聞きたがる。何の役にも立たぬ事だ。
小萬　サア、聞いて役に立たぬ事でも、云はしやんせぬ程聞きたいもの。聞きかけて聞かぬと、氣にかかるわいな。
ト與作、思ひ入れあつて
與作　そんなら、何がなんでも、人が物を云ひかけて、返事のないのは氣にかゝるものか。
小萬　いつそ惡いものぢやわいな。
與作　小萬さん、そんならいつぞや、中梯子の上がり口で云つた返事は、どうしてくれる。
小萬　エ。
ト思ひ入れ。
與作　ソレ、階子段で銚子を持つて上がる所を、後からてんがうしたれば、エヽ與作さん何をさんすと

振向く拍子に、挿して居た櫛を落して割つた時、腹を立つて〳〵、折角誂らへて、やうやく昨日小間物屋が持つて來た櫛、惡い冗談ばつかりしてと小言を云ふゆゑ、おれが惡かつたと、あやまつたれば、イエ〳〵此やうな恰好にはもう出來ぬ、斯う云ふ水色の甲はないと、それから何を云つても、ピン〳〵として、おれが云ふ事は聞いてくれないから、その氣懸りといふものは、大抵の事、嘘ぢやない。どこかの人の事を、ウツラ〳〵と思つて、これ此やうに得意先を持つて歩く

ト小道具の箱を取つて

鍔を見ても緣頭でも、お前の顏。鮫をいぢつて、いつそお前がこの鮫肌なら、思ひ切りやうもあらうが、蠟色の鞘の肌のよい、手觸りと思へば思ひ出し、忘れてしまはうと思ふ程、目に付いて目貫の龍や獅子までが、可愛らしう見えるやつサ。今日は是非〳〵否應なしに、承知してもらはにやアならない。大誓文だ。コレ、拜む〳〵。

ト抱きつくを、小萬、振り放し

小萬　その大誓文は、餘所へ行て云はしやんせ。獨り身のお前、誰れが今まで捨てゝ置くもので。死ね殺せと云ひ交し、與作女房と彫り物をして居やせうがな。

與作　彫り物と云つちやア、宗味名を改め後藤十三代、商賣物で望み次第、爰に瓢簞に小萬と云ふ、祐

乘の彫り物もあるが。

ト目貫を出す。

小萬　措きなさんせ、そりや瓢箪に駒ぢやわえ。

與作　ほんに小萬ぢやァなかつたか。薄鈍な彫り物をした色事は、夫婦になつたは少ないものよ。

小萬　其やうに立派に云はしやんすと、わたしが改めるぞえ。

與作　どうともしなさい。其方からお改めがなくつても、此方から出して見せるのだ。まんざら三ツ星に一の字も彫つちやァないよ。

ト兩腕を捲つて見せる。小萬、捨ぜりふにて改め見る。この時、左の肩先の疵をとつくり見て

小萬　この疵は、こりやどうしたのぢやえ。

與作　その疵は、いつぞや關の宿で、女の子の馬士が、醫者樣の脇差を取つて、そこに居た爺樣と爭つて、葭簾越しに立場に居た、おれが肩先へ當つての疵。相手が女の子なれば、せう事なしに料簡してしまつたが、その時の肩の疵。

小萬　そんなら、關の宿で、怪我で付けた疵かえ。それに違ひないかえ。

與作　なに、嘘を云ふものだ。それよりは彫り物の詮議が濟んだら、もう承知であらうぞえ〳〵。

ト小萬の帶を解きにかゝるを留めて

小萬　コレイナア、人が來ると惡い。さうして、ひよつと白鳥さんに見られてはならぬわいな。放さんせ放さんせ。

與作　なんだ、白鳥さんと云ふからは、アノ左内さまが

小萬　わたしに惚れて、口説いて居やしやんすが、お前の古主白鳥さんでは、わたしを抱いては寢られまいがえ。

ト與作、思ひ入れあつて

與作　よもや、左内さまが小萬に心を。ハテ、古主でもそこが色事。大事ない。おぬしゆゑなら命でも捨てる心。

ト小萬、與作をヂツと見て

小萬　モシ、與作さん、命を捨てると云はしやんすが、そりや大事の詞。わたしゆゑなら、アノ命も

ト與作へ凭れる。

與作　捨てないで、どうするものだ。

ト同じく寄り添ふ。

小萬　成る程、意氣張りで、命づくにもなるは色事。それ ばかりでもござんせぬ。今にもわたしが身の上に、大事の出來たその時は、お前、命を捨てゝ下さんすか。

與作　知れた事。命は捨て物。殊に商賣が刀屋。武士なら魂ひと云ふが、幾腰もある。マア、爰に一腰。

ト以前の一腰を出す。

小萬　そんならお前は。

與作　云はずと早く、刀屋冥利、この拔き身で。

ト死なうとする。

小萬　待たしやんせ。心底見えた。

與作　ヤ。

小萬　お前の女房。

與作　そんなら眞實

小萬　夫婦の約束した上は

與作　敵の助太刀。

小萬　エヽなんと。

ト悃りする。

與作　冷秋院劍譽榮昌居士。

小萬　そんなら先刻の

與作　囘向の戒名。

小萬　すりや、殘らず樣子を

與作　聞いたる上は

小萬　いよ〳〵夫婦。

ト與作に取り付く。

與作　エヽ、忝ない。

ト喜び、思ひ入れあつて

して、敵討の武術の手練は。

小萬　サア、十七の春まで、勢州關の宿の御領主、關のお家へ御奉公。女子の身にも武藝とやら、武家の勤めをするからは、少しは知つて居るわいな。

與作　イヽヤ、今では三味線の、どうして勝負、手の狂ひ、覺束ないわえ。
小萬　例へ手元は狂ふとも、女の一心、見事討つて見せませうが、敵はどこに忍んで居るやら。
與作　知らぬ事とて、現在主人の
小萬　エ。
與作　サア、主人の敵を家來の身で、討つも繋がる三世の緣。
小萬　二世の緣を今日の今、結ぶ仲居が前垂れの、紐から帶から下締めまで
與作　たうとう、解かせたその代り、外の女は御緣切り。
小萬　アノ、嘘ばつかり、仇な癖。
與作　疑ひ深い。庭の草露、光る多くの目を、忍んで臺子の三疊で。
小萬　きつい急込み、アタ好かん。
與作　そんなら奥の四疊半。
小萬　風呂先屛風サラ〳〵と。
與作　寢轉ぶ枕は、ツイ莨。
小萬　盆と正月一時に

與作　日頃の思ひを
小萬　首尾が肝心。
與作　叶ふは抱かれて
小萬　寢るのが願ひ。
與作　どうやらそれまで
小萬　待つて居るぞえ。
ト唄になり、小萬、思ひ入れあつて奥へ入る。與作殘り
與作　おれもこれで、心は晴れたが、外に苦勞が降つて來たわい。
ト此うち引違へて八藏出て
八藏　人殺しの丹波屋與作。そこ動くな。
與作　ヤ、なんと……こなたは以前、左内さまに奉公した
八藏　今では干糠の八藏といふ、雲助になつて居るのサ。
與作　して、この與作を人殺しとは。
八藏　その一腰が慥かな證據。

與作 ヤヽ、なんと。

ト合ひ方になり

八藏 いつぞや勢州坂の下に、一人ならず三人四人、ヅタヽヽ殺しに鐵砲で、打たれた男は二合半、側に落ちたはその一腰、關の孫六藤原の淸宣と云ふ、刀の銘が慥かな證據。それを持つて居ることなたこそ、その人殺しに違ひない。

與作 すりや、この刀を持つたばつかり。

八藏 それだに依つて、繩ぶつて詮議するのだ。覺悟さつしやい。

ト與作を引立てる。立廻り

與作 この刀は、先刻思はず拾ひ取り、この身に覺えなけれども

八藏 でも、人殺しの證據の一腰。

與作 小萬はおれが男づく。一旦命と誓つた一腰。今さら與作が刀で無いとも云はれまい……シタガ、扇九のこの庭で、拾つた一腰。主は知らぬが、二十兩に買ひたいものだが。

八藏 賣つてやらう。金が欲しい。

與作 すりや、この刀を買ひ取つた

八藏　金も奴がしてやるのだ……どうでこなたの人殺し、詮議をするのも訴人して、褒美の金にする積り。出したなら濟まさう。

與作　アノ、金で訴人を

八藏　免してやるのサ。

與作　如何にも合點、金渡さうが、爰にはない。二條通りの御幸町、丹波屋與作と尋ねて來やれ。

八藏　男と男が番つた詞、よもや違ひはありさうもない。

ト與作、思ひ入れあつて

與作　以前こなたの、主人といふは鷺坂さま、與作が爲にも古主なれば、云はゞ朋輩。それに人殺しの難題かけ、金にせうとは、ハハア、頼もしい。

八藏　以前のよしみもあらうと思はうが、その時分から犬と猿。

與作　成る程、此方は正直一遍。

八藏　おいらは横に惡黨もの。

與作　元よりそれも合點なれど

八藏　この一腰の主ではないか。

與作　イヽヤ、命と誓つたなれば
八藏　アノ、仲居にやァ
與作　そこが男の
八藏　詞を忘れず。
與作　キツと金をば……渡してやらう。
　ト唄になり、與作、一腰を持ち、奥へ入る。八藏、後を見送り
八藏　やう／＼の事で、仲の悪い丹波屋の與作に、あの一腰を授けて、その金が貳十兩。又おさんが給金も取らにやァならないが、早く片を附けてもらひたいもの。と云やァ場送りの鎌倉の狀は、右馬之助さまから左内さまへ上げて、あれを手柄に以前の詫びをしてもらふ筈。なんでも早く、左内さまにお目にかゝりたいものだが。
　トこの時、奥にてバタ／＼と人音する。八藏、恟りして下座へ入る。大小入りの唄にて、奥より六藏
六藏　御免なされませ／＼。
新左　うぬ、不屈き者めが。
　ト六藏、逃げて出るを、新左衞門、尺八を振り上げ追ひ駈け出て來て、立廻りにて

又しても〳〵、主人たる身共を害さんとの不屆き至極。

六藏　イエ〳〵、勿體ない。どうしてお主さまに、左樣な事を。

新左　云ひ譯聞かぬぞ。

トまた唄にて新左衞門、六藏を追ひかける。此うち小萬、奧より煙管莨盆を持ち、矢張り醉ひたるこなしにて出て來て、この立廻りの中へ入る。引退けて小萬、新左衞門を煙管にて程よく留める。六藏手を突き

六藏　モシ〳〵、御免なされて下さりませ〳〵。小萬さん、お留め申して下され〳〵。

新左　打ち捨てる奴なれども、刀の穢れ。おのれ、何者にか頼まれたであらう。それ吐かせ。申さぬか。

六藏　イエ〳〵、只今のは、あれはツイ鞘走つたのでござります。

新左　まだ〳〵、矢ッ張り。

小萬　ハテ、ようござんす。六藏さんが謝まつてぢやないかいな。もう堪忍して。

〽ひやうらい上の丁、下の丁、どつと褒めてどうした。

トこれにて拍子とる。六藏、思ひ入れあつて

六藏　その間に此方は。

ト枝折り門の外へ逃げ出す。小萬、新左衞門を留めて

小萬　モシ、大人氣ない。捨てゝ置きなんせいなア。

新左　ヤ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、此うち六藏、向うへ行かうとして、枝折り門の柴垣へ忍ぶ。新左衞門、思ひ入れあつて

小萬、今の一言、女に似合はぬ頼もしい。

小萬　頼もしいとわえ。

新左　ハテ、身共の家來が不屆きあるゆゑ、有り合ふ尺八にて、折檻と思ふを留めて、大人氣ない捨て置けとは、頼もしい。

小萬　そんなら、わたしが様子も知らずに、醉うた儘の出鱈目に、大人氣ない捨て置きなんせと、云うたのは。

新左　例へ口から出次第でも、心に頼みのある女。大事を遂ぐる魂ひ。して又、關の小萬といふ事は、どういふ譯か、因縁を。

小萬　なんでマア、因縁などあらう。關の小萬といふ譯は、小さい時から勢州の、關の御領主様に勤め

たといひ、それから又同じ宿に、おじやれして居て、宿の小萬、兄さんが奴奉公して居たゆゑ、奴の小萬と云はれたが、祇園町に仲居して居て、酒の大關横綱と云はれて、矢ッ張り關の小萬。

新左　ヤヽ、それで關といふ異名ぢやな……イヤ〳〵、酒ばかりではあるまい。定めて刀も大關の

ト小萬の手をグッと捕へる。小萬、恂りして

小萬　惡い事なさんすな。お前さんは格別、餘ッほど手のある

ト云ひながら振り拂ひ、新左衞門の左の手の先を捕へる。新左衞門、それなりに

新左　こりや、どうするのぢや。

小萬　引手にかけて、肩透かし。

ト新左衞門の左の肩先を捕へようとするを振り拂ふ。

新左　こりや、柔術の小手返し。

小萬　お屋敷樣といふものは、怖いものでござんすなァ。

新左　全體、丹波は武勇の國、劍術、柔術の流行る所。其方が仕掛けし今の一手は、慥かに拙えて。

小萬　イエ、ありや按摩でござります。

新左　ヤ。

小萬　關の宿は、東海道での、按摩が名代でツイ
ト思ひ入れあり
新左　療治もよからう。
ト小萬、思ひ入れあつて
小萬　承れば、丹波の御家中、伊達新左衛門さまといふお方が、實の親御の與三兵衛さまを、四條河原でやみ〳〵と、お討たれなされた。親の敵をお討ちなされて、本望遂げねばなりますまいがや。
新左　如何にも。その與三兵衛の悴は伊達の新左衛門。
小萬　あなた様は。
新左　同じ家中に勤め居る、竹村新左衛門、また重の井とも名のある身共。
小萬　なんと仰しやりまするえ。
新左　伊達新左衛門は、奥勤めの重の井と不義密通、お家の法を背きし兩人。重の井にはその場にて自害、新左衛門も切腹にて、既に刀に手を掛けしを、仁義の大殿お留めあつて、伊達と書いたる文字を切り、その不義の成敗相濟む上は、身を助かりて、由緒ある重の井が父、竹村の家を立てよと仰せにて、それより竹村、又は重の井新左衛門と、家名を立てゝ姫君のお守り役、

ト小萬、思ひ入れあつて

小萬　どうも合點がゆかぬ事ばかりぢやわえ。なぜと云はんしやんせ。それでは矢ッ張りお前さんが、伊達の新左衞門さま。

新左　如何にも。

小萬　でも、現在の親御さんを討たれ、オメ／＼と……どうも合點のゆかぬ、もしや。

ト新左衞門の左の手を取る。新左衞門驚ろき、振り拂はうとするを、小萬、立廻つてグツと捲り、肩先を見る。

新左　聞えた。又ぞろ角力の手か。

小萬　サア、これは。

新左　身共が肩に、疵でもあると疑ふのか。

小萬　なんのマア。

ト後へ寄つて思ひ入れ。新左衞門、思ひ入れあつて尺八を取上げ

新左　新左衞門はこの尺八。

小萬　エ。

ト新左衛門、碎けて

新左　コレ〳〵、此やうに竹の銹びて、むらのあるのは、云はゞ竹村尺八。竹と他家とは替つてあれど、讀み聲が同じ事ぢやに依つて、他家を繼いでは、伊達家に何事があつても、とんと構はれぬ。玆が浮世の義理……與三兵衞どのと云ひ、弟與作も誠に犬死。それを狙ふ家來逸平も、返り討に遭うたと云ふ事。そこで今では敵を討つ者が、とんとなければ、是非なく仇な月日を送ると云ふもの。與三兵衞どのゝ血筋の孫があつても、表立たぬと云ひ、藁の上より生別れの娘に、折角廻り逢うても、尺八の戀慕流しの、回向の身共なりと思へば。

ト思ひ入れ。

ハテ、取交ぜて我が身の嘆き。云はいでもよい事。ハヽヽヽ。

ト小萬、思ひ入れあつて

小萬　成る程、さう聞いては。

ト尺八を取つて

みな尺八の鶴の巣籠り、親子の恩愛……火吹竹のやうな物に穴を明けて、上手に吹きさへすれば、いろ〳〵に音が出て、心の浮く事もあれば、また無常にもなるもの。竹一本で音色の力になるで

はござんせぬかえ。

ト尺八を下に置き、煙草のみにかゝる。新左衛門、思ひ入れあつて

新左　サア、その一本立ちの其方を見かけて。

ト尺八にて打つてかゝる。小萬、驚ろき、煙管にて受け留め

小萬　こりや、なんとなさんすえ。

新左　いま打ちかけた尺八を、煙管で留めた心掛け。狂ひ獅子なる女の拳。狂はぬ手の内。

ト尺八を引いて立廻り。

塒の戀慕。

ト小萬の胸元へ尺八を突き付ける。

小萬　虚空の敵と

新左　討つて伊達家の本望を

小萬　報謝返しに。

ト尺八をもぎ取り

敵の在所が、今にも知るれば、仰せなくとも餘所に見て、どうマア捨てゝ置かれませうぞ。

新左　すりや、誠敵が。
小萬　もしや、あなたであらうなら。
ト尺八にて打つてかゝる。新左衞門、肩にて受け留め
新左　こりや、千代の戀慕か。
小萬　イヽヤ、六段の
ト立廻り、これにて大小入りの合ひ方になる。
新左　すりや、十八曲の
小萬　裏表。
ト小萬、新左衞門、いろ〳〵立廻りあつて
新左　こりや、敵討を
小萬　御無用と
新左　云はれぬ伊達家の
小萬　わたしも主從。
新左　天晴れ手の內。

小萬　及ばずながら

新左　彼の仇討ちの

小萬　歌口しめして

新左　キッと約束。

ト小萬、思ひ入れあつて

小萬　折を窺ひ

ト新左衞門へ打つて行くを、ちよつと留め

新左　こりや、疑うて瀧落しか。

小萬　イヤ、この庭に巣籠りの

ト南天の茂みへ打つて行く。六藏、飛んで出て

六藏　小萬諸とも新左衞門を。

ト小萬へ切つてかゝるを身をかはし、尺八にて留める。立廻りにて兩人、本舞臺へ下りて來て小萬、一腰をもぎ取る。立廻り。六藏、二重舞臺へ逃げ上がるを、新左衞門、引捕へる。小萬、下より簪を手裏劍に打つ。六藏、ウンと苦しみ、死ぬる。

新左　天晴れ手の內、驚ろき入つた。
小萬　これでは、敵が討たれませうか。
新左　ちつとも氣遣ふ事はない。
小萬　今にも敵に出會うたら
新左　奉公の身は儘になるまい。
小萬　エ。

ト思ひ入れ。新左衞門、六藏の懷より落せし金を取つて

新左　下郎が落せしこの金で

ト投げ遣る。

小萬　これは。
新左　奉公人の人代りは、給金つくが
小萬　證文の表。
新左　後に難儀のかゝらぬやうに。
小萬　そんなら、わたしが立て金を。

新左　給金濟まして。

ト六藏の死骸を疊の下へ蹴込み

身儘になりやれ。

ト唄になり、新左衞門、悠々と奥へ入る。小萬、後を拜み、いろ〱思ひ入れあつて、そこにある銚子杯を取つて、酒を一口飲んで、疊をあげうとして、また緣の下を覗き、六藏の死骸に心遣ひのこなしにて、緣の下へ思ひ入れあつて、この時奥にて手を叩く。小萬、悄りして

小萬　ハイヽ。

ト踊り地になり、小萬、氣を替へ、思ひ入れあつて、生醉のこなしにて奥へ入る。唄になり、奥にて

左內　丹波屋與作は、どれに居る。與作々々。

ト合ひ方になりて二階の障子を明け、左內出て、あたりを窺ひ

鎌倉よりの書狀、以前の家來八藏が持ち參り、右馬之助より慥かに屆けたれば、これで安心。先刻認め置いたる鎌倉への密書。大事の使ひゆゑ、丹波屋與作に申し付け置いたが、與作はどれへ參つたか。

ト云ひ〱、八藏の持つて來た狀を明け見て居る。この時、奥にて

四人　きつう醉うてぢや。それでは戻れまいぞえ。
左内　ヤア〳〵。
　ト悄りして手早く、扇にて燭臺と釣り燈籠の灯を消す。女形皆々、正面の障子を明け
四人　與作さん、どうでも戻るのかえ。
　ト左内、思ひ入れ。この女形の蔭より、與作出て、皆々に囁き、足音させる。
左内　與作か〳〵。
　ト生醉のこなしにて、探り〳〵中二階へ行く。
與作、參つたか。
　ト與作、左内に囁やく。
其方が魂ひ見屆けたれば、この密書を持參いたして、鎌倉管領の執權、宇佐美權の正どのへ。
　ト密書を渡す。與作、取つて戴く。
ちつとも早く。
　ト踊り地になり、與作、バタ〳〵と下へ下りる。中二階の障子を締める。與作、生醉ひのこなしにて、
　そこらを蹈み立て〳〵、暗がりながら平舞臺へ來て

與作　こいつは、よい物が手に入つたわやい。

ト花道へ行かうとする。奥にて

與作　桑名の兄貴、山形屋の義兵衛どの、待たつしやい。

義兵　ヤ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、奥より與作、一腰を差し、手燭を持ち、出て來る。

オヽ、誰れだと思つたら、アノ丹波屋の

與作　與作だが。

義兵　ナニ、見忘れるもので。

與作　いつぞや、伊勢の關の宿で

義兵　逢つたが、さつぱりその後は

與作　逢はう〳〵と思つて居たが

義兵　與作どの。

與作　義兵衛どの。

兩人　ハテ、よい所で逢ひましたなア。

ト肥前節になり、兩人、床几へ腰をかけ、煙草のんで

義兵　ほんに、あの時は思ひがけない

與作　時の怪我にて肩の疵。

義兵　それから快くなりましたか。

與作　なにサ、ほんの過まち。さのみ苦しうもなかつたが……アノ、その時の物を義兵衛どの、返して下さい。

義兵　返せとは何を。

與作　こなさん、定めて拾はつしやれたでごんせうがな。

義兵　拾つたとは。

與作　おれが名宛の大事の狀。

義兵　其方に大切の狀であらうが、此方は反故同然、拾ひさへすりや返すのよ。

與作　ちつとあの狀には、他見を憚らにやァならない事。山形屋どのが拾つてくれたらうとは思つたが、どうぞ此方へ。

義兵　矢ッ張りしつこく、返せと云ふのか。

與作　知れた事よ。

義兵　おれも桑名ぢやア、長持ちへこそ入らないが、山形屋の義兵衞は男だヮ。知らない物は知らねえと、柳に出りやア付け上がり、その狀から附け込んで、なんぞ外に。

ト思ひ入れあつて

その手は滅多に桑名の義兵衞、マア、さう思つてくんなんし。

ト與作、思ひ入れあつて

與作　成る程、さう見通すのが、今の若い衆の悧巧。いゝヮ、その時落したわしが狀、拾つたと云ふのは難題。その狀は知るまいから、ちよつとこなたの懷の。

ト義兵衞の懷へ手を入れるを突き退け

義兵　こりや、男の懷へ手を差しかけて、なんとするのだ。

ト懷を押へ思ひ入れ。下座にて

〽二八十六で文付けられて、二九の十八でついその心。

トこの唄にて、また與作、義兵衞の懷の狀を取らうとするを振り拂ふ。立廻りにて義兵衞、密書を落す。與作、取らうとするを義兵衞、手早に取つて、懷へ入れる。

與作　その狀、此方へ渡しやれな。
義兵　イヽヤ、こりやア人に賴まれたによつて、持つて行くのだ。
與作　そりやアどこへ。
義兵　知れた事、鎌倉へ。
與作　おれが持つて行くのを、暗がり幸ひ名を騙つて、おぬしに持つて行かれては、與作が立たねえ。
　此方へ渡せ。
義兵　イヽヤ、此方も暗がりで、折角ものしたこの狀を。
與作　取らにやア、與作がどこまでも
義兵　其方も欲しいが、此方も入り用。
與作　渡しやれ。
義兵　ならねえ。
與作　ならすば、いつそ。
　　ト一腰を拔きかけうとするを、押へて立廻りにて
〽四五の二十なら一期に一度。

ト この唄にて與作、義兵衛の懐より密書を引出し、これを枷に兩人立廻り、いろ〳〵あつて、密書よき程より切れるを、兩人、密書の裂けたのを持つて、キツと見得。太鼓入り山姥の木頭にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。見付け銀地襖。上の方、障子屋體。軒口大和葺き。東西植込み、柴垣。この屋體の内に風呂釜を置き、新左衛門、茶を立てしまひし體。右の唄の切れにて、道具とまる。

新左 茶は禪家の悟りより出て、維摩の室の四疊半、本來空の風雅にて、貴賤の差別なく、一器の茶を飲みさして、互ひにこれを喫して、他事なく友とするが、これ茶の道。

ト思ひ入れあつて

それを我が子と知りながら、名乘るにも名乘られぬ仕儀。せまじきものは宮仕へぢやなア。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、奥よりおさん、莨のみながら出て來て、そこらを見廻し

さん 成る程、在所と違うて、京都は遊び屋でも、座敷がたんとありますなア。

新左 それに居るは、最前の女馬士、おさんではないか。

さん ほんに御家老樣、そこに何をしてござらつしやるえ。

新左　只今獨服にて、茶を立つて居つたが、其方にもやらうと思うて。
さん　イヤモウ、いろ〳〵との御馳走。咽喉が乾きます。
新左　サヽ、一服飲みやれ。
　　ト合ひ方になりて、新左衞門、茶碗を持ち、屋體より出て來る。
さん　お大名樣の御家老樣の、あがる茶碗にしては、穢なうて大きな茶碗。わしらが爐で飮むやうな茶碗でござりますな。
新左　ハテ、變つた事を云ふ。貴人高位にても、皆その茶碗にて召上がるが薄茶の禮儀。お屋敷樣からお茶頂戴とは、有り難う頂戴せねばならぬ。首尾よくお目見得も濟み、御奉公さへ致せば、何なりと買ひたい物があれば買はるゝ。道中すがら、用事もあらば申すがよい。
さん　さうして、道中で用があつても、御家老樣の名を聞くには、なんと云ひます。
新左　ヤ。
　　ト思ひ入れ。
さん　誰れ樣と云うて尋ねます。
新左　サ、その名は、御家老樣とさへ云へば知れる事ぢや。

さん　そんなら、お名を申さずに、御家老様とさへ云へば知れますか。

新左　如何にも。

ト思ひ入れ。

さん　聞けば、お殿様には、丹波の由留木さまとやら。そんならその御家中に

新左　誰れぞ尋ぬる人があるか。

さん　アイ、先刻にもお前が見さつしやれました

ト守り袋を出し

この臍の緒にあるお人に、逢ひたうござりまする。

ト新左衛門、守り袋を明けて

新左　サア、この伊達新左衛門と尋ねても、親子と名乘る事の出來ずは、今逢うて今、別れねばならぬゆゑ、折角尋ね、巡り逢うても逢はれまい。

さん　それでも、死んだ沓掛の乳母が話しには、丹波の國由留木さまといふ御家中ならば、伊達新左衛門さまと尋ねいと云ひましたが、そんなら尋ねても逢はれませぬか。

新左　サア、逢はれぬと云ふは

さん　なぜでござりまする。

新左　サア、新左衛門といふは。

さん　どうさつしやりました。

新左　ハテ、先達て死んだわやい。

さん　エヽ。

ト悄りして

そんならアノ、父様は死なしやれたかく。

ト泣き落す。

新左　現在父は眼前に、生きて居ながら親子とも、云はれぬ浮世の義理道理。

トおさん泣きながら

さん　生れ落ちから別れた父様、折角巡り逢はうと思ふに、死なつしやれては、わしやどうせう、どうしませうぞ。

ト思ひ入れあつて

シタガ、わしはお前様が、どうした事やら、懐かしうござります。

新左　そりや、その筈の事。

　　トおさんの手を取り、思ひ入れあつて

藁の上から生別れに、在所に成人したなれば、定めて髪も赤しやれに、手足は山のこけ猿と、思ひの外に美しき顔形。ほんに氏は争はれぬもの。その美しい其方を今に。

さん　エ。

　　ト思ひ入れ。

新左　不便やなア……サア、ほんの親に見えたら、さぞや戀しく懐かしからうに。

さん　わしや、どうして見てもお前様を

新左　誠の親とも思ふなら、他人でさへも他事なく致すが、今云ふ茶の道、身共が飲んだこの茶を一口。

さん　そんなら、茶の湯のお茶とやら。

新左　互ひに飲むが、親子も同じ交はりの茶。

　　ト一口飲んで、おさんの手へ渡す。

さん　そんなら、飲むのかえ。

　　ト一口飲んで

さん　こりや、もう覺めて、とんと水ぢやわえ。

新左　それが親子の水杯。

さん　エヽ。

ト悧りして茶碗を落し割る。新左衞門、拔打ちに切り付ける。おさん「アレエヽ」と逃げるを追ひかける。此うち義兵衞、ツカ〳〵と出て來て、一腰を拔き、おさんを一かせ切る。アヽと苦しむ。新左衞門、驚ろき

新左　ヤヽ、こりや、義兵衞には。

義兵　一度枕を交した仲。男が女を殺す心中。

さん　こりや、なんでわしをば。

義兵　この義兵衞が、殺さにやならぬ義理あつて、其方が命は貰うた程に、男の爲と思つて、死んでくれいやい。

トおさん苦しみながら

さん　一生に男は一人と、子心にも思ひ詰めた、お方の手にかゝつて死ねば嬉しいわえ。

ト義兵衞、思ひ入れあつて、おさんの首を打ち落す。

新左　大殿の御名代、左内さまの御出立。御病氣平癒のその藥に、無うて叶はぬ酉年の、年月日時の誕生の、女の血汐がお入用。藁の上から別れし我が子の、命を取つて病氣本腹。

　　トおさんの首を取つて

其方を憎し穢なしと、嫌ふではなけれども、元は身共も母重の井も、お上の奉公人、若木の戀風に、もつれ合うたる一夜が二夜と重なりて、お家の法度の不義顯はれ、御成敗にあふ所を、重の井は自害、この新左衞門は殿のお情にて、今にては姫君のお守り役。その大恩のある身の上ゆゑ、最前親子と知つたれど、云ふに云はれず、殊に折角名乘つても、斯ういふ事にならねばならぬ仕儀ゆゑに、わざと名乘らぬ身共が心。よう死んでくれたなア。

義兵　可哀や、おさんが夫と思ひ詰めたる、この義兵衞が手にかけ殺すが、せめてもの引導と、思へば先刻の道中双六、江戸から見れば六道の、辻に迷はず三途の川崎、箱根の賽の河原へも、行かぬは夫のある身ゆゑ。思へばその繪は逆さまな、道中双六、六道の、辻に迷はず死んでくれ。義兵衞も跡から死出の道連れ心中。女を殺して男は直さま後から。

　　ト死なうとするを新左衞門、留めて

新左　コリヤ、義兵衞、其方が死んで姫君の、御用は誰れが勤めるぞ。女に迷ひ、お家へ不忠を立てる

のか。

義兵　すりや、死ぬるにも死なれぬか。これも矢ツ張り町人に、生れたる悲しさ。エヽ。

ト口惜しき思ひ入れ。右馬之助、出かゝり窺ふ。

新左　小粒の數が十三とは、それが即ち題目の七字と
最前投げたる小粒十三、生き長らへて、これで追善。

義兵　念佛の六字詰め。

新左　黄金花咲く莊嚴の

義兵　彌陀の淨土へ

ト右馬之助出る。

右馬　鷺坂氏には御本腹。

新左　寸志の一藥。

トおさんの首を渡す、ト右馬之助持つて

右馬　今宵の門出。

義兵　おさんの血汐が

新左　即ち餞別。

右馬　受取りました。

　　卜首を持つて下座へ入る。義兵衛、顔見合せ

義兵　新左衛門さま。

新左　義兵衛、其方が心の内も。

義兵　イヤ、私しよりあなたが百倍、推量いたして居ります。

新左　不義とは云へど、親子の恩愛、藁の上より別れしおさん、どこにどうして居る事ぞと、思ひ出さぬ日はなけれど、今日と云ふ今日思ひ掛けなく、在所育ちの奉公人、氣高い器量、よもやと思ひしに、最前双六打つたその印に、置いたは蒔繪の印籠に、雪折れ竹のその片割れ、慥かにこれは重の井へ渡した印籠。それと察して臍の緒の、書付け見れば、伊達新左衛門娘として、酉の年月日時の誕生、南無三寶、我が子を殺し、敵の病氣を本腹させ、忠と孝とを相立てずば、武士の不本意。

義兵　そりや、私しとても同じ事。不思議な縁に娘御の、おさんどのと一夜の添ひ寐。思ふ不便に又逢はうと、尋ね廻つて、また爰で、逢ふと思へば殺さねば、ならない義理ゆゑ、思ひ切つて、實父

の刃も待たずして、町人の身で早まつて、殺した心を新左衞門さま。

新左　不便な事であつたわい。

義兵　合點のゆかぬ、新左衞門さまには、邪智深き鷺坂さまを、大切に遊ばされ、御病氣平癒の爲、世にも稀れなる女の生血、おさんを手に掛け、お役には立てましたが、左内さまをすご〳〵と、御發足させられましたは。

新左　その不審は尤もなれど、實父伊達の與三兵衞を、討つたは左内と知れてあれど、他家を繼いだる新左衞門ゆゑ、小萬に敵を討たさう爲。

義兵　すりや、それゆゑに。

新左　殿の名代、京地で討つては相濟まねば、粟田口を離れた上

義兵　小萬は忠義一圖なれば

新左　討ちおふせるは兼ねての手練。

義兵　ア、これに付けても世の中の

新左　夫婦は二世とあるからは

義兵　未來永々

新左　親子は果敢なき

義兵　たつた一世。

新左　思へば〳〵

義兵　夢まぼろしの

ト互ひに顔見合せ

兩人　浮世ぢやなァ。

トきつと思ひ入れ。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、上の方、九尺の亭屋體。大和葺き見付け、下の方、紅葉の林。眞中の床几に左內、手燭を置き、側に摺り鉢を置いて全快の體。上の方に右馬之助、下の方に八藏、以前の形に大小を差し、辭儀して居る。時の鐘にて道具とまる。

ト靜かなる踊り地になり

右馬　酉の年月日時の誕生の、女が生血に依つて、左內どのゝ全快。

八藏　久々にて、お目にかゝりましたが、旦那様の御病氣平癒にて、八藏めも、喜びましてござります

る。

左内　全く朋輩のよしみとは云ひながら、新左衛門の寸志、忝ない。

ト思ひ入れあつて

八藏　併し、御主人の名代とは申せども、重の井めが、何か心のある事と見えますわい。イヤモウ、御全快にて、鎌倉へのお入りでござりますなら、何卒お供を仰せ付けられ下さりませう。

左内　八藏ことは、先年不屆きあつて、暇を遣はしたれども、今日の飛脚ゆゑ、供を許して元の主從。

八藏　鎌倉の宇佐美が書狀、問屋場まで送つて參つたゆゑ、もしや大事と、飛脚を好んで參りましたが、これを功に元の主從。その上、御差替への大小を下されて、今よりしては侍ひ分。エヽ、有り難うござります。

ト左内、思ひ入れあつて

左内　エヽ、コレ、其方に早く逢うたら、丹波屋與作に、鎌倉の密書は渡さぬものを。

八藏　そんなら、アノ丹波屋與作は。

右馬　與作は、まだ奥座敷に居りましたぞえ。

左内　ヤア〻。
ト思ひ入れあつて
すりや、最前暗がりにて渡せし密書は、丹波屋與作と思ひの外、もしや外の者にてあつたか。
右馬　それでは大事の
八藏　密書とやらを
左内　ハテ、大事ない。例へ密書が現はれても、また云ひ拔ける事もあらう。
右馬　誠に貴殿は、大望の胸中。人を殺して、どこへも動かず。
左内　ハテ、そこが燈臺元暗し。人を殺して落ちついて居やうとは、狙ふ奴にも心は付くまい。
八藏　ア〻コレ、お暇濟んで、元のお旦那となつたれば、その密書のお使ひを、首尾よう仕負せやうに、
コレ、遲くお目にかゝつたばかりに。エ〻、口惜しいわえ。
左内　右馬之助どのには、身共全快ある上は、今宵の七つに。
右馬　いよ〳〵、御發足。然らば何かの支度を申し付け、川端までお先へ參らん。
左内　ちつとも早く。
右馬　心得ました。

ト始終踊り地にて、右馬之助、向うへ走り入る。

八藏　して、只今仰せられました、御家來同然の丹波屋與作、これもお供に召連れられまするか。

ト左内、あたりへ思ひ入れあつて

左内　その儀は、コレ。

ト囁く。

八藏　この八藏も、掛り合ひがござりますから、承りましたが、それで落ちつきました。道中一緒に參れば。

ト云はうとする。

左内　なんと云ふ。與作が事を承るか。

八藏　併しながら、關東御發足には、町人ながらも、何かに拔け目なき丹波屋與作。お旦那には乳兄弟とあれば、お供に召連れられまするかな。

ト此うち小萬、窺ひ居る。

左内　如何にも與作は、町人にても小賢しき者ゆゑ、召連れたきものなれども、それでは身共の邪魔に相成る。

八藏　そりや又なぜでござる。

左内　あの與作は乳兄弟ではあれど、敵持ちぢや。

　　ト小萬、聞耳を立てる。

八藏　すりや、あの與作は敵持ちとは。

左内　兎角は云はれぬ事ながら、何意趣かは存ぜぬが、四條河原で伊達の與三兵衛を、討つて立退くその砌り、左の肩先へ疵を受けたと申す事。

八藏　すりや、肩先に疵のあるのが、伊達の與三兵衛が敵とや。

　　ト小萬、ちやつと障子を締める。

左内　イザ、發足の

八藏　お支度遊ばされませう。

　　ト合ひ方になり、左内先に八藏、下座へ入る。障子屋體より小萬、ソツと出て來て、後を見送る思ひ入れ。

小萬　知らぬ事とは云ひながら。今の今まで憎いと思うて居た敵は、なんでも左内さまと、わたしが怪しみぢやに依つて、丹波屋の與作さんの心底を見屆け、助太刀してもらひたいと、夫婦になつた

その人が、いよ／＼敵に極まらば、わたしやどうせうぞいなァ。

ト側の煙草盆に凭れ、こなし。

とは云ひながら、假にも夫と約束した與作さん、ほんにマア、なんの因果で……どうした縁であらうぞいなう。

ト下座にて

與作　小萬はどこに居やる。小萬々々。

小萬　あの聲は與作さん、わたしを尋ぬるには、様子のある事か。逢うたら何と云はうぞいなァ。

ト下座より踊り地にて與作、手燭を持ち、以前の一腰を持ち出てくる。小萬、知らぬ顔して居る。與作、床几に腰を掛けて

與作　小萬、爰に居たか。先刻渡さうと思つたが、命をかけて、夫婦になつた印の一腰、其方へ受取つてくれ。

ト小萬の側に置く。小萬、矢張りツンとして居る。

折角夫婦になつて、好い首尾だから抱かれて寐ようと思つたに、急に用が出來て行かにやァならない。

ト行かうとして

大分御機嫌が悪いが、どうした。

小萬　お前、どこへ行かしやんすえ。

與作　古主の鷺坂左内さま、御病氣が急に御本腹して、御名代に御出立。それでお供をして行くのだ。

小萬　そんなら、わたしが事には構はず、お主の供して行かしやんすのかえ。

與作　でも、御恩のあるお主なれば。

小萬　モウ〳〵、夫婦にならぬ程に、さう思うて下さんせ。

與作　コレ〳〵、小萬、そりや何を云ふ。

小萬　何を云ふとは、人に大事を云はせて置いて、助太刀をするが否になつて、それで逃げるのぢや。そんな水臭い男は否でござんす。夫婦の約束もこれ限り。與作さん、緣切つたぞえ。

與作　おれが方から、助太刀をしてやらうと云つた程の事。ナニ否になるものだ。どうも主の事なれば。

小萬　そんなら、主にわたしを替へる氣かえ。ようござんす。その心では、命を遣らうと云はしやんしたも嘘。但し、さうは云はしやんせぬかえ。

與作　サア、ありやア……ほんの時のはずみ、與作が命は大事の命。

小萬　たつた今も、命をかけた一腰ぢやと云うて、渡して置いて、今になつて、その大切な命となら、わたしが貰うた。

ト一腰を拔き掛けるを與作、留めて

與作　こりや氣が違つたのか。

小萬　氣が違つたかとは、その身に覺えがあらうがな。

與作　なんと。

小萬　與三兵衞さまを殺した、敵の證據といふは肩の疵。覺悟しや。

ト切り掛ける。また立廻り。與作、莨盆にて受け留める。この時、障子屋體より左內、窺ひ見る。下座より八藏、大小にて出て、この體を見て居る。

與作　小萬、待て。この與作を敵とは。

小萬　こなさんの肩先の疵、鬪の宿での怪我といふも僞はり。誠は與三兵衞さまの討たれなされた、その時に切られた疵であらうがな。

與作　小萬、なんと云ふぞ。

八藏　ヤア、隱すな與作。肩の疵にて與三兵衞が、敵といふは知れて居る。包むに於ては、ソレ、彼の

人の　ト障子屋體を指して
卑怯申すな。
與作　すりや、アノ。
　ト障子屋體へ思ひ入れ。
八藏　コリヤ〳〵、何にも云ふな。サア、小萬とやら、八藏が助太刀だ。潔よく勝負しろ。
　ト與作、ウロ〳〵する。
小萬　エヽ、有り難うござります。サア、與作どの、勝負ぢや。
與作　斯くなる上は是非に及ばぬ。四條河原で伊達の與三兵衞を討つたのは、この與作。いらざる女の腕立てすると、返り討だ。覺悟なせ。
　トきつとなる。八藏、刀をスラリと拔き
八藏　ヤア、返り討にはなるまい。
與作　そりや又なぜ。
八藏　小萬、ソレ。

ト懐より請け狀を出して投げやる。小萬、取つて見て

小萬　こりや、鷺坂さまにお上げ申した、金の代りに、お取りなされた、奉公人の請け狀。

八藏　左内さまが口說かつしやれても、從はぬゆゑ、取つて置かれた請け狀。それを返したれば、左内さまの女房。それでは與作が爲には主筋。家來の身なれば、小萬を討つては主殺し。

與作　成る程、主人なれば手向ひ致さぬ。サア、立寄つて討たつしやい。

小萬　イヽヤ、手向ひせねば死人同然。討つて手柄になりませぬ。

ト請け狀を出して

この請け狀を左内さまへ返せば、矢ツ張りわたしは奉公人。サア、與作どの、勝負ぢや。

與作　主でなければ、返り討。

トまた刀を取上げる。八藏、請け狀を投げて

八藏　イヤ、主に手向ひなるまい。

與作　そんなら、お討ちなさるゝか。

小萬　イヤ／＼、その請け狀は。

與作　返り討だぞ。

八藏　主殺しか。
與作　サア。
小萬　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
ト互ひに證文を投げ合ふ。
與作　エヽ、果しの付かぬ。敵討までこの請け狀を預かつて、女房でなければ主でもない。
ト請け狀を懷へ入れる。
小萬　然し、わたしもお借り申した金子を償はねば、どうも心が濟みませぬ。
ト以前の金を出して
サア、わたしが給金、お返し申した。八藏どの、屆けて下さりませ。
八藏　イヽヤ、その金取つては、奉公人の緣が切れる。
ト與作、金を取つて
與作　この金も請け狀も、共に勝負の終るまで
小萬　サア、與作どの、覺悟さしやんせ。

兩人 サア〳〵。

ト小萬、切つてかゝる。與作、拔き合せ、立廻りあつて、トヾ小萬を當てる。小萬、悶絶する。

八藏 とてもの事に。

ト與作を切らうとする。屋體の左内、思ひ入れ。與作、立廻りにて八藏を取つて押へ

與作 心の合はぬ八藏、うぬも共々。

ト屋體へ思ひ入れ。

モシ、左内さま、あなたはなう。

ト合ひ方になり

私しが母は、あなたにお乳を上げました乳兄弟。その御縁にて、お主と思ひ、正しくあなたを置きながら、肩先の疵を證據に、敵と名乘りこの場の勝負。殿の御名代と存じて、大切に仕りますぞえ。それに小萬に惚れてござつて、この與作を敵と云ひ立て、助太刀してわしを討たせ、それを恩に、女房にせよと思はつしやれても、天道樣が許しませぬ。そりや、あんまりぢや〳〵。

ト思ひ入れ。左内へこなしある。

八藏 成る程、さう云はれては、左内さまも一言もあるまい。いゝワ、小萬が事は、この八藏が、御主

人に思ひ切らせう。その面晴れには。

ト與作へ立ちかゝるを與作、留めて

與作　ヤレ、待たつしやい。ちつとの間でも、わしが女房を殺されるを、見捨てにするも、あんまり無情。

八藏　それぢやァ、主人を女房に替へるか。

與作　主筋なれど左内さまは非道。誠ある女房を殺さつしやれば人殺し。幸ひ今宵明け方に、東海道を御發足、この與作が逃げ行くを、後から追つて來る所を、たゞ一討ちに。

八藏　そりや合點……シタガ、與作、二十兩は。

與作　ソレ。

ト右の二十兩を遣る。八藏取つて

八藏　忝ない。

ト花道へツカ／＼と行く。エイと聲を打つ。屋體の障子しまる。與作、手燭にて二本の小柄を受け留める。火消えて暗くなる。

與作　まだ／＼與作へ疑ひが。

八藏　ソレ。

ト時の鐘にて、八藏、向うへ行かうとして、舞臺へ取つて返す。小萬、起き上がり

小萬　與作さん、嬉しうござんす。今の樣子で鷺坂どのと、敵の樣子がサラリと知れて、この身の本望。

與作　由留木の殿の御名代ゆゑ、京地を離れて討たせるお心ゆゑ、道筋は東海道、必らず急くまい。いま討つては、主殺しの科は遁がれぬ。

小萬　そりや又なぜに。

與作　ハテ、給金立てゝもこの請け狀。これを餞け。

ト請け狀を投げやる。

小萬　嬉しうござんす。

ト取つて引裂く。一腰持つて行かうとする。

八藏　樣子は聞いた。やる事ならぬ。

ト小萬を引ッ捕へる立廻り。小萬、一腰にて八藏を切つて捨てる。

與作　關の孫六、天晴れ業物。

小萬　命をかけてのこの一腰。エヽ、忝ない。

ト此うち下座より義兵衛、手燭を持ち、窺ひ出る。

與作　その人殺しの科人は。

ト刀を腹へ突ッ込む。

小萬　すりや、わたしが代りに。

與作　イヽヤ、惡人なれども主人の事を、顯はす上は覺悟の前。

小萬　ほんに果敢ない二人が縁。未來は夫婦。

與作　さらばでござる。

義兵　門出の餞別。

ト二通の狀を差出す。小萬、取つて

小萬　こりや、左内が手跡。

義兵　それを囮に

小萬　いよ〳〵本望。

與作　女房、ちつとも

義兵　早くお行きやれ。

ト顔にて思ひ入れ。時の鐘にて與作、引廻す。小萬、ツカ〳〵と花道へ行き、振り返る。チョンと木の頭。與作、倒れる。義兵衛、嬉しきこなし。この途端よろしく、拍子

幕

ト幕の外、三重になり、小萬思ひ入れあつて、後を伏し拜み、一腰に思ひ入れあり、向うへ走り入る。

時の鐘のツナギ。引返し。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕。所々に萱薄茂りし土手板。粟田口といふ石の傍示。爰に旅乘り物を置き、左内、野袴の形。源五左、文五、前幕の形にて、提げ重と樽を中間に持たせ、右馬之助、前幕の形。馬士八八、外に馬士、長褌、雲助の拵らへ。茣蓙包みの小長持にかゝり居る。供廻り大勢 脚絆旅形にて乗り物に引添ひ、空には月魄上がりし體。花菱の紋付けたる箱提灯を駕籠脇に置き、皆皆見送りの體。時の鐘、掠めたる禪のツトメにて幕明く。

中間　お旦那、爰が粟田口、いま打ちまするが慥か九ツ。

右馬　廿日夜中の月魄も、そろ〳〵上がりまする。

源五　鷺坂どのを見送りながら、この源五左。

文左　我れ〳〵兩人、お見送りに參りましたて。

侍ひ　即ち主人の趣向にて、小筒提げ重、五升樽。

同　立ち振舞ひと用意の餞別。

八八　明け六ツ立ちを夜中のお立ち。大きに骨を折りました。

雲助　お立ちの御祝儀、お祝ひに、しつかり酒手を貰ひませう。

八八　そりやア云はずとお旦那に、ナニ如才があるものか。

雲助　旦那のお駕籠は、おいらが受取り

同　道中筋も氣を付けて

同　關東お使者の左内さま。

同　夜を日に次いでのお急ぎは

侍ひ　少々譯のある事だ。御家來中は猶更に。人足どもゝ油斷なく

八八　その掛合ひは、この八八。わしが頼んだ雲助どもは

雲助　滅多に油斷

皆々　しませぬて。

右馬　たゞ氣懸りは其許より、身共へ參つたあの密書、小萬が手に入つたからは、これがどうやら氣に

なりますて。

左内　併し、名苑はちぎれあれば、氣遣ふ事はなけれども、大事の小事と存ずるから、正六ツ時と出し抜いて、卑怯に似たれど夜のうち

三人　矢張りお立ちが

皆々　ようござりませう。

ト皆々立ち上がる。時の鐘にて、向うよりバタ〳〵、小萬、赤前垂れの形、鼠朱子の帯、風呂敷に包みし卒塔婆を持ち、走り出て來り、直ぐに舞臺へ來て

小萬　お乘り物、暫らく〳〵、お待ちなされて下さりませ。

ト大勢の中へ割つて入り、左内に縋つて留める。

左内　ヤ、わりや小萬だな。身が頼みをも聞入れず、何しに爰へは

皆々　來たのだえ。

小萬　ハイ、明日未明、關東へ御發足とは、承はつて居りましたれど、今宵夜中に出し抜いて、

左内　ヤ。

小萬　サ、御出立と承はると、心も心ならず、斯様に走つて參りましたは、左内さま、ちとお願ひが

ござりましての儀でござりまする。

左内 ナニ、身共へ小萬が願ひとは。

小萬 即ちこれでござりまする。

トちぎれし手紙を出し、側にある箱提灯へ手紙を巻き、思ひ入れあつて

お覺えがござりまするか。

トきよい左内、よく〳〵見て、右馬之助と顏見合せ、思ひ入れあつて

左内 イヽや、存ぜぬ。

小萬 あなたのお手ではござりませぬか。

左内 宛名があるか。

小萬 サ、ござりませぬに依りまして、密かにお願ひ申しまする。

左内 宛名がなければ猶更に、斯く云ふ左内、覺えはないぞ。

小萬 左樣ござらば、今一通。これにはお覺えがござりますか。

トまた一通、丹波屋與作へ疵の事にやつたる手に入る狀を明りにて見せる。左内、思ひ入れあつて

左内 イヽヤ、それにも覺えはないぞ。

小萬　これにもお覺えござりませぬか。お覺えなうても文言なりと。
左內　彌九郎、それにて讀み上げろ。
侍ひ　心得ました。
ト小萬また提灯へ卷きかざす。
「紙面を以て申し越し候ふ。先達て申し遣はせし通り。京都の內に外療に高名なる者御座候はゞ我れら出養生の間、內々にて療治くれられ候ふ、肩先の刀疵未だ全快なく、甚だ難儀いたし候ふ、殊更その節一藥に加へ候ふ年月揃ひし者、心當り候はゞ、これとても他聞を憚り、詮議さるべく候ふ以上、月日、丹波屋與作どのへ、左內」……すりやその狀が
左內　どうして、其方が。
小萬　手に入りました左內さま、御覽の通り同筆同書、刀疵とは察するところ、四條河原で與三兵衛さま、討ち手知れざる御最期は、あなたの業でござりませう。その上御子息與作さま、兄逸平に女房まで、最期の場所も坂の下、殊に用金三百兩、御仁體にも似合はぬ仕方。それは格別、お願ひは、主人が越度となりましたる、お家の系圖の一卷も、御所持なさるゝ左內さま、白鳥氏と隱し名も、推量いたしてこの小萬、お見送りに參りました。左內さまがお覺えござらば、仲居のわた

左内　し、今宵の花と思し召し、モシ、お貰ひ申したう存じまする。

　　默れ女め。左内に云ひかけひろぐと云ひ、身共が心に從はぬ、今といふ今、三年の、色も戀も覺め果てた。慮外な女め。身が手に掛けて。

　　　トつか〱と寄るを、ちやつと立廻つて、持つたる卒塔婆を目先へ突き出し、キツとなる。左内見て

　　合點のゆかぬその卒塔婆。殊に記せし法名は。

　　　トよく〱見て

　　劍消玉貌信女、應永三年九月廿日。

　　　ト思ひ入れあり

　　その年號は今月今日。して戒名は何者の

小萬　ハイ、私しでござりまする。

左内　ヤ。

小萬　その戒名の玉貌信女、俗名　即ち關の小萬。

　　　ト卒塔婆の後を返して見せる。

左内　その又われが戒名を、なぜ又爰へ持つて來て。

小萬　あなたのお手にかゝる覺悟で。

　　　トこれより誂らへの合ひ方。蟲の音。小萬、キツとなつて

お手討ち承知のその上にて、お後を慕うてこのお願ひ。叶はぬ時はと覺悟して、命は水の粟田口。刃にかゝる草の露。蟲も哀れの貰ひ泣き、目には尾花の野邊送り。死なぬ先からこの卒塔婆、立て置きまして小萬が願ひ、哀れと思うて左内さま、ハイ、お名乘りなされて下さりませ。

左内　この野邊に我れと我が、卒塔婆を立てゝの願ひと申すか。

小萬　ハイ。

左内　ドレ、法名を。

　　　トつかくと寄る。小萬、しやんと持ち替へ

小萬　アイ、それから御覽下さりませう。

　　　ト思ひ入れ。

左内　流石は伊達家の徒歩中間、逸平づれが妹の小萬、主の敵が討ちたいとは、女に稀れな愛い奴なれど、身共がそれを知るべきや。よし又彼れ等を討つたにせよ、小刀一本持ちもせず、なんで刃向ふ。敵は討つ。流石は女、たはけた事を。

ト嘲笑ふ。

小萬　御尤のそのお尋ね。一心固めて討つならば、例へ持つたる卒塔婆にもせよ、劍と准らへお相手に、なるまいものでもござりませぬ。

左内　卒塔婆の相手に、然らば身共が。

ト小萬へかゝる。立廻りよろしくあつて、左内が肩先の疵へ、ちやつと小萬を手をかける。この時左内、未だ疵口痛む思ひ入れ。小萬、ちやつと見て

小萬　さてこそ、左の肩先に

左内　ヤ。

ト飛び退くはずみに一卷を落す。小萬、取つて

小萬　こりやコレ一卷。

左内　それを。

トちやつと取つて懷中する。

小萬　正しく系圖の

左内　繩打て。

馬士　うぬを。

トかゝるを小萬、立廻つて仕込みの卒塔婆を抜き、二人が眉間を切る。

左内、さてこそ刃物を

皆々　隠し持つたぞ。

中間　お旦那、この間に

皆々　急いでお立ち。

左内　者ども、参れ。

小萬　イヤ〳〵、やらぬ。

ト切つて行くを、大勢取り付き

皆々　イザ〳〵、この間に。

ト左内先に源五左、文五、その外侍ひ、塗り樽を持ち、時の鐘になり、下座へ入る。追ひ駈けんとする小萬を、右馬之助、侍ひ、馬士、殘つて小萬にかゝる。小萬、切り拂ふ。皆々大まくしになつて入る。右馬之助、手を負ひ、兩人立廻りにて、小萬が上着前垂れ脱げて、下は白無垢、南無阿彌陀佛と墨書にして白股引、凛々しき形になり、兩人立廻り、キツとなる。空の月隠れると、誂らへの鳴り物、

これより三人立廻つて、トゞよき見得にて、道具廻る。

本舞臺、矢張り尾花茂りし野邊。よき所の松に掛け稻。その外稻叢。上の黑幕引いて取ると向う小高く打拔き百姓家・樹木、鳴子、粟畑などを遠目に見たる道具。爰に左內、身拵らへして居る。侍ひ大勢馬士も交り、中間ども、五升樽より茶碗に受け、提げ重を取散らし、酒盛りして居る見得にて道具とまる。

ト掠めたる禪のツトメ。中間達、狐拳をする思ひ入れあつて

中間　サア〱、おぬし飮め〱。

同　イヽヤ、おいらはもう飮めぬ〱。

侍ひ　コリヤ〱、わいらは一大事の場所で、大切な見送りに、なぜ其やうに酒を喰つた。エヽ、折助どもといふものは。

ト氣を揉み居る。左內は身拵らへして居る。下座では人音、太刀音する。

中間　モシ、旦那、わしらは、左內さまの見送りのお供。狼藉者が來れば、逃げる分でござるワ。

侍ひ　ハテ、情ない奴等だ。

左内　あの物音は小萬。又ぞろ追ひかけうせまいでもない。

ト箱提灯を取つて、方々見廻す。パタ〳〵にて下座より右馬之助駈けて來る。

侍ひ　そりや、誰れか來たワ〳〵。

四人　來たらば、逃げる分の事サ。

ト醉うたる思ひ入れ。

右馬　そこにござるは、左内どのか〳〵。

ト慄ふ。

左内　右馬之助、小萬めは如何いたした。

右馬　サア〳〵、お聞きなされませ。身共を初め家來衆、人足めらまでかゝつても、なか〳〵ひるまぬ女の手利き。左内どの、御油斷なさるな〳〵。

左内　大勢の手に合ひませぬか。

右馬　左樣でござります。

ト慄ふ。下座にて大勢、アリヤ〳〵の聲して、法螺貝、早太鼓、早拍子木を打つと、向うの遠見舞臺へ小萬の吹替へと、侍ひ中間の吹替へ、子役にて、小萬へかゝり、タテ模樣、遠目に見えるこなし。

舞臺の人數思ひ入れ。

中間　爰へうせると、身共がぶッ放すワ。

同　これサ、此方の旦那ではなし、構はぬがよい〱。それこそ流行りの、構はぬ〱。

侍ひ　エヽ、極道折助め。

中間　ナニ、極道とは、おれが事か。

侍ひ　うぬが事だワ。

中間　イヤ、この折助めが。

トぶつてかゝる。ゴチヤ〱になる。捨ぜりふの同志打ち。左内、右馬之助は提灯を上げて後ばかり見てゐると、遠目の人數段々に樹木の蔭へ隱るゝ。右馬之助こなしあつて

右馬　ヤヽヽ。どうか此方へ、來さうでござる〱。

ト思ひ入れ。稻の間より八八、血だらけになつて、ヒヨロ〱して逃げて出る。皆々愕りして

皆々　ソリヤ、來たワ〱。

右馬　われは、人足だな。小萬はどうした。

八八　それ〱、その提灯を目當にして、いま爰へ來ます〱。

皆々　ヤアく。

ト右馬之助、提灯を消す。

左内　來居らぬ前方、系圖は貴殿へ。

右馬　心得ました。

ト左内、一卷を出し、右馬之助に渡す時、掛け稻の間より小萬、よろぼひ出で、左内に切つてかゝる。皆々そりやアと立ち騷ぎ、逃げんとする。小萬、滅多切りにする。これにてこの人數同士討ちになり、拔きつれて朋輩同士、切り込みく、手を負うて逃げて入る。右馬之助、太刀にて、左内諸とも切つてかゝると、小萬、立廻つて切つて廻り、右馬之助を切つて捨てる。左内、一卷を落す。小萬、取つてキツとなり

小萬　一卷隱せし左内こそ、いよく違はぬ主人の敵。

左內　官太夫を先にして、與作を始め親與三兵衞。逸平までも返り討。忠義と見せた鷺坂が、深く仕込みし我が大望。如何にも左内が刃の錆。敵は斯く云ふ左内だワ。

小萬　さてこそ、自身のその白狀。一卷取得し上からは、御主人方の仇敵。サア、尋常に勝負しや。

左內　小癪な女め。返り討だぞ。その息の根を。

ト切り付ける、立廻りあり、鳴り物替つて兩人タテ、左内手を負ひ危ふくなる。向うバタ〳〵にて、股立ちの侍ひ四人、由留木の紋付いたる箱提灯、六尺棒を持ち、前後に付添ひ、左衛門、袴ばかりの形。新左衛門　麻上下、股立ちにて、引添ひ走り出て來り、舞臺へ來て

左衛　女に似合はぬ主の仇。左内を相手にこの働らき。

新左　されども、入間へ御使者の役目。道にてかゝる狼藉は。

小萬　お家の系圖、正しく爰に……何卒伊達家の再興を。

ト一巻を差出す。左衛門、取つて

左衛　出かした小萬。願ひに任せ、家は立つたぞ。

新左　アレ、聞いたるか。

小萬　エヽ、忝ない。

左内　思へば無念の。

ト寄るを、小萬、刀を脇腹へ突き立て

小萬　御主人、夫の仇敵。

ト抉る。

左衛　オヽ、めでたい〱。
先づ今日はこれぎり。
トめでたく

打出し

駒春竹編染

褄模様（つまもやう）沖津白浪（おきつしらなみ）



褄模様沖津白浪

發端

文安年中、東山義政公の頃、遠江の國月本の家中、濱島幸兵衞と云ふ武士、勤番の砌り攝州大阪の藏屋敷にあつて、その頃浪花の色里、島の内の藝子、小萬と云へる女に深く馴染みて通ひけるが、何時の頃よりか小萬、濱島氏の胤を宿しける。然るに濱島幸兵衞主用として月本家の重器峰の藥師の尊像、また曉丸の劍、この度東山どのへ暫らくの間差上げよとの趣、管領職より御下知あるにつき、早速二品守護の役目を蒙り、遠州より京都へ急ぎの道中、荒井の驛に泊りの夜、曲者大勢旅宿へ切り入り、二品目掛けて盜み取らんとす、濱島幸兵衞心得たりと渡り合ひ、忍びの曲者二三人一刀に切り伏せしが、面體も見識りなき者ども計りにて、手掛りとてもなく、肝腎の二品は顏を隱せし曲者奪ひ取つて行くへ知れず、濱島は狂氣の如く、東西を尋ね求むると云へどもその甲斐なし、この儘にて屋敷へ立ち歸るべき用なしと、同じ家中、中村左膳と云ふは、幸兵衞許嫁の女、菊川が兄なるゆゑ、彼が方へ立ち越え、右の趣き委しく物語り、既に腹切らんとするを左膳押し留め、只今死すべき命を長らへて二品の詮議いたされよ、尤も日延べの願ひ身どもも致してくれんと申すに、濱島、力を得て親逸當が

身の上を頼み、また島の内小萬が方へも、寶詮議の爲め他國いたし、首尾好く二品手に入り、立ち歸るまで、胎内の我が胤、平産の後、男女に限らずよろしく相頼むと、文に認め遣はしける。小萬もこの文を見て大きに驚ろき、何卒してとも〳〵二品の詮議いたし度く、去りながら、女子の身の詮なき事と思へども、懷姙と云ひ心ならずと、島の内の親方へ頼み、藝子奉公の暇を請ひ受け、早速用意し濱島の生國遠州へと志し、立ち出で〻彷徨うち、伊勢路に差しかゝりし時、このあたりに名だたる因幡幸藏と云へる盗賊、手下數多ありて切り取りを業となす。この者、小萬を見つけ、かどわかして我が隱れ家に連れ來り、心に從へよと、さま〴〵と口說きしに、小萬思ふやう、今この所にて情れなく斷わり申しなば、我が命の程危し、この身の生死厭はねど、胎内には濱島氏の胤を宿し、その上、平産の後まで頼み入るとの文の文體、猶更ら捨て置かれじ、然らば大切な命なりと心づき、因幡に向ひ申すやう、私し事當時懷姙と申し、殊に男はゆゑある侍ひなり、只今おん身の心に從ひなば、主ある女の不義の惡名受くる事、いかにしても女子の道立たず、愛の道理聞き分けて下され、胎内の子やすしと產み落し候ふまで、枕交し候ふ事お赦し下され、安產をいたし候ふ後にては、成る程、お心に任すべしと、淚に暮れて願ふにぞ、この理に伏し、それより手下に云ひつけ小萬を我が女房の如く、日夜勞り養育せしうち、習ふよりは慣れろとは、世の譬に違はず、毎日毎夜、手下の盗賊、金銀財寶持ち來たり、盗みの掛け引き、取らるゝ者の目覺めぬ秘、門刻限勝利の樣子まで、委しく物語るにぞ、習ふともなう

覺える小萬、外事に聞き置きしが、程なく臨月巡り來て、玉のやうなる男子誕生、日柄も經てば、件の因幡、小萬に向ひ、平産の上は約せし通り、我が女房にいたさんと云ふ。小萬も詞を番ひし上は、いかにもお心に任すべしと返答して、その夜手下の者、皆々働きに出でし後にて、因幡に酒を進め、熟睡の折りを窺ひ、我が子を脊中に確つかりと括り、因幡が刀を拔き持つて、伏したる枕の元に立ち寄り、今は斯うよと見えけるが、流石に女氣、心のうちに愁ひを含み、これ迄の大恩、この子をやす〳〵平産せしも其方の蔭、されども枕交しては、いゝ約束の男へ立ゝず、これ皆互の敵同志、未來に於て云ひ譯せん、赦して下され幸藏どの。南無阿彌陀佛と稱名の、慄ふ手先に目を閉ぢて、因幡が胸元一ト思ひに貫けば、その儘落ち入る所へ手下の者、歸り來りてこの體を見るより、者ども引捉へんと喚くにぞ、小萬は一生懸命と、白刃離さず高聲に僞つて申すやう、この者こそはわらはが敵なり、それゆゑ仕留めしこの場の仕儀、事なく見遁し今よりして、我れを頭と尊敬なし、矢張り因幡と云ひ觸らし、仔細もあればその品々盜み得させよ、さなきに於てはこの儘當所の役所へ驅け行き、其方衆の名、面も一々訴ふると、云はれて驚ろく手下の大勢、鬼神に兩道なしとやら、そんなら必らず沙汰なしに盜賊ながらも人殺し、當所の住居危し〳〵、爰を立ち退き今からは、頭と賴む小萬どの、賴みの品は委しく、わし等に

小萬　話した上はこなさん達、働き次第に惡うはせぬ。して、また今宵は。

盗賊　いつもの辻堂、サア、ごんせ。

と手下の大勢、小萬は白刃拔き持つて、まさかの時はと目を配り、弛みを見せぬ顔色、氣を吞まれたる盗賊ども、女一人を頭ぞと賴む木の間に雨漏りて、濡るゝ姿も男ゆゑ、浮きに沈みぬ寄る邊なき、後白浪となりけらし。

犀ケ崖念佛寺の場

役名——鐵砲和尚。庄屋、李兵衞。寺侍ひ、金吾。所化、雲悌。杣、岩藏。同、柴藏。天狗法印。馬士、又六。女形、姫之助。荷持ち、甚助。篠原一學。中村左膳。同妹、菊川。下男、軍平。濱島幸兵衞。因幡幸藏實ハ小萬

本舞臺、正面本堂のかゝり、旛天蓋を提げ、本尊を飾り佛具よろしく、上の方に障子屋體、好き所に長持ち直しあり、下の方、銅の水鉢、後は杉の大樹茂り、二重舞臺に所化雲悌、布施鉦を打ち、庄屋、李兵衞、その外百姓四人、珠數に取り付き百萬遍の體。平舞臺に鐵砲和尚、庭下駄を履き尻揚げにて、指し圖して居る。杉の梢に、杣岩藏、柴藏、斧を持ちて杉の枝を下ろして居る、寺侍ひ金吾、一本差しにて尻揚

げ、落ちたる枝を束ねて居る。すべて遠州屋が崖念佛寺のかゝり、山嵐し、双盤、百萬遍の辭にて幕明く。

雲悌　南無阿彌陀佛。

皆々　南無阿彌陀佛々々々々々々。

和尚　それ〳〵、そのこちらの枝を下ろして貰はう。

岩藏　心得ました。この枝を打ち切りませう。

柴藏　これだけ下ろしたら、お堂が明るくならう。

雲悌　申し〳〵和尚さま、村の衆がお出でござりました、御挨拶なされませ。

ト和尚、皆々を見て

和尚　これは庄屋どの始め、村方の衆、ようござりました。

杢兵　お住持には殊の外、お取り込みと見えまする。

和尚　イヤ、左やうでもござらぬが、餘り杉が茂りましたゆゑ、枝下ろしして、焚き木に致さうと存じての騒ぎでござる。

金吾　殊にこのお國の御城主、月本圓秋さま、鷹野のお催し、その前方に寺内を掃除いたさうと、住持も氣を揉んで居られます。

ト この臺詞のうち、杣二人下りて來る。

李兵 イヤ、又このお寺の境内は廣うござるから、定めし杉を切つても大きな事でござらう。

岩藏 左やう〱、この頃切つた杉ばかりでも、よつほどの金目でござらう。

柴藏 その上未だ〳〵、奥山には天木の杉林。

百四 あの杉山も切らつしやるのか。

和尙 切り次手に、皆切らうと思ふ。

百四 それではあの山に木が絕えませう。

和尙 なんの、枝下ろして置くと延びが早いぢや。そこであの衆を賴んで切つて貰ふのぢや。

百四 併し、木を切つて金儲けしたと云ふ噂も聞きませぬ。

和尙 イヤ〱、そりや大きな間違ひ、木を切り出した仕切りの金、貸し掛けて高利を取らば、忽ち金持ちになるゝぢや。

李兵 イヤア、お住持は高利の金を貸さつしやる氣か。

和尙 ハテ、金儲けするも後生になります。

百四 イヤ、呆れた坊様ぢや。

杢兵　それはさうと、この寺領の重の百姓へ觸れさつしやつたは、この間に殿樣が、鷹野のお歸りに、このお寺にお立ち寄りあつて、その時に村中の百姓のうち、無銘の腰の物を持つた者は殘らず取り集めて、御照覽に入れいとの事、お住持より廻狀ゆゑ、百姓所持の無銘の劍、殘らず集めて、コレ〳〵、この長持へ入れて持つて來ましたわいの。

和尙　それはお大儀。どう云ふ譯やら殿樣には、この節お國へお下りなされ、支配々々へお觸れが廻り、無銘の腰の物を所持の者は、皆役所まで持參いたせと俄のお觸れ。それゆゑに御領內からは捨て置かれず持參いたすが、寺領の衆へは當寺より人を廻し、その劍を集め置き、鷹野の砌り、殿樣のお目に留まつた一腰があつて、お求めなさらば幾らの金にならうも知れぬ。その時愚僧も、一割は當り前、皆の衆もさう思うて居さつしやれ。

皆々　ハテ、慾張つた和尙樣ぢや。

和尙　サア〳〵杣の衆、殿のお成りのないうちに、奧庭の松の枝も下ろして置きませう。

金吾　もう一息にやつて下さい。

杣二　心得ました。サア、やりませう〳〵。

百皆　こちらは念佛にかゝりませうか。

雲悌　始めませう〳〵。

ト双盤、山颪しになり、和尚、杣二人、捨臺詞にて上の方の口へ入る。雲悌、音頭を取り、皆々念佛にかゝる。この鳴り物に、てんつゝ被せ、向うより菊川、振り袖、絹やつし、笈摺、胸札、女菅笠を持ち、後より家來軍平、巡禮の形、小さな巡禮葛籠を脊負ひ、出で來る。後へ下がつて法印、毬栗頭、輪袈裟を掛け、酔うたる體にて、錫杖振り立て〳〵出で來り、舞臺へ來て

法印　コレ〳〵姐さん、待たんせいの〳〵。

菊川　アイ〳〵、わたしの事でござんすかえ。

法印　お前の事よ。道連れになつて行かうと、あれ程呼び掛けるのに、其やうに早足に行く事はない。この日の長い四月半、マア〳〵、わしと一緒に歩きなよ。

ト立ち寄る。菊川、怖がつて逃げる、軍平隔てゝ

軍平　アヽ、モシ〳〵、私しどもは見さつしやる通りの西國巡禮。このお孃樣は音に聞えた犀ケ崖の念佛寺へ、お參り申して行きませうと存じますれど、今日の日も七つ下がり、日の暮れぬうちと、それで急ぎました。旅疲れの女の足、お連れにはなりますまい。マア〳〵、お前はお先へお出でなされませお先へお出でなされませ。

法印　イエ〳〵、先へ行かずと一緒に行きませう。ハテ、靜かにござらば、この法印も靜かに歩きませう。サヽ、さうさつしやれ〳〵。

菊川　アイ〳〵、それは有り難うござりまするが、何を申すも女子の足、却つてお邪魔でござりませう。矢張りお先へお出でなされませいなア。

法印　これサ〳〵、一人先へ行く位なら、それをお前に習ふものか。美しい姐さんだから、手を引いて行かうと思うての事。怖い事はない。わしは山伏だわな。修驗者でござるわいの。

トしなだれ寄る。菊川、怖がり逃げる。軍平中へ入り

軍平　これはしたり〳〵。ハテ、聞き分けのない事に。お前は醉うてござるゆゑ、娘の子は怖がります。それゆゑ斷わり云ふに、去りとては聞き分けの惡い人ぢや。

法印　ナニ、聞き分けが惡い。コレ、この女はなんでおれが怖いのだ。狼が送らうとは云ふまいし、おれも人間ぢやワ、殊に山伏ぢや。その法印さまが送るのに怖い事はないぞ。モウ〳〵、斯う云ひ出しては、否でも應でも送るぞ〳〵。さう思うてもらふワ。

軍平　イヤ〳〵、其やうに送らうと云ふ程、送つてもらはずと好い。あの子にはキツとしたおれが送りに付いて居るわい。

法印　ナニ、送りが付いて居る。アヽ、こりや聞えた、わりや巡禮ぢやないな。大方あの娘を誘拐して賣りに行く、山根廻りの惡ぜげんめ。イケ太い奴ぢや。

軍平　何が太い。巡禮するのがなんで太い。この賣僧山伏めが。

法印　なんぢや、賣僧ぢや。何が賣僧ぢや。

ト軍平を引き付ける。菊川取り縋る。舞臺の皆々これを見て

金雲　アヽ、コレ、騷がしい。何を云ふのぢや。

ト見て

ヤア、こなたは今辨慶の天狗坊どのか。

法印　モシ、お所化さん、この野郎が賣僧ぢやと吐かすわいの。

ト胸づくを取る。皆々宥める。杢兵衞、中に入り、引き分けて

杢兵　コレ／＼、法印々々、貴樣は醉うて居るぢやないか。女を捉へて聞き分けの惡い、不請さんせ／＼。

法印　イヤ／＼／＼、不請せぬ／＼。貴樣はなんぢや。この村の庄屋ぢやないか。コレ、こなさんの支配下の百姓を取り扱ふやうに、頭をさへらるゝ法印ぢやないぞ。庄屋の知つた事ぢやない、すッ込んで居さんせ。エヽ、唐變木の癖に。

杢兵　ナニ、唐變木だ。おのれ庄屋に向うて。

ト打つてかゝる。皆々留めて

百四　モシ〳〵、靜かにさつしやりませ〳〵。

杢兵　それでも、あんまり高言を吐き居るわいの…………、コレ〳〵巡禮衆、構ふ事はない、早う行かんせ早う行かんせ。

菊軍　それは有り難うござります。

ト行きにかゝる。

法印　イヽヤ、ならぬぞ〳〵。

皆々　ハテ、構はずと、ござれ〳〵。

法印　この土百姓めらが。

ト錫杖にて打つてかゝる。雲梯留めて大騷ぎ、この間に巡禮二人は足早に上の口へ入る。

法印　イヽヤ、やらぬぞ。ヤイ、待ちおれ〳〵。

ト双盤になり、後追うて法印入る。作助、豐作、捨臺詞にて留めながら入る。四人殘つて庄屋を留めて

百二　ハテ、外聞が惡い。靜かになされませ〳〵。

李兵　口のえらい奴ぢや。

雲悌　御不請なされませ〳〵。

トいろ〳〵宥める。双盤になり、向うより一學、左膳、野袴羽織、大小供の草履取り、二人付き出で來り

供の者、舞臺の爭ひを見て

供二　コリヤ〳〵百姓衆、靜まらつしやれ〳〵。

李兵　ハイ〳〵〳〵、ソリヤお役人樣ぢやぞ。

トこれにて皆々下の方へ蹲まる。兩人上の方へ通り

一學　コリヤ〳〵、見れば其方は當村の庄屋、殊に年寄り役の者も交り、何を聲高に申すのぢや。身共ばかりか同役左膳どのも、お來やる道筋、無禮千萬、扣へ居らぬか。

李兵　へイ〳〵、眞平御容赦下されませう。

左膳　誠に農人と申す者は、別してもない事に、聲高に物申しまするゆゑ、喧嘩、口論の如く聞えまする。この上ともに話し、或ひは相談事、心をつけて申すが好からう。

ト思ひ入れあり

して、住持は罷り在るか。

雲悌　へイ〳〵、御兩所のお出でを、相待ちまして罷り在りまする。

ト奥の方に向ひ

モシ〳〵和尚様、御兩所のお出でゞございまするぞ。

ト呼び立つる。合ひ方になり、和尚、禪宗の頭巾、衣にて出で來り

和尚　これは〳〵、御兩所様には、ようぞや御入來。お役目御苦勞に存じまする。

一學　當寺の住僧鐵砲和尚、この程は打ち絶え申した、何はともあれ、先だつて申し渡し置きたる通り、大殿には近々と、野邊にて鷹野のお催し。その砌りには、寺領の村方百姓家に持ち傳へたる、無銘の一腰、刀、脇差の嫌ひなく、殘らず取り寄せ御覽なされ度き仰せ出だされ。その段委しく相觸れ召されたかな。

和尚　その儀はしかと、寺領の民家へ申し渡し置きましたところ、今日殘らず取り集め、御覽の通りこの長持にて、當寺へ取り寄せ置きましてござりまする。

一學　それは重疊。然らばお鷹野の當日まで、長持の儘、貴僧へしかと、預け置くでござらう。

和尚　承知仕つてござりまする…………コリヤ〳〵大勢の預り物、長持の儘、愚僧が居間へ。

雲金　畏まりました。

李兵　モシ〳〵、お住持さま、生くら者かは存じませぬが、皆村々の百姓の魂、お前も氣遣ひ、わし等も案じまする。マア、斯うさつしやりませ、もし盗人が入つて、長持を攫うて行くやうな事があらば、お前の居間の半鐘を早鐘に打つが好い。その時は皆が駈けつけて參りまする。さうさつしやりませさうさつしやりませ。

和尙　成る程、こりやようござる。そんなら盗人が入つたら早鐘撞くから、來て下されや。

皆々　心得ました〳〵。

和尙　それでは愚僧も安堵ぢやいの。

李兵　左樣なら、よろしうお賴み申します。

一學　罷り立て〳〵。

皆々　アヽ、早鐘のないやうにしとうござる。

ト念佛太鼓の鳴り物になり、百姓皆々捨臺詞にて、向うへ入る。金吾、雲悌、長持を擔ひ奥へ入る。

和尙　それにつき、承り度いは、何ゆゑ又、遠江一國の町人百姓、所持仕りまする無銘の腰の物、殿樣には御覽なされ度いとの、お觸れでござりまするな。

左膳　成る程、不審は尤も。その仔細と申すは、去年以來東山どのには、御眼病とあつて、その眼病を治せんには、當國みねの藥師の尊像、またお家に傳はる曉丸の劍、この白刃に血汐をあやせば、忽ち鷄聲を發し、燒刃に星の影映る希代の劍、この二品の以て祈念なさば、御眼病忽ち平癒。然れども產れ付きにて、身より出たる眼病には決して效かぬと、名醫の教へ。思ひ掛けなう過つて、受けたる眼病、立所に直るは眼前。さ程希代の御劍ゆゑ、東山どのへ差上げんと、御契約ありしゆゑ、御家中濱島幸兵衞、尊像、御劍、持參なし、當國より京都へ急ぎの道中、荒井の宿に泊りの夜、盜賊入りて、二品は勿論、殿より下さる路用の金子五十兩、盜み取つて立退く曲者、引ッ捕へんといたせし所、打ちつけたりし眼潰が眼に入りて、產れもつかぬ盲目同然。さるにても心得難きはその曲者、尊像の似せ物殘し行きしは只者ならずと、幸兵衞は件の似せ物を持ち歸り、申し譯の切腹遂げんといたせし所、御內意あつて、詮議し出だして差上げよと、有り難き御意に依つて、日限極めて、眼病ながら命を的に、二品諸共尋ね出して參るまで、親濱島逸當身が屋敷へお預け、日限りのうちに右の二品出でざる時は、親逸當は是非とも死罪。氣の毒な儀でござるて。

和尚　そのあらましは解りますれど、無銘の劍をお集めなされ、殿樣の御吟味なさるゝとは

左膳　それも即ち詮議の一つ、無銘に打つたる曉の劍、若し心をかけし者、當國に隱して置くかと、一家中申し合はせ、吟味いたすも、お家のお爲めを存ずるゆゑ。

一學　一家中の心遣ひも聞えてはござれども、廻り諄い詮議の仕やう。あの二品に心を掛けし曲者が、よもや、ウカ〳〵と、動き隱し持つては居ますまい。申さば無益の詮議と見えます。

左膳　すりや、貴公には、アノ、二品の行くへは、知れぬとお云やるのか。

一學　イヤ、左樣ではござらぬが、劍は格別、似せ物まで拵らへて、それを殘して奪ひし尊像、出でまいとは存ずるが、そこを身共が尋ね出し、この身の手柄に仕り、立身出世をいたさねばならぬ。俄か盲目の幸兵衛が、詮議立てとは、片腹痛いと存ずるゆゑ。

左膳　左樣ござらば其許さまが、出世の手蔓に尊像を。

一學　尋ね出して、お目に掛けう。

左膳　ハテ、其許は忠義に凝つたる御胸中、左膳め感心仕つてござる。

ト思ひ入れ。

和尚　然らば御兩所には、當寺の奥の間、見苦しくとも、お休みなさるゝがよろしうござりませう。

左膳　お心遣ひ、御無用にいたされいサ。

一學　身共は、これなる御住持とは、檀家の儀と申し、掛合ひまする儀もござれば、幸ひと、内談いたさう。左膳どのには奥の間へ。

左膳　然らば、左樣仕らう。お住持。

和尚　マヽ、入らせられませう。

ト木魚入りの合ひ方になり、左膳思ひ入れありて、家來ついて奥へ入る。兩人殘つて

和尚　さて〳〵、小むづかしい左膳どのゝ今の話し。然らば、この程お話しの通り、あの二品は。

一學　身共が方に隱しござる。兼ね〳〵屋敷へありつきし砌り、譜代の家中、濱島幸兵衞、御前に於て立合ひありしに、後れを取りし拙者が殘念。如何いたして腹癒せをと、思ふに幸ひ、幸兵衞が大役、殿より二品受け取つて、路用の金子まで申し受け、京都へ參る道、只今聞かるゝ通り、越度を拵らへしは、貴僧の家來金吾を賴み

和尚　この國に名高き曲者、今辨慶天狗坊。荒井の泊りへ忍びに入れて、手前の寺にござつたる、藥師の厨子入り持參させ、これを殘して參つたも、ならう事なら似せ物を、あの幸兵衞めに、東山へ持參いたさせ、武將を僞る大罪にて

一學　縛り首にも合ふべき爲めと、出家に似合はぬ貴僧の働き、成就いたさず、似せ物と存じ、持ち歸つて

の申し譯。また、天狗坊めは路用の金と、曉の劍、此方に渡せしが、褒美の不足に、あの、尊像、今に於て身に渡さず、矢張りあの者、所持いたして罷り在る。

ト このあたりに、上の方より、法印出かゝり窺ふ。

和尚　エヽ、すりやその尊像は、山伏めが。

法印　渡しませぬも、褒美が不足で。

ト 好き所へ出づる。兩人見て

和一　ヤ、いつの間にやら天狗坊。

法印　今日も便りを聞きませうと、金吾を賴みに參つたに、好い所で逢ひました。コレ、一學さま、なんぼうわしが盜人でも、命掛けな仕事をさせ、僅かな褒美で釣られては、商賣になりませぬ。それゆゑ渡せぬ、この尊像。

ト 懷より袱紗包の厨子入りの佛と手紙を出し

褒美の金の都合まで、割符の爲めに、留め置く尊像、催促すれば此やうな、お斷わりのこの手紙。コレ……近々のうち、褒美の金約束通りに渡さうと、天狗坊へ一學と云ふ宛名、達つて延引するならば、どうするものだ是非がない、この尊像にこの手紙を添へて、今から濱松の屋敷へ駈込み、

この身を捨て、抱いて入るその時は、危ない首が幾らもある。それでも金を下さらぬか。

和一　アヽコレ、滅多な事を。

法印　今まで待つたが腹が立つ。いつその事に。

一學　アヽコレ、そこを暫らく。

法印　金下さるか。

一學　今と云うては。

法印　そんなら、いつそ。

一學　アヽコレ、氣短かにせず。

法印　そんなら金は。

一學　サア、それは。

法印　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

法印　いつその事に。

ト行きにかゝる、一學懷中より、五十兩の封印の金、エイと打ちつける。立廻つて法印取つて

ヤ、こりや、コレ、いつぞや盗みし金。

一學　封印の儘にて所持せしが、脊に腹は換へられぬ。われに渡せば褒美の都合。不足の所は待つて貰はう。

法印　殘つた所がもう僅か、又ぞろ其うち參りませう。この五十兩下さるからは、この尊像は、あなたへ、しかと。

ト厨子の儘、尊像を一學に渡す。

一學　しかと受け取つた。併し身共も役目の今日、殊に相役左膳めが、何やら嗅いだあの素振り、奪ひし劍も屋敷に置かれず、先刻持參し、門前の老女を、手懐け頼み置き。

和尚　すりや、アノ、劍を御持參か。

一學　貴僧へ頼まん身が胸中。即ち在所は。

ト煙草盆の灰吹を取つて、下の方の水鉢へ打ちつける。グワンと音する。時の鐘。合ひ方。向うより、花賣りの老女一人、木綿やつしにて、白髪鬘、樒の枝とともに、袱紗に包みし白鞘を糸だてに包み、これを抱へ、窺ひ〳〵出で來り、一學を見て

老女　お侍ひさま、合圖の音に早速一腰を。

一學　コリヤ……、あたりへ心を。

老女　畏まりました。

ト思ひ入れあつて、糸だてのうちより、件の白鞘を出し

一學　きつと身共が受け取つた。コレ、花賣りの婆ア、その代りには、この金子、僅かながら、取つて置け。

ト紙入れより、一分を出だして渡す。

老女　ハイ〳〵、これは有り難うござります。滅多に持たぬ一分の金、私しどもには、十兩にも向ひまする。ハイ〳〵、有り難うござります。

和尙　コリヤ、おつめ、その代り誰が聞かうと、必ずともに、口外いたすな。

老女　そりや、お氣遣ひなされまするな。御門前に年久しう御厄介になりまする私し。なんの誰に話しませう。

和尙　その心なら、歸れ〳〵。

老女　ハイ〳〵。こりや有り難うござりました。

トいそ〳〵として、向うへ入る。

一學　この上は、お住持へ、身共が頼みは、劍と尊像、左膳めに、嗅ぎ出されてはものがない。明日までは貴僧へ、しかと預け置く。何分好きにお頼み申す。

和尚　心得ました。愚僧が、しかと、預かりました。

法印　この手紙は後金の濟むまで、法印が證文代りに、持つて居ますぞ。

和尚　ハテ、慾には目の無い天狗坊。

法印　まだ〳〵、先刻見つけた巡禮。あの女めを引攫ひ、岡崎女郎衆と喰らはして、あいつも金に。

和尚　ナニ、巡禮、そいつ綺麗か。

法印　娘盛りの、ぼつとり者サ。

和尚　そいつは話せる。女であらうと、若衆でも、取込む勝負の、鐵砲和尚。相談ものぢや。連れて來さんせ。

法印　呑み込みました、見つけ次第に。

一學　貴僧は必ず、二品を。

和尚　預かりました。氣遣ひ御無用。

一學　然らば奥にて、左膳に逢うて

和尚　何喰はぬやう、御合點か。

法印　ドリヤ、娘を尋ねて來ようか。

ト双盤、風の音、馬士唄、時の鐘。一學は奥へ、法印は上の口へ入る。直ぐに向うより、小萬、着流し、短き脇差を差し、旅女形の拵らへ、紫帽子にて扱帶脚袢中抜き草履、意氣地なき形にて、狂言大小を風呂敷に包み、女形の鬘と一つに持ち、後より女形姫之助、旅役者の拵へ、嫌らしき形にて、明荷葛籠を肩に、三尺帶にて引摺つて出づる。仲働き甚助、旅形合羽掛けにて、明荷半荷を脊負ひ、三人の菅笠を持つて出る。後より馬士又六、裸身に蒲團を着て大音に、ゆすりながら出て來り、好き所にて

又六　コレ〳〵待たんせ〳〵。何も怖い事はない。おりやァ馬士、てめえ達は旅役者の女形、見附の宿から岡崎へかけては、この間の大評判ではしつかり儲けたであらう。何も隱れる事はないワ。大手を振つて歩かんせ。今日來やうと網を張つて待つて居たのぢや。荷物はわしがついて行く。駄賃も安う極めてやらう。酒手ぐるみ七十貫貰ふ。ハテ、九十九貫まで御免の駄賃。サア、つけさんせつけさんせ〳〵。

ト脊負うて居る荷を引ッ張る。

甚助　コレ〳〵、滅多な事しまいぞ。この荷は馬につけるには及ばぬ。おれが脊負うて行くわい。

姫助　さうでござんす。此やうに引ツ張つて行つても、泊りまで氣遣ひない。構うて下さんすな。

小萬　その上こちは馬は嫌ひ、外の旅人を乘せさんせ。馬は入らん〳〵。

又六　コレ〳〵〳〵、お前も美しい顏して、女形ぢやないか。そんな事云はずと、荷をつけて乘らんせ。嫌ぢやと云ふと、この荷はちつとも動かさぬ。オヽ、おれも馬士こそすれ、五十三驛に隱れのない、一里塚の又と云ふ馬士ぢや。サア、無駄云はずと、乘つてもらはう〳〵。

トゆすりかゝる。此うち和尚は女形と聞いて、いろ〳〵思ひ入れして見て居る。

姫助　ハテ、嫌ぢやと云ふに、なぜ無體に乘れと云ふのぢや。

又六　オヽ、云つても大事ない、役者ぢやからつけて行くのぢや。御託張らずと、つけて行け〳〵。

甚助　イヤ〳〵、馬は入らぬ〳〵。

又六　入らぬと云へば、この荷はやらぬ。爰へとめるワ。この鼻垂れめが。

甚助　なんぢや、鼻垂れとは、おれが事か。

又六　オヽ、おのれの事ぢや。

甚助　この宿無しめが。

ト取りかゝりて、兩人叩き合ふ。小萬、姫之助、留める。和尚これを見て割つて入り、馬士を引退け

和尚　コリヤ〳〵、旅の衆を、どうするのぢや〳〵。

又六　モシ〳〵、坊さん、構はんすな。あの、野郎めがぶち居つたぞ。濟まぬぞ〳〵、身骨が碎けたぞ。お代官へ願うて、檢使を願へ〳〵。動きやせぬぞ〳〵。

ト仰向けになつて、にじりかゝる。

和尚　コレ、馬士よ、なんと云ふ、お代官へ願うてお上沙汰にせい。コリヤ、白痴め、爰をどこぢやと思ふぞ。犀が崖の念佛寺、御朱印のある寺ぢやぞ。最前から聞いて居れば、あの衆を、足弱と見てゆすりかけ、その上に御檢使を願へとは、コリヤ、ヤイ、願うてよけりや住持が願うワ。南の領分へうせおつて動かぬも凄じい。動き居らぬと皆が寄つて、墓場へ括つて、藪蚊にせゝらせてくれう。コリヤ、男ども、雲悌も早う來い〳〵。

ト呼び立つる。馬士起上がつて

又六　アヽコレ、坊さん、そんなら好いわいなう。あの、野郎めがぶつたに依つて、荷をやらぬと云うたのぢや。寺支配なら是非がない。置いて行くが、その代り、この領分を離るゝと只は通さぬ。三

人ながら、さう思うて居おれ。

和尙　なんぢや、まだ失せぬか。コリヤ、高聲立てると、お役所からお侍ひ樣が、お二人まで來てござる。サ、そこへあよびおれ〳〵。

ト立ちかゝる。馬士、花道の方へ逃げ行き

又六　エヽ、よう口出しする和尙ぢや。若衆ぢやと思うて、坊主の癖に贔屓さらすか。デモ坊主奴が。

和尙　おのれ捉まへて。

ト追ひ駈ける。

又六　そりや坊主めが怒つたワ。狂人坊主よ、味噌擂り、ヤアイ。

ト馬士唄、入相の鐘にて一散に逃げて入る。

和尙　彼奴、この海道での惡黨めぢや。

姫甚　これはマア、あなたさま、有り難うござりまする。

小萬　役者ぢやと見まするると、只今のやうにねだりまする。殊に私しどもは、前ぶれのござりまする者ゆゑ、得ては、あのやうな無法者に合ひまして、難儀仕りまする。好い所へお出でなされまして

姫甚　ハイ〳〵、有り難う存じまする。

和尚　これはしたり、なんの禮に及びませう。人を助くるは出家の役ぢやわいの。ハヽヽヽ。
姫助　イヤモウ、その役者と見られますると、道中は恐ろしうござりまする。
甚助　このお子達は、上方の衆でござりまするが、近江路から打出しまして、この遠州を打つて廻りまする。成る程女形でござりまする。
和尚　さう見えまするわいの。それはさうと、あのお若衆は、どうやら顔色も惡いが、なんとぞ、しやさんせぬか。
小萬　ハイ／＼、有り難うござりまする。私しは持病に癪がござりまするが、只今のやうに、途中で難儀いたしますると、心遣ひのせゐか、ツイ差込みまして、アイタヽヽヽ。

ト胸を押さへて、思ひ入れ。姫之助差し寄つて

姫助　太夫さん、癪氣かいな。早う藥出して飲まんせいな。

トいろ／＼介抱する。

和尚　それは困つたものぢや。癪が差し込んで歩いては、なほ／＼逆上て惡い程に、ちつとのうちでも、わしが居間へ行つて、氣を靜めて行かんせ。さうさんせ／＼。
甚助　ハイ／＼、それは有り難うござりまする、……モシ／＼太夫さん、あなたがあのやうに仰しやる

程に、お座敷を借りて、ちつと橫におなりなされませ。左樣なされませ〳〵。

小萬　アイ〳〵、其やうに仰しやる事なら、どうぞ氣を靜めて、參じたうござります。

和尙　それが好い〳〵。遠慮には及ばぬ。わしが居間に白湯も沸いて居ます。藥飲んで、ゆるりとさんせ。アレ〳〵、あの杉戸の向うに、屏風の立てゝある所が部屋でござる。あそこへ行かんせ。

ト奧の方へ指さして敎へる。

小萬　アイ〳〵、左樣なら、さう致しませう。

甚助　姬さん、お前連れ申して下さりませ。

姬助　合點ぢやわいの。サヽ太夫さん、お出でな。

ト合ひ方になり、小萬を介抱して姬之助、兩人奧へ入る。

甚助　私しはこの荷物を纏めまして、どうで暮れぬうちに、泊りまで參りたいものでござりまするが、太夫さんのあの樣子では、ハテ、困つたものぢや。

ト荷物をいろ〳〵集めゐる。和尙、思ひ入れあつて

和尙　コレ〳〵、供のお人、今日ももう入り相ぢやわいの。殊に心惡いといふ人を連れ、荷物はあり、どうして行けまい。その上に今の馬士めが、確かに道に待ち受けて居おらうわいの。

甚助　私しも左やう存じまするが、アヽ、困つたものでござります。どうぞ百姓家を無心云うて、今宵の泊りを。

和尚　アヽコレ〳〵、心遣ひさんすな、不自由でも好くば、この寺へ泊めてやりませうが、泊つてござるか。

甚助　それはマア、有り難うござりまする。有やうは、此方からお願ひ申しても、左様なされて下さりますと、誠に私しも安堵いたしまする。あの衆も嘸喜ぶでござりませう。

和尚　なんの〳〵、易い事でござる。コレ〳〵若衆、今貴様が太夫と云はしつた若衆どのは、なんと云ふ女形ぢや。

甚助　ハイあれは、中山小夜吉と申しまする立女形でござりまする。今一人のが、勝馬姫之助と申しまする娘形でござりまする。

和尚　アヽ、左様か。承り及んだ高名な役者衆ぢや。コレ、愚僧も今宵は少々心祝ひの事もあり、精進酒なと、進ぜませう。心置なう泊るが好い。あのやうな衆を連れては、さぞ貴様、心遣ひであらうに。

甚助　左様でござります。

ト挨拶のうち、住持は手箱の内より、小粒の包みたるを出し

和尚　コレ〳〵、若衆、些少ながら祝儀進ぜう。草鞋錢にさんせ。

ト渡す。

甚助　へイ〳〵、これはいかなこと、お泊め下さる上祝儀までを、エヽ、有り難うござります。

和尚　なんの禮には及ばぬが、貴樣に少々、コレ。

ト囁く、甚助、思ひ入れ。

何分頼みます〳〵。

甚助　隨分と私しが働きませう。それに致しても二人の衆に逢ひまして、お宿なさるゝ事を話しまして、安堵させておきませう。

和尚　そうさんせ〳〵。不自由であらうがその代り、遠慮なう泊まるが好い。

甚助　イエ〳〵、此やうな仕合せな事はござりませぬ。左樣なら二人に話して參じませう。

トいそ〳〵と奥へ入る。

和尚　サア〳〵〳〵、今宵は面白うなつて來たわえ。それにしても、アノ、マア、左膳めは早う歸りおらいで、このマア、一學どのから預かつた大切な二品。ひよつと左膳に見つけられては一大事。

ア、、コレ、我が寺ながら、滅多な所へも置かれず。

トあたりを見廻し、明荷の上に乗せある狂言の大小の包みを見つけ、思ひ入れあつて

好い物があつたわえ。

ト風呂敷の中より大小取出し、捨臺詞にて、預かりし白鞘のなかごを抜き、狂言大小のなかごと入れ替へる事よろしく

ア、、コレ、狂言の大小ぢやが、どうやら正眞の刃物ぢやわえ。

ト白鞘の白刃は狂言の大小に納め、元の通り風呂敷に包み、似せの白刃を仕込みし白鞘を持つて、これもこの儘出しても置かれぬ、と思ひ入れあつて、佛間の脇より掛物を入るゝ白木の大箱と竹の吊花活を取り出し。

あるぞ〳〵。ちつとのうちも、この中へ隱して置いて。

ト白鞘物を掛物箱へ入れ、尊像を吊花活へ隱す。此うち上の方より、法印何心なく出かゝり、和尚が様子をよく〳〵見て頷いて、思ひ入れ。奥より甚助、何やら云ひながら出て來るゆゑ、法印はソッと入る。

甚助　申し〳〵お住持さま、只今の儀を二人とも申し聞かせました所、大きに喜んでゝござりまして、

よろしうお禮を申してくれと申されまする。ハイ／＼、有り難うございまする。

和尚　なんのマア、これしきに禮どころかいの。併し件の事は、好いかな／＼。

甚助　それも隨分、よろしうござりまする。

和尚　そりや、忝ない。貴樣の庇で今宵は好い正月をするのぢや。

甚助　何を其やうに、マア、ハヽヽヽ。

ト荷物を見て

これはしたり、御本堂へ荷物を取り散らして。こりや、お座敷へなと、持つて參りませう。

ト件の大小の入りし包みを取る。和尚見つけ、これを留めて

和尚　アヽ、コレ／＼、その包みをどこへ持つてござるのぢや。

甚助　ハイ、爰はお邪魔と存じまして、あなたのお居間へ持つて參りまする。

和尚　アヽ、左樣か。それなれば愚僧も安堵ぢやわいの。

甚助　左樣でござりまするか。私しもまた、なんの外へ持つて參る事ぢやござりませぬ。アヽ、モシ、その箱は何でござります。

和尚　これかナ、この箱には掛物が入れてあるぢや。役者衆を泊めた今夜の晴れに、掛物も掛け直し、

甚助　またこの花活へ、杜若か薊を生けて、御馳走申すぢや。
甚助　それは有り難うござります。……時にこの明荷は、一荷にいたして
　　ト當りの方を取つて兩掛けにして擔ぐ。大小の包み、掛物箱、吊花活は和尚大事さうに持つて
和尚　わしも手傳うてやりませう。
　　ト件の女鬘を見つけ
　こりや、鬘かな。
甚助　左樣でござりまする。
和尚　どのやうな按排ぢやな。
　　ト被つて見て
　似合うたかな。
甚助　イヤ、一角の太夫さんぢや。
和尚　そりや、忝ない……さう聞いては、住持も今から、宗旨を替へようか。
甚助　何宗でござります。
和尚　役者宗に。ハヽヽヽ。

甚助　こりや、出來ました。

ト唄になり、甚助一荷に擔ぎ、大小の包みを持ち、和尚掛物箱、吊り花活を提げて奥へ入る。直ぐに合ひ方、上の方の口より、菊川走り出づるを、法印追ひ駈け出る。軍平、これを支へて出で來り、あちこちして

法印　コリヤ〱、姐え、逃がしはせぬぞ〱。

軍平　これは無體な山伏どの、女中を捕へて、何するのぢや。

菊川　コレイナウ、軍平、この人を早う去なしてたもいなう。

軍平　ハイ〱、怖い事はござりませぬ。私しに取付いてござりませ〱。

法印　コレサ、何も惡い事はしませぬぞ。わしは貴様達を、よい宿へ泊めて進ぜうと思うて、尋ねて歩いたのぢや。先刻にも、道案内してやらうと思うたを、百姓めらが邪魔ひろいで、それなりにツイ逃げうせた。惡い事は云はぬ。泊りの世話してやるのぢやわいの。

軍平　そりや、忝ないが、わし等には道連れがありますから、その宿へ泊りまする。決して構うて下さりますな。

法印　ハテ、其やうな事云はずと、わしが世話してやるわいの。連れの宿へは貴様泊まるが好い。この

子はわしが世話して。

ト菊川を捉へる。

菊川　エヽ、滅相な。構うて下さんすな。

ト振り切るをまた捉へる。軍平留めるを手荒く突き退け、菊川を連れて行かうとする。好き時分、上の障子の内より、左膳窺ひ寄つて二人を圍ひ、法印を突退ける。菊川、軍平、左膳を見て

菊川　ヤア、お前は兄さん。

軍平　御主人様。

ト云ふを消して

左膳　コリヤ〳〵、兄とは誰が事、主人などとは何んの痴言。物貰ひの巡禮に近づきは持たぬぞ。武士を捉へて慮外千萬。

ト紛らす。法印思ひ入れあつて

法印　モシ〳〵、お侍ひ様。なんで私しを爰へお突退けなされました。イヤサ、お侍ひ様、なぜ私しを手荒うなされました。

左膳　手荒うしても大事ない。最前より物陰に窺ふ所、女子を捉へて、手荒う致したその報い、そりや

ありうちと心得、早う立て。

法印　イエ〳〵立ちますまい。道連れのあの巡禮、譯ござりまするゆゑ、手荒うも致すのを、あなた樣が横合ひから

左膳　差し出構しう申すなどゝ云ふ事か。左樣か〳〵。

法印　マア、左樣なものでござります。

左膳　默りおらう。コリヤ、ヤイ、國の政治を取計らふは、我れ〳〵が役目。見ればおのれは足弱と侮どり。して、アノ、女を如何いたすのぢや。

法印　あの、女は宿場へ賣つて金にしますワ。

菊軍　エヽ。

左膳　何と申す。

法印　これサ供の人、恍けた顏さんすな。こなさんがわしを賴んで、この女を宿場女郎に世話してくれと賴んだゆゑ、その相談に乘つたを、今さらこなたは知らぬ顏して居ては濟むまい。サア、娘を渡すか、但しは法印が身に曇り霞があるかないか、侍ひ衆の前で、きつぱりと譯をつけて貰ふワ。

軍平　コレ〳〵、この人は滅相な事云ふ。どこにおれが其やうな事。

菊川　コレイナウ、わが身はほんまにわしを、アノ、女郎に。

軍平　なんのマア、勿體ないお主様の娘御を、家來の私し、どうして左樣な。

法印　イヽヤ、賴んだ〳〵。主の娘、飯盛りに賣つてくれろと、おりや、こなさんに賴まれた。

トまくし掛けて爭ふ。左膳思ひ入れあつて

左膳　コリヤ、法印とやら。其方は修驗者と申すが、名は何と申す。

法印　ハイ、わしが名はこの遠州に隱れのない、今辨慶天狗坊と云ふ、山伏でござります。

左膳　すりや、其方が、今辨慶の天狗坊とな。

法印　左樣でござります。

左膳　自分の白狀、相違もあるまい。サ、法印、繩掛かれ。

ト立ちかゝる。法印狼狽へ

法印　アヽ、モシ〳〵〳〵、なんで私しを縛らうとはなされまする。縛らるゝ科はない。滅多な事仰しやりまするな。

左膳　默りおらう。おのれ知るまいと思ふか。京都より火急の御狀、それに添へたる人相書、これ見おらう。

ト法印の人相書を出だし

生國山城の國小原の產まれ、當時盜人今辨慶小天狗と云ふ奴、この地に於て詮議嚴しく候ふ間、正しくその地へ立越えしとの風聞。御詮議あつて然るべしと、委しき書狀が役所に參つた。サ、今辨慶なら腕廻せ。

ト立ちかゝる。法印悚へ出し

法印　アヽモシ〳〵、私しは左樣な者ぢやござりませぬ。辨慶とやら、天狗とやら、そんな者ぢやござりませぬ。私しは眞面目な山伏、今辨慶ぢやと申したは、ありや人を怖がらす當座の僞り、毛頭左樣な者ぢやござりませぬ。ヘイ〳〵、そりや間違ひでござりませう。

左膳　すりや、おのれ今となり、左樣な者ぢやないと申すか。

法印　決して左樣な者ぢやござりませぬ、ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。

左膳　その申し譯、暗い〳〵。矢張り繩打ち、屹度吟味をと申す所なれど、そこが即ちお上のお慈悲。これぞと申す科なきうちは見遁しくるゝぞ。異名も似寄の天狗坊、いづれへなりと飛び去りおらう。

ト見事に取つて投げる。法印思ひ入れあつて

法印　ハイ〳〵、飛び去りまするでござりませう。仕事しかけた、あの女、どうも爰では。

左膳　何と致した。
法印　イエ〳〵、何とも致しませぬ。法印只今、飛び去りまするでござりまする。
ト心を殘し、合ひ方になり、法印ツイと下座へ入る。
左膳　無益な事に、ドリヤ、奥へ參つて
ト行かうとする。兩人縋つて
菊川　お心強い兄上樣。
軍平　あなたの直ぐなお心に、違ひまするも菊川さま。
菊川　女の操を立つるから。
左膳　それで家出を致したか。コリヤ、不所存者めが。
ト合ひ方、變る。思ひ入れあつて
親、兄に沙汰も致さず、京都の屋敷を家出なし、家來を連れてその姿、徘徊歩くは御主人へ、御難儀かけし濱島幸兵衞、彼が行くへを尋ぬる心か。コリヤ、ヤイ、許嫁せし男ゆゑ、左樣に思ふも尤もながら、御不興受けし濱島氏、巡り合うても詮議なす、二品手に入るそれまでは、女夫の結びは叶はぬ事ぢやぞ。

ト屹度思ひ入れ。

菊川　兄上樣のそのお詞、辨へませぬにあらねども、幼ない時より許嫁の幸兵衞さま、京とお國と隔たれば、成る程知らぬ果敢ないわたし、世間のお人の噂には、立派な殿御と沙汰あるゆゑ、早う祝言嫁入りと、思う其うち浪花なる、島の内と云ふ遊里にて、小萬と云ふ藝子さんに馴れ馴染、深い仲ぢやと聞く悲しさ。その後都にて逢うたを幸ひ、其うち身をと思ふうち、殿樣の御用につき、二品の寶御持參なさるゝ役目とて、直ぐにそこからお國へお下り。御持參なさるゝ道に於て、失うた科目とて、お屋敷にお出でも、えゝ叶はず、二品詮議の御流浪と、聞く悲しさに身も世もあられず、お後慕うて巡禮姿、兄さん、堪忍して下さりませ。

軍平　ハイ〳〵、あの通りでござりまする。幸兵衞さまの在所知れねば、自害して死ぬるとあるゆゑ、やう〳〵騙し賺して私しが、お合せ申して上げませうと、それからのこの巡禮。お供いたしてお尋ね申す幸兵衞さま、その片手間には寶の行くへ、もし手掛かりもあらんかと、道行く人の噂をも、仇に聞かぬは、お連れ合ひ、幸兵衞さまを思召し、それゆゑのこの家出。旦那さま、嘸お腹も立ちませうが、この下郎めをどのやうになと遊ばしまして、お妹御樣の事ばかりは、ハイ〳〵、御堪忍なされて下さりませ。

ト取りつき歎くに、左膳ほろりとして

左膳　僅かな切り米取りながら、譜代の小者なればこそ、主人の娘と勞はりて、女子供を養育の禮、云ひ度うても刀の手前、云はぬは云ふに勝つた切なさ。左膳もその儀は辨へ居る。コリヤ、巡禮の女、今にも其方が、許嫁の男に若しも逢うたなら、身共が傳言いたしたと申してナ、何とぞ二品尋ね求め、差上げぬその時は、親逸當は死罪の御沙汰、東山家のお科目にて、殿のお家に關はる大事と、よく其方物語り、片時も早う、寶の行くへ。

ト思ひ入れあり

限り知れざる長旅の、巡禮二人へ、心ばかりの身が手の內。

ト懷中の包み金投げやる。菊川取つて

菊川　お志しのお手のうち、兄上樣……ではない、見ず知らずのお侍ひ樣。エヽ、有り難うござりまする。

軍平　お許嫁の幸兵衞さま、今にもお逢ひなされたら、その時こそはおめでたう。

左膳　イヽヤ、寶を取得るまでは、逢うたればとて、お上へ恐れ、必ずともに心をつけて。

軍平　畏まりました。サア、菊川さま、日暮れぬうちに少しなりとも

菊川　そんなら爰にてお別れ申し、好き吉左右を、お知らせ申すそれまでは。
左膳　兄弟ならぬ他人むき、必ず健固に。
菊川　あなたも御無事で。
左膳　アヽ、武士の道程
菊川　浮世の義理も。

ト思はず互ひに顔見合はせ、左膳思ひ入れ。

さらばでござりまする。

ト三重、時の鐘にて、軍平思ひ入れあつて、菊川を勞り兩人向うへ入る。左膳思ひ入れあつて

左膳　不屆者めと叱れども、男を思ふ貞女の妹。譽むる事さへ心に任せず、これを思へば世の中に、
せまじきものは

ト思ひ入れあつて

よう、譬えたわえ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、奥より一學、和尚ついて出て來り

一學　これは〳〵、左膳どの、これにお居やつたか。お屋敷よりの指圖の儀は、萬事住持に申し渡し、

和尚　近々鷹野の砌りまで、集め置きたる無銘の劍。殘らず當寺へ預け置きます。山寺ながらも、用心堅き當院なれば、お氣遣ひな儀はござらねど、事に依つたら寺領の百姓呼び寄せまして、お鷹野のその前方は當寺の堅め、その節はよろしう願ひ上げまする。

左膳　尤もの一儀、承知いたしてござる。閉ざゝぬ御代とは申すものゝ、何とやらん心ならざるこの程の噂。

一學　左様でござる。承れば因幡幸藏と申す盗人、手下を集め、この遠州を徘徊いたすとやら、打ち捨て置かれぬ盗賊沙汰、この儀も詮議いたさずばなりますまい。

左膳　イカサマ、家の鼠、國の盗人。その群れ數多出來ぬうち、吟味いたすが好くござらう。

一學　その儀、國中へ觸れ出しまするでござらう……斯やう申すうち、最早黄昏、左膳どの、歸宅仕つらう。

左膳　御同道いたすでござらう。

和尚　最早お立ちでござるかな。

一學　左様でござる、……コレ、お住持、只今貴僧も聞かるゝ通り、因幡幸藏とやら申す、盗賊の噂もござればナ、預かりの品大切に渡さるゝがよい。必ずともに氣をつけて、御合點か。

和尚　イヤ〳〵、その儀はお氣遣ひなさるゝな。刀、脇差、多く集りござれども、たかゞ百姓の魂ひ。殊には殘らず無銘と申し、餘り値打ちもござるまい。さすれば、それを目がけまする盜人もございますまい。

一學　コレサ〳〵お住持、その無銘の劍ゆゑ大切でござるワ。百姓どもの持參の品は構はねど、彼の身共より

ト云はうとして、思ひ入れあつて

サ、身共とこれなる左膳どの、役目を受けて集めし劍ナ、アノ劍、大切でござるぞ。承知でござるか承知でござるか。ハテサテ、貴僧は物覺えの惡い。

トいろ〳〵と云ひ廻す。和尚、やう〳〵心づき

和尚　成る程〳〵。承知々々。ハヽヽヽ不調法な、お預けなされたアノ二品……ではない、蓋した長持へは屹度蓋した。蓋をして置くからは、よもや手もかけますまい。よし又盜人ども參つたら、最前もお聞きの通り、愚僧が居間の半鐘を打つて、村中を集めまするからは、隨分用心の所はお氣遣ひなされまするな。

ト何やら怪しく云ひ廻すゆゑ。左膳も心得ぬと云ふ思ひ入れ。一學側より思ひ入れあつて

一學　成る程、蓋して置けば氣遣ひもござるまい。その上半鐘の合圖もござれば、誠にそれでは大丈夫でござらう。ハヽヽヽヽ。イヤ、左膳どの、サヽ、歸宅なされいサ。

左膳　然らば左樣仕らう。

トこなしあつて

イヤ御住持、只今の仰せ、集め置きたる劍は殘らず、アノ、長持に蓋してござれば、氣遣ひもござらぬとは、長持に蓋のないのはこれ迄に承らぬが、その長持は用心のよい

ト思ひ入れあつて

ハテ、長持に蓋がござるぢやまで。

ト目をつけて、思ひ入れ。奧より家來二人箱提灯を持ち、走り出で、

家來　お立ちでござりますか。

左膳　如何にも歸宅、サヽ、一學どの。

一學　然らば御住持。

和尚　御兩所樣。

一左　お暇いたさう。

ト唄、暮れ六ツの鐘になり、この人數向うへ入る。和尙見送り居て

和尙　サテ〳〵あの、左膳めに大きに困つた。早う歸して、先刻泊め置いた女形を集めて、酒にしようと心の急くに、氣のつかぬ左膳めが歸つたからは、大洒落々々、よしこの洒落が御城主へ聞えたとて、女と違ひ若衆狂ひ、尻の來る氣遣ひなし。よし又來ても、だんない〳〵、大事中山小夜吉に、夢幻の鐘でも望んで見ようか。

ト合ひ方、時の鐘になり、和尙勇み進んで入る。よき時分下の方より、法印出かゝり居て

法印　先刻和尙が預かつたあの二品、この寺にあるこそ幸ひ、又ぞろ此方へ盜み取る、その在所も坊主めが、同腹中の法印ゆゑ、あけなんこに見せたるからは、和尙が居間へ忍び込み、又ぞろ二品。うまい〳〵。

ト頷いて、思ひ入れ。杉の陰より二人の百姓窺ひ出て

百二　ヤア、先刻の山伏、見つけたぞ。

法印　わい等は邪魔した、佐助、豐作。また爰へうせたのか。

佐助　オヽ、巡禮の肩持つは、後生願ひのこの二人。

豐作　惡企みする山伏め、この國を追ひ拂ふ。おいらと一緒に

兩人　失せおらう。

法印　何を痴語、土百姓、邪魔ひろいだら、叩き挫くぞ。

兩人　さう云ふおのれを、おいらが寄つて

ト引きつける。

法印　ヱヽ、何ひろぐ。

ト振り切り立廻つて見得。これより念佛太鼓の鳴り物にて、三人可笑味のタテありて、面白き見得にて、しやんと留まり、時の鐘にてこの道具ぶん廻す。

本舞臺、正面床の間、違ひ棚、爰に尊像を隱せし吊り花活、杜若活けてあり、白鞘を入れし掛物箱を直し、六枚屛風に和尚の衣頭巾掛けてあり、下手に長持、好き所に明荷一荷、その上に風呂敷に包みし大小を乘せ、眞中に炬燵の素櫓、尤も高足屋體、これに半鐘を釣るし燭臺を照らし、居間の模樣。すべて山の上より建てたる屋體、後にせり上ることあり、爰に小萬、件の女形。和尚醉うたる體にて寄りかゝり居る。金吾大井の緣を箸にて打ち拍子取り居る、甚助、棕櫚箒を三絃に見立てゝ扇にて引く眞似して、口三味線の體。雲悌長唄を唄ひ居る。姬之助、抱へ木魚を結びつけ、煙管を持ち、道成寺鞨鞁の段を踊り

居る。あたりに銚子、杯、取り肴、吸物等取り散らし、道成寺の所作の鳴り物にて道具留まる。
ト皆々よろしくあつて、所作納まる。

皆々　イヨ〳〵、姫之助さま、出來ました〳〵。

和尚　さて、これからは小夜吉丈の夢幻の鐘が、見度いな〳〵。

小萬　アイ〳〵、隨分と致しませうが、只今少々癪氣でござりますれば

和尚　イヤ〳〵今には限らぬ。逗留のうち一度は見度うござるて。その代り愚僧が引き受けた杯、つけざしが賴み度い。

小萬　そりやお易い事でござりまする。
ト杯を取つて飮む。雲悌見て

雲悌　エヽ、氣の揉める事ぢや。師匠坊には差し杯だけ、愚僧は差詰め姫之助どの、エヽ、寄りかけんせ寄りかけんせ。

姫助　サイナ、わたしも小夜吉さんとお住持さんの素振りを見ては、モウ〳〵、わたしやお前にこの身を任すわいな。
トしなだれかゝる。


甚助実ハ盗賊のらの小助
鉄砲和尚
小夜吉
うんてい

雲悌　さてはその氣か。可愛の者やな〳〵。
　　ト寄り添ふ。金吾見て
金吾　サア〳〵、おればかり出者になつた。野郎役者は嫌ひなれど、相手は構はぬ。アヽ、コレ、若衆が欲しい若衆が欲しい。
甚助　モシ〳〵、其やうに若衆が欲しくば、私しではどうでござります。今でこそ野郎なれ、わしも以前は若衆でござつた。前髪がないばかり、値段も少々下げませう。引け者で間を合はさつしやりませ。
金吾　我れらもさうは思へども、野郎の若衆に野郎とは、脚氣の藥にもなるまいが。
甚助　イエ〳〵、至つて妙藥でござります。
金吾　何を痴けた。
和尚　サア〳〵、無駄を云はずと、今の後が見度いな〳〵。
姫助　そんなら鐘入りの段を踊りませう。
和金　所望ぢや〳〵。
雲悌　さらば愚僧が唄ひませう。……エヘン〳〵。
　　去る程に〳〵、寺々の鐘、月落ち鳥鳴いて霜雪天に滿ちし程なくこの山寺の江村の漁火、愁ひに對し

て、人々眠ればよき隙ぞと、立ち舞ふやうに狙ひ寄つて撞かんとせしが、思へばこの鐘恨めしやと

て、龍頭に手を掛け飛ぶよと見えしが、引つ擔いてぞ失せにけり。

ト以前の如く所作ありて、姫之助、あたりにある母衣蚊帳を取つて、はら〳〵と被る。

甚助　ソリヤ、ドロ〳〵に鐘ぢや〳〵。

金吾　オツと合點、太鼓の代りにドロ〳〵。

ト屏風を叩く。

甚助　モシ、お住持さま、釣鐘の落ちた音を、あなた、ちよつと間を合はして。

和尚　合點ぢや〳〵。鐘の音なら、コレ〳〵爰の。

ト軒に釣るしある半鐘を撞木にて無性に打つ、姫之助は引つ擔いで失せにけりと唄ひながら、母衣蚊帳を被つたり出たり、幾度もする。この半鐘を合圖と心得、向うより杢兵衛先に百姓大勢、鋤鍬を持つて走り出て來り

百皆　盜人でござるか〳〵。

ト立ち騒ぐ。舞臺の皆々恟りして

和尚　コレサ〳〵、貴樣達は何しにござつた。イケ騒々しい。

李兵　何しにとは、合圖の半鐘が鳴つたゆゑ、駈けつけましたが
百皆　盜人が來ましたか〳〵。
和尚　成る程、さうであつたの。イカサマ、思へばその盜人は。

トもじ〳〵して

未だ來ませぬ。
百皆　來もせぬ者を、半鐘はなぜ打たしつた。
和尚　サア、今のやうに半鐘打つたは。
百皆　何でござるな。
和尚　オヽ、それ〳〵、弔ひが來ました、それで打ちました。コレ〳〵、爰に居る衆は、その弔ひの施主でござるわいの。
李兵　アヽ、左樣か。寺の弔ひに半鐘打つは當り前。それはわし等が不調法でござつた。
百皆　今度からは弔ひの半鐘には駈けつけますまい。
和尚　左樣々々、よくその音を聞き分けてから駈けつけさつしやい。
百皆　呑み込みました。聞き分けて來ませう。

李兵　ハテサテ、半鐘と云ふ物は、むづかしくなるものでござる。

百皆　左樣でござる。

ト捨臺詞にて、向うへ入る。

和尙　エヽ、あの間拔けめ等で、大きに魂消た。

金吾　これからは斯樣なされませ。この甚助に何ぞ藝を望みませう。

雲悌　それはよからう。役者について居るからは藝者でござらう。サア〳〵、見度い〳〵。

甚助　アヽモシ〳〵、私しは無藝でございます。誠に藝無し猿でございます。

和金　イヤ〳〵、隱し藝があらう〳〵。

小萬　アヽ、モシ〳〵、あの男は誠に無藝でございますが、その代り、たつた一ツ覺えた事がございます。

三人　それが見度いな〳〵。

甚助　アヽ、モシ〳〵、あれは御免なされませ〳〵。

小萬　ハテ、大事ないわいの……モシお住持さま、外でもございませぬが、あの男をどのやうに縛りましても、屏風の内へ、少しの間入れて置きますると、その繩をどうしてやら解きまする。そればかりは奇妙でございます。

和尚 イカサマ、それは一藝でござるの。なんと爰で出來まいか。

金雲 見度いな〳〵。

甚助 太夫さんとした事が、悪い事仰しやりまして、たうとう大事の、藝の棚下しをなされまする。あれで濟む事なら致しませうか。

三人 見度いな〳〵。

姫助 サア〳〵、わたしが縛つてやらう。繩をお貸しなされませ。

金吾 合點ぢや〳〵。

ト細引を出して渡す。

姫助 サア甚公、そちらを向かんせ。

甚助 野郎にお若衆がそちら向けとは、こりや天違ひでござりますな。

ト後向きになろうち、姫之助よく〳〵甚助を縛つて

姫助 サ、これで拔けて見さんせ。

甚助 ちよつと屏風を、立てゝ下さりませ。

雲梯 オツト、合點。

ト件の屏風を立てゝ、甚助を隱す。

和尙　アヽ、そんなら、あの屏風のうちで、繩を拔く手品があると見えるわいの。

小萬　あれが卽ち、繩拔けの魂膽を見せぬと云ふが、祕事と見えまする。

金吾　イヤ、その位な事はありませう。ハテサテ、あの男は奇妙な事を覺えて居まするな。

トこの時屏風のうちにて

甚助　サア、好いぞ〳〵、屏風をお取りなされませ。

三人　そりや、拔いたと見える。

ト屏風取り退ける。甚助、繩を持ち眞面目になつて居て

甚助　只今縛られましたる繩は、この通り拔けましてござります。

三人　イヨ〳〵奇妙々々。

甚助　相變りませぬ儀を、御覽に入れました。

小姬　分けて今日は見事であつたわいの。

和尙　イヤ、感心〳〵。なんと甚公、あの繩拔けを、愚僧に傳授してはくれまいか。

金吾　我れらもどうぞ、覺え度いものでござります。

甚助　そりや、モウ、お好みならば、なんぼでも教へて上げまするが、その代りお前樣方を縛らねばなりませぬが、御承知でござりまするか。

和尚　ハテ、傳授受けるからは、その位の事は有りうちの事であらう。

金吾　どうぞ覺え度うござるわいの。

甚助　左樣なら傳授いたしませう。今一條縄をお貸しなされませ。

金吾　オット、合點々々。

ト渡す。甚助、細引を二條持つて

甚助　左樣なら、屛風の中で教へまするぞ。

和尚　それは奇妙々々。二人一緒に教へるのか。

甚助　左樣でござります。…………先づ屛風を立てませう。

金吾　モシ〳〵、そこに炬燵の穴がござります。

和尚　オット、承知ぢや。

ト屛風引き廻し、三人入る。

小萬　モシ、お前もあの藝を習ひなさんすかえ。

雲悌　イエ〳〵、愚僧は何も縛らるゝ科はせず、繩抜けを覺えるには及びませぬが、わしはちつと、外にお前方に頼みがあるて。

姫助　そりや、なんでござんすかえ。

雲悌　イヤ、外でもないが、お前方のその風體、見ては愚僧も、同じ人間に變りはござらず、此樣な頭で味噌摺り坊主で果てるも殘念。そこで俄かに女形にならうと存じ付いたが、なんとなられませうか。

小萬　そりや、モウ、隨分と出來ませうが、お前、狂言でもなされた事がござりますかえ。

雲悌　あります〳〵、去年祭禮の舞臺を勤めました。その狂言はなんでござつた、忠臣藏に、下の彌五右衛門が定九郎で、愚僧は與一兵衛をいたして、大きに當てました。その時わしが定九郎に取り付きまして、これは金ではござりませぬ、晝食の握り飯でござりまするとと泣きました所が大評判でござつた。

姫助　それは好い事を覺えてお出でなされまする。その下地があつては、隨分と役者になられます。ちよつと、マア、稽古して御覽じませ……モシ、太夫さん、お前定九郎になつて上げなさんせ。わたしや淨瑠璃を語らうわいな。

小萬　滅相な、わしが、マア、定九郎とは、ホヽヽヽ、何も稽古ぢや、相手になつて上げやうかえ。

雲悌　それは有り難い、何分よろしう。
姫助　爰に狂言の大小があつたぞえ。
ト風呂敷の中の大小を取つて渡す。小萬これを差して刀を抜き
小萬　姫さんちよつとお語り。
姫助　アイ〳〵。
〽覺悟ひろげと切り付ける、刀のまはりか手のまはりか、白刃をしつかと握り詰め。
ト淨瑠璃を語る。兩人をかしき立廻りにて刀の手を留める
サヽ、爰でお前の臺詞があるぞえ。
雲悌　さうでござつた〳〵。エヘン〳〵、……これは金ではござりませぬ、握り飯でござります。イヤ反魂丹でござります、お助けなされて下さりませ、……と爰で睨みまするかな。
小萬　イエ〳〵、泣く所でござりまする。
雲悌　ハイ〳〵、泣きまするかな。
ト大聲上げて泣く。小萬、思ひ入れあつて
小萬　もそつと靜かにお泣きなされませ。

雲悌　ハイ〳〵心得ました。小泣きに泣きまするかな。

ト啜り泣きする。

小萬　サア、金を出せ、出さぬとこのだんびら物が、われが腹へお見舞ひ申すが、キリ〳〵金を出すまいか。

ト立役の身振り。姫之助付け拍子木を打つ。

雲悌　イエ〳〵金ではござりませぬ、晝食の麥飯、ではなかつた握り飯でござんすわいの。

小萬　イヽヤ、誠の金出せ。

雲悌　握り飯でござんすわいの。

小萬　イヽヤ、誠の金を出せ。こなたの方に金がなくば、住寺の居間にしまうてあらう。その金を早う出せ。

姫助　キリ〳〵坊さん、金を出さんせ。

トつけを打つ。雲悌、二人が素振りを見て氣味惡き思ひ入れにて

雲悌　コレ〳〵待たんせ〳〵。お前方の云ふのは、芝居の稽古ぢやなうて、どうやら誠に云ふやうに聞えて……それ〳〵、その振り上げて居さんす抜き身も、舞臺道具のやうぢやなうて、あんまりピカ

ピカ光るやうで、慄へが來ます。それにつけても、お住持は何時まで繩の稽古するやら。

ト屏風の方へ思ひ入れ。

姫助 閑のいるのが、此方の付け目、寺の有り金、早う出さんせ。

小萬 出さぬと二尺八寸が、こなたの腹へ。

ト思ひ入れあり

キリ〳〵金を出すまいか。

ト屹度思ひ入れ。雲悌二人をよく〳〵見て

雲悌 イヤア、狂言紛れに寺の金、盗みに來たか……そんならわい等は。

姫助 音ぼね立てるな。

ト引付ける。雲悌、逃げんとして屏風へ取りつく。あちこちするうち屏風は倒れる。中には和尚、金吾、裸にして猿轡をかけ、件の繩にて縛り上げ、甚助始め馬士又六、杣の岩藏、柴藏、都合四人炬燵の穴より龕燈照らし出かゝり居る。雲悌、ワッと驚ろき逃げるを、姫之助取って投げる。起き上がるを小萬踏み飛ばし、白刃を突きつけて、屹度見得。凄き合ひ方、時の鐘、時鳥の聲、雲悌慄へ〳〵

雲悌 さては殘らず、云ひ合はせの押込みぢやな。

小萬　好い推量ぢや。今この國に隱れなき、因幡幸藏と云ふ盜人の張本ぢやぞ。

皆々　おいら方には、お頭だワ。

雲悌　イヤア。

小萬　今日この寺に紛れ入り、寺中の金銀、衣服、その外諸道具望みにない。併し盜めば手下の配分。この幸藏は名作の、劍欲しさにこの世渡り、これも矢ッ張り、この身の病。國の城主の觸れあつて、村々在々無銘の劍、集め來たりしあの長持、一々中を詮議して。

皆々　心得ました。

ト皆々立ちかゝり、長持を明け、中に入れある限り刀、脇差を出だし、一々拔いて小萬に見せる。白刃を取つて柄を拂ひ、殘らず小萬改め見て、思ひ入れあり

小萬　これ程心を盡くせども、今に劍の。

皆々　在所もそれと

小萬　知れぬと云ふも

ト思ひ入れあり

して、尊像も。

岩柴　當寺の内にも、ござらぬ樣子。

小萬　ハテ、なんとせう。これから外を、……今夜の仕事は皆が骨折り。

皆々　そりや忝ない。

ト手早く明荷葛籠を明け、着類、佛具の類を奥より持ち出し、明荷へ入れる。

雲悌　さてはおのれは。

ト起き上がるを、小萬、見事に當てる。雲悌、氣を失うて倒れる。皆々身拵らへして

皆々　して、比奴等は。

小萬　命取らずに長持へ。

皆々　心得ました。

ト和尚、金吾は縛られし儘、氣を失ひ居る。雲悌も引ッ立て、三人ともに長持に打ち込み

姫助　して、この半荷の、明荷はお前が。

小萬　その子寶を、隱した明荷はわしが脊負うて……さりながら、明けなば人目。

ト落ちてある和尚の頭巾、衣を取り上げ

丁度幸ひ。

皆々　姿を替へて。

ト姫之助、甚助、手傳うて小萬に衣、頭巾を着せ、これにて差したる大小隱れる。

小萬　わいらは先へ。

皆々　お頭、後から。

小萬　コレ、

ト思ひ入れ。皆々思ひ入れあつて、炬燵の穴より逃げ行く。小萬、あたりを見廻し居る。この時法印、好き所へ出かゝり、件の二品盜む心。小萬明荷を脊負ひて思ひ入れあり

小萬　手下が殘せし白木の箱、正しく掛け物、役に立たねど中見ぬうちは

ト箱を取つて中より白鞘を出だす。法印ソツと吊り花活の尊像を出し懷中して白鞘を取らんと、思ひ入れして窺ひ居る。此うち小萬、白鞘に銘の書きあるを明りに翳し

ヤヽ、曉丸と記しあるは、もしや尋ぬる劍なるか。去るにても刃金の鍛へ、血を注ぎなば雞の、不思議は眼前、燒刃に星の。

法印　その一腰を。

トかゝる。立廻りに法印懷中の尊像と、件の手紙の解けかゝりたるが落ちる。小萬これを見て

小萬　正しく厨子入り。

ト取らうとする。

法印　南無三。

ト尊像、密書、早く取つて前の岩間へ投げる。二品とも谷底へ打ち込みし、思ひ入れ。小萬、屹度見て

小萬　怪しき二品谷底へ。

ト寄らうとする。法印立廻つて、同じく谷底へ飛び込む。小萬明荷を脊負ひ、件の白鞘を持つて

今の曲者好き幸ひ。劍の試しと思ひしに、前なる谷へ。

ト下へ思ひ入れ。この時雲悌、心付きし體にて、長持の蓋を撥ね退けて

雲悌　お尋ね者。

トかゝるを小萬よろしく立廻つて、屹度引き付ける。賑やかなる鳴り物になり、この舞臺段々せり上がる。

本舞臺、谷底の道具、杉林、岩組せり上がる。好き所の杉の枝より落ちたる手紙、巻き解けかゝりある。正

面岩臺の上に厨子入り似せ物尊像を直し、濱島幸兵衞、五十日鬘の浪人、俄盲目と書きし木札を衿に掛け、中拔き重ね草履にて、法印が尊像を持つたる儘、引き付けられて居る。この見得にて道具納まる。
ト山颪し笛の合ひ方。

幸兵 ハテ、心得ぬ。何時ぞや荒井の宿におき、盗み取られし藥師の尊像、心得難きは奪ひし後に、殘し置きしは似せ物ながら、同じ藥師の尊像ゆゑ、兩眼見えざる幸兵衞が、晝は人目を憚りて、夜に入る時は、闇夜を便りにこの谷間、爰に來つて尊像開き、何卒誠の御佛を、我が手に入らせ給はれと、今宵も拜なす山上より

法印 その間に爰を。
ト逃げるを立廻つて捩ぢ上げて見得。

小萬 思ひ掛けなき白鞘に、劍の銘の記しあれば、詮議なさん。
ト思ひ入れ。

雲悌 その品、おれに。
トかゝる、立廻りよろしく

幸兵 厨子に等しき品持つて、落ちかゝつたる怪しき曲者、黑白は何か見えねども、杉の小枝にかゝ

は、正しく書き物、後日の證據。

ト探り〱手紙を取つて、幸兵衛懷中する。

法印　それ取られては

トかゝるを、よろしく立廻つて

幸兵　兩眼見えねど滅多に油斷は。

ト引附ける。立廻りに、尊像は幸兵衛の手へ入る。

こりや、コレ、厨子入り。

法印　それを。

ト又差し寄り立廻り。このはずみに、岩の上の尊像落つるを、法印足に觸るゆゑ、所持の厨子入りと心得。

こりや、誠の

ト似せ物を取つて懷中する。

幸兵　ナニ

小萬　尋ぬる御劍、これぞ正しく。

雲悌　それを。

ト　かゝるを小萬、雲悌を見事に切る。立ち身にて苦しむ。下には法印かゝるを幸兵衛、見事に當てる。

これより合ひ方變つて、兩人思ひ入れ。法印、似せ物の尊像、懷中の儒氣を失ふ。

幸兵　奪ひかゝりしこの手紙、披見なさんも盲目同然。

小萬　劍に血汐の穢れあれども、雞の鳴く音もあらざるは、これも似せ物なりけるか。

幸兵　もしや誠の尊像なるか。矢張り身共が持參せし、摺り替へられし御佛なるや。

小萬　心を盡せど斯程まで

幸兵　武運に盡きし幸兵衛が

ト　好き時分、法印、心附き

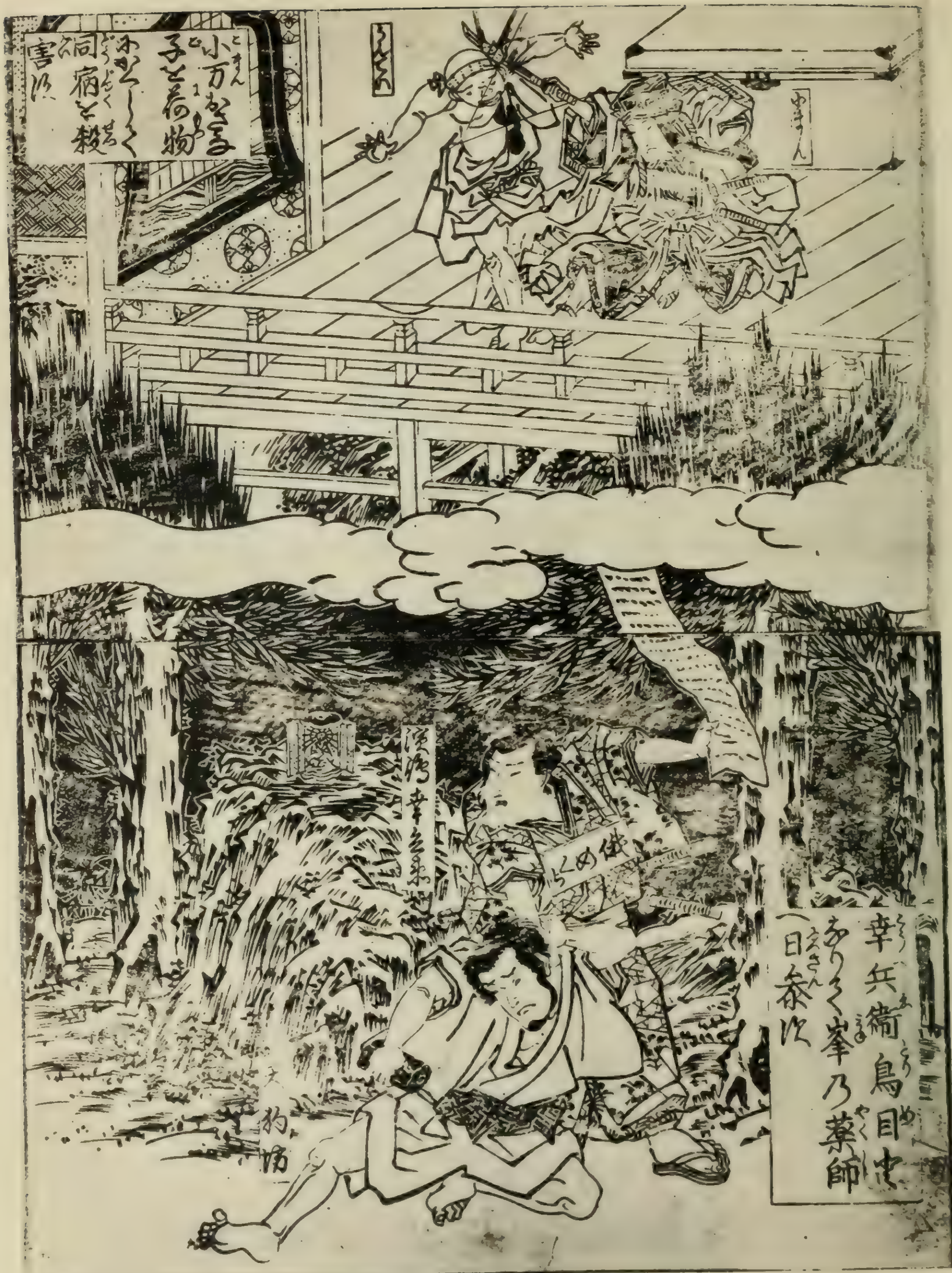
法印　早くこの場を。

幸兵　おのれ未だ

ト　探り寄つて引附ける。

小萬　佛神見捨て給ひしか。エヽ。

ト　白刃を引き拔く。雲悌の死骸、見事に下へ落つる。下の兩人、悔りする。この途端に脊負ひし明荷


天狗坊
幸兵衛

の内にて赤子泣く。小萬肩にて搖ぶり付ける。爰にて思はず女の振りになる。幸兵衛、落ちたる死骸を足にて探り

幸兵　ヤ、落ちたは死骸。

法印　人殺し。

ト聲立つるゆゑ上より

小萬　エイ。

ト持つたる白刃を谷に打ち付ける。兩人この音に思ひ入れ。小萬、スックと立つて、キッと男の見得。これを木の頭。幸兵衛は白刃を見付けず、山の上の泣く子の聲に聞き耳立てる。法印は白刃を見付けしゆゑワナ〳〵慄ふ。小萬、泣く子を肩に搖ぶり付くる。三方よろしく時の鐘の送りにて、拍子

幕

中野村稽古所の場

池田宿本陣の場

役名――濱島幸兵衛。宿老、豐六。野良の小助。阿房の三太。篠原一學。中村左膳。同妹、菊川。下郎、軍平。天狗法印。鐵砲和尙。女郎屋德右衛門。稽古娘、おぎん。奴の小萬。濱島逸當。

本舞臺三間の間、中足の世話屋體。鼠壁、蹴込み押し入れ、暖簾口、よき所に琴、三味線、掛けてあり、上の方に、三本立ちの座敷幟を飾り、この内半幟は鐘馗の畫を書き、軒には艾、菖蒲を掛け、門口に琴三味線指南小萬と云ふ表札をかけ、隣の方柾木垣栗丸太の門口、こゝに月並百萬圓と書きし札を打ち、庵室入口の體。總て天龍中野村稽古所のかゝり、幕の内より宿老豐六、木綿羽織の形にて、義太夫を語りゐる。内弟子おぎん、世話娘の拵らへにて、三味線を彈き、下の方に野良の小助、廣袖三尺帶にて、釜と云ふ文字の西の内二枚張りの凧を拵らへて居る。この見得、てんつゝ、馬士唄にて幕開く。

ト豐六、二つ巴の釜入り場の切を語り居る。句切り〳〵に首を振りて語るゆゑ、小助、立つて行き、首を捕へて押へるゆゑ、淨瑠璃を止めて

豐六　コレ〳〵、この男は、何でおれが首を捕まへたのぢや〳〵。

ぎん　それ〳〵、今が我が子の五郎市を、五右衛門が差し上げる、肝心の憂ひ場ぢやわいな。

小助　その憂ひ場のうまい所まで語ると、こなたの首が振り落ちる。そこでわしがしつかり首を、捕ま

へて居るのぢや。

豐六　何を。淨瑠璃で、首が落ちるものか。盗みでもしはしまいし。

小助　イヤ〳〵、首位ゐぢやござらぬ。五右衞門の淨瑠璃なら、釜入りが當り前ぢや。

ぎん　ほんにわたしや、五右衞門と云ふは、昔の事かと思うて居たに、今でもあの五右衞門が。

豐六　ナニ、それは五右衞門ではない、因幡幸藏と云ふ盗人、好い男ぢやげな。この通りの人相書が廻つた。

ト懐より繪姿を出して

コレ〳〵、まだ年若なよい男、兎角に盗むは、刀、脇差、その上後生願ひやら、寺方へよう盗みに入るげな。

ぎん　ソレイナア、この間も犀ケ崖の念佛寺へ、盗人が入つたと云ふ噂でござんす。

豐六　それゆゑ嚴しいこの間の詮議……コレ小助、てまへもマア子供ではあるまいし、凧や烏賊を張らずとも、盗人でも捕まへて、金儲けしやれ。してマア、その凧に書いた字は、何と云ふ字ぢや。

小助　これが知れぬかいの。それでマア宿老も氣が強い。コレこの字は整と讀むぢや。この遠州一國では、五月の節句に、凧を上げるが國風。

ぎん　その端午の節句ぢやによつて、お師匠さんは、この様に、凧を拵らへさせなさんすも、初の節句の祝ひぢやわいな。

豐六　さうか。この宿老は、其やうな文字は初めて見たぢや。そしてマア、この幟の唐人は、大分髭の生えた、黒い顔の男でござるの。

ト鍾馗の半幟を取つて見る。

小助　モシ〳〵、それは鍾馗と云ふ惡魔除けサ。

豐六　イヤ〳〵、これは慥かに、黒い閻魔ぢや〳〵。

小助　閻魔と鍾馗を見損うても、宿老が勤まるか。ハヽヽヽヽ、大笑ひだ。

豐六　コレ〳〵、笑ふ事はない。この唐人が閻魔だと云うて、鍾馗ぢやと云うて、違ひもあるまい。それを笑ふは餘ッ程な、横ッ倒しだ。

小助　ナニ、横ッ倒しとはおれが事か。こゝな宿老は唐變木ぢや。

豐六　コレ、宿老を唐變木ぢや、おのれ痴事をつくと。

小助　オヽ、おれが方からひどい目に合せてやるぞ。

豐六　そりや、おのれ、どうして。

小助 斯うするわい。

ト豐六が頭をくらはす。これより兩人摑み合ひになる。お銀中へ入り、兩方を止める。此うち豐六は有りあふ鐘馗幟にてぶつてかゝる。小助、引ツたくつてこの幟を引き裂く。お銀止めて

ぎん モシ〳〵、お前方の爭ひは構はねど、コレ〳〵、此やうに、初の節句の幟が破れては、祝儀のものゆゑ、氣にかけさんせう。こりや此まゝでは置かれまいわいな。

ト破れし幟を見せる。

豐六 サア〳〵、破れては大變々々。

小助 おい等は知らぬぞ〳〵。

豐六 イヤ〳〵、われが破つた〳〵。

小助 ナニ〳〵、貴樣がその幟で、おれをぶつたから起つた怪我ぢや。元の起りは、こなたぢや〳〵。

豐六 アヽコレ〳〵、さう云はれては、どうやらおれが科人らしい。マア〳〵何にしろ、どうかしようが。

ト懷中の繪姿へこなしあつて

あるぞ〳〵。コレこの繪姿を、その代りに立てゝ置いて、其うちにこの鐘馗を、濱松の城下の繪師へ持つて行つて、事譯云うて賴むが近道。

ぎん　成る程。それがようござんせう。

小助　イカサマ宿老、智慧袋を振つたと見える。わしも手傳うてやらうか。

豐六　頼むワく。

ト兩人立ちかゝり、凧を張りし糊にて、因幡の繪姿へ紙のちを付け、これを代りに枠へ立て置き

サアく、これでちつとの間は、素知らぬ顏で。

小助　わしは約束、小僧の三吉、明日上げさせる、この凧を張りませうか。

豐六　其うち殘りの釜入り場。

ぎん　また稽古かえ。

小助　エヽ、首振り淨瑠璃、また始まりか。

豐六　ドリヤ、音聲を調べませうか。

ト以前の本を出し、淨瑠璃を語りかゝる頃になり、向うより墨衣の坊主、百萬遍の鉦を持ち、珠數を擔ぎ、下がけにて出づる。後より小萬、世話女房の拵らへ、手拭を頭へ卷き、一寸からげ、腰帶、草履を履き、勝負刀を持ち、これに前髮の小僧三吉、木綿やつしにて、尻をからげ、二歳位の小兒を抱き、風車を持つて、子守りしながら出で來り、花道にて

小萬　モシ〳〵、それへお出でなされまするは、お隣の庵主、西念さまではござりませぬか。

西念　これは〳〵小萬さまか。どちらへござりました。

小萬　ハイ、私しは御城下の五社明神様へ參詣がてら、悴が初の節句でもござりますれば、買物も致しませうと參じましたが、子供がござりまするゆゑ、嘸おやかましうござりませう。

西念　イヤ〳〵、此方こそ、毎晩々々百萬遍の講中が寄りまして、あたり構ぬ大念佛。それが止めば、折り〳〵は愚僧が好きの笛の稽古で。

三吉　アヽ、そんならお前は笛の稽古をさつしやりますか。わしは又、お隣の坊様は、按摩鍼の稽古かと思ひました。モシ、あの笛をピイ〳〵吹いても弟子があるかえ。

西念　あるとも〳〵、あの庵には笛の弟子どもゝ居ますて。

三吉　それこそほんに、下手の横笛、念佛ならば、地獄の宿引ぢや。

小萬　アヽコレ三吉、また阿房云やるかいの。

西念　なにサ、子供は正直でござる。

三吉　なにサ、大人もお前の事を。

小萬　これはしたり、又云ふかいの。阿房のくせに。

三吉　阿房は寢て待て。
小萬　まだかいなう。サア、西念さま。
西念　ちとお話しにござりませ。
ト唄になり、門口へ來り思ひ入れあつて、庵主は門の内へ入る。二人は門口へ來り
小萬　アイ、いま戻りましたぞえ。
ぎん　これはお師匠さん、只今お歸りなされましたか。
豐六　小萬どの、大分綏りとござつたの。
小助　お前の留守に、面白い淨瑠璃を聞きました。
トこの挨拶のうち、弟子のお銀、手桶の水を盥へ入れ、門口へ持ち行き
ぎん　お師匠さん、お足をお洗ひなされませ。
小萬　アイ〳〵、これは憚りでござんす。
ト足を洗ふを、三吉見て
三吉　アヽ、どうしても女子の弟子は、わしより悧巧だ。
小萬　さうサ、あの子は悧巧、てまへは、烏の泣き聲。

三吉　なぜ〳〵。

小萬　阿房々々。

三吉　又そんな事を。

ト此うち小萬、足を洗ひ終ひ、上の方へ行く。三吉は抱き子を小萬に渡し、乳を飲ます内三吉足を洗ふ。

小萬　今日はお銀さん、よう留守して下さんした。わたしも早う歸らうと思うても、明神様の夥しい參詣。それに阿房が道々も

三吉　モシ〳〵、世話をやかせたはお前の事。あれが欲しい、これが食ひたいと云つても、何にもくれぬゆゑ、世間でもこのわしに、三吉食べたか〳〵、こゝな細ツ腹め。

ト豊六の頭をぶつ。豊六頭を抱へて

豊六　ヤイ〳〵〳〵、この丁稚めは、宿老の頭を馬だと思ふか。

三吉　アイ、馬も馬、馬の尻だと思つた。

豊六　エヽ、ほんにうぬは、大馬鹿だ。其やうな阿房でも、親は子だけに内からは、何卒五月の節句には、藪入りに一日お暇を願うてくれと、それでわざ〳〵わしは來ました。

小萬　それはマア、お易い事。コレ三吉、わが身は今宵宿老さまと、御同道申して行きやいなう。

三吉　アイ〱、それは有り難いな。
小助　宿へ行くなら、おれが張つたこの凧を持つて行つて、明日は腹一杯上げて遊べサ。
三吉　そいつは奇妙。わつちは凧を上げる代り、そのお禮には小助さん、お前はこのお銀さんの凧でも上がれ。
ぎん　エヽ、また悪洒落を阿房の癖に。
豊六　然らば宿老、小僧を連れて。
小萬　アヽ、モシ、祝儀に貰うた酒肴、一つあがつてお歸りなさんせ。
豊六　そりや有り難い。お辭儀いたさず御馳走に。
小萬　先刻の喧嘩の仲直り。
ぎん　ドリヤ、お酌しやんせうか。
　ト唄になり、皆々ワヤ〱云うて奥へ入る。小萬殘つて
小萬　ヤレ〱、今日はいかう草臥れた〱。併しこの子が初の節句ゆゑ、神々樣へお參詣申した後の氣持と云ふものは、灸するゑたと同じ事。
　ト寢入つたる抱き子をよく〱見て

これに付けても幸兵衛どの、浪花で馴れ染めこの國へ、歸らしやんしたその後にて、安々この子を生み落し、この身は輕うなるものゝ、主の越度の二品の、行方が知れねば、何時マァ夫婦に。殊に何時ぞや伊勢路にて、盜人ながらも大恩に、なつたる人を恐ろしい。それも夫へ立つる義理、今は男の本國を、便つて足をとめたれど、煙りも細き獨り住、世渡る爲の藝は身を、助ける程の不仕合せ、琴三味線も表向き、我が身を知らぬ白浪が……。

ト思ひ入れあつて、稽古せし五右衛門の淨瑠璃本を見附け、取り上げ見て

この五右衛門も親子連れ、釜が淵瀬のこの苦勞、苦患も云はゞ夫の爲、末はこれなる淨瑠璃の、二ッ巴が好い手本、やがて我が身に。

ト此うち抱き子泣くないぶり付け

ドリヤ、添乳して寢させませうか。

ト唄になり、小萬、上の方に布團を敷き抱き子を寢させ添乳する。この唄をかり向うより、百姓、鍬を擔げ仕事歸りの體にて出て來る。後より幸兵衛、深編笠、大小切繼の小袖、浪人者にて件の百姓の鍬に手をかけ、これを頼りに出で來り花道にて

幸兵　これは〳〵、どなたかは存じませぬが、只今のお世話、忝なう存じます。

百姓　何の〳〵、わし等はどうでも、向うの庵室へ笛の稽古に行く道筋、不自由と見たゆゑ同道しました。

幸兵　イヤモウ、お蔭でやう〳〵、これまで參じました。モウ〳〵よろしうござりまする。往間へ出ますと、隨分辿々歩行いたしまする。サヽ、もうよろしうござりまする。

ト捉へし鍬を放す。

百姓　そんなら、そろ〳〵と氣を附けてござれや。アヽ、眼病と云ふ者は不自由なものでござる。

ト百姓舞臺へ來り、庵室の内へ入る。幸兵衞は門口に佇み思ひ入れ。此うち合ひ方、袖乞する心にて門口に取りつき扇を出し

幸兵　東遊びの數々に其名も盡きぬ色人。

ト謠をうたふ事あつて

永々の浪人、御憐憫をお願ひ申しまする。

ト小萬この聲を聞いて。

小萬　門口に袖乞さうな、ドレ、手の内を入れませうか。

ト巾着より有り合ふ錢を出し門口へ行き武士の浪人ゆゑ思ひ入れあつて

サヽ、手の内をあげませう。

幸兵　ハイ〳〵、これは有り難うござりまする。

ト手の內を貰ひ

お女中さうなが、モシ、濱松へは餘程ござりまするかな。

小萬　アイ、また一里もござんせうが、どうやらお前は病氣の樣子。

幸兵　ハイ、俄盲目で道ち捗が參りませぬ。故鄕の濱松へはこの形にては。

ト屈託の體。小萬思ひ入れあつて

小萬　どうやら物腰恰好が、心の惑ひか。

ト門口に殘りありし盥の水に思はず目を付ける。

幸兵　惑はぬ內に、一足なりと。

ト行きにかゝる。小萬、盥に寫りし顏を見て

小萬　ヤア、お前は尋ねる幸兵衞どの。

幸兵　さう云ふ聲は確かに覺えの。

小萬　浪花で別れしわたしは小萬、ようマア無事で。

幸兵　ヤヽ、そんなら小萬か。

小萬　我が夫、どうして尋ねて。

幸兵　其方も無事で、ヤレ〳〵、懐かしや〳〵。

ト喜び〳〵笠を取り、探り〳〵内へ入る。小萬介抱して、上の方へ連れて行き、イソ〳〵して

小萬　マア〳〵、嬉しや〳〵。今日も今日とて、明神さまへお參り申し、お前の事を願ひ申しに、思ひがけなう息災でござんすと云ふも、神々さまのお蔭。エヽ、有り難い〳〵。

ト思ひ入れあり

喜ぶうちにもお前の樣子、こりや何時の間にやらお前のお目が

幸兵　世に零落し盲目同然。何時ぞや其方に遣はせし、書狀であらまし聞いたであらう。荒井の驛にて御主人より、預かりの藥師の尊像、今一品は曉丸、その上所持の路用まで、盗み取られしこの幸兵衞、おのれやみ〳〵渡さうかと、群がる强盜切伏せ〳〵、寶を奪ひし曲者め、追かけ追つめ只一刀と、切つけしに、用意なしたる目潰しを、我れに打ちかけ退け去る曲者、その座で直ぐさま目の痛み。一日々々たつに付け、今では晝夜の分ちなく、生れも付かぬ盲目同然。して其方は浪花にて。

小萬　お別れ申してその後は、情のおどもり身に宿し、一方ならぬ私しが懐胎なれども、あなたのお詞にも、我が子を賴むとある文言。それを守つて安々と、產み落したるコレ

ト抱き子を連れ來り

コレ〳〵、これがお前の御總領、殊に御男子、成人するに從がつて、お前の顔に。

ト渡す。幸兵衛抱き上げ探り見て、思ひ入れあり

幸兵　すりや、この幼子は、其方が生みやつた身共が胤の、殊に男子。オヽ、好い子ぢや、小萬、出來た出來た。ようマア、男子を、めでたい〳〵。これぞ濱島幸兵衛が家の後目と。

ト思ひ入れあつて

初めて逢うたる我が子の顔、見る事叶はぬ盲目同然。殊には寶も手に入らず、尾羽打ち枯らせし浪人の、家の後目は何事ぞ。詮議なさんも皆目に、これぞ盲目の垣覗き、武運に盡きたる濱島が、子と生れしも悴が徽運。

小萬　すりや、今以て二品の、手がゝりとても

幸兵　知れざる上に、盲目の幸兵衛、定めて様子も聞いたであらう、寶の日限りも切れたれば、一日々々日延の願ひ。親人濱島逸當さま、今日今宵が命の瀬戸、いよ〳〵某差上げねば、親人には御切腹。さすれば我れも何面目、父の追腹いたすの覺悟。その今日に不思議にも、巡り逢ひたる女房悴、逢うたりとても一目だに、見る事叶はぬ因果者。弓矢神にも佛神にも、見離されたか、エヽ、口惜しい。

ト涙を落す。小萬も思ひ入れありて

小萬　お道理でござりまする。女子の身ながらわたしさへ、その二品を尋ねなば、少しはお前の助けにもと、晝は覺えた唄三味線、稽古の人を引き入れて、夜は星をば頂いて、雨の降る夜もいとはゞこそ、可愛やこの子を肌に添へ。

幸兵　して、そりや、何くへの。

ト問はれて小萬恟りして心づき、口走りしと思ひ入れあり

小萬　サ、神々樣へ願掛けても、今に行くへの

幸兵　知れぬは二品、知れたるは、思ひ掛けない馴染みし小萬。定めて其方は身が事を。

小萬　忘れぬ印とこの國へ。二年この方侘住居。年たけし身も此やうに、眉も落さず齒も染めず、髮には油氣ない同然。嘘僞りのない證據。

幸兵　それが嘘やら誠やら、知れぬ盲目の今の身を、そんなら眞實。

小萬　男は一人、子は一人、世間で奴の小萬とて、異名を取りしも常々に。

幸兵　口綺麗には云ふものゝ、あの、坊主めが口利かば、大方其うち

小萬　アレ、又そのよな。

ト幸兵衛を抓れる。

幸兵　アイタ…………こりや滅相な。

小萬　痛いかえ。

幸兵　わが身に逢ひ度い。

小萬　エヽ、憎らしい。

幸兵　可愛の小萬。

小萬　イエ、そりや、わたしより。

幸兵　今では子寶親子三人。

小萬　一つに寄れば

幸兵　文珠の智慧。

小萬　話し合うたら

幸兵　爰らに寶が。

ト小萬へこなし。その手を拂うて

小萬　惡てんがうな。まだ日のうちに

幸兵　目が潰れたで何時でも闇と
小萬　思ふ思ひのその子もともに
幸兵　今日から我が家。
小萬　こちの人。
幸兵　女房ども、川と云ふ字で
小萬　ゆるりと、今宵
幸小　話さうかえ。

ト抱き子を眞中に置き、兩人川と云ふ字に寐轉び、打解けし體。時の鐘、合ひ方、向うバタ〳〵と人音して、菊川走り出で來り、門口へ駈け込み、戸をしやんと閉す。兩人恟りする。軍平も走り出で來りしが、菊川が内へ入りしを見屆け、門の戸を明けようとする。菊川戸を押へ居る。軍平の後より法印天狗坊、頬被りして二人の後をつけて來たりし體、花道に窺ひ居る。

軍平　モシ〳〵、爰を明けて下さりませ〳〵。
菊川　イエ〳〵、明ける事はならぬわいの〳〵。
軍平　モシ〳〵、私しでござります〳〵。

菊川　イヤ〳〵、ならぬわいの〳〵。

ト兩人門の戸押へ競ひ合ふ。内の兩人心得ぬ思ひ入れにて

小萬　コレ〳〵、女中さん、何ぢやぞいな、人の内へ斷わりなしに入らしやんして、出るとも入るとも、早う片つけたが好いわいな。

トこれにて菊川、氣の毒なる思ひ入れにて

菊川　御免なされませ、アノわたしはナ。

ト門口を押へし手を取る。これにて軍平門を明け内へ入る。花道の法印これを見て打ち頷き、思ひ入れあつて引返し向うへ入る。菊川下の方にて手を突き

わたしや爰へ參る道にて、狼藉者に遭ひましてナ。

軍平　ヘイ〳〵、御免なされませ。その者どもを支へまする其うちに、あなたさまのお宅へ駈け込みましたばつかりに、その者どもは立ち歸つたと見えまする。これは早、不調法千萬な。

菊川　どうぞお赦しなされて下さりませ。コレ〳〵軍平、其方もお詫び申してくりやいの。

軍平　お詫び所ではござりませぬ。ヘイ〳〵、この通りでござりまする。

ト兩手を突き詫びる思ひ入れ。

小萬　これはしたり、其やうに仰しやつては、却つてこちらがお氣の毒に。

幸兵　アヽ、惡者に遭はしつたのか。併しながら、怪我でもさつしやりはせぬか。

菊川　イエ〳〵、仕合せと怪我も致しませぬが、怖うて〳〵。

　　ト此うち菊川、幸兵衞ゐ見て

　ヤヽ、お前はこちの人、幸兵衞さんぢや〳〵〳〵〳〵。

　　ト立ち騷ぐ。家内の二人も聞いて

幸兵　ヤヽ、さう云ふこなたは、誰れぢや〳〵。

菊川　アイ、許嫁の左膳が　妹、菊川でござります。

幸兵　ヤヽ、ナニこなたが。

　　ト大きに驚ろく。

軍平　ハイ〳〵、菊川さまでござります〳〵。

菊川　モシ、お懷しうござります〳〵。

軍平　イヤモウ、お行くへ知れぬお前さまに、逢ひ度いと仰しやつて泣いてばつかり、たうとう屋敷を駈落ちなされたを、嗅ぎ出しました軍平め、お供いたしてあなたのお行くへ、尋ねましたに思はず

も、爰でお目にかゝつたは、お前の念が届いた樣子。エヽ、お喜びでござりませう。

幸兵　すりや、なんとお云やる。某が立退きしその後尋ねて

菊川　お後を慕ひ都を立退き、辛苦萬苦もお前に逢ひ度いわたしが心願。モシ、どうぞ見捨てゝ下さんすなえ。

幸兵　なんの〳〵、必らず見捨てる心でない。落ついてくれ〳〵。

菊川　そりやお嬉しうござりまする。殊にお前は御眼病のその樣子、早う本腹ある樣に、この身に替へても、神々樣へ願掛けいたすは女房の役。

ト云ふを聞く小萬、走り寄つてこの中に入り

小萬　コレ、女中さん、お前もなめ過ぎるも事に依る。コイレナア、幸兵衞どの、お前は〳〵、アノ浪花から二世かけて、約束したお前は夫、その男の行くへは知れず、剰へ懷胎の身の恐ろしい、云ふに云はれぬ劍の中を……、サ、やう〳〵尋ねてたつた今、逢うて嬉しう思ふうち、此やうな女中がござんして、許嫁ぢや、なんのと、そんな事聞き度うもござんせぬ。アノわたしや正眞正銘の女房でござんす。その證據にはコレ〳〵〳〵、此やうな子があるぞえ。サ、お前にも子があらば出して見せなさんせ。よもやあるまい。そんなら噓ぢや。サア、歸つて下さんせ〳〵。お前、此方へ來なさんせ〳〵。

ト幸兵衛を引ッ張り、菊川を歸さうとする。これにて幸兵衛氣の毒なる思ひ入れ。

菊川　ア、そんなら噂に聞きました、アノ浪花に馴染を重ねし

幸兵　サヽ、その女ぢや〳〵。爰でマア、此やうに落ち合うては面目次第も。

菊川　お前がいよ〳〵浪花の女中。モシ、聞えませぬ。そりやあんまり胴慾ぢやわいな。

ト胸づくしを取つて恨みを云ふ。小萬この中へ入り

小萬　コレ〳〵、大事の男を其やうな、揉み苦茶にして貰ひますまい。ほんに厚かましい女中さんぢやわいな。

トきつと云ふ。此うち軍平腹立ちし思ひ入れにて、この中へ割つて入り、どつかと座して

軍平　ヤイ、ふん張りめ、先刻から聞いて居れば、幸兵衛さまを亭主ぢやと云ふ樣子。コレ、誰れに斷わつて貰うたのぢや。此方は名にあふ大殿樣のお指圖で、天下晴れた御夫婦ぢや。それを外から取らうとは、其方は間男……イヤ間女ぢや。サア、菊川さま、お氣遣ひなされまするな。あなたの後には、この奴めが扣へ居りまする。惡く騷ぐと女とは云はさぬ、只は置かぬぞ、イヤ、ハヤ、イケふざけた女だ。

トきつと云ふ。幸兵衛面目なき思ひ入れにて

幸兵　成る程、尤もぢや〳〵が、これには段々深い樣子のある事。

小萬　イエ〳〵〳〵、樣子も何にもいらぬわいな。此方には今云ふ通り、友太郎と云ふ大事の〳〵男の子があるぞえ。これで外に女房があらう筈はないわいな。

トこれにて、菊川、軍平こなしあつて

菊川　そんならいよ〳〵そのお子が。

軍平　幸兵衛さまの御總領。

幸兵　思ひ掛けなう儲けた悴。

小萬　なんと違ひはあるまいぞえ。

ト此うち三吉、後へ出て樣子を聞き居る。菊川こなしあつて

菊川　子まである上からは、許嫁と云ふものゝ。わたしの方が却つて今では。

ト思ひ入れあり

南無阿彌陀佛

ト幸兵衛が刃物を取つて自害せんとする。軍平留めて

軍平　これはしたり、早まつて、なんでお前は。

菊川　添はれぬ事なら自殺して。

幸兵　ア、コレ、滅多な事を。

ト探り寄つて留める。

小萬　コレイナ、目界も見えいで、お前は白刃を留めさんすか。

幸兵　菊川どのを殺しては、兄御左膳どのへ、どうも身共が。

菊川　そんなら添うて下さんすか。

幸兵　添はいでならうか。

小萬　なぜ又添はねばなりませぬ。

幸兵　殿のお指圖、恩義を受けし左膳の手前。

小萬　イエ〳〵、どう云はんしてもわたしが添はさぬ。達てお前がその女中と、添はさんすりや、又わたしが邪魔して。

軍平　邪魔すりや、おれも邪魔して見せうワ。

小萬　どうしてこなたが。

軍平　オヽ、斯うして邪魔する。

ト煙草盆を取つて投げる。

菊川　コレイナ、危いわいの。

幸兵　マア〱、靜かにしやいの〱。

ト探り〱留める。

小萬　なんぢやいなア、こちの內に案內もなう駈け込んで、こちの道具を投げ拋り、外から來てさへその我がまゝ、わたしも負けてよいものか。わしが道具ぢや。斯うして投げて。

ト繪姿にて拵らへたる半幟りを取つて打ちつくる。

幸兵　これはしたり、投げ打ちは危ない〱。

軍平　イヤ〱〱、其方が幟りを投げ打ちすりや、わしも負けずにこの凧を、サア〱菊川さま、これ打ちつけてやらつしやりませ。

ト側にある凧を取つて

コレ〱、斯う打ちつけなされませ〱。

トあたりへ投げる。

小萬　さうすりや、此方も斯うして投げ返すわいの。

ト凧を取つて打ちつくる。幸兵衛探り〳〵取つて

幸兵　これはしたり、投げ打ちは危い〳〵。

小萬　イエ〳〵、なんでお前は留めさんすぞいな。

幸兵　留めるではないが、怪我でもあつては後の難儀。

軍平　イエ〳〵〳〵、お構ひなされまするな。サア、打ちつけぬか〳〵、但しはおいらが怖いのか〳〵。

小萬　アレ〳〵、あの樣に云ふわいの。退きなさんせ負けはせぬ。なんでも手當り次第に斯う打ちつけて。

軍平　さうすりや此方も、斯うして打ちつくるワ〳〵。

ト兩方互ひにあり合ふ物打ちつけ合ふ事。此うちに件の烏賊幟りを兩方あつちこち投げ合ひ、紙は破れる事。小萬腹立つて立ちかゝるを、幸兵衛探り寄つて留めるはずみに、懷中の件の手紙落ちる。眼病ゆゑこれを知らず。三吉この中へ留めに入り、破れし烏賊幟りを取り上げ見て

三吉　イヤア、コレ〳〵、凧が破れて烏賊幟りが、此やうに損ねた〳〵。こりやマアどうせう、なんとせうぞいの。

トわつと泣き出す。この聲に奧より豐六、小助、おぎん、出て來り

豐六　どうした〳〵、なんで其やうに。

ぎん　大きな形をして、マア。

三人　コレ〳〵、泣くな〳〵。

三吉　それでも此やうに凧が破れた。ア丶、悲しい〳〵。

小助　コレ〳〵、泣くな〳〵。破れたら、切り貼りをすれば直るワ〳〵。

ぎん　さうでござんす。その切り貼りには、コレ〳〵。

ト件の落ちたる文を取つて

爰に文が落ちてあるわいな。この反古で切貼りして置くが好いわいな。こなたの仕事にさんせ。

三吉　そんならこれで貼つても好いのかえ。

小助　今おれが凧を貼つた糊もあり、これで貼つて置け〳〵。

三吉　さうしませう。

ト小助は姫糊と刷毛を渡す。三吉下の方へ來り、凧の裏へ密事の書狀を反古と心得、裏貼りにかゝる。

豐六　それで好い〳〵。……併し何んで又此やうな、モヤ〳〵した事が始まつたのぢや。

小萬　モシ〳〵、御宿老樣聞いて下さんせ。常々お話し申した、わたしが亭主が見えましたわいな。

豐六　イヤ、それはめでたい。

小萬　イエ〳〵、餘りめでたうもござんせぬ。あれ見なさんせ。

ト菊川に指さして

あの女中が爰へ駈け込んで、わたしが亭主の女房ぢやと云ふゆゑに、それでわたしや腹が立つて腹が立つてならぬわいな。

豐六　成る程。これは尤もだ〳〵。

幸兵　モシ〳〵、あなたが御宿老樣でござりまするか。成る程私しは、小萬が亭主ではござりまするが、只今では浪人仕り、殊に眼病。あの女中も少々譯ござりまする者ゆゑ、どちらをどうとも申されませぬ。何分よろしうお賴み申しまする。

豐六　これは〳〵、お初にお目にかゝりました。併しわしが支配のうちに、亭主一人に女房の二人もあるのは、宿老の身に取つては外聞がようござるて。コレ〳〵御亭主。マア〳〵お手を上げられい〳〵。

幸兵　何分よろしうお賴み申しまする。

ト手を突いて賴む。軍平これを聞き、小助を下の方へ連れて來り

軍平　モシ〳〵、聞いて下さりませ。爰にござるはアノ、幸兵衞さまの許嫁の女房樣。それにも斷らいで、どこの國にか先へ子を拵らへ、その上亭主まで取らうとは、あんまり人を踏みつけにした話し

だ。此方の嫁御は、嫉妬はやきませぬ結構人。そこでわしが名代に、嫉妬喧嘩をいたすは無理ではござるまい。

小助　成る程。さう聞いてはお前の嫉妬をやくのは、尤もでござる〳〵。

トこれにて、おぎんムツとして小助を捉へ

ぎん　コレ〳〵お前、何が尤もだえ。あのやうに子まである女房のあるのに、後からござんして女房ぢやと云ふ女中の無理が、なぜお前は尤もぢやえ。サ、その尤もな理窟をわたしが聞かう。サ、云はしやんせ〳〵。

ト小助を捉へて振り廻す。豐六中へ入つて

豐六　コレサ〳〵、兩方ながら尤もだが、マア〳〵、宿老に預けさつしやい〳〵。

小萬　モシ〳〵、兩方が尤もとは、そりやわたしが方が尤もかえ。

軍平　イヤ〳〵、わしが方が尤もだ。

小萬　イエ〳〵、わたしが尤もぢや。

小助　イヽヤ、小助が尤もだ。

幸兵　イエ〳〵、身共が尤もぢやて。

ぎん　なんのわたしが尤もぢや。
菊川　わたしが尤もぢやわいな。
小萬　女房が尤もぢや。
小助　仲人が尤もぢや。
幸兵　亭主が尤もぢや。
軍平　交ぜッ返しが尤もぢや。

ト皆々あちらを引ッ張り、こちらを引ッ張り、段々と繋り合ひ、宿老を眞中にして兩方へ引ッ張る。宿老後には取り逆上目を廻して、ウンと倒るゝ。皆々驚ろき

幸兵　コレ〳〵、宿老樣が、どうかなされたぢやないか。
小助　ヤア、目を廻した〳〵。
皆々　これは大變〳〵。
小萬　モシ〳〵、どうか仕樣はござんせぬか。
菊川　爰に氣付けがあるわいな。
小助　ドレ〳〵、寄越さつしやい〳〵。

ト手早く取つて宿老に含ませ

白湯だ〳〵。

ぎん　合點ぢやわいな。

ト白湯を汲んで持ち行き、皆々立ちかゝり、小助白湯を飲ませて

皆々　宿老どのヤアイ〳〵。

女三　豐六さまいなう。

ト口々に呼び生ける。宿老心づきし體にて

豐六　氣がついた、心は確かだ〳〵。

小萬　モシ〳〵、宿老さんは氣が付いたわいな。

軍平　それはめでたい、氣が付いたら今の喧嘩のまき直しだ。

菊川　そんなら又諍ひになるのかいな。

幸兵　イエ〳〵、それでは迷惑しまする。

小萬　イエ〳〵、片をつけて下さんせ。

軍平　イヤ〳〵、おれが方からつけてもらはうワ。

豐六　コレ〳〵、其やうに競り結められると據ろなう、又ぞろ目を廻さねばならぬが、そこは宿老だけ、料簡つけたて。

小軍　どうつきましたな〳〵。

豐六　サ、宿老が料簡は斯うぢやて。どちらもどうとも云はれぬゆゑ、一日代りに亭主と定め、さうする時は兩方とも、妾でなければ損得なし。幸兵衛どのもその積りに、得心するのが即ち中ずみ、これより外の料簡なし。なんとこの相談に極めまいか。

小助　成る程、これは上分別。

幸兵　そんなら二人は。

小萬　それで濟むなら、わたしやどうなと。

軍平　其方は、承知か。してお前は。

菊川　わしぢやと云うて、なんの、其やうに。

豐六　サア〳〵、それであらまし濟んだ。マア、何事も善は急げぢや。ちつとも早う仲直り〳〵。

小助　それが好い〳〵。兩方ともにその氣なら、めでたく一つ〆めませう。

皆々　アヽ、ヨイ〳〵〳〵。

ト手を打つ。

豐六　サア〳〵、これで納まつた〳〵。

幸兵　これは、どなたも大きに御苦勞かけました。

小萬　お前方のいかいお世話で。

菊川　わたしも安堵いたしましたわいな。

軍平　夫婦喧嘩の名代で、大きに骨を折りました。

豐六　イヤモウ、此やうな間違ひは有うち。仲人やら媒人やら、兩方持ち込みてござるて。

ぎん　媒人は宵の程と、好い首尾なうち、わたしは内へ。

小助　開くと云ふのか。そんならおいらも、宿老どのも。

豐六　開きませう〳〵。

ト門口へ出かゝる。此うち三吉は手紙にて凧を貼つて居るを見て

ヤイ〳〵三吉、大概にしろ。われはおれが連れて戻り、明日は腹一杯凧を上げさせるワ。

三吉　そんなら明日は、思ふ存分凧を上げようか。有り難い〳〵、サア〳〵、小助、お前も開かないか。

小助　開くとも〳〵。サア、お銀ぼう、お前もおいらと一緒に開くが好い。

ぎん　アイ〳〵、わたしも開きませうわいな。
ト三吉は件の凧を持つて、右の四人門口へ出る。幸兵衛探り〳〵門口へ來り
幸兵　これは皆樣、段々のお世話。忝なうござります。
小萬　これに懲りずに晩には、又話しにお出でいなア。
軍平　イヤモウ、御苦勞かけてお氣の毒にござります。
小助　なんの〳〵、心遣ひは決して御無用。
豐六　併し二人のお内儀では、幸兵衛どのは、毎晩々々大きに御苦勞。
小助　これはしたり、それがいらざるお世話と云ふもの。
豐六　でも女房二人で亭主は一人。
小助　それがどうした。
豐六　ハテ、鰥男に遠慮もあらうに。ハヽヽヽヽ。
ト唄になり、右四人向うへ入る。後四人殘り、幸兵衛眞中に抱き子の寐たる側へ坐る。上の方に菊川、下の方に小萬坐る。軍平門口の戸を閉めて
軍平　さて〳〵、草臥れました〳〵。今までの道中よりは、餘つぽど骨が折れた。爰に居ては私しは窮屈、

奥へ参つて、一寢入りいたしませう。

幸兵　さうであらうとも。酒なと飲んで悠つくりと休息さつしやるが好い。

軍平　左やう致しませう。旦那樣、モシ小萬さま、諄い事ぢやが、菊川さまと必らず仲好う。

小萬　そりや案じぬが好いわいな。

軍平　お賴み申しまする。ドリヤ悠つくりと、そべりませうか。

ト合ひ方になり、軍平は奥へ入る。菊川思ひ入れあつて

菊川　ほんに思へば思ふ程、許嫁とは云ふものゝ、お氣の毒やら何やらで。

小萬　イエ〳〵、其やうな心遣ひなされて下さんすなえ。

ト爰にて入相の鐘鳴る。

ほんにもう日暮れ、入相聞いては蚊燻しも仕掛けにやならず、此あたりは蚊が澤山ぢやに依つて

幸兵　アヽ、わが身は蚊遣りの支度しやるのか。

小萬　アイ、わたしや燻しを仕掛けるうち、菊川さんは、その友太郎を、どうぞ蚊のせゝらぬやうに、世話してやつて下さんせ。

菊川　アイ〳〵、わたしが蚊を追うて上げやうわいな。

幸兵　成る程、夥い蚊ぢや。このマア、蚊の出居つたに坊主めは、なんにも知らいで、好う寢てゐをるわいの。

ト本調子の合ひ方になり、小萬は蚊遣り火鉢の中へ粗朶を折り燻べ、渋團扇にて煽ぐ。菊川寐たる抱き子の蚊を追ふ體にて、幼子の顏を好く〳〵見て

菊川　そんならアノ、このお子が二人の仲の。

小萬　アイ、主の後取り、友太郎、丁度今年が初の節句。

菊川　道理でお内に座敷幟りが、確か爰らに。

ト最前投捨てし幟りを取り上げ、好く〳〵見て

こりや何時もの幟りの繪と、書きやうも相違して、何やら怖いこの形。

小萬　そりや、大方鍾馗幟りでござんせう。それぢやに依つて。

菊川　イエ〳〵、鍾馗さんぢやござんせぬ。黑い小袖に大小差し、側に何やら斷わり書が書いてござんす。

幸兵　なんと云やる。座敷幟りに文字が書いてあると云やるか。讀んで見や〳〵。

菊川　アイ。……この繪の上に、因幡幸藏人相書と書いてござんすわいな。

ト思はず讀む。小萬悩りする。幸兵衞聞き耳立て思ひ入れ。

幸兵　その因幡幸藏とは、當代に名高き盜賊。世上の取り沙汰、もしやお家の、あの御寶、この身の難儀も因幡が仕業か。

小萬　イエ〳〵、どうしてアノ寶、因幡が其よな。お前の難儀をどうして知りつゝ。

幸兵　コレ〳〵、そりや又なぜに、因幡は身共に難儀をかけまいなどゝ云ふ、何の義理にて。

ト問ひ掛けられて小萬思ひ入れあつて

小萬　エヽ。

ト狼狽の思ひ入れ。

幸兵　人の寶を我が物と、盜賊いたす因幡幸藏。捕へて詮議なすならば、寶の行くへも知るゝの道理。さはさりながら面體知らねば。

菊川　その知るゝのは、これなる繪姿、委しく書いてあるわいな。

小萬　すりや、その幟りは繪姿にて人相恰好。

幸兵　讀んで聞かしやれ。

菊川　アイ。

ト右の半幟りを取り上げ見て

色白にして目の中涼しく、面體恰好柔和なる、形、女と見まがふ、その生ひ立ち、左の目尻に一つの黒子。

ト讀むうち、幸兵衞思ひ入れ。

幸兵　ハテ、優形なるその面體、しかも目尻に黒子とは、女房小萬が目尻にも、確かに黒子。さても似寄りの。

ト思ひ入れ。この時小萬、手早く人相書を取つて、蚊遣りの中へ打ち込む。繪姿べら／＼と燃え立つ。兩人驚ろき

菊川　ヤヽ、幟りに仕立てし、あの繪姿。蚊遣りの中へ。

幸兵　そんならその繪を火中なしたか。女房小萬、なんで其方は。

小萬　氣にかゝるゆゑ。

幸兵　ヤ、なんと。

小萬　初の節句に忌まはしき、人相書ゆゑ、それで、わたしが。

幸兵　蚊遣りに燻べし繪姿の、因幡幸藏この世から

菊川　阿鼻焦熱の苦しみを

小萬　受くる最期は。

ト以前使ひし淨瑠璃本落ちてあるを拾ひ取り、思ひ入れあつて

折も折とてこの本の、二つ巴の釜ヶ淵、五右衛門親子の苦しみを、書き作りたる淨瑠璃の、文句も同じ親と子が、やがて捕はれ、この如く。

幸兵　盗みをすれば當り前、身共もそれと心ざす、盗賊因幡を召し捕つて、正しく奪ひし二品を。

菊川　取り返すのがお家の忠臣。

幸兵　親への孝行。

小萬　その忠孝もまだ一つ、夫の爲めに。

幸兵　二人の女房、心を合せて。

小萬　寶の在所はおのれ盗賊。

幸菊　アノ、盗賊を

小萬　思ひ違へて因幡とは。

幸兵　的を定めて

菊川　恨みの數々。

小萬　定めなき世の
幸兵　ヤ。
　　トこれにて小萬ホロリとして
小萬　人心ぢやなア。
小助　モシ〳〵、小萬さん、先刻話した事につき、急に相談せにやならぬ事。内では遠慮、何時もの所まで、ちよつと來て下さりませ。
　　ト思ひ入れ。時の鐘になり、向うより小助、出で來り門口へ寄つて
小萬　アヽコレ、そりや約束の、アノ宿老樣の所で日待ちの相談。そりや、ちよつと行つて來ずばなりますまい。菊川さん、お前にあの子を預けて行て、後で又乳がなうては、目が覺めて難儀しなさんせう。わたしが連れて參りませう。
　　ト思ひ入れにて云ふ。小萬こなしあつて
幸兵　アヽ、連れて行きやるか。そんなら必らず早う戻つて來やれ。
　　ト抱き子を抱へ門口へ出る。幸兵衞探り寄つて
小萬　アイ〳〵、隨分早う戻りまするが、なんと云うても相談事、もし閑人ゐならば、其うちゆるりと、

菊川さん。
菊川　嬉しうござんす。そんならお前は、あのお方と。
小助　サア〳〵、ちつとも早く來て下され。
小萬　また忙しない。もう暮れ六つ、どうぞお前、ツイ、ちよつと灯しておくれ。
菊川　エ、そりや、何をえ。
小萬　行燈の明しを。
菊川　そんなら灯して。
小萬　後で悠りと灯しておくれ。ホヽヽヽ。
菊川　また惡口を。
小萬　ドリヤ、行つて來ようか。

ト唄になり、小助、競り立て〳〵向うへ入る。幸兵衛、菊川殘る、入相の鐘にて道具廻る。

本舞臺正面、池田の宿、本陣の體、軒口に紋付きの幕を張り、好き所に網乘物を置き、濱島逸當、水上下白無垢の形にて扣へ、ぶッ裂き羽織野袴の侍ひ二人前後を圍ひ居る。時の鐘、合ひ方にて道具留まる。

侍一　ナニ逸當どの、我れ〳〵とても朋友のよしみ、氣の毒には存ずれども、其許の子息幸兵衛事、申し譯なきこの度の越度。

侍二　月本家の重器峯の藥師の尊像、曉丸の御劍、奪ひ取られしは、この上もなきその身の災難、詮議の日限りも今日限り。

逸當　その二品は今以て、手がゝりとてあらざれば、伜方より沙汰なきは、濱島の家滅亡の時節到來。申し譯なきこの逸當。伜の科をこの身に引受け、切腹の願ひを上げしに、お聞き濟み遊ばされ、今日今宵、當所池田の本陣にて、切腹仰せつけられしは、親の身に取り如何計り、申し上ぐべき詞もなし。只この上のお願ひには、自殺いたせしその後にて、御介錯の儀、御兩所ともよろしく頼み奉る。

ト思ひ入れ。兩人も涙ぐみたるこなしにて

侍一　氣遣ひばしおしやるな。拙者とても朋友のよしみと申し、殊には子息幸兵衛どの、分けて近しき水魚の交はり。

侍二　氣の毒ながらも役目の表、互に依怙なき武士の常。さはさりながら其許には、云ひ置く事もござるなら、必らず心置き召さるゝな。我れ〳〵ども へ御遠慮なう。

ト逸當思ひ入れあつて

逸當　忝なき御兩所のお詞。老のこの身を捨てまする、心はさら〳〵惜しまねども、心がゝりは伜幸兵衞。親が自殺と聞くならば、定めしその身の前非を悔ひ、よもや生きては居をるまい。彼れが命は塵芥、大切なるは寶の行くへ、詮議なさぬがこの世の迷ひ、何くに隱しあればとて、我が一念はこの土に留まり、やはか取り得で置くべきか。

　　ト無念の思ひ入れ。

兩人　それぞ天晴れ忠義の心底。

　　トこれにて、逸當こなしあつて

逸當　この期に及んで、血迷ひし今の繰り言。御兩所の手前、面目なう存じまする。

　　ト思ひ入れ。暮れ六ツの時計、寺鐘聞える。三人愁ひの見得よろしく、この道具廻る。

　　元の稽古所、世話場の道具に戻る。直ぐに、てんつゝ、時の鐘になり、向うより四つ手駕籠一挺擔ぎ、先のは駕籠の者、後棒は以前の法印、頰被りにて面を隱し擔いで出る。後より岡崎宿の大津屋德右衞門、半合羽ばつち、一本差しにて、駕籠につき出で來り、思ひ入れあつて

德右　コレ、駕籠の衆、話しのあつた稽古所は爰であつたかいの。

法印　左様でござりまする。

徳右　そんなら訪づれて見ませう。モシ〳〵、お頼み申し度うござります。小萬さまと申しまするは、お内でござりまするかな。

ト菊川、行燈灯して居たりしが

菊川　ハイ、左様さうにござりまする。

徳右　左様なら、御免なされませ。

トこれにて駕籠に向ひ

モシ、爰でござります。

ト垂れを上げる。中より、前幕の鐵砲和尙、羽織一本差し、醫者の拵らへにて、出て內へ入る。

和尙　御免なされませ。愚老は少々お賴みがあつて、參上いたした者。コレ〳〵、駕籠の衆、少し間があらう。其うち駕籠を。

法印　ハイ〳〵畏まりました。

ト駕籠舁き兩人、門口の脇へ行き休み居る。菊川心得ぬこなしにて

菊川　モシ〳〵、私しはお尋ねなさるゝ、小萬さまではござりませぬ。そのお方は今、用があつて出られ

ました。わたしは留守をいたして

和尚　ア、、お留守かな、それは殘念な儀でござる。愚老は端唄の稽古をお賴み申し度く參つたが。

德右　それ御覽じろ。さうであらうと存じたゆゑ、マア〳〵、濱松のお屋敷の方を先へ仕樣と申したは爰ぢや。

和尚　これはしたり、それはお主が、藝に氣のないと云ふのぢや。モシ、お聞きなされませ。愚老は岡崎の町醫朴庵と申す者。この度フト致した事にて、アノ藥師の尊像が手に入りました。所で、この男の申すには、確か月本のお屋敷で尋ぬるとあるゆゑ、手筋があつて持つて行つたなら、金にならうと申しまするが、正眞の品か似せ物か、先樣へお目にかけての上の事。殊にはこの間評判のある、小萬さんの噂聞きましたゆゑ、お知る人にもなりたし。

德右　左やう〳〵、弟子入りながら金儲け、私しは大津屋德右衛門と申して岡崎の女郎屋、代物探す片手間に、お尋ね申して參りました。

　トこの話しを菊川聞き、さては、と云ふ思ひ入れあつて

菊川　それはマア〳〵、好うお尋ねなされて、お出でなされました。して、尊像を。

德右　持つて參ると大金になりまする。その上にて大儲け、ナウ朴庵さま。

和尚　左やう〳〵、そんなら今から引返して、あの濱松のお屋敷へ。

德右　ちつとも早う參りませうか。

和尚　さう致さう。これはお世話になりました。折角參つて、併し又明日參りませう。ドリヤ、お暇いたさうか。

ト兩人連れ立ち門口へ出るを、菊川二人を留める、合ひ方になる。

菊川　モシ、ちつとお待ちなされて下さりませ。

和尚　ア丶、御用ばしござるかな。

菊川　ハイ、外の事でもござりませぬが、いま仰しやりました尊像とやら、その品は外へお賣りになりませぬかえ。

德右　イエ〳〵、左樣でもござりませぬ。ナウ朴庵さま。

和尚　賣りまする〳〵。イヤモウ、金との相談でござれば、外へも隨分賣りまするが、早速申さう、代金は五十兩。それが一分缺けてもお話しが致し憎い。

菊川　そんなら價は五十兩。そりやモウ眞の品に相違なくば、如何程なりとも、わたしがお貰ひ申しませうが、その代りには、ちつとお賴みが。



琴三絃指南
小きん

ト徳右衛門が方を見て恥かしきこなしありて

モシ、あなたが今仰しやりましたには、岡崎の女郎屋さんと仰やつてゞござりまするが、事に依りまするど勤め奉公いたしても金拵へにやならぬ者もござりまするが、其相談が出來ませうかえ。

徳右　ハイ、そりや私しの商賣。併し、その奉公人を見ました上でなければ。

菊川　左樣なら申しませうが、何をお隱し申しませう。その奉公人は卽ちわたし。此やうな、不束な生れでも、お買ひ受け下さりまして、金の代りに。

徳右　なりまする〳〵。屹度金になりまする。お前が勤めにござるなら、五十兩にはわしが抱へます。コレ〳〵、卽ち金も五十兩。

ト懷中より前幕の五十兩の金を出し

この金渡して直に相談。併し賣り主と云ひ、身寄りの人に逢うた上では。

菊川　いよ〳〵買うて下さんすかえ。

和尚　そりや、あの人も買はいでわいの。金が調ふその時は、愚老が持參のこの尊像、引替へにやりまする。

ト懷中より袱紗包みの尊像出だす。菊川嬉しき思ひ入れにて

菊川　忝なうござりまする。屹度わたしがお貰ひ申しませう。左樣なら少しの間

和尙　樣子を爰で

菊川　お待ちなされて下さりませ。

　　　トこの時奥にて

幸兵　菊川〳〵、何をして居やるぞいの。

　　　ト聲する。二人は思ひ入れして居る。菊川奥を見て

菊川　アイ、明しをつけて居りまするわいな。

　　　ト合ひ方變はつて、幸兵衞奥より、探り〳〵出て來り

幸兵　アヽ、もう暮れたか。明るいやら、暗いやら見分かぬ、俄か盲目。どうやら明しが、ぼんやりと見えるやうでもあり、コレ菊川、最前から、其方何をして。

菊川　アイ、わたしや爰に少しの間

幸兵　用があつてか。して何の用で。

菊川　アイ、その用わな。

　　　トもじ〳〵して居たりしが、幸兵衞の側へ差し寄り、こなしあつて

モシ、こちの人え。わたしやお前に

幸兵　用と云やるは、亭主と思ふ幸兵衛に、暇の状をくれと云ふのか。

菊川　エ、すりや、その心を

ト差し俯向き思ひ入れ。奥より軍平出かゝつて窺ふ。

幸兵　思ひ掛けなう尋ぬる尊像、手がゝり知れしを取り得度く、それゆゑその身を奉公に。コレ、忝ない
忝ない。過分の事ぢやが、それではどうも、其方の兄の左膳どのへ。

菊川　サア、その義理合ひは聞えてあれど、わたしや決して、お前の爲めには

ト氣を替へて思ひ入れにて。

お前の子まで出來たる小萬さん、それがあるのに、又わたし、まづい男は今と云ふ今、フツツリ
と、愛想が盡きた。アイ、それゆゑわたしや今改めて別るゝ心、それでお前の武士も立つ。殊に
は望みの尊像も手に入る道理、それぢやに依つて去り状を。

トこの臺詞のうち、幸兵衛、呑み込みし思ひ入れにて

幸兵　聞き屆けた、承知した。許嫁の女房菊川、成る程去つた、暇やつた。その代りには去り状も書か
ぬ。書かれぬ旨目の、この幸兵衛が去り状代り。

ト懷中より以前取り替はりし厨子入りの尊像出し

この尊像は似せ物なれど、朝夕肌に掛け奉りし、御佛も今は形見と。

トほろりとして

サ、堅い固めの、その誓言にはこの御佛、受け取るからは、この上は。

德右　亭主がなければ、直ぐにこの場で抱へる奉公人、ソレ五十兩。

ト金を菊川に渡す。

菊川　これで手切れのこの金を。

ト幸兵衞に渡す。

幸兵　似せか、眞か見えねども、手詰めの日限りこの場の仕儀。然らばこれにて。

和尚　價の金の五十兩、それが出來れば尊像は、直ぐに其方へ金と引替へ。

トこれにて幸兵衞探り寄つて和尚に金を渡す。尊像は幸兵衞受け取りて

これにて互ひに。

幸兵　手に入る寶。

德右　對談濟まば奉公人。

菊川　そんならわたしは

幸兵　隨分無事で。

ト思ひ入れあり

云ふも云はれぬ他人と他人。

菊川　必らず變つて。

ト云ひさま門口の駕籠へ乘る。軍平この時下より窺ひ出て來り

軍平　そんならあなたは。

ト行くを幸兵衞探り留めて

幸兵　これも忠義と

菊川　貞女の道

軍平　操を破つて

菊川　あの岡崎へ。

兩人　これからわしが

軍平　モシ、煩はぬやう。

菊川　其方もあなたを

軍平　この身に引受け

幸兵　アヽ、これ程までに。

ト駕籠の方へ思ひ入れ。

菊川　頼んだぞや。

ト駕籠の垂れを下ろす。時の鐘、三重になり、幸兵衛涙に咽びし體、軍平門口を閉める。駕籠を先へやり、後棒擔ぎし法印、顔を出だし兩人と頷き合ひ、嘲笑うて駕籠を早め向うへ入る。後、合ひ方、殘る。

幸兵　アヽ、思ふまい〳〵。これ程までに菊川が、心を盡くせしこの尊像。

軍平　片時も早うお屋敷へ。

幸兵　我れもこれより支度なし、其方は持參し少しも早う。

軍平　心得ました、持參いたして

ト右の尊像渡す。

幸兵　父御の御難儀、救ふはその品。

軍平　左樣ござらば、直さま下郎は

幸兵　行け〳〵。

トこれにて、幸兵衞、あちこちと尋ね大小を取つて差し、支度する、軍平、擔ぎ來たりし葛籠の中より合ひ口の短刀を出だし、これを差して向うへ行きにかゝる。時の鐘、合ひ方になり、向うより小箱の提灯な中間二人先に照らし、後より一學、左膳、羽織袴にて出て來り、軍平と花道にて摺れ違ふ。軍平左膳を見て

軍平　ヤ、あなたはお旦那左膳さま。

左膳　さう云ふ、其方は

軍平　ヘイ〳〵、御家來軍平めでござります。折好い所でお目にかゝりました。

一學　すりや、左膳どのゝ小者でござるか。して、その者が折好い所で逢うたと申すは。

軍平　イヤ、別儀でもござりませぬ。幸兵衞さまより下郎めは、あなたさまの方へ急ぎのお使ひ。卽ち、紛失の尊像、手に入りましたるゆゑ、只今早速左膳さままで。

左膳　ヤ、何と申す、尊像が手に入りしとな。それは重疊。一學どの、お聞きなされたか。

一學　合點参らぬ事ながら、內見いたすも爰は途中。

左膳　して、幸兵衞は、何くに罷り在る。

軍平 民家なれども、あの家が即ち隱れ家。一先づあれへ。

左膳 其方、案内いたせ。

軍平 畏まりました。

ト合ひ方、彈き流しにて、この人數門口へ來り

モシ〱、旦那樣、一學さま左膳さまにお目にかゝり、即ちこれへ御同道仕りましてござります。

幸兵 ナニ、御兩所の御入來とや。これへ〱、サヽお通し申せ。取り散らした物、片寄せやれ。イザ御兩所、お通り下され。

左膳 濱島氏、左膳でござる。

一學 一學でござる。小者が案内に思はずこれへ。サ、左膳どの。

左膳 先づ〱貴殿より。

一學 然らば御免。失禮ながら、お先へ通るでござらう。

ト兩人家へ入り上へ通る。幸兵衞探り〱二人を敬まふ。一學これを見て

一學 幸兵衞どの、見受けし所、貴殿は兩眼不自由の樣子。こりや目が潰れましたか。

幸兵 イヤ、左樣でもござらぬが、この程の眼病、誠に難儀仕る。

左膳　それは御難儀。我れ〳〵兩人この如く、見廻りいたすも、盗賊因幡亥藏を詮議の爲め、それと申すも二品の紛失ゆゑ。早速聞かうは、あれなる軍平が只今申せしは、紛失なせし尊像の行くへ。

幸兵　左樣にござります。その御寶仔細ござつて、拙者の手に入りましたを、幸ひ只今早速持參なし、御兩所のお目にかゝり、お手渡しいたせし上、何卒親どものお咎め、御赦免のお願ひと、取る物も取り敢へず、心は急けど不眼の拙者、遲なはるうち御兩所の御入來。この上もなきこの身の大慶。即ち尊像は手に入りました、……軍平、サヽ、それへ〳〵。

軍平　へイ〳〵、お家の御寶、峯の藥師の即ち尊像。イザ、お改め下さりませう。

ト尊像差し出だす。左膳取つて

左膳　すりや、これがお家の重器、紛失なしたる尊像となっ。

一學　紛失の尊像、よもや滅多に手に入る筈はござらぬが、それがどうして……そんならもしや預け置きたる

ト思ひ入れ、左膳これに目をつけ

左膳　お預けなされたとは、そりや紛失の尊像をかな。

一學　アイヤ、預けたではござらぬ、預けたと申したは、幸兵衛の親濱島逸當、お預けの身分でござれば

尊像知るれば預けの身分も、御赦免あらうと、それゆゑに。

左膳　アヽ、左様でござるか。然らば身共は、この場に於て内見いたさう。

ト厨子を開き、よく〳〵見て

ヤヽ、こりや、コレ、似寄りの尊像ながら、お家の重器に事變り、眞赤な似せ物。

幸兵　ヤヽヽヽ、すりや御佛は、又ぞろ、これも似せ物とな。

軍平　さすれば今の二人の者どもは。

幸兵　身共を僞る騙りであつたか。さうとは知らず可哀や菊川。ホヽヽホイ。

ト當惑の體。軍平無念の思ひ入れにて

軍平　不眼の旦那と侮つて、旨々と彼奴等が拵へ事にかゝつたか。さはさりながら遠くは行くまい。後追つかけて

ト走り行くを聞きつけて

幸兵　コリヤ軍平、駈け行く樣子は今の者ども、捕へる心か。

軍平　引ツ捕へて一詮議、その上渡せし菊川さまを。

左膳　ナニ、菊川とは、もしや身共が。

一學　妹御の菊川どのか。それがどうした。

幸兵　アイヤ、聞きしに違ふこの尊像。身が眼病を幸ひ、似せ物賣りしは愈々騙り。求めし身共、恥の上なる恥の上塗り、云うて返らぬこの場の仕儀、狼狽ずとも

軍平　でも一走り。

幸兵　コリヤ、扣へて居らうぞ。

ト屹度留める。

左膳　ヤイ、こゝな狼狽者めが。軍平無念の思ひ入れ。右膳幸兵衞を引附け大切なる尊像を奪ひ取られ、詮議の爲めの今の流浪、やう〳〵尋ね求めしとて、又ぞろ似せ物の騙りに合うたと申しては、そちや武士道が立つまいぞよ。コリヤ、ヤイ、件の二品出でざる時は、東山家へ大殿には、なんと云ひ譯あるべきぞ。お家に關はる一大事こゝな大痴けめ。

ト打ち据ゑて立腹の體。幸兵衞平伏して居る。一學嘲笑うて

一學　イヤモウ、餘りな白痴で物が云はれぬ。コレ幸兵衞どの、イヤサ、幸兵衞。アヽ、こりや、なにか今日こそは日延べの日限り、明日の明け六ツには池田の驛にて親逸當、本陣にての切腹を助けん爲めに、其方は似せ物なりとも拵へて暫らく事を濟ませる心か。さうであらう〳〵。コリヤ、ヤイ、

只さへ死罪の親逸當、それに斯やうな事あつては、お上を偽る其方ゆゑ、切腹所か縛り首、さか磔刑にならうも知れぬワ。それを外から執りなすも、妹の縁に贔屓の沙汰、近頃笑止千萬な。それゆゑにこそ明き盲目、忠義の武士と云はるゝか。見下げ果てたる腰抜けだな。

ト嘲笑ふ。左膳思ひ入れ。

左膳　これサ、幸兵衛、一學どのゝ今のお詞、妹の縁とお云ひやるは、身ども迚も耳にかゝるワ。愈々二品、出でぬに於ては、なぜ武士らしう腹切らぬ。切腹いたして親の一命、願ひを立てなば、お上のお慈悲、その時こそは又ぞろ日延べも、事に依つては叶ふまいものでもないが、命を捨て、なぜ願ひは出さぬぞ。そこに心が付かざるか、幸兵衛、見下げ果てたる侍ひぢやな。

トこの臺詞好き程に云ひ廻して聞かせる。幸兵衛呑み込みし思ひ入れにて、刀を取り上げ切腹せんとする。

幸兵　コリヤ〳〵、待て〳〵。

左膳　なぜお留めなさるゝな。

左膳　さう云ふ汝は狼狽者、日延べの日限り未だ立つまい。今宵のうちにも二品が、出なばその時命を捨てるに、なんの手間隙いるべきぞ。今宵一夜が生死の境。

幸兵　然らば明日未明まで、寶の詮議いたしたならば。
一學　親逸當は身が預かり、今日今宵、池田の驛の本陣へ遣はし置けば、明朝までにいよ〳〵出ねば、
氣の毒ながら。
左膳　今宵に限る切端の二品、出でざる時は其方が
幸兵　腹一つぞと胸を据ゑ、是非に寶は
軍平　下郎もとも〳〵、なるたけ詮議を。
一學　無益の隙取り、夜更けぬうちに左膳どの。
左膳　然らば此まゝ御同道。
ト兩人門口へ出る。幸兵衞探り寄つて門送りして
幸兵　明朝までは、何卒よろしう、お願ひ申すは御兩所様。
左膳　身を粉に碎いて
軍平　寶の御詮議。
一學　よもや、知れまい。
幸兵　そこを是非々々命にかけて。

左膳　必らずともに油斷なう。

幸兵　屹度二品。

左膳　持參いたすか。

一學　心許ない。

左膳　番うた詞を。

幸兵　ハツ。

左膳　反古に致すな。

ト唄になり、家來提灯を照し兩人向うへ入る。幸兵衛殘る、軍平身繕ひして向うへ行きにかゝる物音を聞きつけ

幸兵　コリヤ〳〵、軍平、さては汝は。

軍平　お留めなさるゝあなたのお詞、背きましても先刻の二人を。

幸兵　氣遣ひなるは菊川が。

軍兵　サ、それゆゑ下郎は一走り。

幸兵　これも尤も。云はば左膳の妹菊川、聞き捨てならぬ、彼れが身の上。

軍平　お連れ申して歸りませう。

幸兵　滿足々々。まだこの上に某が、樣子を聞かば好きに囘向を。

軍平　エヽ。

幸兵　アイヤ、早う行け。

軍平　ハイ、ドリヤ一走り。

ト捨て鐘、合ひ方になり、一散に向うへ入る。幸兵衞殘り、思ひ入れあつて

幸兵　目界も見えぬこの身の上、どうして今宵二品が。迚も寶の出ぬ時は、親人樣になり替り、腹搔き切つて申し譯。それを賴みに日延べの願ひ。心にかゝるは菊川が身の上、子までなしたる女房小萬。歸らぬうちに、さうぢや／＼。

ト唄になり、幸兵衞探り／＼似せ物の尊像に手に觸はりしを取り上げ、葛籠の上へ置きし大小取つて刀を拔き切腹の支度する。此うち向うより、小萬、子を抱いて出て來たり、花道に留まり思ひ入れあつて

小萬　今宵につゞまる寶の詮議、尋ね求めて出ぬ時は、お命助くる手段が肝要。舅御樣を殺しては。

幸兵　迚も存命叶はぬ某、今死ぬるならあの悴、最前探り見たるのが、思へばあれが親子の別れ。

小萬　夫ゆゑには石ともなる、鬼ともなつて失せたる二品。
幸兵　我が子の顔さへ見る事の、ならぬ病も何ゆゑぞ。
　ト合ひ方、時鳥の聲聞える。兩人思ひ入れあつて
小萬　ア、道にかけたる時鳥。
幸兵　鳴く音血を吐く
幸小　思ひぢやなア。
　トまた唄、時の鐘になり、幸兵衞死なうとするうち、小萬門口へ來たり咳拂ひするゆゑ、幸兵衞そこらを探り〳〵取り片づける、小萬内へ入る。
幸兵　誰れぢや〳〵。
小萬　アイ、わたしでござんす。
　ト抱き子に乳房を含ませて下座に居る。
幸兵　小萬か。いかう隙取つたの。
小萬　アイ、所詮もない相談事に、思はずも夜更けまで。
　ト此うちあたりを、よく〳〵見て

幸兵　このマア、菊川さんは、どこへござんしたえ。

小萬　菊川が事か。コレ、小萬、てまへとマア、較べて見ると、粋なやうでもまだ初心、一緒に居てはと、あの軍平が連れて。

幸兵　そりや、マア、わたしの思うやうにもない。それにつけても幸兵衛どの、わたしやお前にちつと、無心が

小萬　改まつた、亭主へ女房が無心とは。

幸兵　サア、これまではどうぞして、この子をお前へ見せたさ、わたしも逢ひたさ。それを願うて濱松の、五社明神様へ願掛けしたのも、百日參り、今日と云ふ今日、巡り合ふそのお禮參りに、今宵はわたしや、アノ明神樣へ。

小萬　願掛けなれば兎も角も。併しこれまで程へしこの幸兵衛、男殘してその明神樣へ。

幸兵　それゆゑわたしが

小萬　この身の武運、忰が行く末、願ひし神へ參詣と、わしを騙して留守のうち。

幸兵　エヽ、憎らしいその疑ひ。仇し心の浮氣な男、女房の事は打ち捨てゝ

小萬　なんの捨てやう、片時へんしも忘れた事は。

小萬　それが實なら。

ト後にありし琴を見つけて

ほんにソレ〳〵、何時ぞやの事でござんした。お前とわたしがその中を、書きつくりたる白浪と、題せし琴唄、よもや覺えて。

幸兵　さう云はせまい、その爲めに、雨の徒然雪の夜は。

小萬　覺えて居さんす事ならば、幸ひ爰に手馴れし爪琴、忘れて居ぬのがお前の誠。

幸兵　そんなら爰でその琴を。

ト探り〳〵琴に向ひ調べにかゝる。

小萬　其うち、わたしや神詣で、おくれの髮を取り上げて

幸兵　ちよつと出るにも浮氣な女房。

小萬　アレ、じやら〳〵と其やうな。

幸兵　でも夜歩くのに髮形。

小萬　神は非禮を受けぬとやら、それでわたしが。

幸兵　それ程までに。

小萬　思ふは世間の親々が。

　　　　トこの時幸兵衛ホロリとして

幸兵　子を思ふ身は夜の鶴、どうぞ悴は千年も。

小萬　萬に一つも親々の

幸兵　先き立ち行くが道なるに、道に違ひて親よりも、

小萬　道に違ひし

幸兵　我れ〳〵

小萬　夫婦。

幸兵　なんにも知らぬ……白浪に

小萬　泡と消え行く。

幸兵　ヤ。

小萬　白浪ぢやなア。

　　ト泣かうとして、氣を替へ屹度なる。幸兵衛琴を調べる。

〽空ひくみ時鳥に物思はせて、肘を枕に添へ乳の夢も、結ばで明くる夏の夜の、鳥はものか

は憎やと云うて、積る所も恥づかしや、垣根を埋む白菊の

ト此うち小萬、押入れより鏡臺を出だし、前幕の葛籠を取り出す。その上に前幕に使うたる大小挾みある。小萬、子を抱き、あたりの六枚屛風を出し、これを立てゝその中へ入り、髪を解かす仕組み、小萬の姿半身見え、下の方隱れる。髪を解かし掛けたる體、合ひ方になる。

小萬　思ひ出だせば何時の夜か、二人寐られぬ床の内。

幸兵　夜長の砌り思はずも、作りし唄の白浪を。

小萬　今はこの身の前表に、思ひ合はする

幸兵　その白浪がなぜに前表。

ト これにて小萬、ギックリ困りし體にて

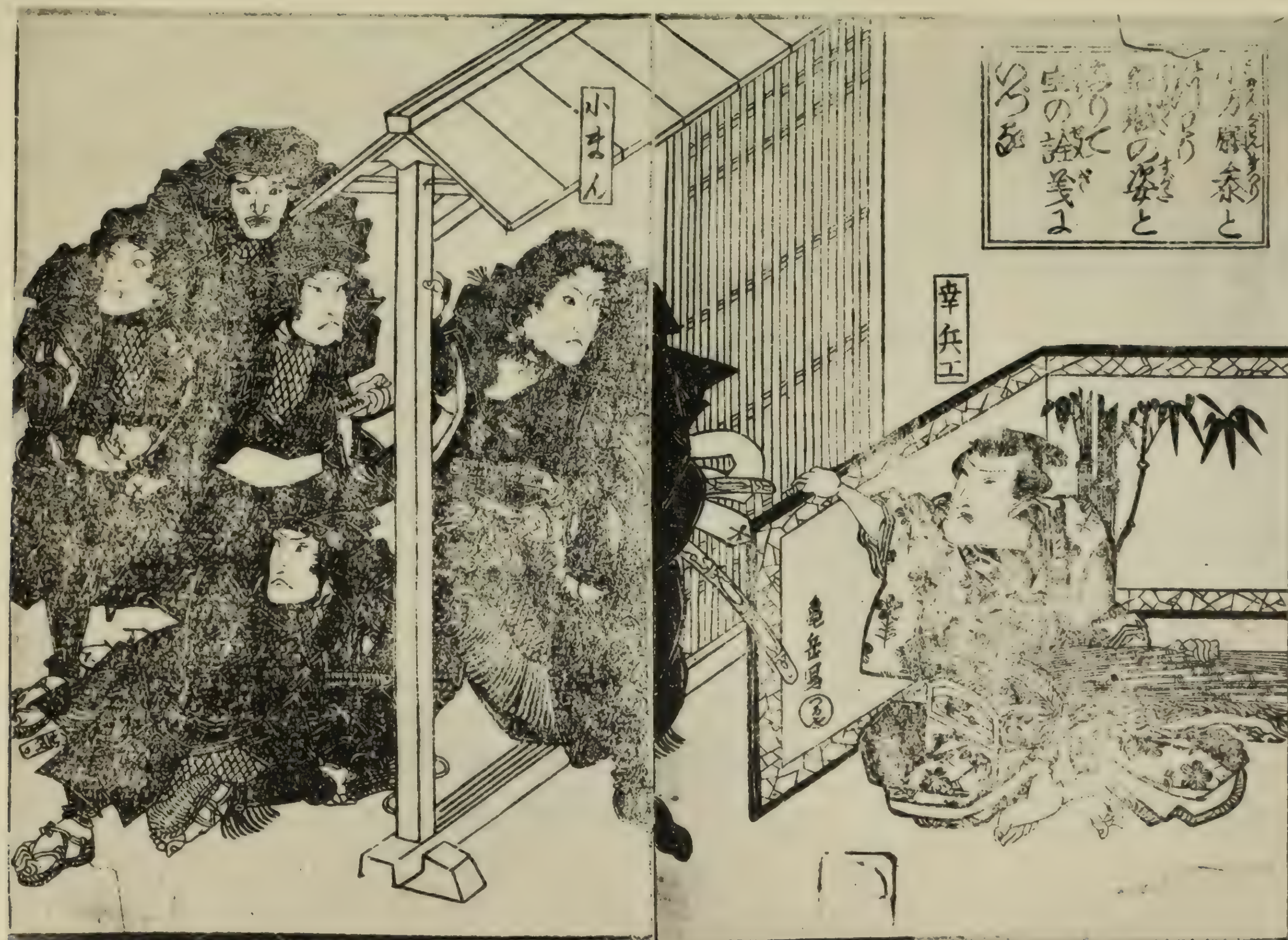
小萬　サ、知らず知られし

幸兵　二人が中に儲けし忰は。

小萬　蟲が知らすか。

ト この時抱き子、蒲團の中にて泣き出す。これにて差し寄り

オヽ、いんのこ〳〵。


小まん
幸兵工

ト叩きつけて寢かす。また琴唄になる。

〽辛き心に物云はぬ、その音づれは琴の音に、通ふ松風うねうね茂る、庭の卯の花白浪と、疑ひかゝる闇の忍び路。

トこの唄のうち好き時分、向うより以前の小助、黒四天、手甲、股引、忍び頭巾一本差しにて、龕燈照らし、同じ形の盗賊五人出て來り、門口にて龕燈にて窺ふ。此うち小萬、髪を捌き前髪を百日鬘のやうに見せ、葛籠より黒小袖を出し着ようとして幸兵衛の方へ思ひ入れあつて、屏風を立て廻す。此うち始終琴唄ありて、好き切掛けに唄切れる。ゴンと本釣り鐘聞える、凄き合ひ方にて、屏風の中より小萬、黒の頭巾黒の四天やうなる小袖丸絎、着込と見える長襦袢、黒股引、大小にて懐中に子を抱いて出て來り、門口を明け外へ扣へし人數へ思ひ入れあつて、兩足を踏み出す。小助、用意の重ね草鞋を履かす。幸兵衛は眼病ゆゑ、この姿の目にかゝらぬ體。

小萬　ほんにお前は、よう覺えて居なさんしたの。

幸兵　なんとどうぢや。きつい心中者であらうがの。時に其方は、どうでも今から。

小萬　ツイ、一走り、行つて來やんすが、定めて夜が更けませう。

トこの時抱き子せわるゆゑ思ひ入れあつて

ヤレ、忙しない、今わしが連れて行きまする。モシ、こちの人、お前飯をあがるなら、奥の膳棚に……と云うた所が勝手を知らしやんすまいし、殊に眼病、ドレ、わしが行つて。

ト奥へ行きにかゝる様子を聞いて

幸兵　アヽ、コレ〳〵、まだわしは欲しうない。其方は早う行つて來やいの。

小萬　そんなら直ぐに寐なさんせ。蒲團を出して行きませう。

ト押入れより、蒲團を出だし、屛風の上の方へ床をこしらへる。

幸兵　コレ〳〵、其やうに世話燒かずとも、早う行きやいの〳〵。

小萬　イエ〳〵、久し振りの今宵、世話せいでわいな。

幸兵　それでは、こりや、御馳走があると見えた。イヤ〳〵、見えはせなんだ。ハヽヽヽ。

小萬　まだじやら〳〵と、何云はしやんす。

ト此うち床を敷き仕舞うて

そんならわたしは、行つて來るぞえ。

トこの時、幸兵衛蒲團の上へ上がり、思ひ入れあつて

幸兵　隨分無事で。

小萬　歸らいでわいな。
　ト門口へ出て空を見詰め
今宵も初夜過ぎ、池田の宿は、破軍の劍先。この身を捨てゝも舅御樣を。
　ト幸兵衞これを聞いて
幸兵　ナニ舅御とは。
小萬　サ、舅御樣も別狀なきやう。
幸兵　それを願ひにその身を捨てゝ
小萬　今宵は是非とも
幸兵　神へ願ひを
小萬　親子連れ立ち。
　トこの時門口へ來たりし大勢。
手下　お頭、早く。
小萬　ア、コレ。
　ト幸兵衞聞き咎め

幸兵　今のは人聲。

小萬　アイ、迎ひの人の。

　　ト門の戸をシヤンと閉し

　行つて來るぞえ。

　　ト臺詞は女、形は男の振りになる。幸兵衞見えれど心得ぬ思ひ入れ。本調子の合ひ方になる。隣りの庵室のうちにて、稽古の笛の音聞え、一つ鉦打ち込む。この鳴り物をかり、小萬、幼子を抱きあやしながら盜賊の姿となり、手下の大勢龕燈を照らし悠々と行く。向うよりは菊川、件の振り袖衣裳、右の方片袖引き切れし體にて、俯向きしな／＼として出て來る。花道の人數小萬を始め皆々、菊川を見つけぬ樣子にて、入れ替り／＼皆々向うへ入る。菊川門口に來たり呆然と佇み居る。幸兵衞は小萬が行きし後を窺ひ／＼門の戸閉めて鍵金を掛け、思ひ入れ。矢張り件の鳴り物聞える。

幸兵　生死不生は世の中の習ひと云へ、親を救はんその爲めに切腹なして寶の日延べ。それとも知らず神參り、戻つてこの身の有さまを、見たる上ではあの小萬、また一つには不便や菊川、心を盡くせどそれも似せ物。詮議なす程この身の恥。追ひかけ行きし軍平が、戻らぬうちに潔よう。

　　ト蒲團の上にて、脇差しを取りて死なうとせしが、思ひ入れあり。

併し別れしその後にて、生れし悴ありながら、顔さへ知らぬこの眼病、死ぬる今際にたゞ一目、顔覺えては死なれぬか。思へば世界の因果と云ふ、因果がこの身に重なりて、死ぬるこの身は厭はねど、後に殘りし親人樣。一人の女にあの悴、歎きを思ひ合すれば、未練に似たれど死にとむない。只この上は親人樣、悴が事を、コレ女房、必らずともに賴むぞよ……アヽ、これも矢ッ張り浮世の慣ひ。妨げなきうち、オヽ、さうぢや。

ト白刄を拔き腹切らうとする。この時、門口の菊川、外にて刀の手を留めることなし。風の音、薄ドロ〳〵幽かに聞える。幸兵衛、白刄を持つたる腕自由にならざる思ひ入れにて、白刄を取り落し悔りする。この途端に門口の菊川、その儘消ゆる。煙硝火立つ。幸兵衛あたりを窺ふ體にて、誰れも居ぬゆゑ又腹切りにかゝる。風の音烈しく、幸兵衛の側へ菊川、忽然と現れ自殺を留める。幸兵衛心づき、薄ドロドロ、雞聞える。

ヤ、其方は菊川ぢやないか

菊川　アイ、お前のお命助けん爲め、苦患を免れ歸り來るも、あなたを救はん爲めばかり。必らず逸まり給ふなよ。

幸兵　イヽヤ、死なねば親人の、命の切端、妨げいたすな、爰離せ。

ト突き退け、また腹切りにかゝる。菊川留めて

菊川　コレ、待つた。逸まらしやんすな。

幸兵　イヤ、離せ。

菊川　イヽヤ、離さぬ。

幸兵　妨げいたすな。

ト兩人せり合ひながら立ち廻る。此うち風の音烈しく

菊川　マアノ\待つて下さんせ。

幸兵　生害止むる其方の心は。

菊川　尋ぬる御寶知れたるゆゑに。

幸兵　ヤヽ、尋ぬる品が。

菊川　思ひがけなう藥師の尊像。

幸兵　して、何所にて、手に入りたるぞ。

菊川　サ、云ふに云はれぬ仕儀となり、手には入れどもその樣子、お聞きあつたら、定めし愛想も盡きやうかと、それが悲しさ、それゆゑに、歸り來たりしこの身の苦患。心がゝりは去り狀代りに、

渡しやんした尊像を、お返し申して、その上に、未來は必らず。

幸兵　して、その尊像は何所にあるぞ。

菊川　サヽその尊像は。

　　　ト云はれぬこなし。

幸兵　所詮この身は。

　　　ト腹切らうとする。菊川留めて

菊川　イヽヤ、離さぬ。

幸兵　然らば尊像。

菊川　サア、それは。

兩人　サア〳〵〳〵。

幸兵　どうぢやぞいやい。

　　　トきつとなる。この時向うより、バタ〳〵にて軍平大童になり、手を負うたる體にて、尊像の包を口に咬へ白刃を引き提げ、よろぼひ〳〵出て來る。後より以前の德右衛門、非人の形に着替へ、軍平をやらじと立ち廻りながら出て來り、軍平件の非人を取つて投げ、門の戸叩いて

軍平　申し〳〵、幸兵衞さま、御安堵なされい〳〵。

幸兵　ヤ丶、其方は軍平、慌しい。その上其方が五音の調子。

軍平　深手ながらも、嬉しや尊像手に入りました。

幸兵　ナニ、尊像が其方の。

ト走り寄る。その裾を菊川扣へて

菊川　ア、モシ、尊像出てはその奇特、悲しや、わたしは、また見ゆる事も。

幸兵　ヤ、なんと。

菊川　どうぞ、あの世で。

幸兵　怪しき詞は心がゝりな。

軍平　物仰しやつたは菊川さま。

非人　そんなら女が。

ト行きにかゝる、軍平立廻つて内に投げ込む。これにて門の戸破れて非人は内にて見事にかへる。この途端に風の音して菊川其まゝ消ゆる。軍平續いて内に入る。幸兵衞非人を引き据ゑ、乘かゝつてキツと見得。此うち向うより左膳、弓張り提灯を隠し持つて、窺ひ出で來り、門口にて躊躇ひ居る。

幸兵　手を負うたりし仔細はなんと。

軍平　申し上げるも情ない。最前失せたる兩人の、その相摺りはそれなる非人め、轡屋なりと僞つて、菊川さまを釣り出す企み、その惡智恵は法印め、追つかけ行きし天龍の、河原で大事の菊川さま、弄み者に情なや、その時懷中なされたる、似せと思ひし尊像が、思うて見れば誠の品、犀が崖にて取り替はり、云ひ譯なきはあのお子様。

幸兵　さてはその節取り落し、拾ひ上げしが誠の尊像。

非人　それゆゑその品。

トかゝるを幸兵衛捉へて投げつける。軍平立廻つてキツと引附け

軍平　その爭ひの最中へ、駈けつけ參つてその品取り得るうちに、菊川さま、主あるこの身を恥かしい、生きては居られじ、夫へ云ひ譯、渦卷く川へ身を投げてと、川端間近く來るゆゑ、お留め申すその所へ、又も尊像取り返さんと、惡者どもが群り寄るを相手となし、挑み合ふうち菊川さま、川へざんぶと飛び入つて、これはと留むる下郎めが、手に殘つたるこの片袖、あなたのお形見、果敢なき御最期。さはさりながら誠の尊像、卽ちこれに。

ト差し出す。幸兵衛取つて

幸兵　さては菊川この世を去り、我れに見えんその爲めに、今來りしは亡靈にて。

ト此時非人、刎返して幸兵衞が持つたる尊像を奪ひ取り逃げんとするを、幸兵衞引ッ捉へ、尊像を取り返し、非人を見事に當てる。

軍平　この世の別れと亡き靈の、その一念のこの家に來つて。

ト此うち、左膳始終立ち聞き居て

左膳　流石は左膳が妹菊川、最期の念力、尊像を。

幸兵　こりや、何時の間にかは左膳どの。

軍平　さては疾より。

左膳　樣子如何と引き返し、門に窺ふこの左膳、尊像手に入る上からは、片時も早う。

幸兵　池田の宿の本陣へ、持參いたして親逸當。

左膳　命を救ふが妹が菩提。

軍平　我が手に殘りしこの袖は。

ト振りの片袖を差し出す。

幸兵　旗ともなして後の世を

左膳　照らすは尊像、あの世の苦患。

幸兵　この世の苦患親人の

軍平　お救ひ申すも、御佛の

左膳　持參いたして幸兵衛早う。

幸兵　然らば、これより。

ト探り〳〵振り袖に尊像を包み、懐中して、大小ぼつこみ、行きにかゝるを

非人　その品渡せ。

トかゝるを軍平引戻して切り倒し、乗りかゝつて、我が腹へ突き立つる。左膳見て

左膳　ヤヽ、何ゆゑに軍平腹を。

トこの聲を聞き

幸兵　さては其方、死ぬる覺悟で。

軍平　腹かツ捌いて菊川さまの、未來のお供、下郎めが。

左膳　天晴れ、健氣な。

トこれにて軍平、刀の手を引廻す。左膳扇を開く。幸兵衛摺り寄つて

幸兵　下部ぢやなア。

ト耳へ口を寄せ云ひ聞かす。軍平ニツタリと笑みを含む思ひ入れ。左膳扇にて、軍平を喜びの餘り譽むる體。下に敷かれし非人血を吐いて落ち入る。この仕組双方よろしく、拍子

幕

天龍河原の場

役名――濱島幸兵衞。天狗法印。鐵砲和尙。濱島逸當。川越し人足大勢。

幕引附けると時の鐘、浪の音になり、揚幕より花道へ法印天狗坊、頰被りにて德利を提げ、後より川越六人、捨臺詞云ひながら出て來り

川越　コレ〳〵、貴樣は先刻の娘の、符牒分けに酒か〳〵。

同　その位の口割りでは濟まさぬ。しつかりと奢らせにやならぬ。

皆　二升や三升では濟まさぬぞ〳〵。

法印　馬鹿を云へ。この間から目をつけたあの娘、その上思はず扉が崖で、取り違へたその品を、あの奴めに引ッ奪られて、追つかけて行つた鐵砲和尙、戾らぬうちは樣子が知れぬわい。

ト話しのうち、向うより和尙、襤褸の形になり駈けて來るを皆々見て

皆々　ヤア、和尙さま、歸らつしやつたか〳〵。

和尙　コレ〳〵、先刻の奴が尊像持つて失せたで、その品が幸兵衞の手に入つて、それを持つて、アレ、アレ、向うへ失せるワ〳〵。

法印　よし〳〵、幸兵衞が手に渡つても、あいつは盲目。持つて行く先も池田の本陣、親逸當を助けん爲め。

川越　急いで行かうが天龍の、川を越さねば、どうして〳〵。空手で渡さず隙取らせ、間誤つくうちに、その尊像、引ッたくつて渡さうが、骨折り代は。

皆々　しつかり貰はう。

法印　そりや合點だ。一學さまより受け取つた、コレ、この金の品玉で、あの菊川を弄さんだ、その祝儀。

ト金を見せる。

川越　そんなら、おいらが骨ツきり。

皆々　働くべいかえ。

法印　皆承知なら、サア、來い〳〵。

ト浪の音にて皆々幕の内へ入る。と捨て鐘にて大勢の人聲、禪のツトメにて引返す。

本舞臺、一面の高堤、蛇籠を伏せし天龍川原の景色。左右並木の松、爰に幸兵衞、眞中に立ち身にて、法印、鐵砲和尙、川越し六人取り卷き居る。浪の音にて幕明く。

皆々　川が止つた〳〵。

幸兵　ヤ、、思ひもつかぬその川止め、俄かに川の止つたとは。

法印　コレサ、爰は雨が降らいでも、山が降つたで俄かの出水。

和尙　この大水ではどうして〳〵、船は出されぬ、それゆゑ川が

皆々　止つた〳〵。

ト口々に喚く。幸兵衞急いたる思ひ入れにて

幸兵　コリヤ／＼、人足ども、身は急用あつて、池田の本陣まで行かねばならぬ大事の用向き。是非々々川を渡してくれ／＼。

川越　モシ／＼、其方が大事の御用でも、わし等も大事の命だヮ。

川越　川越の命だと云つて、僅かの錢では捨てられませぬヮ。

幸兵　左やう申すは、どうでも川を。

皆々　通す事はならぬわえ。

トこれにて、幸兵衛、思ひ入れあつて、いろ／＼と頼む事あつて法印を探り見て

幸兵　コレ／＼、そこに居るお方、身共は急に行かねば、生きても死んでも罷りならぬ程の儀ぢや。止り川であらうが、何分川を渡してもらいたい。

法印　イヤ／＼、止つた川は渡されぬわいの。

幸兵　左様ではござらうが、慈悲でござる。身共も侍ひ、コレ／＼、手を下げてお身達を頼む程に、渡してくりやれ。今參らねば親どもの一命に關はる事。爰の道理を聞き分けて、お頼み申す／＼。

ト双方へ手を突いて頼む。皆々嘲笑うて居る。

法印　コレ／＼、皆見たか。あのやうに云はるゝのに、渡してやらうぢやあるまいか。

和尚　そりや賃錢と相談ぢや。コリヤおさぶさん、定めの駄賃ぢやァ渡されぬヮ。貴樣が持つてござる尊像を酒手にくれたら

皆々　渡してやらう、置いて行け。

トこれにて幸兵衞思ひ入れあつて

幸兵　待て〳〵、合點のゆかぬ事を申すな。金銀を望むは川越どもの常なるに、身が所持したる尊像を渡して行けとは、コリヤ、わい等は賴まれたな。

和尚　オヽ、賴まれた。明き盲目の濱島幸兵衞、ぶち殺しても尊像を、取つてくれろと賴まれたヮ。

幸兵　ヤヽ、その五音こそ正しく最前、醫者と申せし騙りの物腰。

和尚　知れた事だヮ。醫者と化けたる鐵砲和尚。

法印　われが爲めには許嫁、あの菊川を卷き上げて、念佛講した法印さまも、これにござるヮ。

幸兵　ヤヽ、さてこそ女房菊川を、弄み者にいたしたる、その惡黨等であつたよな。菊川始め軍平が、最期も何ゆゑ、おのれ等ゆゑ。折も折とてこの眼病、さればとて、こりや、聞き捨てにはならぬわえ。

ト身構へする。皆々見て

法印　ならぬと云うて

皆々　どうするのだ。

幸兵　どうと申して此方も、親の命に關はる用先。なるたけ容赦と存じたが、その料簡では渡すまい。もう斯うなつては一生懸命、目は不自由でも身も侍ひ。女房の敵、下部の仇、一々この場で切つて捨て、川を渡らで置くべきか。うぬ等が爲めには天龍の、川も水の川施餓鬼、死人の山だ、覺悟なせ。

トきつとなつて身構へする。

法印　エヽ、面倒な明盲目。無駄事吐かすな、ぶち殺せ。

皆々　合點だ、うぬを。

ト打つてかゝるを掻潜り〳〵、皆々を取つて投げ、白刃を引拔きキツとなる。これより鳴り物變つて、皆々手ごろなる割木、川原木の類にて打つてかゝる。幸兵衞は皆目見えねども、大勢を相手に大タテあつて一々切り拂ふ、これにて皆々ハツと云うて、左右へ逃げ散る。或ひは見事に切り捨てる。立廻りもあり、身體疲れて、ホツと息を吐き、思はず撞と座す。この時本釣鐘、凄き合ひ方。幸兵衞件の像を肌に結びつけ、探り〳〵川水を掬ひ咽喉を濕す體。法印、和尙、兩人囁き合ひ、川原木を持つ

て打つてかゝる。幸兵衛目の見えぬながら白刃を持つて、面白き立廻りあつて、兩人小隱れする。幸兵衛殘り、相手なければ白刃を納め、探り〳〵、船やあると川端を尋ぬる。又ぞろ兩人兩方より組つき尊像を取らんとする、立廻りよろしく、三人組つき合うて川へ飛び込む。水煙り立つて、水鳥パッと飛び去る。これより鳴り物變り、川原の道具段々と引いて取る。

本舞臺の高堤、段々と下の方へ引いて取る、向う一面遠目に見える、波手摺り、上の方茂りたる芦、向う岸の體、引道具に連れ、上の方より、ひらだの船を押出す。この船に網乘物一挺、左右に高張り提灯、この中に濱島逸當、白無垢、水上下、切腹の拵らへにて、これに高股立の侍ひ警固して居る體。黑羽織大小の侍ひ大勢、船頭棹差し、舟は好き所へ出る。すべて川の中の景色、浪の音、誂らへの鳴り物。この時川の中より、幸兵衛波を潜つて三人摑み合うて浮きつ沈みつ水煙り立て來り、幸兵衛船の小緣に取りつき見事に上がる。續いて兩人も取りつき上がる。

ト侍ひこれを制して

侍ひ　囚人駕籠を警固のこの船、狼藉なすは不屆き至極。

ト立ちかゝる。この時提灯の明りにて逸當、よく〳〵見て

逸當　ヤヽ、其方は慥かに倅。

幸兵　そのお聲こそ親人樣、さては健固に。

兩人　尊像渡せ。

ト幸兵衞にかゝる。ちよつと立廻りして警固の侍ひ二人拔いてかゝる。法印はその刀を取つて、幸兵衞に切りつける。幸兵衞身を交す。この時のはずみに網の乘物へ切り込み、仕掛けにて駕籠はバラ〱と開く。和尙は侍ひ二人を川水へ突き落とす。逸當すつくり立つ。幸兵衞、法印を引附ける。逸當は和尙を捕へ、立廻りあつて

幸兵　ハヽア、先づは御健固、拙者が安堵。何は差し置き失ひし尊像、再び我が手に入りました。氣遣ひ召さるな親人樣。

ト懷中より尊像を取り出し渡す。逸當星明りに翳し見て

逸當　誠に、これぞ藥師の尊像。

法和　それを。

ト又かゝるを立廻り。

幸兵　首尾好く拙者が手に入れば、今一品の

逸當　劍の行くへは某が、切腹なさんと既に最期のその場所へ、込み入るは慥か盜賊の張本、因幡幸藏、
　召し捕つたれば手がゝり尋ねて。

幸兵　すりや、その劍に心をかけるは

逸當　正しく彼奴等が業にもあらん。お尋ね者召し捕つたれば、それにて暫らく身共が切腹。

幸兵　猶豫の御沙汰も佛神の御加護なるか。殊に盜賊拷問なさば、劍の行くへも。

逸當　この尊像に心をかける二人の曲者。

幸兵　彼奴等も繩掛け。

ト逸當諸とも兩人引附ける。この前より向うの芦間に一學、忍び頭巾凛々しき形にて、種ケ島を持ち窺ひ居て逡ふ體。船の中には右の兩人逸當、幸兵衞と銘々立廻り好き切掛けに一學、火蓋を切る、ドンと筒音して煙硝火立つ。兩人の敵役に當り苦しむ體。この時法印、懷中より以前の金を落す。逸當、幸兵衞は、筒音に驚ろき思はず撞と座す。途端に幸兵衞右の金を拾ひ取り思ひ入れ。二人の敵役立ち身にて苦しむ。

逸當　今のは慥かに。

幸兵　こりや、金子が。

逸當　狙ひが逸れしか。

幸兵　詮議の兩人思はずも。

　　トこの時苦しむ二人、落ち入つて川へドンと落ちるを木の頭。逸當、幸兵衛水中を見て

逸當　ハテ、殘念な。

　　ト本意なき思ひ入れ。後の一學、芦間へ隠るゝ。
　　この仕組三方一度の模樣よろしく、見合はせて、拍子、

幕

濱松家決斷所の場

役名――濱島幸兵衛。濱島逸當。篠原一學。中村左膳。侍ひ大勢。捕り手大勢。因幡幸藏實ハ
奴の小萬。

　本舞臺、高足の屋體。眞中へ白洲梯子、誂らへの紋付きの幕を張り、正面、上の方に鐵砲、槍などを掛

け稲妻の唐紙。明け立てあり、上の方に石の井筒、下手に練塀の内を見せ、すべて濱松家決斷所の道具。幕の内より、幸兵衞、麻上下、大小、股立ちの形、下の方に平伏して居る。濱島逸當、麻上下大小。緣の上に、一學、左膳、上下大小にて詮議の見得。左右に股立ち侍ひ、十手を持ち扣へ居る。時の太鼓にて幕明く。

侍ひ　日限切れし濱島親子。

同　押しての推參、下がり召されい。

　ト立ちかゝる。

左膳　コリヤ〳〵、兩人、暫く待て。

侍二　ハアヽ。

　ト扣へる。

左膳　今朝六つ時までに二品の詮議。

一學　然るに、その日限りも云はゞ延引、殊に御寶二品ともに揃ふことか、肝腎の曉の劍はなく、藥師の尊像計り持參なし、それにて殿より將軍家へ、申し譯が立つべきか、馬鹿な事を。

逸當　ハツ、その仰せ御尤も。併しこの程噂ある、因幡幸藏、切腹の場所へ込み入り狼藉ゆゑ、寶の詮

議と召し捕りしに。

幸兵　その時思はず某が、不思議に手に入る

ト懷中より尊像を出だし

この御寶持參の道にて、親人の召し捕り給ふ、盗賊因幡を詮議いたさば、劍の行くへ留めず、その節奪ひ取られし旅用の金子五十兩、持參いたして、即ちこれに。

ト包み金を椽先に置く。

何卒、暫らく御猶豫なされ下さるゝやう、願ひ上げ奉りまする。

一學　イヽヤ、日限切れし上は、叶はぬ〳〵。

逸當　すりや、斯程までに

幸兵　願ひましても。

一學　いつかな叶はぬ、お上への申し譯。

逸當　期を延ばす程、殿への恐れ。この場に於て。

ト切腹せんとする。幸兵衛留めて

幸兵　イヤ、失ひしは斯く云ふ幸兵衛、拙者が切腹。

ト差添へに手をかける。

左膳　兩人待つた。

逸當　イヤ、上意とござれば。

幸兵　この場に於て。

ト兩人また死なうとする。

左膳　ヤレ、早まるゝな。親子兩人相果てなば失せたる劍、いよ〳〵行くへを失ふ道理、殊には長々御病氣たる將軍家に對し、當家の不忠はこの上なし。急く所でござるまい。心を靜めて兩人とも、詮議いたすが殿への忠義。

トこれにて兩人思ひ入れあつて、猶豫の體。

一學　これサ〳〵、左膳どの、日限切れしあの二品、出でざる時は預かりの、あの逸當切腹いたさせ、死首持つて將軍家へ、日延べの願ひと大殿より、仰せあるのを其許には。

左膳　それゆゑ暫らく自殺を留め、助け置くのがお家へ忠義。

一學　そりや、またなんで。

左膳　さればサ、劍に心をかくると云ひ、噂のある因幡幸藏、國を騷がす盜賊を召し捕りしは、濱島が

手柄。それを當座の功となし、正しく只今羊の刻、今一時の刻延べに命を延べて、其うちに因幡めを拷問なし、白状なさば大殿にも、將軍家への申し譯相立つ道理。それゆゑ暫らく猶豫いたさす左膳が計らひ。

一學　して、又、聞き濟みなき時には。

左膳　云ふに及ばぬ、親逸當切腹いたさせ申し譯、殘る倅に曉丸、詮議するが大殿の兼ねての上意。逸當どのには召し捕られし、その盗賊を拷問なして、白状いたさすものならば

幸兵　その身の疑ひ晴るゝの道理、親人様。

逸當　云ふにや及ぶ、我れ／＼親子が越度の起りは寶の紛失、殊に因幡は當代の盗人、よもや知らぬとは云はさぬ／＼。たとへ盗賊外にあるとも、蛇の道はへび、彼めを嚴しく拷問いたさば

幸兵　その手蔓より知るゝの道理、拙者もとも／＼彼れが詮議を。

一學　イヽヤ、そりやならぬ。扶持離れの濱島幸兵衞、親逸當とは事替り、誰れが赦して詮議の役目を。

幸兵　サ、それは。

一學　殊に眼病、盲目同然、盲目に詮議、えゝ、頼まぬ。

トこれにて、幸兵衞身を悔みたる體にて

幸兵　然らば親人、盗賊を拷問なさるゝその間。
左膳　蟄居の一間に扣へてお居やれ。
逸當　殊には手強き盗賊因幡、白狀いたすか致さぬか、身共が安否を相待て倅。
幸兵　左樣ござらばお次へ立つて、事の樣子を、……ア、、さはさりながら折り惡き、この眼病は何事ぞ。
逸當　七ッの時計鳴るまでに、白狀いたさせ、倅が失ふ劍の在所も。
左膳　詮議おしやれ。幸兵衞事は暫らく次へ。
一學　立ちませい。
幸兵　ハッ。
ト思ひ入れ。唄になり、侍ひ二人前後を圍み、幸兵衞、目の不自由の體にて奧へ入る。
左膳　イザ、逸當どの、詮議の間は、我れ〳〵と同席にて。
逸當　然らばそれへ。
ト合ひ方になり、椽先へ上がり、三人同席あつて
逸當　この上詮議は盗賊因幡、彼れが樣子で助命いたすか、また切腹仕るか。生死も一時。

一學　貴殿が召し捕る夜商の盜賊、白洲へ引け。

ト向う揚げ幕にて

大勢　ハア、。

ト時の鐘、合ひ方になり、股立ちの侍ひ四人、網乘り物を擔ぎ、半纏形の侍ひ、懐中へ抱き子を入れ、大小を持ち、家來にて、足早に出て來たり、下の方へ乘り物を下ろし

侍ひ　仰せに隨ひ因幡幸藏、この所に抱きし幼子、まつた、帶せし所持の大小。

一學　すりや、その餓鬼が盜賊めが。

逸當　倅と見えて抱きかゝへ、子には心も引かされて、その働きもなか／＼に、それゆゑ拙者が何の苦もなく。

一學　然らば盜賊引き出だせ。

ト時の鐘、誂らへの合ひ方になり、侍ひ立ちかゝり乘り物の戸明ける。内に小萬、前髪を百日鬘の如く兩方へ分け、誂らへの鬘、淺黃縞の切りつぎ、火打ちの入りし廣袖の小袖、藤色の扱帶、横にてしめ、繩にかゝり、侍ひ二人これを扣へ、籠より出て來り、好き所へ引き据ゑる。

侍ひ　ハアゝ、出ませい。

侍ひ　下に居ろ。

逸當　コリヤ、其方は當代の盜賊、因幡と申すは其方が事か。身共が昨夜切腹の場へ、亂入いたせし其方、それゆゑにこそ辛き命も今一時、息延はりしも其方が庇。ハテサテ變つた、あの場所へ、何を見かけて盜みに參つた。

ト心得ぬ思ひ入れにて、目をつける。

小萬　すりや、アノ、あなたが濱島逸當さま。嬉しや、わたしが念願が。

ト思はず女の五音になり、フッと心づき、キッと氣を替へ

存じよらざる事ゆゑに、あの本陣へ込み入つて、好き仕事もあらんと思ふに相違して、却つてこの身の……繩目の恥。

ト俯向く。

逸當　然らば昨日は當家の重寶、曉丸、藥師の尊像盜み取つたも、其方が仕業であらうがな。

小萬　存じませぬ。毛頭盜まぬその寶。ならう事なら盜みたく、この艱難も。

ト思ひ入れあり

手下の者の手に入らば、廻り廻つて參らうに、盜賊ならぬ素人の、手へ入つた事と存じまする。

ハイ、今にその品。

ト うか〳〵と云ひかゝり、一學へ目をつけ

盗んだ覺えござりませぬ。

ト これにて、一學ギツクリして

一學 ヤイ〳〵、盗人め、素人の手へ入つたとは、そりや何の痴言。その素人とは誰れが事だ。

ト 立ちかゝる。

逸當 これはしたり、其許の御立腹。マア〳〵、お下に〳〵。

ト 庭下駄にて、平舞臺へ下りて來り、小萬に向ひ

コリヤ、ヤイ、御寶二品盗みたる、その盗賊が知れざるうちは、不便や倅幸兵衛、遊里に入り込み、小萬とやら申す藝子に遣ひすて、賣り代なせしと家中の取り沙汰。サ爰の道理を辨まへて、寶の行くへ存じたなら、サヽ、包まず隱さず白狀いたせよ。コレ、血統の倅、親もこの儘切腹いたさば、末代までの家名の穢れ。サ、存じたならば……コレ、手を下げて頼み入る。在所を云へ、申してくれやい。これでも云はぬか。エヽ、死太い奴め。

ト 兩手を突き、いろ〳〵あるうち、小萬苦しき思ひ入れ。逸當騙し賺して屹度なる。小萬涙を隱

し

小萬　サヽ、寶の行くへ知つてなら、あなたの御難儀、殊には連れ添ふ

ト云はうとして屹度氣を替へ

サ、存じ居つたら申さうに、夢更ら知らぬ白浪の、緑りの林のあの子悴、盗みする身も迷ふは我が子、あの子に引かされやみ／＼と。

ト思ひ入れあり

召し捕られたる身の因果、成る程寶はその以前、わたしが……イヤ、このわしが盗みました。今はいづれへ渡りしか、その行く先は存じませぬ。必らず濱島親子二方の、なされた業ではござりませぬ。今こそ申す有やうは、わしが仕業でござりまする。

一學　さてこそ、おのれが

逸當　白状なせば寶の行くへ、存じて居らう、それ申せ。

小萬　その儀ばかりは何とも以て。

ト苦しき思ひ入れ。このあたりより幸兵衛、下の方に探り／＼窺ひ出で、立ち聞き居る。

逸當　白状せねば身が拷問。

ト つか〳〵と立ち寄る。この時幸兵衛、逸當が聲を知る邊に走り寄つて

幸兵 イヤ、親人樣、お手下ろさるゝまでもなく、その盜人めは私しが。

小萬 ヤ。

ト幸兵衛を見て思ひ入れ。幸兵衛は不眼ゆゑ、何心なく探り寄つて小萬を引き据ゑ

幸兵 さては、おのれが寶の盜賊。この年月の苦勞もおのれ。エヽ、おのれが業であつたよな。

ト引附けて思ひ入れ。小萬切なきこなし。

逸當 コリヤ、ヤイ、悴、盜賊詮議は左膳どの、我れ〳〵二人は蟄居のこの身。

幸兵 でも、これまでの恨みの程を。

一學 科人なれども我れ〳〵が、詞も待たず尾籠の振舞ひ。

ト立ちかゝるを左膳隔てゝ

左膳 イヽヤ、その儀は苦しうござらぬ。今盜賊が口外せしは、寶は盜めどもその行くへ、知れぬと云うたが一つの手がゝり。殊に尊像誠あれば、これにて疑ひ少しは晴るゝ。詮議は濱島親子二人へ、身共が赦して。

幸兵 すりや、彼奴が詮議を。

左膳　情けを見せず、拷問おしやれ。

幸兵　心得ました。

ト小萬を手荒く引附ける。

一學　蟄居の濱島親子の者、盜賊詮議もまぢ〳〵と、側で聞いても居られまい。身共は其うち暫らく休息。

左膳　然らば篠原一學どのには。

一學　容赦召されい。暫らく休息。

左膳　御念に及ばぬ、一學どの。

一學　ドリヤ、休息の間へ參らう。

ト合ひ方になり、心を殘し一學奥へ入る。緣先に因幡が差したろ、大小を殘しあり、幸兵衞、小萬を引附け

幸兵　サヽ盜人め、なんの意恨に我れ〳〵親子へ、かゝる難儀をかけたのだ。サヽ劍の行くへもおのれが仕業か。それ吐かせ〳〵。サヽ云うてくれ〳〵、エヽ、おのれはなア。

ト引廻して引附ける。小萬物云はうとして云はれぬこなし。逸當差し寄つて

逸當　ヤイ、盗賊、おのれ在所を白狀なさでは、片時の間に父子の身の上。サ、白狀いたせ。云はねば
おのれがこの忰、今眼前に。
ト思ひ入れあつて。
忰、其方が一腰を。
幸兵　エ、親人には刃物を何ゆゑ。
トもしや腹切らうかと、心遣ひの思ひ入れ。
逸當　苦しうない、これへ渡せ。
ト急いで云ふ。これにて幸兵衞、一腰を逸當へ探り寄つて渡す。
コリヤ、ヤイ、おのれ在所を云はぬに於ては、不便ながらもこの子忰、この場に於て某が。
ト抱き子を突かうとする。爰にて幼子の泣き聲する。小萬縄の儘、逸當が方へ近寄る。逸當小萬を蹴
飛ばし、キツとなつて
忰はそれなる盗賊め、命を取らずにこれにて拷問。その責め道具は
ト緣先にある小萬が一腰を取つて
心腐れし盗人の汚れし魂、これにて打ち叩け。

ト差し出す。幸兵衞探り取つて

幸兵　親人にも拙者めにも、難儀をかけしはおのれが業。その盗人の身を以て、小兒を抱へて非道の働き。コリヤ、ヤイ、それ程まで不便に思ふか。我れも一人の子悴に、やう〳〵逢うて直ぐに其まゝ、母も悴も出で便りも。

ト小萬を案じる思ひ入れ。小萬も物云ひたきこなし。齒を喰ひしばり居る。

それは外事。サ、存じてならば劍の行くへ白狀いたせ。サ、吐かせ、吐かさにや、斯うして。

ト鞘の儘小萬を打つ。

逸當　サ、白狀いたせ、陳じ立てすりや小兒は眼前。

ト白刃を抱き子へ差しつける。

小萬　ア、モシ。

幸兵　サ、吐かせ。云はねば拷問、小兒が一命。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト小萬を中へ挾み兩方より詰め寄り

なんと。

トきつとなる。小萬身を慄はし涙を落す。この時奥にて時計の七ツを打つ。皆々思ひ入れあつて

左膳　時計の七ツ。

ト逸當思ひ入れあつて

逸當　潔く切腹。

ト立ち上がる。

幸兵　ア、モシ。

ト逸當思ひ入れ。

逸當　刻限來れば　身共が一命。

幸兵　失ひ給ふもおのれゆゑ。

ト小萬を手荒く引附ける。

親の敵と云ひながら、助け置くのも天下の囚人。サ白状いたせ、エヽ、おのれはなア。

ト鞘の儘小萬を打つ。

逸當　科ならぬ身の切腹も、盗人ゆゑに捨てるの道理。その子悴の小兒一人。

幸兵　東西知らば小兒ながらも、胤を殘さば後々に。

逸當　國の災ひ、出來るは定、不便ながらも。

ト白刃を抱き子の胸先へ差し當てる。小萬駈け寄るを

幸兵　おのれ白狀。云はねば、斯う〳〵。

逸當　盜賊、夜盜の血統は、絕やすが

ト小兒の胸元を貫き、驚ろく小萬を、幸兵衞打ち据ゑる。この時鞘割れて小萬の繩目切れ、好き所を强かに切り込む。小萬悶絕するを、逸當見て

逸當　ヤ、罪極まらぬ囚人を。

幸兵　エ。

ト驚ろく逸當、貫き居る幼子の血汐、下にありし尊像にかゝりし體にて、薄ドロ〳〵、諸所にて鷄聲を發す。三人キッとなる。誂らへの合ひ方。

逸當　ヤヽ、この劍にてこの小兒を、刺し貫けば數多の鷄。

左膳　宵鳴き告ぐるこの珍事。

幸兵　殊にそれなる劍の刃面。

逸當　ドレ。

ト幸兵衛駈けより、兩人白刃をキツと見て

幸兵　ヤヽ、燒刃に星の影あつて

逸當　聞きしに違はぬ、この不思議。

幸兵　さては尋ねし曉丸、廻り廻つて小萬が住所へ。

逸當　すりや、この劍は小萬が方より。

ト幸兵衛に目をつけ

ヤヽ、悴、兩眼鮮やかなるか。

幸兵　ヤヽ、其お詞に我れながら、思はず開くこの兩眼。酉の年度の血をあやせば、忽ち平癒と聞きつるが

左膳　さてはそれにて貫きし、その子悴は。

逸當　酉の年度の

小萬　お前の實の

ト小萬心づき、よろぼひ寄つて小兒の死骸を抱き上げる。この時小萬の百日と見えし鬘、髻元結切れ、かき上げし、さら毛の洗ひ髪の樣子、血に染みし、女襦袢の肌拔ぎにて、腰の揚げ下りて女姿と見える體。幸兵衛愕りして。

幸兵　ヤヽ、因幡と云ひしは女房小萬。

逸當　すりや、盗賊と申せしは、其方が馴染みし女であつたか。

左膳　思ひ掛けなき捕はれの

幸兵　囚人とのみ

ト二人顔見合せ

三人　ホイ。

ト呆れし體。小萬起き上がつて

小萬　始めて逢ふもこの姿。舅御さま、モシ、お赦しなされて下さりませ。

三人　ヤヽ、なんと。

ト草笛やうの合ひ方になる。

小萬　女子の身にて恐ろしい、男姿の盗賊に、異名も因幡幸藏と、ありしその名を其まゝに、世にも稀れなる恥かしみ、捕へらるれば云ひ譯の、そのあらましは具に認め、常に離さぬこの着物、これにて疑ひ

ト懐中より兼ねて認め置いたる書附けを出す。逸當開き見て

逸當　何々……、私し事、幸兵衛さまのお情受け、懷胎いたし候ふ砌り、お家の重器、二品の寶をお預かりあつて上京の途中、荒井の宿にて盜賊に出で合ひ、お家の寶を奪はれ、親御の御難儀お家の大事、斯樣々々の品なりと、劍の寸尺拵へまで、委しく認め御狀到來、それより都を忍び出で、又その頃は懷胎にて、さまよひ來りしその道筋。

ト讀み、幸兵衛取つて

幸兵　勢州雲津に隱れ住む、因幡幸藏と云へる盜賊の家へ連れられ無體の樣子、さりながら云ひ交せし男へ立たず、安產いたすそれまではと、騙し賺してその家にあるうち、手下の盜賊樣々の盜みし品を配分なす、もし、其うちに尋ぬる品ありもやせんと、足を留め、覺えるともなう見習ふ惡事、程なう平產いたせしゆゑ、賊の頭領因幡幸藏、約せし事ゆゑ枕交せと、手詰めの難儀、得心なしたる體に見せ、酒を進めて熟睡の折りを窺ひ、臥したる因幡を刺し殺し、幼子連れてその場を駈け落ち、今まで附き添ふ惡黨輩、猛き女の心に恐れ、わたしに隨ひ手下となつて、尋ぬる寶の詮議には、盜みせよとの指圖に任せ、實に尤もと同心なし、武家方寺院に忍び入り、金銀衣服は仲間の働き、私しは尋ぬる二品ばかり、外の品には目もかけず、心を盡くす甲斐もなう、お顏も知らぬ舅御樣、池田の宿の本陣にて御切腹と事極まる、それぞ夫へ女の操と、仲間催し込み入つて、舅御

様を盜み出ださん爲めばかり、もし召し捕れ引かるゝとも、決して連れ添ふ幸兵衞どの、實の悴は未だ幼少、夫に科はこれなく候ふ、私し一人御成敗願ひ上げ參らせ候ふ、お家長久祈り參らせ候ふかしこ、女盜賊小萬。ヤヽ、さては男を思ふがゆゑに。

逸當　すりや、我が殺せし小兒こそ、悴が胤にてあつたるか。さすれば一人の初孫なるに、知らぬ事とて、ホヽヽヽホイ。

ト愁ひの思ひ入れ。

小萬　さはさりながら不便なる、我が子の成行き、眼前に、親子は側にありながら

逸當　祖父よ、孫ともえゝ云はず。

小萬　わたしや嫁とも女房とも、云ふに云はれぬ淺ましい。

左膳　その世渡りも何ゆゑぞ。

幸兵　女の操の、盜賊夜盜。

逸當　嫁とも知らぬ舅親。

左膳　夫婦妹脊と、しがらみし

幸兵　替つた縁で

三人　あつたなア。

幸兵　さるにても某が、許嫁せし菊川どの、惡者どもの仕業より、夫へ立たずとその身は入水。

左膳　すりや、菊川は身を投げて。

小萬　愛しや、あなたも。

逸當　それも正しく近郷に、今噂ある慥かに法印、彼奴等が仕業に相違はあるまい。心得難きはこれなる劍、小萬は何とて所持なしたるぞ。樣子はどうぢや。

小萬　委しき事は知らねども、念佛寺へ込み入りし、その夜に住持の樣子と云ひ、何か劍に心をかけ、附け纏ひしがその時に。

左膳　さてこそ住持が劍を預かり、寺院に隱し置きたるか。何はともあれ二品を、急いでお上へ。

逸當　然らば二品、悴と共に。

ト立ち上がる。この時風の音烈しく、空より前幕の烏賊幟り、反古の張りたる儘糸目切れて落ちて來り、松の枝にかゝるを皆々見て

幸兵　折も折とて大空より、風に誘はれ來りしは

小萬　我が家の内で見覺えの、あの烏賊幟りに何やらん

幸兵　裏張りせしは手紙の文言、怪しき密事。

ト走り寄つて凧を引き下ろし見て

こりや、コレ、正しく手蹟は一學。

ト怪しみ見る。この時、後へ一學出かゝり窺ふ。

左膳　法印へ褒美の金子斷わりの、惡事の密書で裏張りしたるは心得ぬ。

小萬　それにて思ひ當りしは、わたしが家で思はずも、女同志の諍ひに、千切れし凧に裏張りの、內の阿房が氣も付かず

幸兵　慥かに手紙は見えぬ目で、犀ヶ崖にて拾ひし密書、裏の切り張り思はずも

逸當　凧の文字は整ふと、書きしに違はぬこの場にて、劍、尊像封印の、路用の金まで戻ると云ひ

幸兵　まだその上に佞人輩、證據の密書が手に入れば、お家も整ふ、この身もやがて。

左膳　歸參も整ふ幸先よし、手柄始めに一學を

一學　その密書を

ト件の凧へ手を掛ける。

左膳　覺えがあらう、お家を窺ふ篠原一學。


一学
幸兵エ

一學　觀念ひろげ。

ト切つてかゝる。立廻りよろしくあつて、叶はじと上の井筒の中へ飛び込む。

幸兵　詮議の手がゝり、一學。
左膳　取り逃がしても氣遣ひない、水門口へ組子大勢。
逸當　すりや先立つて。
左膳　附け置き申した、氣遣はれな。
幸兵　船にて捕へし二人の同類、白狀いたさせ一學が
逸當　惡事の根を斷ちお家の榮え。
小萬　めでたき折を幸ひに、夫の門出、この身はあの世へ。
幸兵　悴諸共死出の旅
逸當　可哀や孫めが。

ト死骸へ思ひ入れ。

左膳　臨終稱念。
小萬　南無阿彌陀佛。

皆々　南無阿彌陀佛。

ト回向のうち、小萬こなしあつて俯向けに倒れ落ち入る。皆々愁ひの思ひ入れあつて

逸幸　有爲轉變の

左膳　世の中ぢやなア。

ト額を背けて思ひ入れ。暮れ六ツの鐘、時の太鼓にて、この道具、靜かに廻る。

本舞臺、練塀、正面に水門口、爰に一擧、高股立、着込みの形、大童になり拔き身を持ち、これを、捕り手大勢、弓張り提灯を照し、突き棒、刺叉にて、取り卷き居る。この見得ドン〳〵にて道具納まる。

一擧　企て露見の一擧が、館を立退く道を塞いで防ぐるは、こりやおのれ等、指圖あつてか。

ト一擧左右を切り立て〳〵、キツとなつて

捕一　云ふにや及ぶ、當家の忠臣左膳さまより下知を受け、逃げ行く先は裏道の、水門口と察せしゆゑ

捕二　斯く取卷いたる上からは、袋の鼠、籠の鳥、遁がれぬ所と觀念して、腕廻すか但し又

捕三　異儀に及ぶと容赦なく、寄つてかゝつて高手小手、憂目を見せるが一擧どの、罪に伏して繩

皆々　かゝれ。

一學　小癪な奴等め、妨げひろぐと撫切りだぞ。

捕一　物な云はせず打つて捕れ。

皆々　捕ッた〳〵。

ト突いてかゝる。これより烈しき鳴り物になり、一學、大勢を相手に切り立て〳〵立廻りあつて、皆皆向うへ追ひ込む。續いて一學も向うへ走る。この時ツツカケの鳴り物になり、幸兵衛捕り物の形、身輕にいでたち、捕繩十手にて走り出で、一學をキッと留めて

幸兵　ヤア、卑怯未練な篠原一學。その身の惡事露見なし、逃げ去ればとて天の網、遁がれぬ所と諦めて、我れを相手に繩かゝれ。但し踏みつけ召し捕らうか。返答いたせ、ナヽ、なんと。

一學　ヤア、過言な幸兵衛、妨げなすと空竹割りだぞ。

幸兵　速かに腕廻せ。

一學　道明けて通せ。

幸兵　繩かゝれ。捕ッた。

ト十手にて打つてかゝり、これより烈しき鳴り物にて兩人大タテありて、とゞ後より左膳凛々しくいでたち、組子を從へ、一學を取り卷き

左膳　お家へ仇する不敵の一學。

幸兵　速かに腕廻せ。

一學　何を小癪な。

ト白刃を振つてキッと見得。

頭取　東西、先づ今日はこれぎり。

昭和三年八月二十八日印刷
昭和三年八月三十一日發行

【大南北全集第十七卷】

非賣品

校訂 坪内逍遙
編纂者 渥美清太郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行者 和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者 堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所 常磐印刷所

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所 春陽堂

